
ゾンビもの！

どぶねずみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゾンビもの！

【Nコード】

N6524Q

【作者名】

どぶねずみ

【あらすじ】

とある春の一日。特に変わるでもない生活、つまらない退屈な日常。その日もそうなるはずだった。兆候は一瞬、学校中にゾンビが溢れ出していた。終わった日常、変わった未来。主人公、菅田直以は仲間たちと共に、文明の崩壊した世界の中で生き残りの方法を模索する。

この小説はフィクションであり作中に出てくる全ての固有名詞は実

在するものとは一切関係ありません。また、それらを批判することを目的としたものでもありません。

一応ゾンビを出すのでジャンルでホラーにしましたが、ガタガタブルブルにはなりません。どちらかといえばファンタジーに近いです。

不定期更新

誤字脱字はご容赦。感想大歓迎！

始まり

膝を折り、全身をバネにして垂直に飛び上がる。

指先を伝い、回転を加えて放たれたボール。

緩やかな弧を描き、ゴールに向かっていく。

そしてリングに当たり、弾かれた。

「あれ？」

俺、菅田直すかたなおい以は試合終了のホイッスルを聞き、バスケットコート
を後にした。

「菅田、決めろよ」

「おまえ、本当に元バスケ部員か？」

文句を述べてくるクラスメイト兼チームメイトを無視し、俺は小
首を傾げながら体育館の壁に寄りかかった。

「お疲れ。でも最後のシュートは決めようぜ」

俺は、声をかけてきた男に苦笑を返した。

この、長身のイケメンは木村大地きむらいたいち、バスケ部のエースで俺の幼馴染だ。

俺は手首を曲げ、シュートのフォームを作ってみせた。

「入ると思っただけだなあ」

「怠けすぎだろ。試合中、ノーマークである距離を外したら袋叩き

だぜ」

「俺がバスケ部辞めてどれだけ経つと思ってんだよ」

バスケットコートでは次の試合が始まっている。

時間からいってこの試合が最後だろう。

横を見れば人目を気にせずくつちゃべるご同輩、注意すべき体育教師は隣のコートを使う女子生徒を見ていた。

窓から外をしてみる。桜のピンク、空の青。実にのどかな季節だ。

つい先日、俺たちは高校2年になっていた。

とくに変わるでもない日常、学年がひとつ上がってもやることは変わらない。

朝起きて学校に通い、帰って寝る、それだけだ。

俺は深呼吸して春の空気を吸い込むと、歩き出した。

「どこ行くんだ？」

俺は大地に答えた。

「サボるわ。次の授業は生物だったろ？」

「部活辞めてからどんどん曲がつていくな。鍛え直してやるから戻ってこいよ」

「全否定する気はないけど、うちのバスケ部で精神修養できるとは思えないね」

俺はそのまま体育館の出口に向かっていく。

その途中で嫌なやつらに会った。

体育をサボっている5人ほどの女子の集団だ。

そいつらは俺を見つけると、会話を中断して、俺を睨みつけてきた。

「ねえ、なにか臭くない？」

わざとらしい大声でそう言ったのは集団のリーダー格、伊草麻里だ。セミロングの髪を緩く茶髪に染め、校則違反にならないレベルで化粧をしている。

こいつは、2年で同じクラスになってからなぜか俺を目の仇にしているのだ。

俺が無視して通り過ぎようとすると、伊草は血相を変えて立ちはだかつてきた。

「……なんだよ」

「あんた、死んでくれない？ 私、あんたと同じ空気を吸っているだけで我慢できないのよ」

俺は、思わず苦笑してしまった。ひどい言われようだが、これが初めてじゃない。顔を合わせるたび、毎度のことなのだ。

伊草は俺の苦笑を挑発と取ったのか、おもいきり睨みつけてきた。

「なに笑ってんのよ！ きもいのよ！」

「俺、おまえになんかしたっけ？」

「そんなこともわからないの？ いい加減自覚してよね、あんたは存在自体が邪魔だって。頼むから私たちの前に出てこないでよ」

伊草の後ろにいる取り巻きも相槌を打ってくる。

たぶん、俺は怒ってもいいだろう。だが、正直こいつらの相手はしたくない。なにをやっても不快感しか残らないのはわかってきているのだ。

俺は、無言で伊草の横を通り過ぎた。伊草はなにやらわめいていたが、俺は無視した。

更衣室で制服に着替えている頃、チャイムが、俺の高校生活最後の授業が終了した。

俺は着替えるために入ってくるクラスメイトと入れ違いに更衣室

を出た。向かう先は教室ではなく、屋上だ。

ここ、鈴宮高校は地元の鈴宮市が環境都市を標榜していることもあり、エコロジーに気を使った学校ってことになっている。

具体的に言くと、屋上にはソーラーパネルが敷き詰めてあり、電気は自家発電で補っているってこと。

もちろんソーラーパネルのある屋上は立ち入り禁止だ。もしも立ち入り禁止でなくてもソーラーパネルと無駄に多い給水塔でごちゃごちゃした屋上には開放感はなく、人気はなかっただろう。

だけど、俺に言わせれば人気がないってことは重要で、ひとりで物思いにふけりたときなんかは絶好の場所なのだ。

屋上への扉は鍵が閉まっっていてそこから屋上に出ることはできない。
い。

ならば、屋上に出ることができないのかというと、そうはならない。扉の横には窓が付いているのだ。

当然窓は内側に鍵が付いており、開閉は自由にできるあたり、うちの学校の緩さが窺える。

俺はすでに開いている窓に身を滑らせ、屋上に出た。

屋上にはすでに先客がいた。

柵にもたれかかり、ウェーブのかかった長髪を地上に垂れ流しているこの女は牧原聖^{まきはらせい}。去年同じクラスだった問題児だ。

聖は問題児らしく口から煙を燻らせている。俺と目が合うと、口に啜えた煙草を噛み、にやりと笑った。

「やあ直以。そろそろ来る頃だと思っていたよ」

俺は、聖の足元に散らばる煙草の吸殻を見て言った。

「メンサ、いつからここに居たんだ？」

聖は眉間に皺を寄せた。

「その呼び名、やめてくれと言っているだろう？ 逆差別というものだよ」

問題児というのは、大別するなら2種類あると思う。ひとつは俺のように出来が悪いやつ。そして、もうひとつは聖のように出来が良すぎるやつ。

聖は、そのあだ名からも分かるとおり高IQ^{メンサ}集団に所属する天才児だ。教師連も聖以上の知識の持ち主はおらず、なにか言っても論破されるため、腫れ物のような扱いになっているのだ。

ちなみに、こいつの学内順位は1位ではなく5位。これはわざとで、秋の期末で3位になったとき、心底悔しがっていたのをよく覚えてる。

俺と聖は、同じクラスだったこともあり、嫌われ者同士で馬があったということかそれなりの交友関係を結んでいる。

学外で遊ぶということはないが、学内では、俺と聖、あとやはり去年同じクラスだった問題児、青井雄太と3人で一緒にいることは多かった。

俺は聖に並んで柵に寄りかかり、聖の口から煙草を取って啜えた。聖は、特に文句を言うでもなく新しい煙草を取り出して火をつけた。しばらく2人で煙草を燻らせる。2本の煙が空に向かって伸び、消えていった。

「……聖」

俺は、聖を見ずに言った。

「おまえ、臭い」

聖はゆっくりと首をこちらに向けた。口から煙草を外して答える。「相変わらず文句の多いやつだな。君が私を煙草臭いというから気を使っただらろう？」

聖の臭いの元は、香水だった。香水というのは体臭と混ざって個

々人特有の匂いになるらしいが、それが体臭ではなく煙草と混ぜた聖の臭いは最悪だった。

そういえば先日、俺はこのニコチン中毒者に制服にまで染みだ煙草の臭いをなんとかしろと言ったっけ。

「それで、どうだったんだい？」

「ん？ なにがだよ」

「前の授業。君のクラスは体育でバスケットだったろ？」

「……なんで知ってるんだよ」

「全クラスの時間割くらいは暗記しているからね」

俺は、柵から身体を起こし、携帯灰皿に啜えていた煙草を入れた。

「別に、どうということもないただの授業だったよ」

「相変わらず未練たらたらだな。そんなにバスケットに拘っているのなら、部活に戻ったらどうだい？」

「冗談。今更戻ってどうするんだ？」

「直以は不器用だからねえ。渋沢の言うことなんて、聞き流しておけばよかったのに」

渋沢とは、バスケット部のコーチ兼数学の教師だ。俺は、まあ、こいつと合わなくて部活を辞めたという経緯があるのだ。

聖は口に啜えていた煙草を吐き捨てた。

俺はそれを空中でキャッチして携帯灰皿に入れる。

聖は胸元から新しい煙草を取り出した。

「吸いすぎだ。歯茎が黒くなるぞ」

「……君は人のことが言えるのか？」

「俺は啜えているだけで肺に煙を吸い込んでいないからな」

聖はキンと蓋を開けてジッポライターに火をつけると、しばらく眺めて、パチンと蓋を閉めて火を消した。

それと、ほぼ同時だった。

空気が振動した。

次いで聞こえる音響は、爆発音だった。俺と聖は柵から身を乗り出し、音のした方向を見た。

それは、どこか非現実的な光景だった。

街のところどころから立ち上る黒煙。ただ、それだけが加わった屋上からの景色は、明らかに異常を知らせる光景だった。

しばらく聖と肩を並べてただ景色を見ていると、後ろで音がした。振り返ってみると、窓から落ちたのか、顔色の悪い男子学生がうずくまっていた。

「……大丈夫か？」

俺は男子学生に近寄った。

途端、男子学生は土気色の顔を上げ、飛びついてきた。

俺は、反応できずに仰向けに倒された。

にちゃりと、唾液に塗れた男子学生の口が開いた。男子学生は俺に馬乗りになったまま俺の顔に口を近づけてきた。

「！」

俺は、身体を捻り、迫る男子学生の顎に肘を叩き込んだ。寝転んだ状態では大して力は籠らなかつたが、男子学生の軌道は逸れ、男子学生の顔は屋上のコンクリートに突っ込んだ。

俺は馬乗り状態から脱出し、立ち上がった。

「……どういっつもりだ？」

倒れたままの男子学生に声をかけるが返事はない。

男子学生は、ゆっくり立ち上がった。前歯は折れ、鼻からは血を垂れ流している。それを拭おうともしない異様さに、背筋に寒気が走った。

「なんだ、こいつ？」

男子学生は再び迫ってくる。俺は、カウンター気味に全体重を乗

せて男子学生を殴った。男子学生は、大きく揺れたが、倒れることはなく、俺の肩を掴んできた。

学生服の上から男子学生の指が喰い込む。異常な握力、もはや、人間のものとは思えなかった。

ふっと、影が躍った。

聖だ。

聖は男子学生の背後に回ると、髪にジツポで火をつけた。

男子学生の脂ぎった髪は一気に燃え上がった。

男子学生の指が一瞬緩み、俺は男子学生の手から逃れた。

俺は掴まれた肩を擦りながら言った。

「聖、さすがにやりすぎだ」

「……そう思うか？」

聖は緊張感を保ったままそう言った。

俺も息を呑んだ。男子学生は、頭から炎を上げながら、俺たちに向かってきていたのだ。

炎は髪から学生服に移り、男子学生全体を包んでいる。それでも、男子学生は動いていた。

「こいつ、なんだ？」

「どついう答えをお望みかな？」

「俺でも理解できるやつ」

「なかなかハードルが高いな。私でも理解できていないんだから」

俺は聖の手を掴んだ。これは、やばい。とにかく逃げなければ。

そう思い、走りだそうとした、そのときだった。

街で再び爆発が起こった。その音に反応するように、男子学生は柵に向かい、やがて崩れるように倒れて動かなくなった。

俺たちはおそろおそろ男子学生に近づいた。

男子学生は煙を上げて倒れている。

「……さすがに力尽きたか」

そう言った聖の顔色が変わった。死んだと思った男子学生に足を掴まれたのだ。

男子学生はゆっくりと身体を起こし、聖を押し倒した。

俺は、切れた。

「しっけえんだよ！」

屈んだ男子学生の腰を掴み、振り回して柵にぶつける。そして、そのままラグビーのタックルのように下半身を持ち上げて、屋上から落とした。

地上に落ちた男子学生は潰れ、今度こそ動かなくなった。

俺は荒い息を吐いて柵にもたれかかった。

「直以……」

聖が俺に寄ってくる。俺は無理やり笑顔を作った。

「聖、大丈夫だったか？」

「ああ。私はなんとか……」

それを聞いて俺は、崩れ落ちようとした。だが、できなかった。

三度街から爆発音が響いたのだ。

それに呼応するように響き渡る悲鳴。これは、近い。校舎からだ。

さらには校庭。そこでは、つい今まで自分たちが体験した光景が溢れていた。

土気色をした学生が、他の学生を襲っているのだ。

聖は、煙草を啜えた。そのまま、火もつけずに屋上からの光景に見入る。

俺は、自分の顔を撫でた。その口元は、歪に吊り上っていた。

それがなんの笑みなのか、自分自身にもわからなかった。

始まり（後書き）

後書きはどぶねずみの執筆上の話（つまりは愚痴）を書くつもり
です。不快に思われる方はどうぞ読み飛ばしてください。

フォークギターは木製だからね！

「なにが、あつたんだ？」

屋上から見渡す街はそこかしこで黒煙が上がっている。それも現在進行形で、だ。

俺は隣にいる牧原聖を見た。

聖は、啞えていたたばこを吐き出すと、携帯を取り出した。しばらく操作した後、舌打ちしてどこかに電話をかける。

「……駄目だ。ネットも電話も通じない。これは、案外まずい状況かもしれないな」

下の階からは悲鳴や怒号が響いている。校庭は生者、死者、そして生きた死者、入り乱れての地獄絵図だ。

「まるでB級のパニックホラーだな」

「同感だ。あの黒煙を見る限り、街の様子も学校と同じか、それ以上のような」

と、そのとき、屋上への出入り口から悲鳴が聞こえた。

俺と聖は駆け出した。

「開けて！ 開けてください！」

中から聞こえるのは女子の声だった。

俺は、急いで扉の横にあるガラス戸を開けた。

「扉は鍵がかかっている。早くこっちに来い！」

そこにいたのは2人の1年女子だった。俺は、近くにいた栗色のおかつぱ頭の少女の手を引いて屋上側に引き入れた。

「はやく私も！」

扉を叩いていた少女は急いでガラス戸に飛び込もうとした、だが、遅かった。

ガラス戸に手をかけたところで、ゾンビに足を掴まれたのだ。

俺は急いで少女の腕を掴んだ。おかつぱの少女も立ち上がって少女を引き入れようとするが、引き寄せられない。

見る間に少女にゾンビが群がっていく。

足、膝、腰、そして肩。

「いや、お願い、はなさないで……」

涙目で訴える少女。その少女の首に、顎間接を外して大口を開けたゾンビの歯が、喰い込んだ。

途端、少女の腕から力が抜けた。

耳を劈くような悲鳴、それを遮るように聖はガラス戸を閉め、支え棒をした。

「……由紀ちゃん」

おかつぱ頭の少女はその場にへたり込んだ。

俺は、コンクリートを両手で叩いた。

「感傷はまた今度にしてもらおうか。わかるだろ？ 私たちにそんな余裕はないんだよ」

「……ああ、わかつてるよ」

俺は大きく息を吸い込むと、気持ちをニユートラルに戻した。

聖の言うことは全面的に正しい。ただ、それがしゃくに障るってのも間違えようのない事実だが。

聖は腰を屈め、泣いているおかつぱの少女に声をかけた。

「あなたは大丈夫？ どこか怪我はない？」

「ひツク、はい……。私は、だいじょうぶ……です」

それを聞いた聖は少女の肩を強く掴んだ。

「それじゃあしつかりしなさい！ 泣いている暇はないんだよ」

少女は目に涙を溜め、しゃくりあげながらも聖に頷いた。

「そう、いい子ね。名前は？」

「ひつく、1年の、遠野梨子です」

「梨子ちゃん、いつたいなにがあったの？」

「……わかりません」

「わかる範囲で答えて。なんであなたたちは屋上に逃げてきたの？」

「……えつぐ。最初は、普通に授業を受けていたんです。でも、だんだん教室の外が騒がしくなってきた、誰かが人殺しして叫んで……」

…

聖は、そつと遠野さんの頭を抱いた。

「そつ、怖かったわね。それで、どうしたの？」

「……すんすん。それで、教室のみんなは逃げ出したんです。私と由紀ちゃんも窓際の席だったから、逃げ遅れて……」

「1年の教室って、確かこの下、4階だったわね」

「……はい。階段はあの、ゾンビみたいなのでいっぱいだったんです。だから、私たちはここに逃げてきて……」

遠野さんはようやく泣き止んだらしく、ゆっくり聖から離れた。

目元は赤くはれ上がっているが、よく見るとけっこうな美少女だ。

「直以、君はどう思う？」

「俺と話すときは男言葉なことか？」

「そんなことはどうでもいい。あのゾンビ連中のことだ。ここから見る限り、あいつらは経口で感染するようだ」

「……噛まれたらゾンビになるってことか？」

「おそらくは唾液、血液も危ないだろうな。しかしあいつらはなんで仲間同士で喰い合わない？　なんで感染者と非感染者を見分けているんだ？」

後半は独り言、聖はいつものように自分の世界に入ってしまった。

こいつは、なにかを考えるとときは周りが見えなくなるのだ。

ふと見ると、遠野さんは俺を見ていた。彼女は、背の低い俺よりさらに拳ひとつ分低かった。

「あ、あの……。さっきはありがとうございました」

そう言っただけで遠野さんは90度腰を折って俺に頭を下げた。

俺は、彼女の細い肩を軽く叩くと、柵に向かって歩いた。遠野さんも俺についてくる。

「これから、どうしましょうか？」

「さて、なあ。どうするかなあ」

「警察、助けてくれますかね？」

「助けてくれるだろ、きつと」

ただ、それがいつになるのかわからないが……。俺は言葉を飲み込んだ。

いつかは警察なり自衛隊なり、あるいは外国のなにかなりが助けしてくれるだろう。だが、それがいつかはわからない。

数時間後か、数日後か、それとも数週間後か。

屋上には水も食料もない。救助が来るまで屋上で過ごすわけには行かない俺たちは、動けるうちに行動を動かさないといけないのだ。

「あ、あの！」

「ん？ なに？」

俺は遠野さんに振り向いた。遠野さんは慌てて俺から視線を逸らして口を噤んだ。

遠野さんは、大人しそうな外見からしてもそれほど多弁なほうではないのだろう。だが、彼女は必死になって俺に話しかけていた。なにかやっていないと押しつぶされそうで、不安なのだ。

俺は、なるべくキモく見られないように注意しながら、彼女に言った。

「そういえばまだ名乗ってなかったな。俺は菅田直以。2年だから先輩だ。よろしく」

「あ、はい。直以先輩ですね。よろしくお願いします」

「おおー！」

背筋に電気が走った。

かわいい後輩から下の名前で先輩と呼ばれることがこれほど官能的だとは……。

「悪い、もう一度呼んでくれ」

「？ 直以先輩」

「おおー！」

「あの……、直以先輩？」

「なんだい、梨子後輩」

「……直以、一応友人として忠告しておこう。君は今ものすごい犯罪者面をしている」

「おお、聖。戻ってきたか」

ふと見ると側には聖が立っていた。なんの嫌味か俺からかばうように遠野さんの前に立っている。

「それで、なにかわかったか？」

「さっぱりだね。残念ながら情報が足りない」

そう言っ聖はたばこを取り出し、啜えて火をつけた。

「ああ、そうそう。梨子くん。君はどうして屋上に逃げたんだい？」

遠野さんは男言葉で聖に話しかけられて少々困惑していたが、しつかりとした声調で答えた。

「それは、さつきも言った通り逃げ遅れたから……」

「逃げ遅れたのは君たち2人だけ？」

「いえ、もつと大勢いたと思います」

「おかしいな。逃げ遅れた多くの生徒はなぜ屋上には来ない？」

「この鍵が閉まつてるって知っていたんじゃないか？」

俺の言葉を即座に遠野さんは否定する。

「いえ、少なくとも私は知りませんでした」

「もし知っていても、逃げ場がなければここまで追い込まれるものじゃないのか？」

「それじゃあ、他に逃げ道があつたんだよ……」

俺は、そこまで言っ聖と同時に叫んだ。

「「非常階段！」」

「非常階段？」

まだ1年の遠野さんは学校の構造に詳しくないからぴんと来なかつたんだろう。

ここ、鈴宮高校の校舎は大別するなら3つだ。

右にある教室のある教室棟、左にある部室のある部活棟、そして、中央にある職員室や特別教室、それに下駄箱のある特別棟だ。

学校を俯瞰するならコの字型をしており、棟はそれぞれ辺の1辺になっっているのだ。

校舎内の階段は辺と辺の結節点に2箇所だが、非常階段は辺の先

の行き止まり部分にある。

普段は締めきりの状態だが、鍵は内側の捻り錠だけだ。その気になれば誰でも開けられる。

俺たちはソーラーパネルの間を縫って歩き出した。目標は非常階段、教室棟ではなく部活棟のだ。

「ゾンビどもは生者を喰うために群がってくると考えられる。それなら授業中で比較的人の少なかつた部活棟は数が少ないに違いない」とのことだ。

その考えはあながち間違っではないなかった。あくまで相対的に、だ。

俺は屋上から非常階段の屋根に飛び移り、そのまま雨どいを伝って非常階段に飛び降りた。そこにゾンビがひとりいた。

眼前の距離、俺は息を詰まらせた。

ゾンビはゆっくりと泳ぐように俺の前で口を開けてよだれを垂らしている。俺は、汗ばんだ手を握った。

と、そのとき、エレキギターが大音量で鳴らされた。ゾンビは俺を無視して非常階段から部活棟に向かっていった。

「直以、大丈夫か？」

「ああ、なんとか。あの音は軽音部だな。ここで待ってる、行ってくる」

「直以、これを持っていけ」

そう言って聖は屋根から鉄パイプを伸ばしてきた。

受け取るとずしりと重い。長さ1メートル、重さ2キロといったところか。

「どっしたんだ、これ」

「梨子くんが見つけてくれた。有効に使いたまえ」

「遠野さんは？」

聖は、少し苦笑して答えた。

「屋上から屋根に飛び移れなくてね。こっちは時間がかかりそうだ」
「了解、それじゃあ行ってくる」

「待て、直以」

俺は駆け出そうとしたところを止められた。よくよく水を差すやつだ。

「なんだよ！」

「戦術の基本は？」

俺は、少し考えて答えた。

「敵の攻撃力を無力化する、か？」

満足のいく答えが得られたのか、聖は大きく頷いた。

「おそらく、ゾンビに痛覚はない。もし骨を砕けても、筋肉だけであいつらは動くだろう。狙うのは頭部、中枢神経を破壊するんだ」

俺は、軽く鉄パイプを持ち上げた。

「了解！」

俺は、今度こそ走り出した。

軽音部の部室は部活棟の4階だ。俺は非常階段から校舎に飛び込んだ。

ゾンビどもは、全員が軽音部の部室に群がっていた。教室棟に比べれば数は少ないがそれでも10や20はいる。

「やる気のないやつはどいてろ！」

俺はそのそと歩くゾンビに蹴りを入れて軽音部の部室に入った。そこには、ひとりの生者がいた。

「よお、直以。おまえも俺の単独ラストコンサートを聞きにきてくれたのか？」

そう言ってわざとらしくエレキギターをかき鳴らしたのは、青井雄太、去年一緒のクラスだったやつだ。

色白の肌にさらさらの髪、整った顔立ちに軽音なんてこともやっている。一見してモテ男だが、こいつはモテない。周りから嫌われているのだ。

なにも知らないやつはこいつの容姿から近寄ってきて、こいつの性格の悪さから離れていく。口も軽いし言うことも悪い、だが、実は周りのことを常に考えていて、自分が悪者になってことをうまく納めていることに気づいてからは、俺はこいつと友人になった。

ぶっちゃけるなら聖と同様、嫌われ者同士、馬が合ったのかも知れない。

「コンサートは中止だ。悪いけど聞くに堪えないよ」

「相変わらずストリートな物言いだな。だが、いい加減俺も辟易してたところだ。観客がこんなゾンビどもばかりじゃ、な！」

雄太はエレキギターを振り回して、迫りくるゾンビを薙ぎ倒した。俺もそばにいるゾンビの即頭部を鉄パイプで叩き潰した。頭蓋骨を割る嫌な感触が手元に伝わる。

「雄太、頭を狙え。ゾンビの弱点としてはテンプレだろ？」

「それで大丈夫なのか？」

「さあな。もし駄目なら死んでから聖に文句を言ってくれ」

「あいつも生きてるのか。それじゃあ俺も死ねないな。昭雄、去年のカレーパンの恨み、忘れてないぞお！」

雄太は同じ軽音部の仲間だった男の頭部を、上段から叩き潰した。ぐちよりと、脳漿のこびりついたエレキギターを持ち上げる。

「ROCKだな」

「だろ？ フォークギターじゃこうはいかないぜ！」

雄太は足元のスピーカーカーを蹴りつけた。異様な高音を発しながらスピーカーカーは転がった。

と、そのときだった。

ゾンビどもは、スピーカーカーに一斉に向きを替えた。

「まさか、音に反応しているのか？」

「これもゾンビもののテンプレだな」

「音だけか、っていう疑問も残るけど」

「それは、聖に答えを出してもらえばいいさ」

「だな！」

俺と雄太は目の前のゾンビを潰し、軽音部の部室から出た。

カルテット結成！

「よお聖。まだ生きていたとは相変わらずしぶといな！」

「こいつは……、またうるさいのを連れてきたものだな、直以」

ジト目で俺を睨む聖。非常階段の4階、俺と聖、雄太の3人は、同時に笑い出した。

「……あのう？」

非常階段の屋根から俺たちを窺う顔がひとつ。遠野梨子だ。

「ああ、なんとか屋根には飛び移れたみたいだな。こっちには来れる？」

遠野さんは飛んで行きそうな勢いで首を横に降った。

「それじゃあ仕方ない。屋上に戻っているな。なんとか校舎の階段を使えるようにするから」

「んむむむ、むりです！　ここまで来るのだってやっとだったのに、また戻れなんて！」

聖は困り顔で俺を見た。ずっとこの調子だったのだろう。

「聖、雄太、周辺の警戒を頼む」

俺は柵に脚をかけ、雨どいを伝って非常階段の屋根に上った。

「直以先輩、おかえりなさい」

「おかえりなさいじゃないだろ」

遠野さんは、しゅんと落ち込んで下を向いた。俺は苦笑を漏らしてしまった。もし俺に妹がいたらこんな感じかもしれない。

俺は、遠野さんに背を向けてしゃがんだ。

「ほら」

「？　なんですか？」

「おんぶ」

「お、おおお？」

「だからおんぶだって」

遠野さんは、しばらくしぶっていたが、おそろおそろ、俺の背中

に体重をかけてよりかかった。

俺は、ブレザーで遠野さんの腰と自分の腰を縛ると、彼女の太ももを持って立ち上がった。

「うにゃん!」

「目を閉じて。いいて言うまで開けるなよ」

背中 of 遠野さんは、俺の首に手を回し、ぎゅっと抱きついてきた。小さい膨らみが背中に接触する。

だが、俺に浮かれてる余裕はなかった。

4階建ての校舎のさらに上、春の生暖かい風が俺の頬を撫でる。

一歩間違えればまっ逆さまだ。

遠野さんが怖気つくのもしょうがない。俺だって、やらずにすむなら一生に一度だって嫌だ。

ゆっくりと、ひとりで降りた倍以上の時間をかけて降りていく。

雨どいの強度は大丈夫か？ 俺の指、腕は2人ぶんの体重を支えられるのか？

疑いだしたら一歩も動けなくなる。検証できない以上、俺はあえて考えないようにして降りた。

非常階段に足を付けたとき、俺は水面から顔を出したように思い切り息を吐き出した。

「遠野さん、もういいよ」

「……」

「おい遠野。早く降りろ」

「……」

反応はない。俺は、太ももを掴んでいた手を離して、腰を縛ったブレザーを取った。

結果、彼女を落ちた。

「きゃん！ 直以先輩、ひどいじゃないですか!」

「うるさい！ 降りろといったらさっさと降りろ！ 重いんだから」

「おも……、私、重くありません！」

「おまえら、仲いいな」

そう言ってジト目で俺と遠野（こいつはもう呼び捨てでいいだろう）を見る聖と雄太。

「聖、雄太から音のことは聞いたか？」

「うむ。妄信は禁物だが、なかなか有意義な情報だった」

「それで、これからどうするんだ？」

「とりあえず、職員室を目指そうと思うんだ」

「職員室？ 今さら教師連中を頼るのか？」

「いや、理由はいくつかあるんだが……、それは着いてからにしよ
う」

こうして俺たちは職員室を目指すことになった。

職員室は特別棟の2階になる。コの字型の校舎の中心部分だ。ちなみに特別棟の一階は下駄箱と保健室だ。

音を立てないように慎重に進む。

数人のゾンビは見つけたが、なんとかやり過ごすことができた。

やはり、ゾンビどもが音に反応するとわかったのは大きかった。

なんとか職員室の前にたどり着いたとき、俺たち4人は大きく息を吐いた。

「ほんの数メートルなのにすごく疲れましたねえ」

「ああ、これは神経使うな」

俺たちは小声で話し合った。数メートル先にはゾンビさまがそのそと歩いている。大声を出せる状況ではないのだ。

「しかし、これでゾンビどもに視覚がないのはわかったな。こんな近くにいても気づかないのだから」

「聖、考察は後にしてくれ。とにかく今は職員室に入るぞ。雄太、外のゾンビの警戒を頼むぞ」

「わかった」

「直以先輩、私は？」

俺は、まっすぐに俺を見詰めてくる後輩を見た。

「よし、それじゃあ遠野は扉を開けてくれ。ゆっくり、音を立てないようにな」

「はい！」

遠野は扉に手をかけると、一度俺を見た。俺は頷いてやる。

俺は、鉄パイプを握り直した。

からからと、小さな音を立てて扉は開かれた。幸い、外のゾンビには気づかれなかった。

俺を先頭に、聖、遠野、雄太の順に職員室に入る。そのまま、開けるときの数倍の音を立てて扉を閉めた。

「まあ、そうだよな」

扉を閉めた音に反応してこちらに向かってくる数人のゾンビ。元教師だったゾンビたちだ。

その中には、見知った顔があった。バスケット部のコーチ、渋沢だ。

「まさか、こんな形で引導を渡すことになるとはなあ」

俺はわずかに腰を落とすと軽く息を吸い、一気に駆けた。

一撃で膝頭を叩き潰し、そのままの勢いで半回転、二撃で即頭部を強打して床に這わす。そして、三撃目で俺は鉄パイプを振り下ろし、渋沢の後頭部を破壊した。

「……気に食わないやつだったけど、ゾンビになるほどではなかったな」

俺は、渋沢だったものを一瞥すると、向かってくる古典教師を鉄パイプで横殴りした。

「はい。お疲れ様。これで少し休めるな」

職員室内にいるゾンビを倒し終わった後、偉そうにそうのたまったのは聖だ。

俺は鉄パイプを、雄太はエレキギターを同時に床に投げ出して、イスに座った。

「はあはあ、頭蓋骨がこんなに硬いとは知らなかったぜ。聖、爆弾でも作ってくれよ。ゾンビゲームのテンプレだろ？」

「別にかまわないがその時は作成段階から雄太がやるんだぞ。私は爆発物を理論だけで調合する度胸はないからな」

雄太は大きな舌打ちをすると机に突っ伏した。

「先輩、お疲れさまです」

遠野は、俺に1リットルのペットボトルを差し出した。

よく冷えている。どうやら職員室内にある冷蔵庫から持ってきたようだ。

「サンキュー」

俺はキャップを取ると、一気に半分ほど飲んで雄太に渡した。残りの半分を雄太は一気に飲み込む。

一息吐いたところで、俺は聖に聞いた。

「さて、そろそろ職員室にきた目的を話してくれよ」

「ああ、まずは現状を確認しようと思っただけ」

そうやって聖はテレビをつけた。

テレビ局は、全てが特番だった。いや、正確を期すなら、やっているテレビ局の全てが。

半分の放送局は、『しばらくお待ちください』のテロップ。倒れたテレビがゾンビの徘徊するスタジオを写している局もあった。

「おいおい、まじかよ」

聖は、1秒間隔でチャンネルを変えていたが、国营放送で止めた。その内容は、世界中でゾンビが発生しているということだった。

「世界中で、かよ。まいったな」

「これで救援の可能性はぐっと下がったな」

「下がりましたか？」

「ああ。なんの取り得もない地方都市なんて二の次だろ。まずは東京とか大阪の治安守って、大都市の治安守って、それからやっと順番待ちに並べるってところかな。いったい何ヶ月先になることやら」

「雄太、後輩を不安がらせるな。全部は憶測だろ」

「あら、直以先輩。私は大丈夫ですよ。不安がっている余裕なんてないって知ってますもん」

「そういう生意気は高所恐怖症が治ってから言え」

遠野は思い切り頬を膨らませて、俺の隣に座った。

俺は、顔を背けながらも身体を寄せてくる遠野の肩越しに、立ったまんなの聖を見た。

「聖、おまえも座って休んでおけよ」

「……ああ、そうだな」

言われて初めて聖は近くのイスに座った。俺は、立ち上がって聖の傍に寄った。

「さすがのメンサも、精神的に疲れたか？」

聖は、弱弱しく微笑んで俺を見上げた。俺が初めて見る、聖の表情だった。

「私も1日でこれだけの生死を体験したことはなかったからね。少し疲れてしまった」

「正確には、まだ1時間ほどだけだな」

俺は時計を指した。時間は、まだ13時前だ。初めてゾンビを見かけてから1時間ちよつと。体育の授業でシュートを外してからも1時間半ほどだ。

「もうこんな時間か。おなかすきましたね」

遠野はそう言うといすから立ち上がり、お茶請けを物色し始めた。

「遠野、おまえけっこうタフだな」

「ええ。こういう時はカラ元気ででもいいから盛り上がらないといけないですよ。じゃないと感情に押し潰されるから」

雄太も立ち上がり、遠野と一緒にせんべいなどを摘まんでいる。

俺は、小声で言った。

「話せることは話してくれよ。こんな状況だ。多少のことでは驚かないから」

聖は俺を見上げている。俺は、聖と目を合わせずに言った。

「それに、こういうときだ。俺でも役に立てるかもしれないだろう？
少しは頼ってくれ」

しばらくの無言、聖はいきなり噴き出した。俺は口角を下げて文句を言う。

「なんだよ、いきなり」

「いや、普段からそれだけ言ってくれば、あるいは私たちも男女の関係になれるかもと思ってね」

「……リップサービスは苦手なんだよ」

「ああ、わかっているよ。長い付き合いでもないが、それぐらいは君を理解してるつもりだからね」

聖は勢いよくイスから立ち上がった。そのまま俺に背を見せて話し出す。

「直以、今は駄目だ。私にも安いながらにプライドというものがあるからね。今この話をしたらきつと君は私を軽蔑する。私はきつとそれに耐えられない。だから、今はまだ駄目だ。いつか、私の覚悟ができたなら、そのときに聞いてもらいたいことがある……」

俺は、聖の背中に答えた。

「ああ。わかった。おまえに話せるときが来たら話してくれ」

聖の肩が下がった。そのまま胸を反らして大きく息を吸うと、聖は振り返って言った。

「さて、みんな。聞いてくれ。今まで馴れ合いでここまでやってきたけど、そろそろ目的と行動を明確にしよう」

「どういう意味ですか？」

「つまり、ここからは別行動をしようということだ」

聖を除く3人は押し黙った。聖は、微笑を浮かべると説明した。

「これからは個々人で動くということだ。梨子くん、君にも家族がいるだろう？」

「いませんよ」

あっけらかんという遠野。今度は遠野を除く3人が押し黙った。

「私、小さいときに両親を亡くしているんです。今は親戚の家でお

世話になっっているんですけど、あの人たちは私のことなんて心配しないでしょうね」

「……さりげなく重い話を聞いてしまったが、まあいい。雄太、君は家族と再会したいだろう?」

「俺? 俺はいいや。ここから家まで遠いしな。無理に行かなくてもいい。安全が確保されてからでな」

「……そうか。それならみんなここを離れ家に帰る必要はないんだな?」

「聖、なんで俺を無視してるんだよ」

「聖は俺を見てにやりと笑った。聖の、いつもの表情だ。」

「直以のことなんて聞かなくてもわかる。それとも、君は無理して実家に帰るのか?」

俺はひとり押し黙った。俺は別に家族と疎遠というわけでもないが、危険を冒してまで会いに行くべきかというところ、そこまでの必要性は感じていなかった。その手の家族愛はハリウッド映画に任せておけという話だ。

「よし、それなら改めて確認するぞ。私たちはこれからしばらく一緒に行動して助け合う。これは強制ではない。個々人がそれぞれの意思で協力するんだ、いいな?」

「回りくどい」

俺が聖の口上を一刀両断すると、遠野はびよこんと一歩前に飛び出し、右手を差し出した。

「えっと、遠野梨子です。中国には、生涯の面倒を見る気がないから最初から助けるな、ということわざがあるそうです。しょーじきここで解散されたらどうしようと思いましたが。役に立たないかもしれないですけど、いっしょーけんめーがんばりますのでおねがいします!」

遠野の右手に手を置いたのは雄太だ。

「青井雄太。ぶっちゃけるとくだらない毎日が終わって清々している。さっきまではこのまま死ぬのもありかとも思ったが、まだ楽し

めるんなら楽しんでから死にたい」

雄太の上に聖が手を置く。

「牧原聖。確認の必要はないだろうが、この中で、いや、この国で私は一番頭がいい。その頭脳をこの4人が生き抜くために使うことをここに約束するよ」

全員の視線が俺に集まる。こういうのって、苦手なんだけどな。

俺は、聖の手の上に自分の右手を乗せた。

重なる4人の手。

「菅田直以。とりあえず、俺は死にたくない。俺たちがつるむ理由は、それだけで十分だと思う……」

俺は、大きく息を吸うと、外のゾンビも気にせず大声で怒鳴った。

「よろしく……！」

「はい！」「おう！」「うむ！」

4人の心がひとつになった瞬間だった。

なんで私なんですか!?

「それで、これからどうする?」

一種の興奮が冷めると、次は実務面での話になる。当然だ。なにもしないならつるむ意味もない。

「基本戦略は決まっている。まずは安全の確保。これは当面は大丈夫だろう」

「職員室に籠っていれば、てことか?」

「ああ、そうだ。だが、籠っているだけでは屋上にいるのと変わらない。そこで次に重要になってくるのは水食料の確保」

「……購買ですか?」

「いや、購買の食料ではよくて10日が限界だ。賞味期限の問題もあるしな。正直それでは心もとない」

「学校を脱出してどこか別の場所に行くか?」

「それでは安全の確保が崩れる」

「じゃあどうするんだよ」

聖は、にやりと笑った。

「雄太、ここはどこだ?」

「は? ここは学校だろう?」

「それでは及第点はやれないな。ここは、緊急災害時の非難場所だ」

「あ!」

遠野はなにか気づいたのか大きな声を上げた。

「なんだ、遠野。言ってみろ」

「私、入学初日に聞きました。この学校は大地震が起こったときは地域の住人が集まるって。それで、1000人分の水食料と毛布が3か月分、地下室に常備されてるって!」

「……直以、知ってたか?」

「……いや、初耳だ」

「……ああ、そうだろう。そういうことは君たちには期待していな

いからね」

聖は立ち上がると、かぎ掛けからひとつの鍵を取った。

「これが地下室の鍵だ。私がここを目指した理由のひとつがこれだよ」

「そうか、これで食料はなんとかなるのか？」

「ああ。もうわかっただろうが私の基本戦略はここ、鈴宮高校で立て籠もりだ。この学校はソーラーパネルを使っているから電気の供給も問題ないしな。ここまでは君たちにも異論はないんじゃないかな？」

「なにか奥歯にものが挟まったような物言いだな」

「ん、ああ」

聖は、ちらと俺を見た。

「そのために必要なのはここ、特別棟だけだ。だから、他の棟とは防火扉で隔離して安全を確保しようと思うんだが……」

「？ それになんの問題が？」

「おそらく、この学校のあちこちにまだ生存者がいるだろう。私は、彼らを見殺しにすることを提案する。彼らの面倒を見ていたら、私たち4人の生存率まで下がるし、人数が増えれば厄介な問題も起こるだろう」

遠野は目を見張り、雄太は目を細めた。聖はじつと俺を見ている。

俺は、聖に言った。

「俺がなんて言うかわかってんだろ？」

「……ああ、わかっていたさ。君がどうしようもない馬鹿だってね！」

聖は、言葉とは裏腹に顔には笑みが浮かんでいた。雄太の顔にも笑みが浮かんでいる。ひとり理解できていない遠野に俺は言った。

「ひとりを救えないんなら群れる意味がないだろ？」

「えっと、つまり？」

「今から生存者を助ける！ 行け遠野！」

「はい！……はい？」

俺たち3人は遠野を残して職員室の一角に集まった。そこには放送機材があつた。

生徒を職員室に呼び出すときは、ここから放送するといった寸法だ。

「ほら、遠野。アナウンスしろ」

「なんで私なんですか!？」

「おまえは1年だから知らないだろうが、俺と雄太は校内で嫌われ者なんだよ」

「知ってます!」

「……………」

「……………はッ!」

「いいから早くやれ!」

「わかつた、わかりまゝしーた!」

遠野はぶーたれながらもマイクの前に立った。

マイクのスイッチをオンにすると、軽快な音楽がスピーカーから流れた。

『えーっと、みなさんこんにちは。今、私は職員室から放送しています。どなたか、生きている方、職員室まで来てください。もし自力ではたどり着けない方はなにか合図をください。直いせんぱいが! 助けに行きます』

このやろう! 俺は遠野に手を伸ばすが、遠野はすばしこくかわし、俺に舌を出した。ちくしょう、かわいいじゃねえか。

『それと、ゾンビは大きな音に反応するようです。気をつけてください。みなさん、きつと生きて再会しましょう! それでは一旦放送を終了します。……………ドーン』

遠野はやり遂げた顔をして、かいてもいない額の汗を拭った。

「最後のドーンってなによ」

「トランシーバーとかって交信終わるときドーンって言いませんでしたっけ?」

「校内放送はトランシーバーじゃないだろ。さて、雄太。廊下のゾンビを片付けるぞ。それが終わったら購買から食いもんを持ってこられるだけもってくるぞ」

「ああ、そうするか……、直以、あれを見る！」

雄太の指差す方向を見ると、そこは校門だった。

そこから走ってくる集団、それに俺は見覚えがあった。

「あれは……大地！」

その集団は、俺と同じクラスの連中だった。一度学校を脱出したが、町の様子を見て戻ってきたのかもしれない。

「助けて!!」

大声で集団の中の女が叫んだ。怪我人がいるらしく集団の足は遅い。加えて今の大声で校内のゾンビどもも群がってきていた。

俺は舌打ちすると指示を出した。

「聖、遠野！ あいつらが駆け込めるように下駄箱のドアを開けてきてくれ！ 雄太は2人の護衛とゾンビの掃討！」

「わっかかりました！」

「やれやれ。肉体労働は向いていないんだがね」

俺は職員室の窓からとにかくモノを手当たり次第に投げた。その音に引かれて一部のゾンビが向かってきたが、ほとんどが女の悲鳴のほうに群がっていった。

「くそ、大地！ 校舎に逃げ込め！」

大地は俺を見上げるとひとつ頷き、速度を上げた。立ちほだかるゾンビを素手で跳ね飛ばし、校舎内に飛び込む。それに続いて数人の男女が校舎内に入った。

あと2人、怪我をしているのか、女子生徒が女子生徒を担いでいる。その2人が、転んだ。

下から声が聞こえる。

「もう扉閉めろよ！ ゾンビが入ってくるだろ！」

「え、でも……」

「いいから閉めろ！」

扉を引きずって閉める音がここにも伝わってくる。
それを見て絶望を顔に浮かべる女子生徒。
群がるゾンビ、完全に、囲まれていた。

俺は、一瞬だけ目を閉じると、行動した。

床に転がっている鉄パイプを掴み、職員室の2階の窓から外に飛び出す。

そして、女子生徒に、今まさに噛み付こうとしているゾンビの後頭部を吹き飛ばした。

「すが……た？」

倒れた女子生徒は、伊草麻里だった。俺は伊草を一瞥して言った。
「立てるな。走るぞ」

「え、でも……」

伊草は肩に担いでいる友人を見た。おそらくゾンビに噛まれたのだろう、ぴくりとも動かず、肌の変色も始まっていた。

「あきらめろ。もう、ゾンビになっている」

俺は、伊草を無理やり立たせ、すでにゾンビと化している伊草の友人の頭部を潰した。

「あ、あんだなんてこ、と！」

俺は、無言で伊草の胸倉を掴んだ。伊草は言葉を詰まらせた。

「……今から走るぞ。死にたくなかったらついて来い」

俺はそれだけ言うと、群がるゾンビをフルスイングで一掃し、走り出した。

後ろを振り返ると、伊草はついてきていた。

しばらく校舎沿いに走ると、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「直以先輩、こっちこっち！」

俺は伊草の襟を掴むと、窓を開け放っている部屋に放り込んだ。

1テンポ遅れて俺も室内に入り込む。絶妙のタイミングで、聖は部屋の窓を閉めてゾンビどもを締め出した。

俺は室内を見回した。

白いシーツにベッド。ここは、保健室だった。

「もう、びっくりしましたよ。いきなり直以先輩、上から降ってくるんだもん」

「ああ。ありがとうな。正直非常階段まで走るつもりだったから助かったよ」

そう言つと、遠野はにっこりと笑つた。

俺は、立ち上がるとへたり込んでいる伊草に言った。

「伊草、怪我はないか？」

伊草は、なにも答えずに座った姿勢のまま俺を睨みつけてきた。

ゾンビ化していたとはえ必死に守ってきた友人を目の前で殺されたのだ。当然の反応だろう。

「伊草。俺たちは今、職員室を拠点にしている。少し休んだら来てくれ」

俺はそれだけ言つと保健室を出た。

隣に聖が並ぶ。

「相変わらずらしいな。彼女との関係」

「俺は嫌われてるんだよ。人の好き嫌いはどうしようもないだろ」

「君と彼女の場合はそんな単純なものでもないんだがね」

「いつもの知つたかぶりか？」

俺たちは、そのまま職員室に向かった。

アメとムチがある意味ツンデレ？」

職員室は、人で賑わっていた。ついさっき助けた大地たちと合わせて、遠野の放送で集まったのだろう生徒たちも床に座って一息ついていた。

目敏く聖はひとりひとりを観察する。怪我をした、言い換えれば噛まれて感染しているやつがいないか確認しているのだろう。俺も確認するが、幸いにもいないようだった。

「けっこういますね。20、30人くらいはいるかなあ」

「ふむ、直以。お疲れのところ悪いが、あまり時間はないぞ。人が集えば音が出る。音が出ればゾンビどもが寄って来る」

「ああ、わかってる」

俺は、泣きじゃくっている女子生徒を慰めている大地に言った。

「大地、無事だったか？」

「直以。ああ、おまえも大丈夫そうだな」

「すまないが手伝ってくれ。今から防火扉を閉めにいく。教室棟と特別棟を隔離してゾンビたちがこっちに来れないようにする」

「ふざけんな！」

その声は、大地からではなく、大地の横で座り込んでいる男子学生のものだった。俺と同じクラスの、サッカー部のやつだ。

「俺たちがどんな思いで学校まで戻ってきたと思ってるんだ！ やつとの思いで戻ってきたのに、なんでおまえなんか命令されなきゃならないんだ！」

それに反応したのは、背後からの2つの忍び笑いだ。これは振り返らないでもわかる。聖と雄太だ。

俺は、なにか言おう口を開けたが、そのままにも言わずに口を閉じた。そして、そのまま大地に背を向けた。

その俺の背中に、大地は声をかける。

「直以、待て」

俺は、振り返らずに足を止めた。大地は、職員室にいる全員に聞こえる音量で話した。

「これから防火扉を閉めにいく。このままじゃあいつまたゾンビに襲われるかわからないから！ 動ける男子は協力してくれ！」

職員室内からは少しずつ賛同の声が上がった。

俺は、後ろの2人と同じように、笑ってしまった。この状況に及んでも、いつもの展開でわけか。

俺がバスケット部に所属していた頃、いや、それ以前からの俺と大地の関係だ。

アメとムチ。

俺がみんなの耳に痛い必要なことを言い、反感を買う。そして大地がみんなをまとめて一致団結するといった寸法だ。

聖は人の悪い笑みを浮かべて俺に話しかけてきた。

「相変わらずだね、直以。いや、これはむしろ人望を集めることに余念がない木村大地の政治力を褒めるべきかな？」

「穿ちすぎだ。それでも助かってるんだぜ。俺には全体をまとめるなんて無理だからな」

「喰わず嫌いだな。私も手伝うからリーダーシップをとってみないか？ 正直仲良しグループで生き残れる状況でもないぞ」

「遠慮しておくよ。大地がいるうちはな。雄太、なにか武器になるものはあったか？」

俺は強引に聖との会話を打ち切り、雄太に話しかけた。

「いや、当然といえば当然だが、使えそうなものはなかなかないな」「使えそうなものってなんですか？」

「ぶつちやけるなら武器だな。ゾンビを倒せるもの、言い換えるなら人間の頭蓋骨を叩き割れるもの」

雄太は遠野に拉^ひげたエレキギターを掲げて見せた。

遠野はきよるきよると職員室内を見渡した。

「……箒とかモップじゃ駄目ですよ。あ、これなんかどうですか？
そう言って遠野が持ち上げようとして失敗したのは、ステンレス
製の、教員用の机だった。

遠野は褒めてくれと言わんばかりの表情で俺を見上げてくる。
「……これなら頭蓋骨も割れるだろうが、さすがにでかすぎるだろ
う」

遠野はしょぼんと下を向いた。頭がいいんだが悪いんだかわから
ない娘だ。

「本当に使えるものが少ないな。聖、なにかないか？」
「そうだ、なあ。消火器なんかはどうだ？」

聖は消火器を俺に渡してきた。鉄の、ひんやりした感触が手のひ
らから伝わる。ずしりと重く、これなら使えそうだった。

「直以」

背後から大地に声をかけられる。振り返ると、大地を先頭に10
人ほどの男子学生が立っていた。

「なにしてるんだ、行くぞ」

大地のその言い方に雄太は一步前に出て文句を言おうとするが、
俺は無言で止めた。

雄太の代わりに、聖が俺の前に出る。

大地の顔色が変わった。

聖は、大地にとって自分の影響をまったく受けない数少ない人間
だ。

聖と大地の関係は友好でも反感でもない。大地にとって聖は同学
年の学友というよりは教師といった立場の人間に近いのかもしれない。
い。

「木村、さすがにこれだけの人数は余剰だよ。君たちは購買で食べ
物を持ってきてくれないか？ここに立て籠るには食料は必要だか
らね」

大地は反論することすらできずに、無言で頷いた。聖の言うこと
が正しいと思ったのだろう。

「大地！」

そのまま大人数で職員室を出ていこうとする大地を俺は呼び止めた。そして、血に染まった鉄パイプを渡す。

「頭を狙え。脳みそを潰さないとゾンビは動きを止めないぞ」

大地は鉄パイプをわずかに掲げて見せ、職員室から出て行った。

ふと見ると、聖が恨みがましく俺を見ている。

「なんだよ？」

「……豎子ともに謀るに足らず」

「漢文でやったな。鴻門の会だっけ？」

「今の私はまさに范増の気分だよ。せっかく武器も持たせずに木村を職員室から追い出そうとしたのに」

「小賢しいんだよ。仲間を貶めてどうする」

「私はいいつを仲間とは認めていないんだがね」

俺は聖を押し退けると消火器を肩に担いだ。

「雄太、俺たちも行くぞ」

「りょくかい」

俺と雄太は職員室の出口に向かって歩いていく。その後を子犬のようについてくる遠野は聖に襟首を掴まれ嘔吐えいいた。

「聖先輩、なにするとですか！」

「梨子くん。君は私とここでお留守番だ」

遠野はアヒル口を作って俺を見上げてきた。

「……遠野、待ってる。肉体労働は俺と雄太でやるから」

「……はい」

渋々といった感じで引き下がる遠野。

ちょうどそのとき、職員室の扉が外側から開かれた。

職員室に入ってきたのは伊草麻里だった。

特に話すこともない。俺と雄太は無言で伊草の隣を通り過ぎようとした。だが、俺を見ればケチを付けずにはいられないのが伊草だ。今回も例外ではなかった。

「私が来たら菅田は出て行くんだ。ふーん、私、避けられてるんだ。嫌味つたらしいわね！」

「直以には避けるだけの理由がありそうだけどな、おっと」

雄太は伊草に睨まれて口を噤んだ。

俺は、伊草を見た。

伊草は、顎をわずかに上げ、俺を見下している。こんな状況で、無理をしているにしても、いつも通りの行動をする伊草を俺は好ましく思った。だからなのか、俺は普段だったら絶対にしないことを言った。

「……ついてくるか？」

伊草のとつた行動は、おそらく職員室にいる全員にとって意外だったろう。俺と雄太の後について職員室を出たのだ。

「……モテ期到来か？」

「……この状況で？ 嬉しくないなあ」

「こそこそ話してるんじゃないわよ！ それで、どこに行くの？」

俺は廊下の端を示した。

「そこ」

「？ なにもないじゃない」

「防火扉を閉めるんだよ。悪いけど手伝ってくれ」

伊草はなにか言おうとしたが、口を噤み、俺たちの後をついてきた。

防火扉は教室棟と特別棟の境目にある。ゾンビどもは、教室棟に溢れるように大量にいた。

伊草は防火扉を触って小声で言った。

「どうするの？ これを動かすとき、どうやっても音が出わよ」

「ああ、対策はある。雄太」

「はいよ」

雄太は、職員室から持ってきた缶を取り出した。元は教師がペン立てとして使っていたものだ。

雄太は、大きく振りかぶると、教室棟に向かって思い切り缶を投げた。

缶は甲高い音を立てた。ゾンビどもはその音に反応し、教室棟の奥に向かっていく。

ゾンビどもの動きは鈍い。ゾンビどもが防火扉から十分に離れたら防火扉を閉める。そのつもりでいた。

だが、缶の音に反応したのはゾンビだけではなかった。

「助けてくれ！」

教室棟の数箇所から声が上がった。生存者だ。

「……仕方ない。予定変更だ。雄太、伊草。おまえたちは防火扉を閉めてくれ」

「あんたはどうするのよ？」

「生存者を助ける。そのまま非常階段から回って戻るから、他の階の防火扉も頼む」

「ここを突っ切るってか？ それは無理だろ。自殺行為だ」

「大丈夫だよ。ここは2階だ。いざとなったら窓から逃げるよ」

「……けんじゃないわよ」

ぼそりと、小声で言った伊草の言葉は、俺には聞こえなかった。

だが、次に言った言葉ははっきり聞き取れた。

「ふざけんじゃないわよ！ あんたなにさま？ あんたのやってる

ことはまるっきり偽善じゃない！」

「伊草、声がでかい！」

伊草の大声に反応して数人のゾンビが俺たちに向かってくる。俺は、伊草を無視して雄太に指示した。雄太は無言で頷き、防火扉を動かした。

防火扉を引きずる鈍い音が響き渡る。教室棟にいるゾンビどもは、一斉に俺たちに向かってきた。

俺は駆け出し、間近にいるゾンビの頭部を消火器で殴った。ゾンビは頭をほぼ半回転し、前のめりに倒れて痙攣した。

「頸椎を破壊すれば、動きは止まるみたいだな」

俺は消火器を振り下ろし、倒れているゾンビの息の根を止めた。ふと横を見る。そこには、伊草が立っていた。

「おま、なんでこっち来るんだよ！」

「私の勝手でしょ！ 大声出さないでよ！」

「さつさと戻れ！」

「私に命令するなあ！」

伊草は迫るゾンビの手を払いのけると、足払いをした。伊草は、倒れたゾンビの背中を踏みつけて動きを止める。

「ほら、次が来てるんだから早く殺してよ！」

「あ、ああ」

俺は、困惑しながらも倒れているゾンビの頭部を消火器で潰した。伊草は時には打突を加え、ゾンビどもを効率よく転ばせていく。

俺は、人一人分を開けて待っている雄太に合図を送り、防火扉を閉めさせた。

背後で重い音がして扉は閉まった。

「さぼってんじゃないわよ！ 私は素手じゃこいつらを殺せないんだかんね！」

「おまえ、なにもの？」

「ありえないでしょ！ なんで私のことを知らないのよ！」

口を動かしながらも伊草はゾンビの手を掴み、後ろに回って関節を決めた。が、ゾンビは力づくで伊草を振り払った。俺は、バランスを崩した伊草を抱きとめた。

「あゝむかつく！ 間接技がきかないってどんだけふざけてんのよ！」

伊草は俺に抱きつかれたまま愚痴っていた。

「それで、これからどうすんのよ。言っておくけどCQCは専門外だかんね」

「CQC？」

「……クローズドクォーターコンバット。近接戦闘のこと」

……おまえ、なにもの？ 再びのど元まで出かかった疑問を俺は飲み込んだ。

今は考察の時間ではない。周りはゾンビで溢れているのだ。

「調子に乗ったはいいいけど、助けるどころか私たちが助けられる立場じゃないの、これ？」

「とりあえず、どこかの教室に逃げ込むぞ」

伊草は、無言で頷いた。ゆっくりと抱きかかえた俺の腕から離れ、制服の皺を伸ばす。そして、首だけで振り返り、微笑を浮かべた。

伊草麻里が初めて俺に向ける笑顔だった。

「さ、行くわよ！」

「おう！」

俺と伊草は同時に走り出した。

俺は目の前に立ちちはだかるゾンビを殴り飛ばし、道を作る。その道に伊草が滑り込み、一気に駆けた。

伊草はそのまま最初の教室の扉に手をかけ、開け放つ。が、そこにいたのは大口を開けたゾンビだった。伊草に迫り来るゾンビを、俺は全力で扉を閉めて阻止した。扉はゾンビの首を挟んで止まり、再びゆっくり開いた。

首の骨を折って沈むゾンビ越しに見た教室内は数人のゾンビだけで生存者はいなかった。

「次だ！」

「わかってるわよ！」

俺たちは足を止めず、次の教室に向かった。その教室には鍵がかかっていた。

「おい、開ける！」

中から声がする。

「だ、駄目だ。今開けたらゾンビも入ってくる」

「おまえら、助けを求めてたんじゃねえのかよ！」

「いいから俺たちのことは放っておいてくれ！」

伊草は大きな舌打ちをした。

「菅田、消火器で扉壊したら？」

「できないこともないけどやりたくない。無駄な労力だ」

「これでわかったでしょ。いくら偽善やったって報われないのよ。これからは助ける人間を選ぶのね」

「……次行くぞ」

伊草は肩を竦めて俺の後についてきた。

次の教室も、次の次の教室も内容は前の教室と同じだった。生存者がいないか鍵がかかっているかだ。

最後の、教室棟の最奥にある教室の扉に俺は手をかけた。しかし、鍵がかかっけていて扉は開かなかった。

「くっそ、全部外れかよ！」

「どうすんのよ！」

「非常階段から外に逃げるぞ！」

俺は殴りすぎてでこぼこになっている消火器を振るい、眼前のゾンビの即頭部を強打した。伊草はその隙に非常階段まで走り、そこで止まった。

「どうしたんだよ！ さっさと行けよ！」

「扉が開かないのよ！」

俺は、思い切り足の裏で扉を蹴りつけた。が、扉は大きく揺れただけが開かなかった。

よく見てみると、扉の外に鉄骨がバリケード代わりになって扉が開くのを妨げていた。

「なんだ、これ？」

俺は、窓から外を見た。

そこには、大量の落死体があった。数は100を超えている。

おそらく、一斉に非常階段に逃げた学生が押し合い押し合い落下したのだろう。扉を塞いでいる鉄骨は倒壊した非常階段の残骸だった。

くいと、伊草に袖を引っ張られ俺は、振り返った。

俺たちは、追い詰められていた。

教室棟2階にいる全てのゾンビが俺たち2人に向かってくる。

隙もない重圧、もはや、もと来た道に戻るのとは不可能だった。

「……伊草、窓から出る。ここは2階だし落死体の上に落ちればクッションになるだろう」

「あんたはどうするのよ！」

「俺もすぐに行く」

「ふっざけんじゃないわよ！ 偽善はやめろって言ったでしょ！
行くならあんたから行きなさいよ！」

「討論している場合じゃないんだよ！ 行け！」

「うるさーい！ 今度こそ私が直以を助ける番なんだから！」

「！」

俺は、無言で伊草のみぞおちに拳を叩きこんだ。腹を押さええつ
ずくまる伊草。俺は窓を開き、伊草の脇と膝裏を持って抱き上げた。
いわゆるお姫様抱っこというやつだ。

「いいか、頭だけは自分で守れよ」

目に涙を溜めて俺を睨む伊草。俺は勢いをつけて、伊草を窓から
放り出そうとした、そのときだった。

スコップにいちちゃんと爆弾ねえちゃん

突然最奥にある教室の扉が開いた。そこから黒い影が躍り、俺は伊草を抱き上げたまま抵抗することもできず、教室内に引き入れられた。

俺は床に投げ出され、背後で扉の閉まる音を聞いた。

ずっと走りっぱなしで疲れも溜まっていたのだろう、俺はすぐには立ち上がることができなかった。伊草の甘酸っぱい体臭を嗅ぎながら荒い息を吐く。

「直以、重い……」

「ああ、悪い」

俺は伊草の上に倒れていたらしい。俺は重い身体を動かして伊草から離れた。そういえばこいつ、いつの間にか俺のことを名前で呼んでやがるな。

「直以……」

伊草は立ち上がると、ゆっくりと俺の後ろに回った。そのまま俺の首に抱きついてくる。こいつも不安だったんだろう。俺はそう思った。

が、俺の想像は大はずれだった。

首に回った伊草の細い腕は、俺の頸動脈を締め上げたのだ。

慌てて俺は伊草の腕を叩く。だが、伊草は腕を緩めなかった。

「よくも殴ってくれたわねえ！」

伊草の腕はさらに力を増す。後頭部に胸が当たっているがその感触を楽しむ余裕は俺にはなかった。

「いい！ 今度勝手に死のうとしたら私が殺すわよ！」

なにを言ってるのかまるつきり理解できない。俺は必死に首を縦に振った。

ようやく伊草は俺の首を絞めるのをやめた。俺は、伏して咳き込んだ。

「うふふ。仲がいいのね」

その透き通るような声は教室内から聞こえた。

俺は、のどを擦りながら立ち上がり、教室内を見渡した。

机の並びが乱れている以外はなんの変哲もない教室。そこには2人の有名人がいた。

ひとりは生徒会副会長で鈴宮高校のアイドル、須藤清良先輩だ。

制服ごしにもわかる抜群のプロポーション、わずかに垂れた瞳に右唇の下にあるほくろが色っぽい人だ。

もうひとりは学校1の不良と言われる荒瀬宏先輩。蓬髪の髪、190を超える長身、細身ながら良質の筋肉を蓄えている身体で机に座り、鋭い眼光で俺たちを睨んでいる。この人が俺たちを教室に引き入れてくれたのだらう。

俺は立ち上がり、2人に言った。

「さつきはありますがとうございます。助かりました」

「直いくんですね。放送は聴きました。待っていたんですよ」

「ったく、ミイラ取りがミイラになるなんて笑えねえ、洒落にもならねえぞ」

俺は改めて教室を見渡した。よく見てみれば、やはりおかしいところも多々見つかる。具体的に言うのなら、壁や床にこびりついた乾いた血だ。

「先輩たちは、ずっとここにいたんですか？」

伊草は須藤先輩に聞いた。

「ええ。周りが騒ぎ出したとき、宏がこういうときは落ち着いて状況を見たほうがいいっていうから」

「ひょっとして、須藤先輩と荒瀬先輩ってお付き合いされてるんですか？」

目を輝かせて聞く伊草。須藤先輩は困ったように荒瀬先輩を見た。

荒瀬先輩は、舌打ちをして答えた。

「そんなんじゃないよ。こいつとは、腐れ縁だ」

「母親同士が同じ産婦人科だったこともあって、本当に長い付き合い合

いなよ。なにしろ生まれる前からだから」

そう言って嬉しそうに笑う須藤先輩。荒瀬先輩は不愉快そうに視線を逸らした。

軽く一息つくと、俺は荒瀬先輩に聞いた。

「それで、ゾンビはどうしたんですか？」

「あん？ なにがだよ」

「この血糊、先輩方のじゃないですよね」

「ああ、そういうことか。捨てた」

そう言って荒瀬先輩は窓の外を親指で示した。

俺と伊草は窓の外を見た。直前にあるのはベランダだ。そこから先は中庭が見える。

その中庭、教室の直下には、10を超えるゾンビが山積みになっていた。この教室から、荒瀬先輩に投げ捨てられたってことか。

「直以くん、それで、今の状況はどうなっているの？ 未だに携帯もネットも通じないのだけけど」

「……正直わかりません。テレビニュースを見る限りではゾンビは世界中で発生しているようです」

「同時多発的に発生？」

「まあ、その辺のことは聖に聞いてください。牧原聖。職員室にはあいつがいますから」

「職員室は？」

「今、30人ほどの学生が集まっています。特別棟と部活棟はゾンビが少ないので一応安全だと思いますよ」

「それで、おまえらはこれからどうするつもりだったんだ？ 助けに来ておいてなにも考えてなかったってわけじゃないんだろ？」

教室内にいる3人の視線が俺に集まる。俺は、頭を掻いた。

「最初の予定じゃ非常階段を使って外に出て、下駄箱まで回ろうと思っていたんですが……」

「それは無理だな。倒壊しているのをおまえらも見ただろ？」

「ええ……」

「それじゃあ策なしか？」

「いえ。ベランダから中庭に出ようと思います」
そう言っただけ俺は教室の端で垂れ下がっているカーテンを掴んだ。

俺たち4人はベランダに出た。命綱にカーテンを2枚はずし、よ
り合わせて2重にして柵に縛り付ける。

ふと見ると隣の教室には敷居があるだけで、案外簡単に行き来が
できるようだった。

俺は、隣の教室を覗いてみた。

そこには、3人の生存者がいた。生存者は俺の姿を見つけると、
ベランダまで出てきた。

「おい、おまえたちどうするんだ？俺たちも助けてくれ！」

「……調子がいいわね。私たちが廊下から叫んでも扉を開けてくれ
なかつたくせに」

俺は愚痴る伊草を止め、隣の教室のやつにカーテンで中庭に下り、
回り込んで特別棟に非難することを説明した。

「最初に言っておくけど、ベランダ伝って他の奴らも助けに行くな
んてのは却下だかね」

「わかつてるよ」

なおも愚痴る伊草を遮り、俺は中庭を見た。

そこそこの広さのある中庭にはゾンビがいた。だが、目視で数え
られる程度、10を少し超える程度だ。これなら静かにしていれば
やり過ごせるだろう。

「おい、直以。わりいが先に下りてくれ」

荒瀬先輩に言われて俺は頷いた。と、そこで俺は手ぶらなことに
気付いた。消火器は廊下に落としてきてしまっていた。

「なにか武器になるものはありますか？」

「あん、武器？ちよっと待ってる」

そう言っただけ荒瀬先輩は教室に戻っていった。代わりに伊草は俺に
ボールペンを差し出してきた。

「……なんだよ」

「武器よ」

「……」

俺は、無言でボールペンを受け取り、そのまま外へ投げ飛ばした。

「あにすんのよ！」

「こんなの使えるか！ っててて、ぎぶ、ぎぶぎぶ！」

俺の言葉が終わらないうちに伊草は俺の肩を極めてきた。俺は早々に降参するが、伊草は俺を解放しなかった。

「……なにやっつてんだてめえらは」

荒瀬先輩が戻ってきてようやく伊草は俺を解放した。

「ほらよ。これなら武器に使えるだろ」

荒瀬先輩は俺に長大な鉄を放ってきた。軽々と荒瀬先輩が放ったので、俺は油断していた。それを受け取ったとき、あまりの重さに俺は思わず取り落としそうになった。

それは、シャベルだった。ホームセンターでも見たことのない大きさのシャベルは、5キロはありそうだった。

「……荒瀬先輩。なんでこんなもの持つてるんですか？」

それに答えたのは、須藤先輩だった。

「宏は私と同じ園芸部なのよ。このシャベルでロータリーのお花畑を作ったのよね」

ロータリーは校門と下駄箱の間にある30メートルほどの広場だ。その左右は季節の花が彩る花壇になっているのだが、それを荒瀬先輩が作ったとは……。なんか、イメージが変わりそうだ。

「っち！ そんなことはいいからさっさと行け！」

俺は荒瀬先輩に即され、シャベルを担いでカーテンを伝って降りた。シャベルは重いが遠野のほうがはるかに重い。

俺は、危なげなく中庭に降り立った。

上を見ると伊草が降りてくるところだった。

ここで、問題が起こった。

1、 俺は下にいる。

2、 伊草は上にいる。

3、 伊草はスカートを履いている。

4、 伊草の水色のパンツは丸見えである……。

伊草はこの状況に気付いていないようでゆっくりと降りてくる。形のいい臀部が揺れた。

俺は、伊草の尻から視線を逸らすことができなかった。

「ふう、到着つと。って、直以、どうしたの？ 鼻息荒いわよ？」

「い、いや。なんでもない」

俺は顔面に手を当て、伸びた鼻先を隠した。

ふと横を見ると、隣の教室に隠れていたやつらもカーテンを使って降りてきているようだった。なにやら危なっかしい。大きく揺れているし、カーテンも1枚だけだ。

「おゝい、麻里ちゃん、直以くん！」

俺は、声の方向を見た。そこには、須藤先輩と荒瀬先輩がいた。

残念ながらパンツは見えなかった。

荒瀬先輩は片手で須藤先輩を抱き上げ、片手でカーテンを掴んで、消防団員がすべり棒を降りるようにスムーズに中庭に降り立った。

須藤先輩は荒瀬先輩の腕から飛び降りた。

「もう、直以くん！ 男子高校生が性欲を持って余しているのは仕方ないにしても、あんまり露骨だと嫌われちゃうぞ」

「あの……、その話やめませんか？」

「？ なんのこと？」

「直以くんが麻里ちゃんのお股を見てたこと」

満面の笑みを浮かべる須藤先輩。最初意味がわからず、後に慌ててスカートを押さえる伊草。

須藤清良、この女、雄太並みの爆弾魔ボマーだとは知らなかったぜ……。

「……ねえ、直以」

伊草は、感情を押し殺した声で言った。

この数時間で俺の伊草に対する印象はまるで変わっている。もちろん悪い意味でだ。以前ならなにかされるにしても適当な嫌がらせ程度だったろうが今は違う。俺は今、如実に命の危機を感じているのだ。

「あなたってほら、自殺願望があるわよね」

こきんと、小気味のいい音が伊草の指から鳴った。

俺は、助けを求めるために同性の荒瀬先輩を見た。荒瀬先輩は露骨に俺から目を逸らした。

「その腐った性根叩き直してやるからそこになおれ〜〜！」

反論する暇もなく伊草は俺の腕を取り捻り上げようとした。だが、伊草の動きは止まった。

嫌らしい悲鳴が聞こえたのだ。俺たち4人は悲鳴の方を向いた。

そこには、足を押さえて転げまわる男子学生がいた。隣の教室にいたやつだ。地面にカーテンの切れ端が落ちていることから鑑みるに、カーテンが切れて途中から落下したってところか。

荒瀬先輩は舌打ちした。男子学生の悲鳴に呼応するように、ゾンビどもが俺たちに向かって集まってきたのだ。他の場所からも集まってくるのか、時を追うごとにゾンビどもはその数を増していく。

「……どうするのよ」

伊草は俺の腕を離して言った。俺がなにか言おうとした、その時だった。

俺の顔に光が当たる。俺は眩しさに耐えながら光の元を探った。

それは、鏡だった。遠野が特別棟の1階から鏡で合図を送っていたのだ。

遠野は俺の視線に気づくと鏡を置き、飛び上がりながら両手を振った。

「……あそこまで走るぞ」

俺は特別棟を指差した。直線距離にして100メートル足らずだ。校舎を半周するよりもかなりショートカットになる。

俺は、倒れている男子学生に寄った。押さえている足を見ると、おかしな方向に曲がっていた。素人判断でも、骨折しているのは明らかだった。

「手伝ってくれ！」

俺はただ突っ立っているだけの隣の教室にいたやつらに言った。ひとりは気弱そうな男子学生でひとりは色黒の女子学生だ。2人は、俺の声にも反応せず、ただおろおろするだけだった。

俺は、骨折している男子学生に肩を貸して立たせた。

「いてえよお、いてえよお」

骨折している男子学生は涙と鼻水を垂らして俺に寄りかかってきた。さすがに遠野やスコップとは重さが違う。俺は、踏ん張って骨折している男子学生を支えた。

「伊草、先導してくれ！」

伊草は無言で頷くと、駆け出そうとした。だが、その前にゾンビが立ちほだかった。

伊草はボールペンを取り出すと、ゾンビの目に刺した。ゾンビには視覚も痛覚もない、目潰しはまったく効果がない。俺はそう思った。

だが、伊草はボールペンをゾンビの眼球に突き立てると、ボールペンの尻に右手の平を当て、一気に押し込んだ。ボールペンは眼窩を突き破りそのまま脳に突き刺さる。

ゾンビはそのまま後ろに倒れて、動かなくなった。……俺、本気でこいつとの付き合い方考えよう。

今度こそ伊草は走り出した。隣の教室にいた2人は伊草について走っていく。

「あらあら、君、置いてかれちゃったわね」

呑気に苦しんでいる男子学生の頬を突つく須藤先輩。

「少しは手伝ってくださいよ！」
俺がそういうと、須藤先輩は当然のように視線を荒瀬先輩に流した。

荒瀬先輩は舌打ちすると、だが、骨折した男子学生を担ぐでもなく、俺からシャベルを奪った。

荒瀬先輩はシャベルを肩に担ぐと、ゾンビの群れに向かって歩き出した。

そのまま、片手で5キロはあるシャベルを軽々と振り回した。シャベルは一撃でゾンビの首を跳ね飛ばす。

荒瀬先輩は飛び散る血飛沫を飛び退いてかわし、今度はシャベルを突き刺した。

シャベルはゾンビの胸骨を砕き、心臓に突き刺さる。ゾンビをぶら下げたままスコップを振るい、近づくゾンビを殴り倒す。

「……すっげー」
「強くて、速い。圧倒的だ。」

荒瀬先輩は神話に出てくる英雄のようにゾンビを蹴散らしていく。俺たちに近づくゾンビは、全て荒瀬先輩に倒されていった。

「さ、私たちも行こ」
須藤先輩に声をかけられ、俺は我に帰った。

そのまま男子学生の片足ケンケンの速度で、俺たちは特別棟に向かった。途中で戻ってきた伊草の手伝いでなんとか特別棟に辿り着くと、須藤先輩、男子学生、伊草の順に窓から中に入れ、俺は大声で叫んだ。

「荒瀬先輩！ もう大丈夫です。引いてくださいー！」
「ああ、そうか」

荒瀬先輩は気負うでもなくシャベルを肩に担いで俺たちのところに歩いてきた。

周りにはもうゾンビがいないため、警戒する必要がなかったのだ。中庭には、30近いゾンビの肉片が、荒瀬先輩ひとりによって乱

造されていた。

ひつどく！ 私、馬鹿じゃないですもん

俺は荒瀬先輩が窓から1階の廊下に入り込むのを確認すると、そのまま壁にもたれかかり、床に腰をつけてしまった。さすがに気が抜けてしまったのだ。

「せーんぱい 無事でよかったです」

遠野は笑顔で俺を出迎えてくれた。それとは正反対の怒り顔がある。

聖だ。

聖は、右手を振り上げると、座っている俺の頬を張った。

「……なにすんだよ」

「あんまり心配させないでくれ。いくら私でも見ていないところで勝手なことをされたら手の施しようがない」

今度は泣きそうな顔になって俺を見下ろす聖。

俺は苦笑してしまった。こいつなりに俺のことを心配してくれていたのだろう。

俺は、右手を差し出した。

「悪かったな。だけど、俺には俺なりの勝算があつてやってるんだよ」

聖は一度腕で顔を拭くと、いつもの不敵な表情になり、俺の手を取った。

「それが客観的正確さを持っているかはまるつきり別問題だがね」

俺は聖に引き上げられ、立ち上がった。

「あのう〜」

展開についていけなかった遠野は少し腰を屈めて俺を見上げてくる。俺は遠野の小さい頭に手を置いた。

「さつきは助かったよ。おまえが合図送ってくれなかったらめっちゃくちや遠回りすることになっていたからな。さんきゅー」

「あ、はい」

俺は遠野の頭を撫でた。遠野は髪が乱れるのもかまわず、くすぐったそうに俺のされるがままになっていた。

職員室はどこから集まったのかさらに人数が増えて賑やかだった。50人近い人間が各々の集団を作っている。

これだけの人数がいると、職員室だけでは少々手狭に思えた。

その集団のひとつひとつを回っているのは大地だ。

「まったく、彼は抜け目ないな。自分のシンパを作るのに余念がない」

「大地自身にはそこまでの裏はないだろ。それに今はみんな不安だからな。あいつの社交性でみんな助かってるはずだよ」

「弱っているときに甘い言葉を囁くか。ふむ、これは判断を誤ったかな？ 私も先ほどビンタではなくキスで出迎えるべきだったか」

「煙草臭いキスじゃ逆効果だろ」

俺は手近にある空いているイスに座った。と、そのとき遠野が2年らしき集団に呼ばれた。

「すみません、直以先輩。ちょっと行ってきますね。すぐ戻ってくるから勝手にどこか行ったりしないでくださいよ！」

遠野はそれだけ言うと小走りに2年の集団のところに向かった。

足取りがどことなくおぼつかない。けっこうな疲労が溜まっているみたいだった。

「あいつら遠野の知り合いか？」

「……いや、彼女はよく働くからね。小間使いみたいに都合よく使役されているんだよ」

俺の嫌いなやつらだな。遠野は周りに気を使って奉仕しているのだろう。それを当然として顎で使っているわけだ。とにかく、遠野がそんなやつらの言う事を聞く必要はない。俺は、遠野を止めることにした。

俺は一度下を向いて大きく息を吐くと、勢いよく立ち上がろうとした。その肩を聖が押さえつける。

「梨子くん自身が好きでやっていることだ。私たちがとやかく言うことじゃないぞ。それより今は直以自身が休んでおけ」

俺は、少し考えて立ち上がるのをやめた。聖の俺の肩を抑える力が弱まった。

「なーおい」

その声の主は伊草だった。

伊草は俺に500ミリのペットボトルを放ってきた。俺はそれを片手で受け取る。それは、スポーツ飲料だった。おそらく購買から持ってきた大地たちの戦果だろう。

「お疲れ様。なんとか助かったわねん」

「ああ、お疲れ」

俺は伊草の持っているペットボトルに今渡されたペットボトルをぶつけた。

「……なあ直以」

聖がくぐもった声を放つ。

「別に大したことじゃないんだが……、いや本当にどうでもいい、取るに足らないことなんだぞ」

「なんだよ？ いつになく歯切れが悪いな」

「……なにかあったのか？」

？ 意味がわからない。

「なんで伊草麻里は君を名前で呼んでいる？」

「あゝ、それは本人に聞いてみる」

俺と聖は同時に伊草を見た。伊草はたじろいだが、開き直って大声を出した。

「べ、別にいいでしょ！ 菅田より直以のほうが濁点がないぶん呼びやすいってだけよ！」

それだけ吐き捨てるように言うと、伊草は肩を怒らせて去っていった。なんだったんだ、いつたい？

「ツンデレってやつか？」

その声は雄太だ。俺と雄太はハイタッチをしてそのまま手を握り

合う。

「生き延びやがったか。相変わらずしぶといな」

「当たり前だ。この程度で死んでたまるかよ」

「しかし、俺はひどい目に遭ったぜ。聖のやつがおまえを見捨てたつてんで俺を責めんだよ」

「それはご愁傷さま」

「まるつきり他人事じゃねえか！」

俺と雄太は笑いあった。やっと一息つけた感じだ。

「それで、そっちの首尾は？」

「ん、ああ。2階と3階の防火扉は閉めたんだけど、4階は無理だった。美術室と工作室で授業があったらしく、特別棟内のゾンビの数が多くてさ」

ちなみに、1階の教室棟は購買と学食で、そこは防火扉を閉める必要はなかった。

俺は、聖を見た。

「……まだ及第点には遠いな。とりあえず日没までになにかしらの対策を講じないと」

「日没？」

「うちの学校の電気はソーラーパネルによる太陽光発電だ。夜の電気供給は望めない」

「俺、軽音部で普通に日没後も学校残ってたけど電気ついてたぞ」

「そういうときは電力会社から電気を買っていたんだ。電話も通じない状態では発電所は稼動してないと考えたほうがいい。ああ、それと……」

聖は一度話を切った。

「太陽光発電の弱点はなんだと思う？」

「雲ですす！」

「おお、びつくりした！」

いつ来たのか遠野が聖に飛びついてた。遠野は聖にまわり着いたまま俺に袋を差し出した。

「直先先輩お昼食べてないでしょ？ これ食べてください」

袋の中には3つのパンが入っていた。そら豆パン、クリームパン、ハバネロカレーパンだ。

遠野は俺を上目遣いで見た。

「ごめんなさい。人気のあるやきそばパンとかはすぐなくなっちゃつて……」

自分のせいではないだろうに心底申し訳なさそうにする遠野に俺は言った。

「いや、助かったよ。食いっぱぐれるところだった」

俺はそら豆パンを食べた。遠野は安心したように聖から離れた。

「それで、なんの話です？」

「ああ、そうだった。太陽光発電の弱点は雲だって話だ」

「雲が厚いと太陽光が届きませんからねえ」

「それじゃあ、明日雨が降ったら電気は使えないってことか？」

「いや。必ずしもそうとは限らんのだ」

聖は、俺の肩に置いていた手をどけ、肘を置いてきた。ウェーブのかかった髪が俺の頬をくすぐる。こいつ、髪まで煙草臭いな。

「実は、うちの学校は太陽光ともうひとつの発電で動いている。それは、水力発電だ」

「水力？ 裏の川ですか？」

鈴宮学園の裏手には川が流れている。2級河川で土手もあるそこそこの大きさの川だ。

「昼間の太陽光発電で得た余剰電力を使って、川の水を屋上の給水塔までポンプで引き上げているんだよ。雨や曇りの日にその水を川に放流することで電気を得ているんだ。私に言わせれば大した電力を得られない、ないよりマシ程度の失敗作だがね」

「なんでそんなものを作ったんだ？」

「市の政策だよ。国に環境都市と認められれば予算を獲得できるからね。今ある自然を維持するだけで環境都市を標榜する他の都市よりは頑張っているといえるかもしれないが」

俺はイスの背もたれに寄りかかった。俺の後頭部に聖の胸が当たった。慌てて俺は前のめりになった。

「どおりで屋上に給水塔がいっぱいあったわけですね。それじゃああそこにあるのは川の水で飲料水にはならないってことですか？」
「トイレの浄水や洗濯には使えるから生活用水として無駄というわけではないがね」

俺と雄太、遠野は腕を組んで唸った。そんなものがあつたとは…。
そこで気づく。

「んで、結局なんなんだ？」

「……ああ、そうだったな。君たちには説明が必要だったよな」
聖はわざとらしく俺の頭頂部にため息を吐きかけた。むかつく。

「だから！ 夜に電気を使えないこともないが、それは電力も弱いし非常用だから使えないということだ！」

「結局使えないんじゃないか」

「こいつ、回りくどいんだよな」

「なんか変な臭いしますしね」

「梨子くん……きみまで」

遠野はさつと雄太の影に隠れると舌を出した。

と、そこに遠野を呼ぶ声があった。今度は3年の連中だ。

「は〜い、今いきマス！ すみません、ちよつと行ってきますね」
遠野は疲れのため息をひとつ吐くと、小走りに3年の連中のとこるに向かった。

「つたく使えねえなあ。さつさとペットボトルもつてこいよ！」
下劣たその声を聞いた瞬間俺は切れた。

「自分でやれ！！」

俺の大声で職員室中が黙った。遠野は大きな瞳をさらに大きく見開いて俺を見ている。聖と雄太は、やつちまつたつて顔で俺を見て

いた。

俺は聖を突き飛ばすように立ち上がり、3年のところに歩いていった。

色々溜まっていたってのも否定できない、なにに切れたのかもわからない、だが、こうなると俺は止まれない。

それを知っている雄太も聖も、そして大地も俺を止めなかった。

だが、遠野だけは慌てて俺に抱きついて止めた。

「直以先輩！ 私はいいんです！ 大丈夫ですから！」

「よくねえんだよ！ なにがいいんだよ！」

「みんなひどい目にあつて大変だったんです！ 仕方ないんです！」

「そのみんなの中におまえだつて入つてんだろぅが！！！」

「私は慣れてますから！」

俺の足は、止まった。遠野は荒い息を吐いて続けた。

「私は慣れてますから……大丈夫なんです」

俺は遠野が両親を失っていることを思い出した。

俺はそのとき初めて遠野の内面に触れた気がした。

友人の死に涙していた遠野。

その後すぐに明るく振舞おうとしていた遠野。

『慣れてるから』と言つて遠野は自分の感情を押し殺していた。

俺は、それに気づいてやれなかった……。

遠野は瞳に涙を浮かべて俺を見上げた。

「それに、みんなのためになにかできるって、すごいと思いませんか？ 私はなんにもできないから、少しでもみんなの役に立てるのが嬉しいんです」

遠野は無理やり口元に笑みを浮かべてそう言った。俺も無理に笑みを浮かべて遠野の涙を拭つてやった。

「おまえ、馬鹿だろぅ」

「ひつど〜い！ 私、馬鹿じゃないですもん」
遠野は泣きながらくすくすと笑った。俺もつられて笑う。
ふと見ると、伊草が俺を見ていた。伊草は、俺と目が合つと慌てて視線を逸らした。

これで大団円といかないのが人間関係の面倒なところだ。

「遠野は俺の怒りを納めてくれた。」

だが、俺の怒りを向けられていた3年の連中は納まってくれなかった。

このままでは面子丸つぶれの三下だ。なにかしら自分たちをアピールできる行動を取らなければならぬ。そう考えているのが目に見えてわかった。

3年の連中は立ち上がろうとした。

そのときだった。

大きな影が立ち上がった。荒瀬先輩だ。

荒瀬先輩は面倒臭そうに言った。

「直以。ツラ貸せ」

それだけ言うと荒瀬先輩は職員室から出て行った。

職員室は、ようやくといった感じで雑音が戻ってきていた。3年の連中も荒瀬先輩には逆らえないのだろう、俺に嘲笑を浮かべるだけで俺に対してなんのリアクションもしてこなかった。

俺は、荒瀬先輩がゾンビを蹴散らすのを見ている。喧嘩になつたら勝負にすらならないだろう。

せめて殺されないようにしよう、そう考えながら俺は職員室を出た。

「まったく、馬鹿野郎が。空気をぶち壊しやがって」

荒瀬先輩は職員室の出口で待っていた。なぜか苦笑を浮かべている。

「それで、どこ行くんですか？」

「……部活棟だ」

「部活棟？」

「使えるもんを調達に行くぞ」

俺は気の抜けかけた身体に気合を入れ直した。

「俺をしめるんじゃないんですか？」

「あん？　なんで俺がそんなことしなきゃなんないんだよ。それより、後ろの2人も来んのか？」

俺は、後ろを振り返った。そこには、雄太と遠野がいた。

「おまえら、なんでいるんだよ？」

雄太は小声で言った。

「おまえが荒瀬先輩に殺されたら俺が聖に殺されるだろ？」

遠野はやはり小声で言った。

「だって、直以先輩、殺されちゃうかと思っただんですもん」

俺も小声で言った。

「……腹の減っていない虎は大人しいんだよ」

「今はどうなんだ？」

「たぶん大丈夫だと思う」

「なにくつちゃべってんだ！　行くのか、行かないのか？」

「行きます！」

俺たち3人は声を揃えて言った。

と、ちよつと訂正させる必要がある。

「遠野はお留守番」

「なぜですか！？」

「部活棟にはゾンビがいるんだよ。危ないだろ」

遠野は眉間に皺を寄せてたこ口を作った。かわいいけどそんな顔しても駄目なものは駄目だ。

だが、荒瀬先輩は鶴の一声を発した。

「おめえ、遠野って言ったか？」

「はひいいー！」

遠野は背筋を伸ばして答えた。

「おまえもついてこい」

「はひいいい」

「ちよつと、荒瀬先輩、なに勝手に決めてんですか！」

俺は荒瀬先輩の前に立った。

「なんだ、文句あんのか？」

「ありますよ。いくらあんだでも譲れないもんがこつちにはあるんだよ」

しばらく荒瀬先輩は俺を睨みつけた。俺は、突き飛ばされそうになる眼光を歯を食いしばって耐えた。

と、急に荒瀬先輩は無愛想な顔を崩し、俺に笑みを向けた。

そのまま俺と肩を組み、雄太や遠野に自分の表情が見えないように俺の額と自分の額をつけた。俺と荒瀬先輩は身長差がかなりあるので、ほぼ覆いかぶさられる感じだ。

「あいつはさっきの渦中にいたやつだぞ。職員室には居づらいだろうが」

「だけど……」

「それにあいつの顔を見る。疲労が浮かんでんだろ。職員室にいたら回りにこき使われて休まらねえんだよ。あいつはおまえの傍にいたほうが休めるんだ」

「だけど、部活棟にはゾンビがいます」

俺がそう言うのと荒瀬先輩は俺の胸に大きな拳を当てた。

「おまえが守るんだよ」

荒瀬先輩は俺の胸を押して突き放した。

「本来だったらおまえが気付かなけりゃいけないことだからな」

荒瀬先輩は、話は終わりとばかりにひとり俺たちに背を向けて部活棟に向けて歩き出した。

「なに話してたんだ？」

「……いや、人生の教訓をちよつとな」

雄太は俺の言った意味がわからないようで頭の上に？を浮かべて

いた。

心地いい敗北感。

荒瀬宏。

年齢差でたつたひとつ上なだけとは思えない人だ。

小癩なことに、この人は俺のことにも気を使い、職員室から連れ出してくれたのだろう。

俺は、どうやってこの人をへこましてやろうか考えて、頬を緩めた。

「あのう、直以先輩？」

遠野は、俺の袖をひっぱり、上目遣いで俺を窺っていた。俺は、遠野の腕を引いた。

「なにやってんだ、行くぞ、遠野、雄太！」

「！ はい！」

「お、おう」

俺は、俺たちはひとり先に行く荒瀬先輩を急いで追いかけた。

ひっど〜い！ 私、馬鹿じゃないですもん（後書き）

タグに「環境」を追加しました。意味は環境思想や環境問題。それと、語源となった中国の城塞都市の、壁の内側です。

雄太との会話

学校つてところは探してみると結構な凶器が転がっているもんだ。野球部の金属バット、剣道部の木刀、ゴルフ部のアイアン。

「つと、この部屋はこんなところか？」

雄太はキャディバックに入るだけのアイアンを入れて言った。

「ゴルフボールって使えないですかねえ？」

遠野はゴルフボールを手の平の上で転がしていた。俺はそれを摘み上げた。結構な硬さだった。

「うーん、使えそうな気もするんだけど、使い方が思いつかないなあ」

伊草あたりならきつと想像も付かない凶暴な使い方をするんだろうが、俺には使えそうにないな。

遠野は俺に背を向けて再び棚を物色し始める。

俺は窓から外を見た。

満開の桜が風に舞い散っている。

春の美景だ。数時間前、ゾンビどもがはびこる前だったらきつと目にも留めなかった景色。

「あゝあ、いい天気だな」

雄太は俺の隣に座り、窓を開ける。

生暖かい風とサクラの花びらがゴルフ部の部室内を旋回した。

俺は花びらを追って部室内に視線を移した。

「そついえば荒瀬先輩は？」

「園芸部の部室に用があるってひとりで行ったよ。なんかそれがあの人の目的っぽかったな」

まあ、荒瀬先輩ならひとりでも平気だろう。

部活棟には当然だがゾンビどもがいた。だが、そのゾンビどもは荒瀬先輩に倒されていった。

ゾンビの髪を掴み、そのまま片手で外に放り捨てるところを見たとき、俺たちは絶句してしまった。

荒瀬先輩は俺たちの安全を確保してから別行動をした。なにも言わないが、ちゃんと俺たちのことを考えてくれていたわけだ。

遠野は四つん這いになり、棚の下のほうを漁っていた。

化粧といえばリップ程度の地味っ子はスカートの丈も短くなく、お約束のパンツ丸見えはなかったが、小さな尻は左右に揺れていた。セクシャルというよりはどこか小動物って感じで和む光景だ。

「あいつは一生懸命だなあ」

俺と一緒に遠野の尻を見ていた雄太が小声で言った。俺も小声で答える。

「必死なんだよ」

「必死、かあ……」

雄太は、少し考えて言った。

「俺には無理そうだ」

俺は遠野の尻から目を離し、雄太を見た。雄太は驚いて俺を見返してきた。

「なんだよ、俺、なにか変なこと言ったか？」

「ああ、ロッキンローラー青井雄太のセリフじゃねえだろ、それ」

「おまえは俺をどんな目で見てるんだよ」

雄太は俺から目を逸らした。

俺は、言った。

「自分の人生に自分の命を賭けるなんて当たり前だろ」

雄太はその言葉に覚えがあったのか、渋い顔をした。

あれは去年の秋から冬の、季節の変わり目のときのことだ。
当時の俺はバスケット部を辞めて、特にやることもなくて、それで、常に苛々していた。

聖と一緒に煙草を吹かし、ニコチンで自分の感情を制御していた頃だ。

常に不機嫌な俺に日頃友人関係にあつたやつらも自然と離れていき、俺は孤立していった。

授業と授業の合間、俺は特になにをするでもなく教室を観察した。部活していた当時だったら寝て過ごすこともできたが、部活を辞めて体力の余っている俺は、寝ることもできなかったのだ。

結果、やることもない俺が自然に始めた行動だった。

そこで俺は青井雄太を知った。

こいつは、わざと周りに嫌われることをしていた。わざと神経を逆撫ですることを言い、わざと対立を煽るようにする。

おそらく、集団の中になれば気づかないだろう。だが、集団の外にいた俺には気が付いた。

雄太の言っていることは全面的に正しく、また、雄太が示したように集団はまとまっていくのだ。

ちよつとした行き違い、趣向の違いによる対立。それらの問題が発生すれば雄太は自分から首を突っ込み、かき乱す。そして、問題を解決する。雄太の疎外という副作用を残して。

「おまえ、なにやってんの？」

ある日の放課後、たまたま居合わせた雄太に俺は聞いた。

おれの言葉を理解してかしないかで、雄太は答えた。

「さあな。俺にもよくわからないよ」

「ただのマゾかよ。それとも自己犠牲に酔ってやがんのか？」

「どつちでもないな。強いて言うなら、俺はエゴイストなんだよ」
雄太はそう言って爽やかな笑顔を俺に向けた。

「地球の裏側で餓えている子供のことなんかは知ったことじゃない。だけど、目の前で俺がなんとかできる問題ならなんとかしたいだろ？」

「自分を悪者にして、か？」

「それが最善なら。ほら、俺って不器用だからどうしてもそうなっちゃうんだよ」

「おまえのは不器用じゃなくて間抜けってんだよ」

俺は、笑った。雄太もつられて笑った。

それから俺たちの交友は始まった。自然に俺たちのところに聖も来るようになり、俺たち3人はつるむようになった。

雄太の問題ごとに口を出す性格は変わらなかった。俺と聖も雄太を手伝うようになった。

結果俺たち3人は校内で嫌われていくが、正直そんなことはどうでもよかった。

俺と聖の手伝いは校内だけだった。校外での雄太の行動は目も届かないしそこまでは知ったことじゃない。

俺と聖の手伝いは、自分に損のない、プライベートを阻害されないレベルで、というのが暗黙の了解だった。

だが、そんなことを言っていられないことが起こった。雄太が、大学の空手部とかいう連中に囲まれたのだ。

後に知ったことだが、そのときは、女絡みだった。

雄太は見た目だけはファッション誌のモデルが即務まるほどいい。当然言い寄ってくる女も多いが、雄太はいつものように毒舌で返すか無視する。

そうされた女の一人が逆恨みして知り合いの男に制裁を頼んだと
のことだった。

俺が駆けつけたときには手遅れだった。すでにリンチは終わって
おり、実行者は影も形も見えなかった。

俺はぼろ雑巾のようにうずくまる雄太に言った。

「おい、生きてるか？」

「……なんとか」

雄太は仰向けに寝転がり、青タンの浮かんでいる顔で笑みを作っ
た。俺も笑みを浮かべ、胡坐を掻いて座った。

「つたく馬鹿が。いつかこうなると思っていたぜ」

「俺も……」

「そのうち殺されるぞ」

雄太はそれを聞くと、血の混じったつばを吐いて笑った。

「いいな、それ。命がけかあ」

「笑い事じゃないだろ」

雄太は仰向けで寝転んだまま、笑いを収めて、それでも口元には
笑みを浮かべて、それである言葉を言ったんだ。

「自分の人生に自分の命を賭けるなんて当たり前だろ」

雄太は右腕を折り、肋骨と頬骨にヒビが入る怪我をした。

だが、本人自身はあつけらかなとしたもので、入院もせず1日休
んだだけでいつも通り周りから嫌われる日々を続けた。

本人曰く、骨折のせいでギターが弾けないのが唯一悔しいと言っ
ていた。

空手部員と逆恨みした女がどうなったのかは俺と雄太は知らない。
だが、推察はできる。

聖の吸う煙草の銘柄が良質のものに代わり、羽振りがよくなった
理由はなんだったことだ。

俺はゴルフ部の部室内に入り込んでくる桜の花びらを指で摘まんだ。息を吹きかけると花びらは舞い、どこかに消えていった。

雄太は天井を見上げて言った。

「くだらないことを覚えてるなあ」

「あのときの気概はどうしたんだよ。命を賭けるんなら、今なら不足ないだろ？」

雄太は目を閉じた。言葉を選んでいようで、しばらく無言だったが、やがてゆっくりと口を開いた。

「俺は、死んだんだ」

瞳を開け、微笑を浮かべ同じ言葉を繰り返す。

「俺は死んだんだよ」

「……どういう意味だよ」

「直以。おまえが軽音部に入ってきたとき、俺の足元に転がっていたゾンビを覚えているか？」

「……いや」

「あれ、俺の彼女」

俺は、なんて答えればいいのかわからなかった。

雄太に彼女がいたことにも驚きだが、その彼女がすでに死んでいるのに、俺はどう反応すればいいのかすらわからない。

ふと見ると、遠野の尻も揺れが止まっていた。あいつ、盗み聞きしてやがるな。

雄太は言った。

「最初、ゾンビどもがうちの学校を襲い始めた頃、俺と数人の軽音部員は授業をさぼって部室で管を巻いていたんだよ。だけど、だん

だん騒ぎが大きくなってきて、特別棟から部活棟にもゾンビが入ってきて……。それで、何事かって廊下に出てゾンビどもに襲われて……」

雄太は俺から視線を外し、下を見た。

「俺たちは慌てて部室に逃げ込んだんだ。だけど、そのときに俺の彼女はすでに噛まれていた」

雄太は目を閉じた。俺は雄太から視線を外し、泣くの見ないようにしてやった。

「しばらく苦しんで、俺の彼女はゾンビになって他の部員を襲いだした。何人かは彼女に噛まれてゾンビになり、他のやつは部室から逃げていった。たぶん、逃げたやつらは外でゾンビに襲われたんだろうな。悲鳴が聞こえたから」

生暖かい風が部室内に吹き込んだ。ゆっくりと、雲が太陽を隠した。

「彼女は俺も襲ってきた。俺は、俺は……」

雄太は、震える声で言った。

「彼女を殺した」

俺は、なにも言えなかった。どんな慰めの言葉も安っぽく思えず、雄太自身も慰めなんて求めていないだろう。

「俺の、青井雄太のアイデンティティなんて明確なものはないけど、だけど、俺はあのとき死んだんだ」

雄太は顔を上げた。

「それから、血の赤以外の色が全部抜け落ちた。血だけはやけに精彩でき。ギターにペンキで塗りたいみたいにかびりついてるんだよ」

雄太は涙に濡れた目を拭い、声調を一段上げた。

「色がわからないんなら音だっと思ってさ。俺はアンプにギターを繋いで、かき鳴らしたんだ。本当に死ぬつもりでな」

あのときの演奏は、そういう経緯だったのか。

「ゾンビが群がってきて、もうすぐ俺は喰われて死ぬ。そうなるは

ずだったんだ。だけど、おまえが部室に駆け込んできた。その瞬間、俺に色が戻った。俺は思い出したんだ。俺は彼女を失ったけど、まだおまえが、直以と聖がいたんだってな」

雄太は急に話の内容とはまるつきり逆の悪そうな笑みを浮かべ、俺の手に握られているゴルフボールを取った。そして、それを緩やかな弧を描くように投げ、遠野の尻にぶつけた。

「ぎゃひひひん！」

遠野は飛び上がって立ち、スカートを押さえて、なぜか俺を睨んだ。

「いや、今の俺じゃないぞ」

遠野はそれでも俺を睨んでいた。だが、その瞳には揺らぎがある。盗み聞きしていたことがばれていて、気まずいのだろう。

「梨子、安心しろよ。おまえに聞かれたくない話なら直以と2人のときに話したよ」

遠野はきよんととして雄太を見た。

「梨子にも俺の話を聞いておいてもらいたかったってことだよ」

「うっ、そんなこと言われてもこんな重い話、消化できませんよ」

眉を寄せる遠野の顔を見て、俺と雄太は声を上げて笑ってしまった。

雄太は笑っている。こいつは強いな、俺は素直にそう思った。

「もう！ 笑う人にはいいものをあげませんよ！」

「いいもの？」

遠野はいたずらを思いついた子供のような笑みを浮かべると、眼前にそれを差し出した。

「じゃ〜ん！！ 板チョコでーっす！」

「板チョコ？ 食べれるのか？」

「大丈夫ですよ。賞味期限は来月ですもん」

「……駄菓子の賞味期限って長いよな。来月賞味期限って相当長いこと放置されてたんじゃ」

「食べないんですかあ？」

「いや、食べる食べる」

遠野は嬉しそうにチョコを3等分して俺たちに渡した。

チョコは口の中で甘く広がり、疲れと一緒に溶けていった。

「ん〜、おいしい 荒瀬先輩には内緒ですよ」

「あん？ 誰には内緒だつて？」

遠野は比喻ではなく30センチほど飛び上がった。遠野の背後に

は、荒瀬先輩が立っていた。

荒瀬先輩は遠野が胸元で抱えているチョコの銀紙を見て苦笑した。

「別に取らねえよ。そろそろ戻るぞ」

俺は木刀やバツクを詰めたボストンバツクを持ち上げ、雄太はアイアンを詰めたキャディバツクを持ち上げた。

廊下に出ると、荒瀬先輩は1袋20キロはある農薬袋を肩と脇に担ぎ、山岳部の登山用バツクパツクをぱんぱんに詰めた状態で背負っていた。俺はひとり先に行く荒瀬先輩に並んだ。

「タイミングがよすぎますね。あんたも盗み聞きしてたんですか？」

「ふん、さあな」

荒瀬先輩は否定も肯定もせず、まるで荷物など持っていないかのような足取りで廊下を歩いていった。

「あのう、直以先輩」

遠野は俺の袖を引っ張る。

「私もなにか持ちますよ」

「そうだ、なあ」

俺は辺りを見渡した。遠野の体格では山詰めของボストンバツクは持てないだろうし、かといって手ぶらではこいつの心が休まらない。このときには俺は、遠野梨子が放っておかれるよりなにかしらを言いつけられているほうが嬉しいことを知っていた。

俺は手近にある部室を覗いた。

そこはサバゲー部だった。

俺はアサルトライフル式のモデルガンを一丁にガス缶、それに、

先ほど目星を付けていた銀玉の入った箱を小さめのバツクに入れて遠野に渡した。

遠野は嬉しそうに両手でバツクを受け取り歩いていった。

雄太が俺の隣に並ぶ。

「俺を生き返らせたのは直以、おまえだぞ。俺は、おまえのために生きてやるよ」

俺は雄太を横目で見た。

「重いなあ。俺はおまえを背負わなくちゃいけないのか？」

雄太は笑みを浮かべた。

「まさか。おまえは俺のことなんて振り返らないで先に行け。俺は、必死におまえの後についていくから」

「必死に、か」

俺も笑みを浮かべ、雄太と拳をぶつけあった。

「なにしてるんですか〜？ おいてっちゃんいますよ〜」

「当面はおまえの後より梨子の後を急いで追いかけたほうがよさそうだな」

「ああ、そうみたいだ」

俺たちはご機嫌にバツクを振り回す遠野のところに、小走りで向かった。

進藤紅登場！！

職員室はなにやら騒然としていた。机やイスが運び出されているのだ。

「やあ直以。どうやら無事だったようだね」

煙草を啜えた聖が寄ってくる。

「聖、これ、なにやってるんだ？」

「須藤清良の発案だね。寝床の確保をしようということになったんだ。ついでだから机は階段部分に集めてゾンビが入ってこれないようバリケードにしてもらっているんだよ」

「そうか。それで、その須藤先輩は？」

「女性陣を引き連れて学食に行つたよ。今日の昼用に解凍した食品があるはずだから、今日の夕飯はそれにしようと言つてな」

ゾンビ騒動が起こつたのは4時間目の最中だったからな。なんにしても暖かい飯が食えるのはありがたい。そう思っていると、荒瀬先輩が慌て出して聖に詰め寄つた。

「なんで止めねえ！」

「なんで止める必要がある？」

荒瀬先輩にまるでびびらない聖もすごいが、荒瀬先輩の慌て方も尋常ではなかった。

荒瀬先輩は大きな舌打ちをすると荷物を床に投げ出し、大股で1階にある学食に向かつた。……なんなんだ、いつたい。

「それで、君たちの戦果はどうだったんだい？」

「ボチボチつてところかな」

俺と雄太は木刀とアイアンを取り出した。遠野もバックから荷物を取り出そうとするが、チャックが喰っているようで開けられないで四苦八苦していた。

と、俺たちは荒瀬先輩の荷物が目に入った。

農薬袋にはSと書かれていて、バックパックにはキャンプ用の木

炭が入っていた。それを見て雄太と聖は嘔き出した。

「これはなかなか面白い。雄太の発案か？」

「いや。荒瀬先輩の発案だな。しかし聖。これだけ材料が揃っているなら、好き嫌いは言えないんじゃないか？」

「残念ながらこれだけでは十分とはいえないな。酸化剤も欲しいし実際に使うのなら起爆剤になるものも欲しい。ああ、せっかくだから塩素酸カリウムも混ぜたいなあ。だが、やはり私は理論は知っていても実際の調合に関しては素人だ。直以」

まあ、どんなに偉そうでも聖は俺たちと同じ16歳だしなあ。そんなことを考えていると、いきなり話を振られて俺は少々慌てた。

「なんだよ」

「小峰卓也はどこだ？」

「小峰？ 誰だっけ？」

「君が担いで助けた骨折した男だよ。科学部部长だ」

「あいつ、そんなプロフィールがあったのか。そういえばどうしたっけ？」

「彼なら私が保健室に運んだわよ。そんな名前だったのね」

そう言ったのはどこからか来た伊草麻里だ。こいつ、近くで俺たちの話を聞いていたのか？

「そうか。雄太、農薬袋をひとつ持ってきてくれ」

「了解、っておも！ 荒瀬先輩、これを2つも持ってたのかよ！」

聖は片手で木炭の箱をひとつ持ち、雄太は農薬袋を肩に担いでよろけながら聖の後についていった。

俺と伊草は無言で2人が階段を下りていくのを見守った。

と、背後で歓声が上がった。

「開いたあ、ってあれ？ 直以先輩。聖先輩は？」

遠野はバックを開け放ったまま、きよろきよろとしている。こいつ、まだやってたのか？

伊草は目敏く遠野からバックを奪うと、中身を取り出した。

「へえ、モデルガンか。よくできてるじゃない」

なにと比べてよくできているのかは怖くて聞けない。伊草は俺と遠野に構わずにバツクを漁った。

「弾は……、これね。うっわ、極悪」

伊草は銀玉の入った箱を取り出した。箱はずしりと重い。この銀玉、銀メッキなどではなく、真正正銘の鋼鉄製なのだ。箱にはでかでかと人に向けて撃つのは禁止とある。

以前、これで野良犬を狙って射殺するという事件があった。サバゲー部の部室でこれを見つけたとき、犬が殺せるならゾンビにも利くかと思っけて持ってきたのだ。

伊草はモデルガンを持ったまま職員室の奥に向かった。俺と遠野もなんとなくついていく。

伊草は、窓枠に膝を立てて座った。スカートがめくれ、白い太ももが露わになる。……なんか俺、こいつのパンツ見てからこいつを女として意識し出した気がする。

俺の邪念は甲高い銃声と一緒にかき消された。伊草が引き金を引いたのだ。

校門の外にいるゾンビが弾けるように倒れた。が、しばらくするとそのそのと起き上がった。

眼下を見ると銃声に反応したゾンビどもが集まってうろついていた。

「いまいち軌道が安定しないわね。それに威力も弱い。直以、あんたこのまま使うつもりだったの？」

「いや、ガス圧上げて使うつもりだったけど。使えなさそうか？」

「ガス圧？ この缶ね。直以、このモデルガン。私がもらっわね」

「ああ……」

もともと俺のじゃないし。その言葉は飲み込んだ。

伊草はモデルガンをバツクにしまうと、職員室から出て行った。

「ねえ直以先輩。今の人、誰ですか？」

「……俺の天敵」

自然に出た言葉だったが、遠野は納得したように深く頷いていた。

その後、俺と遠野は別行動を取った。

遠野は職員室の掃除だ。

職員室の死体は窓から外に捨てていたが、べつとりと飛び散った血糊が残っていた。聖曰く唾液や血でも感染するらしいので、イスや机を運び出してだっ広くなつた職員室を掃除して血糊を落とすことにしたのだ。

周りを見渡すと、一部の例外を除いて全員がなにかしらのことをやっていた。じつとしていることに耐えられなくなつたのだろう。

あの中なら遠野ひとりが働かされるということはないだろう。そう思い、俺は中庭に出た。

中庭では、教室に立て籠もっていた連中がなんとか脱出しようとしているのが見て取れた。連中は俺たちがやったのと同じようにカーテンを使ってなんとか中庭に下りようとしていた。

だが、あまりうまくいっていないのが現状だった。

カーテンを伝って下りるには自分の体重を支えられる程度の握力が必要だ。運動部の男子ならなんとかあったが、文化部の女子では少々厳しい。

それに、運良く下の階に降りられても、そこにゾンビがいることもあった。そうなるとゾンビに捕まって喰われるか、慌てて落死するかどちらかだった。

俺は手の開いている男子学生数人を捕まえて避難誘導を手伝わせた。皮膚にも、先ほど職員室で大声を上げたことで俺は不良として認識されたい。男子学生たちは嫌々ながらも従ってくれた。

とりあえず隣同士の教室にいるやつらは合流させ、4階の女子から順番に降下させる。自力で下りられない女子はカーテンを脇下で

吊るし、上で複数の男子学生に支えさせてゆつくりと下の階まで下ろさせる。

それを4階が終わったら3階、3階が終わったら2階と順次実行させた。

まるで出来の悪いパズル。

どうやって下りるかを説明するのに時間もかかったし、恐怖で動けない女子や自分を先に下ろせという男子の反発にも時間を喰った。まあ、男子の場合は勝手に下りて来いって話なんだが。

「まったく、もどかしい！」

俺は落下した学生を担架で運ぶよう指示を出しつつ、中庭に集まってくるゾンビにアイアンを叩き込んだ。アイアンは鉄パイプや消火器より軽かった。扱いやすいという長所もあるが、俺の膂力程度では1撃で倒せないという短所もあった。

俺はなおも向かってくるゾンビの、先ほどと同じ位置にアイアンを叩き込み、倒れたところで後頭部にもう一発ぶち込んだ。

「直以先輩、最後のひとりが中庭に下りました」

「ああ、お疲れ様。悪いね、面倒ごとに付き合わせて」
振り返ってみると、1年の女の子がいた。

ものすごい美少女だった。わずかな乱れもないショートカットに造形美じみた整った顔。制服を崩しもせずに着こなしている。

少女は、わずかな身じろぎもせず俺を見ている。口角を下げ、にこりともしていなかった。

この少女の造形美は、伊草のように化粧や小物で着飾ったものは違った。職人がそうなるように計算して作ったような感じだ。

完璧に美しいのだがどこか現実感がない。

それを助長するように少女は表情を変えなかった。

「直以先輩、ひとつ聞いてもいいですか？」

「俺に答えられることならな」

アイアンを見るとすでに柄の部分が曲がっている。俺はアイアンを放り捨てた。

「なぜ、私たちを助けたのですか？」

「助けた？」

少女は射るような視線を俺に向けた。質問というより詰問しているようだ。

「私は4階の教室にいました。直以先輩の指示で私たちは教室から脱出できたんです」

「ああ、そうだったんだ」

この少女はいつの間にか中庭にいて俺を手伝ってくれていたが、中庭に下りて特別棟に逃げ込まずにいたのか。

「私たちを助けたところであなたに得はないでしょう？ なにが目的ですか？」

「つたく、面倒臭えなあ。なんだっていいだろうが。使命感ってことにしとけよ」

ぶつちやけ疲れている。遠野との気楽な会話ならともかくこんな詰め寄られるような会話を強要されるのは拷問だ。

俺の話は終わりとばかりに少女に背を向けた。少女は構わずに会話を続ける。

「周りから人望を集め、独裁者にでもなるつもりですか「馬鹿かてめえは!？」」「」

俺は間髪入れずに振り返っていた。少女はやはり身じろぎせせずに俺を見返した。

あまりにも的はずれなことを言われて一瞬切れかけたが、俺は感情を抑えた。

そして、言葉を選んで言った。

「なんでそんな面倒なことをやらなくちゃなんないんだよ。それに、俺の誘導に従ったんなら俺がどれだけ不手際だったかわかるだろう？ 向いてないんだよ、大勢を従えたりリーダーシップを取るの」

そういうことは大地に丸投げしてきたから、俺は語尾にそう付け加えた。

少女は俺からわずかに視線を逸らした。なにかを考えているようだった。

俺は、そのまま立ち去ろうとも思ったが、少し気になることを聞いてみた。

「ああ、そうだ。きみは、えっと」

「……私は1年1組、進藤紅しんどうべにです」

「進藤さん。なんで俺のこと直以って呼んでんの？」

「は？ あなたは直以先輩ではないのですか？」

少女、進藤紅の鉄面皮はようやく砕け、少し呆けたような顔をした。

「いや、俺は直以だけど。本名は菅田直以。初対面の1年に名前と呼ばれるのは違和感があるんだけど」

「あ……、すみません！ ずっと直以が苗字だと思っていました！」
進藤さんは今までの無表情が嘘だったように、顔を真っ赤にして腰を90度折って頭を下げた。ようやく、年相応の可愛らしさが現れた。

俺は苦笑して進藤に言った。

「ま、いいけどね。俺が直以であることは間違いない事実だし。これからも直以でいいよ」

「あ、あの。昼間の校内放送で初めて直以先輩のお名前を拝聴したんです！ それで勘違いしてしまっ……」

「ああ、なるほどね」

そういえば初対面の荒瀬先輩も須藤先輩も俺を直以って呼んでたな。

なんとなく、俺の頭の中には右手の甲を左頬に当てて高笑いする遠野の姿が浮かんだ。

せんきよ 告示

ガラス張りの学食は夕日の斜が射していた。

150人を収容できるスペースの半分以上が埋まっている。どうやら生き残った学生のほとんどがここに集まっているようだった。

いつもの日常とまったく変わらない喧騒、窓の外を徘徊するゾンビを除けば、数時間前まで普通にあった日常がそこにはあった。

「なーおい。なにやってんのよん」

声のほうを向くと頭に三角巾を巻いた伊草麻里が厨房の中から俺に手を振っていた。

厨房を覗くと数人の女子が働いていた。伊草はその中のひとりだった。

「どう？ 驚いた？ 有志で学食のものを調理したのよ」

「ああ。温かいものを食べるのは助かるな」

そういえば俺、昼はそら豆パンを1個だけだったなあ。クリームパンとハバネロカレーパン、どうしたんだろう？

「たぶんあんたで最後よ。待ってて。今作ってあげるから。ていうかあんたカツ丼ねん」

「別にいいけど、なんでカツ丼？」

伊草は、少しだけ言葉を詰まらせて言った。

「……肉系の出が悪いのよ」

「……まあ、少なからず生の死体をみんな見てるもんなあ。それよりおまえカツ丼作れるんだ。すごいな」

「ふふん、まいったか、って言いたいところなんだけど、実はレトルトをご飯に乗せるだけ」

伊草は、ドンブリにご飯を盛ると、湯煎して温めたカツ丼の元を乗せて味噌汁をトレイに置いた。

「うちの学食ってレトルトだったのか？」

「私も今日知ったわ。あ、でもご飯はちゃんと炊いたしラーメンとかはちゃんと茹でて作ったのよ？」

それにしたって麺は製麺所から買ってるものだろう。そう思ったが俺は口にしなかった。ボランテアで料理をしてくれている伊草に言うことじゃないと思ったのだ。

俺は伊草に礼を言ってカツ丼の載ったトレイを受け取った。

以前、というのはほんの5〜6時間前までは伊草とは最悪の関係だった。それが、まあ普通の会話ができる程度にはなっている。俺には、それがなんだか嬉しかった。

「おい、直以」

その声は荒瀬先輩だった。俺は須藤先輩と荒瀬先輩の2人だけで陣取っている長テーブルを見た。

そこには大皿に盛られたなにかの肉があった。鶏肉か豚肉かの区別もつかない。とろみがついて照かったその肉は、見方によってはおいしそうと言えないこともなかった。

「おまえ、ここで一緒に食ってけ」

「いや、やめときます」

俺は即答した。荒瀬先輩は険のある目をさらに険しくして俺を睨んだ。だってあんた負のオーラを出しまくってんだもん。

対して荒瀬先輩の横の須藤先輩は後ろにお花畑が見えそうな勢いで幸せに浸っている。なにがそんなに嬉しいんだ？

このテーブルには正反対の空気が、コラボ、というかごっちゃん煮、というか、とにかく混ざり合ってカオスを現出させている。普段だったら男どもが、外見だけは完璧な須藤先輩の周りに群れるんだろうが、この空気には近づけないようだった。

「あ、やっと来た。直以せんぱい、こっちでーっす！」

俺は遠野に呼ばれて聖と雄太のいるテーブルに座った。と、その前に……。

俺は遠野の低い鼻を摘まんだ。

「……にやしゅりゅんでしゅか！」

「おまえのせいで俺は変な勘違いをされている」

まあ、別に名前と呼ばれることに不都合はないんだが、一応制裁はしておかないとな。

俺は遠野から手を離すといいただきますをして味噌汁を一口飲んだ。うまかった。

やっとまともでありつけた食事だ。俺は、無言でカツ丼を貪り食った。

「やれやれ、まるで欠食児童だな」

俺は味噌汁を飲み干して一息ついた。

「うるせえよ。それで聖。おまえらなにやってたんだ？」

「明日の朝にでも試作品を見せられるよ。期待しているといい」

「？　そうか。楽しみしといてやるよ」

俺はどんぶりに残っている最後のご飯粒を食べた。と、そこであることに気づいた。

誰も席を立たないのだ。

学食に来たのは俺が最後というのはどうやら本当のようで、すでにほとんどの学生が食事を終えている。なのに、誰も立ち上がらない。

「なあ、雄太。なんでみんなここに集まってるんだ？」

「なに言ってるんだ？　飯食いに来たんだろ？」

「そうじゃなくて……、食い終わってもまだここにいるだろ？」

雄太は、やっと俺の言ったことの意味がわかったらしく、大きく頷いた。

「ここにいるように言われてたんだよ。須藤生徒会副会長に」

俺は遠野の入れてくれたお茶を啜りながら須藤先輩を見た。

須藤先輩は、俺を見ていた。

そして、立ち上がり、透き通る声で言った。余談ながら、テーブルの上のなにかの肉はなくなっていた。燃え尽きた荒瀬先輩と共に……。

「さて、みなさん。聞いてください。まずはありがとうございます。えっと、これが適当な言葉かはわからないけど、生き延びてくれてありがとうございます」

黄金色に染まる学食内は、静寂に包まれた。そこにいる全員が須藤先輩の次の言葉を待っていた。

「今わたしたちの置かれていた状況は深刻です。ネットも電話も通じない。いつ救援がきてくれるのかもわからない。にもかかわらず、ゾンビは溢れ私たちが脅かしている」

須藤先輩は、言った。

「これから、私たちが生き残るための話をしようと思います」

須藤先輩は人好きのする微笑を浮かべて続けた。

「残念ながら私たちの知っている情報はあまりにも少ない。街はどうなっているのか、世界はどうなっているのか、警察は、政府は機能しているのか？ 今の私たちには確認がとれません。でも、わかっていることもあります。それは、今私たちがとりあえずの安全が確保できていること。私は、ここ、鈴宮高校での立て籠もりを提案します」

俺は聖を見た。

「おまえの入れ知恵か？」

「もともと彼女自身にも腹案として持ってようだがね。まあ、ばらばらでいるよりまとまってくれているほうが私としてもあつかい易い」

須藤先輩の演説は続く。

「もちろんこの中には家族との再会を求める人や、こんなところにいられないと考える人もいるでしょう。そういった人たちはどうかご自由になさってください」

そう言っただけで須藤先輩は学食の出口を細い指で指した。

俺は、舌打ちをした。

「爆弾女め。えげつないな」

「うまい、というべきだよこれは。須藤清良、なるほど、生徒会副

会長を務めるだけのことはある。老獪だな」

須藤先輩の緩やかな口調と外見にほとんどの学生は気づいていないが、従えないなら出て行け、と言っているのだ。

すでに斜陽は傾いている。もし本当に家族に会いたくても、今から出て行くなんて自殺行為だ。さらに、自分の行動を決めかねている連中も多くいるはずだ。そういった自分では動かない連中を自分の支持に取り込んでいる。

今、須藤清良に反対するのは自分から学食を出るという行動を行えるものだけだ。しかも、その行動は学校から出て行かなければならないというおまけまでついているのだ。

須藤先輩はきっかり10秒ほど無言で学食の出口を指していた。その間、学食から出て行った学生はひとりもいなかった。

須藤先輩は手を下ろし、なにかを言おうとした。が、それを遮った少女がいた。確か、先ほどあった少女、進藤紅といったか。

遠野は進藤を見て軽く声を上げた。

「友達か？」

「いえ。確か彼女、入学式のとくに1年代表だった娘です。なんでも入試の成績が一番だったって」

俺は視線を進藤に向けた。口をへの字に曲げた鉄面皮は健在だった。進藤は無言の注目の中、須藤先輩のところまでゆっくりと歩いていく。

「あなたは、1年の進藤紅さんね？ なにかしら？」

「はい。1年を代表して発言させてもらいます。当然ですが、私たち1年は去年この学校にいませんでした。それは、去年の生徒会選挙で投票していないということです。私はここにいるみんながまとまることや学校に立て籠もることに異存はありませんが、支持した覚えもないあなたに無条件で従うことはできません」

須藤先輩は進藤の射るような眼差しをやりわりと受け止めた。

「進藤さん、それではあなたはどうしたらいいと思うの？」

「私は、この場での選挙を提案します」

「っは！」

その吐き捨てるような笑いは俺のすぐ近くでした。

聖だ。こいつ、また面倒なことしようってんじゃないだろうな？

聖は演技がかった動きで立ち上がると、学食中に響くよく通る声で言った。

「民主主義は非常事態には向かない、とはJ・F・ケネディの卒業論文、『イギリスはなぜ眠ったか』の中の一節だが、今この状況が非常事態であることに異論を唱えるものはいないだろう。そして、この状況の中で、外面のいいだけの宴会部長のような人間に我が身を託すものもないだろう。ならば、リーダーはこの状況下で口だけではなく実際に行動した人間であるべきだと思う」

そう言うとき聖は俺を見下ろした。なんか、すっげえ嫌な予感がする。

「直以。きみがみんなをまとめるべきだと私は思う。この中でも、直以に助けられた人間は少なくないはずだからね」

この、ヘビースモーカーが！ 脳みそまでニコチンに毒されてるんじゃないのか？

「それで、直以くん。きみはどう思う？」

須藤先輩の発言で全員の視線が俺に集まった。

俺は、イスに座ったまま言った。

「……気持ち悪い」

俺はお茶を一気に飲み干し、もう一度同じことを言った。

「気持ち悪いんだよおまえら全員。なんだよ選挙って、なんだよリーダーって。なんでそんなこと決めなくちゃなんなんだよ」

進藤は無表情を崩さずに言った。

「これから私たちは救援が来るまで共同生活をする必要があります。100人近い人数で行動するなら、集団のまとめ役は絶対に必要です」

「じゃあなんでその100人は黙ってんだよ」

俺は、立ち上がった。

「喋っているのは立ち上がっている数人だけ。周りはそれをただ聞いているだけ。まるで出来の悪い舞台かスガ子のドラマじゃねえかあるだろう？俺がやりたいとかあいつには任せられないとか。自分のことは自分で決める、それが民主主義だろう！」

しばらく無言の静寂が続く。が、誰かがぼつりと言った。

「俺は……、須藤さんがいいと思う」

声は、次第に大きくなっていく。

「そうだよな。元々生徒会の人だしな。あの人なら安心して任せられるよな」

「まってよ！今さら学校の権威なんて持ち出すの？」

「ここは人望があつて信頼できる人のほうがいいんじゃない……」

喧々囂々、テーブルごとに議論は行われている。俺は、聖を一発小突いて座った。

「この、馬鹿が。なんで俺を巻き込むんだよ」

「きみがまとめ役になれば私たちの生存率も上がるんだよ」

「傀儡なら雄太でいいだろうが。見た目だけはいいいから票は稼げるぞ」

「雄太では駄目だ。彼の広い視野は得がたいものではあるが、それはあくまで個人のもので全体を見渡すものじゃないからね」

「遠野は、俺の空になったコップにお茶を注ぎながら、俺の顔を窺った。」

「直以先輩は、リーダーやりたくないんですか？」

「こいつの視線はまっすぐすぎる。俺は、視線を逸らすためにお茶を一口飲んだ。」

「……向いてないんだよ。さっきだつて教室に立て籠もっている連中に指示を出すのに、自分でも嫌になるくらい手間取ったし」

「でも結局最後にはみんな従ったんですね。それってすごいです」

よ。きつと私じゃあ、いうこときいてくれないもの」

俺は机に突っ伏した。

「違うんだよ。そうじゃねえんだよ」

「なにかトラウマでもあるんですか……ぎゃん！」

言い終わる前に遠野は雄太に頭を叩かれた。それが禁句だと悟ったのか、遠野は申し訳なさそうな顔をしてテーブルに顎を載せて俺を見た。

俺も同じ姿勢になる。自然と、口元に笑みが浮かんだ。

と、突然視覚と聴覚が消えた。

俺は隣の聖を、雄太は遠野をかばうように立ち上がる。

しばしの静寂、太陽光発電が切れたのだとようやく気づいた。

あれほど騒がしかった学食は電気が切れたことで無音が包んでいた。みんな急な事態に話を止めたのだ。

須藤先輩の透き通る声が学食に響いた。

「どうやら時間切れのようね。みなさんもそれぞれの意見があるようですし、明日の朝、また話し合って選挙をしましょう。夜は長いみなさん、自分の考えをまとめておいてください」

それを合図に解散になった。幸いにも月明かりがあるため、足元は明るい。

「いつの間に日が暮れたんだ？ 気づかなかったな」

電池式の掛け時計を見ると、まだ6時半だった。なるほど、日の出までは十分過ぎるほど時間があつた。

「直いくん！」

須藤先輩と荒瀬先輩だ。須藤先輩は眉間に皺を作って俺を睨んだ。「もう、やってくれたわね。選挙なんて面倒なこととして」

「大丈夫でしょ？ あんた見た目はいいから選挙なら勝てますよ」
「それが困るの！ 本当だったら格子整えて直いくんに丸投げするつもりだったのにい！ 選挙で選ばれたら逃げられないじゃない！」

この女、なんて恐ろしいことを計画してやがったんだ？ ふと横

を見ると聖は慌てて俺から目を逸らした。……こいつもグルか。だから進藤の発言にケチをつけていたのか。

「……荒瀬先輩。あんたの苦労、少しだけ分かった気がします」
「……そうか」

荒瀬先輩は遠い目をして、ただそれだけ、ぼそりと呟いた。

せんきよ 告示（後書き）

ケネディの件は嘘です。ていうか昔読んだときはあつたと思つたんですが、確認が取れなかつたので。どこかの誰かと勘違いしている可能性大。まあ、フィクションってことで見逃してください。

突然ですがどぶねずみは車には興味がありません。ですので他少説でエンジンがどうしたハンドルがどうしたといった描写はほぼ読み飛ばしています。

どぶねずみの車と同じように銃に興味のない人もひよつとしたらいるんじゃないかと思いました。

この小説ではそれがストーリー上必要な場合を除いてなるべく小道具はぼかすことにしました。

情景描写があいまいになるし、そういうのが好きな人には不快な思いをさせますが、どうぞご了承ください。

お兄ちゃん

夜が来た。

月明かりのみが辺りを照らす空間、学生たちは思い思いの場所で時間を潰していた。

職員室は部活棟にあった复合宿用の薄い布団が並べられた。小峰卓也ら怪我人は保健室のベッド。その他、部活に所属している連中は部室に籠っていった。

俺と雄太、聖と遠野の4人は職員室の向かいにある図書室で寝ることにした。

窓から外を見ると大きな月と中庭が見えた。

「直以、なにか見えるかい？」

室内に振り返ると、一点の赤が浮かんでいた。聖の煙草の火だ。

聖は、うつ伏せに寝転んで頬杖をついていた。

聖は床に直に寝ているわけではない。聖の下には購買から持ってきたダンボールが敷かれていた。布団代わりだ。

俺は読書用の机を端に寄せて作った空間に自分用のダンボールを敷いて寝転んだ。

俺たちは、足を四方に伸ばし、頭を突き合わせるようにダンボールを敷いた。

「寝煙草は気をつけるよ」

聖はうるさげに煙草を口から離すと、灰皿代わりの空き缶に灰を落とした。

「しかし、これだけだと少し寒いかな。まだ4月だもんな」

「そういうときは、おなかにノートを入れるといいんですよ。紙つてだんだん温かくなるんです」

遠野は寝間着用に替えた大き目のジャージをめくり、白い腹を

覗かせてノートを入れて見せた。少し考えて、雄太は真似をした。

雄太は遠野に聞いた。

「そういえばダンボールの敷布団も梨子の発案だったよな。なんでそんなこと知ってるんだよ」

「私、野宿つて慣れてるんです。ほら、5年前にあつた大地震を覚えていませんか？ 私、あれに遭っちゃったんですよねえ」

「……大丈夫だったのか？」

「はい 私って運がいいんですよ」

「運のいいやつは大地震なんて生涯で一度も遭わないだろ」

遠野は当時のことを思い出したのか、くふふと変な笑い声を上げた。

「気がついたらいろんな建物が倒壊してて、もうすっごいびっくりしましたよ。それで、日が暮れちゃって、寒くておなかが減って心細くて。膝を抱えて泣いているときにホームレスのおいちゃんに助けていただいて。救助隊の方が来てくれるまでの2日くらい一緒にいていろいろ教えてもらったんですよ」

「梨子くんは、そのときにご両親を亡くしたのかな？」

「いえ、両親は飛行機事故で。あのときの生存者は私を含めて4人だけだったそうです」

「……ふむ。なにげにサバイバーだな」

「飛行機事故にも遭って生き残ってるのか。運がいいな」

「だから運がいいやつはそんな目には一度だって遭わないってえの。俺は寝返りをして、毛布代わりのブレザーを肩にかけ直した。」

「そういえば直以も火事に遭っている……、いった！」

聖の言を雄太が蹴りを入れて阻止する。雄太のやつ、助かってはいるが気にしすぎだ。

「直以先輩、火事に遭ったことあるんですか？」

「ああ。小学校のときにな」

「私もありますよ。あれって、火より煙がきついんですよ」

「おまえはどんだけ災害に遭ってるんだ！」

俺は膝立ちになって突っ込んでしまった。遠野はきよとんとした顔で俺を見ていた。

俺と遠野は同時に嘔き出してしまった。つられて聖と雄太も笑い出す。

「あくおもしろい 私、不謹慎かもしれないけど、今がとっても好きですよ」

何度も災害に遭い生き延びた遠野。こいつは、現実が、日常が簡単に変わることを知っているのだろう。

何度も環境の変化を経験したこいつなら、安っぽい慰めは必要ないと思った。

「……なあ聖。この生活はいつまで続くと思う？」

「さて、ここには梨子くんがいるが、プレスリリース向けの生易しい言葉を聴きたいわけじゃないんだろう？」

「ああ。遠野と雄太のいるここでおまえの意見を聞きたい」

俺たち4人はうつ伏せになって顔を付き合わせた。聖は、ゆっくりと口から煙を吐き出した。

「そうだなあ。雄太はどう思う？」

聖は雄太に話を振る。雄太は、少し考えて答えた。

「1ヶ月つてところかな。元の生活に戻れるとは思わないけど、それくらいあれば国がなんとかしてくれるだろう」

雄太は聖から半分の長さになった煙草を奪い、口に啜えた。ちなみに雄太は煙草をやらないから完全なポーズだ。

「1ヶ月かあ。長いなあ。1ヶ月ダンボールの敷布団じゃつらいですよねえ」

遠野は雄太から煙草を奪い、口に啜えた。が、思いっきりむせて涙目で俺に差し出してきた。

俺は受け取った煙草を啜えて、久しぶりに肺まで吸い込んだ。

「まつじいなあ……」

俺は、ぼつんと点った赤を見ながら煙を吐いた。

「それで、正解は？」

俺は聖に煙草を渡した。聖は、1周して戻ってきた煙草の短さを
見て、一口だけ吸うと空き缶の中に放り込んだ。

「救援は来ないよ、永久にね」

聖は自信満々に言ったが、誰も反応しない。俺は頼杖をついて聖
の顔を見ていたし、遠野はまだむせていて、雄太は遠野の背中を撫
でていた。

「私は今それなりに重要なことを言ったんだがね」

「はいはい。とりあえず、根拠を言ってみるよ」

「このゾンビ騒動が人為的に引き起こされたものだからだ」

今度こそ、俺の動きは止まった。遠野もむせりを収め、雄太の遠
野をさする手も止まる。

聖は俺たちの反応に満足したらしく、ゆっくりと新しい煙草を取
り出した。俺はその煙草を取り上げる。

「どういう意味だよ」

「そのままの意味だよ。なに、それほど奇をてらった話でもない。
自然界において、環境のまるで違う世界中の都市で同時多発的にゾ
ンビウイルス、仮にそう名付けるが、それが発生し得るのかという
ことだ。もし起点、グラウンドゼロから感染が広がったとして、時
を計ったように同時に世界中で発症することがあるのか。交通網の
発達した現代でも不可能だろう」

「どこかの誰かが示し合わせて世界中にゾンビウイルスをばら撒い
たってことか？」

「どこの誰だよ、そんなことするやつは」

聖は、きいんと、ジッポの蓋を開けた。

「……シャロウ」

「シャロウ？ 名前か？」

「……いや。直以、メンサがなにをしている組織か知っているか？」

「そういえば知らないなあ」

「実を言うと大したことはしていないんだ。難しい問題を出題し合
い、解き合う、それだけだ」

聖はジッポに火をつけ、俺たちの中心に置いた。火の赤が図書室を照らした。

「その問題の中に、こういうものがあるんだ。『全人類を死滅させるにはどうすればいいか?』」

「そんなの……答えられるんですか?」

「模範解答を上げるなら、今、梨子くんが言ったとおり『解無し』だ。実証するわけにはいかないからね。だが、それではつまらない。私たちは、何年も、何百年も、それこそメンサという組織が出来る前から、難解な方程式を解く数学者のように、答えを求め続けてきたんだ」

聖は、表情を隠すように顔を伏した。

「そんな中で解は大きく2種類の系統に分かれた。ひとつは、地球そのものを破壊するといったような、確実に絶対ではあるが、実行性に乏しいもの。現代の科学力でも、地球の核を破壊する技術などはないからね。この解を支持する連中を『ディープ』という。そして、核戦争やウィルスのパンデミックといった、可能性はあるが、確実性に乏しいもの」

「核戦争では無理ですか?」

「核戦争が起これば人口を激減させることも文明を破壊することもできるだろう。だが、最後のひとりまで死滅させることができるかという点、難しいだろうな。もし地球上の全ての地表を焼き尽くしたとしても、地下にいる人間までは殺せないからね」

「それでも核戦争なら人類を死滅させられるって考えているのが『シャロウ』か?」

聖は顔を上げて頷いた。

「SHALLOW。浅いとか淡いって意味ですよね」

「だが、今の話だとディープだろうがシャロウだろうがどっちでも無理なんじゃないか?」

「だから模範解答は『解無し』だよ」

俺は取り上げた煙草を伸ばし、ジッポで火をつけた。

「それで、おまえのお友達のシャロウくんたちが、こんなふざけた事態を引き起こしたって言うのか？」

「……その可能性は高い」

俺は煙草を啜えた。

「でも、世界中でこんなことができるなんて、メンサってすごい組織なんですね」

「いやいや、梨子くん。メンサが組織立ってこの事象を引き起こしたわけではないよ」

「それじゃあどこかの誰かが個人でやっているってのかよ」

「まあ、個人とは限らないが……。破滅思想はいつでもどこでも存在するものだ。終末を望む極右的キリスト教徒などは自爆テロをするイスラム教徒などとは比較にならないほど狂信的だしね。そういった使い捨ての連中は腐るほどいるよ。ていのいい捨て駒が」

「迷惑な話だな。だけど、正義のアメリカさまや我らが日の丸どのが黙っていないだろう」

聖は俺の啜えている煙草を奪った。

「重要なのはこの事象が現実を引き起こされたということ。考え計画することは誰にでもできる。それこそ服役中の受刑者だろうとお絵かき中の幼稚園児だろうとね。だが、肝心なのはそれが実行されたということだ」

聖は煙草を啜えたまま仰向けに寝転んだ。

「そして、実行されたからにはシャロウはあらゆる手段を使って自説を証明するだろう。核兵器ウイルス兵器エトセトラエトセトラ。その仮定で邪魔になる軍隊や警察機構は真っ先にターゲットにされているはずだ。ああ、電話やネットが通じないというのは基地局やサーバーがすでに破壊されたからなんだろうね」

「……それは全部おまえの妄想だろう？」

「その通りだ。だからこそわかる。もし私がこの事態を引き起こしたのなら、抜かりなどはなく、絶対に人類を死滅させる」

雄太は、中心にあるジッポを取り、小気味のいい音と共に蓋を閉

めた。図書室に闇が戻る。中心には、火の残像がしばらく残っていた。

「おまえなら絶対に救助活動なんかはさせない、か」

「そういうことだ。正確には救助する母体の存在など認めない」

「それじゃあ、私たち、助からないんですか？」

煙草の火が揺れた。

「安心したまえ。この4人だけは私がなんとしても守る。約束するよ」

「アテになるのか？」

「こいつ、今月だけで3回禁煙失敗してるよな」

「3回つて、今月はまだ半分近くありますよ？」

聖はブレザーを頭からかぶった。……拗ねやがった。

「さて、俺たちもそろそろ寝るぞ。明日も色々ありそうだしな」
それを合図に全員が目を瞑った。

秒針が時を刻む音だけが図書室に響く。寝返りを打つ雄太。煙草の煙を吐き出す聖。遠野は膝を抱えて丸くなっている。

身体は疲れているのに眠れない。心が、落ち着かない。

「ねえ、直以先輩。起きてますか？」

遠野は、俺の指を撫でた。

「ん、ああ。まだ起きてるよ」

「職員室では、ありがとございました」

「職員室？　なんかあったっけ？」

「忘れちゃったんですか？　私を、かばってくれたじゃないですか？」

「そんなことしたっけか？」

「もう！ 私はすごく嬉しかったのにい」

俺は遠野に背中を向けた。ぶっちゃけ昼間のことは失態だった。感情に任せて後先考えずに行動したのだから。

今、思い出してみると、俺は今日知り合ったばかりの荒瀬先輩にずいぶん助けられたもんだ。

遠野は、ずいといとダンボールごと俺に寄ってきた。

「ねえ、直以先輩。聞いてもいいですか？」

「……なんだよ」

「なんで私のこと名前で呼んでくれないんですか？ 聖先輩も雄太先輩も私のことを名前で呼んでくれてるのに。なんか、壁を作られているみたいで嫌です」

雄太の寝返りが止まり、呼吸に合わせて明滅を繰り返していた聖の煙草の火が消えた。

俺は、なにも答えなかった。

「……やっぱり、私嫌われてるんだ」

「（う熱っちい）！」

聖のやつ、煙草の火を俺の腕に押し付けてきやがった。幸い、遠野は気づかなかった。

「なんでそう思うんだ？」

俺は火傷のあとに息を吹きつけながら聞いた。遠野は、半身を起こして言った。

「だって！ だって私、なんの役にも立ってないもの。助けてもらって、それでずうずうしくも仲間に入れてもらって……。でも、やっぱりみんなの足引っ張って」

「（痛つてえ！）」

今度は雄太の靴が飛んできやがった。睨みつけると雄太は遠野を指差している。さっさと慰めるってことだろう。この、過保護どもめ。

確かに俺は、俺たちは遠野に助けられている。俺のリップサービ

スひとつで遠野の誤解を解けるなら、俺は躊躇うことなくやるべきだろう。

だが、それをやらないのもまた俺だった。

俺は寝返りを打ち、遠野の顔を下から見上げた。遠野の大きな瞳が月光に照らされている。

俺は、言った。

「今度から俺のこと『おにいちゃん』って呼んだら俺もおまえのこと名前で呼んでやるよ」

たまらず雄太と聖は噴き出していた。

遠野はというと、雄太と聖に気づきもせず、手と手を胸の前で編み、天井を数秒眺めた後、額を付き合わせる距離まで寄ってきた。慌てて逃げようとするが、がっちりその後頭部を押さえられて阻止される。ぶっちゃんけ、犯されるかと思った。

「直にお兄ちゃん！」

「……いや、俺が悪かった。勘弁してくれ」

「なおいお兄ちゃん」

「……」

「ナ・オ・イ！ おにくちゃん」

助けを求めるため、聖と雄太を見た。2人はうつ伏せで震えている。笑いを堪えているのは明らかだった。

視線を遠野に戻す。睫毛の数えられる距離、瞳はキラキラと輝いていた。

誰かが言っていた、諦めが肝心と……。

俺は、尻尾があつたらものすごい勢いで振っているだろう小娘に言った。

「あ〜、梨子」

「はい」

抑えきれずに爆笑する聖と雄太。梨子も花開くような笑顔で俺を見ている。

俺も……、頭を掻きながら後、自然と笑い出してしまった。

せんきよ

朝は心地いい疲労感と共に訪れた。身体を伸ばすと全身から小気味いい音がする。

なつかしい感じだ。バスケットをやっていた頃は毎朝こんな感じだった気がする。

「直におに〜ちゃん。おはようございます」
「ああ、おはよう。それ、生きなんだな」

梨子はすでに寝巻きのジャージを着替えて制服姿になっている。雄太はすでに起きているのか図書室にはいなかった。聖は、いつ脱いだのか下着姿で丸くなっていた。

窓の外を見てみる。昨日に続いていい天気だった。陽光に照らされ、ゾンビがひとり歩いていた。

「直にお兄ちゃん、顔を洗ってきて。その間に聖お姉ちゃんを起こしておくから。そのあと、一緒に食堂に行こ」

聖お姉ちゃん、か。

俺は、いつの間にか敬語を使わなくなっている妹(?)に聞いた。「朝食ってどうなってるんだ?」

「これでも私、さっきまで食堂にいたんだよ。昨日は途中で電気切れちゃったから、まずは食器洗いからして、ご飯炊いて、おかず作って。大変だったんだから」

電池式の掛け時計を見る。時間は7時半を少し回ったところだった。

梨子は俺の退いたばかりのダンボールを折りたたみ端に寄せた。

「8時には昨日の続きを食堂で話すって須藤先輩が言ってたよ」

「そうか。それじゃあちよつと顔を洗ってくる。ああ、聖のやつは低血圧だから、どうしても起きなかつたら引つ叩いていいから」

遠野はそれを聞くと、気合を入れて腕まくりをした。

その声は、俺が図書室を出たときに聞こえた。

「ひいやあああああ！」

その悲鳴は聖のものだった。俺が振り返ると、聖は下着姿のまま廊下に飛び出し、俺に抱きついてきた。

……こいつ、けっこう着痩せするな。

「おい、聖。どうしたんだ？ ていうかその格好で廊下はまずいだろっ」

廊下には数人の学生がおり、その全員が俺たちを見ている。そんな中で下着姿は注目を集めていた。

「なおい、なおい〜」

今までに聞いたことのない聖の声。

ふと見ると、梨子が聖の制服を持ってこっちに駆けてくる場所だった。

聖は半泣きで梨子を指差した。梨子がなにかしたのか？

「なおい、梨子くんが！ 梨子くんが私を萌え殺そうとしている〜」

……は？

「聖お姉ちゃん。もう、そんな格好で廊下出てえ！」

意識してかしないかで、梨子は少し怒り口調（擬音にするなら『ぶんぶん』か？）で聖に制服を差し出した。

「ぴやああああ」

聖は腰砕けになり、俺に抱きついたまま床にへたり込んでしまった。

……なんだかなあ。

俺たちが食堂に着いたときにはすでに8時を過ぎていた。萌え殺された聖がなかなかおとぎの国から帰ってこなかったために、やたら時間を食ってしまったためだ。

聖はようやく『お姉ちゃん』と呼ばれることに耐性ができたのか、

一々悲鳴を上げることにはなくなつたが、とろけそうな顔をしていた。もつとも、聖に言わせればおれも同じような顔をしているらしいが。

ふらふらになっている聖は一足先に雄太の座るテーブルに腰かけ、俺と梨子が聖のぶんの朝食を持っていつてやることになった。

「聖お姉ちゃん、どうしたんだろう?」

「……自覚がない分、たちが悪いな」

俺は食堂内を見渡した。立ち上がって騒ぎまくっているやつがひとりいる。大地の取り巻きだ。

そいつのことを俺はよく知っていた。門倉健司。バスケ部の、ポイントガードだ。

健司は、応援演説のつもりか、やたら声を張り上げているが、周りには無視されていた。

「私、直以お兄ちゃんに入れるね」

「それはやめたほうがいいぜ。そいつ、信用ならない嫌われものだから」

「残念でした。私はその人のことよく知ってるもん。その人は私やみんなを命がけで助けてくれたんだよ」

過剰な評価だなあ。正直重い。

「直以先輩、おはようございます」

声をかけてきたのは、進藤紅だった。昨日とまるで変わっていない様子。にこりともしない鉄面皮も、ブラウスの第一ボタンまで締めてわずかの崩しもなくなりボンをしている制服も。

「ああ、進藤さんか。おはよう」

「進藤さん、おはよう」

「3組の遠野梨子さんですね。おはようございます」

進藤は梨子に軽く頭を下げた。梨子は恐縮して深く頭を下げ返した。

「今から投票による選挙が行われます。私は、誰がリーダーになってもその人に従おうと思います」

進藤はそう言って射るような視線を俺に向けてきた。

こいつは、美人だが無駄に固いな。少しでも笑えばすごいもてると思うんだが。

「それで、俺もおまえと同じように従えって？ 口約束でいいならいくらでもするけど？」

進藤は身じろぎもせず俺を見ている。俺も進藤を見返した。

「……直にお兄ちゃん」

不穏な空気を感じ取ったのか、梨子は俺の袖を引っ張った。俺は梨子に笑いかけた。

「大丈夫だつて、梨子。別に喧嘩しているわけじゃないんだから」と、突然進藤は顔に困惑を浮かべた。

「あの……、少し伺ってもいいでしょうか？」

「ん？ なんだ急に」

「御二人はどういった関係なのでしょう？ 昨日とは呼称が変わっていますか？」

昨日は苗字に先輩だったからなあ。

俺は、アイコンタクトで梨子に合図を送ると、梨子の左肩に左手を置いた。梨子は俺の右腰に右手を当てる。

「実は俺たち、兄妹なんだ。ちよつと面倒な家庭事情があつてね。

今までは隠していたんだ」

「でも、こんなことになつちやつたから、もう隠すのは止めようつて昨日決めたの」

梨子は俺のアドリブについてきている。なかなか頭の回転の速いやつだ。

「そうだったんですか。すいませんでした。安易な好奇心で踏み込んでしまつて」

そう言つて進藤は素直に頭を下げた。梨子は、くふふと変な笑い声を上げると、妙な顔つきを言った。

「でも、血の繋がりはないんだよ。ここ重要！」

人差し指を立てる梨子。その人差し指を、進藤はやんわりと手を

かぶせて折った。

「ひよつとして、私、からかわれていますか？」

「いや、おまえなかなかいじり甲斐があるね！」

俺と梨子は笑った。進藤はいつも以上に口角を下げた。

「……直以先輩。ひとつお願いがあります」

「からかうのはやめろって？」

「私のことは紅と呼び捨ててください。私も直以先輩のことを名前で呼ばせて頂いていますから。さもないと……」

「さもないと？」

「私も『お兄さん』と呼びますよ」

俺は絶句した。梨子は、もう人目もはばからずに爆笑している。

昨日の梨子とのやり取りが作用したのかもしれない。俺は早々に折れた。

「わかった。悪かった、紅」

「それじゃあ私のことも梨子って呼んでね、紅ちゃん」

進藤紅は、急に割って入ってきた梨子に少し驚いた顔をして鉄面皮を崩した。

「わかりました。梨子さん」

紅は俺たちに頭を下げると、その場を去った。

「紅ちゃんって、けっこう面白い娘だったんだね」

「ちよつとお堅いところがあるけどな」

「紅ちゃんって、すごい美人さんでしょ？ 今まで話したことはなかったけど、廊下ですれ違うときとかみんな見てたりしてたんだ。だけど……、いつもひとりでいたんだよ」

「友達がいらないのか？」

「私たち1年はまだ入学して1ヶ月も経っていないから。これから仲のいいお友達とか作っていくんだと思っていたんだけどね」

「それじゃあおまえが友達になってやれよ」

梨子は、少し困った顔をした。

「私も、その、お友達が多いほうじゃないから。どうやったらお友

達になれるの？」

俺は、周りを気にせず大声を上げている健司を見た。

集団が出来ればその中で1人や2人あぶれる奴がでるってのは必然らしい。去年のバスケ部でいうなら、門倉健司は、そういう割りに合わない役を演じている奴だった。

俺はというと、幸い、というべきか、大地と同郷で、社交的な大地のおかげで集団からあぶれることはなかった。

俺は、健司に話しかけた。理由は、まあ、仲間意識ってところだ。同じポジションだったし、これから一緒にやっていく中で、仲良くなりたいと思っただけだ。

俺は、そのときのことを思い出し、梨子に言った。

「まずは相手にうざがられるくらい付き纏うんだよ」

「……うざがられたら嫌われちゃうよう」

「いいんだよ。そのうち、相手のことがわかるから。どこまで踏み込んだら怒るか。なにが好きでなにが嫌いなのか。それがわかったら相手に合わせて付き合うようにするんだ。そのうち、向こうもこっちのことを知ってくれるようになって、そうになったらもう友達だよ」

梨子は眉間に皺を寄せて考え込んでしまった。

そこでふと思う。嫌われ者の俺が友達論を上から語る。とんだお笑い種だった。

俺は、眉間に皺を寄せている梨子の肩を押して朝食をもらいに行った。

投票が始まった。正確には始まっていた。朝食を食べ終わり、トイレに行っている間に大学ノートを4等分して作った投票用紙が配られていたのだ。

須藤先輩の講話やら大地の取り巻きの応援演説があつたらしいが、聞かないで済んだのはラッキーだった。

「さて、誰に入れるか」

横を見ると、梨子は俺の名前を書いていた。ボールペンを伸ばしてぐしゃぐしゃと文字を消す。梨子は頬を膨らませて俺を睨むと、再び俺の名前を書いていた。

俺は大地の名前を書きかけ、途中でペンを止めた。

俺は、須藤先輩を見た。須藤先輩は俺と目が合つと手を振ってくる。それを無視して隣にいる荒瀬先輩を見た。荒瀬先輩は、長テールに足を投げ出し、寝ていた。

俺は、大地の名前を消し、荒瀬先輩の名前を書いた。

投票は、生存した全学生98人で行われた。食堂に來れない怪我人は事前に投票し、食堂ではひとりひとりが投票箱に票を入れる。開票は長テールに並べて目視できるように開示された。

投票の結果はこうだ。

無効票やお友達の名前を書いているのが20票。この票は多くて4票止まりの端数票だった。俺の荒瀬先輩票もここに含まれた。

1位は須藤先輩で36票。順当ではあるがもうちょっと獲得すると思つたんだが。

2位は大地だった。獲得票は24票。昨日の夜も色々動き回つていたようだが、それにしても少ないな。

そして、なんの間違いか、3位は俺で18票だった。どうでもいいことながら、俺に投票した奴らの全員が直以と書き、菅田とは書かなかった。

「結果は出ましたね。それでは救助隊が来てくれるまでのしばらくの間、私、須藤清良が仕切らせていただきます。今後、私のやるこ

とに賛成できないことも出てくるでしょう。そういう時は、遠慮なくおっしゃってください。今を生き抜くために、一緒に頑張ってくださいませよう」

スタンディングオベーション、とはいかなかったが、須藤先輩の演説にはそれなりの拍手が起こった。

「それではさっそくこれからのことを話し合おうと思います。大地くん、直以くん、今から校長室に集まってください。興味のある方もどうぞ、来てください」

「俺も？」

俺は素っ頓狂な声を上げてしまった。雄太が少し呆れ顔で言う。

「当たり前だろ。おまえはけっこうな票を集めたんだから」

「ったく、どこの誰だ！ 面白半分の人に投票しやがって！」

そう言うのと、聖、雄太、梨子の3人は俺から目を逸らした。……

おまえら全員か。

「さて、それじゃあ私たちも校長室に行こうか」

「なんだ、聖も行くのか？」

「当然だ。私は直以派のブレンだからね」

「それじゃあ私たち、直以一派ですね」

「ネーミングが気に食わないが、そういうことだ」

こいつら、人を勝手に祭り上げやがって。

「梨子もついてくるか？」

「うーん、そうしたいんですけど、朝食の後片付けがあるから」

なんかこいつ、敬語がたまに混じるな。

「そうか。それが終わったらさっさとこっちに来いよ」

「はい」

梨子をひとりにしていたら、こいつのお人好しも手伝って使えばしりをさせられるだろう。そう思って言ったのだが、梨子はなにを勘違いしたのかやたらに嬉しそうにしていた。

「雄太はどうする？」

「俺は、パスだ。ソケットの形状がなかなか聖からオーケー出なく

て

こいつ、なんか影でこそこそしてやがるな。

「そうか。それじゃあしばらく別行動だな」

俺は立ち上がった。と、そこで声をかけられた。大地だ。

大地は大名行列のごとく取り巻きを引き連れていた。

「直以、18票も獲得するなんてすごいじゃないか」

「大地、やめてくれよ。俺は迷惑してるんだ。昨日この馬鹿が騒いだせいで下手に目立っちゃまったからな」

俺は聖の頭を小突いた。

「まあ、俺は助かったよ。俺とおまえの票を合わせれば須藤先輩の票を上回るからね」

「……どういう意味だ？」

「？ そのままの意味だけど」

そう言つと大地は取り巻きを引き連れてぞろぞろと食堂から出て行った。

「聖、今の大地の言ったこと、どう思う？」

「深い意味はないよ。彼には即物的な戦術はあっても戦略性はないからね。なんのために群れるのか。なんのために派閥を作るのか。彼に答えはないだろう」

「……だといいがな」

俺は、牧原聖ひとりを引き連れて、食堂から出た。

第一回これからどうしようか会議

校長室は特別棟3階の、部活棟寄りの場所にあった。引き戸式の他の場所とは違う、取っ手のある扉だ。それだけでも普段は俺たち学生には縁のない場所だった。

一步部屋に踏み込めば赤絨毯。ガラス製のテーブルに来客用の皮製のソファ。その奥には重厚な木製の机があり、格子窓からはロ―タリーが見下ろせた。

須藤清良は重厚な机に座り、その後ろでは荒瀬先輩が外を見ていた。

俺は皮製のソファに座った。対面には大地、大地の後ろには10人近い取り巻きが立っていた。聖は俺の後ろに秘書のように立っている。

「さて、直くんも来たことだし、そろそろ始めましょうか」

須藤先輩はそう言った。

「昨日も言ったとおり、私はこの鈴宮高校で立て籠もって救援を待つつもり。それについて2人はどう思う？」

「俺は、問題ないと思います。俺自身も元々そのつもりだったし」

「俺も……、いいと思います。ですが、須藤先輩。ひとついいですか？」

「なにかしら、大地くん」

「今回の選挙で先輩は1位当選したわけですけど。いつまでリーダーでいるつもりですか？ あ、別に不満はないんですけど、少し気になったもので」

須藤先輩は一瞬だけ俺を見て、言った。

「本音で言うなら、今すぐ投げ出して全てをあなたたちに任せたいのだけど、選挙で選ばれた以上、そうも言えないわね。とりあえず、私は3ヶ月、それを目途に色々と推し進めていくつもり。3カ月後

まで私たちが生きていけて、3カ月後も続けて生きていけるような体制を作るの」

「3ヶ月も救助隊が来ないのかよ！」

大地の取り巻きのひとりが発言した。俺と同じクラスのサッカー部のやつだ。

「今この瞬間にでも救助隊が来てくれる、それが理想だけど。現状が掴めない以上、いつ来るかわからない救助隊をアテにするわけにはいかない。だから、3ヶ月先まで救助は来ないという最悪の状況を前提に行動するの」

さすが、というべきか。須藤先輩はそれと感じさせないような威圧感があった。大地の取り巻きは二の句が告げなくなってしまっていた。

須藤先輩は透き通る声を発した。

「それじゃあこれからのことを話し合いしましょう」

「その前に、ひとついいでしょうか？」

その声は、俺の後ろから聞こえた。進藤紅だ。いつ来たのか、俺の後ろに立っていた。そんなところに立っていたら俺の仲間だと思われるぞ？

「手書きで申し訳ありませんが、現在確認できる食料の備蓄量です。今朝、確認しました」

そう言っつて紅は一步前に出て、須藤先輩に手書きの紙を渡そうとした。だが、紙は須藤先輩に渡る前に聖によって取り上げられた。

聖は秒数にして1秒にも満たない時間で書類に目を通した。

「ふむ、悪くない。が、学食のものだけで購買のものが記されていないが？」

「……購買のものは、パンも乾麺も、今朝の段階で根こそぎなくなっていました。おそらく夜のうちに誰かが持ち出したのでしょう」

「と、いうことだそうだ」

聖は俺の肩に手を置き、紙を指で弾いた。紙は、まっすぐ須藤先輩の手元に飛んでいった。

「少し迂闊だったかしら。一晩で購買の食べ物なくなるなんてね」
須藤先輩は机の引き出しから書類を取り出すと、紅の持ってきた紙と並べた。

俺はソファから立ち上がり、机に並べられた書類を見比べた。書式こそ違うものの、書かれている内容はほぼ同じだった。

俺は紅の持ってきた紙を大地に渡し、須藤先輩の取り出した書類を手に取った。

「これは、須藤先輩が作ったんですか？」

「ええ。昨日のうちにね。購買のものもアテにしていたのだけど、無駄になってしまったわね」

書類には、生鮮食料に長期保存のできるもの、冷凍もの、それに米の量で分けられていた。

「……米の貯蔵量がやたら多いですね。なんでですか？」

大地の質問には紅が答えた。

「ここ、鈴宮高校は災害時の緊急避難場所に指定されています。多人数がしばらくの間自炊できるように計画されています」

「ああ、聞いたことあるよ。そうだ、そういうえば地下室に水とか乾パンとかの食料を貯蔵しているんじゃないかなかったっけ？」

あの話ってけっこう有名だったのか？

俺は聖を見た。聖は皮肉たっぷりの顔で俺を見返した。

「ええ。そのことはもちろん知っているわ。でも、地下室は、しばらくは開封しないでおこうと思うの」

「なんでですか？ それがあれば余裕で3ヶ月なんて持ち堪えられると思いますけど」

「だから、よ。余裕があればなにもなくなる。では、食料の備蓄がなくなったら？ 不必要に不安を煽るつもりはないけど、ある程度の緊張感はみんなに持っていてもらいたい」

「そんなことしなくたって救助隊が来てくれるだろう！」

「言ったはずだけど。私たちは最悪の状況を想定して行動すると」
発言した大地の取り巻きは言葉を詰まらせた。

こいつはひよつとしたら、自分の支持する大地のために、須藤先輩にケチをつけようとしているのかもしれない。

「それに、先ほど進藤さんが言ったとおり、ここはこの地域の緊急避難場所です。街からここに逃げてくる人がいるかもしれない。そのことも想定すると、安穩と無駄に時間と食料を貪るわけにはいかないって理解できるわね」

「少しだけ補足しておこう。地下室にあるのは水に氷砂糖と乾パン、それと種類の少ない缶詰程度だ。食料としてはかなりの量になるが、私に言わせれば実に味気ない。3食缶詰と乾パンなどという生活は正直ぞつとしないな」

聖の言葉に全員が押し黙った。

俺は書類を机の上に置くと、ソファに戻った。

「これでやっと本題に戻れるな。じゃあどうするんだって話だ。須藤先輩はどうしようと思っていたんですか？ それとも、今の前ふりはただの問題提起ですか？」

須藤先輩は俺に微笑を向けた。俺は、須藤先輩の瞳の奥が光ったのを見逃さなかった。

「私、園芸部なの」

「……それはつまり」

「鈴宮高校の周辺はみんな知っているわね。学校の裏側、南側に土手と川、部活棟のある東側には公営の運動公園。そして、教室棟のある西側と正門のある北側には1キロ四方に渡って荒地があるわ。その荒地を開墾します」

鈴宮高校は、言ってみれば陸の孤島だ。周囲にはなんにもなく、屋上から眺める街の景色はどこか蜃気楼めいた儂さがある。それを助長しているのが荒地だった。

この荒地は、鈴宮高校全学生の仇敵だった。これのせいで街までやたら遠く感じるし、乾燥した秋には強風が吹くと、まるで砂嵐のように学校全体を包むのだ。

「あんな荒地を畑に使えるんですか？」

紅の疑問に聖は答えた。

「それについては問題ない。ああ、もちろん法律的な意味で、ではないがね。あの荒地は、実は畑なんだ。ただ、農家の人のものではなく、趣味で個人菜園をやっている人に分譲されているのだが」

「そうだったのか。知らなかった。しかし、聖のやつ、なんでも知ってるな。」

「だが、それは無理ですよ。わかって言ってるんですか？」

「直以くん。なぜかしら？」

「ゾンビがいるからです。学校外はおろか、校内ですらゾンビどもは溢れてる。こいつらをなんとかしないと、開墾なんてできるわけないでしょ。」

「ザツツライト」

須藤先輩は俺に親指を立てた。そのまま人差し指を俺に突きつけ、銃を作る。

「さすが直以くん、話が早くて助かるわ。直以くん、大地くん。最初の仕事よ。食料確保と安全の向上のために、校内のゾンビを一掃してください」

須藤先輩は、バキヨンと言って、手で作った鉄砲を撃った。見えない弾は俺の中にある大切じゃないなにかを傷付けた。

話は終わりとばかりに校長室を追い出された俺と大地は、数メートル先にある即席バリケードを見た。昨日職員室の机で作った3階と4階を塞ぐものだ。

外側では、ゾンビがひとりこちらに手を伸ばしていた。

俺は、大きなため息を吐いた。

「あの爆弾女、学校のゾンビを一掃しろだと？ ずいぶん簡単に言ってくれるじゃねえか」

「そうだね。こっちも命がけだしね」

「大地、それだけじゃねえよ……」

俺は、続きの言葉を飲み込んだ。どっちにしたってやらなくてはならないなら、士気を削ぐようなことは言いたくなかった。

俺は大地から視線を逸らし、聖に言った。

「それでどうする？ 作戦は？」

「その前に、保有戦力の確認をしておきたいな。木村、きみはどうするんだい？ 気が乗らないなら直以だけにやらせるが」

俺だけって……。

「やるよ、もちろん。それが選ばれた責務だと思うから」

大地の取り巻きたちも、それぞれがやると言った。聖は嘲笑を浮かべた顔を俺だけに見せた。

「さて、単純計算だが、鈴宮学園の生徒数は500人、生存者は100人。もちろん街に逃げた連中もいるだろうし、ゾンビにならずに死んだ連中もいるだろうから一概には言えないんだが、校舎内には400人のゾンビがいることになる」

「こつちの4倍か」

「大地、人手はひとりでも多いほうがいい。なんとか手の空いてるやつに手伝いを頼めないか？」

「……いや、俺たちだけでやろう。数が増えれば負傷者も増えるから。少数精鋭で行こう」

聖は、俺の耳元で呟いた。

「自分たちのことを精鋭とはね。ものは言いようだな。嫌なことをさせて自分の評価を下げたくないだけだろうに」

「聖、うるさいぞ。さっさと作戦を言えよ」

聖は煙草を取り出したが、少し迷って吸わずに閉まった。どうやら、ジツポは雄太が持っていることに気づいたようだ。

と、そこにタイミングよく雄太が現れる。手には、モップの柄を握っていた。

雄太は意図的に大地を無視して言った。

「直以、聖。会議はどうだった？」

「ま、つつがなく予定通り、と言ったところだね。それより雄太。」

私のジッポを返したまえ」

雄太はポケットから取り出したジッポを聖に放った。俺はそれを空中でインターセプトする。

「雄太。その棒はなんだ？」

「ああ。秘密兵器。なんとか間に合ったかな」

雄太の持っているのはモップの柄だった。モップではない。本来モップがついているところには、電球を取り付けるようなソケットがついていた。

聖は俺を恨みがましげに睨み、雄太からモップの柄を受け取った。ソケットの形状を確認し、なにやら偉そうに頷いた。

「まあいいだろう。しかし、かなり時間がかかったな。私は小峰卓也を過大評価していたようだ」

「そう言うなって。あいつはよくやっているよ。足を複雑骨折しても火薬の調合に成功したんだから」

「……そろそろ説明しろ」
俺がそう言っても聖は振り返るうともしなかった。俺は、舌打ちしてジッポを聖に返した。

聖は、会心の笑みを浮かべて、ウェーブのかかった髪をたなびかせた。

「これは、火薬棒だ。効果は……、見たほうが早いだろう。雄太」
「はいよ」

雄太は聖から火薬棒を受け取ると、ソケットの先に三角錐に模った紙を装着した。

雄太はそのままバリケードの外にいるゾンビの頭部に、槍のように火薬棒を突き当てた。

瞬間、乾いた音が響いた。

ゾンビは頭部を喪失し、ゆっくりと後ろに倒れた。

「ふむ。予想より威力が強いな。もう少し火薬を減らしてもいいか

な」

満足げな聖。俺と大地と大地の取り巻きは言葉を失っていた。

「直以。これは先に火薬を詰めて衝撃で爆発するようにしたものだ。海女が鮫避けにこういったものを使っていると聞いたことがあってね。私なりに設計してみたんだ。昨日の雄太の要望どおり、固い頭蓋骨をこれなら簡単に吹き飛ばせるよ」

「……火薬があるなら遠距離で使える爆弾にすればいいじゃねえかよ」

聖は、大地の取り巻きの言葉に、顔も向けずに答えた。

「理由はいくつかある。まず、これが黒色火薬であること」

「黒色火薬？ 確か花火で使われてるやつだよな」

「そうだ。火薬である以上、危険物であることには変わりないが、殺傷能力という点ではそれほど高くない。痛覚のないゾンビにはほとんど効果はないだろう」

聖は俺にだけ語りかけていた。こいつの悪い癖だ。別に人見知りというわけでもないのに。

「さらに、資源の問題もある。当面は材料に不安はないが、補充が利かない以上、無駄に使うわけにはいかない。そこで登場するのがこのソケットだ」

聖は雄太から火薬棒を奪い、俺に突きつけた。ソケットは、黒い煙を上げていた。

「このソケットの形状はちょっとした自信作でね。爆圧に指向性を持たせているんだ。これによって一方にのみ爆発させることができ、さらに威力も数倍にすることができるのだよ」

「？ そうなのか。すごいな」

「もしどこかの馬鹿が言っていたように爆弾として使うのなら、10倍近い火薬を必要とするだろう。しかも、爆風は四方に飛び、威力も落ちる。そして、これがどこで使われるのか、ということだ」

どこかの馬鹿であるところの大地の取り巻きは、顔の色を変えて聖に詰め寄ろうとしていたが、大地に止められていた。

「まあ、これからするのは校舎内のゾンビ退治だからなあ」
さすがに校内で爆弾は使えないな。

俺は、なおも説明を続けようとする聖を押し退け、雄太に言った。
「それで、これの量産体制は？」

「こんな状況で無理言うなよ。ま、いいところ、昼までに10本つてところかな」

雄太は聖に気づかれないようにそつと俺の耳元で呟いた。

「ぶっちゃけ、連射もできないし、次弾装填もやり方がある。それほど万能ってわけじゃないぞ」

「でも威力はあるんだろ。それなら使い方次第ってことだろ。俺とおまえの」

「ま、そういうことになるかな」

雄太は苦笑を浮かべた。

しかし、10本か。

俺は、大地を見た。

その後ろには、10人近い取り巻きたちがいた。

第一回これからどうしようか会議（後書き）

火薬棒の名前募集！ ていうか本当の名前を知っている人、教えてください。
ください。

長々と説明文が続いて申し訳ありません。無視するわけにもいかな
いんで書いているんだけど、もう少し分散させないといけませんね。
書いているほうとしても面白くないから執筆速度が落ちるし。

中度感染

「ゴーパーク！ 撃ち終わったらすぐに下がれ！ 大地、装填はまだか？」

「もう少し！」

「わかった。多少なら遅れてもいいから確実に。よっし、雄太、行くぞ！」

「おう！」

俺と雄太は金属バットを握ってゾンビの群れに突っ込んだ。

時刻は昼過ぎ、場所は特別棟4階。俺たちは、ゾンビ退治に勤んでいた。

順調、とはいえないものの、俺たちはそれなりに成果を上げていた。

大地の取り巻きをふたつに分け、それぞれに火薬棒を装備させる。前衛が撃ち終わったら後衛と交代し、その合間を俺と雄太が時間稼ぎをするという戦術を取っていた。

飛び掛ってくるゾンビをかわし、すれ違いざまに膝を打って転倒させる。さらに横にいるゾンビのわき腹にグリップエンドで一撃、ヘッドキャップに手を添えて、力づくで押し倒した。

後ろに飛び退き距離を置く。隣を見ると、雄太が荒い息を吐いて立っていた。

「こいつら、バランス悪いな。目が見えないなら当然か」

「油断するなよ。なにやってくるかわからないんだから」

「『こと真剣勝負に置いては確率論は通用しない。確率はパターンを生み、パターンは効率を上げる。だが、1パーセントで死ぬ場合、それがどれだけ高確率かわかるだろう？』」

俺は雄太を見た。雄太の口調は聖を真似たものだった。似ていない癖に、それが聖だとわかるのは、うまいというべきか。

俺は、視線をゾンビの群れに戻して言った。

「そういうことだ。自分の死をパターンに組み込むわけにはいかないもんな。殺されないためにも100パーセントの対応をしないとな！」

俺は手を伸ばしてくるゾンビを小手打ち、そのまま即頭部を殴りつけた。

雄太は狭い廊下内で俺と同士討ちしないように離れて金属バットを振るった。

雄太と戦っていると安心できる。雄太は、友人としてだけではなく、能力的な部分でも背中を任せられるやつだった。

「……俺も見劣りしないようにしないな」

俺は、金属バットをゾンビの口にぶち込んだ。前歯を叩き折り、そのままノド奥を突ききる。ゾンビはもんどり打って倒れたが、ゆっくりと立ち上がった。

「直以、準備できた！」

「よし、雄太、下がるぞ！」

「了解！」

俺と雄太の間を、大地とその取り巻きがすり抜けていく。

破裂音が連続して響き渡った。

視界を覆うほどの黒煙、火薬と血の臭いが廊下中を覆った。

大地は火薬棒を担いでゆっくりと戻ってきた。

「お疲れ、なんとか目処は立ったかな」

「大地、油断するなよ。まだゾンビはいるんだからな」

「大丈夫だろ。だいぶ片付いたんだから」

最初、特別棟4階にいるゾンビは50人を超えていた。が、今は片手で数えられる数まで減っている。

減っているはずだった。

ゆっくりと晴れる視界、その先から、10人単位でゾンビたちが

俺たちに向かっできていた。

「……まだこんなにいたのか」

「教室棟から来たんだろ。火薬を使うだけあって、音がでかいからなあ、それ」

大地の取り巻きは大地の周りに集まる。大地は、取り巻きの誰にも目を向けず、俺に言った。

「直以、どうする？」

正直、楽だった。俺が言っても人は動かない。だが、大地が言えは動く。大地を通して言えば、俺の言葉でも人は動いてくれるのだ。「一度退こう。少し休んで態勢を整えて、それから出直そう」

俺は横にいる雄太を見た。雄太は、荒い息を吐いていた。

大地は、少し考えて、なにかを言おうとした。が、それを遮った影があった。健司だ。

健司は大地と俺の間に立つと、俺に言った。

「直以、後は僕たちに任せて君は休んでいてよ。戦い方はわかったから」

僕たち、ね。

自己と他己。

俺は大地一派ではないが、それでも、以前の仲間にはつきりと線を引かれたのには、少しだけ胸が痛んだ。

周りを見ると、大地の取り巻きは健司の言葉に頷いている。

大地が従っているために自分たちも従っていたが、普段から一緒にいない外様の俺の命令には反感を覚えていたってことだろう。

言葉を詰まらせている俺の肩を雄太が手を置いた。

「ここは任せようぜ」

俺はなおも逡巡したが、雄太の疲労を見て、頷いた。

「……わかった。大地、健司。後はおまえらに任せるよ」

俺は、先ほど雄太が俺にやったように、健司の肩に俺の手を乗せた。

「無理はするなよ。やばくなったら逃げるんだ」

健司は、俺の手を払った。

「直以。いつまで仕切ってるんだよ。君はとっくにバスケット部を辞めているんだよ。バスケット部のポイントガードは、僕だ」

「菅田、うぜえんだよ。さっさと消えろ」

そう言ったのは同じクラスのサッカー部のやつだ。それを合図に、大地たちは俺に背を向けた。俺は、結局こいつの名前を知らないままだった。

悲鳴は、俺と雄太が階段に差し掛かったところで聞こえた。

俺と雄太は一瞬だけ顔を見合わせ、今来た廊下を全速で戻った。

「なにがあった!」

誰も俺に答えなかった。答える必要もなかった。

サッカー部のやつがゾンビに馬乗りになれ、腕を噛まれていたのだ。

このまま殴りつけても金属バットでは同士討ちになる。俺は、ゾンビの脇腹を蹴りつけた。

だが、俺の足は空を蹴った。

「な!?!」

ゾンビは間を置かず、今度は俺に飛び掛ってきた。それを雄太は金属バットで迎え撃つが、大振りで振られた雄太の金属バットは、やはり空を切った。

ゾンビが、かわしたのだ。

「早い、な」

「それに俺たちの攻撃をかわしている。目が見えているのか?」

ゾンビは、きよろきよろと辺りを見回し、俺に目を止めた。まるで、猿だ。可愛らしさなど欠片もないが。

猿ゾンビは、歯茎を剥き出しにすると、俺に飛び掛ってきた。今まで戦ってきたゾンビも、飛び掛けることはしてきた。だが、それは、飛びつくだけ、といった動きで、予備動作も大きく、かわすのに苦労はなかった。

だが、このゾンビがやってきたのは、助走をつけ、勢いを増し、抱きついてくるタックルだった。

俺は仰向けに倒された。

迫る口に金属バットを噛ませて防ぐ。

猿ゾンビは、首の力だけで俺に近づいてきた。

「貸せ！」

上で雄太の声が聞こえる。雄太は大地の取り巻きから奪った火薬棒を、猿ゾンビに突きつけた。

猿ゾンビは火薬棒の柄を片手で掴み、雄太の攻撃を止める。雄太が引いても押しても、火薬棒は動かなかった。

猿ゾンビは片手に火薬棒を押さえたまま、俺に顔を近づけた。黄ばんだ白目と臭い鼻息が間近に迫った。啜えられたバットからよだれが垂れそうになる。

瞬間、猿ゾンビが弾けた。

猿ゾンビは急に俺と雄太から飛び退き、額を押さえている。

俺は、床に転がっている鋼鉄製の銀玉を拾って立ち上がった。

そのまま背後にいる人物に声をかける。

「伊草、いつ来たんだ？」

「今よ。なんか尋常じゃない悲鳴が聞こえたから急いで駆けつけたんだけど。べ、別にあんたを助けに来たわけじゃないんだかね！」

俺は、一歩前に出て俺の左に並ぶ伊草を見た。手には俺から奪ったモデルガンがある。

左に雄太が並ぶ。

「それより、見るよ」

俺は雄太の指差した猿ゾンビを見た。

猿ゾンビは、額を押さえて蹲っていた。

「まさか、痛覚が残っているのか？」

「伊草、そのモデルガンの威力は？」

「ぼちぼち。人に対してならそれなりの効果はあると思うけど。ゾンビに対してはそれほどではないわね。ま、頭蓋骨にヒビくらいなら入れられるかな」

そう言っつて伊草は引き金を引いた。乾いた音と共に猿ゾンビの身体が踊った。

狭い廊下内、猿ゾンビは被弾しながらも迫ってくる。

「つち！」

伊草は膝立ちになり、モデルガンを単発から連射に切り替えた。

「雄太、俺がゾンビの足を止めるから、火薬棒でトドメを刺してくれ。頭に拘らなくていい。痛覚があるならどこでも聞くはずだから」

「わかった」

「伊草、援護してくれ」

「やってるでしょ！」

俺は、一歩前に出てゾンビに対峙した。

前傾姿勢、自分の呼吸を確認し、相手の呼吸を読む。

靴越しに床を踏みしめ、ふくらはぎに力を込める。

そして、俺は動いた。

猿ゾンビが動き出す直前、大きく息を吐き出した瞬間を狙い、潜る。

ゾンビの左脇をドライブ、一歩で抜き去り、そのまま、腰に抱き

つく。

間を置かずに伊草がモデルガンを乱射、猿ゾンビは避けようとするが俺をぶら下げたままでは無理だった。

顔の前に腕を上げ、銀玉を防ぐ。

塞がった視界、雄太は、すかさず火薬棒で猿ゾンビを突いた。

乾いた破裂音。俺の頭上で肉片が舞った。

俺は、飛び散る血肉を避けて、猿ゾンビから離れた。猿ゾンビは胸部に大きな穴を開けて、ゆっくりと後ろに倒れた。

俺は、伊草と雄太を見た。

「アドリブにしてはうまくいったかな」

「いや、上出来だろ」

「ええ。悪くはなかったわねん」

俺たちは、笑顔で右拳を軽くぶつけ合った。が、俺たちにそれ以上の談笑はなかった。

再び、悲鳴が上がったのだ。

俺たちは悲鳴の上があった方角を見た。そこには、大地たちが集まっていた。

大地の取り巻きを掻き分け、悲鳴の中心を見る。

そこには、鉄パイプを振り上げた大地と、先ほど猿ゾンビに噛まれたサッカー部のやつがいた。

大地は、鉄パイプを振り下ろした。サッカー部のやつはわずかに身をかわし、鉄パイプを肩で受けた。

響き渡る悲鳴、サッカー部のやつは転げ回った。

俺は、止めるために一歩前に出ようとした。それを雄太が止める。

「なんだよ、雄太」

「止めるなよ。もしあいつがやらないんだったら、俺かおまえがやっていたところだ」

伊草は大地から視線を背けた。これは、昨日俺が伊草の友人にやったことと、同じだった。

俺は視線を大地に向けた。

大地は、泣いていた。

「すまない。噛まれた以上、俺はおまえを殺さなくちゃいけないんだ。すまない……」

「ちょ、ちよつと待ってくれよ。俺は、まだ生きてるしゾンビにもなっていない、ぐぎゃ」

大地は鉄パイプを振り下ろす。何度も、何度も……。

大地は、サッカー部のやつが動かなくっても、しばらくの間、鉄パイプを振り下ろし続けた。

ことが終わり、大地は血塗れの鉄パイプを廊下に放り出した。大地の取り巻きは、誰も大地に声をかけない。

俺は大地に声をかけた。

「大地、少し休め。一度退いて立て直そう」

「……いや、大丈夫だ。このままゾンビどもを一掃する」

大地は目を涙で赤くして、俺を見た。

「直以、悪いけどこのまま付き合ってくれ」

「ああ。わかった」

大地はそつと俺に近づいた。そして、俺にだけ聞こえる声で言った。

「俺は逃げないよ。こんな状況だ、やれることをやらなくちゃな」

そう言っただけで大地は俺から離れ、周りに指示を出した。

「健司、下の階に行っただけで手の空いているやつらを連れてきて。俺の名前を使っていいから」

「え、でも……」

「いいから。武器も人手も足りないんだから、少しでも効率よく行

動しないと。日が暮れるぞ」

効率、か。

被害が出ないように少数でやろうと言っていた大地。効率のため
大人数でやると言う大地。

どっちも同じ大地だった。

「直以、やるぞ」

俺は、大地に声をかけられ、我に帰った。

「ああ。基本はさっきと同じ戦術で行くぞ！　だが、さっきみたいに動きの早いやつがまだいるかもしれない。十分に気をつけるよ！」
大地は大きく頷くと、ゾンビを睨みつけ、振り返らなかった。

俺は、そんな大地に危うさを覚えた。

中度感染（後書き）

今回発覚！ この作品のゾンビは呼吸します！ まあ、血が飛び散ってる時点で心臓が動いているのはばれていたんですけど。
一応言っておかないと日和ってしまいそうなので宣言しておきます。
うちのゾンビは生きています！

私のことを好きになってください

「直以、もう大丈夫だ、早く戻れ！」

「わかった！」

俺は大地の声を背中で受け、目の前のゾンビを前蹴りで押し倒した。

振り返ると、すでに門は8割方閉まっていた。俺は、折れかけた木刀を投げ捨て、全力で走った。

速度を落とさず一気に飛び上がり、門を越える。

俺が地面に転がるのと、門が重厚な音を立てて閉まるのはほぼ同時だった。

しばらく、自分の乱れた呼吸だけを聞く。

「つしゃ」

誰かが呟いた。それが合図だった。

大歓声が沸きあがった。

飛び上がるもの、奇声を上げるもの。

校門前にいる30人以上の男子学生は、それぞれの方法で喜びを体現した。

まるで原初の祭り。俺も、みんなと同じ気持ちだった。

3日目の午前中、俺たちは学校内から全てのゾンビを駆逐した。

幸い、といえるのかどうかはわからないが、犠牲は昨日死んだ大地の取り巻きひとりだった。

「直以お兄ちゃん、お疲れさま」

日差しが陰る。梨子が寝転んでいる俺を笑顔で覗き込んでいた。

こいつの笑顔は癒されるなあ。

梨子は冷たいコンクリートに寝そべっている俺の額に、冷えた缶

ジュースを置いた。

「これ、どうしたんだ？」

「清良先輩がみんなに配れって」

ふと見ると、いつ来たのか須藤清良先輩はひとりひとりに労いの言葉をかけていた。抜け目のないことで。

「ここでエンドロールが流れれば、それなりにいい映画ってことで終われるんだけどな」

俺は、そんなことを口にしながらプルタブを開いて缶ジュースを一口飲んだ。

「それで、そっちは？」

梨子は俺の傍でしゃがみ、少し困った顔をした。

「正直、あんまり進んでないんだ。みんな、死体には触りたがらなくて」

学生たちの行動は、大きく2種類に分けられていた。

ひとつは、男子を中心にしたゾンビの一扫。

そして、もうひとつは、死体の処分だ。

ゾンビ発生からすでに3日が経っている。初日からの死体は、すでに腐敗が始まっていた。衛生面でも無視できることではなかった。

「直以くん、お疲れ様」

俺は、梨子の細い肩に手を置いて、立ち上がって須藤先輩に答えた。

「須藤先輩。今こいつに聞いたんですけど、死体処理はあんまり進んでないみたいですね」

須藤先輩はでかい胸を揺らして、わずかに首を傾げた。

「うーん、そうなのよ。もともと死体運びなんて重労働だし、男子はこっちで仕事してまし」

俺は、缶ジュースを一気に飲み干した。

「わかりました、やりますよ。大地たちは少し休ませてやってください。あいつなら、しばらくしたら自分から動いてくれるから」

「わかったわ。今、死体運びは宏ひとりがやっている状態だから。手伝ってあげて」

「了解しました」

俺は須藤先輩に背中を向けて歩き出そうとした。それを梨子が袖を引っ張って止めた。

「直にお兄ちゃん、少しは休んでください!」

「おまえが休めよ。どうせ周りにこき使われているんだろ?」

「私は……、これからお昼作らなくちゃいけないから」

「じゃあ、うまい昼飯、楽しみにしてるよ」

梨子はなおも袖を離さない。俺は梨子に笑いかけた。

「大丈夫だって。俺は適度にさぼってるんだから。劣等生をなめんなって」

「……嘘ばかり」

梨子は小声でそう言って、ようやく袖を離した。

俺は、梨子の柔っこい髪を撫でて、その場を去った。

荒瀬先輩はすぐに見つかった。中庭で、死体を運んでいたのだ。

荒瀬先輩は、上はタンクトップ、額にタオルを巻いた格好で、山積みの死体を戸板に乗せて引きずっていた。……なんちゅう馬鹿力だよ。

荒瀬先輩は俺を見つけると、死体の運搬を中断した。

「おう、おめえか」

「大変そうですね。手伝いますよ」

「そうか。倉庫に運搬用の一輪車があるから使え」

俺はこの人みたいな怪物じゃない。2人も3人も同時になんて無理だから、ひとりずつ運ぶことにしよう。

「そういえば死体って校庭に運ぶんでしたっけ?」

「ああ。そこで今晚火葬するらしい」

「400人分の死体を燃やすって、そんな火力用意できるんですか

ね

「大丈夫だろ。おまえんところの煙草臭い女が動きまわっていたから」

聖が計画しているのなら、まあ大丈夫か。

「学校の外で安全が確保できているんなら埋めちまったほうが早いんだがな」

荒瀬先輩はそう言うと、大きなあくびをした。

「寝不足ですか？」

「……ああ、少しな」

俺はこの人の寝不足の理由を知っていた。

この人は、夜中になにか起こらないように、見張りをしてくれているのだ。

誰かがやらなくちゃいけないことを黙ってやって、昼もこうして働いている。

その上で自分のことは周りには話さない。

この人は、完璧に黒子に徹していた。

「今晚からは俺が代わりますよ。学校内のゾンビは全部片付けたから、俺でも務まるでしょう？」

「いらねえ気を使ってんじゃねえよ。おめえにはおめえの仕事があるだろうが。代わるってんなら、他のやつも混ぜて交代制にしろ」

ぶっきらぼうにそう言っつて、荒瀬先輩は死体運びを再開した。

「言い方さえ気を使ってくれば、それなりに感謝できただけだな」

俺の言葉に、荒瀬先輩は振り返らずに軽く肩を竦めて見せた。

俺は運搬用一輪車に死体を乗せた。確認の必要もないことながら、元は生きた人だ。軽くても40キ口はあるし、重ければ100キ口を超える。

確かに死体運びは重労働だった。

死体は、すでに傷口から腐り始めていた。肌の色も変色し、ゾン

ビとの見分けもつかない。

ひよっとしたら動くんじゃないか、そんなことを考えながら死体の集積場所である校庭に移動した。

そこには、進藤紅がいた。

紅は、なにやらノートに書き込んでいたが、俺を見つけると中断して無表情のまま寄ってきた。

「直以先輩、お疲れ様です。そちらはもう片付きましたか？」

「ああ、なんとか。もう学校内にゾンビはいないよ。それで、おまえはなにやってたんだ？」

紅は、無表情を崩して口を歪めた。

「……死体漁りです」

「死体漁り？」

「はい。ベルトのバックルや財布の硬貨などの燃えないものを取り外して、身元がわかるものがあればチェックしています」

「そうか。それも必要だよな。どうもつかってました」

「心が麻痺するには少し早いですよ。まだ、日常が終わってから3日ですから」

「終わった日常ね。そうだよな。本来だったら勝手に死体処理したら死体遺棄だもんな。他にも器物破損に窃盗、それに、殺人罪、か」

「もし直以先輩が罪に問われることがあったら、私も共犯と一緒に刑務所に入って差し上げます」

「うーん、嬉しいけど、刑務所は男女別だろ？ あんまり意味ないなあ」

「なるほど。そうかもしれないね」

そうやって紅は眉間に皺を寄せた。こいつ、ひよっとしたら今の冗談を本気で受け取っているのかもしれない。

俺は、校庭を見た。すでに運び込まれた死体がずらりと並んでいた。

異様な光景であるはずなのに、俺の中で感慨にふけるものはなにも沸きあがらなかった。

俺は一輪車から死体を降ろすと、並んでいる死体の横にそつと置いた。

紅は死体に手を合わせると死体漁りを再開した。ベルトを外し、財布を取る。それから取り出したものを、クーポン券にいたるまで全て紙に記録していく。手間のかかる作業だった。

「紅、俺もそれやろうか？」

紅は作業の手を休ませずに言った。

「いえ、直以先輩は死体運びをなさってください。そちらのほうは人手は足りてないですから。それに、午後からは梨子さんがお手伝いしてくれると約束してくれましたから」

梨子のやつ、付き纏い作戦を実行しているようだな。そうとわかれば援護射撃だ。

「よかつたらあいつと仲良くしてやってよ。あいつ、友達少ないらしいから」

紅は、作業の手を止めて無表情で俺を見た。

「私のほうが仲良くしてもらっているんですよ。それに、梨子さんに友達が少ないなんてきつと嘘です。梨子さんは、私にはない不思議な魅力がありますから」

「そうか？」

「ええ。その証拠に、入学式で1年代表を務めた私より梨子さんのほうが知名度は高いですし……」

まあ、あいつはちょこまかと色んなところでこき使われてるからなあ。

「それに直以先輩も、まるで本当のお兄さんのように梨子さんのことを心配なさっているでしょう？」

「……」

そんなつもりはないんだけどな。だが、聖も雄太も梨子には甘々だしなあ。

ふと見ると、紅は無表情を崩して俺の顔を覗き込んでいた。こいつ、からかいやがったのか？

進藤紅、まるつきり読めないやつだ。

夜、俺は屋上でひとり、黄昏ていた。

部活棟の先にある校庭では煌々と炎が上がっている。あそこでは、告別式が行われているはずだ。

須藤先輩が身元のわかった死体の名前をひとつひとつ読み上げると、ただけのものが、それなりに峻厳な空気が流れている。

目に痛いほどの赤が夜桜を照らしていた。

ようやく、一息ついた。

学校内からゾンビを駆逐し、死体も火葬した。

ぶつちやけるなら、このまま学校内に籠っているなら、これ以上やることはないってことだ。

もちろん食料は無限にはないし、学校内で一生を過ごすわけにもいかない。明日からはまた新しいことをやるんだろうが、それでも俺はひとつの区切りを感じていた。

たった3日。だが、この3日でいろんなものが変わり、そして変わらなかった。

俺は、柵に寄りかかって真上を見た。

黒い空、点在する星、威圧的な月。

深い夜。

俺は夜気を胸一杯に吸い込み、思い切り吐き出した。

「わあああああああ！！！」

意味なんて持ち得ない獣の咆哮。俺の心の底にある瘡しこみは、治癒の兆しすら見えなかった。

と、そのとき背後で音がした。振り返ると梨子が蹲すまっていた。

鑑みるに、どうやら窓から屋上に出ようとして、落っこちたらしい。

俺は苦笑して梨子のところに歩いていった。

「こんなところでどうしたんだ、梨子」

「直にお兄ちゃんこそ。みんなは校庭にいるのにどうしたの？」

俺は手を差し出して、梨子を立たせてやった。

「別に。俺はひとりになりたいときは屋上に来るんだよ」

梨子は俺に背を向け、跳ねるような歩調で柵の前まで進んだ。

「……今ね、由紀ちゃんにお別れしに来たんだ」

「由紀ちゃん。確か一緒にいた子だっけ？」

「うん。私は直にお兄ちゃんに助けてもらえたけど……」

「……すまない」

梨子は、凄い勢いで振り返った。

「なんで謝るの!？」

俺は、梨子の横を通り過ぎ、柵にもたれた。

「俺がもう少しうまいことやっていれば、由紀って子も助けられたかもしれない」

梨子は、そっと俺の背中に抱きついた。

「直にお兄ちゃんは頑張ってるよ。運命なんて言葉は使いたくないけど、あのとき、本当だったら私も死んでたはずなんだもん。それを、直にお兄ちゃんは助けてくれたんだよ」

俺は身体を動かし梨子を振りほどくと、身体の向きを変えて梨子を見た。

「俺がもっとうまいことやってたら、もっと大勢救えたかもしれないんだよなあ」

「直にお兄ちゃん」

「自分でも駄目さ加減に辟易するよ。昔もそうだった。今もそう。俺は聖みたいに頭もよくないし、雄太ほど気もきかない。それでも身体は動かない。俺には行動しかないのに、それすらも出し惜しみするんだもんなあ」

「直にお兄ちゃん！」

梨子は、俺の袖を引つ張り、強い眼差しで俺を見上げていた。

「……悪かった。つまらない愚痴を聞かせたな」

「ううん。愚痴ならいくらでも聞くよ。でも、直にお兄ちゃんが今言ったことはおかしいよ。だって、私も含めて多くの人が直にお兄ちゃんに助けてもらったんだもん。直にお兄ちゃんは頑張ってるよ」

梨子は俺から視線を外さずに、そう言った。

俺は、背中から柵に寄りかかった。

「梨子、ありがとうな。聖も雄太も、俺も、正直おまえにはすごく助けられてるよ」

「そんな、私はなにも……」

そこで梨子は気づいた。いつの間にか立場が逆になっている。

梨子は、俺の袖を離すと俺と同じように柵に寄りかかった。

「直にお兄ちゃんは、私のこと、冷たい女だと思ってるよね」

「冷たい女って。おまえはそんなイメージじゃないだろ」

「嘘。だって、私、親友が死んで間もないのに、普通に笑えるんだよ」

梨子は、少し悲しげに俺を見ていた。栗色のおかつぱ頭が夜風に揺れた。

「俺は殴り殺したゾンビの顔をひとりも覚えていないぞ。同じ学校に通う連中だ。顔を合わせたやつも、言葉を交わしたやつもいただろっ」

梨子は、くすりと笑った。

「私には直にお兄ちゃんの気持ちがわかるよ。私とは少し違うけど、わかる」

梨子は、視線を暗い空に向けた。

「私の両親が飛行機事故で死んだのは知ってるよね。私、そのとき、すごく泣いたんだ。でも、なんの解決にもならなかった。お父さんもお母さんも生き返らなかったし、無理やり転校させられた学校での生活も始まって、どんどん流されて……」

梨子は、大きく空気を吸い込むと、言った。

「だから、悲しい気持ちは後回しにすることにしたんだ。由紀ちゃんのとくもそう。抑えられる感情は、全部後回し」

「それなら、もういいんじゃないか？」

「え？」

「おまえがそうやって来たんなら、それを否定する気はないけど。今は俺とふたりきりだ。我慢なんてしなくていいだろ？」

梨子は、俺の顔を見た。

「俺も、雄太も聖も、おまえに我慢なんてしてもらいたくないしな」

「でも……」

「俺たちは、おまえに甘えられたいんだよ」

梨子は、柵から身を離れた。

「直にお兄ちゃん、優しくすぎるよ。優しくすぎる」

梨子は、わずかに屈み、晴れやかな顔で俺を見上げた。

「直にお兄ちゃん、ひとつお願いがあります」

俺たちの間を、どこからか飛んできた桜の花びらが舞った。

梨子は、告白した。

「私のことを好きになってください」

予想外の言葉に反応できない俺。

梨子は、にっこりと破顔した。

「私はこれから多分、ううん、絶対、直にお兄ちゃんのことをどんどん好きになっていく。だから、直にお兄ちゃんも私のことを好きになってください。私も、嫌われないように、好きになってもらえるように頑張るから」

俺は、梨子から視線を逸らして言った。

「……善処しましょ」

「ん」

梨子は一步前に出て俺に近づいた。

「それで……、さつそく、甘えさせてもらっていいかな」

俺が答えるより前に、梨子は俺の胸に飛び込んできた。そのまま俺の胸に顔を埋める。

「私、これから泣くね」

「……わかった」

俺は、梨子の背中を軽く撫でた。

それが合図になった。

慟哭。むじやく

梨子は哭ないた。

両親が死んで、親友が死んで悲しくないわけがない。

少女はその感情をずっと胸の奥に閉まっていた。

それを今、思いっきり放出していた。

俺には、いや、多分他の誰にも、梨子のずっと溜めてきた悲しみを受け止めることなんてできないだろう。

だから俺は、ただ、梨子を抱きしめてやった。

強すぎず弱すぎず、少しでも梨子の助けになれるように、俺は梨子を優しく抱きしめ続けた。

やがて梨子は泣き疲れて眠った。

俺は梨子をおんぶすると、少し寒くなってきた屋上を後にした。

扉を開け、校舎に入る。

「もう窓からじゃなくても屋上に入れるって教えてやらないとな」

俺は、安らかな寝息をたてる妹姫を背負って、聖と雄太の待っている図書室に向かった。

私のことを好きになってください（後書き）

どうも、どぶねずみです。

2日目以降は早足になりました。丁寧に書いているわけでもないのに進みが遅いこの小説。

最近、シチュエーション次第ではキャラクターを走らせていくだけでも引き伸ばせることに気づきました。一応キャラクター小説を書いているつもりではないので、いろいろ自重させていただきました。

例えば、大地の取り巻きが死体をぞんざいに扱っているのに、告別式では号泣するシーンなどは全カットです。

さて、とりあえず、ここまでが学校開放編ってことで一区切りになります。

次回はお友達ファイルをまとめて、その後は武器取得編が始まります。

懲りずにお付き合いくださいませ。

お友達ファイル1〜13（本編ではありません）

お友達ファイル1

菅田直以（すがたなおい）

主人公。元バスケット部員のポイントガード。指揮統率、戦略眼共に高かったが背が低いことでスタメンから外され、以来コーチと対立して部を辞めた。

基本的に非常の人であり、馴れ合いや予定調和を嫌う。結果周りとは対立しやすく、孤立しがち。

お友達ファイル2

まきはらひじり
牧原聖

メンサに所属する天才児。作中ではウンチクと解説担当のキーパーソン。非法なデザイナーズチルドレンであり、本人もそのことを知っている。

親も教師も馬鹿ばかりであり、こんな世の中に価値はないとひねくれた嫌世観を持っていたが、直以と雄太と知り合い、自分にはくだらない問題で四苦八苦している2人を心地よく思うようになっていく。

直以には恋愛感情を抱いているが、男女の関係になるより、今の友人関係のほうがいいと思っている。

論理的な思考をする。それは例外を認めない雑な性格ということであり、自分の中で大切な数人を除いて、その他全てを敵と認識している。

お友達ファイル3

とみのりこ
遠野梨子

メインヒロインで妹キャラ。パラメータ的になら、運勢Min、悪運Maxな女の子。

幼少時に飛行機事故に遭い両親を失う。そのときに保証金目当ての親戚（子供手当てをパチンコに使うタイプ）に引き取られ、以後冷や飯を喰う日々が続いている。

ちなみに彼女は地震や火事その他の災害も経験しており、その全てに無傷で生き残っている。

自分から動かなければ周りは絶対に助けたくないということを知っており、自分を殺して周りに尽くそうと必死だが、周りからは便利ちゃん扱いされるだけだった。

ぶっちゃけ、いい子ちゃんに動かしにくいキャラ。

お友達ファイル4

あおいゆうた
青井雄太

さらさらの髪、整った顔立ち、見た目だけならジャーニーズモテ男。

だが、その実態は直以に並ぶ鈴宮高校の嫌われ者。

口も軽く、空気を読まない。周りからはそう評価されているが実は違う。雄太は決して自己弁護をしないが、実際には計算し尽した状況で必要なことを述べているだけだ。

それが集団のためになるのならなんでも言うし、空気は読んだ上で無視する。結果、雄太自身を悪者にして集団がまとまるのだ。

雄太は、直以には自分と似たところを見ており、また、直以は自分を理解してくれていると思ひ、精神的に信賴している。

基本的に雄太は自分を二の次にして常に周りに気を使っており、親友の直以と聖のためなら命を捨てることもかまわないと思っている。隠れ設定でメカニック担当でもある。

お友達ファイル5

伊草麻里いくさまり

見た目ギャルの帰国子女。実は銃器のエキスパート。小学校4年のとき、学校の火事に遭う。逃げ遅れた麻里は、率先して避難誘導をしていた直以に助けられた経験がある。

その後すぐに親の転勤で高校入学までアメリカの田舎で育つ。

麻里は、そのとき地元の学校の友人たちの推薦でミリシア（民兵組織）に通うようになり、そこで本格的な軍事教練を受ける。

麻里自身も家族もミリシアをアメリカのボーイスカウトだと思っており、週末に地域のイベントでオリエンテーリングをする程度の認識だった。

帰国後、直以と再会するが、直以は自分をまるで覚えていなかったため、逆恨みするようになる。

社交的であり友達思いの麻里は、表層的な関係よりも内面的な深い関係を好む。

常に近くにおいて仲良くしていなければ交友関係を維持できないような人は友人ではなく知人であり、絆で結ばれた本当の友人ならば、例え長い間離れていても再会すれば昨日会ったように仲良くなれると思っっている。

だから、再会した直以が自分を助けてくれた過去どころか、同じ学校に通っていたことすら覚えていないことが許せないのだ。
ツンデレ担当。

ちなみに麻里の所属していたミリシアは政治や宗教的なものではなく昔ながらの地域防衛を目的とした民間の州軍みたいなもの。

お友達ファイル6

木村大地きむらだいち

バスケット部のエース。身長185センチのパワーフォワード。爽やかなスポーツマンのモテ男。もし作者がどぶねずみじゃなかったら主人

公になれただろう可哀想なやつ。

直以とは幼馴染であり、小学校からの付き合い。昔から直以は弟分であり、絶対の味方だと思っている。

直以が率先して前に出て、大地がみんなをまとめて後から行くという体制は昔からのものであり、それで大地はうまくやってきた。

大地は困っている人がいれば助けずにはいられないいいやつだ。それが人望にも繋がり、大地の周りには常に人がいる。

大地は対立を嫌い調和を大切にしている。それは大地の本質が平時の人間ということであり、ゾンビの大量発生した非常な世界で大地は葛藤しながらも適応（人殺しをなんとも思わなくなることは成長とは言わないだろう）していく。

初期設定ではラスボス指定だったが普通すぎてバイタリティ不足が目立ち、出番も少なくなっている困ったくん。

もし平和な時代なら作者補正もありギャルゲーの主人公のようになっていただろう、やっぱり可哀想なやつである。

お友達ファイル7

あらせひろし
荒瀬宏

パーフェクト超人。腐ったお姉さまたちにいじっていただきたいキヤラ。

見た目強面の不良。その実、気は優しく力持ちの超いい人。

ぶっきらぼうな口調と態度で周りと壁を作り、距離を置いている。

だが、宏の性格を知っている幼馴染の清良にいいように使われる苦勞人である。

趣味は料理と園芸（正確には農作業）。

ぶつちやけるのなら初期設定はTORADORAの主人公だったはずだが、原型が残らなくなったキヤラである。

お友達ファイル 8

進藤紅しんどうへに

1 年代表。梨子のライバル。完璧超人 2 号。

成績優秀容姿端麗スポーツ万能。が、無表情で友達ゼロ。民青所属。祖父は全共闘（父じゃあ通用しない年代になつたんだなあ・・・）で、来るべき世界同時革命のため自宅に実戦空手道場を開き、子供たちに思想教育とゲリラ戦を叩き込んでいた。

紅はそんな祖父から徹底した英才教育を受けて育った。

祖父は紅が中学 1 年のときに事故死するが、紅はその頃には完成していた。

紅は、ショートキルにおいてはほぼ無敵だが、集団をまとめることに関しては苦手で、コンプレックスを持っている。

だから、同じように苦しみながらも、実際に指揮を取っていく直以を目で追うようになる。

あらずじでも書いたとおり、どぶねずみは共産党批判などをする気はまったくありません。

紅は社会主義者というより民主主義至上主義者で、自分の意見より全体の意見を尊重します。

クーデレ担当。

お友達ファイル 9

小峰卓也こみねたくや

科学部部长の 3 年。キーパーソンではあるがアドベンチャーゲームだったら立ち絵もないだろう人。

2 階から落ちて足を骨折したところを直以に助けられる。が、そのとき伊草麻里のファンになる。

直以とはなかなか絡まないから出番は少ないが、影ではいろいろ活躍しています。

お友達ファイル10

かたくけんじ
門倉健司

直以や大地と同じ学年でバスケット部のポイントガード。

中学時代は引つ込み思案で友人も少なかった。それは高校も入ってからと同じだったが、同じポジションである直以と仲良くなり、直以を通じて、自然と大地のグループに所属するようになる。

直以より身長も身体能力も高いにも関わらず、リーダーシップに劣っているために評価が低いことに反感を覚えていた。

直以がバスケット部を辞めたことを2番目に喜んだ人物。ちなみに、1番は聖。

ゾンビ発生後は、大地派のひとりとして活躍するが、大地は依然として直以を頼っているのが嫌で嫌でたまらない。
性的な意味じゃない男の嫉妬を直以に抱いていく。

……そういうの、表現できるといいなあ。

お友達ファイル11

すんていり
須藤清良

鈴宮高校生徒会副会長。見た目絶世の美女。が、その尻には先の尖った黒い尻尾が生えている。

常にトラブルを探し、なければ種を撒くというトラブルクリエイターで、他人が困っているのを見て影で腹を抱えて笑うという性格破綻者。

トラブルを探すために全体を見渡す能力、物事を（悪いほうに）進めるために計画立案と実行能力、保身のために人身掌握能力に優れる。

清良が副会長なのは、なにかあったときに会長に責任をフルに被せるため。

苦しくもゾンビ発生後の世界でそれらの能力を発揮してリーダーと

して活躍していく。本人の思惑とは裏腹に。

独自の味覚と調理理論を持っており、思いついたように突然料理をする。その試食も含めて清良の後始末をするのは幼馴染の荒瀬である。

見た目不良、中身いい人の荒瀬の真逆で作ったキャラ。

どぶねずみは、なんとかセイラさんを使って愛と友情満載の道德小説から逸脱したい所存。

お友達ファイル12

このあかさつき
外岡臯月

2章から登場。ちびっこドクター！。ようやく出てきた大人、でもちびっこ。

見た目は座敷童子が池袋辺りでキャバ嬢やってる感じ。

高校までは真面目一筋で暗い青春の中、医大に合格。だが、遊びまくった大学生活で今までの全てを台無しにしたちびっこ。

それでも医者免許を取得して鈴宮市の病院に就職できたが、研修医半月でゾンビ発生。その日は休み、前日は製薬会社の接待で深酒目が醒めたら世界は一変していました。

子ども扱いは嫌だが大人扱いも困る。器具も薬もない状態で医者なんてできるわけないじゃん！

お友達ファイル13

ないとうはるみ
内藤晴美

2章から登場。三つ編みメガネのオパイ子ちゃん。鈴宮高校2年で直以たちと同年。

大地以上に普通人。それゆえに保守的で保身的。

救助隊を心から待ち望んでいたひとり。だが、今までの常識が通用しないことがわかると、晴美は保身のための行動を開始する。

どぶねずみは、外見などは、聖の煙草と同じように特徴付けのひとつにすぎないと思っています。ビジュアルで漫画やアニメに勝てるわけではないし勝つ必要もないし……。

ですが！ 晴美の胸の揺れだけは必死で表現してみます！

お友達ファイル1〜13（本編ではありません）（後書き）

どうも、どぶねずみです。

お友達ファイルはキャラを作るときに書いた覚書程度のメモを後書きに載せていたものです。

が、この小説自体にも言えることなのですが、誤字脱字が多くておまけにファイルナンバーまで重複する始末。

後書きを修正するという恥ずかしいことになっていました。

全修正の代わりにまとまったのを載せた次第でございます。

小説を読む一助にしてくださいませ。

街に行こう！

「……煙草が切れた」

今日、というのはゾンビ発生から4日目の朝のこと。連日続いた快晴はなりを潜め、ようやく黒い雲が天を覆っていた。

「直にお兄ちゃん、お茶は？」

「ああ。欲しい」

「梨子、俺にも」

「ん、ちよつと待ってね。雄太お兄ちゃんは直にお兄ちゃんの次」

「……おい、直以。なんか最近梨子が俺に冷たいんだが」

「知らねえよ、そんなこと」

俺と雄太、梨子の3人は穏やかな朝食時を過ごしていた。

前を見ると、いつの間にか須藤先輩の副官的な位置に収まった紅が昨日の活動報告をしている。まあ、誰も聞いていないのはご愛嬌だ。

須藤先輩は頬杖をついてぼーっとしているし、その横では荒瀬先輩がテーブルに足を投げ出して寝ている。

周りを見渡しても同じような状況だ。どこか気が抜けたような、悪く言えば弛んだ空気が流れている。

その中でひとりどりどんよりした空気をまとっているのが約1名。俺の隣にいる聖だ。

「なおい〜、煙草が切れた〜！」

聖は俺の身体を揺すり、お茶を飲むのを妨害する。

俺は聖を押し退けた。

「切れたっっておまえ、あれだけスパ吸ってればなくなるのは当然だろ？ いい機会だ。禁煙してみるよ」

「そうだよ、聖お姉ちゃん。それにここは学校なんだから。購買にだって煙草は置いてないよ」

聖は助けを求めるように雄太を見た。雄太は、聖の顔を見ずにぼ

そりと言った。

「……そろそろ一度街を見ておくのも必要かもな」

「そう！ そうなのだよ直以！ 私はそれが言いたかったんだ！

街には煙草がある！」

俺は聖を無視して雄太に聞いた。

「なんで必要なんだよ」

「学校だけじゃ生活必需品は賄えないだろ？」

俺は押し黙った。

部活棟には洗濯機やシャワーがあり、昼の間ならそれを使えてもいいのだが、それでも着替えは体育用のジャージしかないし、それすらもないやつらはずっと制服を着たきりだ。俺たち男はいいが、女子にはきついものがあるのかもしれない。

「そうなのよ、直以くん、どうしよう」

いつ現れたのか、須藤先輩が後ろから抱き付いてきた。

紅は俺を見て一瞬だけ言葉を詰まらせたが、無表情のまま活動報告を続ける。周りは今まで通りそんなものは聞いていないし、嫉視を俺に向けてくる。ていうか、梨子、なんでおまえまで睨んでるの？

「あの、須藤先輩。離れてくれませんか？」

「ん、なんで？」

「……あんた、わかってやってんだろ？」

「セイラ、わかんない」

須藤先輩は俺の首に抱きつき、豊満な胸を押し付けてきた。その感触を楽しむ余裕なんて俺にはない。視線が痛いんだって。

「でもね、今は購買にあったものでなんとかなってるけど、もうすぐそれもなくなっちゃうの」

「……なにがですか？」

「せ・い・り よーひん」

「あゝゝゝ、それは深刻ですね」

俺は梨子を見た。梨子は、頬を膨らませて思い切り視線を逸らした。

「だから直以くん、今日は調査目的で街に行つきてくれないかな？」
俺は、イスから立ち上がって須藤先輩から離れた。

「そういうことならかまいませんよ。雄太、付き合ってください」

「俺はパス。ちょっとやることがあるんだ」

「私が行こう。街の様子を直接見ておきたいしな」

「聖か。そうだな、2人で行くか」

「いや……、紅くん！」

紅は急に名前を呼ばれて活動報告を中断させた。

「なんででしょうか？」

「これから街の調査に行く。きみも一緒に来たまえ」

「わかりました。ご一緒させていただきます」

紅は無表情のままそう答えると、活動報告を再開した。

「なんで紅？」

「少し理由があるんだ。ま、それは行きすがらにでも説明しよう」

しかし、女2人が一緒だと俺ひとりでは手に余るな。

俺は、目を輝かせて俺を見ている小動物の頭上を通り越し、荒瀬先輩を見た。

「……須藤先輩、荒瀬先輩を借りてもいいですか」

「ん〜、駄目。宏には、荒地の地質調査をさせるから」

荒瀬先輩がいれば楽ができると思ったんだけどなあ。

俺は食堂内を見渡した。100人近い人間がいるのに連れて行けるやつがない。俺って本当に友達がいなんだなあ。

大地は連れて行けない。こいつを連れて行くとかこいつの取り巻き全員が来ることになるからだ。

大地の取り巻きは大地以外の命令は聞かないだろうし、学校の主力でもある。

これをこっそり抜けさせるわけにはいかなかった。ゾンビは一掃したとはいえ、学校内外で、やることは山ほどあるのだ。

ふと、ある視線に気付いた。もの凄い勢いで俺を睨んでいる。

伊草麻里だ。

伊草は俺と目が合うと、演技掛かった動作で立ち上がり、歩いて来た。

「なかなか面白そうな話をしているわね。私も一緒に行こうかな」
そうだな、こいつなら俺より強いし、頼りにもなる。それに、最近少し仲良くなってきたし。

「伊草、それじゃあ付き合ってくれませんか？」

「ハア？　なんであんと付き合わなくちゃいけないのよ！」

伊草は顔を赤くして怒り出した。……仲良くなってきたのは勘違いだったらしい。

「……いや、悪かった。強制はできないよな」

「そういうのは場所と手順を踏んでちゃんとやってよ。そうすれば考えないこともないから。それで、街にはいつ行くの？」

伊草は顔を赤らめたままそう言った。なんか、話が噛み合っていない。

「雨が降りそうだし、すぐにも出発するつもりだけど、おまえ、来ないんじゃないのか？」

「なんでよ！　嫌味ったらしいわね、私は行くなって言ってるでしょ！」

「??　そうか、来てくれるんならすぐ助かるが」

なんなんだ、一体。よくわからないやつだなあ。

「直にお兄ちゃん！」

「おう、びっくりした。なんだよ急に」

梨子は、伊草と俺の話に割り込み、顔面がぶつかる寸前の距離にいきなり飛び出してきた。思い切り口をへの字に曲げている。

「なんで私を誘ってくれないの!？」

なにがあるかわからないのに連れて行けるわけがないだろ、俺がそう言う前に援護してくれる人がいた。須藤先輩だ。

「梨子ちゃん、今日は私とお留守番しようね　街にはゾンビもいっぱいいるだろうしとっても危ないから。直以くんたちが安全だつて確認してくれたら明日にでも行けるからね」

「は、はい……」

自分でわがままを言っていると思ったのだろう、梨子は恐縮して下を向いた。

それを影から聞いていた学生たちも押し黙った。あわよくば自分が街に行つて可能ならば帰宅したいと考えたやつらも多くいただろう。

須藤清良は、梨子を利用することでそいつらを黙らせたのだ。

だが、聖の煙草は論外にしても、生活必需品が不足しているのは間違いのないことだ。

昨日まではゾンビが徘徊している危険な状態だったが、今は一応の安全が確保された状態だ。これまで我慢してきた不満もそろそろ溜まつてくる頃かもしれない。

「なんとかしないといけないのかもなあ」

俺は、その面倒臭い考えをお茶と一緒にのどの奥に流し込んだ。

集合は食休み後の9時。

俺と聖が待ち合わせ場所の正門前のロータリーに到着したときには、伊草と紅はすでに顔を揃えていた。他にも荒瀬先輩の姿があった。

荒瀬先輩は俺を見つけると、鍵を放ってきた。俺はそれを片手で受け取る。

「なんの鍵ですか？」

「あれだ」

荒瀬先輩は顎でロータリーの端を指した。そこには、一台の車があった。SUVというやつだろうが、車に疎い俺にはよくわからなかった。

「あれで行くんですか？」

「行くのはお前たちだ。好きにしる」

「でも、俺、車の運転なんてできませんよ」

「……」

俺は聖を見た。聖は俺から視線を逸らす。こいつは無駄にプライドが高いから運転できないとは言いたくないんだろう。

「なあ伊草、運転できるか？」

「まあ、できないこともないけど……」

少々頼りない返事だ。まあ、俺よりはマシだろう。そう思い、俺は伊草に車のキーを渡そうとした。それを紅は遮った。

「直以先輩、私が運転します」

「運転できるのか？」

「はい。問題ありません。車の運転は祖父に習いましたので」

俺は伊草を見た。伊草は、少し困ったように頷いた。

「わかった。頼む、紅」

俺は紅にキーを渡した。紅は無表情で受け取ると、運転席に乗り込んだ。俺は助手席に、伊草は後部座席の左、聖は右に乗り込む。

と、校舎から走ってくる影が見えた。梨子だ。

俺は出発しようとする紅を止めて、窓を開けて梨子を迎えた。

「はあはあ、なんとか間に合った。はい、直以お兄ちゃん、お弁当

って言っても梅干と塩のおにぎりが一個ずつだけど」

「いや、助かるよ。サンキュー」

梨子は呼吸を整えると、車内にいる俺を見て、紅を見て、聖を見て、伊草を見た。

梨子は、俺の真後ろにいる伊草に言った。

「あの……、伊草先輩」

「麻里でいいわよ、梨子ちゃん」

「あ、はい。麻里先輩。あの、できたらでいいんですけど……、着替えを、調達してもらえますか？ 特に下着を……」

「……そうね。女の子にはけっこう切実な問題だもんね」

俺は笑ってしまった。下着のことだから異性の俺には言えない内容ってのはわかるが、なんで伊草？ 俺は小声で聞いた。

「その、紅ちゃんにも言ったんだけど、今回は物資調達が目的じゃないって断られたんだ。それで、聖お姉ちゃんは聖お姉ちゃんですよ？」

「そうだなあ。聖は聖だもんなあ」

煙草と香水の混じった悪臭を放つても大丈夫なやつだもんな。これでも去年よりは身だしなみに気を使うようになったんだけど。出会った当初は、髪の毛にご飯粒付いていたし。

「直以先輩、名残惜しいのはわかりますが、そろそろ出発しないと……」

「ああ、わかった。それじゃあ行ってくるな」

「うん、気をつけてね」

「なにかあったら雄太に、雄太が無理なときは荒瀬先輩を頼るんだぞ」

「荒瀬先輩？ うん、わかった」

その荒瀬先輩を見ると、俺たちのために正門を開けてくれていた。車はゆっくりと走り出す。俺は窓を閉めた。サイドミラー越しに、梨子は手を振っているのが見えた。

車は正門を通過した。

「伊草、おまえ、梨子と面識あったのか？」

「よく話すってほどの間柄ではないけど。ほら、食事の用意をあの子は手伝ってくれるしね。それに、あの子はなにげに有名人だし」

「麻里先輩、ね、ツ痛え！」

「気安く名前で呼ぶんじゃないわよ！」

伊草は思いつきり座椅子越しに俺を蹴りつけた。

「どうしてもって言うなら麻里って呼んでもいいわよん」

「いや、悪かった。伊草、痛え！」

「なんで苗字で呼んでんのよ！」

「だって伊草のほうが呼び慣れてるし、ってイスを蹴るな！」

「いいから麻里って呼びなさい！」

「おまえ、メチャクチャだな！」

「やれやれ、ずいぶんと仲のいいことだな。反直以の急先鋒であるはずの伊草麻里がどういう風の吹き回しかな？」

そう言ったのは聖だ。バックミラー越しに見ると、聖は窓に視線を向けたままひとりごとのように喋っていた。

「べ、べつにそんなんじゃないわよ。私はこんなやつ、大ッ嫌いだし」

伊草、いや、蹴られるくらいなら名前で呼ぼう、麻里も聖と同じように窓に視線を向けた。

俺は横にいる紅を見た。自分から言い出すだけあり、安定した運転をしているが、車内の会話には我関せずで無表情を貫いている。

と、紅は俺に視線を向けないまま言った。

「直以先輩、いえ、みなさん。シートベルトをしてください……」

紅は、言い終わるか終わらないかのタイミングで、思い切りアクセルを踏んだ。俺たちは慌ててシートベルトを締めた。

そのまま前を見る。眼前に、ゾンビが彷徨っていた。紅は、躊躇うこともなくそのゾンビを跳ね飛ばした。

「……おいおい」

俺は表情を変えずに次々とゾンビどもを轢き殺していく紅を見た。

「……なかなかやるじゃない」

「……同感だ。紅くんはこんなことをする人物には見えなかったが見誤っていたらしいな」

それを最後に、車内は沈黙に包まれた。

この段階に来て、俺は初めて気が付いた。

俺、人選間違えたな。

街に行こう！(後書き)

ハート(?)が文字化けしているとのこと。星))に逐次修正します。

殺す力、守る力

街は酷い有様だった。崩れかけたビル、割れたガラス、山積み
の瓦礫。

まるで、テレビの中だけにある砲撃を受けた直後の都市だ。

鈴宮高校から駅までの通学路、鈴宮市の商業地帯にあたるこの地
域は、昼夜を問わず人が溢れているはずだった。なのに、今、目の
前にある街には、人はおろかゾンビすら見当たらない閑散としたも
のだった。

道路はどこどころに亀裂が走り、瓦礫の残骸が落ちている。
車の揺れが大きくなった。

「……これからどうしますか？」

「とりあえず煙草だな、コンビニに行こう」

「コンビニ、ですか？ わかりました」

車はそのまま100メートルほど先にあるコンビニの前で止まっ
た。その間、生きている人間にもゾンビにも、出会わなかった。

ドアを開けて、まず気が付いたのは異臭だった。異臭の元は、死
体だった。腐敗した死体が、そこかしこに転がっているのだ。

頬、ノド、胸部、上腕、大腿、内臓、それに性器。死体の損傷に
は違いがあるものの、それらの部分はほぼなくなっている。ゾンビ
はどうかやらグルメラしかった。

「これは……、酷いですね」

「そういえば麻里は大地たちと一度街に逃げたんだよな。そのとき
はどうだったんだ？」

「……辿り着けなかったのよ。荒地の辺りでゾンビどもに囲まれち
やって」

「残念無念、泣きながら学校に戻ってきたというわけだ、いった！」
俺は聖の頭を引っ叩いた。わざわざ対立を煽ってんじゃねえよ。

ただでさえアクの強い連中でまとめるの大変なんだから。

「とにかく、コンビニの中を調べてみる。麻里、援護してくれ。聖は周辺の警戒、紅はいつでも車を動かせるようにしておいてくれ」
俺は学校から持ち出した金属バットを握って、コンビニに向かった。

ゆっくりとドアを開け、薄暗い店内を見渡す。

店内は、それほど荒れてはいなかった。そのまま店内に足を踏み入れる。幸いにも、ゾンビの姿はなかった。

俺は聖たちを店内に呼んだ。

「ふむ。略奪の後はないな。煙草が残っているのは非常に助かる」
聖はカウンターを乗り越えて煙草の物色を始める。麻里は力ゴを持ち出し、化粧品やら石鹸やらを片っ端から放り込んでいた。

結局、略奪は俺たちがやることになったわけだ。

紅は、俺の隣に並んだ。

「これ、れっきとした窃盗ですよね」

「ああ、そうだな」

「直以先輩、私はなにを盗みましょうか？」

「それじゃあ紅は懐中電灯を見つけてくれ。こっ店内が暗いんじゃないしな」

「わかりました」

紅は迷うこともなくコンビニの暗がりの中に消えていった。

俺は、店の奥に向かった。そこで、散乱した弁当を見つけた。棚にあるパンも袋を破かれ、食い散らかされている。

「これは、ネズミにやられたな」

「ふむ、どうやらそのようだ」

聖は、さっそく煙草に火をつけて思い切り吸い込んでいた。

「直以。ネズミが弁当を食べる、その意味がわかるかね？」

俺は少し考えて答えた。

「人間が食べなかったってことだろ？」

「そういうことだ。コンビニに来た目的は煙草の他にこれを確認し

たかつたんだ。食料品が食べられていない。それは、この辺りに弁当を食べる人がいないということだ。すでにどこかに避難してこの地区を離れたのか、それとも……」

「全員死んだか、つてこと？」

いつ来たのか、麻里がチヨコステックを啜えて立っていた。俺は麻里の差し出す箱からチヨコステックを一本抜いて口に啜えた。「この辺りで一番近い避難場所は鈴宮高校だ。そこに誰も来てないつてことは、わざわざ遠い他の避難場所に逃げたのか？」

俺たちみたいはどこかに立て籠もっているのは有り得る話だ。だが、聖は別の見解を持っているようだった。

「……だといんだがな」

そう言っつてひとりコンビニを出て行く。俺は慌てて聖の後を追った。

「おまえ、なに考えてるんだよ」

「……なぜゾンビまでいない？ 死体はこうして残っている。情報が少なすぎる！」

駄目だ。こいつ、黙考モードに入っちまった。こうなると外からいくら話しかけても聖は答えてくれないのだ。

後ろを見ると、紅と麻里がコンビニから出てくるところだった。

「懐中電灯、必要ありませんでしたか？」

「いや、別のところに入るときに有効活用するよ」

そのとき、いきなり耳を劈く音が響いた。クラクションだ。聖が、車のクラクションを鳴らしたのだ。

俺と麻里は同時にチヨコステックを口から落とした。

「ちょっと、牧原！ あんたなんてことやってんのよ！」

「馬鹿聖、おまえなにやってんだ！」

俺と麻里が聖を羽交い絞めにして車から離す。が、手遅れだった。ビルというビルからゾンビが溢れるように出てくる。どこに隠れていたのか、という数だ。中には、上階から真つ逆さまに落下してくるゾンビもいた。

聖は、急に笑い出した。

「そうだ、そうでなくてはいけない！ これでいいんだ！」

「あんた、気でも狂ったんじゃない？」

「いや、すまない。少々予定外のことが多かったものでね。よし、すぐにここを離れることにしよう！」

「……直以、こいつ、思いつきりぶつていい？」

「……今は駄目だ。学校に帰ったらいくらでも殴っていいから俺たちは車に乗り込もうとした。

その瞬間だった。

いきなり眼前にイスが降ってきた。

「あつぶねえ、なんだ？」

頭上を見上げる。そこは、高級マンションだった。そのベランダから女の子が旗を振っている。

……見つけちまった以上は見過ぎすわけにもいかない。

「紅、聖を連れて先に行ってくれ。1時間後、ここに集合。もし俺たちがいなければ学校に戻れ」

「……わかりました」

「麻里、手伝ってくれ」

「あんたってけっこう人使い荒いわよね。あれって何階よ」

「最上階マイナス3階だ。聖！」

「う、うむ。なにかね？」

「てめえは言い訳を考えておけ！」

「直以先輩、これを持って行ってください」

紅は、俺に先ほど盗んできた懐中電灯を差し出した。俺はそれを受け取る。

「さ、私たちも行くわよ」

麻里を見ると、髪を後ろで結び、モデルガンを肩からかけていた。

「……こんなことなら火薬棒を持ってくればよかったかな」

「それで一発撃ったら終わり？」

「そう考えたらこれのほうはまだ使えるか！」

俺は金属バットを握り直して走り出した。
ゾンビを誘導するためだろう、紅はクラクションを鳴らした。

背後で長いクラクションの音が壊れた街に響く。

俺と麻里は、前に立ち塞がるゾンビを蹴散らし、高級マンションに突入した。

高級マンション内は、完全な闇だった。俺と聖は懐中電灯の光だけを頼りに階段を上った。

俺たちは、小声で話し合った。無言でいると、暗闇に取り込まれそうだったのだ。

「……なんでこんなに暗いのよ」

「……仕方ないだろ。電気が通ってないんだから」

と、3階の踊り場にゾンビを発見。

懐中電灯を伊草に渡し、忍び足で近づく。

ゆっくりと背後に回り込み、肩に手を置いた。それでもゾンビは俺に気づかなかった。痛覚がないってことは皮膚感覚がないってことなんだろうか。

ゾンビの足と足の間にはバットを差し込む。ゾンビは、顔から倒れた。

俺は、バットを振りかぶった。その俺の腕に触れるものがあつた。闇に紛れて、もうひとりゾンビがいたのだ。

俺は反射的にゾンビの襟首を掴み、階段から落とした。バランスの悪いゾンビは抵抗もなく階段から転がり落ちる。俺は階段から飛び、勢いをつけてゾンビの頭を上から割った。

「ゾンビ退治もうまくなってきたみたいね」

「人殺しがうまいって？ 褒め言葉にもなっていないよ、それ」

俺は階段を上り直し、最初に転ばせたゾンビにとどめを刺す。

「人殺しじゃないわよ。誰かを守る能力ってこと」

「詭弁だな。誰かを殺すことで誰かを守るのか？」

俺は、麻里から懐中電灯を奪い、上階に向かった。

麻里は、しばらくは無言だったが、やがて話し始めた。

「私が帰国子女なのは知ってるでしょ？」

「そうなのか？ 初耳だけど」

「……あんだ、ほんつつとうに私のこと覚えてないのね！」

「やっぱり、俺、昔おまえに会ったことあるんだな」

麻里は、暗がりの中、俺の顔を覗き込んだ。

「覚えてるの？」

「いや。でもおまえの、俺への嫌い方は半端なかったからな。ひよつとしたら嫌われるなにかを昔したのかもしれないって思っていたんだ」

「昔、じゃなくて今してるの！ なんで覚えてないのよ！」

「いや、悪い……。そんでもって声がでかい」

麻里は、なおもなにか言おうとしていたが、状況を思い出して口を噤んだ。

「……とにかく、私は高校入学までアメリカにいたのよ」

「それじゃあ英語喋れるのか。今度の中間テストは万全だな」

「あんだ、馬鹿にしてるの？」

「……いや、悪い。それじゃあ例の凶暴な格闘術もアメリカで習ったのか？」

「凶暴って何よ！ ……まあ、そういうこと。私はアメリカでミリシアに所属していたの」

「ミリシア？」

「民兵組織よ。自警団みたいなものね。アメリカには伝統的にそういうのが残ってるの」

「日本で言うと消防団とか、そういうやつか？」

「ぜんっぜん違う！ いや、違うないんだけど……。とにかく！

そこで私は軍事教練を受けたの。アメリカに在る間だから、だいたい6年間くらいね」

「じゃあ、本物の銃とか撃ったことあるのか」

「ええ。私、けっこう優秀だったのよ。なんか、才能あったみたい。あんたに言わせれば、人殺しの才能が」

「いや、そんなつもりで言ったんじゃない……」

麻里は、俺の口到人差し指を当て、俺の言葉を遮った。

「黙って聞いて。確かに銃器の扱いは人を殺すことができる技術だと思ふ。でも、私は、それは誰かを守る力でもあると思ふ。私はそう教えられてきたし、私の才能を誇りにも思っている。だから、直にも、自分の行動を否定しないで、肯定してもらいたい」

俺は、麻里を見た。暗がりの中、麻里はじつと俺を見ていた。

こいつの言うことは、賛成もできるし反対もできる。俺の本音はそこまで割り切れないところだ。

バスケ部を辞めたとき、俺は後悔したし、辞めなくても後悔していただろう。

程度の差こそあれ、自分の決断に後悔しなかったことなんてないし、これからもしていくと思ふ。

我ながら、面倒な性格だ。

割り切って自分を全肯定したって、多分、駄目なのだ。

だけど、俺にはわかったことがある。だから俺は言った。

「ああ、わかったよ。麻里」

麻里はそれを聞くと、穏やかに微笑んだ。

俺がわかったこと、それは、こいつがけっこういいやつだったことだ。

俺たちは、8階に到達した。最上階マイナス3階だ。ここに女の子が取り残されているはずだ。

「どの部屋かはわかってるんでしょね」

「右から4番目の部屋。聖と一緒にいると無駄に記憶力を鍛えられるんだよな」

俺たちは部屋の前まで移動すると、ドアをノックした。返事はない。俺は、ゆっくりとドアを開けた。

途端、ゾンビが飛び出してきた。俺は跳ね飛ばされ、麻里はドアを蹴りつけてゾンビの手を挟んだ。

ドアからはみ出たゾンビの手は骨が折れ、しばらくは垂れ下がっていたが、やがて蛇が首をもたげるように、持ち上がった。筋肉だけで動いているのだ。

こうなつてくるともう間接も関係ない。むしろ骨は行動を制限するだけの拘束具のようなものだった。

「直以、大丈夫！」

「あ、ああ。ゾンビは？」

麻里はゆっくり足をドアから除けた。ゾンビはドアの間から顔だけだしていたが、廊下には出てこなかった。ドアに、チェーンがかかっていたのだ。

と、そのとき、隣の部屋のドアが開いた。

「おい、私はこつちだよ。はやく助けて〜」

麻里は、蔑む視線で俺を見下ろした。

「……なにが記憶力が鍛えられるって？」

「うるさい！ 誰にでも間違いはあるだろうが！」

「うっわ！ 逆切れ？ だっさ！」

俺は、立ち上がって早足で隣の部屋に入った。麻里も俺の後に続いた。

ちびっ子ドクターさっちゃん

窓から差し込む灰色の光の中に、その子はいた。小学校の高学年くらいだろう、その子は、似合わない化粧をびっしりとして俺たちを出迎えた。

「よかった、もう食べ物もなくなってどうしようかって思ったんだよ」

女の子はほつと息を吐いた。俺は女の子の小さい頭を撫でた。

「もう大丈夫だからな」

「ぬが~~~~!!」

少女は急に暴れだし、俺の手から逃れた。

麻里は、俺を突き飛ばして、少女と同じ目線になるようにしゃがんだ。

「安心して。お姉ちゃんたちが来たからもう大丈夫よ」

「こ、ここここ、こどもあつかいするな~~~~!!」

女の子は半円を描く軌道で俺たちから離れると、腰に手を当てて振り返った。

「き、きみたち！ しつねーじゃないか！」

「……おい、麻里」

「難しい年頃なんですよ。大人ぶりたいのね」

「ぎゃあああう！」

少女は足と手をばたつかせて暴れた。その所作はまるっきり子供のものだ。

「私は、このおかしき外岡皐月。鈴宮市立病院の医師だ」

「そうか、さっちゃんだな。よろしくな」

「医者なんだぞ、偉いんだぞ！」

俺は室内を見渡した。

散らかった部屋だった。高級マンションらしく家具の配置はやけに整っているのに、脱ぎ散らかした服やらまるめたティッシュやら

が散乱している。

さっちゃんは、それを助長するように筆筒を開けると服を乱雑に放り出した。そして、お目当てのものを見つけると、上から羽織った。

「ふふん　これでわかったっしょ？」

さっちゃんの着たものは、白衣だった。袖は余ってぷらぷらしているし、裾も引き摺っている。これはこれで、なかなか趣きのある格好だった。

「直以、これからどうする？」

「来た道に戻るのが無難だと思うが、それだと時間に間に合わないかもしれないなあ」

「無視するなあゝあ！」

俺はベランダに出た。真下に先ほど入ったコンビニがある。ここからイスを投げ飛ばしたんだろう。

「……さすがにここから下りるなんて言わないでよ。学校とは高さが違うんだから」

確かに、学校は4階建てだし、ここは8階だ。高さだけでも倍以上あるし、それに、下の階にゾンビがいたら対応は難しかった。

室内に目をやると、さっちゃんは、なにやら筆筒やら引き出しやらを引つ掻き回している。お目当てのものが見つからないようだった。整理整頓ができない子のようだ。

「高級マンションなら防災設備もしっかりしているだろう。それならあれがあるはずなんだけど……」

「あれ？」

「えっと、避難用の滑り台。下まで一気に行けるやつ」

「ああ。折り畳み式で、なんか筒状になってるやつね」

俺は隣の部屋を覗いた。もし滑り台があるなら、おそらく角部屋だろう。幸い、隣の部屋との敷居は取り外し可能だった。これならドアに鍵がかかっても辿り着ける。

と、そこで眼前が塞がれた。目の前にはなにかのカード、それを

さっちゃんが突き出したのだ。

「なんだ、保険証？」

俺は、そのカードを受け取った。えっと、外岡皇月、生まれの年から逆算して、24歳、24歳!?

「どうだ、まいったか！」

「いや、まいった。さっちゃんって年上だったんだな」

「さっちゃんゆーな！」

麻里も保険証を確認して俺と同じように驚いている。

「私たちより8歳も年上なの!? さっちゃん、お姉さんなんだね」

「だからこどもあつかいするなー！」

「部屋の片付けがひとりではできないようになったらやめるよ」

俺は、敷居を調べた。なにか外し方があるのだろうか、俺にはわからなかった。

「さっちゃん、これ、外し方わかるか？」

「……さっちゃん言うな。ほら、ここがネジで留められてる」

「多分もつと簡単な方法があると思うんだが。それで、ドライバーは……」

俺は室内を見渡した。女の子のひとり部屋（半ゴミ屋敷）、もしあったとしても、すぐには見つかりそうにないな。なにしろ、保険証を探すのに手間取っていたみたいだから。

「まあ、いいか」

俺は金属バットを振り上げると、ネジの留まっている金具を殴った。金具は、3回ほど殴るとぐらついてきた。俺は、少し離れて助走をつけ、敷居を蹴りつけた。金具は外れ、隣の部屋との行き来が可能になった。

「ちょ、ちよつと！ 器物破損、てゆーかひどんちこわさないですよ！」

「非常事態だよ」

「……ねえ、今ってどうなってんの？ 外にいるあのゾンビみたいのはなんなの？」

「正直わからん」

そう言った後で俺は現状を話した。さっちゃんは、半信半疑ながらも黙って聞いていた。

「もう、びっくりしたよ。朝起きたらテレビも電気もつかなくて、そんなもって電話も通じないし」

「朝起きたら？」

「あ、ははは。前日に深酒しちゃってさ。起きたらもう日が暮れた」

「朝じゃないだろそれ」

俺は角部屋に通じる最後の敷居を破壊しようとした。それを、麻里は止めた。

「……直以、気をつけて。いるわ」

俺も、言われて気がついた。かすかな息遣い、扉の向こうに、ゾンビがいる。

しかも、この感じは、中度感染者だ。

2日目に遭遇した動きの早いゾンビのことを聖に話すと、聖はそれをこう評した。

「今まで見てきたゾンビには、ある種の指向性が見られた。それは、極端な生存本能だ。」

生きるために人を喰らい、そのことだけを目的としているように見受けられる。

それ以外の機能は、視覚も痛覚も、全て除外しているようだ。

話を聞くに、そのゾンビは痛覚が残っていたようだ。ならば、そのゾンビは、ゾンビになりきれいでいなかったのかもしれない。

ゾンビになる原因をなにかのウイルスとするのならば、感染の度合いの低い、中度感染者と言えるな」

敷居の向こうにいるゾンビ、それには他のゾンビにはない機微が感じられた。

幸い、というか、これで中度感染者は2人目だが、強敵であることには変わらない。

「さっちゃん。部屋に戻っている」

「え、なによ急に」

「いいから。呼びに行くまでこっちに来るなよ」

俺と麻里の緊張を感じ取ったのか、さっちゃんはなにか言いたげではあったが、部屋に戻っていった。

「それで、どうするの？ 正面突破？」

「それしかないよなあ」

俺は、麻里を部屋の中に入れた。ベランダで一直線に並んでいて俺の身体が邪魔で麻里が狙撃できないからだ。

「部屋の中になんか使えそうなものないか？」

「あんたが使えそうなものはないわね。いいところ、台所の包丁くらいかな」

なにしろ、麻里はボールペンを凶器に変えるようなやつだからなあ。俺が使えないんじゃないかと麻里のスキルが特別なんだって話だ。とりあえず俺は包丁を受け取り、ベルトに挿した。近距離では返り血が怖いけど、投擲用なら使えるだろう。

「よっし、それじゃあ行くぞ」

俺は、敷居を留める金具を殴った。それとほぼ同時、曇り空が翳った。

「嘘だろ！」

ゾンビが、柵を乗り越えてこちらに来たのだ。

ゾンビは俺に覆いかぶさるように飛びついてくる。反射的に俺はしゃがんだ。絶妙のタイミングで麻里は援護射撃をしてくれる。俺は、射撃に怯んだゾンビの腹に肩から体当たりして、距離を取った。そのゾンビは、女だった。

ゾンビになる前はさぞ美人だったのだろう女ゾンビは、下着姿で

目を剥き出しにして俺を睨んだ。残念ながら、いくら下着姿であっても色気は欠片ほどもなかった。

「直以、室内に入って！ その位置じゃ援護射撃ができない！」

「駄目だ！ 部屋に入ったら2人とも狙われる」

俺は、腰の包丁を手にした。横では麻里がこちらに走ってくるのがわかった。

と、女ゾンビは俺から距離を取った。俺の前、女ゾンビの後ろで、微かな物音がしたのだ。

さっちゃんだった。ガラス戸を開けてこちらを覗いている。

女ゾンビは俺に背を向け、さっちゃんに向かって走った。

速い！ さっちゃんは慌てふためいて動けないでいる。

俺は、包丁を投げた。包丁は女ゾンビには突き刺さらず、肩骨に当たって弾かれた。

痛みのために動きを止める女ゾンビ。さっちゃんはその間に部屋に戻ってガラス戸に鍵を閉めた。

女ゾンビは肩を押さえて再び俺に対峙した。

俺は、横を見た。

麻里も俺を見ている。

アイコンタクト。

ゾンビはわずかに前傾姿勢を取ると、俺に向かって走ってきた。

俺は後ろに飛び退いた。ほぼ同時に麻里はガラス戸を内側から割る。

女ゾンビは、ガラスの破片をもろに踏み、異様な悲鳴を上げて動きを止めた。

俺は、女ゾンビに言った。

「……俺、あんたタイプじゃないよ。肌が土気色しているところとかさー」

俺はアッパースイング気味に金属バットを振り抜いた。女ゾンビは柵にぶつかり、そのまま勢いを殺せずベランダから落下していった。

俺は、ベランダから女ゾンビの落死体を見て言った。

「いや、悪い。肌の色で差別するのはいけないよな。血はゾンビも同じ赤色だし」

俺と麻里、さっちゃんの3人が地上に降り立ったとき、タイミングよく聖たちの乗った車が到着した。

俺は、聖を助手席から引き摺り出した。

「さて、牧原聖。言い訳は喋れるうちにおけよ」

「ま、まて直以。クラクションは必要だったのだ！ なにか合図を送らないと立て籠もっている人たちに気づかれないではないか、いだだだだだ！」

俺は、人差し指で聖の鼻を思い切り押し上げた。実は鼻の付け根は急所で、ここを下から持ち上げるのはけっこう痛かったりする。肉体的にも、豚鼻になるので精神的にもだ。

「直以先輩。生存者はこの子ひとりですか？」

俺は聖への体罰を中断し、紅に向き直った。

「厳密に調べたわけじゃないけどな。こいつはさっちゃん。24歳だ」

さっちゃんは、余った白衣の袖で俺の顔をぶった。まるつきり痛くない上に、背伸びしているのが微笑ましかった。

「なぜ年齢をばらすのよ！ れでいの歳については黙秘しなさいっちゅーの！」

「子供扱いされたくないんじゃないのか？」

「そー言えば私、きみの名前を知らないよ」

「ああ、そういえば名乗ってなかったっけか。俺は菅田直以。鈴宮高校の2年だ。この肩書きにどれだけ意味があるのかはわかんない

けどな」

俺たちは一通り自己紹介をすると、さっちゃんは、言った。

「それで、さあ。なにか食べ物ない？ 私、昨日の夜からなにも食べてないんだよね」

「車に梅と塩のおにぎりがあるよ」

「……私、梅干嫌い」

こいつ、大人なのは年齢だけだな。中身も見た目もガキんちよだ。「それじゃあ、コンビニでなんか見繕って来い。弁当とかは駄目だけど、缶詰とかなら食えるだろう」

「缶詰、カニ缶」

ひとりでふらふらとコンビニに入っていくちびっ子。その後を保護者のように麻里が付き添った。

「俺もカニ缶食いたいな」

「私たちには梨子くんの手作りおにぎりがあるからな。カニ缶はまた今度しよう。それより、直以。気付いているか？」

「……当たり前だろ」

俺は辺りを見渡した。

閑散とした街、それは、クラクションを鳴らす前と同じ状態だった。クラクションに反応して道にあふれ出てきたゾンビが、ひとりもないのだ。

「ゾンビはどこに行ったか、というと、建物の中に戻ったってことなのだろうな。理由は、正直私にもわからない。ゾンビが持つ習性のようなものかもしれない。だとすると、学校にいたゾンビとの相違性も気になってくるのだが……」

「私と牧原先輩はさきほど車で市内を見て回ったんですが、やはり路上には数えるほどのゾンビしかいませんでした」

「生存者は？」

「いえ。見当たりませんでした」

コンビニを見ると、カゴいっぱい荷物を両手で抱えてさっちゃん和麻里が出てくるところだった。なぜかさっちゃんはおむずかり

だった。

「きみたち、おかしいよ！　なんでお金払わないのよ！」

「あゝ。ごもつともではあるな」

「百歩譲ってお金を払わないのはいいわよ。でも、なんでお金を盗まないのよ！」

「あゝ。ごもつともではないな」

俺は聖と顔を見合わせた。

ゾンビ発生からすでに4日が経過している。たったそれだけの期間で、俺たちは金銭に価値がないことを本能的に悟っていたのだ。

レジに見向きもしなかったし、言われるまで気付かなかった。

しかし、金を盗むって、このちびっ子……。

と、そのとき、地面が濡れた。雨が降ってきたのだ。

「あっちゃあ。ついに降ってきたなあ。とりあえずみんな車に乗れ」
俺たちは車に乗り込んだ。基本の配置は先ほどと一緒に。後部座席の真ん中にさっちゃんがいることだけが違いだった。

雨は、あつという間に本降りになった。紅はワイパーを動かした。

「それで、これからどうします？　一度学校に戻りますか？」

「……いや、救助するたびに学校に戻っていたらキリがない。このまま調査を進めよう」

「わかりました」

紅は車をゆっくりと走らせた。

「こら、さっちゃん！　鯖缶のたれをこぼさないでよ！」

「しかたないでしょ、車が揺れるんだから……あゝ！　なんで横から食べるのよお！」

「ふむ、鯖缶か。食わず嫌いだっただな。なかなかおいしいじゃないか」

後ろはずいぶん姦しいな。

「直以先輩。次はどこに向かいますか？」

「市内にある広域避難場所を回ってみよう。聖、他に回るところはあるか！」

「鈴宮病院、それに警察署だ」

「ここから一番近い避難場所は鈴宮市役所ですね。そこに向かいま
す」

俺はバックミラーで後ろを見た。女どもは騒がしくコンビニから
略奪してきたおかしなどを食べている。

昼には少し早いが、俺はおにぎりを食べることにした。

「ほら、後ろの2人、食べるうちに食っておけ」

俺は聖と麻里におにぎりを渡した。

「ほら、紅。おまえも」

「ありがとうございます。ですが運転中なので後ほど頂きます」

「食べさせてやるうか」

途端、車が揺れた。後ろでは女3人がドミノ倒しになっていた。

「……失礼しました。おにぎりは、手が空いたら頂きますのでお気
になさらず」

「……ああ、わかった」

俺は、紅をからかったことを後悔しつつ、おにぎりを食べた。

梨子の握ってくれたおにぎりはびっくりするほどおいしかった。

だむだむ

鈴宮市役所には、人の姿はなかった。正確には、生きた人は。

「大量の死体と大量のゾンビ。数日間はこちらに立て籠もっていたよ
うだな」

「持ち堪えられなかったのか」

「うむ、そのようだ。ここは街中だ。学校のゾンビは数百といった
ところだったが、ここでは数千というゾンビが押し寄せたのだろう。
この様子だと、他の避難場所も望みは薄いな」

「鈴宮市の人口ってどんくらいだっけか？」

「15万に届かないくらいだ」

「それが全滅？」

「まだ結論には早い。次の避難場所を確認に行こう」

一縷の望みをかけて回った他の避難場所も、大同小異だった。生
存者はいないでゾンビどもが死体を貪っている。

「まいったね。これは、本気で生存者は学校の100人だけってこ
ともあるんじゃないか？」

「さすがに、それはないと思いたいけど……」

「どうしますか？ ここからなら鈴宮病院が近いですけど」

「うえ、鈴宮病院!？」

反応したのは、さっちゃんだった。

「どうした、さっちゃん」

「あたし、もう3日も無断欠勤してるんだよね。怒られないかなあ
こいつ、未だに現状を理解できてないんだな。」

「紅、鈴宮病院に向かってくれ」

「了解しました」

「なんで私を無視すんのよお！」

さっちゃんにとって幸か不幸か、鈴宮病院も他の避難場所と一緒
だった。

「どつする、さっちゃん。病院内を探索するなら付き合っけど」

「……いいや。あゝあ、まさか半月で失職するとは思わなかったなあ」

さっちゃんはちっこい足を前に投げ出した。

「そつだ、自衛隊は？ 警察はどこなつてんの？」

「そつだな。確認に行くか。紅」

「はい」

車はUターンをして、警察署に向かった。そこで、俺たちは今までにないものを見た。

いや、見たという言い方は正しくないかもしれない。

見たままを言うなら、そこにあるべき警察署が、なかったのだ。

「瓦礫の山、か」

「瓦礫に炭が混じっている。おそらく、焼け落ちたみたいですね」

そつといえば初日で屋上から煙が上がっているのを見ている。ここもその場所のひとつだったのだろう。

「あわよくば武器を、ってなことを考えていたんだが、これじゃあ見つからないな。重機でもないと、この瓦礫は除去できないぞ」

「……どうしますか？ 隣の朝倉市まで行きますか？」

「いや。今日のところは引き上げよう。麻里、梨子に頼まれた下着の調達は？」

「コンビニにあるのを片っ端から持ってきたわ。でも、さすがに人数分はなかったから、この後、ユニクロにでも寄ってもらいたいんだけど」

と、聖が俺と麻里の会話に割って入る。

「ユニクロはまた今度にしよう。実はもう1カ所行きたいところがあるんだ。紅くん、工業団地に向かつてくれ」

「……わかりました」

紅は、わずかに言葉を詰まらせた後、聖に答えた。

「工業団地？ そんなところになにがあるんだよ」

聖は、車の窓を開けて煙草に火を点けた。雨の匂いが車内に入り

込んできた。

聖は窓の外に煙を吐き出して言った。

「武器が欲しい」

「武器？ 銃のことか？ 俺も警察にならあると思っただけだな」

「直以、この雨は我々にどう作用すると思っ？」

「雨？ 別に……どうもしないだろう」

「そう、今はな。それは、水道がまだ生きているからだ。だが、もし水道が止まったらどうなる？ 避難民は、水を求めて川に向かうだろう」

「私たちの籠る鈴宮高校の近辺に、ということですか？」

「ちよつと、考えすぎじゃない？ だって今まで避難民なんて影も形も見えなかったじゃない。見つけたのはさっちゃんだけよ」

俺は、バックミラーで大人しくなっているさっちゃんを見た。さっちゃんは、顔を赤らめて缶ジュースを飲んでた。いや、あれは缶ジュースじゃない。缶チューハイ、酒だ。

こいつ、本当に駄目な大人なんだな。

「理由はふたつある。ひとつは、生存者がいた、つまり、現段階において生き残っている人間は存在するということ。例えば、鈴宮市で1パーセントほど、100人にひとりが生き残っているとしてみてもその数は千人を超える」

「それだけの数が学校に殺到すると？」

「それともうひとつ。それは、その連中が暴徒と化している可能性が高い、ということだ。お国柄、というべきかな。今の段階では街に略奪の形跡は見られなかった。だが、それも水が使えるからだろう。生存が脅かされれば、人種も道徳も関係はない」

「別に、川の水を飲んだって俺たちと対立するわけじゃないだろう」「果たしてそうかな？ 川に来た人間は鈴宮高校のことを知るだろう。電気も使えて水も近い。わざわざ不便な街に戻るうとはしないだろうな」

「……私たちが、学校から追い出されるってこと？」

「追い出されないまでも、主導権は奪われるだろうな。学校という枠を外せば、所詮、私たちは未成年の子供、ということになるからね」

俺たちは、その言葉を吟味した。

聖のいうことは、事実だった。

俺たちは未成年であり、選挙権すらない。どこかの誰かは未熟者の俺たちの意見を聞きもしないだろう。

須藤先輩は、面倒だから他人に任せておけと言っただろうか？ どこかの誰かに、自分たちのことを決めさせるだろうか？

少なくとも、俺はそんな気にはなれなかった。

良くも悪くも、俺たちは始めてしまっている。

ゾンビ発生から4日、学校には家に帰りたいやつも帰れると思っているやつもいるだろう。

面白いことに、そいつらを含んだ全員、教師が、大人がいればよかったとは言わなかった。

俺は、手に負えない聖を排斥することで秩序を保とうとしていた教師たちをまったく信用していなかったし、そんな大人に自分のことを任せる気にはなれなかった。

「そうだな。少なくとも、テレビで顔しか知らない政治家より、俺はおまえの言葉を信用するよ」

「んにゃ！ そ、そうか。まあ、当然だな」

聖のやつ、なに奇声上げてんだ？ なんか顔も赤いし。さっちゃん酒でも飲んでんのか？

「それで、武器があれば学校内を勝手に荒らされないってこと？」

「ああ。少なくとも、暴力に訴えた行為は抑えられるだろう」

聖は身を乗り出して俺に手を伸ばしてきた。俺は、無言でブレザーの内ポケットに入れてある携帯灰皿を渡した。

「ここで言う武器は火薬棒のことじゃないだろ？ 抑止力になるものならわかりやすいものだよな」

「ずばり、銃ってことでしょ。でも、警察署では手に入らなかったじゃない。この辺りには自衛隊もないし。隣町の警察署まで行ってみる？」

「いや。工業団地だ。そこに銃はあるはずだ」

「どうしてだよ」

「直以、中国が模倣の国であるのは知っているな？」

「こいつは、また話が飛びやがった」

「ああ、著作権の問題とかで騒がれていたなあ」

「そんな瑣末なことじゃない。もっと技術的な問題で、だ」

「聖は短くなつた煙草を携帯灰皿に入れた」

「例えば中国はミサイルや戦闘機を外国から買う。それを何度も分解、組み立てをして自分たちの技術にして国産品を開発するんだ」

「いや、見事だと思うよ。私は中国を批判する気はない。批判されるべきは、中国がそれを可能になるように技術提供をした連中だ」

「聖は、嘲笑を浮かべながら2本目の煙草に火を点けた」

「誰だよ、技術提供した連中って」

「日本人だよ。コストパフォーマンスを求めて中国に進出した日本企業は惜しげもなくその技術を中国に提供してきたんだ。それが目に見える脅威となるのを知っていながらね。なにしろ自分の国の産業を放棄して他国で稼ごうとしたんだから」

「バックミラー越しに後ろを見る。さっちゃんは、爆睡していた」

「数日間をひとりっきりで過ごして、不安で疲労も溜まっていたのかもしれないな」

「少し横道に逸れると、それを率先してやったのは、所謂MBAというやつだ」

「えっと、経営学修士、だっけ？」

「そう。アメリカのハーバード辺りで取得したMBAが持て囃された時期があつてね。会社は株主のものだ、とする国で学んだ連中だ。株を上げるため、金のかかる国内技術より、コストパフォーマンスのいい隣国でものを作ろうというわけだ。結果、技術は盗まれ、も

うおまえたちは要らないと言われる始末。だが、連中にしてみればそれでも成功だったんだ。将来のことなんて知らない。目の前の株主を儲けさせることができたんだから」

「ちよっと！ あんたたちなんの話してんのよ。さつきからまるつきりついていけないんだけど」

そう言ったのは、さっちゃんに寄りかかられた麻里だ。

そうだった。今はこいつも紅もいるんだった。俺や雄太は聖の高説に慣れているが、免疫のないやつには解り辛いよな。

「ごほん、いや、すまない。つまりなにが言いたいのか、というと、中国に技術提供をした日本には、当然模倣の技術がある、ということだ」

「銃を作る技術、ってこと？」

「日本国内に銃器を持ち込もうとするのは多大な危険が生じる。だが、設計図ならメール一本だ。いや、公表しているサイトでも見ればそれすらも必要ないか」

「だが、技術的に作れる、ってことと、実際に作ったのか、てことになるかと別問題だろう。本当に工業団地に銃があるのか？」

「……あります」

そう言ったのは、今まで無言だった紅だ。

「ようやく牧原先輩が私を随行させた理由がわかりました。私に、案内させようとしているんですね」

聖は、にやりと笑って煙草を噛んだ。

「そういうことだ。別に公おおやけにすることではない。目的が達成できるなら、きみのことは秘匿にするつもりだったのだが？」

「いえ、隠すことでもありませんから。特にこのような状況になっ
てしまっっては……」

紅は、運転席の窓をわずかに開けた。

「直以先輩、今から行くところは、私の祖父の知り合いの方が経営している会社です」

「そこに、銃があるのか？」

「あります」

紅は、そう断言して、語りだした。

「私の祖父は、ある意味狂人でした。この国でいつか革命が起こる。そう信じて、自分の一生を本当にそのときのためだけに使った人でした。私は、そんな祖父に育てられました。いつか起こる革命を成功させるために、祖父は様々なことを私に教えてくれました。運転技術もそのひとつです」

反応が気になるのか、紅はわずかに視線を俺に向けた。

「祖父には協力者がいました。それが今から行く会社の社長です。その社長は少しずつ材料を誤魔化し、改良を加え、そして、別の協力者と共に、いつくるかわからない革命のための武器を隠し溜めているんです。もっとも……、牧原先輩がそのことを知っているということは、この情報は筒抜けだったようですが」

「まあ、ね。私は同じ市内のことだから知っていた、ということもあるが」

外を見ると景色は一変していた。無骨な長い壁とプレハブの屋根が軒を連ねている。川の下流にある、工業団地だ。

「私は銃の在処を知っています。今からご案内します」

紅はそれを最後に口を噤み、そのまま5分ほど車を走らせた。

車が止まった場所は、警察署と同じだった。おそらく工場があっただろうその場所は、火事で焼け落ちていたのだ。

「ゾンビ騒動の最中、事故があつて火事になったのか……」

「あるいは、人為的に、ですか？」

紅は、躊躇うこともなく工場跡に足を踏み入れた。俺たちも後に続く。眠っているさっちゃんも車内でお留守番だ。

焼け焦げた死体に見向きもせず、紅は目的の場所に向かっていく。途中、落ちていた5キロのハンマーを拾い上げると、紅は足を止めた。

そこは、なにもない場所だった。

工場から事務所に向かう道からわずかに逸れた奥詰りの場所。5メートル四方のコンクリート、その端に、マンホールを埋めたようになわずかに盛り上がった箇所がある。

俺は、ハンマーを紅から奪った。

「そこを壊すのか？」

「……はい、お願いします」

俺は、ハンマーを振り上げた。重心が先にあるそれは、荒瀬先輩のスコップとは違った重さだった。

ハンマーを一気に振り下ろす。鈍い音が辺りに響き、コンクリートにヒビが入った。

「……麻里、周辺の警戒を頼む」

2度、3度と振り下ろすと、金物が落ちた音と共に、ようやくコンクリートは割れた。コンクリートの下からは底に向かう穴が見えた。3メートルほど下の底では蓋が音を立てて転がっている。どうやらこの穴は、サイズの合う蓋に生コンクリートをかぶせて塞いだだけだったようだ。

「この下に銃があります」

下に梯子を掛け、最初に懐中電灯を持った紅が降り、聖が続く。麻里がその後に降りようとしたのを、俺は止めた。

「あにすんのよー！」

「さっきの音が気になる。けっこう響いていただけろう？俺たちは、外で待っていてよう」

麻里は、嫌々ながらも俺に従った。ひょっとしたらこいつ、銃を見たかったのかもな。

下からはいちいち聖の驚嘆の声が聞こえる。麻里ならずとも気になるところだ。

「おーい、早くしろ。ゾンビが来るかもしれないんだからな」

俺が下にそう言ったのと、麻里が俺の肩を叩いたのはほぼ同時だった。

前を見ると、ゾンビが、いた。それもひとりや2人ではない。見渡す限りだ。

「おいおい、なんて数だよ」

「2人で教室棟の2階を走ったときより多いかもね」

俺は、ハンマーを握った。

「直以、金属バット貸して」

「いや、麻里はモデルガンで援護してくれ。おまえがバット振り回してもゾンビの頭は割れないだろ。それより、中度感染者に気を付けてくれ」

麻里は舌打ちし、下に叫んだ。

「ちよつと、早くしてよ。ゾンビ来ちゃってるわよ！」

そう言った後でぼそりと言。

「あの2人が上がってきてても足手まといだけどね」

「まあな。下にある銃器に期待と、行こうぜ！」

俺は駆け出し、勢いをつけてハンマーを振り回した。ゾンビの頭は陥没し、そのまま横っ飛びに倒れた。身体を泳がせながらも2人目のゾンビにハンマーを振るう。

5人ほどを倒したところで、俺は一度ゾンビどもから距離を置き、麻里の傍に戻った。

麻里は雨に濡れた前髪を払った。

「はあ、はあ。まずいな。数が多すぎる」

「これ、さすがに手に余っちゃってるわね」

俺は迫ってくるゾンビの手を引き、足払いで転ばせると、その頭にハンマーを叩きつけた。麻里の真似だが、けっこううまくいった。ハンマーを振り上げない分、わずかながら楽だった。

麻里も近づくとゾンビに足払いを食らわせる。俺はその頭にハンマーを振り下ろす。

と、そのときだった。最初に倒したと思っていたゾンビが、俺の足首を掴んだのだ。万力のような力で締め上げ、爪が肌に食い込んだ。

「伊草先輩！」

その声に反応して、麻里は下から放り上げられたものを受け取った。

麻里は躊躇うこともなく、俺の足首を掴んでいるゾンビの頭に発砲した。

ゾンビの頭は砕け、俺の足元を脳漿が汚した。雨水が赤を地面に広げていく。

麻里は、自分の手元にある小型の拳銃を見た。

「麻里、助かった」

麻里は俺の言葉が聞こえないようで、呆然としていたが、やがて、大声で叫んだ。

「なによこれ~~~~~!!」

麻里は叫びながらも近づくとゾンビに続けざまに発砲した。

ゾンビは額から弾丸を受け、後頭部を爆ぜて倒れた。

「なにこれ、おかしいわよ。どうなってんの!？」

麻里は混乱しながらも撃ち続ける。その全てがヘッドショットなのは大したものだった。

「純国産の銃の威力はどうだね？」

ようやく聖が上に這い出してくる。麻里は撃ち終えた拳銃を俺に放り投げ、聖から新たな拳銃を奪っていた。

「ちょっと、牧原、これ、おかしいわよ！ 威力がありすぎる！」

聖は、人の悪い笑みを浮かべた。

「私もそう思う。いや、正直あげつないね」

「おい、麻里。いったいなんだってんだよ」

麻里は、軽く息を吸い込むと、少し落ち着いて俺に説明してくれた。

「銃の殺傷能力ってのは、銃弾で決まるの。口径の大きな銃は、大きな弾を撃てるから殺傷能力が高くて、小さい銃は小さな弾しか撃てないけど、反動が小さいから当てやすいみたいだね。でも、これ、殺傷能力が高すぎる。豆鉄砲みたいな口径なのに」

聖は、麻里に銃弾をひとつ投げてよこした。

「これ……、ホローポイント？ ううん、少し違う。なんか、弾頭が、変」

「おや、わかるかね。これは、100パーセント銅製だ」

「メタルジャケットじゃない、全体で形を変えるの？ 話には聞いたことあるけど……、うっわ、極悪」

「そろそろ俺にもわかるように言え」

聖は、俺の傍に立った。

「直以にわかりやすく、か。ダムダム弾はわかるかね？」

「えっと、なんかの条約で禁止になってるやつだろ？ 殺傷能力が高すぎるってやつ。それを使ってるのか？」

「イメージはそれでいい。実際は微妙に違うんだが、それは説明しなくてもいいだろう。簡単に言うと、柔らかい弾を使っているんだ。弾は対象に当たると潰れ、面を作ってそのまま押し出す、対象を破壊しながらね。貫通能力には劣るが、こと、人体にはかなりの影響力だ」

聖は、拳銃をゾンビに向けると、発砲した。ゾンビは肩を吹き飛ばされ、腕をもげさせた。

「なるほど、小型の爆弾並み、というやつだな」

俺には、銃本来の威力がわからないので、その銃弾のすごさはわからなかった。

ただ、これがあるならこの状況もなんとか逃れられる。それだけはわかった。

だむだむ（後書き）

銅の弾丸の話はフィクションです。ていうか、実際に試すわけにも
いかないし。ただ、火縄銃の弾つてのはこうだったらしいです。詳
細を知っている方はご一報ください。有効に活用させていただきま
す。

どぶねずみは、経済批判などをする気はありません。

その上で、わざわざ横道に逸れると断つてまでMBAに触れたのは、
即物的であるがゆえにわかりやすく周りからの支持を集める、とい
う、大地の戦略にリンクするからです。

ただ、それが出てくるのはまだまだ先ですし、どぶねずみ自身が忘
れそうなので、書いておいた次第でございます。

写真を撮ろう

エクストラストーリー1 (前書き)

今回は梨子視点です。

昼から降り出した雨は勢いを増して学校全体を包んでいる。外で働いていた人たちは雨と同時に校舎内に避難していて、思いの場所で時間を潰していた。

私、遠野梨子は薄暗い電灯の中、廊下を小走りに駆けて図書室のドアを開けた。

「あれ、雄太お兄ちゃん、どうしたの？」

「……ああ、梨子」

図書室には、ダンボールを敷布団にした雄太お兄ちゃんがおっきな本を枕にして寝ていた。雄太お兄ちゃんは私に気づくとゆっくりと身体を起こした。

私は、わざと怒ったふりをしてお説教した。

「もう、ひよっとしてさぼっていたの？ 駄目でしょ、直にお兄ちゃんたちだって頑張っているのに」

「梨子は厳しいなあ。さて、見つかったからには仕事に戻るか」

そう言っただけ雄太お兄ちゃんは私に微笑んだ。雄太お兄ちゃんはすごい美少年だから、少しどきっとしてしまう。

実は、これは演技だ。雄太お兄ちゃんは誰よりも働いているし、雄太お兄ちゃんは、私が怒っているふりをしているのを気づいているだろう。

私は、雄太お兄ちゃんのこといったやりとりが好きだった。

雄太お兄ちゃんは枕にしていた本を机に置くとイスに座った。重そうな、ハードカバーの本を開く。

私は、雄太お兄ちゃんの隣に座った。

「雄太お兄ちゃんは今なにやっているの？」

「……ああ。川から水を吸い上げるポンプをなんとか別系統にでき

ないかと思つて。電気用の給水塔と生活用の給水塔に分けられたら便利だろ？ あゝ、他にも畑用のも分けなくちゃいけないんだよな」

「それ、聖お姉ちゃんの指示？」

「そ。あいつ、人使い荒いんだよ。俺は電気屋でも配管工でもないんだぜ。ぶつちやけ荷が重いつて」

そう言つて雄太お兄ちゃんは机に突つ伏した。私は雄太お兄ちゃんのさらさらの髪を撫でてあげた。

「聖お姉ちゃんつて、頭いいんだよね。自分ではできないの？」

「あいつは、確かに色んな知識を持つてるし発想もすごいけど、ひとりじゃなにもできないやつなんだよ」

「そうなの？」

「あいつは理論だけ。まあ、俺や直以が代わりに動くから別にいいんだけどな」

そう言う雄太お兄ちゃんは、どこか誇らしげに見えた。

「それで、梨子はどうしたんだ？」

「？ どうしたつて？」

「なんか用があつて図書室に来たんじゃないの？」

「あ、そうだった！」

私はイスから立ち上がり、本棚に向かった。雄太お兄ちゃんも私の後についてくる。

「須藤先輩に本を持ってきてくれて言われてるの。えっと、ぶけいしちしょつて本」

「武経七書か。それ、一冊の本じゃないよ。確か諸子百家のコーナーにあるな。孫呉韜略に尉繚子、司馬法、李衛公問対は別の場所か」

雄太お兄ちゃんはどうんと私の手元に本を置いてくれる。持ちきれなくなつた私は、一度本を机の上に置いた。

「えっと、孫子と呉子は私も知ってる。それに……」

「りくとう」

「六韜、三略、えっと、いりょうし？」

「うつりようし」

「こんなの読めないよお。雄太お兄ちゃん、よく知ってるね」

「この辺のことは俺より直以の専門だけどね」

「え、そうなの!？」

私の食いつきに、雄太お兄ちゃんは苦笑を浮かべながらも教えてくれた。

「あいつ、バスケやってたときはポイントガードでさ。当時からリーダーシップとか戦略論とかで四苦八苦してたからなあ」

「そうなんだ。私も読んだほうがいいのかなあ？」

私は、私でも知っている孫子を手に取った。えっと、其の情を索む……、駄目だ。もう頭から湯気が出そうになってる。

雄太お兄ちゃんは私の頭を撫でてくれた。雄太お兄ちゃんの指は独特だ。横に、細い溝が入っているのだ。ギターの弦を押さえるとこうなるらしい。

「おまえが無理に勉強することはないよ。俺や聖の知らないことを梨子は知ってるだろ？ 無理に同じことを学ぶ必要なんてない」

「うっ、でも」

直以お兄ちゃんと同じものを共有したい、そう思ったが、さすがに口には出せない。

「梨子は、梨子なりに直以についていけばいいよ」

「……、なんで直以お兄ちゃんなの!？」

「あれ、違った？」

私は雄太お兄ちゃんの肩を叩く。雄太お兄ちゃんは笑いながらそれを受けてくれた。

「だけど、梨子。直以と聖についていくのはぶっちゃけ大変だぞ」

「うん。わかってる。ふたりともすごいもんね。私には、雄太お兄ちゃんもすごい人だけど」

「俺は……、これでも必死だよ。あいつらと肩並べるだけでもきついんだから」

「きつと、直以お兄ちゃんも聖お姉ちゃんも同じことを思っている

よ。お互いに切磋琢磨できるいい関係なんだね」

雄太お兄ちゃんは照れくさそうに微笑んだ。

「だけど、思う。」

この人たちと一緒にいるってことは、すごく大変なんだと思う。だけど、その大変さはすぐわくわくするものだった。

まだ知り合って1週間も経っていない関係だ。だけど、私はこの人たちを心から信頼しているし、大好きなのだ。

私はこの人たちのことをもっと知りたいし、私のことをもっと知ってもらいたい。

そのための大変さは、すごく心地いいと思った。

私は、孫子を閉じた。と、孫子の隙間から紙が落ちた。私はそれを拾った。それは、写真だった。

「雄太お兄ちゃん！ これこれ！」

「お、懐かしいなあ。去年のクリスマスに撮ったやつだよ」

その写真は、雄太お兄ちゃん、聖お姉ちゃん、直以お兄ちゃん3人の写真だった。聖お姉ちゃんを真ん中に、頬をくっつけ合っている。

「孫子に挟まっていたのか。きっと聖のイタズラだな。直以が見たときに驚かせようとしたんだろう」

「いいな。私も写真撮りたい」

「そうだなあ。あいつらが帰ってきたら一緒に撮ろうか」

「うん」

「実は、俺たちが一緒に写っている写真ってけっこう少ないんだよな。直以も聖も携帯のカメラ振り回すやつじゃないし」

「そうなの？ それじゃあこれからいっぱい記録残していこうね」

「おう、なんの話だ？」

と、そのとき、図書室の入り口から声がした。直以お兄ちゃんだ。隣には聖お姉ちゃんもいる。2人は、制服ではなくお揃いのユニク

ロジャージを着ていた。むっ、パールツク……。

「お帰り、首尾はどうだった？」

「最悪の3歩手前くらいかな。生存者はひとりだけでゾンビは大量。不幸中の幸いは物資が大量に残っているってところか」

「直以お兄ちゃん、お帰りなさい」

「ただいま。おにぎり、うまかったぞ」

そう言っただけで直以お兄ちゃんは私の頭を撫でてくれた。胸と頬が少しだけ熱くなった。

「梨子くん、私にはお帰りといってくれないのかい？」

聖お姉ちゃんは雨に濡れたウェーブのかかった髪を払った。

普段の口調や態度から返って目立たなくなっているけど、聖お姉ちゃんはすごい美人だ。それは、いろんな意味で私のライバルであるということだ。

私は、わざと聖お姉ちゃんを無視した。聖お姉ちゃんは目に見えて顔色を変えて、直以お兄ちゃんにすがりついた。

「なおい〜、梨子くんにきらわれた〜」

直以お兄ちゃんはうるさげに聖お姉ちゃんを押し退けると、机に乗っている武経七書を見た。

「なんだ、兵法談議か？ 俺も混ぜるよ」

「そうじゃないよ。ほら、これ」

雄太お兄ちゃんは直以お兄ちゃんに写真を見せた。

「これ、去年のクリスマスなのやつか。なんでこんなところにあるんだ？」

「どうせ聖だろう？」

みんなの視線が聖お姉ちゃんに向く。聖お姉ちゃんは、膝を抱えて床にのの字を書いていた。

私は腰を屈めて聖お姉ちゃんに言った。

「聖お姉ちゃん。一緒に写真撮ろ？」

「……いいんだ。私はこのままひとりで生きて寂しい老後を過ごすから」

「だ〜め。4人で一緒に写真を撮るの　一緒じゃないと嫌なの！」
「そ、そうか。梨子くんがそこまで言うんじゃ仕方ないな」

私は、聖お姉ちゃんを立たせる。聖お姉ちゃんはほくほく顔で立ち上がった。

「それで、携帯で撮るか？　後でプリンタで印刷すれば紙で残せるだろ」

「カメラはないのか？」

「写真部の部室に行けばあるだろうけど、フィルムだと現像が面倒くさい」

「それじゃ携帯だね」

私は携帯を取り出した。考えてみれば、使えないのに未だに充電して持っているんだから不思議だ。

「直以。戻ったか」

タイミングよく荒瀬先輩が図書室に来る。

あ、しまった。荒瀬先輩は、本を取りに行つて戻らない私を向かえに来たのかもしれない。

そんなことを知らない直以お兄ちゃんは私から携帯を取ると、荒瀬先輩に渡した。

「荒瀬先輩、悪いけど、ちょっと写真取つてよ」

「……ああ。わかった」

荒瀬先輩は、少し口ごもりながらも応じてくれた。

私はこの人、怖くて苦手だけど、ひよっとしたらいい人なのかもしれない。直以お兄ちゃんはこの人のことを信頼しているみたいだし。

「ほら、もっと寄れ」

私たちは、頬をくっつけた。おしくらまんじゅうみたいにぎゅうぎゅうに寄り合う。

「ふあ〜っく！」

急に直以お兄ちゃんは叫んで中指を立てた。

「「ふあ〜っく!!」「」

私たちも叫んで中指を立てる。そこを荒瀬先輩はパシヤリ。

「……おまえら。俺に喧嘩売ってんのか？」

不機嫌そうに私たちを睨む荒瀬先輩。

私たちは同時に首を横に振った。

私は、私たちは顔を見合わせて、おもいつきり笑ってしまった。

写真を撮ろう

エクストラストーリー1（後書き）

タグに孫子を追加しました。理由は最近読み直したからです。それに伴ってストーリーも外政を中心に展開していくと思います。ぶっちゃけると、内政向きの話は、別の小説（正確にはシミュレーションゲームの企画で漂流教室的なもの）でやっていますので。

ちなみに、ユニクロに寄った話は全カットです。

ユニクロって言葉を使いたくなくなりましたが、大型の被服店に当たる言葉が思いつかなかったのです。

この小説ではユニクロは企業名ではなく、大型の服屋全般の総称とお思ってください。

揺れる自然美

ゾンビ発生から一週間が経った。

依然として救助隊が来る様子はなく、ゾンビどもは学校外を徘徊している。

日常にはそれなりに変化があった。

例えば生鮮食料がなくなったこと。予想できたことではあるが、食生活の強制的な変換は、けっこう堪えるものがあつた。

他にも、生活単位が班になった。10人で1班、その中のひとりを班長にして、作業を班単位で指示する。作業をさぼっていると、街への調達班に選ばれなかったり、調達してきた物資を分配するときの優先権が低くなったりする。

洗濯やらシャワーなんかを使う時間も班で分けられたりしていた。須藤先輩の発案だが、今のところはうまく機能していた。

俺は、というと須藤先輩と同じ1班に入れられた。構成員は須藤先輩を班長に、俺こと菅田直以、遠野梨子、青井雄太、牧原聖、進藤紅、荒瀬宏、それにさっちゃんこと外岡皐月の8人だ。

1班は少し特殊で、特定の仕事に従事することはなく、いわゆる統括的な仕事をしている。ぶっちゃんけるなら、それぞれで勝手に動いている状態だった。

さっちゃんはお医者さんらしく保険室に詰めているし、雄太と聖はなにやら俺のわからない技術的なことをやっている。

紅と須藤先輩は、いわゆる事務仕事だ。今日の作業はどれだけ進んだとか、昨日の夕飯は好評だったとか、あの班にはどんな不満があるとか。そういったことをこつこつとまとめている。俺には絶対にできない面倒事だ。

俺は、というと、荒瀬先輩について畑作りに精を出していた。邪

魔なゾンビを倒して入ってこれないよう柵を設置し、土地を測量して荒地を耕す。

試作にサツマイモとトマトを植えているのだが、この間、芽を出していたのにはかなり感動したりしていた。

そして、我らが妹姫はというと……。

「直におにくちゃーん！」

梨子は手を思い切り振って俺のところまで駆けてきた。手には大きなバスケットを持っている。

俺は荒瀬先輩を見た。

「もう昼か。少し休むぞ」

俺はようやく出た休憩に大きく息を吹き、梨子を出迎えた。

「梨子。弁当持ってきてくれたのか？」

「うん」

梨子はバスケットからビニールシートを取り出して俺に渡した。

俺は荒瀬先輩と一緒にビニールシートを広げた。その上に梨子は弁当を並べる。

「遠野は今日なにやってたんだ？」

荒瀬先輩の質問に梨子は人差し指を下唇に当てて答えた。以前はビクビクしていたが、最近は慣れてきたのだらう。梨子は荒瀬先輩とも普通に話せるようになっていた。

「えっと、まずは聖お姉ちゃんたちのところにて、さっちゃんとお茶して、その後は紅ちゃんたちのお仕事手伝って、さっちゃんとお茶して、それで今、お弁当作ってここに来たの」

なんかお茶が多い気がするが、梨子がさぼっているんじゃないかと、無理やりちびっこ医師に付き合わされたんだらう。

「ちよこまかと小間使いしてるんだな」

梨子は相変わらず忙しなく動き回っていた。少し変わったことといえば班分けをしたことで班内の仕事をよくするようになったこと

と、俺の傍にいるようになったことだ。

俺は弁当のタコさんウィンナーを摘まんた。

「これ、冷凍食品？」

「うん……。ごめんなさい。本当はちゃんとお料理したかったんだけど」

「いや、いいよ。梨子のせいでもないしな。それに、俺んちの弁当なんて大抵こんなもんだったぞ」

「だが、これから食生活はどんどん劣化していくぞ。生卵はもう残ってないだろう？」

梨子は荒瀬先輩に頷いた。

「どこからか鶏、調達しますか？」

「そうだな。鶏糞は肥料にもなるから、畑が軌道に乗ったら養鶏も考えるか」

「そのうち、豚や牛もやることになりそうですね」

「そうになると、学校だけでは手狭だな」

真剣に考察する荒瀬先輩を見て、俺と梨子は顔を見合わせて笑った。その笑い声につられて、柵の外のゾンビがひとり向かってくる。

荒瀬先輩は、耕作中に出てきた石を拾うと、ゾンビに向かって投げた。ゾンビは石を額に突き立て、後ろに倒れて動かなくなった。つたく、相変わらずの馬鹿力だ。

梨子は笑い顔をひきつらせて固まっている。荒瀬先輩はめったにしない笑みを見せて、梨子に言った。

「飯の最中に悪かったな」

「い、いえ！ そうだ、直にお兄ちゃん。お昼から出かけるから、早く校舎に戻らなくちゃだめだよ！」

話を変えるためか、梨子はいきなりそんなことを言ってきた。

「昼？ 昼になんかあったっけか？」

「今日は1班と8班が街に物資調達に行く日ですよ。私、楽しみにしていたんだから」

「そうか。荒瀬先輩、昼からの作業はどうします？」

「俺がやっておくからおまえは行ってこい」

「行かないんですか？」

「ああ。俺は残る」

さて、どうしようか。なにか俺だけ街に行くのは、荒瀬先輩に仕事を押し付けるみたいで嫌だが。

ふと見ると、梨子が目を輝かせて俺を見ている。

まあ、こいつの期待は裏切れないか。

「それじゃあ頼みます。梨子、午後は一緒に街に行くか？」

「うん　よかった」。実は、聖お姉ちゃんは行かないって言うてるんだよ」

まあ、あいつはそうだろうな。以前一度街に行ってるし、わざわざ2度も見る必要はないと思っているんだろう。

「それじゃあ、1班は荒瀬先輩と聖を抜いた6人か？」

「ううん。須藤先輩とさっちゃんも行かないって。さっちゃんはお酒持って来いって言ってたよ」

「あいつ、ちびっこのくせに駄目駄目だな」

「そんなこと言うともた白衣の袖でぺちぺち殴られるよ」

梨子はくすくすと笑った。

俺は、梨子の花開くような笑顔を見て思った。

わざわざ昼飯をもって来てくれたように、こいつには色々世話になっている。対して俺はこいつになにもしてやれていない。

こいつが喜ぶなら、今日の残り半日くらい付き合っただるのも悪くない。そう思った。

午後の1時を少し過ぎた頃、俺たちはロータリーに集合した。集まったのは、8班の10人と1班の4人だ。

紅は、野球部の遠征用バスから降りると俺の前に立った。

「直以先輩、お疲れ様です。どうやら全員揃っているようですな。さっそく出発しますか？」

「ああ。運転は任せてもいいかな」

「はい。大丈夫です。私が運転します」

「それで、8班の班長は……」

紅は視線を俺の後ろに向けた。

俺は、振り返った。

そこには、雄大な自然美があった。

「直以くん。えっと、直接話したことってなかったよね。私は内藤晴美。今日はよろしくね」

「あ、ああ。よろしく」

俺は、視線を上げた。

そこに立っていたのは女子だった。三つ編みにメガネを掛けた地味っ子だ。地味じゃないところは首の下についていた。

でかい。

とにかくでかい。

なにがでかいって胸がでかい。

メロン、いや、スイカ、いや、地球……。

「あの……、直以くん？」

「お、おば。おばはぐほう！」

尻に衝撃を受ける。紅が膝を叩き込んできたのだ。ぐ、けっこう利いたが俺は正気に戻れた。しかし、紅に突っ込まれるとは……。

「いや、悪い。内藤。確か同学年だったよな。よろしくな」

内藤はわずかに微笑んだ。胸も微笑んだ。いや、わずかな身じろぎでバインボイン揺れるんだって。これ、目に毒だな。

俺は視線を逸らして言った。

「8班は街に行くのは初めてか？」

「うん。だからみんなすごく楽しみにしていたんだよ」

「それじゃあ悪いけど、しばらくは俺が仕切るな。細々とした注意点もあるし」

「うん、わかった。じゃあみんな、バスに乗り込んで！」

内藤の指示で8班の連中はバスに乗り込んでいく。内藤もそいつらに続いてバスに乗り込んだ。後姿からも胸の揺れは確認できた。

俺は内藤の手際（と、おっぱい）に感心する。一応の統率は執れているようだ。まあ、爆弾女、須藤清良の人選だ。あの人に限つていえばミスキャストはないだろう。

「直におに〜ちゃん」

声のほうを向くと、雄太と梨子が立っていた。

梨子は俺の腕に抱きついてきた。……こいつの胸はこれから期待だな。

「さ、私たちも行こ」

梨子は俺の腕を引っ張るが、俺はそれを止めて雄太に聞いた。

「雄太、銃は？」

「拳銃を一丁だけ。紅に持たせてる」

俺は紅を見た。紅は、ブレザーの胸を軽く叩いてみせた。

俺たちが見つつけてきた銃は、周りには秘密にしていた。

変な誤解をされても困るからだ。

銃はあくまで外敵に向けられるものであつて内部には使用しない。須藤先輩はそう言つて調達してきた銃の大半を地下室に封印した。このことは1班の8人と、調達のときに一緒にいた麻理だけが知っており、大地にも秘されていた。

「正直、中度感染者と遭遇したとき、手ぶらじゃあ心もとないからな」

「直以先輩が所持しますか？」

「いや、紅が持っていてくれ。いざとなったら雄太にな。俺じゃあ当たらないから」

俺は梨子の頭を撫でた。今までお預けを食らっていた梨子は、それを合図にぐんぐん俺を引っ張っていく。

俺たちは、梨子を先頭にバスに乗り込んだ。

調達班には、ちよつとしたルールがある。

まずは調達する場所と物資を指定される。集めてくるものは食料品や衣料品、その他もろもろでリストアップされている。これは学校に戻ると班の優先順位ごとに仕分けされる。

それが終わると自由時間だ。自分たちの好きなものを持てるだけ自分のものとして調達できるのだ。

4時半までに戻らないと調達は全部没収というシビアな条件はあるが、それでも普段学校内で禁欲的な生活を強制されている学生たちには立派なバカンスなのだ。

みんな調達班になりたがり、そのためにも学校内の作業を頑張るというわけだ。

「紅、今日の調達場所はどこだ？」

「古泉区です。あそこには大型ショッピングモールがあるのでそこに向かっていのですがよろしいでしょうか？」

「ああ。頼む。内藤、そういうことだが問題はないよな」

「あ、うん……」
内藤は歯切れ悪く答えた。胸は車の震動に合わせて小刻みに揺れている。

「意見があるなら今のうちに言ってくれよ」

「あ、その……。古泉区には私の実家があるから寄りたんだけど」

「そうか。それじゃあさっさと用事済ませて帰りに寄って行くぞ。」

紅、今日の調達物資はなんだ？」

紅は運転しながら答えた。

「医薬品です。種類を言ってもわからないだろうから、全部持って来いとのことです。あ、あとお酒」

「それは、さっちゃんだな」

紅は大きく頷いた。つたく、そういう大雑把なところがちびっこの部屋を掃除できない要因だな。

「それじゃあ2つに分かれよう。男はゾンビの掃討。女は医薬品を梱包して車内に積んでくれ。内藤、女子の仕事任せても大丈夫だよな」

「うん。わかった」

俺は後部座席にいる8班の男を見た。文化部が2人、運動部が2人、それに、髪を金色に染めたやつがひとりだ。

「よっし、男班は降車後、薬局目指すぞ」

後部からは元気のない声。まあ、いきなり俺なんかには仕切られて困っているんだろう。

と、いきなり金髪が立ち上がって歩いてきた。三白眼に眉まで金に染めた強面だ。でも頭頂部には黒が混ざってるな。

「直以先輩……」

そいつは、俺を見下ろして言った。さすが不良、荒瀬先輩ほどではないにしてもかなり迫力がある。

「俺、頑張るっすから！」

白い歯を見せて笑う不良。あ、なんか愛嬌ある顔だな。

俺の後ろにいた梨子は、俺の肩を揉んだ。俺は、梨子に聞いた。

「梨子、知り合いか？」

「うん。同じクラスの林田隆介くん。見た目どおりの不良で、入学早々に問題起こして学校休んでいたんだけど……」

ゾンビ発生したときに学校にいたわけか。運がいいんだか悪いんだか。

「おい遠野、なに話してんだ！」

梨子はさつと俺の影に隠れる。自然、林田は俺を睨む形になる。俺は睨み返した。

梨子は、俺の影に隠れたままぼそりと一言。

「荒瀬先輩ほど怖くないね」

俺は笑いを堪えた。それをどう解釈したのか、林田は表情を崩して梨子に言った。

「遠野、さん。すいやせん。どうも癖で凄んじまって……」

俺は堪らずに突っ込んだ。

「おい、林田。おまえ、一体なんなんだ！」

「水臭いつすよ。俺のことは隆介って呼んでください！」

「おまえ、すつげえ馴れ馴れしいよ。俺とおまえ、初対面だろ？」

隆介はずうずうしくも俺の隣の席に座った。

「やつぱり覚えてないんすね。俺、ゾンビが湧いてきたあの日に、教室に取り残されたんすよ。それで、直以先輩に助けてもらっただんす。直以先輩にはその他大勢かもしれねえけど、俺には感謝してもしきれないことだったんす」

あゝ、そういえばこんなやつ、いたっけか？

「俺、普段から突っ張ってて、戦争でも起これば俺が一番活躍するって思っていたんすよ。でも、実際にゾンビが出てきたら、なんもできなくて、どうすればいいのかもわからなくて……。そんな中で直以先輩が俺を助けてくれたんす。輝いてたっすよ！」

「おまえ、暑苦しい」

「そんなことを言わないでくださいよ！」

俺はなおも言い寄ってくる隆介を手で追い払う。

そこで今まで黙っていた雄太がぼそり。

「舎弟ができたな」

「いらねえよ。こんな舎弟」

「そんなこと言わずに舎弟にしてくださいよ！ あ、俺、選挙のとき、直以先輩に入れたっすよ」

「てめえは余計なことしやがって！」

「直にお兄ちゃん、どうどう」

隆介に掴みかかるうとする俺を梨子は静める。ちくしょう、梨子に背中を撫でられるとなんかすっげえ落ち着く。

隆介は、頭を掻きながら梨子に言った。

「あの、さ。遠野。さっきは本当に悪かったな。俺、遠野が直以先輩の女だつて知らなかったおおお〜〜!!」

途端、車が急ブレーキで止まった。

梨子は俺にしがみつき、俺も梨子を抱きしめる。内藤の胸は、揺れるというレベルじゃなくどこかに飛んでいきそうな勢いで跳ねていた。

思いつき前に投げ出された隆介は、運転手である紅に詰め寄った。

「いきなりなにすんだ!」

紅は、なぜか不機嫌そうに言った。

「……到着しました」

戈

俺たちは降車後、早速ゾンビ掃討に入った。

隆介が率先して前に出て、雄太が俺の側面をサポートする。隆介と雄太の隙間を埋めるように8班の残りの男が動く。

悪くない手際だった。

隆介も頑張ると宣言しただけあってなかなかの活躍だ。

両手に一本ずつマスケットを持って振り回している。ゾンビを仕留めるといふ動きではないが、殴り倒されたゾンビは火薬棒で確実に倒せたので、結果として効率につながっていた。

「おい、隆介！ 前に出過ぎだ。もっと下がれ！」

「大丈夫っすよ！ こんなやつらに俺がやられるわけないじゃないっすか！」

「いいから下がれ！」

「す、すいやせん！」

ただ、ひとりで突っ走りすぎるところはあったが。

女子のほうも順調に薬局から薬を運び出していた。流れるような手際だ。

俺は、俺の隣に立つ紅に聞いた。

「紅、8班をどう思う？」

「内藤先輩のことですか？ 処理能力は悪くはないと思います。きっと、学校の成績はいいのでしょうね。ですが、あくまで治世の能力で、なにかを成し得る力ではないですね。いいところ現状の維持が限界でしょう」

「おまえ、辛いね。俺なんかはどれだけ低評価なのか、聞くのが怖いなあ」

「私の中では直以先輩は高評価ですよ」

紅はにこりともせずそう言う。

「俺みたいなの等生が？」

「学校の成績を気になさっているのですか？ まったく無意味とはいいませんが、今さら気にする必要はないと思いますよ。評価する機関が機能していないのだから」

明治維新後、この国ではしばらくの間、薩摩や長州出身者が重用されるという縁故人事が横行した。

それはやがて弊害になり、能力が高ければ誰でも重用されるよう改革されることになるが、そのときに、さて、どのように能力を計ればいいのか、ということになった。

そこで、今までの縁故人事とは一線を画し、公正で誰が見てもわかる判別法として採用されたのが、試験制、噛み砕くなら入試テストだ。テストの点が高い低いで見分けるのなら能力の差は一目瞭然だ、というわけだ。

学業的にお世辞にも優秀とはいえない俺は、公正に見て劣等生であることは間違いない。

だが、紅は言う。それは誰によって試験されているのか。

それを試験する学校も文部省もすでに機能していない今、公正であつても内容自体に意味がないというわけだ。

と、そのとき同時に2人に声をかけられた。雄太と内藤だ。

「直以、シヨッピングモール内のゾンビ掃討は大方終わったぞ。まだ見逃した箇所もあるだろうが、大声を出さなければ大丈夫だろう」

「直以くん、女子のほうも無事終わったよ」

俺は内藤の胸の縦揺れを見ながら言った。

「そうか。それじゃあ自由時間にしようか。ひとりでは行動しないことと遠くには行かないこと、それと大きな音を立てないことは厳守してくれ」

それを合図に各々がシヨッピングモール内に散っていく。

つきつき、とか、楽しそうという雰囲気はない。
電気がつかずに人がいない街。自分たちの知っているショッピング
モールとの違いに、当惑しているようだった。

梨子はまっすぐに俺のところを歩いてきた。

「直にお兄ちゃん、これからどうするの?」

「とりあえずさっちゃんの酒。そのあとはおまえに付き合っよ」

「ほうとう? えへへ。それじゃあさっちゃんのお酒をすぐとって
こよ〜ね〜」

梨子はほんわか笑顔で俺の袖を引っ張った。

「それで、梨子はどこに行きたいんだ?」

と、そう言ったのは俺の隣に並んだ雄太。その隣には紅。さらに
隣には隆介がいる。

「……なに、おまえらも一緒に行くの?」

「直以先輩。俺、このショッピングモールでいいとこ知ってんすよ。
今から行きましようぜ」

「おまえは失せろ! んで、紅は一緒に行くか?」

「はい。ご一緒させて頂きます。単独では行動するなどの指示でし
たので」

「そう! 俺もそうっすよ! 直以先輩、俺に付き合ってください
よ!」

「あの、さ、紅。悪いけど隆介の引そ「お断りします」つ……」
即答だった。さらに紅は追い討ちをかける。

「誤解なきようにもう一度はつきり断っておきます。お断りします」
取り付く島もない鉄面皮だ。当事者の隆介は、少し目を赤くして
いる。俺は隆介に同情した。男の心は繊細なのだ。

「……あゝ、そうか。それで、雄太は?」

「俺は梨子に服選び手伝ってもらおうと思って」

「服選び? おまえのか?」

「いや、聖の」

「そういえばあいつの着てるもん、制服とジャージのヘビーローテーションになってるよな」

「シャワーは毎日浴びてるみたいだけど、放っておくと普通に2〜3日同じ服を着てるからなあ」

「懐かしいなあ。出会った当初はそんな感じだったもんな」

俺と雄太は内輪ネタで盛り上がった。ふと見ると梨子がアヒル口で俺を見ていた。

「聖お姉ちゃんって、そこまでだらしない人じゃないよお」

「今はな。去年までは男の俺が引くくらい身だしなみに気を使わないやつだったんだよ」

「今は違うんだよね」

「? ああ。今はだいぶマシになったと思うぞ」

「身だしなみに気を使い出したってことは、見られることを意識してるってことだよな」

「?? ああ、そうなるな」

梨子は眉間に皺を寄せた。雄太を見ると苦笑を浮かべている。なんなんだ、一体?

「それじゃあ雄太先輩と直以先輩で別れましょうよ。直以先輩、女の服選びって時間かかるんすよ。それだけで自由時間終わっちゃいますぜ」

「こいつ、本気で馴れ馴れしいな。俺まで名前かよ。だけど、2手に分かれるのは賛成だな」

俺は腕を組んで考えた。俺の頭の心の天秤は、梨子の笑顔と『いいところ』がせめぎあっていた。

そして、『いいところ』がわずかに勝ったのを確認すると、俺は言った。

「……そうだなあ。そうするか?」

「え〜、今日は直以お兄ちゃんと一緒にいようと思っていたのに」

梨子は両手で俺の袖を引っ張る。こいつは、嬉しいことを言って

くれるなあ。

「2手に分かれたほうがよろしいのでは？ 同じ場所で同じものを調達するより効率的だと思いますし」

紅がそう言うと、雄太も隆介も頷いた。

梨子は、そつと俺の袖から手を離れた。上目遣いで俺を見ている。

梨子の肩に、雄太は手を置いた。

「梨子、俺じゃあ不満か？」

梨子は慌てて首を横に振った。

「それじゃあ今日のところは俺に付き合っつてよ。直以、梨子を借りるよ」

「ああ……。わかった」

梨子は、多少後ろ髪引かれる感じではあったが、雄太に連れられていった。

俺たちは雄太と梨子の2人がショッピングモールに消えるのを見送った。

ん？ 2人？

俺は横を見た。そこには、微動だにせず立っている紅がいた。

「紅、梨子たちと一緒に行かないのか？」

「はい。私は直以先輩と一緒にいようと思います」

……俺は隆介に聞く。

「おい、隆介。これから行くところは女の子は連れて行けるのか？」

「あん？ 別にいいんじゃないっすか？」

「俺たちがよくても紅がよくないだろ？ 少しは気を使えよ」

「直以先輩。どこに行く気なんすか？」

「どこっつて、おまえ……」。

「いいところだろ？ いいところっつたらエロだろ？」

「直以先輩、あんた凄えっすね。俺、学校に寝泊りするようになってからエロ関係なんてまるっきり考えなくなってますよ」

「違うのか？」

「違いますよ。今から行くところは骨董屋です。俺の中学んときの

友人の親戚がやってた店っす」

「エロじゃないのか。せっかく梨子と別れたのに……。」

「悪い、俺、梨子の後を追うわ」

「往生際が悪いっすね。時間が勿体無いからさっさと行くっすよ」

隆介は俺の襟首を掴んだ。俺は引きずられながら、ショッピングモールに入った。

窓ガラスを叩き割り、店内に侵入する。

俺たちは、隆介の案内する骨董屋に到着した。

薄暗い店内は、俺の想像する骨董屋とはまるで違っていた。

茶碗やら巻物やらの古美術品はなく、ナチスの軍服やらネイビーの制服やらが並んでいる。かといってミリタリーショップとも少し違う。区画を変えれば日本刀や鎧甲冑があるのだ。

「私の想像していた骨董屋とは違うみたいです」

紅は生地を確かめるように迷彩色のショートパンツを手にとっている。

「ああ。ま、いいほうに外れたよ」

俺は靴を脱ぎ、軍用ブーツに履き替え、ジャケットを羽織った。

うん、悪くない。何着か拝借することにしよう。

「へへ、どうっすか？」

隆介は俺にジャックナイフを向けた。

「危ねえよ！　だが、確かにいいものが揃ってるな」

「でしょ！？　この店主、軍事マニアなんすよ。ミリタリーグッズだけじゃなくて、いろんな武器なんかも揃えているうちに骨董屋始めたらしいんす。直以先輩もいい武器を見つけてくださいよ」

武器、ねえ。俺は日本刀を手を取った。

「日本刀はお薦めしません。竹刀とは重さが違いますし、扱いには技術がいりますから」

そう言ったのは紅だ。

「まあ、俺には剣道の経験はないからな。下手に扱って欠けたりしたらもつたないもんな」

俺は日本刀を置き、横にある値札を読んだ。ゼロが6つ。おそらく美術品としての価値も高いのだろう。

「それじゃあナイフなんてどうすか？ 日本刀よりは軽いつすよ」「ゾンビ相手にナイフで接近戦は返り血が怖いな。感染の可能性がある」

そう言うと、隆介は手に持っているジャックナイフを置いた。俺は苦笑した。

「大丈夫だよ。ゾンビ相手には使えなくても、他には有用だぞ。威圧目的にも効果あるしな」

「威圧目的って……。直以先輩、あんたけっこう悪つすね」「なにを考えたのか、隆介の俺を見る目に尊敬の度合いが増えた。だから鬱陶しいんだって。」

と、そこで俺はある一画に気付いた。

日本刀のように整列されている場所ではなく、どこか雑然と並んでいるものがある。ジャンクとは言わないまでも、いかにもな安物感が溢れていた。

俺は、そこにある浅黒い鉄を手を取った。

面にはなにやら文様が彫ってある。

鉄の冷たさが手の平に広がった。

「なんすか、それ。文鎮？」

「紅はわかるか？」

「……いえ、わかりません。武器ですか？ 先が尖ってるし、両端は刃物みたいです」

俺は刃りを見渡した。柄の変わりになるものは、すぐに見つかった。

俺は2メートルほどの棒に、靴紐で鉄を垂直に縛りつけた。

「これでわかるか？」

「いえ、槍、じゃないですよ。付け方が違いますから」

「鎌つすか？ それにしては柄が長いっすけど」

俺は、答えを言った。

「これは戈^がだ」

「か？ なんすかそれ」

「古代中国で使われていた武器だよ。戦車がすれ違うときに、これで敵を引つ掛けて倒すって使い方をしたらしい。ちなみに、これと槍の機能を合わせたのが戟^がだ」

「あ、戟なら知ってるっす。三国志の呂布が使ってるやつっすよね」「方天画戟ですね」

「直以先輩、すげえっす。頭いいんすね！」

「ものを知ってるだけの人間を頭がいいとは言わないんだよ」

少し前まで劣等生だと自認していたのに、頭がいいと言われて悪い気はしなかった。なるほど、聖が無駄ウンチクを披露したがるわけだ。

俺は、戈を一振りした。

空気を切り裂く音が店内に響く。重心が先にあるため、振り回さなくても力が込められそうだった。うん、使えるな。

ふと見ると、紅が俺を見ていた。無表情だが、いつもより少しだけ目を見開いている。知り合った当初だったら見逃していただろう変化だ。

「紅、どうした？」

「あ、いえ……。直以先輩のことを見惚れていただけです」

そう言っつて紅は視線を外した。

それって、どういう意味だ？ そう聞き返すわけにもいかず、変な空気が店内に広がる。

「？ 直以先輩、どうしたんすか？」

「なんでもねえよ！」

馬鹿は空気を読まない。だが、それは今はありがたかった。

と、そのときだった。

外から悲鳴が聞こえた。俺は内側からドアを蹴破り、外に飛び出した。

戈（後書き）

おいつす、ごぶさた、おらどぶねずみ。

被災者のみなさん、お疲れ様です。

まずは謝罪。2、3日で終息すると思っていた数日前の自分が恨めしい……。

どぶねずみは援助物資の仕分けボランティアに行ってきました。ですが、定員オーバーで参加できませんでした。関心が高いのは当然として、みんな行動しているようです。

安易に言うべきことではありませんが、これから少しずつでも良くなっていくと思います。そのために馬鹿高い税金を払っているんですしね！

ぼちぼち暗いニュースにも飽きた頃、連載をちびちびと再開していることと思います。

暇つぶしにこれからもお付き合いくださいませ。

手に負えないだろ、色々と

悲鳴の方向に走る。

横には紅がぴたりとついてきていた。

角を曲がった先、そこにそいつはいた。

歳は俺たちと同じくらいだろう、乾いた血糊を身体中にこびりつけている男だった。

そいつが8班の女子を後ろから羽交い絞めにしていた。

俺は、大きく息を吸い込んで呼吸を整えると、男を囲む8班の連中の前に出た。

「よお、生存者だな。無事だったか？」

「こつちに来るな！」

男は割れた声を上げ、バタフライナイフを女子の首に当てた。女子は震えて涙を目に溜めている。

俺は小声で聞いた。

「紅、雄太は？」

「悲鳴は聞こえていると思うのですが」

「交渉は雄太のほうが得意なんだがなあ」

「相手は普通の心理状態ではないようです。気をつけてください」

「わかってるよ」

俺はさらに一步前に出た。男はバタフライナイフを数ミリ女子の首に差し込んだ。女子の首から一筋赤い液体が垂れる。

「こつちに来るなって言ってるだろ！」

「……ああ。わかった。とりあえず落ち着け」

「武器を捨てろ！」

俺は、戈を前に放った。

「言つとおりにしたぞ。今度はおまえが俺の話聞いてくれ」

「うるせえ！」

俺は、男を無視して話し出した。

「俺たちは今、鈴宮高校で救助を待っている。あそこなら食料も水もあるし安全だ。一緒にそこに行こう」

「そんなの信じられるか！ 世界は滅んだんだ、誰も助からないんだ！」

男は口角から泡を飛ばしてそう言った。やばいな。こいつ、相当切羽詰ってる。

「わかった。それじゃあ俺たちは引き上げるから、女子を解放してくれ」

「駄目だ！ この女はもう俺のもんだ！」

「……なんだとこら」

俺は一步前に出た。勢いに押されて男は2歩下がった。

「な、直以くん、ちょっと待って！」

俺を引き止めたのは、内藤だった。両腕で俺の腕を取り、馬鹿でかい胸を押し付けてくる。

男は俺から視線を外し、内藤を見て激昂した。

「ちくしょう、馬鹿にしゃがって！ 俺は人を殺してるんだぞ！」

なめるんじゃないぞぞ！」

「ま、まって！ 私たち、そんなつもりはないの！」

内藤は俺の前に立った。止める間もなかった。

男は抱えていた女を突き飛ばすと、組し易いと見た内藤に斬りかかった。俺は内藤の襟首を引き、覆いかぶさるように押し倒した。

一瞬、体中の温度が下がった。その直後に失った温度が一箇所に集まったように、左肩を灼熱が襲った。

バタフライナイフは俺の肩骨にぶつかり、肉を削ぎながら横滑りする。

痛みに目が眩み、バランスを崩した内藤を抱えて身動きが取れない。

俺は、致命傷になるだろう2撃目を覚悟した。

次の瞬間、乾いた音がショッピングモールに響いた。

俺の視線の先には、拳銃を両手で構える紅がいた。

俺の後ろにいた男が倒れる音が聞こえる。

「直以先輩、大丈夫ですか？」

普段と変わらない声調で紅が聞いてくる。俺は斬られた肩を撫でた。粘性のある、熱い液体が手に付着した。

「……せつかく調達したジャケットがもう傷ものだよ」

俺は立ち上がるうとした。わずかの動きでも肩に響いて痛みが走る。そこを俺は突き飛ばされた。

「なんで撃つたの！」

俺を突き飛ばした内藤は紅に詰め寄った。紅は鉄面皮で内藤に応じる。

「直以先輩の、いいえ、あなたたちの危機でした」

「だからって殺すことなかったでしょう！ あなたのやったことは殺人よ！」

内藤はヒステリックに紅を責める。紅は瞳を細めてそれを聞いていた。

「なにがあつたんすか？」

今さら来た隆介は、俺を抱え起こしてくれた。

「おまえ、本当に役に立たねえな」

「そんなこと言わないでくださいよ。直以先輩たちが店を飛び出していった、俺、これでも必死で探したんすよ」

俺は隆介に手伝ってもらってジャケットを脱いだ。下に着ていたワイシャツは、赤い染みを大きく広げていた。

「な、直以お兄ちゃん！」

いつ来たのか、雄太と梨子がいた。梨子は手に持っていた大量の荷物を落とすと俺のところを駆けしてきた。

俺は雄太に言った。

「遅いよ。つたく、肝心なときにいねえんだからな」

「……染みるけど我慢しろよ」

雄太は俺のワイシャツを裂くと、傷口の洗浄のために、調達してきたさっちゃん用の日本酒をかけた。

「つぐ！」

俺は歯を食いしばった。

「幸い医薬品はバスに積み込んである。車内に戻って止血だな。梨子、先に戻って用意して！ ガーゼと消毒液！ それとタオル！」

「は、はい！」

俺の手を取ってわたわたしていた梨子は、雄太に指示を出されると全速力でバスに向かって走っていった。

「隆介、梨子を頼む」

「ういっす！」

隆介は梨子を追って走り出す。

俺は、雄太に肩を借りながら、戈を杖にして立ち上がった。

辺りを見渡すと、銃声に反応したゾンビがちらほらと姿を現していた。

「内藤！ その辺りにしておけ」

「で、でも直以くん！ この子は人殺しを……」

「紅が動いてくれなかったら俺が殺されていたよ。紅、ありがとう
な」

「直以くん！ 他にもあるのよ、この子は銃を隠し持っていたの！」

「……それについては須藤先輩の指示だ」

「私たちには黙っていたの！」

「雄太、女子の様子を見てくれ」

「女子？ ああ、わかった」

男に羽交い絞めされていた女子は、仲間間で泣いていた。雄太は女子の傷付いた首を手当てする。

「直以くん！ どういうことか説明してよ！」

内藤は胸を揺らしながら俺に詰め寄ろうとした。それを、紅は遮

った。

「いい加減にしてください。私にはなにを言おうとかまいませんが、あなたをかばって怪我をしている直以先輩を責めるのは筋違いですよ」

「せ、責めてるんじゃないわ！ 私は、大事なことを隠していた直以くんが！」

内藤は支離滅裂に俺たちを批判し続けた。

目の前で人が死んだのだ。取り乱すのもわかるが、少し感情的すぎだ。なるほど、内藤は、紅の言うとおりにレギュラーに対応できない治世の人間だった。

俺は、内藤を無視してバスに向かって歩き出した。一步一步が傷口に響いた。内藤は紅を押し退け、俺の腕を掴んだ。

「待ってよ！ 話は終わってないでしょ！」

「後にしろ！」

雄太は内藤を怒鳴りつけると、その頬を叩いた。内藤はその一発で黙った。

「直以、大丈夫か？」

「ああ。だけど雄太、やりすぎだ。女叩いたら評価はガタ落ちだぞ」
「今さら人気取りに精を出す気はないよ」

8班の女子は冷ややかな目で雄太を見ている。またこいつに貧乏くじを引かせてしまったなあ。

俺は、そこにいる全員に言った。

「みんな、バスに戻ってくれ。悪いがこんな状況だ。今日のところは大人しく引き上げよう」

8班の連中は、遅い動きながらもバスに向かって歩き出した。俺はひとり固まっている内藤に言った。

「内藤、戻るぞ」

「わたし……、私は悪くない！」

内藤は胸を揺らしながらバスに走っていった。後に残ったのは俺と雄太、それと紅だ。

「まったく、落ち込む暇すらないな」

「なんだ、落ち込みたかったのか？ 浅い傷でもないけど、命に別状はないよ」

「本来ならな。この傷をつけた男には返り血が付いていた。刺した相手がゾンビだったんなら俺も感染だ」

「……最悪だ」

結果から言うなら俺も、バタフライナイフを首に突き立てられた女子も感染することはなかった。

こうして、バカンスであるはずの物資調達はグダグダな形で終わったのだった。

「い痛つてえ！ さっちゃん、関係ないところに刺さってるよ！」

「え〜い、うるさい！ うごかないでよ、縫いにくいんだから！」

鈴宮高校に戻ると、俺は保健室に直行した。さっちゃんは俺の傷を見て心から嫌そうな顔をして外科セット（詳しく聞くと、医大時代に使っていた外科縫い練習用のものらしい）を取り出した。

明らかに手際がいいとは言えない手付きでさっちゃんは俺の肩に針を突き刺す。ピンセットに持った外科針を俺の肌突き刺すとき、3ティクまでならデフォルトでオーケーだった。

「まったく！ なんてきみは！ 私の仕事をふやすのよ！」

「なあ、こういうときって麻酔とか使わないの？」

「もったいないから却下！」

さっちゃんは俺の肩を縫い終わると、一仕事終えた顔をして額の汗を拭った。俺は肩からはみ出した余った糸をつまんだ。

「……梨子。ちょっとこれ、鉋で切って」

「あ、はい」

梨子はバスの中からずっと俺の手を握っていた。その手をようやく離し、梨子は糸切り鋏で余った糸を切った。

「ほら、あとはこれでも飲んで」

さつちゃんは処理を途中で放り出したことなどなかったかのように、知らぬ顔で俺に錠剤を渡した。

「なにこれ？」

「抗生物質。ぶっちゃけるとこんなところまでできる治療なんて大したことはないから。傷を縫って感染症防ぐくらいしかないから」

「痛み止めとかは？」

さつちゃんは少し考えて薬箱をひっくり返した。あゝあ、また散らかして。

「患者に言われて思いつく医師ってのはどうなんだ？」

「しょうがないじゃん！ 私は薬剤師じゃないんだから」

そう言つてさつちゃんは俺に解熱剤を渡してきた。

と、そのとき大きな音を立てて保健室のドアが開かれた。勢いよく入ってきたのは聖だ。

走ってきたのだろう、聖は荒い息を吐きながら俺の頬を触った。

「……おい、聖」

聖は答えず、俺の下目蓋を下ろし、眼球を確認した。なんか、さつちゃんより聖のほうが医者みたいだ。

聖は一通り俺の状態を確認すると、ようやく一息ついた。

「どうやら感染の兆候はないようだな。雄太に聞かされてさすがに焦ったよ」

「気にしすぎだ」

聖は俺の肩に手を置き、そのまま顔を近づけて額と額をくっつけた。

「……頼むから脅かさないでくれ。肝が冷えた」

「大丈夫だって。俺のことを信用してないのか？」

「私は直以のことを信用している。だから心配しているんだ。今回だって間抜けな女をかばって傷ついたらしいじゃないか」

聖はそう言っただけで肩に置いた手に力を入れた。目が眩むほどの激痛が走る。

「治療は終わったから早くでて行ってね」

さっちゃんはずいぶん手を振った。俺は窓の外を見た。日は傾きかけ、茜色が学校中を包んでいた。

「これは、夕飯には間に合わないか？」

「大丈夫だ。雄太に言っただけで人数分を図書室に持ってこさせている」
学校での夕食は日没前、言い換えれば電気の使えるうちに行うのがルールになっている。

班によるローテーションで食事を用意するようになってからは、時間にはかなりシビアになっていたのだ。

俺たちは保健室を出た。梨子は寄り添うように俺の傍に立っている。聖は落ちて着いたのか、火をつけない煙草を啜っていた。

「梨子、聖。先に図書室に戻っていてくれ」

「え？ 直以お兄ちゃんは？」

「俺は校長室。これ以上後回しにもできないし、須藤先輩に今日のことを報告してくるよ」

「私も一緒に行こうか？」

「いや、いいよ。おまえたちは先に戻っていてくれ」

そう言っただけで俺はひとりで3階の校長室に向かった。

その前で、2人の女子に会った。どうやら同時に校長室から出てくるところだったらしい。

内藤と紅だ。

内藤は俺を睨むと、なにも言わずに（胸を揺らしながら）通り過ぎていった。

「直以先輩。怪我は大丈夫ですか？」

「ああ。さっちゃんに治療してもらったし、聖が言うには感染も大丈夫そうだ」

「そうですね、よかったです……」

紅はいつもの鉄面皮を崩して柔らかい息を吐いた。

「今日のことは須藤先輩には報告済みです。直以先輩はもう休んでください」

「そうか。助かった」

紅は俺に頭を下げると、そのまま通り過ぎようとした。

俺は、それを止めた。

天井にはすでに星が溢れ、地平では赤と青の層が昼と夜を別つていた。

葉っぱの緑に混ざってわずかに桜のピンクが顔を覗かせている。いつの間にか、春が終わろうとしていた。

俺と紅は屋上で沈む太陽を眺めていた。無言で肩を並べて、ただ、眺めていた。

紅に見ればいきなり人気のないところに連れて来られて困惑していることだろう。

俺にしてみてもなにか切り出せばいいのかうまく整理できずにいた。

「……いい風ですね。私は屋上に出たのは初めてですが、悪くない場所です」

最初に口を開いたのは紅だった。紅の前髪は、涼やかな風に流されていた。

「ここは、ひとりになりたい時に来るんだよ。ソーラーパネルやら給水塔やらでごちゃごちゃしてるからな。人が集まらないんだ」

俺がそう言うと紅は軽く頷いた。

俺は、言葉を選びながら話した。

「その、紅。内藤の言ったことは気にするなよ。あいつも混乱していたみたいだしさ」

「ええ、大丈夫です。私は気にしていません」
「そう、か」

「あの人は平時の人です。私のやったことに彼女は日常が汚されたと感じたのでしょう。今の非常な中でなければ、日常であったならば私のやったことは有り得ない、許されないことですから」

紅はそう言って笑った。いつもの鉄面皮を崩したのではない。鉄面皮の上から、新たな面を被ったのだ。

俺には、それがわかってしまった。

「それに、あの人が須藤先輩に論破されるところはなかなか見物でした。須藤先輩も、感情的な内藤先輩に容赦しませんでしたから」

俺は、紅の右手を握って言い訳じみた言葉を止めた。

紅の小さな手は、震えていた。

「……すまない。俺のために人殺しをさせてしまったな」

「私は、後悔していません。もし明日同じ状況に遭ったなら、今日と同じことをするでしょう。だから、私は後悔していません」

言葉とは裏腹に、紅の震えは大きくなる。俺は、その震えを押さえるように、紅の手を強く握った。

「っ！ 失礼します！」

紅はそう断ると、空いている左手を俺の首に回し、飛びついてきた。

反応する暇もなかった。

紅は、自分の唇を俺の唇に押し付けてきた。

キスと呼ぶにはあまりにも稚拙な行為。

唇と唇が、歯と歯が何度もぶつかり啞内に血の味が広がる。

それでも、紅は何度も何度も唇を押し付けてきた。

歯のぶつかる衝撃と切れた唇の痛みに慣れた頃、紅はようやく俺

から離れた。

「失礼しました」

紅は左手の人差し指で俺の唇に付いた血を撫でると、自分の唇から出た血と共に舌で舐め取った。

年下とは思えない、ぞくりとする妖艶。

俺は、初めて鉄面皮の下に隠れる紅の本性に触れた気がした。

「私は、個人の意思は取るに足らない小さなものだと思っています。ひとりの意思と10人の意思。どちらが重いかは一目瞭然ですから……俺とは違うな。ひとりを無視したら10人は成り立たない。10人はひとりが集まってできているんだから。その逆じゃないだろ」

俺は、紅に圧倒されそうになるのを必死で堪えた。

「ええ、わかっていきます。直以先輩が私とは違うことは。私とは、根本的に違っていることは」

紅はゆっくりと俺から手を離れた。いつの間にか、紅の震えは止まっていた。

「私はまだまだ未熟です。取るに足らないはずの個人の意思。その最たるものである感情を未だに制御できないんですから」

紅は、いつもの鉄面皮に戻ると、俺に言った。突然、なんの脈絡もなく、紅は言った。

「直以先輩。私はあなたのことを愛しています」

「……へ？」

「これは私の意思です。取るに足らない個人の意思です。もし、あなたが全体の敵と見做されたのならば、私は躊躇うことなくあなたを殺します」

俺は、答えない。答えられない。正直、話の展開についていけないかった。

「ですが、私個人は、私とは違うあなたのことを見えています。そのことは知っていてください」

紅は無表情のまま俺に頭を下げると、俺の横を通り過ぎ、屋上か

ら校舎内に戻っていった。

俺は、しばらく固まったまま動けなかった。

いつの間にか、日は完全に沈んでいた。

「……手に負えないだろ、色々」と

俺は痛む肩を押さえた。

無償に、煙草が吸いたくなかった。

歌を歌おう

エクストラストーリー2 (前書き)

梨子視点です。

時間軸は少しこの後の話と前後します。

夜が来た。

と、言ってもまだ19時にもなっていない時刻だ。私こと遠野梨子にとっては大好きな人たちと過ごせる、一日で一番楽しくて有意義な時間の始まりだ。

「あゝあ、今日も疲れたなっ」と

直以お兄ちゃんは図書室の床に敷いた低反発マットに寝転がった。以前使っていたダンボールの代わりの、私たちの敷布団だ。私たちは、この低反発マット2枚で雑魚寝するのだ。2つのダブルベッドで4人が寝るって感じだと思う。

「直以。どうなんだ、新しく来た連中は」

窓枠に腰を下ろした聖お姉ちゃんは煙草の煙を外に吐きながら言った。

「ああ、頑張ってくれてるよ。この調子なら夏までに荒地を全部耕せそうだ。ただ、荒瀬先輩が凝っちゃってなあ。ビニールハウスとか、川辺で水田作るとか言い出してんだよ」

「食料面での問題は解消か？」

低反発マットの上で胡坐を掻いている雄太お兄ちゃんはギターの弦を調整しながら言った。

「まだまだだろう。避難民もこれからどんどん増えるだろうしな」

「ふむ、頭の痛い問題ではあるな」

私はうつ伏せに寝転んだ直以お兄ちゃんの背中に寄りかかりながら聖お姉ちゃんに聞いた。

「ここって何人くらい収容できるの？」

「校内全体を使えば500人くらいは可能だな。ただし、これは校庭と体育館を入れて、だ。校舎内、それは電気を享受できる範囲、という意味だが、それだと200人といったところだろう。部活棟の荷物を整理すればもう少しは収容可能か」

「ふーん、今でももういつぱいなんだね」

「そろそろここも明け渡すことになりそうだな」

直以お兄ちゃんの言葉につられて私は図書室内を見渡した。月明かりに照らされたその空間は、広々としたものだった。隣の蔵書室と合わせると教室5つ分もあるのだ。

そこを私たち4人だけが使うわけにもいかない。ここを明け渡すのは残念だが、仕方のないことなのだろう。

「しかし、もうひと月か。やっと、というべきか、まだ、というべきか」

雄太お兄ちゃんは視線を窓の外に向けて言った。そうだ、私たちが初めて過ごした夜もこんな月の明るい日だった。

「梨子くん、近々家に戻ってみるかい？ 両親がいないといってもそこで生活していたのなら私物が残っているだろう。それを取りに帰るだけでも有意義だと思うが」

「聖にしては気が利くな。梨子は自分からはそういうことは言わないだろうしなあ」

3人は笑顔で私のことを見ていた。

優しい人たちだ。この人たちは私と同じ立場であり、私と違って家族がいるはずなのに、それでも私を優先してくれているのだ。

私は、笑顔を作って首を横に振った。

「ううん。私はいいよ。だって、お洋服とか必要なものはもうこっちで揃えちゃったもん」

「でも、趣味のものとかは置いたままだろうか？」

「私、お小遣いが少なかったから。だからあんまり荷物とかないし、趣味……って言うのかな、暇つぶしの読書の本も市の図書館で借りてたから。私、図書館で休日のAV室借りる常連だったんだよ」

「A?! ……ぐは！」

「な、なに、どうしたの、直以お兄ちゃん！」

「い、いや。なんでもない……」

直以お兄ちゃんは額を押さえて拳を握っている。拳の隙間からは

煙草の吸殻、額には少しだけ灰が付いていた。推察するに、聖お姉ちゃんに煙草を投げつけられたのだろうか？

「直以、A V室ってのは視聴覚室のことだぞ」

「知ってるよ！ そういえば、ここも一応、A V室ってことになるんだっけな」

「そうなの？」

「少しだけ違うな。ここは、昔、音楽室だったんだ。私たちが入学するより前に音楽の授業そのものがなくなってしまったので図書室に改造されたんだ。以前の図書室は蔵書室だけだったらしい」

「ほら、梨子。あれがその名残り」

雄太お兄ちゃんの指の先には、グランドピアノがあった。色々な荷物が置かれている。それがピアノだと、言われて初めて気が付いた。

「聖、せっかくだから1曲弾けよ」

「聖お姉ちゃん、ピアノ弾けるの!？」

「うむ……、まあ、嗜み程度には」

「こいつ、小さいときからピアノ習わされていたらしいけど、お勉強ほどうまくいなくてトラウマになってるんだってさ、……ぐふあ！」

今度はしっかりと見た！ 聖お姉ちゃんが投げた煙草は絶妙のコントロールで直以お兄ちゃんの額にヒットしていた！ 額に当たった煙草をマットに落ちないように空中でキャッチする直以お兄ちゃんも凄かった！

「しかし、誰も引かないピアノだ。調律もしていないだろう」

「大丈夫だろう？ 3月に一回使ってるから」

私は直以お兄ちゃんに聞いた。

「3月になにしたの？」

「ゲリラライブ……ってほどのことでもないけど。俺たちが許可とらずに演奏したんだよ」

「そうなんだ。直以お兄ちゃんはボーカル？」

「いや、俺はドラム」

私はタコ口を作った。

私の知らない3人の過去。3人が共有するその記憶に当然だが私はいない。私は、それがすごく羨ましかった。

聖お姉ちゃんは私のタコ口をいっほうに勘違いしてくれたいらしい。窓枠から飛び降りるとピアノの前に座り、鍵盤を撫でて音程を確かめた。

「この暗がりでは音譜は読めないな。暗誦している曲だけだぞ。雄太、きみもやるんだぞ」

「あいよ」

雄太お兄ちゃんもギターを持って立ち上がり、聖お姉ちゃんの横に立った。

聖お姉ちゃんは、鍵盤を鳴らした。

すごくきれいな旋律。

流れるような歌声。

世界が一瞬で生まれ変わるような浮遊感に、私は包まれた。

いつか、どこかで聞いたことのある英語の歌。

私は、いつの間にか泣いていた。

涙の意味がわからない。

感動。

焦燥。

そして恐怖。

それらの情動に追い詰められるように、私の心はいっぱいになった。

私は、直以お兄ちゃんの胸に顔を埋めた。

直以お兄ちゃんは、そつと私を抱き留めてくれた。

聖お姉ちゃんの歌声と直以お兄ちゃんの心音が重なる。

それで、私は安心した。

「……梨子くんには少し早かったかな」

困惑した聖お姉ちゃんに答えるために、私は満面の笑顔を作って直以お兄ちゃんの胸から離れた。

「すつごくきれいな曲　これ、なんていうの？」

「これは、アイルランド民謡のサリーガーデンズだよ」

「ダウン・バイ・ザ・サリーガーデンズ。歌詞的には失恋ソングなのだが、梨子くんには思い当たることがあったのかな？」

「うーん、そうなんだ。でも、私って失恋したことないしなあ。

どちらかというと、私は……」

と、そのときだった。

「ちよつとあんたたち！」

突然図書室の扉が開かれる。大股で入ってきたのは、伊草麻里先輩だ。

「今、何時だと思ってんのよー！」

「まだ7時だけど……」

「時間なんて関係ないのよ！音が漏れてることを注意しにきてやったのよ！」

直以お兄ちゃんは麻里先輩に怒鳴られて小さくなってる。

そうか、窓を開けっぱなしだったから音が中庭を通じて学校中に届いてしまったのだ。

「まったく、周りの迷惑を考えなさいよね。共同生活してるんだから」

そう言っただけ麻里先輩はなぜか靴を脱いで低反発マットの上に座った。

「それで、次はなにやるの？」

麻里先輩は直以お兄ちゃんにしなだれかかった。麻里先輩は帰国子女らしく、ボディランゲージが激しい。……帰国子女だから、だよな？

「なにやるって、これでお終いだろ。周りに迷惑かけたんじゃこれ以上やれないよ」

「なによ、嫌味ったらしいわね！私が来たんだからもう一曲くらいやりなさいよ！」

「……おまえ、注意しに来たんじゃなかったっけ？」

「知らないわよそんなこと！」

「相変わらずめちゃくちゃだな！」

直以お兄ちゃんは麻里先輩のこと、苦手って言っていたけど、この2人、本当は中がいいんじゃないだろうか？

「失礼します」

今度図書室に入ってきたのは紅ちゃんとさっちゃんだ。さっちゃんは靴を履いたまま低反発マットにダイブする。

「なんだ、紅も注意しにきたのか？」

「いえ、私は近くで演奏を拝聴しようと思っただけ」

そう言っただけ紅ちゃんは靴を揃えて脱ぐと、直以お兄ちゃんの隣に座った。ちなみに、ついさっきまで私が座っていた位置だ。気のせ

いかもしれないけど、最近の紅ちゃんって、直以お兄ちゃんに近くないかなあ。

「グーッドイ〜ブニング　なにか楽しそうなことしてるわねえ」
今度の来客は須藤先輩と荒瀬先輩。荒瀬先輩はイスに座って足を組んでいるが、須藤先輩は低反発マットの上に座り、さっちゃんを羽交い絞めにした。さっちゃんは苦しそうにもがいているが、須藤先輩はぬいぐるみを抱くようにさっちゃんを離さなかった。

「梨子く〜ん」

聖お姉ちゃんに呼ばれて、私は立ち上がって低反発マットから離れた。

「なあに？」

「ダニー・ボーイは知っているかな？」

「うん。中学校の音楽でやったもの。英語歌詞で歌えるのはそれくらいだからよく覚えてるよ」

「よし、それじゃあ次はこれだな」

「うん！……うん？　雄太お兄ちゃん、ひよっとして、私が歌うの？」

「もちろん。聖のやつは煙草やっているだけあつてのどが弱いんだよ」

「え〜！　そんなの無理だよお！」

「だが、やらないと暴動が起こりそうだよ」

振り返ってみると、図書室への来客はさらに増えていた。すでに、20人は超えているんじゃないだろうか。

「直以お兄ちゃんはなにもやらないの？」

「俺は駄目。道具がねえもん」

いつ来たのか、直以お兄ちゃんは私の隣に立っていた。荒い息を吐いて髪を乱している。いったいなにがあったのだろうか？

「ほら、梨子。やれ」

「もお、MCも私がやるのお？」

私はにやにやしている直以お兄ちゃんのすねを素足で蹴ると、演

奏をまっっているみんなに向き直った。

「こほん、え〜っと、きょうは即興ばじゃま演奏会におこしいただきありがとうございます。おみみ汚しだとは思いますが、一生懸命演奏しますのできていていつてください」

「こいつ、初日の放送も無難にこなしたし、けっこうこつこついうこと向いてんのかな？」

「なにげに度胸もあるし頭の回転も速いんだよ」

「こほんこほん！ それでは奏者を紹介しまっす！ まずはメインボーカルの、直以お兄ちゃんです〜す！」

「このやる！」

直以お兄ちゃんは私を捕まえようとするが、私はさっとかわし、直以お兄ちゃんにおもいつきり舌を出した。

即興ばじゃま演奏会がそのあとどうなったかというところ、すごく盛り上がった。

観客も図書室いっぱいになるくらい増えたし、奏者を入れ替えていろんな曲をやった。

グリーングリーンはみんなで大合唱したし、直以お兄ちゃんと雄太お兄ちゃんが歌いながら踊った赤鬼と青鬼のタンゴはおなか痛くなるほど笑ってしまった。

「みんな、娯楽に飢えていたのねえ」

と、須藤先輩はしみじみと呟いていたのが印象に残った。

みんなが夜遅くまで一緒に過ごした、最初の夜だった。

歌を歌おう

エクストラストーリー2（後書き）

どうも、どぶねずみです

故あって（極めて個人的な都合）今話を先に投稿させていただきました。前後関係からよくわからない箇所もあると思いますが、近日中に次話とその次の話も投稿しますので、ご了承ください。

……個人的な印象としては、なんか梨子が人気ない気がする。でも

！どぶねずみはこの子を押ししていきますよ！

とっってもいい子ですし、直以上のメインキャラですから！

芋が原因で太るとは限らない

5月になった。

桜は散ってしまい、色の濃い緑が目立ち始めている今日この頃。今日は1班の全員で畑に出てきている。理由は、実験的に植えていたさつまいもの初収穫の日だからだ。

全員がジャージ姿で学校外の畑まで行進する様は、まあ、学生らしいといえないこともなかった。

「……時期的に早いとも思ってたんだが悪くない出来だな」

荒瀬先輩はさつまいもを掘り起こして言った。強面のくせにホクホク顔をしている。ぶっちゃけかなりの犯罪者面だ。

「自分で育てた作物を収穫するのってけっこう感動しますね」

荒瀬先輩は大きく頷いた。この人、そういえば土いじりが趣味だったな。

俺は地面に手を突っ込み、さつまいもを掴んだ。多少歪な形であるものの大振りな、いい芋だった。

「どう?」

腰を屈めた梨子が俺の顔を覗き込んでくる。俺は、力を込めて芋の蔓を引っ張った。

「わ、すっごーい」

蔓に連なつたさつまいもは一気に地面から顔を出した。梨子はその一個を両手で持った。

「ふむ。この調子なら期待できそうだな」

そう言った聖はビニールシートの上で煙草を燻らせている。こいつはヘビースモーカーなだけあって体力がなく、少しの肉体労働でもう休憩に入っているのだ。

ちなみに聖の後ろではさつちゃんが全速力で走っている。正確には逃げている。ミミズを持った須藤先輩に追い回されているのだ。

須藤先輩、活き活きとしてんなあ。

「さて、と。直以お兄ちゃん！ 気合入れていっぱい収穫しよう！」
梨子はぶかぶかのジャージの袖を捲ると、小型シャベルを地面に突き立てた。荒瀬先輩はすでに黙々と作業を進めていた。

「おい、聖。収穫用の籠を持って来いよ」

「……やれやれ。人使いの荒い」

聖は重い腰を上げて畑に足を踏み入れた。後ろを見ると本泣き寸前のさっちゃんを雄太が須藤先輩から庇かばっていた。

「直以先輩。肩の調子はいかがですか？」

と、突然耳元に吐息をかけられる。俺は、なるべく平静を装い紅に答えた。

「あ、ああ。あと数日で抜糸できるらしいから大丈夫だよ」

「そうですか。あまり無理はなさないでください」

いつもどおりの鉄面皮。

屋上からの告白以来、紅の態度は以前とほとんど変わっていないかった。

ほとんど、だ。

今のように急に近づいてきたりする。如実に、距離が近くなっていた。茶目っ気を通るレベルだが、正直心臓に悪かった。

「だけど、けっこうな量が取れそうだな。本格的にやるなら本当に自給自足できそうぞ」

この畑は、俺と荒瀬先輩だけで作った教室1個分程度の広さだ。それでも100人が数日は食い繋げるだけの量が収穫できそうだった。

「日本って食糧自給率が低いんだよね」

「ええ。確か、40パーセントくらいだと思います」

聖は、1年2人の会話にすばやく反応し、煙草を噛んだ。

「食料自給率といっても計算方法はいくつかあってね。40パーセ

ントというのはカロリーをベースとしたものだな。これが、価格ベースだと70パーセントまで上がるし重量ベースだと30パーセントを切るな」

「おまえは相変わらず回りくどいな。結局、日本は食料自給率が低いってことじゃねえか」

聖はわざとらしく咳払いして後輩2人に言った。

「紅くんと梨子くんは『種をまく人』を見たことはあるかな？」

「『種をまく人』？ えっと、絵画だよな。ミレーだっけ？」

「確かゴッホの作品にもあります。それがなにか？」

俺は絵画を思い浮かべる。確か、肩から袋を担いだ男が種をばらまいている絵だ。

聖は今度は急に俺を見た。

「直以。きみは農作業をするとき、どうやって種をまく？」

「はあ？ えっと、種芋を埋めて……」

「……ああ、そうだった。きみがやっていたのは種じゃなかったな。なんなんだ、一体。」

「……播種率か」

「「はしゆりつ？」」

俺たちは荒瀬先輩がぼそりと言った言葉に反応してしまった。聖は、満足そうに頷いた。

「直以。日本ではヨーロッパみたいに種をばらまくということはないんだ。日本では、種は埋めるものなんだ」

「ああ、そういえば小学校の課外授業でやったぞ。人差し指で土に穴を開けてそこに種を一粒ずつ入れるんだろ？」

「そうだ。理由は、日本が播種率の高い土地だからなんだ」

「その、播種率ってなんだよ」

それに答えたのは荒瀬先輩だった。

「一粒の種からどれだけ収穫できるかという率だ」

「えっと、米の場合、一本の稲穂から何粒の米ができるか、ってことですよね」

「中世を例に取ると、日本の太閤検地の場合、上田で150、下田でも100だ。これがヨーロッパになると5、多くても20になる有り得ないことではあるんだが、資料には1を切るものまである始末。ヨーロッパでは、日本のように種を埋める法式は使えない。ほとんどが芽を出さないし、絵画のように種を大量にばらまかなければ量を確保できなかつたんだ」

「そんなに違うの!？」

「もちろん地域や時代によって異なるし、麦と米という違いもあるが、日本が播種率に優れた地力を持つてゐることはわかるデータだ。連作障害というものはあるのだが、九州では1000年間、毎年米を作つてゐる水田があるそうだよ」

1000年か……。なんか、想像がつかないな。

「日本という国は事実として耕地面積が狭いんだろう。だが、播種率を無視して農産生産力を語ることはできない、ということだ」

「でもデータとして食料自給率は低いんですよ」

「えっと、それじゃあわざと低く抑えてゐるつてこと？」

「そういえば、形が変なのとか、価格崩れが起こるからつて作りすぎた作物を廃棄してゐるニュースを見たことあるな」

「あるいはアメリカ辺りから食料を輸入するため。なに、私としても今さらそんなことを批判する気はない。今となつてはなんの意味もないことだからね。ただ、私たちはそんなことを気にする必要がない。作りたいただけ作物を作れるということだ」

「自給自足が夢物語ではないということだな」

荒瀬先輩がそう言うと、全員が感慨深く頷いた。

それは、自分たちが生きるため、生活するためになにかができるという明確な道筋だった。

俺は、あることに気付いて苦笑してしまった。

生きるために働く。

そんな当たり前で最低レベルのことを人は1000年、いや、それよりずっと前から繰り返してきたはずだ。
にも関わらず、初めて意識したそれは俺の中で長い長い道であるように思えた。

「り〜こちゃん!」

今まで話に参加していなかった須藤先輩は手を後ろに回して、梨子に声をかけた。そのさらに後ろでは雄太が泣きじゃくっているさっちゃんを慰めていた。

「はい! あげる」

須藤先輩は満面の笑みで手を前に差し出した。梨子は、差し出されたものを見て目を輝かせた。

「わあ、もぐらだあ」

「……つち!」

須藤先輩は顔を歪めて舌打ちした。梨子かもぐらを怖がらなかったのが気に入らないんだろう。まったく、悪そうな顔してやがんなあ。梨子はもぐらを須藤先輩から受け取ると、今度は俺に見せてきた。「ほらほら、直にお兄ちゃん。見てみて」

もぐらは意外に鋭い手でおもいきりもがいている。まあ、愛嬌がないと言えないこともなかった。

「……荒瀬先輩。もぐらって害獣でしたよね?」

それを聞いた途端、梨子はもぐらを俺から隠した。荒瀬先輩は苦笑して答えた。

「なるべく遠くで逃がしてやれよ」

梨子は後退あしずさるように俺から離れると、もぐらを持ったまま走っていった。なんか、あいつ自体が小動物みたいだ。

「いいんですか? もぐらって穴を掘るとき、植物の根を傷つけるって聞きましたよ」

「まあ、問題になるまでいいだろう」

相変わらず優しい人だな。紅に容易くあしらわれてふて腐れた顔

をしている須藤先輩とは大違いだ。

と、そのとき校舎から走ってくる人影が見えた。遠目からでもわかる金髪、林田隆介だ。

「ういゝっす」

「なんだ、隆介。あんまサボってんじゃねえぞ」

「そんなんじゃねえっすよ。俺、須藤先輩を呼びに来たんす」

「あら、私？」

須藤先輩は1班の人間にしか見せない地を隠し、外出用の笑顔を浮かべて隆介を見た。

「団体のお客さんっす」

須藤先輩は腰に手を当てて天を仰いだ。

「今日の午前中いっぱい休暇のつもりだったんだけどなあ。仕方ない。宏、戻るわよ」

荒瀬先輩もいつもの仏頂面をして立ち上がった。俺も土の付いた手を払って立ち上がる。

「雄太！ 悪いけどここは頼む。俺たち、校舎に戻るから」

「ああ、わかった！」

雄太はさっちゃん頭の頭を撫でながら答えた。

「最近、多いですね」

紅は俺に寄り沿うようにして言った。だから近いんだって。

率直に言うのなら、お客さんとは生存者だ。

ゾンビ発生からすでに半月近くが経過している。

各自で立て籠もっていた生存者たちもただ救助を待つことに耐えられなくなってきた頃だった。

生活物資を調達のため、あるいは他の生存者と合流するために生存者たちは行動を開始していた。

幸いにもゾンビたちは建物に籠るといふ習性があるようで、自立たぬように道を移動することにそれほどの困難はなかった。

そうだった連中が、ちらほらと鈴宮高校を訪ねてくるのが最近

では増えて来ているのだった。

鈴宮高校の人口は、少しずつながらも上昇傾向にあった。

「隆介、ちゃんと校門前に待たせてるんだろうな」

「いや、校長室に通じたみたいっすよ」

「なんでだよ！ 安易に校内に入れるなって言っただろう？」

「そんなこと、うちのおっぱい班長に言っってくださいよ」

内藤晴美、か。以前の一件以来、俺はあいつに相当目の仇にされているようだった。嫌われるのには慣れてはいるが、気分のいいものでもなかった。

俺たちは重厚な扉を開けて校長室に入った。そこには5人の男女がいた。

ひとり俺たちの仲間で8班の班長、内藤晴美だ。お客さんの対応をしていたのだろう、苦笑いを浮かべながら爆乳を揺らしていた。お客さんの内約は、男3人に女がひとりだった。立ち居地でこいつらの力関係がわかる。女が、ボスだ。

この女をひと言で現すなら、おばさんだ。40絡みの厚化粧。以前は美人だったのだろう。だが、年齢と共に増えた体重を否定するように窮屈な服を身に着けている様は、見ていて痛々しかった。

女は、俺たちのジャージ姿を見て鼻で笑い、ソファから立ち上がりもせずに須藤先輩だけを見て言った。

「……あなたが、ここリーダー？」

「ええ、そうです。ようこそ鈴宮こうこ……」

「そう。今日からは私がここを統括します。早くこここの食糧備蓄状況を説明しなさい。それとも、データで整理することすらしていないのかしら」

須藤先輩の頬が引きつった。なんだ、このおばさん。傲慢すぎる

だろう。

「失礼ですが、あなたは……」

「きみい！ この方を誰だと思っているんだね！」

「……知らねえよ。名乗ってもいないのに知るわけねえだろ」

俺は、思わず素で突っ込んでしまった。発言した中年男は顔を赤くして言葉を詰まらせていた。

「部下の教育がなっていないようね」

お互いさまだろ、それ。

「まあ、いいわ。高校生ごときでは、この！ ワタクシを知らないのも仕方ないものね。私は倉木澄子。県会議員よ。東大在学中に弁護士免許を取得して活躍。来年には国政選挙に出馬予定なの。専門は女性の権利向上と……」

「すげえっすね。聞いてもないことをべらべらと」

「よっぽど肩書きに自信があるのでしょね。それで私たちがこの人を尊敬すると思っっているところが凄まじく浅はかですけど」

俺は、隆介と紅の一年2人を黙らせた。こいつらの言っっていることは完全に同意できる。だが、それとは別に、須藤先輩の頬が引きつっていくのがわかったからだ。

「ごほん！ とにかく、この方のことはわかっただろう」

そう言ったのは空気を讀んだ初老の男だ。議員秘書が大変な仕事であることをその頭髪が如実に物語っていた。

「本来だったらきみたちが口を聞けるような方じゃないんだよ」

一番若い男が言う。こいつは20台の前半くらいの年齢に見えた。こいつは、おそらくボディガード的な立場なのだろう。

「それではこれからはワタクシの命令に従ってもらいます。拒否は認めませんからね」

全員の視線が須藤先輩に向く。さて、うちのリーダーはこの傲慢おばさんにどう対応するのか。

「そうですか。とりあえず私たちも名乗るのが先ですね。私は……」

「あなたたちの名前なんてどうでもいいわ。それよりその薄汚いジ

ヤージを着替えてきなさい。まったく、それがワタクシと話す格好ですか。まさか、下品な野良仕事でもしていたんじゃないでしょうね！」

須藤先輩は、にこやかな、中身を知っている俺ですら見惚れてしまつ笑顔で言った。

「黙れ糞ババア」

……全員がドン引いた。

「私たちには、糞あなたのような糞ばあは糞あなたの糞脂肪と同じくらい糞必要ありません。さつさと糞のべつとり付いた糞弛み尻を糞巻くつて糞出て行きやがってください」

おばさんは、なにを言われたかすら理解できていないようだった。ていうか、下品すぎるだろう。

「あ、あなた、あなたは……」

「喋らないでいただけますか？ あなたの糞臭い息がかかるじゃないですか」

須藤先輩はわずかに首を横に傾げて言った。性格の濃さで忘れがちだが、この人、外見だけならトップアイドル級なのだ。

おばさんはぴちぴちの服を揺らしてようやくソファから立ち上がった。

「あ、あなたは！ 本来だったら学校を不法占拠して法律的に……」
「それでは糞警察でも糞自衛隊でも糞連れてきたらいかがですか？
そうすれば私もずいぶん助かるのだけれど」

おばさんは顔の色を変えた。この程度の暴言で激昂するんだから、自分の世界だけで生きてきたんだろうなあ。

おばさんは背後にいる若い男を見た。若い男（といっても、俺た

ちよりも年上）は須藤先輩に掴みかかる。その腕を、荒瀬先輩は掴んだ。

勝負は一瞬で着いた。荒瀬先輩が若い男を捻り上げたのだ。

若い男も鍛えているだろうに、荒瀬先輩は、それこそ赤子の手を捻るように片手で男をひれ伏させていた。

いや、この人いると楽ができるわ。

「あらあら、糞法律も糞暴力もだめ。糞みたいなあなたは、次はどうするのかしら？」

おばさんは顔を赤から青に変えて口角から泡を吐いている。その背中を、初老の男は軽く撫でた。

「今日のところは引き上げましょう。しかし、今日のことは忘れないでもらいましょうかな」

捨て台詞を残して、今日のお客さんはそそくさと校長室から出て行った。

「晴美ちゃん、誰でも彼でも校長室に通しちゃ駄目ですよ」

「………すみません」

先ほどの須藤先輩に圧倒されたままなのか、内藤は頭と胸を下げた。

「ああ~~~~！　むかつきが収まらない！　宏、今日は私が料理するわよ！」

「ま、待て！　それだけはやめろ！　死人が出る！」

うるたえる荒瀬先輩は、肩を怒らせて歩いていく須藤先輩の後を追った。後には、俺と隆介、それと紅が残された。

「………なあ進藤。須藤先輩、なんで切れてたんだ？」

「知りません。あの程度の暴言が我慢できなかったとも思えないのですが。直以先輩はわかりますか？」

「さあ、なあ。あの人園芸部だし、農作業を馬鹿にされたからか？」

ちなみに、その日の夕飯は地獄だった。

周りは初収穫の芋をおいしそうに食べている中、1班の夕飯だけは山盛りのなにか（須藤清良作）だったからだ。

俺たちは、初めて荒瀬先輩の焦りを理解した。

須藤先輩を除く1班の全員と無理やり付き合わせた隆介の間では、須藤先輩を怒らせない（＝料理をさせない）ことは鉄板の不文律になつた出来事だった……。

芋が原因で太るとは限らない（後書き）

今話は音声多重放送になっております。

『糞』は『fuckin'』に置き換えられますので、読みやすい
ほうをお使いください。

ていうか、今回はセイラさんが暴走しすぎました。
反省……。

労働の汗は美しい

5月も中旬になるとすっかり春は消え、夏の日差しが鈴宮高校を包んでいた。

俺は、額の汗を拭いながら青い空にぽっかり浮かぶ白い雲を眺めた。

快晴だ。太陽は中天に差し掛かりもうすぐ昼になることを示している。

「おい、にいちゃん。こっちはどうするんだい？」

俺は視線を空から地上に戻し、中年のおじさんに答えた。

「えっと、もうちょっと離してください。そこは別の野菜を植える予定なんで」

俺たちは農作業に従事していた。耕作も水撒きも全て手作業だ。作業はなかなか進まないが、それでも鈴宮高校周辺の荒地は畑として機能し始めていた。

「しかし、こうも広いと耕すのも大変だなあ。にいちゃん、トラクターを調達できないものかね？」

「そうですね。須藤先輩に伝えておきます」

俺がそう言うと、中年のおじさんは爽やかな笑顔で頷いた。

この人は、最近鈴宮高校に来た人だ。

ぼつり、ぼつりと増えてきた鈴宮高校の人口は、今では150人を超えていた。

須藤先輩も無条件に受け入れたわけではない。班に組み込まれて作業に従事することができる人間、ぶつちャけるのなら自分に従えられる人間だけを受け入れたのだ。

当然、たかだか高校生に頭を下げられるか、と言って出て行った連中も少なからずいた。そういった連中はまだいい。問題なのは、暴力で自分の意思を押し付けようという連中だった。

図らずも以前聖が言ったことが実現してきたわけだ。幸いにも今

は荒瀬先輩ひとりであしらえて、銃を使う必要はなかったが。

ちなみになんで俺がにいちちゃんと呼ばれているかは、梨子のせい。

「おーい、直以！」

遠くで声がした。長身の男を中心に数人の男が立っている。俺の幼馴染の大地だ。俺はおじさんに断って大地のところに向かった。

「おい、足元に気をつけるよ」

俺が指摘すると、大地の取り巻きは慌てて畑から足を退けた。大地は苦笑して言った。

「ずいぶんと本格的になってきたじゃないか。まさか、農業をやることになるとは思わなかったなあ」

「金を稼ぐのも作物を育てるのも、生きるための糧を得るって意味じゃあ変わらないことだよ。それで、なんのようだ？ 暇な身の上じゃあないだろう？」

大地は2班の班長だし、俺も須藤先輩のボディガードをやっている荒瀬先輩の代わりに農作業の全体指揮を執らなくちゃならない。お互いやるのが山積みなのにわざわざ持ち場を離れてまでここに来たのには理由があるのだろう。

「う……ん、直以は須藤先輩のやり方をどう思っているのか気になるって」

「やり方？」

「自分に都合のいい人間だけを受け入れるのは間違ってるんじゃないか？」

「日本が難民受け入れを拒否してるのと一緒にだろ？」

俺には大地の言いたいことはよく理解できる。俺としても助けられる人は助けたいというのが本音だった。

だが、それができないのも理解できる。

際限なく受け入れていたら、あつという間に学校は定員オーバーになってしまっただろう。

意外にも、須藤先輩のやり方はそれほどの反感を買っていなかった。

その理由は、鈴宮高校の主体である学生たちがここを開放したのは自分たちの血と汗であるという思いが強いからだ。

後から来た人間にしたり顔で指図されるのは我慢できないというのは、須藤先輩も学生の連中も、そして俺も同じ思いだった。

だが、その代表格であるはずの大地がそれに異を唱えることが俺には意外だった。

「別に避難民受け入れのことだけじゃない。銃に関してだってあの人は黙っていたじゃないか」

銃のことは、まあ、8班の連中から漏れた。

多少は騒がれたが、須藤先輩の「だからなに？」で、一応の終息は見ている。どうやら銃はあるらしい、というのが校内での認識だった。

「大地は、須藤先輩のやり方が気に食わないってことか？」

「……そこまでは言っていない」

「どうしたんだよ、大地。おまえ、なんか煮え切らないな」

「俺は須藤先輩を支持しようと思っている。あと2ヶ月もすれば再選挙だしね。だけど、そういう不満がちらほらと出てきているんだ」

「8班の内藤辺り、からか？」

大地はなにも答えなかった。答えないことで肯定していた。

「それ、俺の責任でもあるんだよなあ。あいつと街に行ったときに少しトラブってさ」

「話は聞いているよ。肩の怪我はそのときのだった？ もう大丈夫なのか？」

「ああ。抜糸も終わったしな」

俺は肩を回した。傷痕は残ったが動かすのに問題はなかった。

「ちよつといいかな？」

その声は、俺の背後からした。俺が振り返ると、そこには30前後の初めて見る男が立っていた。

長身だ。大地と比べても遜色なく、肩幅が広い。それなのに、頬

は痩せこけている男だった。

男は俺と大地を見比べて、大地に言った。

「そこで作業している人に聞いたら具体的なことはきみたちに訊ねてくれと言われてね。きみたちが鈴宮高校に避難している学生たち？」

……鈴宮高校に避難している学生？

「ええ、そうです。ここに避難してきた人ですか？」

男は答えず、別のことを聞いてきた。

「今ここには何人くらいが避難しているんだい？」

「えっと、150人はこの間、超えたよな。直以」

同意を求める大地に、俺は答えなかった。男は、大地から俺に視線を移した。

「なんだい？」

「あんだ、誰だ？」

男は、楽しそうに笑いをかみ殺して、名乗った。

「私は、赤木武志巡査部長。県の機動隊に所属しているものだ」

大地とその取り巻きは驚いていた。だが、俺には驚く余裕はなかった。

「その機動隊員が、なんの用ですか？」

「きみたちがこの学校を不法に占拠しているとの話を聞いてね。その実情調査に来たんだ」

「機動隊員が実情調査？」

男、赤木は口を噤んだ。威圧的な視線で俺を見下ろしている。

「ま、まってください。警察は機能しているんですか？」

大地の取り巻きに、赤木は答えた。

「残念ながら、今は機能していない。だけど、鈴宮市の隣の朝倉市には800人ほどの避難民が共同で生活しているんだ」

「800人、か。多いな」

「その中にここを悪く言う連中がいたわけだ。まあ、須藤先輩に追いつけなかった連中が良く言うわけないけどな」

「追い出したことは認めるのか？」

赤木は目を細めて俺を睨んだが、俺は受け流しておじさんに声をかけた。

「おじさ〜ん！」

「おう、なんだい、にいちゃん」

「おじさんはここに避難してきたんですよね」

「？ なに言ってるんだい、当たり前だろ」

「追い出されなかったの？」

「?? 誰に？」

俺は赤木を見返した。赤木は困惑しながらもおじさんに訊ねた。

「なにか入団試験のようなものはなかったんですか？」

「あん？ 誰だいあんた。そんなものはねえよ。別嬪の姉ちゃんにここでの生活に従ってくれて言われたくらいかな」

「ここでの生活とは？」

「食事の時間とかシャワーの時間とか……、あとは今みたいに農作業とかをやることかな。でも共同で生活してるんだ。そんなの当たり前だろ？」

そう言っておじさんはガハハと笑った。

「私はここで強制労働をさせられそうになった人を知っていますが？」

「強制労働？ こんなときにそんなことを言っているのは誰だい？

生活のために働くのなんて当たり前だろ？ 嫌いな上司や客に頭を下げていた以前のほうがよっぽど過酷だしな」

そう言っておじさんはまた笑った。いつの間にか集まった他の作業員たちも笑う。

「それに、今まで電気も通っていない場所でゾンビどもから隠れていたんだ。身体を動かさなけりゃ気が滅入っちゃうよ」

「ここにいる全員が避難民だしな」

と、そのとき4時間目終了のチャイムが鳴った。律儀に時を刻むこのチャイムが昼飯の合図だった。

今まで俺たちの周りに集まって騒いでいたおじさんたちは校舎に戻っていった。

俺は赤木に言った。

「これから俺たち、昼飯だよ。そこで俺たちのリーダーに紹介するから、あとはその人と話してください」

俺は話を切り上げて赤木に背を向けた。背後では、律儀な大地が赤木の対応をしていた。

「あー、腰痛え」

俺はビニールシートに座り、こった腰を叩いた。

「直にお兄ちゃん、お疲れさま」

「おお、いいところに来た。梨子、ちよつと背中踏んで」

俺はビニールシートにうつ伏せに寝転がった。

梨子は靴を脱ぎ、そつと俺の腰に乗った。小気味いい音がして背中が伸びる。

「おい梨子ちゃん、次はおいちゃんを頼むよ」

「だゝめ！ この特別マツサージは直にお兄ちゃんだけでっす！」

そつ言つて梨子はおじさん連中に舌を出した。周りからは笑い声が上がった。

ちよつと、3時休みに入ったところだった。

作業に没頭していたらしい。今日耕した区画の畑は種まきまで終わった。別の区画を見ると野菜の葉が勢いよく生い茂っており、半月前までここがただの荒地だったとは信じられない光景になっていた。

梨子は俺の背中の上で膝立ちになり、背中を揉んでくれた。

「おきやくさーん、かゆいところありますかあ？」

「それ、床屋だろ？」

「マツサージのお店ってなんてゆーの？」

「梨子ちゃん、お客さんのおつきくてす〜っていうと、にいちゃん喜ぶよ！」

「??? そうなの？」

「おいおっさん！ 梨子に変なこと仕込むな！」

おじさん連中は下品な笑い声を上げた。まったく、こいつら、梨子の教育によくないな。

「???? ねえ、直にお兄ちゃん。なにがおっきいの？」

俺は顔を伏せて梨子を見無視した。八つ当たりのつもりなのか梨子のマツサージが強くなるが、元が弱いのでちょうどいい感じになった。

急におじさん連中の話し声が小さくなった。

気になって俺は顔を上げると、先ほど会った赤木が俺たちの横を歩き去るところだった。

俺は身体を起こした。背中に乗っていた梨子は滑り落ちた。

「お帰りですか？」

「えっと、きみは……」

「そういえば名乗ってなかったな。俺は菅田直以っていいいます。先ほどは失礼しました。あなたが敵か味方かの区別もつかなかったからな」

「今は味方だと思うのかい？」

「今まで鈴宮高校を見学してたんでしょ？ それならここがそれなりに機能していることはわかってくれたはずだ」

赤木は苦笑した。

「馬が合わないっていうやつはそりゃいるよ。たかだか高校生の指図を受けるのに抵抗があるのもわかるしね。そうだった連中がここのことをよく言うはずないもんなあ」

「どうやらそのようだ。街にあるものを勝手に持ち運びしているのは頂けないけどね」

「ま、それは非常事態ってことで。実際、物資は不足しているのに法律守って死ぬわけにはいかないから」

「それは、警察を前に言うセリフではないな」

俺は、立ち上がって赤木に聞いた。

「実際のところ、警察はどうなっているんです？ 街を見た限りでは救援隊なんてまるつきり当てにできそうもないけど」

「正直に言うなら、まったく機能していない状態だよ。本部とは連絡も取れないし、おそらくはすでに存在していないだろう。朝倉市には私も含めて数十人の現役警察官もいるが、私たち自身が避難民で救助が必要な状態だ。とても警察としての組織立った行動はできないな」

「……機動隊はゾンビ発生したとき、どうしていたんです？」

赤木は、苦虫を噛み潰したような顔をして天を仰いだ。

「ゾンビ発生の第一報が入るより前に、機動隊員の中からゾンビが出たんだ。内と外、パニックが起こるより早く機動隊は瓦解していたよ」

なるほど、以前聖が言ったとおりだった。警察や自衛隊は、まさきにターゲットにされたわけだ。

「今から朝倉市に帰るんですか？」

それを聞いたのは梨子だ。

「ああ、そのつもりだよ」

「今からだと、日が暮れちゃいますよ。今夜は学校に止まって明日の朝帰ったらどうですか？ いいよね、直にお兄ちゃん」

「ああ。電気のない夜は危ないですよ。ゾンビだってどこに潜んでいるのかわからないんだし」

「いや、それだと貴重な食料をもらうことになるからね。それに、車をこの先に止めてあるから」

俺は、赤木の痩せこけた頬を見た。

「ひょっとして、朝倉市では食料が欠乏しているんですか？」

赤木は俺の質問には答えず、別のことを言った。

「私は、ここで見たことをそのまま報告することにするよ。それはきみたちにとっても不利にはならないはずだ。約束する」

不利、ね。

「もし、ここで見たことがあんだたちの想像通りだった場合、どうするつもりだったんです？」

赤木は、それにも答えず、俺たちに背を向けて歩き去っていった。

結論から言うなら、赤木の約束は最悪な形で反故にされたことになるわけだ。

労働の汗は美しい（後書き）

エクストラストーリー2は、時間軸ではこの後の話です。

まずは謝罪をば……。

どぶねずみ、前話で大嘘をこきました。芋の収穫はひと月やそこらではできないそうです。

作中では半月でやっちまってるし……。

現実以上に現実的なもの、それがフィクション（虚構）である、とは、霜栄氏の言葉です。

おそらく、その枠を外すと構成が破綻することになるので、これからは今以上に気を付けて執筆していきます。

これからもビシバシ間違いを指摘してください。

どうもすみませんでした！

……ちなみに、前回投稿から2日でぼろぼろと評価点が下がりました。

みんなが嘘に気づいたのか、セイラさんを暴走させすぎたからなのか……。

マジ怖い、マジ反省。

脅し文句と朝倉市の状況

5月の最終週のことだった。

この日は朝からささいな事件が起きていた。

今まで隙なく制服を着こなしていた紅がブレザーを脱いだのだ。

朝食時の定例報告でその姿を晒した紅は、ざわめきを持って迎えられた。

周りの反応に紅自身も途惑っているようで、レアな表情を覗かせていた。

「ふむ、そろそろ衣替えの季節か。これは梅雨も近いな」

「紅も不遇なやつだよな。あれだけの美少女なのにあれだけ無視されるやつも珍しいだろう」

「紅ちゃんって、固すぎるんだよねえ。今だってボタンを一番上まで留めてるし。なんでリボンしてるんだろ？」

俺と聖、梨子の3人はお揃いのジャージ姿で同時に味噌汁を啜った。

「そついえば雄太のやつはどうしたんだ？」

「校長室だ。今来客中でね。その対応をしているよ」

「あ、そついえば私、ロータリーに高そうな車が止まっているの見たよ」

言われて気が付いたが、今朝は食堂に須藤先輩と荒瀬先輩の姿は見えなかった。

と、そのとき、タイミングを計ったように校内放送が流れた。雄太の声だ。

『報告、各班長及び1班員は朝食後校長室に集合。ドーン』

「……やれやれ、どう考えても厄介ごとだな」

「ううう、ドーンって取られた」

俺たちは早々に飯を済ませて校長室に向かった。

現在、鈴宮高校は17班172人ほどの避難民が生活している。その班長17人と1班員7人が集合した校長室は、不穏な空気に包まれていた。

「……ねえ直以、なにが始まるの？」

4班班長の伊草麻里が聞いてくるが答えられない。俺も知らないからだ。

「須藤先輩。全員が集合しました。そろそろ召集理由を教えてくださいませんか？」

口火を切ってくれたのは紅だ。

不穏な空気をかもし出している張本人の須藤先輩は、机に突っ伏したまま、軽く手を振った。それに答えるように話し出したのは、雄太だ。

「実はさっき朝倉市から人が来てさ。よくわからない要求をしていたんだ」

要約すると、こうだった。

鈴宮高校では須藤清良を中心に学生たちが悪辣な政策を実施し、避難民を奴隷の如く酷使している。

朝倉市としては朋友がこのような目に遭っていることを看過はできない。

如いては須藤清良の追放と鈴宮高校の指揮命令権を要求する。

要求が聞き入れられない場合は、朝倉市1500人の住民が鈴宮市の住民のために超法規的手段に訴える。

云々。

「……朝倉市って1500人もいるのか」

「なに、脅し文句のために多少は水増ししているのだろう」

「俺たちは、脅されているのか」

校長室内はざわめきに包まれる。それを掻き分けるように大地は発言した。

「須藤先輩はどうするつもりですか？」

須藤先輩は、顔を上げて頬杖をついた。

「さて、どうしようかしら。突っぱねることも受け入れることも簡単。だけど、名指して批判されている私が独断で決めてあなたたちは納得できるかしら？ だからみんなを集めて話を聞いてもらったの」

俺は、聖の背中を押した。聖は一瞬だけ俺を睨んで話し始めた。

「さて、朝倉市の要求に各々思うところはあると思う。だが、ここで、あいつらがなにを言っているのかを整理してみよう」

聖の言葉に全員が黙った。

「まず、須藤清良の悪逆性、これについては賛否両論あるだろう。

私としてもあえてこの場で言及しようとは思わない。ものの好き嫌いに関わってくる話だしね」

聖は皮肉気に須藤先輩を見た。須藤先輩は苦笑を浮かべて聖を見返していた。

「回りくどいことはいい。早い話、こいつらはなにがしたいんだ？」

「黙って言うことを聞け、そういうことだ」

再び校長室内はざわめき始める。聖はしばらくその様子を楽しげに眺め、やがて話を再開した。

「従えないときは、超法規的手段に訴えるとのこと。なかなか露骨な脅迫だな」

「……超法規的手段とは？」

そう発言したのは6班長の門倉健司だ。

「国交断絶？ もともと交流などはない。経済封鎖？ 万全ではないものの我々は自給自足を行う体制を整えつつあってなんの問題もないな。と、するならば、我々にとってもっとも効果がある手段は

……」

「武力行使、か」

ざわめきが大きくなる。

「どつするんだよ！ 朝倉市って、俺たちの10倍近くいるんだろ
う？ 勝てないだろ！」

「い、いや。いくらなんでもそこまで強行な手段は取らないだろ。
考えすぎだよ」

俺は、格子窓から外を見ている荒瀬先輩を見た。荒瀬先輩は、喧
々囂々としている周りとは一線を画して、ひとり静を維持していた。
「我々としては、朝倉市が武力行使以外の行為をしてくる分には問
題ない。無視していればいいのだからね。だから、我々はもし彼ら
が武力行使をしてきた場合のことのみを考えればいい。抗戦か降伏
か。自分たちの場所を守るのか明け渡すのか」

聖の言葉に、今度は全員が黙った。それぞれ、思うところがある
のだろう。

その沈黙を胸を揺らしながら破ったのは、8班班長の内藤晴美だ
った。

「……別に、そんな2択にはならないと思います。だって、もし朝
倉市の要求に応じても私たちがここを追い出されることにはならな
いから。それに、生存者同士で争うなんておかしいわ。被害は、最
小限にするべきよ」

須藤清良を追い出して丸く収める、内藤の言葉を聞いた本人であ
る須藤先輩は、机に伏して顔を隠した。

周りには傷ついているように見えるかもしれない。だが、俺には
笑いを噛み殺しているのがわかってしまった。

「いや、もし無条件で要求を受け入れたのなら、きつと俺たちはこ
こから出て行くことになると思う」

内藤の発言に反論したのは、意外にも大地だった。内藤も、爆乳
を揺らしながら驚いた顔をして大地を凝視した。

「俺たちは、一応の民主的プロセスを得て須藤先輩をリーダーに選
んだんだ。それを外圧で変えるってことは、自分たちの意見を通せ
ないってことなんだと思う。もし次に全員出て行けと言われても、
反論ができなくなる」

聖は、意地悪く俺にだけ聞こえるように耳元で呟いた。

「やれやれ、木村大地も必死だな。ここでなら有力者のひとりだが、もし朝倉市と併合でもされようものなら、彼はただの一学生にすぎなくなるからね」

「だから……、おまえはどうして大地にそんなに厳しいんだ？」

と、そこで俺は袖を引かれた。さっちゃんだ。

「ねえ、この話、まだ続くの？ わたし、眠くなっちゃったよ」

「俺たち、けっこう重要な話してるぞ？」

「きみたちにとってはね。わたしみたいな手に職があるお姉さんはどこでも重用されるから別にどう転んでも関係ないっしょ？」

……まあ、事実なんだろうけど、さ。

「みんなも、すぐには決められないことだと思うの。今日は必要最低限の仕事だけでいいから、班のみんなで話し合ってもらいたい。朝倉市には明後日正式に回答することになっているわ。だから、明日の昼に、食堂でどうするか決をとるのでそのつもりでいて」

須藤先輩がそう言うと、遅い動きながら班長たちは校長室を出て行った。

後には、1班の8人だけが残された。

「面白くなってきたわね」

「須藤先輩！ どうするんですか？先輩、当事者ですよ？」

「うーん、梨子ちゃんだけねえ、私の心配してくれるのは」

須藤先輩は梨子に抱きつき、頬擦りした。

「……梨子、この人には心配なんていらないぞ。本気でこのことを楽しんでいるんだから」

「あら、そんなことないわよ。いやーん、セイラ、追い出されちゃ
う」

「この人は、追い出されたって関係ないんだよ。さっちゃんと同じく、どこでもそれなりにやっていくんだらうからな。むしろ俺たち重荷から逃れられて喜ぶんじゃないか？」

それを聞いて今まで黙っていた荒瀬先輩が反応した。

「直以、清良のことをよくわかってんじゃねえか」

「この人が性格破綻者だってことは理解しているつもりですよ」

俺と荒瀬先輩は声を殺して笑いあつた。

「まあ、正直な話、名指しで批判されていい気分はしないわね」

「抗戦、ですか？」

「現段階では決められないわよ。私の目測では抗戦派のほうが多いみたいけど」

俺もそう思う。大地が抗戦派であることは大きいだろう。大地を支持する連中がごぞつてそれに従うだろうから。

「とにかく、抗つにしても私たちは朝倉市のことをなにも知らないわ。直以くん、頼むわね」

「……ああ、わかりましたよ。雄太、付き合え」

俺と雄太の今日の予定は、それで決まった。

朝倉市の避難所は鈴宮高校から10キロほど離れたところにあつた。

朝倉市役所を中心に、その周りの緑地公園に無数のバラックが乱立している。

そこに、俺と雄太が潜入するのに苦労はなかった。

最初に気づいたのは、臭いだった。隅に寄せられた死体やゴミ箱から溢れて山積みになされているごみ袋から漂ってくるのだ。

「……なんで処理しないんだ？」

「できないんだろ。見ろよ」

雄太の指差す先には、数人の避難民が暗い顔で焚き火を囲んでいた。その風貌は、どこか浮浪者を思わせた。

雄太はその連中に声をかけた。

「こんにちは」

連中は答えない。雄太は、調達してきたウイスキーの瓶を差し出した。

「やりませんか？」

連中は、おそろおそろ瓶を受け取り、口を付けた。

「俺たち、今日ここに着いたんだけど、ここの生活はどうですか？」

「……最悪だ。食事は日に2度、握り飯がひとつだけだよ。それさえ支給されないことがあるんだから」

「食料が、足りていないんですか？」

「さあね。上のことを知らないよ」

「上？」

「市役所に籠っている連中さ。一応朝倉市の避難事務局を名乗っているけどね」

雄太は礼を言っただけのところに戻ってきた。

「食事が行き渡ってないみたいだ。それが原因の無気力症なのかな」

俺は、焚き火を囲む避難民を見た。

季節は初夏、もうすぐ6月になるうという気温だ。正直、焚き火を囲むほど寒くはない。ひよっとしたら栄養が足りてなくて寒いかもしれない。

俺は、この間会った、赤木の瘦せこけた頬を思い出した。

俺たちは周りを観察しながら市役所に向かった。

粗末なバラックに焚き火を囲む避難民、代わり映えのしない景色を眺めていると、喧騒が聞こえた。

俺たちは、足を速めて喧騒の元に向かった。

そこは、市役所前だった。
かなりの数の避難民と入り口を塞ぐように並ぶ機動隊員が対峙している。

「……これ、どうしたんですか？」

「なんだ、知らないのか？ 食事を一日一食にしようとする事務局に抗議している連中を機動隊員が排除してるのさ」

その声に吊られるように機動隊員は前進した。

避難民たちは奇声を上げて角材を振り回す。だが、機動隊員の持つ盾に阻まれて、思うように効果が得られなかった。

機動隊員は角材を盾で防ぎながら前進する。そして、そのまま盾で2倍近い数の避難民の前衛を押し倒した。

その後は一方的だった。警棒で避難民たちを動かなくなるまで打ちのめす。

「……ひでえな」

避難民たちは背を見せて逃げ出す。機動隊員たちは、後ろから警棒を振るった。

「もういい、止める！」

機動隊員のひとりが怒鳴った。どうやら隊長らしいその男は、ヘルメットを取って素顔を晒した。

俺は、その男に見覚えがあった。先日鈴宮高校を訪れた、赤木武志だ。

赤木は、機動隊委員たちを撤収させると、俺たちのところに歩いてきた。

「やあ、久しぶりだね。確か、菅田くんだったかな」

「……俺たちのこと、気づいていたんだ」

「ここにいる人たちはみんな栄養不足気味だから。きみたちみたいに顔色のいい少年は目立つんだよ」

赤木は俺たちを人気のない市役所の裏側に案内した。

「とりあえず、きみには謝らないといけないな。すまなかった」

「ああ。あなたは見たままを話すと約束してくれたよね。それが、なんで鈴宮高校で悪辣な政策で避難民を酷使していることになったんだよ」

「言い訳をさせてもらうなら、私は見たままを報告したよ。ただし、それが重視されなかったんだ」

赤木は壁に寄りかかり、苦い顔をした。

「単純に、あなたの意見より須藤先輩に恨みを持つ人間の意見が勝つたってことか」

「なにしろ、名指しで批判だったからなあ」

明るく言った俺と雄太の言に、赤木は少しだけ顔をほころばせた。

「それにしても、ここ、食料が足りてないんですか？」

「……ああ。そうだと、そうでないともいえる」

「どういうことだ？」

「食料が不足しているのは間違いのないことだ。なにしろ避難民が多すぎるし、保存のきかないものは腐ってしまったからね。けど、まったくないというわけではないんだ。ただ、事務局が今後を考えて少しでも貯蓄しようとして計画している」

「今が足りないのに将来のため、か。その状況で俺たちに喧嘩をふっかけるといふことは、俺たちの備蓄を奪おうって魂胆なわけだ。」

これは、ますます受け入れられないな」

「アプローチを間違えたな。低身して援助を申し込めば、須藤先輩も断らなかつただろうに」

「……きみたちは、私たちの要求を受け入れないつもりか？」

「結果は明日決まりますよ。でも、あなたたちの思い通りにはならないと思うけど」

「そう、か」

赤木は手を上げた。それに応じて隠れていた機動隊員たちが姿を現す。

俺たちは、囲まれていた。

まったく、やることがせこいんだよなあ。

「それならばきみたちは敵だ。人質になってもらうよ」

雄太は俺の顔を見た。俺は、頷いた。

機動隊員が一步前に入る。

その足元に、雄太は、発砲した。近くにいた機動隊員は驚いて尻餅をついた。

それで、俺にはわかった。

おそらく、ここにいる連中は機動隊員ではない。その格好をして
いるだけのやつらだ。

仮にも機動隊員だ、本物ならこの程度では驚かないだろう。

中には赤木のように本物もいるのだろうが、それは少数であるよ
うに思えた。

「拳銃！」

「俺たちが手ぶらでくるわけないだろ。悪いけど、帰らせてもらう
よ。ここで見たことをみんなに伝えなくちゃならないから」

雄太が拳銃を指し示した先が割れる。俺たちは滑り込むようにそ
の道を進んだ。

内心、俺は冷や冷やだった。拳銃一丁でこの連中を全員相手に
できるわけではない。

仮にも機動隊員だ。金をもらって鍛えている連中に、一高校生で
ある俺たちが勝てるわけもなかった。

だが、幸いにしてその多くが偽者だった。拳銃に怯んだ連中のお
かげで、俺たちはうまく包囲を抜けられた。

人目につく市役所前に出たところで、雄太は拳銃をしまった。

「……赤木さん、俺たちから言うのもなんだけど、なんとかならな
いかな？」

「こちらからは無理だ。うちの事務局長がきみたちのリーダーに深

い恨みを抱いているらしくてね。倉木澄子県会議員を知っているかな？」

「……あ〜、あのおばさんね。なんか、全てが繋がった気がする。直以、知ってるのか？」

「……知らない」

赤木は続けて言った。

「それに、きみたちの保有している食料を奪わなければ、ここにいる避難民は餓死してしまうよ」

「赤木さん、ひよっとして気づいていないのかもしれないけど、鈴宮高校にいる連中も、俺も、それにあんただって避難民なんだぜ」

俺はそれだけを言うと、その場を後にした。

早足で過ぎ去る俺たちを、バラックの隙間から目の窪んだ子供が見ていた。

書き文句と朝倉市の状況（後書き）

もうすぐ新学期

春休みラストパート企画ということで今日はあと1話投稿します。

・・・できなかったらエイプリルフルってことで。

男がやるにはスエアは恥ずかしい

鈴宮高校に戻った俺と雄太を出迎えたのは、熱気だった。

校内のそこかしこで討論会が開かれ、時には怒号が、あるいは殴り合いが展開されている。

朝倉市のバラックで見た避難民とは正反対の光景だった。

「やあ、直以。無事に帰れたようだね」

「あ、直以お兄ちゃん、お帰りなさい」

図書室に入ると、聖と梨子が机に向かって一冊の本を覗いていた。古臭いその本は、孫子だった。

「小難しいもの読んでるなあ。梨子の読むようなもんでもないと思うけど？」

「私の読むようなものってどんなの？」

「そうだ、なあ。赤毛のアンなんてどうだ？」

「あれ、なにげに面白いよな」

そう言ったのは雄太だ。

「雄太お兄ちゃん、赤毛のアン読んだの？」

「直以も読んでるぞ」

「へ〜、すつごく意外。なんか、赤毛のアンって女の子の子してるから、男の人は読まないものだと思っていたんだけど」

「ロツクの敵は常識ってね。直以もけっこうはまっていたよな」

「ああ。読んでみるとけっこう面白かった」

「うん　私も読んだよ。でも、けっこう読んでいない人、多いんだよね。やっぱり、少女文学の上に古典って言われちゃうと、読みたいところがあるみたいだよな」

俺たちが赤毛のアン談義に興じそうになるのを、読んでいない人である聖が咳払いして止める。こいつ、プルーストは読破してるのになあ。

「直以。今、私たちはお勉強中だったのだよ」

「それで孫子？　なんで？」

「少しでも直以お兄ちゃんの手助けになりたくて」

梨子にはっこりと笑ってそう言った。俺は、照れ隠しのために梨子に背を向けて本棚に向かった。

「いきなり孫子じゃ難しいだろう。ほら」

俺は本棚から取り出した本を梨子に渡した。梨子はその背表紙を読む。

「……戦国策？」

「高1じゃあ漢文の読解すらできないだろ。俺がそうだったし。まずはこれで漢文や古代中国の歴史に慣れたほうがいい。知ってる故事や逸話も出てくるから読みやすいと思うぞ」

梨子はさっそく戦国策のページを開いた。

教え子を取られた聖は頬杖をついて俺を睨んでいる。こいつは教師には向いていない。理解力が高いから凡人が学習にどれだけ苦労するかがわからないのだ。

「……それで、どうだったんだ、朝倉市は」

「予想以上に酷かったよ」

俺と雄太は朝倉市で見たことを聖に話した。

聖は、俺たちの話を聞き終えると、煙草に火をつけて煙をゆっくりと吸い込んだ。

「なるほど、な。あまり愉快的な展開ではないというわけか」

「そういうことだ。むこうはどうあってもやる気だ。それを避けるにはこつちが折れるしかない」

「それで聖。今のところ、校内の様子は？」

「ん……。五分五分といったところかな。思ったより降伏派が伸びている。元からいた須藤清良反対派に加えて新しく参入した連中が中心で、な。それに、生存を賭けてゾンビと戦うのとはわけが違う。今回は、生存者同士で争うことになるからな」

「抗戦派でも気後れする連中にはいるってわけか」

「そういうことだ。ぶれていないのは木村大地の一派くらいだな」

俺は、窓から中庭を見渡した。

そこでは、健司が校舎に向かって学校の危機と団結を叫んでいた。まんま体育会のノリだ。盛り上がるのは身内だけ。それ以外の反応は冷ややか。選挙しかり、案外この手の演説ってのはそういうものなのかもしれない。

「それで、直以。どうする？」

「どうするとは？」

「私たちの去就だ。直以派としては意思の統一を図っておいたほうがいい」

俺は、机に座る3人を見た。雄太と聖はまっすぐ俺を見ている。

梨子は、読書に夢中だった。

俺は、言った。

「降伏派を支持する」

雄太と聖は同時にため息を吐いて頷いた。

「……理由を聞かないのか？」

聖は鼻でせせら笑う。

「聞くまでもない。どうせ、殺し合いをしたくないとか、そんなヒューマンイズム満載なことを考えているのだろう？」

「今さらだけどな」

「……おまえら、きついよ」

「それじゃあ一応荷物はまとめておくな」

「ああ、そうしてくれ」

雄太と聖には説明の必要がない。それが俺には、見透かされているようで不愉快でもあり、理解されているようでありがたいもあつた。

俺は窓から離れて梨子の隣のイスに座った。

「あ、直以お兄ちゃん。蛇足ってこれが出典だったんだねえ」

問題があるとすれば、今まで読書に夢中でなにも聞いていなかった。梨子を、どうするかだった。

俺は、梨子に言った。

「梨子。話がある」

「？ なあに、改まって」

梨子は本を閉じ、身体ごと俺に向き直った。

「えっと、な。俺たちの今後のことなんだけど……」

「ふんふん。それで？」

「どことなく軽い調子の梨子。」

「俺たちは……、明日朝倉市の要求をどうするか決めるだろ？」

「うん。私たちは反対派なんだよね」

聞いては、いたのか。

「それで、もし明日反対派が多数を取ったら、俺たちはここを出て行く」

梨子は、ほんわかした笑顔に困惑を浮かべた。

「多数を取ったのに、出て行くの？」

「須藤先輩ひとりだけを追い出すわけにもいかないだろ。まあ、荒瀬先輩も一緒だろうけど、俺たち、俺と雄太、聖は、須藤先輩たちと一緒に行動する」

梨子は、了解したと言わんばかりに神妙に頷いた。

「それで……、おまえはどうする？」

俺がそう言った瞬間、梨子の表情が消え、肩口まで伸びた栗色のおかつぱ頭が逆立った。

そして、梨子は部屋の気圧が下がる勢いで息を吸い込んだ。

「すうううう……、ばああああああー！！！」

あまりの大声に、俺はイスごと仰け反った。

「なんでそういうこと言うの！？ 直にお兄ちゃん、酷いよ！ ひどすぎるよお！」

梨子は、今度は大粒の涙をぼろぼろと零しはじめる。

助けを求めるために雄太を見た。雄太は露骨に視線を俺から逸ら

した。

今度は聖を見た。聖も、俺から視線を逸らして煙草を揉み消していた。

こいつら、使えねえ！

俺は、そつと梨子の肩を抱いた。梨子は俺の胸に抱きつく。俺のシャツが涙で濡れた。

「うう……、ひどいよう」

「ごめんな、ごめんなあ」

俺は子供をあやすように梨子の背中を撫でた。

どれくらいそうしていたか、梨子は目を赤く腫らしてゆっくりと俺の胸から離れた。

「まあ、ほら、梨子。もし明日抗戦派が多数取れば俺たちも須藤先輩も「直にお兄ちゃん！」お、おう」

「私がなんで怒っているかわかっていますか？」

梨子は大きな瞳を細めて俺を睨んできた。こいつ、けっこう迫力あるな。

「私たち、初めて会ったときに、これから一緒に生きていこうって約束したよね！？　なのになんで黙って一緒に来いって言ってくれないの？」

こいつは、あのときのことをそう解釈していたのか。

「ああーっ……」

視線を逸らそうとすると、梨子は俺の頭をがっしりと掴んでそれを阻止する。なんか、言い逃れできない雰囲気だ。

「……ここなら一応の安全は確保されているし、生活もそれなりに始まっている。ここを出て行くことは、それを放棄するってことだ。なにが起こるかかわからないところに、無理に付き合わせられないだろ」

「私は……、やっぱり足手まとい？」

俺は、やんわりと梨子の手を払い、梨子の頬を撫でた。

「そんなわけないだろう」

「それじゃあ今後も、これから私たちは一緒だって約束して」

梨子は、微笑を浮かべて言った。

不覚にも、俺はその顔に見惚れてしまった。

「やれやれ、これは全面的に直以が悪いな」

「直以は人の心がわかってないよなあ」

今まで黙っていた聖と雄太が苦笑混じりにそんなことを言う。こいつらは……。

「そうだ、せつかくだからスエアをやるうよ！」

「うええ!？」

俺と雄太は同時に変な声を上げてしまった。

「梨子くん。そのスエアとは一体なんだい？」

「えっとね。赤毛のアンで、アンと親友のダイアナがやった親友の誓いなんだ」

「ふむ。そんなものがあるのか」

「うん え〜と、赤毛のアンはと……」

梨子は嬉しそうに本棚を漁る。泣いたカラスがってやつだ。

俺は、雄太と顔を見合わせた。あの恥ずかしい文句を言わされるのか……。

「あった。それじゃあ、まずは聖お姉ちゃん 今から私が言うか

ら名前を変えて同じように言うて」

「う、うむ」

梨子は、まるで牧師のようにそれを独唱した。

「わたくしは太陽と月の輝くかぎり、親友、牧原聖へ忠実である」とをおごそかに宣誓します」

「わたくしは太陽と月の輝くかぎり、親友、遠野梨子へ忠実であることをおごそかに宣誓します」

「これで私と聖お姉ちゃんはスエアした親友だよ」

「うむ、そうか」

聖は、ホクホク顔で嬉しそうにしている。

「さつて、次は直以お兄ちゃん」

「おえ？ いや、まずは雄太だろう？」

俺は視線で雄太になんとかしると言った。雄太は、無言で頷いた。「なあ、梨子。これ、男には恥ずかしいんだけど……」

「オトコモオンナも関係ないよ。ロツクの敵は常識！ さ、雄太お兄ちゃんも言つて わたくしは太陽と月の輝くかぎり、親友、青井雄太へ忠実であることをおごそかに宣誓します」

「まてまてまて！ 俺はいい！ 俺はいいけど、梨子はいいいのか？」「？ なにが？」

「スエアつてのは友情の誓いだぞ。愛情の誓いじゃないぞ」

「……はッ！」

梨子はなにかに気づいたように口を押さえると、上目遣いで俺を見た。

そして、なにこともなかったようにイスに座ると、戦国策を読み始めた。

「……なんだか知らないが、助かったのか？」

「直以、おまえにとっては余計追い詰められたのかもしれないぞ？」

なにやら人の悪い笑みを浮かべる雄太を、俺は一発殴りつけてやった。

翌日の朝食は、俺の想像とは違って厳粛としたものだった。

本来150人収容の食堂に臨時の席を設け、鈴宮高校にいる全ての人間172人が顔を合わせているのに無駄話はほとんどない。

「昨日のうちにみんな結論を出したのかな」

「語り尽くせるテーマでもないと思うけどな」

全員が食事を終え、それでも席を立たずに無意味な沈黙が食堂を覆った。

キリキリと、弓を引き絞っている感じ。

あるいは我慢できなくなった誰かが暴発するのを待っているのか。その仕掛け人であるところの須藤清良は、優雅にお茶なんかを啜っている。

「おい、聖。なんとかしろよ」

「さて、私にはどうすることもできないな」

「そもそも須藤先輩はなんで動かないんだ？」

「待っているんだよ」

「なにを？」

「自分の対抗馬が出てくるのを」

聖は、わざとなのだろう、食堂にいる全員に聞こえる声で言った。「誰が自分を追い出そうとしているのか、自分が追い出されたその後、ここを指揮することになるのは誰か、朝倉市の傀儡として踊るのは誰か……」

俺は須藤先輩を見た。須藤先輩は、微笑を浮かべて俺を見返した。それが、聖の言ったことを肯定していると、俺には理解できた。

食堂内がざわつき始める。

それに合わせるように、紅がひとりひとりに投票用紙を配り始めた。

投票用紙は白紙だ。つまり、なにを書くかの様式が決まっていなかった。

抗戦か降伏か、のみの投票ではなくなっていた。

いつの間にか、須藤先輩支持か不支持かに置き換えられていたのだ。

聖は、俺の耳元で呟いた。

「リスクマネジメントの極みだね。自分の不利を支持に変えるんだから。中には抗戦派であるにも関わらず須藤清良不支持もいるだろ

うに。木村大地の一派のようにね」

「……えげつないな。相変わらず」

この爆弾女は、抗戦イコール自分の支持という図式を無言で作りに上げていたわけだ。

おそらく、聖が言わなくても他の誰かがそのことを明確にする手はずになっていったんだろう。

しかも、自分の対抗馬となる存在を封殺した上で、だ。

自分に反対するからには、自分に成り代わってこの場で存在をアピールできるもの。その覚悟のあるもののみが反対を、不支持を表明できる。

そんな覚悟を今この瞬間に持っている人間が、さて、この中に何人いることか……。

「無責任な批判を認めないって点では立派だけどな」

俺は、投票用紙に「抗戦反対」と書いて、須藤先輩の前に飛ばした。

須藤先輩はそれを見て、必死に笑いを堪えていた。

結果は予想通りのものになった。153対11、無効が8票で、鈴宮市は朝倉市に抗戦することになった。

須藤先輩が立ち上がり高説を述べると、形式的にはあっても支持をした連中、つまりはほぼ全員が拍手喝采でこれを迎えた。

「……論点をずらしておいてよくやるよ」

「直いくん、私のこと、見損なっただかしら？」

当人である須藤清良が聞いてくる。

俺は、本音で答えてやった。

「いや、惚れ惚れしてますよ。うまくやったもんだってね。詐欺の類だとは思いますが、もともとあんたの人格なんてまるっきりに買っていないから」

須藤先輩は、悪そうな笑みを浮かべて言った。

「正直、私が動くまでもなかったかな。残念ながら、晴美ちゃんでは私の対抗馬にはなれなかったみたい。お互いのために、それはよかったんだけどね」

実行されなかったもの、実行されたが目に見えないもの、……この人は、一体いくつの策略を用意していたんだか。

「だけど、下準備は整えたわ。一応であつても、全員が抗戦を考えているのなら、戦いやすいでしょ？」

「あんた、そこまで考えていたのか……」

「ええ。後は、あなた次第」

須藤先輩は、俺の肩を軽く叩くと、去っていった。

「俺次第、ね」

俺は勢いよくイスから立ち上がった。

「わかつてるよ。不愉快ではあるけど、これ以上は逃げられそうにないからな」

俺は、赤木の顔を思い浮かべて、食堂から出た須藤先輩を追った。

男がやるにはスエアは恥ずかしい(後書き)

お気に入り1000人突破!

ありがとうっす!

これからもっと質を高めて執筆していくので引き続きお付き合いく
ださい!

鈴宮朝倉戦争戦略会議（前書き）

今回は状況説明が長々と続きます。

斜め読みで読み飛ばしてくださいませ。

鈴宮朝倉戦争戦略会議

「さあ、て、と。それじゃあ始めましょう」

格子窓から陽光の差し込む校長室に、昨日と同じように俺たち1班の全員と各班長が集合していた。

紅はガラス製のテーブルの上にA1の紙を広げた。そこに書かれていたのは、学校の縮図だった。

「みんな、ここに集められた理由はわかっているかしら。投票により、私たちは朝倉市の要求を蹴ることに決定した。だけど、本当にそれでいいのかしら？ここでは、それをもう一度考えるために集まってもらったのよ」

「どういう意味ですか？」

須藤先輩に代わって、俺は答えた。

「朝倉市と戦争して、勝てるのかどうか……」

班長たちは、ざわめきだす。

考えていなかったわけではないだろう。

政治家に投票したら丸投げで終わっていたときとは違う。

指針を決めたからには、それに向かって行動するのも自分たちであることを、今、全員が認識していた。

「な、直以。いくらなんでも戦争するのは言いすぎじゃないか？」

健司の言葉を、聖は封殺する。

「戦争とは、敵を強制してわれわれの意志を遂行させるために用いられる暴力行為である。朝倉市は我々を従わせるために武力行使に訴え、それに我々が抗うのならば、それはまさに戦争だろう」

「鈴宮朝倉戦争ってところかしら？」

それを聞き、気を利かせたつもりだろうか、紅はホワイトボードに鈴宮朝倉戦争戦略会議なる見出しを書いた。

「ちよ、ちよっと待ってください！」

いきなり胸を揺らしながらそう言ったのは、内藤だった。

「みなさんも知つての通り、私は降伏を支持しました。そんな私がここにいてもいいんですか？」

「当然よ、あなたは私が選んだ班長なんだから」

須藤先輩は優雅に席を立つと、そつと内藤のところへ歩いていった。

「それとも、あなたはここを出て行きたいの？」

「え、いえ、でも……」

須藤先輩は内藤の肩を抱いた。女2人の胸と胸がぶつかり、柔らかく潰れた。

「あなたはみんなのためを思って発言した……、大丈夫、みんなそれをわかつているわ。これからも協力していきましょうね」

「はい……」

嗚咽おえつ混じりに内藤は頷いた。周りから見たら感動的なシーンかもしれない。だが、俺には須藤先輩の黒い尻尾が丸見えだった。

「……とんだ茶番だな」

「直にお兄ちゃん、心が汚い！」

梨子の言葉が俺の胸に突き刺さる。くそ、梨子、おまえ騙されてるんだって。

「とにかく、そろそろ本題に入ろうぜ」

「まず決めるべきは、なにを持ってこの戦争、我々の勝利となし、敗北とするのか、だ」

「目標の設定、ですね」

「そう、今ここで我々が話し合うことは、その目標を到達し得るかどうか、そして、そのためにはなにが必要か、ということだ」

「そんなの簡単でしょ。数日以内に来るだろう朝倉市の暴力集団を撃退したら私たちの勝ちよ」

そう言ったのは、俺の隣にいる伊草麻里だ。聖は麻里に頷いた。

「うむ。目標は明確かつ簡略でなければならぬ。紅くん、記載を」

紅はホワイトボードに書き込む。梨子は、それを見て俺に言った。「やっつけたら勝ちってことだよな」

「そついうことだ。わかりやすいだろ」

「ん」

「さて、それでは次だ。我々にそれが可能なかどうか」

「可能なのでしょうか？ 朝倉市は1500人、我々の10倍以上の避難民がいると伺っておりますが」

紅以上の丁寧語、切れ長の瞳に艶のある黒髪を持つこの女性は5班の班長、支倉涼子先輩だ。

剣道部の主将で、全国区の選手だと聞いている。

この人にはある逸話がある。

あるとき、ちよつとしたことで支倉先輩にケチをつけた馬鹿教師こついったやつはどこにでもいるもんだは、こつ言つた。

「女だつたら竹刀なんて振り回してないで花でも活けてる！」

それに対して、支倉先輩はこつ答えて、馬鹿教師を黙らせたそうだ。

「ご心配なく。華道も茶道も一流以上でこなしますので」

事実に基づく逸話だ。

その逸話の通り、支倉先輩は慇懃でありながらも言い逃れを許さない強烈な視線を聖に向けた。

聖は、どこか愉快そうにその眼光を受け止める。

まったく、どうしてうちの学校の女はこつ個性が強いのかぶり揃っているかね。

「今、支倉涼子女史の言ったことは如実に事実を語っている。それは、朝倉市の実情と弱点を簡潔に表しているものだ」

「どついうこと、かしら？」

「朝倉市にいる1500人という数は、避難民であるということだ。雄太」

名前を呼ばれて雄太は一步前に出た。そして、俺たちが昨日朝倉

市で見えてきたことをみんなに話した。

「1500人いるのかどうかは、さすがに数えなかったけど、朝倉市にいる多くの人間は避難民で、庇護を受けている立場だった。俺たちのように、それぞれがなにかやっている人たちじゃなかったよ。女子供も多くいたしな」

「数は多くても、朝倉市の事務局はそれを兵士には使えないということだな。そして、内紛を抱えている朝倉市がこちらに向けてくる兵力はそれほど多いものにはならないだろう」

「抽象的だな。具体的な数を言えよ」

聖は、ウエーブのかかった髪を後ろに払い、俺を見た。

「正確な数を算出するのはさすがに難しい。まあ、目算でいいのならやってみようか。まず、1500人のうち、半数は女子供やご老体で除外。それからさらに半数は事務局に反対する連中として除外。さらに半数はその反対派に対する備えとして除外。紅くん、残った数は？」

「187.5人です。繰り上げて200人といったところでしょうか？」

「ずいぶん大雑把な計算をしゃがったな」

「だけど、それくらいなら戦力差はほとんどないよな」

校長室は、勝算を見つけてにわかになり上がり始める。

危険な状態だ。こういうときに出る楽観論は諫めないと大変なことになる。

そう思った俺は、水を挿すことにした。

「わかってんのか？ そいつらはただの200人じゃねえぞ。機動隊員がいるんだぞ」

実際は本物の機動隊員は1割もないだろう。だが、それを無視して話を展開するのは危険すぎる。

と、そこで今まで黙っていた大地が発言した。

「須藤先輩。そろそろ俺たちにも本当のことを教えてください。銃は、あるんですか？」

須藤先輩は微笑を浮かべたまま、紅を見た。紅は、大地に答えた。
「現在鈴宮高校にある銃器は、拳銃20丁、小銃と狙撃銃が5丁ずつ、軽機関銃が1丁です」

「なんだ、それだけあるなら余裕だろう」

「悪いけど、そんな単純なもんじゃないわよ」

健司に釘を刺したのは、麻里だった。

「この中、ううん、この学校中で銃器をまともに扱える人間が何人いるのよ。銃って、そう簡単に素人に扱えるもんじゃないのよ」

全員が押し黙った。そういえば、紅は普通に使ってたな。

「それに、実は私たちの持つてゐる弾って、弾頭が特殊で貫通力が弱いよ。テレビで見えるように機動隊員が盾並べて前進してきたら対抗できないわ。あの盾、改造トカレフくらいなら楽に防ぐらしいから」

「機動隊員が、引いては盾が問題、なのかしら」

支倉先輩は、どこか楽しげにそう言う。

「盾をどうするか……」

ちよんちよんと、梨子が俺の袖を突付いた。

「盾って前だけだよ。後ろや横から狙えばいいってこと？」

「まあ、簡単に言えばそうなんだけど……」

「それなら、狙えるところに誘導すればいいんだよ。例えばロータリーとか」

梨子は、地図のロータリー部分を指差した。

「……悪くない作戦だけど、ちよつと難しいかな。ロータリーまで入れちまうと、校舎に入り込まれるかもしれない。そうなると乱戦になる。俺たちは所詮は高校生だ。成熟した機動隊員を抑えるのに何人がかりになるか見当もつかないよ」

「むう、それなら校舎外にそういう場所を作ればいいんだよ」

「将来的にはともかく、今はそれを作る時間がないな」

即席の稜堡では簡単に崩されるだろう。だけど、いつかは校門前に欲しいな。今は荒地から校門の中まで素で見通せるからなあ。

「梨子ちゃんの言った作戦、けっこういいんじゃない？」

麻里にそう言われて、梨子の顔が輝く。

「ロータリーに引き込んで3方から火力を集中したら校舎に侵入する余裕なんてないでしょ？」

「雄太、もしロータリーまでの道を確保できたらどうする？」

「車で校舎に突っ込むかな。車の中にいれば弾除けになるだろ？」

「そうだ！ 撒きビシみたいのを撒けばいいんだよ。ほら、忍者が使うやつ！」

自信満々に言う梨子に答えたのは、どこかで見たことある松葉杖をついた男だった。その男は、俺の隣にいる麻里にウィンクして言った。

「牧原さんの要請を受けて昨日から車による突撃対策の道具は作っています。まあ、撒きビシではなくて針金を使った……」

「なんか話が止まらなくなってる……。自分の話を延々と続ける、専門職にありがちなタイプだな。ところで麻里。あいつ、誰だ？」

「9班班長の小峰卓也先輩よ。科学部部长の。ほら、初日に私とあんたで助けた連中の中にいたの覚えてない？」

「……まるつきり覚えてない」

「あんた、ほんつと物覚えが悪いわね！」

いつの間にか班長たちはそれぞれのグループを作り、各々で話し始めている。

まとまりがなくなりかけたそのとき、周りを黙らせたのは須藤先輩の澄んだ声だった。

「それで、小峰くん。ロータリー用の車避けは準備できるの？」

「いえ、無理ですね。当初の予定は敷地外の要所要所に敷設できるだけ。それでも材料も期日もギリギリなのに、それ以外なんて物理的に不可能です。物資の調達と時間をもらえればなんとかなりませんか？」

「補足しておこう。もし当初の予定を廃して校舎前に車避けを設置するなら、他の箇所から破られる可能性が高い。そうなるとロータ

リーにおびき寄せるといふ前提が崩れることになるだろう。校舎外の車避けは、大前提として必要だということだ」

「ちなみに、物資を調達してきたらどれくらいで作れるんです？」

俺がそう言うのと小峰はすごい勢いで俺を睨んできた。え、なんで俺、こいつに恨まれてんの？

「ぼくは、必死で頑張っているんだ！ 横から口出ししないでもらいたい！」

「はあ、すみません。それでどれくらい……」

「きみい！ き、き、きみには人の血が通っていないのか！？」

なんなんだ、いつたい。なんかものすごく理不尽な怒りをぶつけられた気がする。

「えっと、小峰先輩。とりあえず、今でもぎりぎり、とてもこれ以上を作る余裕なんてないってことなんですよね」

「はいマリちゃん そのとおりでしゅ！」
「しゃんって……。」

「ごほん！ とにかく、その作戦は最終手段にしよう。その作戦自体が成立しないかもしれないからね。今からする話は機動隊員の盾をどう無力化するかと、機動隊員の強力な個を潰すために、どうやって集団戦を挑むかに要点を絞って欲しい」

聖がそう言うのと、議論百出という展開になった。

あれはここが駄目。それはあれが駄目。

ホワイトボードに作戦の数々が書き込まれた。

どれも決め手に欠く案が出ては消え、出ては消える。

格子窓から陽光が差し込まなくなり、昼が近くなってきた頃、俺は爆睡中のさっちゃんをおんぶする荒瀬先輩を見た。この人は、今まで一度も発言していなかった。

「荒瀬先輩。なにかありますか？」

俺の発言に、周りは一斉に会話を止めた。

荒瀬先輩は常に日陰にいる人だが、実際に須藤先輩と表裏であり、影の実力者であることは全員がわかっているのだ。

荒瀬先輩は、さっちゃんをおんぶしたまま言った。こんな格好なのに威厳があるから凄まじい人だ。

「直以、戦争に勝つための要素を言ってみろ」

俺は、少し考えて答えた。昨日出しっぱなしになってた孫子を読んどいてよかった。

「道天地将法」

「牧原。朝倉市と比較しながら説明してみる」

「……道とは、上と下が一体であること。世論に沿った行動をしているか、ということだ。我々は先ほど投票で抗戦すると決めた。これは、上と下が一体になっていると言えるだろう。対して朝倉市は避難民と事務局の間に食料を起因とした対立がある。これは、一体ではない状態だと言えるな」

俺は聖に続けて答えた。

「天地は、そのまま。天候と地形ってことだ。天候はどうしようもないが、俺たちの不利にはならないだろう。雨が降っても校舎内に避難できるしな。逆にあいつらは雨宿りするにもゾンビどもが徘徊する場所を確保してからじゃないとできない。地形は、朝倉市が鈴宮高校に攻め入るといふ形である以上、戦場選定権利が俺たちにある。迎撃するのか籠城するのか。迎撃するならどこで迎え撃つのか」

聖は不敵な笑みを浮かべて俺を見た。

「将とは優れた将軍が指揮を取っているか。ふむ、これについては一見現役機動隊員が指揮を執っている朝倉市が有利に見えるな」

「向こうの指揮官はたぶん赤木武志巡查部長だ」

「巡查部長か。機動隊では分隊長クラスだな。確か5名編成だ。大規模な兵を指揮した経験はおそらくないだろう。直以、きみと条件は同じということだ」

……なんで俺？

「と、とにかく将についてもそれほどの不利はないってことだ。それで最後の法！これは戦うための軍政、軍令が整っているかどうか。まあ、俺たちは班単位で行動している。十分とはいえないが一

応の体裁は整えてある。朝倉市は……、おそらく、なにも整えていない。まとまった行動をしてくるのは機動隊員くらいだろう。それも、うまく機能するとは思えないが……」

俺は、抗議に来た避難民を殴り殺している機動隊員を必死で止めている赤木を思い出した。

数が多いということは一見有利だが、それは統括できていることが絶対条件だ。それができなければ、その集団は単なる烏合の衆だ。荒瀬先輩は、強面に笑みを浮かべた。

「敵の弱点が見えてきたな。機動隊に拘り過ぎるな。全体を見る」

「ふ……む、敵の弱点を突く、か」

「だからどうやって機動隊員を避けるかを……、いや、確かに機動隊員に拘りすぎていたか」

おそらく孫子なんて読んだこともないだろう荒瀬先輩に諭される。つたく、この人、底が知れないなあ。

「さて、とりあえず今日の話し合いはこれくらいにしましょう。もうすぐお昼だしね。結論は出なくてもできることは山ほどあるはずよ。まずはそれをしましょう」

須藤先輩が手を叩いてそういうと、張っていた空気が一気に四散した。

「とりあえず、時間が欲しいわ。最低でも車避けが全て設置できる程度の時間は……」

そう言つて、須藤先輩は班長連中を見渡して、最後に雄太を見た。「臼井くん、雄太くん。あなたたち2人をお願いするわ。明日朝倉市に行つてきて」

臼井海斗先輩は3班班長で校内で1、2を争う美青年だ。見た目では雄太も劣っていないとは思うが、人気では比較にならない。スポーツマンの大地とは違う、優男タイプのモテ男だ。

「なるべく向こうの事務局長をおだててきてね」

朝倉市の事務局長は倉木とかいうおばさん議員だ。イケメン2人を揃えたのはそういうことか。

「それで、降伏勧告を拒否するって伝えるんですか？」

「それは……危険だな」

うるたえる白井に、須藤先輩は笑顔で、さも楽しそうに言った。

「うっん。鈴宮高校は、降伏勧告を受諾しますって、チワワが怯えるように伝えてきて」

鈴宮朝倉戦争戦略会議（後書き）

今話の部分は本来ならば、そんなことがあった的なダイジェストでさらっと流す部分、また、そうすべき部分だったのですが、くどくどと書き連ねてみました。

理由は、ちよつとした実験です。

今話はなるべくシーンを変えずに書きました。

内容的には意味がないのですが、流れとしてどんな効果があるか確認したかったためです。

まあ、結果は大失敗だったわけですが……。

いつも以上のお目汚し、どうもすいませんでした。

・・・なんか最近謝ってばかりです。

開戦前（前書き）

CAUTION !!

今回、後半で聖が少し本性を見せます。

読者様自身の体調とご相談の上でお読み下さい。

開戦前

雄太と臼井先輩が朝倉市から戻ってきたのは、投票日から3日が経ってからだった。

校長室から校舎前に止まった高級車を見ながら須藤先輩は言った。
「あと、2〜3日は稼いでもらいたかつただけどなあ」

「欲張りすぎですよ。それより、2人は無事ですか？」

「ええ。2人とも車から降りたわ」

「ふむ、それは重畳だな。朝倉市に残らされていたのなら人質にされていたかもしれないからね」

聖は煙草の灰を携帯灰皿に落として言った。こいつ、朝倉市に人質に取られたのが臼井先輩だったから見捨てたんだろなあ。

「油断、というには酷すぎるかしら？」

「酷、なのだろう。平和ボケした大人たちにはな」

悪女2人は声を殺して笑いあった。俺は、荒瀬先輩とその様子を恐々と眺めていることしかできなかった。

校長室の重厚な扉が開かれた。中に入ってきたのは4人。前と後ろは雄太と臼井先輩。その間に2人の男がいた。

そのうちのひとりには見覚えがあった。確か、倉木っておばさん議員の秘書をやっている初老のおっさんだ。

初老のおっさんは、優雅に出迎えた須藤先輩を見て、目を剥いた。
「う、臼井くん！ これはどういうことだね？ 須藤清良はすでに追放したのではなかったのかね？」

須藤先輩は、意識してのことだろう、初老のおっさんを素通りするように無視して雄太に話しかけた。

「お疲れさま、朝倉市の様子はどうだった？」

「いやあ、相変わらず酷かったですよ。原因は間違いなく事務局の

連中ですね。集めた避難民に日に一食しか与えてなくせに、自分たちは3食しつかりとってるんだから」

初老のおっさんは口を半開きにして呆然としている。その顔を撫でるように右手を伸ばし、須藤先輩は言った。

「ようこそ鈴宮高校へ。あのときはお互い名乗りませんでしたわね。私は、須藤清良。この学校にいるみなさんに頼まれてリーダーを務めておりますの。以後お見知りおきを」

須藤先輩は伸ばした右手を自らの左肩に当て、しなやかに一礼した。演技掛かった動作だ。だが、完璧に決まっていた。

場は、完璧に須藤清良の独壇場になっていた。

初老のおっさんは呼吸を乱し、顔の色を赤から青へ、そして白へとせわしなく変えている。その変化で、現状を理解しているのがわかった。

わかっていないのはもうひとりの男だ。気後れしながらも胡散臭そうに須藤先輩に言った。

「きみは、なぜここにいるのかね？ 本来だったらきみはここを追放されていなければいけないのに」

「そのことですか？ 止めましたの。私としては心苦しいところもあったのですが、みなさんが引き止めてくれましたので。私、嬉しく泣いてしまいましたのよ」

そう言つて須藤先輩は目元にハンカチを当てて、出てもない涙を拭った。

「そ、そんなことが通用すると思ってるのか！」

男は怒鳴るが、返ってきたのは、冷笑だった。残念ながら、ここには声を荒げられたくらいで臆するやつはいなかった。

さすがにこの茶番にも飽きてきた。俺は、男に言った。

「あんたたち、騙されたんだよ」

男は表情を消し、数秒間その意味を考え、そして、理解した。

「そ、そんな無茶苦茶な、そんな無法が……」

「無茶を最初に言ってきたのはおまえたちだろう？ 私怨でくだらない脅しかけてきやがって……」

男は、俺が言い終わるより早く後ろにいた臼井先輩を突き飛ばして校長室から出て行った。

そのまま、高級車に乗り込んで逃げていくのが格子窓から見えた。「直以。いいのか、逃がして？」

「ああ。元々その予定だったんだよ。これでさっきの男が現状を話したら明日にでも兵を送ってくるだろう。いつ来るのかわからないのより、少し早くてもこちらの都合に合わせて来てもらったほうがいい」

俺たちは、置いて行かれた初老のおっさんを見た。

「……私をどうするつもりかね？ 断っておくが私に人質としての価値はないぞ」

「そう、ねえ。戦意高揚のために拷問にかけた上で公開処刑、なんてどうかしら？」

須藤先輩がそう言うのと、初老のおっさんは額から大量の脂汗を流した。つたく、この人の場合、本気でやりかねないところが怖い。

須藤先輩は小首を傾げ、初老のおっさんに微笑みかけた。

「そんなに怯えないください。あなたは……」

「わ、私は宮崎というものだ」

「宮崎さん。私たちは、あなたを客人として扱わせていただきますわ」

「ど、どういう意味だね！」

落とした後は持ち上げる。須藤先輩は、3倍以上生きているだろう男を手玉に取り始めた。

「私たちにはあなたが必要なんです。私、常々思っていましたんです。あなたほどの見識の持ち主が、なんで議員秘書などをやっているのかって」

……さつきまで名前も知らなかったくせに。

「な、なにを言っているのかね？」

「私たちの主体は残念ながら社会経験の少ない高校生です。あなたの豊富な経験で私たちを導いてもらいたいです」

おだてられて落ち着いたのか、初老のおっさん、もとい宮崎は白い顔に血の気を戻して言った。

「きみたちはこれからどうするつもりだね？　このようなことをして、許されると思っているのかね？」

「ご心配には及びませんわ。我々是我々の倫理に基づいて行動しておりますから。臼井くん。宮崎さんの接待役を頼みます。くれぐれも丁寧におもてなししてください」

須藤先輩がそう言うと、臼井先輩は宮崎を引き連れて校長室から出て行った。

しばらく無言が続く。

「……まったく、調子のいいことをぺらぺらと」

「たまらずにそう吐き捨てたのは、荒瀬先輩だった。」

「あら、宏。どういう意味？」

荒瀬先輩は答えず、須藤先輩から視線を逸らした。それは、無言で口喧嘩では勝てない認めているようだった。

「あの宮崎って人、どうするつもりなんですか？」

「そう聞いたのは雄太だ。」

「さて、聖ちゃん。どうする？」

「ふ……む、そうだな」

聖は煙草に火を点けて、俺を見た。

「直以、戦後処理はどうする？」

「考えないわけにはいかないんだろうけど、それと宮崎となんの関係があるんだ？」

「会議ではわざと広げなかったが、敵を追い返してそれで終わりはならないだろう。再び体勢を建て直して攻めてくるかもしれないし、それ以上に目に見える現実として、食糧不足で飢民になった朝

倉市民がここまで流入してくるだろう。そうなった場合、我々は飢民をゾンビに対するより非常に対処しなければならなくなる」

「食料を求めて、か。ガリアの蛮族を追い返すローマ。まるで先祖帰りだな」

「そうならないためにも我々は手を打たなければならぬ。朝倉市の事務局を解散させ、避難民を分散させて自給自足体制を整える。その実務を宮崎氏に任せるのはどうだろう？」

「そう、ね。彼なら任せられるわね」

「あの人のこと、よく知らないでしょ？　なんでわかるんですか？」

「初めて会ったときは倉木っておばさんの押さえ役をしていたわ。今日は状況をいち早く理解していた。状況判断と調整能力にはそれなりに期待がもてると思うんだけど。もっとも、使えなければ別の人を立てればいいだけ、なんだけどね」

指摘されて初めて気が付いた。

同じものを見ているのに俺にはわからなかったこと。

それは、俺の劣等感を刺激するのに十分だった。

紅蓮。

ぐっしょりとした寝汗に目が覚めた。

内容は覚えてない。だが、思い出す必要もない。

いつものやつだ。

イメージは赤。

それだけで、俺はあの悪夢を鮮明に思い浮かべることができた。

まだ日の出には遠い、夜更けだった。

俺は身体を起こそうとした。が、軽い重りに妨害された。

見てみると、俺の腕に梨子がしがみついていた。

梨子は目を覚まし、眠そうに大きなあくびをした。

「……もうあさあ？」

「いや、まだだから寝てていいぞ」

「直にお兄ちゃんは？」

「俺はトイレ」

そう言っていると、梨子は俺の腕を放し、丸くなって眠った。

その様子に、俺は悪夢の執念から少しだけ開放された。

俺にだって年頃の性欲はある。だが、ここまで明け透けに信頼される、それをぶつけて汚す気にはなれなかった。

俺は、足に絡み付いている聖を蹴り退かすと、立ち上がって図書室を出た。

用を足し寝汗を拭った後、俺は図書室には戻らずに屋上に出た。

月はない。

電灯もない。

漆黒の闇。

足元すら覚束ない屋上を、俺は歩いた。

「ふむ、明日は雨が降るな。直以、今年の梅雨入りは早いかもしれないぞ」

振り返ると、暗闇の中に煙草の火がぽつんと止まっていた。

「聖、眠れないのか？」

「きみに蹴り起こされたんだろうが」

ふらふらと、煙草の火が近づいてくる。俺が火に手を伸ばすと、聖は夜目が利くのか、俺の手を払いのけた。

「……なんだよ」

「直以に煙草はやらないことにした。そのうち梨子くんが真似をして吸い出したら大変だからね」

俺は舌打ちすると、柵に背中から寄り掛かった。

「不安かい？」

「まあ、な。準備もした。作戦も立てた。だけど、やれることは全部やったのか。見落としはないのか……」

「敵は本当に機動隊を前面に押し出してくるのか、数は200未満なのか。そして、銃器の所持はしているのか？ 私にもわからないことは多い。その全てに対策を立てたとしても、それをうまく実行できるのかはまったく別問題だしね」

「おまえも……、不安なのか？」

「違う、とは言えないな。だけど、そこは割り切るしかない。戦場の霧というやつだ。人の身である以上、全てを見通すことなんて絶対に不可能だ」

聖は、俺の横に並んだ。暗闇の中、お互いの顔もわからない。それが、今はありがたかった。

「……なあ、聖」

「……ん？ なんだい？」

「このまま逃げるか？」

聖は、答えずに煙草の火を消した。

「雄太起こして、梨子も連れて、さ。4人だけだったらなんとかかなんだろ？」

聖は苦笑を浮かべるように息を吐き、その祝詞を唱えた。

「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」

「あん？ どういう意味だよ」

聖は、俺の腰に抱きつき身体を密着させてきた。

煙草の臭いと女の柔らかさ。間近に迫った顔の輪郭がつつすらと

浮かんだ。

「私と雄太はきみがどんな選択をしても従うよ。梨子くんもきつと付いてくるだろう。だが、きみはそれができるのかい？」

「わからん。だけど、少なくともそんなことを考える程度には俺は弱いつてこと……」

聖は、俺の下唇を啜えて言葉を遮った。

そのまま舌を這わせてくる。

顎、のど、鎖骨、そして、傷跡の残った左肩。

「……おまえは、いつも突然発情するな」

「ふふ、久しぶりのキスだな」

そう言つて、聖は、ぴちゃりと舌なめずりした。

「直以、きみはわかっているはずだ。自分自身からは決して逃げ切れないつてね」

聖の顔が近づいてくる。

俺は顔を背けた。

聖はかまわずに顔を近づけ、俺の耳元で呟いた。

「だからなのだろう？ きみが自分の身も省みずに行動するのは」

聖が俺の耳朵を囁む。俺は、聖の肩を掴んで突き放した。

「そんなつもりはねえよ」

聖は、俺の手を取ると、自らの下腹部に触れさせた。

「あのときはどうだった？ 32人を殺してどんな思いだった？」

一瞬、俺の手の先に存在しない炎が走った。

「……俺が殺したんじゃない」

聖は、さも愉快そうに笑い声を立てた。

「気持ちいいね直以。今、私はきみのトラウマに触れている。膣内に迎え入れているんだよ」

「聖。もう止める」

「止める？ なぜだい？ 直以、きみも吐き出すといい。私は、し

っかり中で受け止めるから」

「聖！」

「私はきみを責めるつもりも慰めるつもりもない。全てを受け入れるよ。ほら、直以！好きなだけ私を犯すんだ！」

俺は、聖に抱きついて身動きできないように押さえ付ける。そのまま聖の首に吸い付いた。

「……落ち着いたかい？」

「……俺のセリフだ」

どれくらいそうしていただろうか。聖の手がそつと俺の髪を撫でたのを合図に、俺は聖から離れた。

強く抱き締めすぎたせいだろう。聖は少しむせながら呼吸を整えた。

「おまえには、話したことはなかったはずだよな。どこまで知っているんだ？」

「きみのことは、全て知っているよ」

「つたく、ストーカーかよ。雄太に聞いたのか？」

「これでも、嫉妬したんだよ。付き合いの長い私には話さないで雄太には話したんだから」

「付き合いつていっても数ヶ月程度だろ？それに、俺にも安いプライドがあるんだよ。女に弱みは見せたくない」

「雄太もそう言っていた」

俺と聖は、ようやく落ち着いて笑いあった。

「未来は選べるが過去は選ぶことはできない。これは事実だ。だから、直以。きみがこれからどれだけ苦しもうとも、きみの経験してきたことを変えることはできない」

聖はジッポの火を点けた。

燃える赤。

聖の顔が浮かび上がった。穏やかな、実に穏やかな顔をしていた。「きみは……、先に進むといい。それがどのような道であっても私は付いていくし、必要ならば道を照らそう」

俺は、ジッポの蓋を閉めて火を消した。屋上に闇が戻った。

「はいはい。わかったよ。とりあえず戻って寝るぞ。さすがに夜は冷える。明日、風邪引きましたってのは洒落にならん」

聖は、まだなにか言いたそうにしていたが、黙って俺の後に従い屋上を出た。

俺には、聖のおかげで強い確信がもてた。

それは、聖が俺の傍にいてくれるということだ。

聖がいて、それで無理ならどうやっても無理。

聖がいてくれるなら、きっと明日も大丈夫だろう。そう思えた。

翌朝、日が昇りしばらくたった頃、朝倉市の兵隊は到着した。

荒地にバスを止め、バラバラと降りてきた連中は、機動隊員を先頭に横隊を作ってゆっくりと前進を始めた。

「……きやがったな」

俺たちも臨戦態勢に入る。事前の打ち合わせどおり、スムーズに陣を敷き、朝倉市の兵を迎え撃つ準備を整えた。

校外に、俺たち鈴宮高校の兵と朝倉市の兵が対峙する。

こうして、俺たちの闘争が幕を開けた。

開戦前（後書き）

お楽しみ頂けていますでしょうか、どぶねずみでございます。

今回、聖が少しはっちゃけました。

一応この小説、R15を付けているし露骨なラブシーンを入れていくわけではないので大丈夫だとは思っていますが、不快な思いをさせてしまったかもしれません。

どうも申し訳ありませんでした。

雨煙る

兆候は一瞬だった。

一粒の雫。それに気づいた直後、雨が視界を煙った。

大雨が100メートルの距離を挟んで対峙した鈴宮高校の兵と朝倉市の兵を濡らす。

「降って来ちゃったなあ」

「なに、この冷たい雨は栄養不足の朝倉市の連中には堪えるだろうよ」

「こつちだって火薬棒を使えなくなっただろう？ 黒色火薬は湿気に弱いからな」

俺は、雄太と聖の会話を背中では聞きながら、2階にある職員室の窓から展開する両軍を見た。

鈴宮高校は、一部を除く全ての男子と運動部に所属する女子が大地を中心に外に出ていた。

対する朝倉市の連中は機動隊を前面に押し出し、その後ろにいかにも頭数を揃えるためだけに掻き集められたような男たちが立っている。

兵力差はほぼ互角。

両軍は、一触即発の状態で向かい合っていた。

先に動いたのは、朝倉市だった。

機動隊のひとりが拡声器を使い、最後通牒をする。残念ながら雨の音に掻き消されて校舎の2階にある職員室ではよく聞き取れなかった。

「降伏勧告、ね。それで正当性を誇示しているつもりなのか？」

「必死なんだろうな、朝倉市も。理由もなく、一般市民に人殺しはできないからね」

俺は窓から離れて梨子を見た。梨子は少しだけ拗ねたように俺を見返した。

「ほんとうに私がやるのお？」

俺は梨子の肩を掴んで反転させると、そのまま背中を押して放送マイクの前に連れて行った。

「ほら、早くやれ。今日はソーラーパネルが使えないんだから無駄に電気消費できないんだよ」

「もーお、わかりましたよ！」

梨子はマイクのスイッチをオンにする。軽快な音楽がスピーカーから流れた。

軽い咳払い、梨子は話し始めた。

『みなさんおっはようございます！ 今日生憎の雨。ですが、雨も悪いことばかりではありません。外での作業は臨時のお休み目の前のヤツカイゴトを片付けて、今日はゆっくり過ごしませう』

外から喚声が聞こえる。やっぱり梨子ってMCの才能あるよなあ。こいつ、完全アドリブでやってんだから。

『朝倉市のみなさん。悪天候の中お疲れ様です。ですが！ しょーじきいい迷惑です。私たちにあなたたちは必要ありません。どうかこのままお帰りください』

再び喚声。その反応に照れながらも、梨子は締め言葉を放った。『ここでぐっつどニューっス！ 今日のお昼は、カレーです！ アリガタ迷惑な朝倉市の方々をやっつけて、おいしいご飯を食べませよう！』

大歓声！ ここで終わればいいものを、梨子は蛇足を付け加える。『以上！ 直にお兄ちゃんからでした』

俺が反応するより早く、梨子は早口で『ドーズ』と言ってマイクを切った。

「お・ま・え・わ！ どうして俺の名前を出すんだよ！」

「いや、なかなかのものだったぞ。梨子くんの演説で我々の士気は

高揚した」

「演説って……、そんな大げさなこと言っていないけど」

梨子は照れくさそうに顔を少しだけ伏せた。

「だけど、梨子って何気に人気あるんじゃないか？ 他のやつじゃあこつは盛り上がりがないと思うよ」

雄太がそう言うと、梨子は少しすまし顔になった。

「別に、私は遠くの誰かに好かれたいなんて思っていないよ。わたしは、直以お兄ちゃんたちに好きになってもらいたい」

「はいはい。梨子くん、愛してるよ〜」

「……聖お姉ちゃん、首に赤い痕があるけどどうしたの？」

「つぶ」

俺は思わず嘔き出してしまった。聖のやつは愛おしげに自らの首を撫でた。

「ふむ、痕が残ってしまったか。いや、昨日の直以は激しかったからな」

梨子は、おそらくは意味が理解できていないのだろう、困惑を顔に浮かべて俺と聖を見比べた。

「直以、おまえ、ついに聖と……」

「やってない！ なにもない！ なにもなかったんだ！」

「いや、別に弁解することはないぞ。おめでとうって、言ったほうがいいのかな？」

俺が反論しようとしたとき、外で騒ぎが起きた。急ぎ窓に寄って外を見ると、鈴宮高校の陣から、女子がひとり朝倉市の連中のところに走って向かっていた。

「あれは、確か8班のやつか？」

「8班っていうと、内藤のところのか」

内藤は以前、降伏派だった。その内藤のところに行ったのなら、そもそも降伏を支持していたのだろう。それなら、あいつはひとりで朝倉市の連中に庇護を求めたのかもしれない。

だが、その女子は受け入れられなかった。

女子は、機動隊員に近づいた瞬間、殴り殺された。雨の中、警棒で額を割られ、倒れて動かなくなっても殴られ続ける。

俺たちは、それをただ眺めていることしかできなかった。

「……私のせい？」

梨子は、震える手で俺の指を掴んだ。

「私が安い挑発で朝倉市の人を怒らせたせい？」

俺は、わずかに腰を落として梨子と同じ視線になって、答えた。

「そうだ」

「直以！」

俺は、俺を非難する聖と雄太を無視して言った。

「もちろんおまえだけのせいじゃない。だけど、ここでおまえは悪くないなんて、俺は言わないよ」

梨子は、長いまつ毛を揺らして瞳を閉じると、微笑を浮かべてしっかりと俺の目を見返した。

「ありがとう、直以お兄ちゃん。ちゃんと私と向き合ってくれて」と、そこで職員室のドアが無遠慮に開かれた。

「ういーっす、って、なんか取り込み中っすか？」

隆介だった。片手にヘルメットを持って、金髪の頭を掻いている。俺は梨子から視線を外して隆介に向いた。

「そろそろか？」

「ええ。みんな先輩たちを待ってます」

「わかった」

俺は、着ているレーシングスーツのチャックを上げ、立てかけてある戈を手を取った。

戈は、何度か使ったが俺に合っていた。いつの間にか、俺の専用武器になっていた。

窓の外を見ると、朝倉市の兵は機動隊を先頭に緩やかながらも前

進を開始している。

古代ギリシアのフランクスつてところか。

「よっし、出番だ。雄太、行くぞ」

「……ああ」

歯切れの悪い返事だ。

「直以。わかつていると思うが、この会戦の勝敗はきみたち次第だ。タイミング勝負だぞ」

「わかつてるよ。なんとかやってみる」

「あの……、直以お兄ちゃん」

梨子は、おそろおそろといった感じで俺に声をかけてきた。

だが、その後は無言が続いた。

言葉を搜しているが見つからない。

なにかを言わなくちゃいけないが、なにを言えばいいかわからない、そんな感じだ。

俺は、梨子に助け舟を出した。

「梨子……」

「は、はい!!」

「ちよつと行ってくる」

梨子は、大きく息を飲み込んで、満面の笑顔で言った。

「うん！ 行ってらっしゃい!!」

俺は、梨子に見送られて職員室を後にした。

「直以、直以!!」

階段で雄太に後ろから肩を掴まれる。

「おまえ、なんで梨子にあんなことを言ったんだ!!」

「……それは、今話すことなのか?」

「そつだ!!」

雄太は俺の前に回りこんで進行を塞いだ。

「梨子はなにも悪くないだろう! あいつが責任感じる必要なんてないはずだ!!」

「……おまえも聖も梨子に甘すぎるんだよ」

「そういうことじゃないだろ！」

雄太は俺の胸倉を掴んできた。

こいつは梨子のために本気で怒っている。俺には、それが嬉しかった。

「梨子は責任を感じていた。これからこんなことは山ほどあるんだ。今、自分は悪くないって正当化を覚えたらいつもなにかのせいにして責任逃れするようになる」

「まるで保護者面だな。おまえがそんな人格者だったとは知らなかったよ」

俺は、雄太の手を払った。

「俺が他人に説教できるほど成熟も達観もしていないのはわかっているよ。だけど、これは他人事じゃないんだ。俺たちは……、今から人を殺しに行くんだから」

俺と雄太は、瞬きもせず睨み合った。

「俺は、誰かやなにかのせいにして自分の行動から責任逃れなんてしたくない。それが人殺しだったとしても」

「俺やおまえが責任を負って後悔して生きていくのはいいさ。だけど、それを梨子にまでかぶせる理由はどこにあるんだよ」

「あいつは、俺たちと並びたがっている」

予想外の言葉だったのだろう、雄太はそれを聞くと、1歩後ろに下がった。

「……あいつが、必死で俺たちに認められようと努力しているのは知っているよ」

「俺としては今のままでも十分認めているんだけどな。だけど、あいつは変わりたがっているから」

雄太は、表情を崩して額に手を当てた。俺が無駄に梨子を追い詰めてるわけではないとわかって安心したのだろう、わかりやすいやつだ。

「だけど……、直以だって知ってるだろう？ 自分の責任を背負い

きれなくて歪んでいったやつらが山ほどいるってことを」

「あいつは、梨子は大丈夫だよ」

「なんでだよ」

「だって、俺たちがいるだろう？」

雄太は、一瞬呆けた顔をして、ようやく笑みを浮かべてさらさらの前髪を払った。

「矛盾だよ。あいつが俺たちと並びたがっているのに、俺たちがあいつを助けたら本末転倒だろう」

「俺たちだってあいつには助けられてるんだ。それぐらいいいだろう。それに、俺たちはお互い利用し合っている。聖の無駄知識とかおまえの器用貧乏とかな」

「言い方が悪いんだよ。だけど、確かにそれなら俺たちが梨子を支えるくらい問題ないよな」

雄太は、俺の前に拳を突き出した。

「そういうことだ」

俺は、雄太の拳に自分の拳をぶつけた。

「……あの、喧嘩は終わりっすか？」

「おう、隆介。いたのか？」

「ひつど！俺、どうしようか本気で慌ててたんすよ！」

「なんでおまえが慌てる必要があるんだよ。別に俺たち喧嘩してたわけじゃないし。なあ雄太？」

「ああ。どこが喧嘩なんだよ」

「……ああーはいはい。なんか俺だけが馬鹿見たみたいっすね」

俺と雄太は、ふて腐れる隆介を見て笑った。

俺たちは、主義も趣向も違う、別々の人間だ。

意見の対立だって、必然的に存在した。

そういうときは、俺と雄太、俺たちは向き合うことができた。

唯々諾々と馴れ合わない、馴れ合う必要のない、俺たちの関係だ

った。

外は、本降りだった。食堂から傘も差さずに表にでた俺たちを向かえたのは、紅と3人の男子だった。

「直以先輩。お待ちしていました」

俺は、雫の滴った紅の前髪を撫でた。ずっと雨に濡れながら待っていたのか、紅の白い額はすでに冷たくなっていた。

「あまり身体を冷やすなよ」

「いえ。これくらいがちょうどいいです。お恥ずかしながら、昨日は高揚して眠れませんでした。少し頭を冷やさないと冷静な判断ができそうもありません」

にこりともしない紅に、俺は笑いかけた。幸い紅が着ているレーシングスーツは防雨製になっている。見た目ほど体温を奪われていく様子はなかった。

「よっし、みんな。集まってくれ！」

俺の号令に全員が集まる。

「俺たちはこれから裏門を出て敵の右側面に回って奇襲をかける」

「っしあ！　いよいよ活躍のときっすね！」

隆介が盛り上がる。他のやつも、梨子の放送に感化されたのか、それとも紅のように初陣に高揚しているのか、興奮を隠し切れないでいるようだった。

俺は、紅を見た。

「紅。おまえが先頭だ。もつとも危険でもつとも重要な仕事だ。頼むぞ」

「了解しました。非才なる身の全力を持って直以先輩に応えます」
相変わらずの固い受け答え。だが、それが今は頼もしくもある。
「この雨は俺たちの音と姿を隠してくれる。奇襲を成功しやすくしてくれるだろう」

俺は、戈を肩に担いだ。

「とりあえずおまえらに頼むのは3つだ。俺の後についてくること。迷ったら俺を見つけること。そして、俺の戈が向いた方向に全力で突っ走ること」

俺は、戈を振り下ろした。空気を切り裂く鋭い音が鳴った。

「勝敗とか、責任とか、そんなことは考えなくていい。とにかくやることやって、昼にうまいカレーを食おう！」

「おうー!!」

それを合図に、全員が準備を始める。

ふと見ると、雄太が苦笑を浮かべて俺を見ていた。

「こいつらには責任を負わせないで梨子には負わせるのか？ 直以が梨子に過剰な期待をしているのがわかるな」

「そういうことだ。雄太、御者は頼むぞ」

「了解。おまえこそ全体の舵取りは頼むぜ、指揮官殿」

「そんなたいそうなもんじゃねえよ。ま、お互い無事に帰って梨子におかえりなさいっていつでもらおうや」

「ああ、そうしようか！」

雄太はそう言うのと、俺に笑顔を見せてヘルメットをかぶった。

「直以先輩！ 俺、頑張るっすから見ててくださいいね！」

振り返ると、隆介が俺を見下ろしていた。レーシングスーツ越しからでも、金髪男の筋肉質な体型が見えた。

「隆介。あまり気張るなよ。生存が第一だからな」

「わかってますって。ていうかどの口がそんなこと言いますかね。」

200人近い敵陣にたつた7人で突撃かけるつてのに」

「っは！ 言われて見ればその通りだな。言葉尻だけ捕らえたら玉砕覚悟の無駄死にだなあ」

「だからこそ、俺たちの腕の見せ所なんじゃないっすか！」

「おまえの馬鹿さ加減には救われるよ」

「……それ、褒めてねえっすよね」

「褒めてんだよ！」

俺は隆介の腕を引つ叩くと、先頭にいる紅のところに向かった。

「紅、すまないな。こんな危険なことやらせて」

「いえ。むしろ、こんな重要な役目を直以先輩と共に挑めることを光栄に思います」

俺は頷いて紅に背を向けようとした。が、珍しく紅は言い淀んで俺を止めた。

「？ どうした？」

「もしこの作戦がうまくいったら、ご褒美をください」

「ご褒美？」

紅は、無言で自分の唇を指差した。

「……考えておくよ」

「善処願います」

俺は、紅の傍から離れると、雄太のところに戻った。

「本格的にモテ期到来だな」

「おま……、気づいていたのかよ！」

「聖はわかってないだろうけどな。でも梨子はいぶかしんでるから気をつけるよ」

「ぶっっちゃけ重いんだよ」

「あの子が？ それとも聖たちが？」

「りょうほう！」

俺は雄太の後ろに陣取った。

周りを見渡す。

すでに全員の準備が完了している。

全員が、俺の号令を待っていた。

「よっし！ 行くぞ！ 敵陣を切り裂くんだ！」

俺は戈を振るった。

それを合図に先頭の紅が動き出す。

雨煙る中、俺たちは、出陣した。

荒地の戦い

戦闘が始まった。

前進する朝倉市の兵、迎え撃つ鈴宮高校の兵。

鈴宮高校は校内のイスや机を並べて安易なバリケードを作る。その内側から投石で朝倉市の兵を攻撃した。

だが、当然とすべきか、投石は先頭に並ぶ機動隊の盾に遮られて効果を得られなかった。

朝倉市の兵はゆっくりと前進を続ける。

一系乱れぬ歩調。

多少なりとも乱れがあれば、そこに隙が生じる。だが、機動隊員は隙を見せずに前進を続けた。

鈴宮高校の兵は前衛の機動隊のみをターゲットに投石を続ける。

「……崩れないな」

「俺たちが朝倉市に行ったときに銃を見せただろ？ それを警戒しているんだよ」

「それじゃああいつらはこのまま前進を続けるか？」

「下手に突撃されて混戦になるよりよっぽどいい」

俺は先頭の紅に合図を送り、速度を落とさせた。

両軍の距離は縮まる。

まだまだ、まだ遠い。

じれるように紅が振り返った。俺は首を横に振る。

両軍の距離はさらに縮まる。

「直以！」
「まだまだ！」

水飛沫が視界を覆う荒地、両軍は、お互いの顔を確認できるまで接近する。

すでに投石は止み、鈴宮高校の兵はそれぞれの武器を手に、迫る朝倉市の兵を睨んでいた。

木刀、バット、ドライバー。

不揃いな得物を持ち、鈴宮高校の兵は緊張を高める。

待つのは俺の合図。

俺の号令を、鈴宮市の全兵士が待っていた。

高鳴る心音、顔に滴る雨の雫を舐め取る。

俺は、大きく息を吸い込み戈を振るった。

「いつけえええー！！」

それを合図に、俺たち7人は全速で敵の右側面に突っ込んだ。

タイヤが泥を巻き上げ、今まで押さえていたエンジン音が全開で解き放たれる。

先頭の紅がクラクションを鳴らしながら車で敵陣に突入、突破口を形成し、隆介たちがバイクで突破口を拡大する。

俺は、雄太の運転するビックスクーターのタンDEMシートから朝倉市の兵が大混乱に陥るのを確認した。

すかさず鈴宮市の陣から20丁の拳銃が乱射された。これは、ほとんどが機動隊の頭上を飛び越え、残りは盾に塞がれて直接的な被害は与えられなかった。

が、間接的には効果は抜群だった。機動隊の格好をしているだけのもどきの連中が怯んだのだ。

櫛の欠けたような朝倉市の前衛に鈴宮高校の兵は全員で突っ込んだ。

簡単に組んだだけのバリケードを退かし、怯んで窪んだ偽機動隊目掛けて一気に突撃する。

木刀を持って先頭を突っ走っているのは、支倉先輩か。

勝敗は、その一瞬で着いた。

「何人やられた！」

右から左へ、敵陣を突っ切った俺は一度バイクを止めさせた。即座に隆介の怒鳴り声が聞こえる。

「2人こけました！ 生きてるかはわかりません！」

俺は大きく舌打ちした。

「……せめてもう一台車を用意できたらな」

「今さら言っても仕方ないだろ」

「わかってるよ！」

車を戦車に、バイクを騎馬に模した俺たちの奇襲突撃は成功した。

前衛の機動隊員と後衛の寄せ集めの分断と攪乱。

日頃から鍛えている機動隊員を除き、朝倉市の兵は全員が大混乱に陥った。

それを鈴宮高校の兵が一気に刈り取る。

獣性。

もはや一方的な殺戮から逃れるため、朝倉市の兵は泥に塗れながら逃げ出した。

俺は、込み上げる胃液を飲み込んだ。

「直先輩、指示を」

紅の冷静な声に俺は我に帰った。

紅の乗っている車を見ると、ボンネットが歪み、フロントガラスが割れていた。

「……エアバックなしでよかったな」

「ええ。もしエアバックがあつたら作動してしまい、途中でリタイヤでしたね。車自体は何台もありましたが、エアバックがない車はこれしかありませんでしたから」

俺は、出掛かった言葉を飲み込んだ。

……何人を轢き殺したのか？

雄太も正面から轢いていたし、隆介の乗っているバイクもヘッドライトが割れている。俺も、戈を通じて肉を裂く感触が手に残っていた。

再び戦場に目を向ける。

飛び散った血と泥と臓腑に塗れる。這いつくばって逃げる朝倉市の兵を鈴宮高校の兵は髪を掴んで押し倒し、後頭部にドライバーを振り下ろしていた。

「どうしますか？ 大勢は決したようです。今から戦場に戻っても仲間を轢く可能性もありますし、我々は先に校内に戻りますか？」

「……いや、まだだ」

「わかりました。それでは再突撃ですね」

俺は紅には答えずに、周りの連中に聞いた。

「おまえらはどうだ？ まだ動けるか？」

ひとりから声上がる。

「いや、駆動部がおかしい。平地ならともかくこんな泥道はこれ以上走れない！」

「わかった。それじゃあ先に校内に戻っていてくれ！」

俺は、雄太の肩を叩いて戦場の中心にバイクを走らせた。紅と隆介が慌てて俺の後についてきた。

戦場に到着すると、俺は大声で怒鳴った。

「武器を捨てて降伏しろ！ これ以上の抵抗は無駄だ！」

俺の意を覚った紅と雄介も、大口を開けて、雨を飲み込みながらも叫んだ。

「降伏しなさい！ 命は助けます！」

「もうやめろ！ 殺し合いは終わりだあ！」

俺たちを中心に戦闘は終息していく。

興奮が冷めた連中は敵味方を問わずその場に座り込んだ。

雨は赤黒く濁った泥を地面に広げている。

現状を認識したひとりとその上に吐しゃ物をぶちまけた。

少しずつ、戦闘は終息していく。

だが、興奮冷めずに木刀を振るい続けるやつもいた。

「ま、待ってくれ。武器は捨てた、降伏する！ だから助けてくれ！」

「聞こえませんか。ふふ、強い雨。あなたの汚物もきつと綺麗に洗い流してくれますよ」

女は木刀を上段に構えた。

「雄太！」

「わかつてる！」

女は、木刀を振り下ろした。

間一髪、いや、半髪の差で俺は間に合った。

振り下ろした木刀は、朝倉市の兵の額を割らずに、半分の長さになつていた。俺の戈が切断したのだ。

女は短くなつた木刀を捨てると俺を睨んできた。

「なんのつもりかしら、直以くん？」

「もう終わりだよ、支倉先輩。無駄に殺す必要はない」

女、支倉涼子は威圧的な視線を俺に向ける。

「そのような命令は聞いておりませんが？」

「今、俺が伝えている」

「あなたが、ですか？」

「そつだ！」

俺は、敵愾心むき出しの支倉先輩の視線を正面から受け止めた。

時間にしておそらくはたった数秒の睨み合い。支倉先輩は俺から視線を逸らして背を向けた。

「……あぢきなし、ですねえ、直以くん」

俺は、大きなため息を吐いて雨霧に消えていく支倉先輩の背を見送った。

「つたく、疲れるんだよ、マニアック（戦闘狂）が」

「すつげえ威圧感。直以、よく耐えられたな」

「あんなの荒瀬先輩ほどじゃねえよ。紅！」

「はい」

「朝倉市の敗残兵をまとめてくれ。集めたら体育館に収容。毛布を配って女子が作つてる飯を分けてやれ」

「わかりました。一箇所に集めて大丈夫ですか？ 分散させたほうが危険は少ないと思いますが」

「かまわねえよ。校長室で楽してる須藤先輩と荒瀬先輩に丸投げしてやれ」

俺たちは紅と別れ、再び停戦の呼びかけを続けた。

そして、最後まで戦闘が続いている場所に向かった。それは、最後まで抵抗しているやつがいるってことだ。

俺は雄太の運転するバイクから降り、敵を包囲する大地の隣に並んだ。

「直以、遅かったな」

「まだ片付かないのか？」

「ああ。こいつら、強いよ」

俺は、包囲されている朝倉市の兵を見た。それで、説明されるまでもなく大地がてこずっている理由がわかった。

包囲されているのは、たったの5人だった。だが、その5人は機動隊員だった。

すでに100人近い鈴宮高校の兵でこの5人を囲んでいる。だが、機動隊員は怯む様子もなく円陣を組んで俺たちに対峙していた。

「直以、どうする？ 正直正面から攻めたらどれくらい犠牲がでるか分からないぞ」

大地は、すでに力攻めを実行したのだろう、機動隊の足元で動かなくなっている鈴宮高校の兵を指差した。

「直以先輩。バイクで突っ込みますか？ 俺、行きますよ」

「……いや、いい」

俺は隆介を止めると、包囲網から一步前に出た。

「赤木さん、いるか？」

俺の呼びかけに、機動隊員のひとりが反応した。ヘルメットを外す。そこにいたのは、赤木武志巡査部長だった。

「菅田、くん。してやられたようだね。まさか車で突っ込まれるとは予想もしていなかったよ」

「赤木さん。降伏してくれ」

「それは、できない」

「すでにあなたたち以外の兵は全員投降していても？」

そう言ったのは、俺の隣に立つ雄太だった。

交渉術は俺より雄太のほうが優れている。俺は、雄太にバトンタッチした。

「これ以上の抵抗はお互いに損害を増すだけです。降伏してください」

「……」

赤木は答えない。雄太は、片頬を吊り上げて嫌らしい笑みを作った。こいつは顔が整っている分、こういった表情をするとなかなか凄惨だ。

「あなたたちの抵抗はあなたが考えている以上の意味がある。それは理解していますか？」

「……どういう意味だね？」

「すでに100人以上の捕虜がいる。あなたたちの無駄な抵抗で、彼らがどうなるか……」

「降伏したものを人質に取るのか！」

「もともとこんな殺し合い、我々の本意ではありませんでした。我々は、仲間を守るためならどんなことだってします」

赤木は齒軋りした。

なぜそこまで抵抗するのか、なにをそこまで守っているのか、俺にはわからなかったが、赤木にとっては自分の中のかを強制的に変えざるを得ない状態に葛藤しているのだろう。

そんな赤木を他所に、雄太の降伏勧告に反応したのは他の機動隊員だった。

重厚な盾を地面に投げ捨て、ヘルメットを脱ぐ。

「おまえら！？」

「赤木分隊長。ここまでです。俺たちだってこんな殺し合い、したくなかったんだ」

「こんなところまで殺し合いに来て、仲間であるはずの朝倉市の避難民にも警棒振るって。俺たちはなにを守っているんですか！？」

今まで鬱憤が溜まっていたのだらう。機動隊員たちは爆発した。

赤木は、機動隊員たちの不満を無言で受け止めていた。

「今攻めたら簡単に倒せるんじゃないすか？」

「隆介……、おまえ、本当に馬鹿だな！」

俺は、隣に立つ隆介を肘で小突いた。せつかくまとまりかけているのだ、そんなことをしてわざわざ台無しにすることはないのだ。

「菅田くん！」

赤木は、大地でもなく、雄太でもなく、俺の名を呼んだ。

「……みんなの安全は、保障してくれるね？」

俺たち鈴宮高校の仲間も傷ついている。死者も多く出ている。仲間を傷つけられて募った怒りの矛先を朝倉市の連中に向けさせるのは、効率的な対処法なのかもしれない。

一瞬、赤が俺の視線をよぎり、泣きながら俺を責める大人の顔が浮かんだ。

俺は、胸の奥底から溢れそうになる瘡かさに蓋をして、声調を整えて赤木に答えた。

「約束します。俺たちだつて誰かが死ぬのなんてごめんなんだ。大地、いいよな」

「あ、ああ。俺も約束します」

それを聞くと、赤木は盾を投げ捨てた。

雨音すら聞こえない静寂が訪れる。

それは、即座に雨音を掻き消す大歓声に変わった。

「おっしやあああ！ 勝つたぞお！」

100人の雄叫びが荒地を包みこんだ。

「ご苦労だったな、直以。なんとか終わったかな」

「……終わってねえよ」

俺は肩に手を置く大地を振り払い、校長室に向かって旗を広げた。

それを合図に校舎内から待機していたバスが出てくる。

「動けるやつらはもうひと踏ん張りだ！ 向かってくるバスに負傷者を収容するんだ！ いいか、敵味方問わず、だぞ！ 怪我人を片っ端から積み込め！」

俺の言葉に歓声は静まっっていく。

せつかくの浮かれ気分には水を挿した俺を露骨に睨むやつもいるが、この手の嫌われ役には、俺は慣れていた。

怪我人の収容は比較的スムーズに行われた。戦場に残っていたものは敵味方を問わずその作業に従事する。

まるで、祭りの後片付けだ。

今まで殺し合いをしていたのだ、多少の混乱はあったものの、それでも昼前には怪我人を全員体育館内に収容できた。

これからさっちゃんちゃんが忙しさに半べそかきながら診療にあたることになるわけだ。

俺は、須藤先輩に簡略ながら戦闘経緯と捕虜の安全を約束したことを伝え、再び校舎外に出た。

「直以、こっちは用意できてるわよ」

俺に声をかけてきたのは、伊草麻里だった。横には紅もいる。

「紅、何着用意できた？」

「12着です。すでに配り終えており、バス内で待機しています」

「麻里、そっちは？」

「準備はできているわよ。でも、絶対数は足りないけど」

「それは、わかっている。だから問題ない。よし、それじゃあ行くぞ」

俺はロータリーに停まる2台のバスを見た。朝倉市の連中が乗ってきたバスだ。

前のバスには大地たちが、後ろのバスには荒地の戦闘に参加しなかった女子が乗っている。

俺は前のバスに乗り込んだ。

「大地、大丈夫か？」

「ああ、欲を言えばカレーを食べてからがよかったけど」

俺は苦笑して大地の隣の座椅子に座った。そのとき、なぜか健司に睨まれた気がした。

バスは、ゆっくりと走り出した。

鈴宮朝倉戦争は、次の段階に移行した。

朝倉市役所制圧

朝倉市のバラックをはじめて見た大地たちは、そのあまりの酷さに息を呑んだ。

「……ここまで酷いとは思わなかった」

大きな羽虫がバスの窓ガラスにぶつかり、墜落した。

片付けられない死体、山積みのゴミ袋、気力のない避難民……。

俺が数日前に訪れたときより、状況はさらに悪くなっているようだった。

「直以先輩、そろそろっすか？」

俺は窓ガラスから視線を外し、声をかけてきた隆介を見た。

隆介は、機動隊員の格好をしていた。荒地の戦いで押収した機動隊員の装備のうち、損傷の少ない12着を持ってきているのだ。

隣の大地や健司も機動隊員の格好をしている。俺が着ていないのは、単純に身長の問題でサイズが合わなかったからだ。

「俺、今まで警察を権力の犬って馬鹿にしてたけど、マジ尊敬しますわ。こんな重い装備持って動き回ってるんだから」

そう言っつて健司は盾を重そうに持ち上げた。

俺は、隆介の肩に手を置いて立ち上がった。

「よっし、それじゃあ最終確認しておくぞ。俺たちは機動隊員に化けて市役所に突入。地下にある食料保存庫を開放して市役所を制圧する。だけど、無理に戦う必要はない。食料保存庫の開放を第1目標にしてくれ」

「戦わないで勝てるのかよ」

「そう聞いてきたのは健司だ。」

「逆に、正面から戦っても俺たちは勝てないよ。朝倉市の事務局を支持する連中はまだ多いようだしな」

「それじゃあどうやって勝つんだよ!？」

「だから、食料で朝倉市の避難民を味方にする。宮崎さん、頼みますよ」

急に話を振られて、後部座席に座っていた初老のおっさんは勢いよく立ち上がった。

大地が小声で聞いてくる。

「直以、あの人大丈夫か？ 信用できるのか？」

「この状況で鳥居強右衛門でもないだろう。それに、あの人はおまけだよ。朝倉市の避難民を味方につける本命は、後ろのバスの連中」
「伊草たち、か」

「大地、食料庫のほうは任せるよ」

「わかっている。直以はどうするんだ？」

「俺は、麻里たちと一緒に行動する」

俺は視線を前に向けた。フロントガラス越しに、朝倉市の市役所が間近に見えて来ていた。

入り口前に止まったバスから大地たち偽機動隊員は市役所に突入していく。俺も戈を持ってバスから降りた。

「直以、どこに運ぶの？」

俺たちの後をついてきていたバスから麻里たちが降りてきた。2人がかりで大型の鍋を抱えている。

鈴宮高校から作って持ってきた食料品だ。お粥、おにぎり、味噌汁、そしてカレー。2000人分の食料は、それだけでかなりの量になった。

俺は辺りを見渡した。

本来だったら入り口外のここで炊き出しをやるつもりだったのだが、生憎の雨だ。

俺は、少し考えて市役所の一階に食料を運び込ませた。

どこの市役所も、という語弊があるのだろうが、朝倉市役所は他の多くがそうであるように無駄に大きくて豪華だった。

吹き抜けの1階と2階。そこから差し込む灰色の光。

俺たちは、炊き出しの用意を始めた。

ただの箱になったパソコンを押し退け、空いた机の上にガスコンロをセットする。

統括する麻里の指揮は見事なもので、俺が口出しする必要はまったくなかった。

「直以先輩、先ほど木村先輩から食料保存庫を確保したと連絡がありました。引き続き、上階の制圧に向かうとのことですよ」

「わかった。紅、雄太は？」

「もうすぐ到着するはずですよ」

手順としては、先行した大地が朝倉市役所に奇襲をかけ、麻里が炊き出しの準備。遅れて来た雄太が炊き出しのことを避難民に伝えてここまで連れてくるということになっている。

嬉しい誤算として麻里の手際がいい。おそらくわずかなタイムラグだろうが、少しだけ手持ち無沙汰になりそうだった。

だが、それは嬉しくない誤算として外れることになった。

「おまえら、勝手になにやっつてんだ！」

汚い濁声を発したのは、上階から降りてきた3人の男だった。

太くて、でかい。おそらくは、機動隊員もどきの要員だろう。

「大地たちの討ち漏らしか？」

「いえ。どうやら本当に現状を理解していないようです。ですがどんな理由があるかと、ここで邪魔をされるわけにはいきません」

紅は、俺の前に出るとぼそりとひと言。

「排除します」

瞬間、紅は消えた。消えたと思えるほどの高速で真横にスライド、ひとり目の男の膝裏を蹴り抜き、屈んだところを鼻面に膝蹴り。

あっけに取られている2人目の男に後ろ回し蹴り。自分の身長より高い位置にある男の顎先を踵が掠めた。

……そういえば、こいつ空手習ってるって言ってたっけなあ。

慌てたのは残ったひとりだ。圧倒的有利であるはずの自分たちが鉄面皮美少女に瞬殺される。男は、たじろぎながらも俺に視線を向けた。

まあ、俺は背も低いし歳も若い。くみし易いと思ったのだろう。

紅と俺を比べるなら、その判断は正解だろう。だが、俺にはこの男の希望に応えてやる義理はなかった。

男は腰を落とし、俺にタツクルしてくる。直線的な動きだ。同じ動作なら、ゾンビのほうがパワーもスピードも強い。

俺は、わずかに横にずれ、タツクルをかわす。すれ違い様に戈を男の足首にかけて、回した。

男は空中で一回転してタツクルした勢いそのまま地面に突っ込み、背中を強打した。追い討ちで一発、倒れている男の顔面に戈の柄を打ちこんだ。

「よう、やってるな」

男たち3人を黙らせるのと同時、絶妙なタイミングで雄太が入ってくる。

「雄太、そっちの首尾は？」

「上々、っていうか、すごいことになるぞ」

雄太の言葉の意味は、即座に理解できた。すでに雄太の後ろで避難民が列を成していたのだ。

市役所の一階は戦場になった。

麻里たちの配る食料を受け取った避難民たちは、床に直座りして飯を胃袋に掻きこむ。

押し寄せる避難民を俺たちはなんとか誘導し、ひとりひとりに食

料を渡していった。

宮崎さんは、薄い髪を振り乱して事務局の悪逆性と自分たちの正当性を熱弁していたが、食うのに夢中の避難民は誰も聞いていなかった。

「すっごい数、直以。どうすんのよ。この調子だとすぐになくなっちゃうわよ」

麻里の言葉を聞きとがめた避難民のひとりが、俺に詰め寄ってきた。

「俺たちのぶんはないのかよ！ ということだよ！」

もともと俺たちの持ってきた食料は200人分だ。朝倉市には1500人の避難民がいる。食料の絶対量は足りなかった。

だが、それはあくまで俺たちが鈴宮高校から持ってきた食料だ。

ここには、他にも食料はあった。

俺は、ここにいる全員に聞こえるように大声で詰め寄ってきたおっさんに言った。

「少しは手伝え！ 今から食料取りに行くぞ」

俺はそれだけ吐き捨てるように言うと、地下の食料庫に向かった。俺の後を、無言で数人がついてきた。

朝倉市役所の地階はそれ自体が広大な食料庫となっていた。とりあえず俺たちはダンボールに詰め込んである、調理しなくても食べられる乾パンなどを1階に運んだ。

それを麻里たちに渡して片っ端から分けさせる。

再び地階に下りるときには、最初に言った倍以上の避難民が俺の後に続いた。

「米とか調理しないと食べられないのはどうするかなあ」

「それならここの食堂を使えばいい。いつも俺たちの配給食はそこで作られているし、ガスだからコンロが使えるはずだ」

そう言ったのは、最初に俺に詰め寄ったおっさんだった。結局このおっさんはまだ飯を食っていなかった。それでも、俺の後につい

て食料運びとかを手伝ってくれていた。

「よっし、それじゃあ、米を食堂まで運びましょう。それと、調理できる人を食堂に呼んでください」

俺は言葉遣いを変えて避難民の人に頼んだ。返事は、即座に来た。

「それじゃあ俺の女房に料理させるよ」

「ああ、うちの母ちゃんも連れてくる」

元々、避難民のほとんどは勤勉な社会人だ。環境の劇的変化やら栄養不足やらで足踏みしていたが、志向性を見出せば行動を開始する。

発火材として機能した俺たちは、後は見ているだけでよかった。

鈴宮高校から持ってきた食料がなくなる頃には、俺たちは見向きもされなくなった。

避難民たちは独自に動き、今までの無気力症が嘘のようになっていた。

「ふう、私たちの仕事も一件落着ねん」

「ああ。もう俺たちが仕切らなくても大丈夫だろう。後は、宮崎さんに任せればいいよ。紅、大地たちは？」

「詰め段階です。最上階の市長室まで朝倉市の事務局を追い込んだと先ほど連絡がありました」

大地たちの活躍の影にも避難民の姿があった。

市役所の1階や食料庫は比較的容易に制圧できた大地たちだったが、それ以降は事務局の連中と一進一退の攻防が続いていた。

元から数の多い事務局支持派が態勢を建て直し、組織的反攻を開始すると今度は大地たちが押される側に回った。

大地たちが崩れなかったのは、狭い室内戦で敵が容易に展開できなかったこと、防戦用の機動隊の盾、それと鈴宮高校から持ってきた数丁の拳銃のおかげだろう。

数で押される大地たちは力押しができないし、事務局の連中も下

手に攻めれば拳銃の餌食になる。

お互いに攻め手を欠く拮抗状態を打破したのが、朝倉市の避難民だった。

腹の満たされた避難民たちは拳こそつて朝倉市の事務局に敵対した。それによつて大地は数による優位性を確保できた。

あとは、力押しで最上階まで押し込んで今に至るのだった。奥の奥まで詰め込んだという感じになったが、このまま行けば事務局の連中も時を置かずに降伏するだろう。

俺にはそう思えた。

「直以先ばーい」

「なんだ馬鹿隆介。おまえは気持ち悪いから延びを使うな」

「……先輩つて、俺に対する優しさが無いっすよね」

「それで、どうした？ 事務局は降伏したか？」

「いえ、まだつす。木村先輩が呼んでますよ。上まで来いって」

「ここまで来たらあいっただけで大丈夫だろ？ 俺がでしゃばつても反感買っただけだ。後から来て何様だつてな」

「そうっすか？ ま、俺は直以派だから別には別に木村先輩の命令を聞かなくつてもぜんぜんいいんですけどね。それよりそれ、うまそうっすね」

隆介は俺の手元にあるカレーを見て涎を垂らした。

「……おまえはまだ駄目だ。事務局降伏させたら食わせてやるよ」

「ひっど！ 俺、バスン中でおにぎり食べたつきりなんすよ！？」

俺は、少し考えた。隆介がそうということは、まだ戦っている大地たちもそうだとということだ。

「ったく、俺だけ一息つくわけにはいかないか」

俺はまだ一口も食べていないカレーを隆介に押し付け、階段を上がった。隆介は卑しくもカレーを食べながら俺についてきていた。

最上階は人に溢れていた。大地たちに協力している避難民だ。人

を掻き分けて前に出ると、そこでは大地と健司が話し合っていた。

大地は俺を見つけると健司との会話を中断して俺に向いた。健司は、険のある目でなぜか俺を睨んできた。

「直以、やつと来たか」

「こつちの状況は？」

「……見ての通りだよ。市長室に10人以上が立て籠もり中」

「力押しは？」

「銃を持つてるやつがいる。盾で防いだけど、近づくと撃たれた。

危険すぎて力押しはできないよ」

「降伏勧告はしたか？」

「ああ。だけど、反応はなし」

「それじゃあ現状維持でいいだろ。腹が減ったらそのうち降伏してくる。見張り残しておまえらも少し休んでおけよ」

朝倉市事務局は鈴宮高校のような生きるため、生活するための共同体ではなく、機動隊の暴力を前提とした権力組織だった。

それは、もはやこの段階に至っては崩壊したといえる。言ってみれば、このまま夜逃げされても一向に構わない。

すでに、鈴宮高校は朝倉市との戦争に勝利したのだ。

そのことを大地に伝え、俺は今度こそカレーを食べようと階下に向かおうとした。

そのとき、市長室から数発の銃声が聞こえた。

それを合図に市長室から機動隊員が出てくる。俺たちは臨戦態勢を取った。

「鈴宮高校の代表者の方はいらつしやいますか？」

機動隊員の呼びかけに、全員が沈黙した。

「いらつしやらないのですか？」

遅れながら大地が一步前が出る。どうやら健司に背中を押されたようだった。

機動隊員は大地に敬礼した。

「我々、朝倉市の事務局は降伏勧告を受諾します。受け入れてもら

えますでしょうか」

「あ、ああ。わかりました。受け入れます」

「さっきの銃声は？」

俺が聞くと、機動隊員は淀みなく答えた。

「倉木澄子事務局長と秘書の方が銃で自害なさいました。きっと事態の責任を感じたのでしよう」

俺は、大地と話しを続ける機動隊員の横をすり抜け、市長室に入った。そこには3人の銃殺体があった。

「……額を撃ち抜いて自殺するやつがいるかよ」

俺は、おばさん議員の死体を見た。目を剥いて仰向けに倒れている。その額には、赤黒い穴が開いていた。他の銃殺体も似たようなものだった。

俺たちの最初の戦争は、こうして一応の終息を見せたのだった。

軍事的衝突こそ終わったものの、朝倉市は問題は山積みだった。避難民を分散させなければいけないし食糧問題もある。

それらの解決のためには、まず場所の確保、それにはゾンビの掃討が不可欠だった。

俺は朝倉市に残り、宮崎さんを手伝うことになった。

季節は本格的な梅雨入りを迎えている。

大事、小事、さまざまなこと追われながら俺は6月を忙殺して過ごした。

そして、そのことを聞いたのはそんな時期だった。

それは、訃報だった。

赤木武志巡查部長が自殺したのだ。

朝倉市役所制庄（後書き）

いつも以上にグダグダで強引な展開……。

おばさん議員には今回で退場してもらいました。実は秘書のボディガードが息子だったりと色々な設定を考えていたんですが、ここでこれ以上こじらせても蛇足になると思ったので。

もし今後似たようなキャラが出てきたら、どうか鼻で笑い飛ばしてくださいませ。

もつと、ちゃんと口説いてよ

朝倉市役所の制圧後、俺は鈴宮高校に戻らずに朝倉市の建て直しを手伝っていた。

最初、鈴宮高校から来た俺たちは、治安維持という名目で朝倉市に残っていた。

やることは山積みだった。ごみや死体の処理、安定した供給のための食料調達と生産体制の確立。安全確保のための市役所周辺のゾンビ掃討。それに、避難民分散のための土地確保。

幸いにも朝倉市の避難民は今までの無気力症が嘘のように活気に溢れていた。俺たちが指向性を示すだけで、避難民の人たちは率先して動いてくれた。

やがて、鈴宮高校に攻め入って捕虜になっていた連中も解放されて戻ってきた。

それに伴って鈴宮高校の兵は帰還を開始する。

大地を先頭に、雄太や紅も鈴宮高校に帰った。

俺も、じきに帰れるはずだった。電気云々は別にしても鈴宮高校は慣れ親しんだ場所だ。

それに、農作業もしたい。戦場になった荒地は踏み荒らされ、その多くをまた一から耕さなければならぬ。他人の評価はともかく、俺自身は怒鳴り散らして周りに命令しているより土弄りが合っているのだ。

だが、この他人の評価というものが厄介な代物だったのだ。

鈴宮高校に帰る兵を乗せる最後のバスが出発しようとしている。実に1週間も滞在した朝倉市役所から去るために、俺はバスに乗り込もうとした。

だが、俺を止める影があった。

「菅田、直以さんですね」

俺を呼び止めた男は、ずいぶんと姿勢がよかった。私服を着ているが、肩幅や筋肉の付き方からずいぶんと鍛えているのがわかった。

俺は、乗りかけたバスから一度降りて、男に向き直った。

「ええ、そうです。あなたは？」

男は、俺に敬礼をして自分の姓名を名乗った。

「自分は松村力^{まつむらちから}巡查です。機動隊で赤木巡查部長の部下でした」

俺は、少し引いた。年下の俺にここまで丁寧^{ていねい}に返事をするとは思わなかった。その理由を、俺はすぐに知ることになる。

「あ、ああそうなんだ。そういえば赤木さんは？」

松村は、懐から取り出した封筒を俺に渡した。

「これは？」

「赤木巡查部長の遺書です」

俺は、言葉を失った。

「菅田さんに渡すように言付かっております。どうか拝見してください」

「……赤木さんはなんで死んだんだ？ 降伏してくれたときは怪我をしているようにも見えなかったけど」

「赤木巡查部長は自害されました」

特に親しかつたわけでもないから本当のところはわからないが、赤木はそんなことをする人にはみえなかった。それに、その赤木がなんで俺に遺書を残したのか？ 考えても結論は出そうになかった。ので、とりあえず俺は遺書を受け取った。

遺書の前半は、赤木の生い立ちが書かれていた。中学からの試合の成績。なぜ自分が警察になったのか、なにを考えて生きてきたのか。

言っでは悪いが、俺には関係のないことだった。ああ、そうなのか、くらいの感想しかない。

だが、後半は違った。俺に関わることが書いてあったのだ。要約するのなら、こうだ。

自分は今まで常に正しい行いをするように心がけてきた。自分にとつての正義とは警察であり、朝倉市の事務局だった。

それは2つとも崩壊してしまった。もはや正義の存在しない世界に留まることはできない。だから自分は自害する。

だが、自分には部下がいる。部下にまで自分の信念を押し付けて自殺を強要することはできない。

今後、部下たちは自分の命令に従ったことで、事務局を支持していたという理由で朝倉市では迫害されるだろう。だから、部下たちの去就は信頼できる人物（それがなぜか俺）に任せたい。

ずいぶんと勝手な言い草だった。最初は白け、最後には怒りを感じた俺は、遺書を両手で挟んでくしゃくしゃにした。

「ふざけてるな。この遺書の内容は知ってるのか？」

「いえ。ですが今後は菅田さんに従うように指示されています」

「ざけんな！」

俺は、松村の胸倉を掴んだ。

「てめえの好きで死んで後は任せたってか？ ただの現実逃避じゃねえか！ なんで俺がそんなやつ頼みを聞かなくちゃなんねえんだよ！」

松村は、微動だにせず俺の言葉を聞いていた。俺は、少しだけ冷静になれた。

「……悪い。あんたが悪いわけじゃないもんな」

「いえ。赤木さんの自殺は自分も憤っていますから」

「それで、あんたは本当に俺みたいな青二才に従う気なの？」

「生き残った機動隊員で話し合いました。私を含めて3人があなたに従います。残りは、それぞれの意思で動くそうです。事実上、この県の機動隊は解散しました」

「だけど……、赤木って人は俺をそう高く評価してなかったはずだよ」

初めて会ったとき、他の多くの人がそうであるように俺にはなく大地に話しかけていたのだ。大地に頼むのならともかく、俺に頼むということそれ自体が不可解だった。

「直以、そろそろ出発するわよん」

バスの窓から身を乗り出してそう言ったのは、俺たちと共に最後まで残っていた麻里だ。

「ああ、わかった。今行く」

俺は、バスに片足をかけた。

「松村さん。悪いけど、俺はあんたたちを受け入れる気はないよ。これからのことは自分で判断しなよ」

「……わかりました」

俺はバスに両足を乗せた。そこで立ち止まる。

「直以先輩、遅えっすよ。なにやってたんすか？」

俺は目を閉じた。

浮かぶ紅蓮。

あのときと、同じだった。

俺は、隆介に言った。

「隆介、先に行つてくれ。俺にはやり残しがあるみたいだ」

俺は、そのままバスから飛び降りた。隆介が慌ててバスから降りてくる。それと同時にバスの扉が閉まった。

「なんでおまえまで降りてくるんだよ」

「先輩こそ、せっかく帰れると思つたのになにやつてんすか!？」

と、そのとき、もうひとつお荷物が窓から落ちた。麻理だ。

麻理は綺麗に着地すると俺に詰め寄ってきた。

「な、直以。あんたねえ! どういうつもりよ!」

俺は、バスの運転手に合図を送った。バスは緩やかに走り出す。

「松村……」

俺は、年上の機動隊員だった男を呼び捨てにした。

「俺は、あんたたちなんて背負えないし、その気もない。だから、自分の面倒は自分で見てくれ」

松村は、姿勢を正して俺に応えた。

「はい、わかりました!」

「俺の行動が間違つていゝって思つたら躊躇わずに見捨ててくれたい。俺に従うのも従わないのも、自分で判断してくれ」

「わかりました。菅田さん、これからよろしく願ひします」

松村は、清々しい敬礼を俺に返した。

俺は、出掛かつたため息を飲み込んだ。

長く降り続いた雨がようやく止んだ。

おそらくは梅雨空におけるエアポケットのような時間帯。重く低い空を俺は見上げていた。

「直以、なにやってんの？」

軽い足取りで近寄ってきたのは伊草麻里だ。

俺は、濡れたベンチに腰を下ろした。

「いや、さすがに疲れたなって思って」

「そうね。ここ最近はずっとゾンビ退治してるもんね」

俺たちは、避難場所の確保のために連日街に繰り出して、ゾンビ掃討に精を出していた。

松村はやはり現役の機動隊員だっただけあり、抜群の活躍をしていた。

それに対抗するように隆介も頑張っていた。まあ、隆介の場合は猪突しすぎてかえって危なっかしい場面も多々あったが。

「それにしても、なんで避難民を分散させないといけないのよ。食料の確保ってんならわかるけど、それだけじゃないんでしょ？」

麻理は俺の隣に座ると、当然の疑問を聞いてきた。俺も、聖に何度も聞いたことだった。

「単純に避難場所には鈴宮高校と同じように非常食が備蓄されているってのは私でもわかるけど」

「分散すれば食料確保の手間も省けるだろ？」

「1000かける1も200かける5も一緒じゃないの？」

「1000人分の食料を作る畑は広大でも200人分の食料を作る畑は小さくてすむだろ？」

「うーん、なんか誤魔化されている気がするのよねえ」

麻理が納得できない理由はわかる。それは、防衛上の理由からだ。兵力は集中しておくもの、分散は各個撃破の対象になるからだ。そう思っているのだろう。

「聖が言うには理想的な環境都市っていうのは池の中なんだってさ。」

外部エネルギーは太陽光のみで閉じた世界で完全に成立しているやつ」

「池って、鯉とかが泳いでる庭の池のことなの？」

「貯蔵された食料なんていつかはなくなる。なくなったときのために自給自足の体制を整える必要がある。鈴宮高校はそのコンセプトで動いてんだけど。そのためには一極集中型ではなくて地方分散型にしなくちゃいけないんだよ」

「あんだ、わかって言ってるの？」

「……いや、実はよくわかってない」

俺と麻理は腕を組んで唸った。

「まあ、単純に防衛上の理由もあるんだと思うけど。鈴宮高校の200人に対し、近くに1000人規模の勢力があったら今回みたいに脅威になるかもしれない。だからわざと散らした」

「あ、それならわかるわ」

俺と麻理は、今度は同時に頷いた。

そして、顔を見合わせて笑った。

麻理は、笑顔のまま俺に言った。

「そろそろ、教えてよ」

「なにがだ？」

「バスから降りてここに残ったわけ」

麻理は、微笑を浮かべている。俺が、どう出ても対応できるように、だ。

「別に、大した理由があつてつてわけじゃあないんだけど……」

「私には……、話せないこと？」

麻理はじつと俺の目を見てる。

俺は、少し考えて背もたれに寄りかかった。

今からする話は、梨子には話せないだろうし、聖には自分からは話さなかったことだ。

「ただ、俺は今から麻理には自分から話してみることにした。なぜそうしようと思ったのかはわからない。まあ、率直に心情を表すなら、俺は麻理に甘えたのだろう。」

「昔語りの愚痴になるけど、聞いてくれるか？」

「麻理もベンチの背もたれに寄りかかって聞く体制を作ってくれた。背中が濡れるのもかまわずに、だ。」

「俺が、小学4年のときに、32人を殺した話だ」

「あれは、俺が小学4年のときのこと、クラスの連中も半分以上が2桁の年齢になった秋の頃だ。」

「校舎が火事になった。」

「理由は用務員がゴミ袋にまとめておいた焚き火の燃えカスが最燃焼したとも、去年卒業した不良中学生が小学校に忍び込んで吸っていた煙草の燃え殻とも言われているが、本当のところはわからなかった。」

「最初、火事の第1報が入ったときは誰も慌てなかった。」

「先生は下級生の避難誘導を手伝ってきます。落ち着いて、大人しく待っているように」

「教壇に立っていた担任の女教師はそう言って教室を出て行った。」

「避難は、最初に最下級の1年生とその引率の6年生。次は2年と5年。3年が続いて俺たち4年は最後だった。」

「避難に時間でもかかっているのだろう、俺たちはそう思って大人しく待っていた。」

「だが、廊下に煙が溢れてくるに至って、俺たちは待っていられな」

くなくなった。

当時俺は代表委員なるものをやらされていた。大地が他の委員をすでにやっていたために、大地の腰巾着だった俺が代わりに勤めていたのだ。

教師を待たずに避難する。決断してからの俺たちの行動は早かった。

体育館に向かうときのようになり男子と女子で2列縦隊を作って走らずに階下に向かっていく。大地が最後尾、俺が先頭だ。

煙は段々に酷くなっていったが、俺たちは大きな混乱もなく、無事に外に脱出できた。

ちなみに、女教師は隣のクラスの男教師と並んで外で先に避難して俺たちを待っていた。

「あなたたちならちゃんと逃げてこられると先生わかっていました」確か、そのときはそんなことを言っていたと思う。

だが、その女教師の顔色はすぐに青白く変わった。人数が、足りないのだ。

俺のミスだった。人数を確認せずに避難を開始してしまったのだ。俺は慌てて校舎内に走って戻った。静止の声は、パニック状態になっていた俺には届かなかった。

足りなかった同じクラスのやつは、教室の隅で震えていた。ぼっちゃり系の女子だ。

俺はその女子を無理やり立たせて、教室の外に連れ出した。

と、そのとき、あることに気づいた。隣の教室には生徒が丸々残っていたのだ。

「なにのんびりしてるんだよ。火はすぐそこまできてるんだよ！」

「ぼくたちは先生にまっついているように言われてるんだ。勝手に避難したら怒られちゃうよ」

そいつらは現状をまるで認識してないらしく、穏やかに談笑などをしている。

すでに廊下には煙が充満し、先も見えない状態だ。
ここで下手に避難するより、消防隊の人に助けてもらおうほうが安全かもしれない。

俺はそう思った。いや、そう思い込もうとした。

俺は、そいつらを見捨てた。

同じクラスのぼっちゃり女子の手を引き、俺は階下に向かった。
焼ける空気とむせる煙の中、なんとか出口付近まで着いたところで消防隊員に助けられた。

煙る視界と紅蓮の炎の中。俺は気を失い救急車に運ばれた。
だが、隣のクラスのやつはひとりも助からなかった。

「その隣のクラスのやつが総勢32名つてわけだ」

「あんだ、そんなことを気にしてんの？」

「そんなことつてなんだよ。事実死んだ子供の親には集団で責められたしな。あんだが殺したつてさ」

「やつ当たりね。それもたかだか10歳の子供にそんなこと言うなんて」

「だけど、事実俺が殺したようなもんだよ。俺があいつらに状況を説明していたら、助けられたかもしれないんだ」

俺は、付け加えた。今回の松村が教師の指示を盲目に信じて焼け死んだ隣のクラスの連中とかぶった、と。

麻理は、少しだけ間を置いて、ベンチから立ち上がった。

「……ねえ、直以。なんで直以が説明しなかったか、教えてあげようか？」

「自己保全のためだよ。説明している時間で俺の逃げる時間までなくなるかもしれないからな」

「うん。そうだね。でも、それは直以の自己保全じゃない。直以、覚えていない？ あのと看、直以は腕を、女の子に引張られたんだよ」

「……なに言っただ？」

「まだわからないかなあ。そのとき助けてもらった女の子は、私なの！」

「……はあ？」

麻理の言っている意味がわからない。

「え、だって、ええ！？」

「まだわかんないの？ あんたと私は、小学校が一緒なの。クラスも一緒。半年以上一緒のクラスにいたのに、なんで名前とか覚えてないの？」

「だって、あの子はぽっちゃり……」

「痩せたのよ！ あの後すぐ転校してアメリカ行っちゃったけど、そこでミリシアとかに通ったりでけっこうアウトドア派やったしね。でも……、私はあのと看のことを今でもはっきり覚えてる。あなたに、感謝している」

麻理は、困惑する俺に微笑みかけた。

「私は高校であなたを見たとき、すぐにわかったよ。でも、あなたは私のことなんて見向きもしなかった。私には、それが許せなかったの。だって、私だけあのと看のことを覚えていたなんて馬鹿みたいじゃない」

「あーっと、えーっと……」

頭がついていかない。情報処理が、追いつかない。麻理は、俺の言葉を待ってくれていた。

「とりあえず……、ありがとうな。少しだけ気分が軽くなったよ」

「ええ。直以が罪の意識を感じる必要なんてない。もしそれを感じるんだったら、自分のために直以の袖を引張った当時の太った私よ」

「いや、でもやっぱりあれは俺のせいだったんだよ」

「あんたも、相当頑固ねえ。じゃあどうすればいいのよ」

「結局、覚悟決めて責任背負ってくしかないとことなんだろうな」
あのととき、うまく説明できて隣のクラスの連中を連れ出せたとしても、無事に脱出できたかどうかはわからない。俺がそうなりかけたように、結局は煙にまかれて焼け死ぬことだって有り得たのだ。

「……ねえ、直以。私はどうすればいい？ どうすればあなたを慰められるの？」

麻理は腰を屈めて座っている俺と同じ目線になった。

俺は、油の切れた頭をフル回転させて答えた。

「……セックスがしたい」

「……はあ！？」

俺は片頬を吊り上げた。うん、ばっちりお返しができた。成功だ。麻理は、しばらく固まっていたが、腰を起こして前髪を掻き揚げた。

「……それ、やめておくわ」

まあ、そうだろう。俺と麻理は、そんな仲じゃない。過去のこと
がわかったのなら、なおさらだ。

だが、麻理は続けてこう言った。

「もつと、ちゃんと口説いてよ。そうしたら抱かれてあげるから」
今度は、俺が固まる番だった。

麻理はそんな俺の顔を見て満足そうに頷くと、軽い足取りで去っていった。

「……マジで？ ひよつとして脈ありだった？」

誰も見ていないのをいいことに、俺は妄想にふけることにした。

麻理と愛し合っているところを想像する。

なぜか、すぐに梨子のジト目が浮かんできたので、妄想はやめる
ことにした。

もっと、ちゃんと口説いてよ（後書き）

今回は話の展開を早めるためにダイジエスト多用でお送りしました。
ぶっちゃん、書いていて楽しくなかったです。
だけど、チマチマ書いていたらまた進みが遅くなるし・・・。
悩みどころです。

おかえりなさい

エクストラストーリー3 (前書き)

梨子視点です。

最近、聖お姉ちゃんの機嫌が悪い。

えっと、ちよつといきなりすぎるかな。

まず最初に言わなくちゃいけないことがある。

それは、聖お姉ちゃんに限らず、鈴宮高校で生活する全員の機嫌が悪い、ということだ。

6月の梅雨どき、重く低い空からは、雨が一時も止まらずに降り続けている。

鈴宮高校にとって、雨が降るということは切実な問題だった。

鈴宮高校では、電気をソーラーパネルで賄っているからだ。

雨が降るということは、十分な電力供給を得られない、ということだった。

必然的に、鈴宮高校で生活する人たちは電気節約の我慢を強要されることになった。

必要なこととわかっていても不満というのは募るものだ。

湿気の不快感も合わさって、数日以内に雨が止まなければ暴動でも起こるかもしれない。

そんなことを考えるほどみんなの機嫌は悪くなっていた。

それらを全部含めたうえで、ううん、全部を除外したうえで同じことを言おう。

聖お姉ちゃんの機嫌が悪い。

理由はわかっている。なぜなら私も同じ思いで同じことを考えているのだから。

「ここ最近、私と聖お姉ちゃんの機嫌が悪い。

理由は、直にお兄ちゃんが帰ってこないからだ。

直にお兄ちゃんが朝倉市に行つてからひと月近く経つ。最初は長くても1週間ほどで帰ってくるはずだった。

事実、雄太お兄ちゃんはそれくらいで帰ってきた。

だが、直にお兄ちゃんは帰ってこなかった。

直にお兄ちゃんと伊草麻里先輩、あと、同じクラスだった林田隆介くんの3人は朝倉市に残り、いつまで経つても帰ってこなかった。「どうせ面倒事を押し付けられて走り回っているのだろう。直以らしいといえばその通りだが」

初めのうちはそんなことを言っていた聖お姉ちゃんは、時が経つに連れて段々と長いままの煙草を握り潰すことが多くなった。

「いったいいつになったら直以は戻ってくるんだね？ まさか、もう戻ってこないつもりなのか？」

そう言つて聖お姉ちゃんは雄太お兄ちゃんの肩を揺さぶる。聖お姉ちゃんがやらなければ私がやっていたところだし、白状するなら何度となくやつてしまっている。

すると、雄太お兄ちゃんは決まつて苦笑を浮かべるのだ。

「7月の選挙までには戻つてくるように須藤先輩のほうから伝えてもらつてるよ。それまでに戻ってこなかったら俺たちの方から会い

に行こう」

雄太お兄ちゃんはわかっていない。いや、ひよっとしたらわかって言ってるのかもしれない。

聖お姉ちゃんも私も、選挙などはどうでもいいのだ。

私たちは、今、直にお兄ちゃんに会いたいのだ。

「まったく、直も直以だ！ 私たちを放っておいて！ しかも！ よりにもよって伊草麻里と一緒にだ！？ 一体どういっつもりだ！」

そう言われると凄く不安になる。

伊草麻里先輩は、明るくて社交的で、男女共に人気のある人だ。

私も気軽に話しかけてもらって助けられたことが何度もある。見た目も垢抜けていて、同性の私が見てもすごくモテそうだと思う。

そんな人が直にお兄ちゃんと一緒にいる。

麻理先輩は直にお兄ちゃんのことを嫌いで仲もよくないって話がよく聞く。

だけど、私が見る限りではそんなに仲が悪そうに見えなかったし、もしそうだったとしても、一緒にいるのなら、直にお兄ちゃんの優しさは伝わるだろう。

私は聖お姉ちゃんを見た。聖お姉ちゃんは、無言で頷いた。

女2人の意思疎通はそれだけで十分だった。

ちなみに、頭の隅で金髪の同級生がなにやら騒いでいたが、ご退場頂いた。

「それで、どうやって朝倉市まで行くの？」

「ふ……む。実はそれが実は一番の問題なんだ。さすがに歩いて行くわけにもいかないが、私たちは車の運転ができない」

「雄太お兄ちゃんに頼んでみたら？」

「いや、駄目だ。あいつのことだ。この話をしたら反対するばかりか妨害までしてくるだろう」

「だけど、雄太お兄ちゃんひとりを残して行っちゃうのは、さすがにひどいんじゃないかなあ？」

「なに、置手紙でも残していけば問題ない。翌日には私たちを追って朝倉市に来ているよ」

私と聖お姉ちゃんの『鈴宮高校だっしゅつ！ 直以お兄ちゃんに会いに行こう』作戦は秘密裏に計画されていた。

計画、考察、修正、再計画。

それらを何度も何度も繰り返し返して、これなら大丈夫だって作戦ができたのは、6月の下旬のことだった。

私は、自分と聖お姉ちゃんの荷物を簡単にまとめて、雨が止むのを待った。

雨上がりを待つて出発。そのはずが雨がやまずに、ここ数日、私たちは足止めを喰らってしまった。

「……嫌な雨」

私は薄暗い図書室の窓から振り続ける雨を見て、軽いため息を吐いた。

考えてみれば直以お兄ちゃんに会っていないのは梅雨に入っただらだ。会えないのは、雨のせいだ。この雨が降り続けている限り、私は直以お兄ちゃんには会えない。

そして、雨はいつまでも止む様子を見せない……。

私は、鬱に入りそうになる感情を頭を振って追い出した。

と、そのとき、図書室のドアが開いた。

入ってきたのは、当然直以お兄ちゃんではない。

雄太お兄ちゃんでも、聖お姉ちゃんでもなかった。

数人の男の人だった。その中の、一番背の高い人は、私でも知っている人だった。

木村大地先輩。直以お兄ちゃんの幼馴染だ。

古い付き合いだからだろう。直以お兄ちゃんは木村先輩のことを信頼しているようだった。

だけど、雄太お兄ちゃんと聖お姉ちゃんは直以お兄ちゃんとは逆の感情を持っているようだった。

率直に言うのなら、嫌っているのだ。

私について言うのなら、聖お姉ちゃんと同じような感想を持っている。

嫌うというほどじゃない。嫌えるほどこの人のことを私は知らない。

だけど、どうもこの人のことを私は信用できないのだ。

もし私が木村先輩を表現するのなら、それは、『単色』だ。

木村先輩は、常に正しいことを言い、正しい行いをする。

木村先輩は、その明快なわかりやすさが他人からの支持を集め、信頼されているのだろう。

でも、人間というのはそんな単純なものじゃない。いろんなものが混ざり合って、練りこまれてできているはずだ。どこから見ても同じ色なんてことは、あり得ないんだと私は思っている。

「ただ、木村先輩はどこから見ても単色だ。そのあり得ないことに私はこの人から欺瞞を感じてしまうのだ。」

木村先輩たちは無遠慮に図書室に入ってきた。音を立ててイスを引き、机の上に飛び乗る。

粗野な所作。私は、部屋を土足で荒らされた気分になった。

「遠野梨子ちゃんだね。いつも直以の傍にいるからよく顔は合わせているけど、話すのは初めてだよね」

木村先輩は、丁寧な口調に優しい声量で、でも、一緒に来た人たちがいちがやりたい放題に図書室を荒らしているのを注意せずに、私に笑顔を向けた。

「……雄太お兄ちゃんも聖お姉ちゃんも留守ですよ」

「いや、今日は梨子ちゃんと話そうと思って」

木村先輩は、そう言うといすに座った。座って話そうということだろうか？

でも、私は黙って立ったままでいた。すると、いきなり怒声が飛んできた。

「おい！ 大地がわざわざ話そうって言うてるんだぞ！ なんでもにも答えないんだ！」

私は、気圧されそうになるのを必死で耐えて、言い返した。

「……私から望んだことじゃありません」

私を怒鳴った人は、顔色を変えて私に掴みかかろうとしてきた。

それを、木村先輩は止めた。

「怖がってるじゃないか。女の子を脅してどうするんだよ」

木村先輩は再び私に笑顔を向けた。

「なにか、警戒されてるみたいだね。今日はそういう壁を壊そうと思っただけだよ。よかつたら少し話そうよ」

そう言うって、木村先輩は自分の前にあるイスを音を立てずに引いた。これに座れということなんだろう。

私は、無言でイスに座った。

「直以のやつはいつ頃帰ってくるの？」

「知りません。私が聞きたいです」

そっけなくそう答えると、やっぱり周りの人たちはいきり立って私を怒鳴ってきた。そして、やっぱり木村先輩に窘められる。

これって、ひょっとしてなにかのコントだろうか？ そう考えられる程度には私はこの人たちに慣れてきた。

それからしばらくの間、木村先輩と私は色々と話した。もっとも、木村先輩が一方的に話して私が、はい、いいえ、わからないの受け答えをするだけだったが。

「もうすぐ選挙をやるね。梨子ちゃんはこれからどうなると思う？」

「わかりません。あんまり興味もないです」

「でも、今度の選挙は梨子ちゃんも票を集めることになると思うよ。朝倉市と戦争する前に放送したでしょ。あれがけっこう人気あったみたいでさ」

「あれは直以お兄ちゃんに言われてやっただけです。だから、私の票は直以お兄ちゃんのものです」

「それならいいんだけどね」

「……どういう意味ですか？」

「直以は、俺の味方だっていうこと」

木村先輩は、初めて私が喰い付いた話題に満足そうな笑みを浮かべた。

「私は直以お兄ちゃんのが好きだし支持もしていますけど、直以お兄ちゃんが木村先輩を支持するかはわかりませんよ」

「いや、あいつは俺の味方だよ」

「なんでわかるんですか？」

「あいつとは古い付き合いだからね。あいつのことは、何でも知っている」

勝ち誇ったような笑み。

私は、悔しいが木村大地先輩に興味を引かれた。

この人は、私の知らない直以お兄ちゃんを知っているのだ。
私は直以お兄ちゃんの昔のことを聞こうとした。

そのとき、ちょうど聖お姉ちゃんと雄太お兄ちゃんが図書室に帰ってきた。

むう、いいタイミングで。どうせなら、もっと早く帰ってきてくれればいいのに。

「おやおや、相変わらずの大人数で表敬訪問とはね。だが無駄足だな。きみも知つてのとおり、直以は遊び歩いてここには戻って来ないんだ」

聖お姉ちゃんと雄太お兄ちゃんは私をかばうように木村先輩の前に立った。

「……今日は直以に用があつて来たんじゃないよ。梨子ちゃんに用があつたんだ」

「なるほど、それで私たちが留守の間に図書室に押しかけたんだな」

「おまえに用があつても梨子には用はない。俺たちの梨子に無駄にモーションかけるのはやめろ」

いきり立つ周りの人。だけど2人はまるつきり動じない。

木村先輩は、埒が明かないと見たのか、イスから立ち上がった。

「青井、牧原。俺がおまえたちに好かれていないことは知っているよ。でも、俺はおまえたちとも仲良くしたいんだ」

「残念だが、私たちにその気はないし必要も感じないな」

「……これからも鈴宮高校での共同生活は続く。これからは、今まで以上に団結が重要になってくるはずだ」

「やれやれ、ここまで私に言わせるとはな。私たちは、それを承知した上できみがいらないと云っているのだよ」

さすが聖お姉ちゃんだ。取り付く島もない。私と接しているときは常に笑顔だった木村先輩が、今では歯噛みしている。

私は、おろおろしてしまった。梅雨のせいでみんな気が立っている。

そんな中でのこの空気。

私が原因で暴動なんてことになったら目も当てられない。

そんな私を助けてくれたのは、やっぱり私の好きな人だった。

「りこお〜〜！」

今までの誰よりも粗野に図書室のドアは開かれた。

入ってきたのは、待ち望んだ人。直以お兄ちゃんだった。

直以お兄ちゃんは私を見止めると、安心したように息を吐き、私に笑顔を向けてくれた。

私は、今の状況も忘れて直以お兄ちゃんに駆け寄ろうとした。だけど、私と同じように聖お姉ちゃんも駆け出そうとしていた。思わず私たちは足踏みしてしまった。

その間に雄太お兄ちゃんが直以お兄ちゃんにタオルを渡していた。しまった、一番乗りを取られた！

直以お兄ちゃんは雨に濡れた髪をタオルで拭くと、雄太お兄ちゃんにタオルをぶつけた。

「おい、雄太！ 嘘流したのおまえだろ！」

「そうでもしなくちゃおまえ、帰ってこなかっただろ？ こっちはこっちで大変だったんだよ。おまえの帰りがもう少し遅かったらこっちから会いに行くとこだったんだぞ」

あれ？ ひよつとして、私と聖お姉ちゃんが密かに立てていた計画って、ばれてた？

「あゝ疲れた。食料輸送に来た連中からこの話聞かされて、隆介にバイク走らせて即行で戻ってきたんだぜ」

直以お兄ちゃんは今まで私が座っていたイスに座った。そこで、初めて直以お兄ちゃんは木村先輩に目を向けた。

「あれ、大地。図書室にいるなんて珍しいな。大してもてなさないけどゆっくりしていけよ」

「……用は済んだから、今日のところは帰るよ」

そう言つて大地先輩と周りのひとたちはすぐごと図書室から出て行つた。雄太お兄ちゃんと聖お姉ちゃんは、気づかれないようにハイタッチをしていた。

「なんだあいつ？　なんかあつたのか？」

「いや、それより直以。朝倉市の様子はどうだ？」

「ああ。順調だな。避難民の分散も済んだし、食料生産計画もぼちぼちできている。それでさ、ゾンビから開放した場所に下水処理場があるんだけど、そこでバイオガスの精製を試みようつて計画があつてさ」

「ふ……む。なかなか興味深い。下水処理はいずれ対処しなければならぬ問題だったし、バイオガスは新たなエネルギー供給源になり得る」

「ねえ雄太お兄ちゃん。バイオガスってなに？」

「え〜つと、わかりやすく言うと、おなら」

「お、おなら？」

「下水処理をするとき、メタンとか二酸化炭素とかのガスが発生するんだ。それを集めて利用するのがバイオガス」

「へえ〜、ガスが使えると便利だね。温かいシャワーとかも使えるし、雨が降つてもちゃんとお料理できるし」

「おい梨子！　ちよつとこつち来い」

突然名前を呼ばれて、私は思わず背筋を伸ばしてしまった。そのまま気をつけの姿勢で直以お兄ちゃんの前に出る。

直以お兄ちゃんは、上から下まで私を凝視した。

「……大丈夫そうだな。おまえが急に倒れたつて聞いて、飛んで帰つてきたんだぞ」

「……私のために帰ってきてくれたの？」

「まあ、おまえのためってことでもないけど」

直以お兄ちゃんは照れ臭そうに私から視線を逸らした。

私は、直以お兄ちゃんが帰ってきたら、色んなことを話そうと密かに計画していた。

だが、実際に戻ってきたら、計画は全て台無しになった。なにか、どうでもよくなってしまったのだ。

だから私は、息を飲み込んで気合を入れ、直以お兄ちゃんに必要なことだけを言った。

「直以お兄ちゃん！」

「お、おう。なんだ？」

「おかえりなさい」

直以お兄ちゃんは、ちょっとだけ呆気にとられた顔をして、苦笑しながら私に答えてくれた。

「ああ。ただいま。梨子」

結局雨は止まなかったけど、直以お兄ちゃんは戻ってきてくれた。私には、今の私にはそれだけで十分だった。

夏の始まり

梅雨が終わると世界が変わった。

畑に撒いていた種が芽を出し、殺風景な荒地を青々と彩っている。植物の成長は畑だけに限った話ではない。都市部の道路でも端々に草が生い茂ってきているのだ。

人の手が加えられない都市が早々と自然に飲まれていく。まるで、文明の崩壊を目の当たりにしているような光景だった。

梅雨明けを待つ朝倉市との本格的な交流も始まった。

情報の交換、不足物資の交換、技術提供。生き別れていた家族の再会なんて感動的なこともあったりしている。

鈴宮高校では、ちよつとしたお祭り騒ぎが起こっていた。

選挙が近いのだ。

今まで音頭を取っていた須藤政権の続投かどうかが焦点で、まるで議論好きで古代ギリシア人のようにそこかしこで話し合いが行われている。

実は、須藤先輩に対する批判は小さからぬものがあった。

梨子が言うには梅雨の間は相当不穏な空気が流れていたそうだ。

雨で電気が使えない、命がけて戦って勝ったのに生活は楽にならなかった。その他云々。

朝倉市に対して賠償を求めなかったことも批判の対象になった。

当の須藤先輩はどこ吹く風、自分の批判を飄々と受け流している

ように見えるが、荒瀬先輩曰く、ストレスを溜めているとのこと。さっちゃんをいじめる機会が多くなっているらしいのだ。

選挙日は、7月の10日と決められた。今回の任期は1年、朝食の後に全員参加で投票する……。

現在、鈴宮高校で生活する人は、200人足らずだ。

200人という数は、お互いが顔見知りになれる、言い換えれば直接民主制が成立する数だった。

全ての人間が選挙民であり立候補者である状態は、多くの人間に無関心を許さなかった。

受動的とはいえ、俺たちは戦争を経験した。自分たちのリーダーを決めるということは、自分たちの生命と直結する問題である、その事実が全員が気づいていたのだ。

俺たちの最初の夏は、こんな感じで始まった。

「う暑っちい……」

俺は額から吹き出る汗を拭いながら雲ひとつない青空を眺めた。

人間というのは現金なもので、6月は太陽が恋しかったが、7月では雨を求めている。

俺も夏野菜の育成状況を確認しながら、お天道さまに対する悪態を吐き続けていた。

「直以、そろそろ休め」

荒瀬先輩にそう言われて、俺は畑横にある簡易休息所に向かった。ジャージの前を開け、クーラーボックスに直で入れてある氷入りの水をコップで汲んで、頭からかぶった。

「これ、長時間の労働は無理ですって。熱中症で倒れますよ」

「冷夏よりはマシだ。我慢しろ」

そう言いつつも荒瀬先輩は長袖をめくり、頭に巻いたタオルを取った。頭からは湯気が立っている。俺もおそらく同じだろう。

俺は2杯目の水を、今度は一気に飲み込んだ。

俺たちが長袖を着ているのは外で労働する人間の義務だった。聖曰く、蚊を媒介してゾンビに感染する可能性があるとのこと。

そうなのかもしれないが、現場を知らない人間の意見だろう。この炎天下の中、こんな格好で働けるかってんだ。

俺は、畑を見た。一台の農耕機がゆっくりと畑を行き来している。朝倉市から来た農家の人だ。

俺たち鈴宮高校の主体は、高校生だった。それは、専門家がいな
いことを意味する。

朝倉市には専門家が、つまり大人がいた。
農家のおじさんは、技術提供の一環でここで仕事をしてくれているのだ。

他にも川縁での水田作りや、大地が指揮を執っている学校全体の
要塞化などで土木関係の仕事をしていた人が手伝ってくれている。
作業効率が格段に上がったのは間違いのないことだった。

俺は、それがなるべく嫌味に聞こえるように荒瀬先輩に言った。

「農作業が自分の手を離れて不満ですか？」

「いや。俺がやっているのはよく言っても家庭菜園だからな。今ま
で『商品』を作ってきた農家の人はさすがだ」

……大人の回答で。

荒瀬先輩は、水田造成や畑での作業監督をしている。その合間に
須藤先輩のボディガードもこなしているし、かなり多忙な人だ。

俺はというと、基本的には畑で荒瀬先輩の手伝いをしているだけ
だった。まあ、基本的には、だ。

朝倉市には技術を提供してもらっている。じゃあ、鈴宮高校は朝倉市になにを提供しているのか、というと、それは軍事力、ということになる。

朝倉市との戦争に勝っており、その後、しばらく俺が朝倉市に残って地域開放を指揮したこともあって、既定事実としてそういうことになってしまった。

朝倉市にはなくて、鈴宮高校にあるもの、そのひとつは大量の銃器だ。

今でも松村が朝倉市に残ってゾンビ掃討の指揮を執っている。基本、現地の人間が戦っているのだが、数が多かったり、中度感染者なんかがいったりすると、俺たちが武器を持って向かうことになるわけだ。

「直以くん、お願いね」

先の尖った尻尾を振りながら須藤清良はそんなことを言いやがる。すると、俺は農作業を中断して、遠路朝倉市まで出張しなければならぬのだ。

俺は、簡易休息所で汗を拭って座った。だが、休めなかった。この炎天下ではじっとしていても体力が奪われていくのだ。

とにかくじっとしているのがつらい。俺は、特に意味もなく荒瀬先輩に話しかけた。

「もうすぐ選挙ですね。須藤先輩はどうですか？」

「さあな。だが、どうせなにか悪巧みをしてんだろうな」

「それはそれで須藤先輩らしいですね」

「おまえは、どうすんだ？」

「俺？ 別にどうもしませんよ。誰が首班になっても同じ。妥当ならば従うし、気に入らなければ従わない。荒瀬先輩もそうでしょ？」

荒瀬先輩は、答えなかった。もともとが寡黙な人だ。話自体が盛り上がらないのはいつものことではあるのだが、今回は珍しく言いよんでいるようにも見えた。

「どうかしたんですか？」

「……清良が首班を取らなければ、ここを出て行くことになるかもしれないな」

「いや、大丈夫でしょう。今どきオストラシズムでもない」

「清良のほうから出て行くと言うかもしれん。あいつはあれでプライドが高いからな」

「いや、須藤先輩がプライド高そうなのは見たまんまでしょ。」

「それでも別に大した問題じゃないでしょ？ 須藤先輩も、あなたも今の地位に固執してないでしょうし」

「立場なんてものには執着しねえよ。だが、この畑の収穫はしたい」
荒瀬先輩はそう言っつて、遠い目をして生い茂っている畑の葉を眺めた。

「須藤先輩と一緒に動くのは決定事項なんですな」

「……ああ。それは仕方ない。腐れ縁つてやつだ」

俺だけじゃないだろう。学校にいるほとんどの連中は、荒瀬先輩と須藤先輩が恋愛関係にあると思っつていた。

だが、俺はこの2人と接する機会が多くなつて、それが間違いだと思っつた。

もつとも的確に表現するなら、それはやはり腐れ縁になるのだろう。恋愛至上主義者にはけっつて理解できない、特別な絆がこの2人の間にはあるのだ。

無理やり関係性を恋愛に結びつけるのなら、長年連れ添つた夫婦つてところだろうか。

「おまえも今回はそれなりの票を得そうだがな」

「俺？ 俺は無理でしょう。俺は大地と違つて選挙活動なんてしてませんもん」

「おまえはしてなくても、おまえんとこのチヨコマカしたやつが色々やつてるみたいだぞ」

「直にお兄ちゃんいますか？」

絶妙のタイミングで、そのチヨコマカしたやつは簡易休息所に顔を出した。

「おう、梨子。どうしたんだ？」

「うん。今日は暑いね」

梨子はサマードレスにYシャツを羽織るといった格好をしていた。よく見るとあのYシャツ、俺のだな。

「おそとで働く直以お兄ちゃんのために、これをもってきました」。はい、荒瀬先輩も」

「？ ああ。悪いな」

俺と荒瀬先輩は、梨子からタオルに包まれたペットボトルを渡された。どうやら凍っているようで、中身はガチガチだった。

「おいおい、これじゃあ飲めないよ」

「ちがうちがう、飲むんじゃないの。これは、アイスノン代わり」なるほど。俺はペットボトルを脇に挟んだ。動脈を通して冷えた血液が全身に回る。すこしだけ、体温が下がった気がした。

「私の部屋ってエアコンがなかったんだ。だから、夏とかは暑くて眠れないことがあって。そういうときは、これで涼んでんだ」

「久しぶりに出たな。梨子のサバイバル術」

「生活の知恵ってやつか」

俺が荒瀬先輩と感心していると、梨子は俺のコップを両手に持って、クーラーボックスの水を飲んでいた。

飲んで直後から汗が噴き出している。その汗がYシャツを濡らして素肌を透けて見せた。その様子は艶かしいと言えないこともない。まあ、こいつのお色気は今後に期待だな。

「そつだ、梨子。ちょうどおまえの話してたんだよ」

「私の？ なになに？」

俺は、油断する梨子に近づくと、頭を抑えて俺の汗ばんだ胸板に押し付けた。

「てめえ、今度の選挙でなんかいろいろと画策してるらしいな！」

「いや〜ん、あついあつい〜」

梨子は、小癩にも嬉しそうにもがいた。俺が早々に放すと、梨子は少し残念そうな顔をしながら乱れた髪を手櫛で整えた。

「別に……、そんな大したことしてるわけじゃないよ。たまに今度の選挙は私に入れるって言ってくれる人がいるんだけど、その人に私じゃなくて直にお兄ちゃんに入れてっってお願ひしてるだけ」

「票を一本化しているんだな」

「余計なことを……」

「余計なことじゃありません！。でも、直にお兄ちゃんって人気があるのかないのかわかんないよ。私がお願ひした人は、おう、わかつたって笑顔で言ってくれるか、露骨に顔をしかめるかのどっちかだもん」

「無駄に大声張り上げて怒鳴り散らしているやつが人気あるわけないだろうが」

「そっかなあ？ そんなことないと思うけど。ね、荒瀬先輩」

「ん？ ああ、知らん」

急に話を振られた荒瀬先輩はぶっきらぼうにそう答えた。

「でも、みんな今度の選挙のことで持ちきりだよ」

「もともと娯楽が少ない、ていうかほとんどない状態だからなあ。茶飲み話の話題性にはなるんだろうよ」

ゾンビ発生以来、俺たちは生き残るため、そして生き残れる体制を作るために必死になってきた。それが、この3ヶ月で茶飲み話ができる程度には余裕ができた、ということだった。

稚拙なりにも生きていく体制が確立できた今、今度の選挙は、これからどうするかの方角性を占うことにもなっていた。

須藤先輩支持なら、現状維持を。それ以外なら新しいなにかを。

「……結局のところ、須藤先輩対その他大勢って図式なんだよなあ」
対抗馬であるところの大地は、健司辺りが須藤先輩批判を声高にのたまっているが、具体的な戦略性についてはなにも語っていない。須藤先輩批判のひとり過ぎなくなっているってことだ。

「……須藤先輩に続投してもらったほうが無難だよなあ」

俺は、梨子に渡されたペットボトルを見た。

この暑さで、もう半分以上の氷が解けていた。

夏の始まり（後書き）

どぶねずみは基本的にエアコンの類は使いません。環境問題云々というよりは、単に貧乏で電気代が怖いだけです。

そんなどぶねずみの必須アイテムは、冬なら湯たんぽ、夏なら凍らしたペットボトルと水枕です。

今年の夏、エアコンが使えないときにはどうかお試しください。

・・・荒瀬との会話、すっげえ盛り上がんねえ。

この人、この作品で唯一のチートなんでもっと活躍させたいんですけどね。

せんきよ

今日の朝は食堂に鈴宮市で生活する人間が全員押しかけてきていた。

食堂の収容人数は150人だ。席からあぶれたやつは体育館から持ってきたパイプイスに座っている。

「どうせやるなら体育館でいいじゃねえか」

「体育館にはエアコンがないからな。長々と話してたら倒れるやつが出るよ」

俺は、窓から外を見た。なにか、陽炎が立っている。

今日も絶好調に真夏日だった。

7月10日、選挙当日のことだ。

俺は、梨子の入れてくれた冷えた麦茶を飲んだ。

食堂には弱冷房が入っており、外よりははるかにマシな温度になっている。あくまで外と比べて、だ。

食堂内には、正確な数で187人がひしめいている。これだけの人数がいると呼気だけで室温が上がりそうだ。

「それにしても、俺が朝倉市に行っている間にまた増えたんだなあ」

「うむ、今までは5人、10人と小集団でまとまっていた鈴宮市民が少しずつ集まってきたのだよ」

「まあ、朝倉市で1500人の生存者がいたんだ。鈴宮市だって俺たち200人だけってことはないだろうけどな」

「これからも増えるってこと？」

「鈴宮高校では無理だろう。だから、朝倉市みたいに場所作って分散させることになるな」

「ギリシアのポリスカローマのコロニーアってところかな」

「……話、長いね」

梨子がそう言うと、俺たち4人は同時にため息を吐いた。

朝食後、俺たちは選挙をやることになっていた。いや、これからやることはやるんだろうが、その過程が長いのだ。

全員が朝食と小休止を終えた午前9時、まず始まったのがこの3ヶ月における活動報告。

……それがもう1時間以上も続いている。

須藤清良反対派にとっては、それにケチをつけることは最後の追い込みにもなるし自分たちの寄る辺ともなっている。一語一句聞き逃すまいと熱心に聴いていた。

だが、そんなことはどうでもいい俺たちにしてみれば、ただ単に退屈なだけだ。

1時間以上立ちっぱなしで話している紅には悪いが、さつさと終わって欲しかった。

「よーおー、なおいー、のんでつかあー」

「飲んでねえよ、ていうか朝から飲むなよ」

退屈しているのはなにも俺たちだけではない。ここにも退屈に耐

え切れずにワンカップに手を付けた成人女性（実年齢だけ）がいた。

「ほら、さつちゃん。大人しく座ってるよ」

「やーだ。だって暇なんだもん」

「まったく、研修医って言ったってさつちゃんはお医者さんだろ、つ痛え、なんで殴んだよ」

さつちゃんは、俺が言い終わるより早くなぜか俺を殴り出した。

それも、いつもの白衣の長袖ビンタではなく、さつちゃんなりに本気のグーパンチだ。

「うーうー！」

さつちゃんは、唸りながら俺を殴り続ける。

「なんなんだいったい。聖、説明しろ」

「ふ……む。どうやら研修医という言葉がさつちゃんの琴線に触れたらしい」

「うっうっ〜！〜！ うぷ」

さっちゃんは、急に俺を殴るのを止めると、口を押さえてうずくまった。

「まったく、怒りすぎて吐くってどんだけ子供だよ！」

俺はさっちゃんを抱えると、急ぎ便所に向かって走った。

「うおえ〜、えろえろえろ」

便器にしがみつくさっちゃん。その背中を撫でる俺。

一階男子トイレは、弱冷房のかかっている食堂とは比較にならないほど蒸し暑かった。

「朝から吐くほど飲むなよな」

「……そんなに飲んでないもん。ワンカップの半分くらいだもん」

「さっちゃんは身体も小さいから、ちよっとの量でも一杯なんだろっ？」

「……それ、わたしのせいじゃない」

「なにかのせいにしたって仕方ないだろう。事実なんだから」

俺がそう言うと、さっちゃんは便器を抱えたまんま、今度は泣き出した。

「びええ〜！ なんでこんなことになっちゃってんのよ〜！」

酔っ払いの相手がこんなに大変だとは知らなかった。

「ひっぐひっぐ、ほんとうならさ？ わたしはさ？ 内科医になっ

てさ？ どくりつしてさ？ おかねいっばいでさ？ 休日はごるぶ

でさ？ けっこんもしてさ？ うっ〜、全部台無しじゃない〜」

「あ〜っと、そんな将来設計をしていたのか」

「一生懸命勉強して医大に入ったのにさ〜、どうしてくれるのよお〜おっ」

さっちゃん号泣。

さっちゃんの思っていることは、きっとほとんどの人間が思っていることだろう。

単純に、エアコンも満足に使えない夏というのは今までにはなかった生活だ。俺たちの生活は、ゾンビ発生で確かに否応なく変わってしまった。

俺なんかは学生だったし、その生活自体にもそれほど魅力を感じていなかったからまだいい。せいぜいが昔は便利だったと懐かしむ程度だ。

だが、さっちゃんのように社会的地位を確立して順風満帆だった人には、今は俺とは比較にならないほど苦痛なのかもしれない。

もつとも、世の中にはいろんなやつがいるもんだ。

例えば、以前より今のほうがいいと考えるやつ。

そいつは、男子トイレの前で俺を待っていた。

俺がぐったりしたさっちゃんを抱えてトイレを出ると、珍しい組み合わせの2人組が待っていた。

ひとりには梨子だ。こいつは、俺の後を追ってきたはいいが、男子トイレに入れずにおたおたしていたのだらう。

「あ、直以お兄ちゃん。さっちゃんは？」

「ああ。大丈夫だ」

俺は、さっちゃんを梨子に渡した。梨子は多少よろけながらもさっちゃんを受け取った。

そして俺は、俺を待っていたもうひとりに向き直った。

「こっちは男子トイレ。女子トイレは隣ですよ、支倉先輩」

「ふふ、ご機嫌よう、直以くん」

嫌味も通じない。支倉涼子は、女優が舞台上で浮かべるような「笑み」を口元に貼り付けて、俺を見ていた。

「梨子、先にさっちゃんを連れて食堂に戻ってる」

「え？ でも……」

「支倉先輩は俺に用があるみたいだから」

梨子はしばらく逡巡していたが、俺に従って食堂に戻った。

「……で、なんの用ですか？　ぶっちゃけ、あんたが俺にある用件なんて、まるつきり思いつかないんだけど」

「つれないのね、直以くん。私はあなたともっと親交を深めたいのに」

「便所の前で？　本気で言ってるなら、時と場所をわきまえてほしいね」

「……それも、そうね」

支倉先輩は、威圧感を俺に向けて一歩近づいた。

「この後の選挙、あなたはどうなると思う？」

「結果を見るまでもない。須藤先輩の圧勝ですよ」

「それは、なぜ？」

俺は、支倉先輩からの威圧を受け流しつつ答えた。

「対抗馬がないからですよ。今は活動報告してるけど、この後は質疑応答って形の須藤先輩への批判大会が始まるでしょね。それが釣りだとも知らずに」

「……なるほど、清良に口で勝てる人はいないと？」

「須藤先輩を批判する連中はその場で拳こぶしって意見するでしょうね。

批判を自分たちの寄る辺にしている以上、黙認は須藤先輩を認めたことになる。だけど、それが須藤先輩の弁論に繋がる」

須藤先輩は、これから一個一個上がってきた自分への批判に反論できるわけだ。なぜ今まで自分への批判を黙認していたのか、まさにこれをするためだったのだろう。寸前に反論すれば批判派は体制を直せないし寄る辺を失う。

「……相変わらず小細工がすぎるわね」

「小細工？　それは違いますよ。須藤先輩は自分への批判を正面から受け止めた上でへし折るうとしてるんだから。批判派も、ただケチをつけるんじゃないやなくてこれからどうするっていう政策で勝負するべきだったんだ」

「そうすれば清良に勝てたかしら？」

俺は、少し考えて答えた。

「無理でしょうね。そうなった場合、やっぱり須藤先輩の口のうまさ物が物を言っただろうから」

「ひとりのデマゴーグによって扇動される政治。まさに衆愚政治ね」「須藤先輩なら大丈夫でしょう。あの人は反対の意見でも賛成できれば普通に取り入れますから。ところでもういいですか？」

俺は支倉先輩に背中を向けた。だが、支倉先輩は構わずに話し続けた。

「それで、あなたはどうするつもり？」

「……どういう意味です？」

「清良が首班を取った後も、大地くんを支持してくれるの？」

「意味がわかりませんね」

背中越しに、くすんだ笑い声が聞こえる。

「大地くんは直いくんのことを味方だと思っっているようだけど、私はそれほどあなたを信用できないの。できれば教えて頂きたいわね。あなたは清良を支持するのか、大地くんを支持するのか」

俺は、敬語をやめた。気づかれないように、わずかに膝を折る。

「答える必要はない。第一その質問は意味がない。大地と須藤先輩は対立していないからな」

「奇麗事、を！」

瞬間、背後で床を蹴る音がした。俺は全力で真横に飛んだ。直後に支倉先輩が俺の前に飛び出してくる。

「背後からの斬り込みをかわしましたか、をかし、ですねえ！」

「この、バトルマニアが！いきなり盛ってんじゃねえよ！」

支倉先輩は振り返ると、いつの間にか握られている警棒を振るってきた。視認できるスピードじゃない。俺は、必死で支倉先輩の連撃をかわしつつ、間を取るため大きく後ろに下がった。

「すうう！」

支倉先輩は、わずかに身を屈めると、一気に跳ねた。十分に開けたはずの間は一瞬で消され、警棒は鞭のようになり、残像を見せて俺の額に向かってくる。

俺は、背中がきしむのも構わずに、思いっきり仰け反った。

……そのまま背中から床に倒れこむ。

「木刀ではなく短い警棒とはいえ、これもかわしましたか。ますます、をかし、ですね」

俺は、ゆっくり身体を起こした。警棒がかすった額から一筋の血が流れ落ちてくる。

「いや、舐めてたよ。剣道がここまで速くて遠いとは知らなかった」

「武道経験者を舐めないことです。例えば女であっても、あなたのような素人では絶対に勝てませんよ」

「悪いけど、一方的に殴られて泣き寝入るほど大人しい性格はしてないんだよ」

支倉先輩は中段に警棒を構えた。俺も前傾姿勢で腰を屈める。

高まる緊張、だが、これ以上の衝突は起こらなかった。

「その辺にしておけ」

……声の主は、荒瀬先輩だった。

「支倉。これ以上はやめろ。それとも俺が相手になるか？」

支倉先輩は、しばらく逡巡していたが、荒瀬先輩に睨まれると構えを解いた。

「直にも今日のところは引いておけ」

「……わかりました」

俺も身体を起こす。

支倉先輩はしばらく荒瀬先輩の顔を睨んでいたが、やがて無言で食堂に戻っていった。

俺はその様子を見てようやく一息ついた。

「相変わらずのタイミングで。俺のことを助けにきてくれたんですか？」

「そんなわけねえだろ。たまたまだ」

「まあ、俺としては助かったんだからいいんだけど。それよりなんなんです、あの支倉って人。急に殴りかかってきましたよ」

「ん、ああ。知らん」

答えたくないのか、それとも本当に知らないのか。荒瀬先輩はそのまま食堂に戻っていった。

「……便所にも寄らずに、か。結局また助けられたのか」

俺も額の血を拭くと、荒瀬先輩に次いで食堂に戻った。

選挙の結果は、まあ、予想通りになった。

須藤先輩が76票で1位。2位は大地で39票、健司が須藤先輩批判で痛烈なしっぺ返しをされなければ、おそらくは50票は獲得できたんだろうが。

他にも今回は票が割れた。10票以上獲得した人が何人もいた。ちなみに、その中には内藤も入っていた。

おそらくは寸前まで1本化していた連中が須藤先輩の批判失敗でばらばらと崩れた結果だろう。

……まあ、俺のことも少しは話しておくべきかもしれない。

俺は、37票で3位だった。全部梨子のせいだ。

その梨子も12票を獲得している。

「直にお兄ちゃん、やったね」

そう嬉しそうに言う梨子の低い鼻を、俺は思いつきり捻ってやった。

なんにしても須藤先輩の続投は決まり、鈴宮高校では新しい生活がスタートするのだった。

せんきょ (後書き)

レビューもらいました。紅は俺の嫁さま、あざーっす！

どぶねずみはこの小説を書きたいように書いています。そのどぶねずみにとって万人受けしないってのは最高の褒め言葉です。どうもありがとうございます！

・・・でも、紅は嫁にはあげません。

組織再編

夏はいよいよ暑さを増してきている。

俺は凍ったペットボトルで首筋を冷やし、額の汗を拭った。

「今年の夏はマジで人死に出るぞ」

「そっかなあ。確かに猛暑だけど、もっと暑い日とか以前もあったよ?」

「……おまえは今までもエアコン使ってなかったから大丈夫かもしれないが、普通に科学の恩恵を受けてきた俺たちにはかなりきついなだよ」

梨子は不服そうな顔を見ると、俺からペットボトルを奪って自分の首に当てた。

真夏の、といってもまだ7月中のある日、俺と梨子は校内を巡察していた。

須藤先輩が首班に選ばれ、まず最初にやったのは班の再編成だった。数が増えたために構成単位を変えたのだ。

それに伴って新たに組というのを作った。1組5班で4組体制。

この組という呼び名、実は紆余曲折があっただけでこう呼ばれることになった。

「そろそろ自分たちの集団の名前を決めましょう。私も、フューラーとかコンスルとか、決まった名前が欲しいもの」

須藤先輩はそう提案し、大々的に募集をかけた。その中には「セイラと愉快的仲間たち」とか「さっちゃんズ」とかもあったが、紅に一瞥されただけで却下されていた。

結局なところ採用されたのは無難で当たり障りのないものだった。「呼び名などに独創性はいいりません。みなが呼びやすくてわかりや

すいものでいいんです」

という紅の絶対的に正しい正論に誰も反論できなかつたからだ。いや、そのとおりだけど、ロマンのわからないやつだ。

そして、その呼び名で言うのなら須藤先輩は「鈴宮市第1区長」。俺は、「鈴宮市第1区1組1班所属」となる。無味乾燥な呼び名だ。

「直以くん、私のことは天光てんこうと呼んで」

「わかりました、俺のことは天星丸てんせいまる、梨子のことは天飛人あまひととお呼びください」

そんな俺と須藤先輩のささやかな抗議を込めた松谷さんちのお嬢さんネタを、紅は一瞥もせず完全に無視してくれた。

班の再編成を終え、試運転で正常に機能することを確認すると、須藤先輩は朝倉市の各区の代表との会合を開いた。前々から要望されていたことではあるが、選挙が終わるまで待たせていたのをついに開くことにしたのだった。

「それじゃあちよつと行ってくるわね。留守の間は直以くん、よろしくね」

そう言つて須藤先輩は会合場所である朝倉市役所に向かった。同行者は、荒瀬先輩に大地。それと聖だ。

それとは別に雄太が非常事態に備えて隠密裏に同行している。朝倉市はつい先月まで俺たちと戦争していた連中だ。確率は低いだろうが、出向いた先で危害を加えられることがあるかもしれない。雄太は、そういつたときの備えだった。

「しばらくは直以お兄ちゃんがこの代表だね」

まあ、須藤先輩が留守の間はそういうことになってしまった。長くても1週間ほどだろうが、厄介ごとを押し付けられた感じだ。

幸いにも、外枠は須藤先輩が用意していつてくれた。期間の短さもあり、新しいことをやる必要もなく、各組長はそれぞれ自分のやることを熟知している。俺がやることは各組が円滑に仕事をできるようにして、問題があればそれに対処するだけでよかった。

そういう意味での巡察ってことだ。

まず最初に、俺は2組の仕事場を見に行った。2組は学校の外周に堀を作ったり、金網を補強したりと学校の防衛上の作業をしている。組長は大地だが、今は須藤先輩について朝倉市に行っているので留守だった。

俺は、大地の代わりに現場の指揮をしている門倉健司に声をかけた。

「健司、調子はどうだ？」

「暑いよ！」

健司は作業の手を止めて俺と梨子のところに歩いてきた。

「この炎天下に長袖だ。交代制で休み休みやってはいるけど、作業効率はぜんぜんあがらないよ」

「4組みたいに早朝と夕方に仕事時間をずらしたらどうだ？」

「8月はそうすることになるだろうけど、それは大地が帰ってきてからだ」

俺は、2組の作業現場を見た。朝倉市から派遣された技術者の指示を受けながら2組の作業員は人海戦術で土木作業に従事している。

「なあ、健司。最近どうだ？」

「？ なんだよ急に」

「いや、おまえとじっくり話してないなと思ってさ」

健司は、肩の力を抜くと自嘲気味の笑みを零した。

「いいわけがないだろ。こんな状況なんだから」

「それは、まあ、全員がそうだからな」

「ああ、違う違う。僕の言うこんな状況っていうのは、ゾンビが発生して今までの生活が送れなくなったことじゃなくて、この前の選挙に大地が負けたこと」

「負けじゃないだろ。大地は堂々の2位だったんだし。単純に須藤

先輩がそれより多く票を獲得したってだけだ」

「直以、僕はもつと積極的に君に大地を応援してもらいたかったんだけどね。君、僕たちの間ではけっこう評判悪いぜ。須藤先輩と大地、どっちつかずの蝙蝠だってね」

「嫌われるのには慣れてるけどな。それにしてもおまえら、視野が狭いよ」

俺は先日急に喧嘩を売ってきた支倉先輩を見た。支倉先輩は俺の視線に気付くと、優雅に一礼した。

「どういう意味だよ」

「愚者は他人を敵味方に分けるが賢者は分けない。誰が味方になるかわからないからって格言があるんだよ。大地と須藤先輩に対立する理由はないだろ？ なら仲良くやっていけばいい。それでも騒いでいるおまえらは、俺に言わせれば、ただパワーゲームに興じているだけに見えるよ」

「……もし対立する理由があつたら？」

「そのとき考えるよ。梨子、次行くぞ！」

俺は、犬のように舌を出して体温調節している（意味ないって…）

…）梨子を連れて次の場所に移った。

次に向かった先は、3組の仕事場である校舎内だ。3組は炊事や校内の清掃にごみ処理といったことを担当している。他の班の作業服の洗濯もこの組の仕事だ。ちなみに、当然のことながら下着や私服は各自でやることになっている。

俺は、3組の組長を見つけて声をかけた。

「おーい、内藤」

「あ、直以くん。どうしたの？」

3組の組長である内藤晴美は、大きな胸を揺らして小走りに俺たちのところに来た。梨子が険のある目を向けてきたが気付かなかつたふりをした。

こいつを組長に選ぶ辺りが、須藤先輩の人事の非凡さが窺える。

内藤は、多くの場合において須藤先輩に反対してきたやつだ。その上で、須藤先輩はこいつを抜擢する。能力重視というべきか、自分に反対しようが関係ないというパフォーマンズのつもりなのか……。」「3組はどうだ？　なんか問題とか起こってないか？」「あ、うん。ぼちぼちってところかな」

内藤は歯切れ悪そうにそう言った。

俺と内藤の関係は、まあ、小康状態だ。もともと親しかったわけでもないが、それでもこいつと話すのには少々の演技を必要としていた。

「なにか問題があるなら言っておいてくれよ。須藤先輩が帰ってきたときに報告するのが俺の仕事なんだから」

「うん……。細々としたことはいつぱいあるんだけど」

「それでいいよ。教えてくれ」

「まず、洗濯機が足りない。欲を言えば性能のいいものを調達してきてくれればありがたいかな。それに、資材も足りないし、安全の上からももうちょっと指導員に付き添ってもらいたいな」

3組の仕事のひとつに、必要物資の生産がある。木工や黒色火薬の調査なんかもそれに入る。危険を伴う作業だし、以前やっていた小峰たちに作業手順を見守ってもらいたいわけだ。

「わかった。これはすぐにでも伝えておくよ。梨子」

「はいはい」

梨子は俺の横でメモ帳で内藤の言葉をメモっていく。

「あの、直いくん。聞きたいことがあるんだけど」

「俺で答えられることなら」

内藤は、胸を揺らしながら聞いてきた。

「組の仕事って固定なの？」

「今の仕事は嫌か？」

「ううん、逆。外に出てゾンビと戦うなんて私にはできないから。

むしろ今の仕事のほうが向いてるかな」

「一応、固定ではないってことになってる。内藤が今の仕事がいい

んなら、そう伝えておくよ」

「うん、お願いね」

内藤は、馬鹿でかい双丘と共に軽く頭を下げた。

各組には、それぞれ特徴がある。2組は男子学生が中心だし、3組は女子が多い比率になっている。仕事は固定ではないにしても、向き不向きはあるわけだ。運動に向かない文化部女子に土木作業は向かないって話だ。

では、4組の特徴はなにか、というと、学生が少ない。それは新参加者が多いってことだった。

俺は食堂で休んでいる4組の組長を探した。

「おいちゃん、いるかい？」

俺の声に反応して、食堂の奥のほうで手を振る40絡みのおじさんがいた。

「おい直以くん、こつちだ！」

この人が4組の組長で島田春樹さん。兼業農家だったらしく、4組はこの人を中心に農作業に従事してもらっている。

「あ、りこちゃ〜ん、元気だったかい？」

わらわらといつの間にか梨子の周りに人が集まる。梨子のファンが多いことも4組の特徴だった。

「おいおっさん！ 梨子は後回しにして話を聞け」

「なんだいにいちゃん。嫉妬かい？」

「そうなの？ 直以お兄ちゃん」

「違いよ！ ほら、それより4組に問題はないんですか？」

「ああ、今のところは順調だよ。だけど、そろそろ準備しておかないとまずいな」

「なにがですか？」

「台風対策だよ。下手したら一発で作物が全滅することもあるからね」

「……それに必要なものは？」

おいちゃんは俺に紙を渡してきた。そこには、必要なものがリストアップされていた。さすが社会人経験者だ。仕事が早い。

「わかりました。チェックして、すぐにでも用意します。梨子、次行くぞ」

「あ、はーい。それじゃおいちゃんたち、待ったね」

梨子が手を振ると、中年どもは顔をふやけさせて手を振り返していた。

「おまえがおっさん殺しだったとは知らなかったぞ」

「そんなんじゃないよお。それで、次はどこ？」

「保健室」

1組は、他の組とは性格が違う。組単位ではなく班単位で動くのだ。それは、各班ごとに専門的な仕事に従事しているということでもある。

例えば、5班は医療班だ。

「さっちゃんいるか？」

俺は保健室のドアを開けた。弱冷房がかかっているのか涼やかな風が俺と梨子の間をすり抜けた。

「あ、直いくん。先生に御用ですか？」

答えたのは、中年の女性だった。以前は看護師さんをやっていた人だ。

「班長はいる？」

「ええ。いるにはいるのですが……」

困惑気味のおばさん看護師。俺は全てを悟ってベッドのカーテンを開けた。

そこには、5班の班長であるさっちゃんがよだれを垂らして寝ていた。もちろん腹は丸出した。

「つたく、おい、さっちゃん、っと、危ねえ」

俺が軽く肩を揺ると、さっちゃんは寝返りを打って俺に裏拳を

飛ばしてきた。

「直以くん、どんなご用件ですか？」

「ん、ああ。ちょっとね」

「私が聞きますから、外岡先生は寝かしておいてあげてください。これでも、先生は頑張っているんですよ」

「……とてもそうは見えないけど」

おばさん看護師は、さっちゃんの肩に毛布をかけた。さっちゃん
はさっそくその毛布を蹴飛ばして跳ね除ける。

「本当なら外岡先生は研修医で医師としては初心者な位置づけにいる人です。でも、今は一人前以上を求められて器具も薬もない状態でなんとかしようとする努力なさっているんです」

ふと見ると梨子が俺の袖を引っ張っている。

「それじゃあ伝言をひとつ、腹出して風邪だけは引くなって伝えてください」

俺と梨子は保健室を後にした。

次に向かったのは校庭だ。そこには、3班と4班の計20人がいた。

「お、直以先輩ういっす」

「ああ、隆介。こんな集まってどうしたんだ？」

俺は3班の林田隆介に聞いた。

「ああ、なんかの実験っす」

「実験？」

俺は集団の中心に向かった。

「あ、なっおい、いいところに来たわねん」

「っち！」

俺は正反対の2人に迎えられた。ひとりには3班長の伊草麻里でひ
とりは4班長の小峰卓也先輩だ。

4班は小峰先輩を中心に科学技術班。3班は雄太が班長をする2

班と同じ即応部隊として機能している。

ちなみに、雄太は異色ながら2班の班長であると共に1班にも所属している。これは、俺の所属している1組の1班が全体のキャビネット（内閣）としての性格を持っているからだ。

「よう、なにしてんだ？」

「ん、説明するより見たほうが早いわね。小峰先輩、やってみて」「はい、マリちゃん」

小峰は、長方形の固定された木材に火を近づけた。わずか前方には土囊がある。なにがあるのかと疑問に思い、周りを見渡した。その全員が耳を塞いでいるのに気付いたとき、俺は反射的に梨子の耳を塞いだ。

轟音！

梨子は飛び跳ね、俺の耳は鼓膜が破けたと思えるほどの痛みが走った。

梨子は俺の腰に抱きついてくる。なにかを言っているが聞こえない。察するに、びっくりしたと言っているようだ。

耳が正常に動作するまできっかり1分がかかった。

「……どう？ びっくりしたでしょう？」

どこか元気なさ気に麻理が聞いてくる。

「……なんでおまえまでダメーシ受けてんの？」

「……すごい音とは聞いていたけど、ここまでとは思わなかったもの」

「……それで、これはなんだ？」

それに答えたのは、小峰先輩だった。

「これは、いわば火縄銃の原型みたいなものかな？ マリちゃんにせつかく黒色火薬があるんだから火縄銃が作れないかとの要望を受けてね」

「火縄銃？」

「弾は石だが、まずまずの成功だ」

「命中精度は低いみたいだけどな」

俺は、土囊を見た。まるで傷ついた様子はない。その遙か後方で黒ずんだ地面が煙を上げている箇所があった。

「き、きみい！　これがどれだけすごい発明かわかっていないようだね！」

麻理は、小峰先輩の言葉を遮った。

「命中精度はしょうがないわよ。ライフリングもないただの組み合わせた木だしね」

「そういえば中国の火槍は竹の使い捨てだったらしいな。そんな感じかな？」

使い勝手の難しい武器だ。そんなことを考えていると、ひとりの少女がそつと俺の前に立った。

進藤紅だ。

「直以先輩、お疲れ様です」

「紅、こんなところまで来てどうしたんだ？」

「緊急の連絡がありました」

「……須藤先輩になにかあったのか？」

「いえ。そちらからの連絡はありません。今、朝倉市の第3地区から援軍要請がありました。現在、ゾンビの大軍に避難地域を包囲されているそうです。どうしますか？」

相変わらずの無表情、どうしますか、じゃないだろう。

俺は天を仰いだ。蒸し暑い夏空、どうやら楽はできそうになかった。

組織再編（後書き）

今回は難産でした・・・。

いや、天光光の件でまさかの2日1文字もかけずつての、久しぶりにやりました。

ちなみに、園田（旧制松谷）天光光女史は日本で女性初の代議士さんです。

本当はここ、最後の晚餐の件を入れる予定だったんですが、日本では皇室とジェンダー、それと宗教はなにを言っても批判されるって聞いてガタブルになって急遽変更しました。

でも、最後の晚餐はもう少ししたら入れようと思います。

全体の効率を考えて死んでください

蒸したバス内にエアコンが効き始め、ようやく涼しさを感じ始めた頃、俺たちは朝倉市に到着していた。

「よつし、そろそろ目的地だ。最終確認しておくぞ。3班は2手に分かれる。1手は俺と一緒にゾンビを蹴散らしつつ敵中を突破。立て籠もっている連中と合流する。隆介、はぐれるなよ」

「ういつす！俺の活躍に期待してください」

「それともう一手はバス内から銃で俺たちの援護。麻理、中度感染者を集中的に狙ってくれ」

「ええ。銃声とクラクションでゾンビを引きつけなければいいのよね」

「ああ。無理はない。ヒットアンドウェイでな。俺たちが校内に入ったら離脱。後続の2組と合流な」

俺と紅、それに麻理の率いる3班は先遣部隊として朝倉市の第3地区に向かっていた。

第3地区は朝倉小学校を拠点として活動していた。そこに、今朝方大量のゾンビが押し寄せたのだった。

実は、ゾンビが拠点に大量に来るなんてのは初めてのことだった。今まではハグレが数匹迷い込んでくる程度だ。

「なにかお悩みですか？」

紅が顔を近づけて聞いてくる。俺は、深刻な表情を崩した。ゾンビの特性については、俺ではわからない。そうだったことは聖に丸投げすればいいのだ。

「颯爽と救援に駆けつけたらけっこう格好いいと思わないか？」

「……」

「なんで答えないんだよ」

「私は直以先輩の顔を見て好きになったわけではありませんから」

「……」

いや、そりゃあ雄太や大地の隣に並べば俺の顔が見劣りするの
認めるけどさ。

「なんか今すげえこと聞いた気がするんすけど。進藤って直以先輩
のこと……」

「おまえは黙ってる！」

八つ当たり気味に隆介を黙らせると、もう眼前に朝倉小学校は近
づいていた。

「けっこうな数ですね」

「ああ、200、いや、300はいるかな」

ゾンビどもはすでに朝倉小学校の正門を破壊し、校舎に迫ってい
る。立て籠もっている連中はバリケードを築き、なんとか侵入を防
いでいる状態だった。

「あの中を突っ切るんすか？」

「怖気づいたか？」

「い、いや！ 大丈夫です。俺、直以先輩を信頼してますから」

「信頼されても困るけどな。よっし！ 行くぞ」

俺たちはバスから下車した。バスはそのまましばらく走り、俺た
ちから距離を置いたところで止まった。

麻理が俺に手を振る。俺も手を振り返した。

麻理は、バスの窓枠に腰をかけ、狙撃銃を構えた。

一瞬の静止、麻理は、狙撃銃を撃った。

辺りに銃声が木霊する。その余韻が消えるタイミングで、バスの
クラクションが鳴り響いた。

ゾンビどもは一斉に向きを変え、バスに殺到して行った。

俺は戈を握り直し、その間隙を縫って小学校に向かって一気に駆
けた。一步遅れて隆介と紅が、そのさらに一步後ろから3班の連中
がついてくる。

「つち！」

進行方向にゾンビが立ち竦んでいる。そのゾンビは、首を俺たちに向けた瞬間、真横に跳ね飛んだ。麻理にこめかみを撃ち抜かれたのだ。

「いい腕ですね。伊草先輩は正規の射撃訓練を受けたのですか？」

「らしいな。それより紅、どうだ？」

「……節操がないですね。所かまわず、といったところですか」

梨子を鈴宮高校に残して紅を連れて来たことには理由がある。紅は空手をやっていて戦力になるというのも理由のひとつだが、それだけではない。

理由は、朝倉小学校の被害状況とゾンビの行動を確認させるためだ。

ゾンビが大挙して拠点に攻め寄せてくるなんてことは、今まで経験のなかったことだ。

ゾンビたちはどんな行動をしてどのよう攻めるのか、朝倉市の防備はどれが有効でどれだけ効果があったのか。

それらを紅に記録させているのだ。

「全方位からゾンビは校舎に向かっているようです。門も柵も破壊して進んでいます」

「ああ。この様子じゃあ校内に入り込まれるのは時間の問題みたいだな」

すでにゾンビは校舎を包囲している。ゾンビたちは、そこが扉だろうがガラスだろうが関係なく進んでいる。

避難民たちは出入り口をイスは机で補強して防戦。ガラス戸はゾンビたちに叩き割られていたが、幸いにも小学校のガラスは割れにくいように金網が練りこんであり、進入までには至っていなかった。

俺は、バリケードに群がるゾンビに後ろから戈を首にかけ、一気に刈った。首の半分を切断されたゾンビは血を撒き散らしながら倒れた。

「隆介、しばらく援護してくれ」

「わっかかりやした！」

隆介たち3班のやつらは俺と紅を囲むように円陣を組んだ。俺は、バリケードに寄った。

「大丈夫か！ 俺たちは鈴宮高校からの援軍だ」

「そうか、助かった……」

バリケードの奥から安堵の歓声が上がった。

「安心するのは早いよ。中の様子はどうだ？」

「あ、ああ。みんなでなんとか持ち堪えているよ」

「噛まれたやつはいるか？」

「……可哀想だけど、噛まれたやつは外に放り出した」

非常ではあるが的確な判断だ。もし情に流されていたら内と外から攻められてとても持ち堪えられなかっただろう。

「今こっちにうちの本隊が向かっている。もう少し耐えられるか？」

「駄目だっけ言ったらどうするんだよ」

「直以先輩！」

隆介の声に振り向くと、取りこぼしのゾンビが俺に迫ってきていた。

そのゾンビと俺の前に、紅が立つ。

紅は表情ひとつ変えないまま、ゾンビの伸ばした手をやり過ごして足払いを食らわせた。バランスの悪いゾンビは前のめりに俺の前に倒れこんだ。俺は頭を足で押さえつけ、ゾンビの延髄を切った。

「紅、助かった」

「いえ、ですがそろそろ話し合いは切り上げてください」

そう言うと紅は隆介の隣に並んで防戦に参加した。

俺は再びバリケードの内側の人間に声をかけた。

「もし無理なら残っている人間をまとめろ。ここから脱出する。退路は俺たちが確保するから」

中からはざわめきが起こった。

「……ここを捨てるのか？」

「早く決めてくれ。しばらく生活して愛着があるのはわかるけど、

また戻ってこれるから」

「わかった。ここを脱出する。みんなをまとめるから少しだけ時間を稼いでくれ」

俺はそれを聞いてバリケードに背を向けた。

そこでは、ゾンビたちと隆介たちの戦闘が行われていた。

ゲーム感覚、というには余裕がないが、それでも幾度となく戦ってきた3班の仲間は、少数ながらも効率的にゾンビをさばっていた。

隆介は金属バットで二刀流をして振り回していた。荒が目立つが、それでも隆介は勢いと戦闘力の両面から貴重な戦力だった。

「直以先輩。話は終わったんすか？」

「馬鹿、油断するな！」

俺が叫んだのと同じ、隆介の横にいたゾンビが腰を屈めてタックルをした。

隆介は押し倒された。

馬乗りになったゾンビは隆介の首元に唾液に塗れた歯を食い込ませる、そんなことにはならなかった。

寸前でゾンビが倒れた。屈んだゾンビの頬に、紅の肘が叩き込まれたのだ。

「し、進藤。助けてくれたのか」

紅は隆介に見向きもせずひと言。

「ここであなたに死なれては大幅な戦力ダウンになります。全体の効率を考えて死んでください」

紅は隆介を絶句させると、弾けるようにゾンビの群れに突っ込んだ。

膝裏を蹴り、踵を払い、靴を踏みつける。

流麗。

まるでフィギュアスケートの選手だ。
速く、滑らかに紅はゾンビたちの間を疾駆していく。

紅はゾンビを転ばせることに特化した戦い方をしていた。倒れたゾンビは他のやつが余裕を持って頭を砕いている。

「……戦い慣れてやがる」

俺や隆介のように喧嘩の延長としての戦い方ではない。麻理のように、出発点から違う体系化した戦闘を紅はしていた。

息ひとつ乱さずに俺の隣に立ち、紅はわずかに乱れた着衣を直した。

「直以先輩。今後の方針は？」

「しばらくはここで時間稼ぎをする。その後はゾンビを引きつけて立て籠もっている連中の逃走経路を確保」

「了解しました」

紅は独楽のように勢いをつけてゾンビの群れに突っ込んでいく。俺も戈を振るい迫るゾンビを撃退した。

俺たちは優勢に戦闘を進めていったが、ゾンビは俺たちが倒しきれぬ数ではなかった。

じきに疲れが出て動きが鈍くなったときに、俺たちはゾンビに捕まるだろう。

そんなことを考える程度には疲労が蓄積されてきた頃、俺たちの真上、2階から合図があった。

「よし、次は逃走経路の確保だ」

ここに来たときに麻理がやっていたことを、今度は俺たちがやって道を作るのだ。

「校庭にでも誘導しますか？」

「……いや、校舎内に引き込もう。ほら、紅」

俺は、懐に入れていた拳銃を紅に渡した。

「ご自分では使われないのですか？」

「俺が撃つたって当たらないからな。隆介、手伝え」

俺はバリケードに手をかけた。すでにガタガタで、ゾンビに『押す』だけではなく『引く』という機能がついていたのなら、簡単に崩れていただろう。立て籠もりではなく脱出という手段を選らんだのは正解に思えた。

背後では銃声が響いた。紅が発砲したのだ。その音がゾンビどもを引きつける。

俺と隆介はバリケードを崩し、校舎内に入り込んだ。

その後が続いて紅と3班の連中、そして穴から水が漏れるようにゾンビが続々と入り込んでくる。

音で誘導し、ゾンビどもを校舎の奥に誘い込む。これで表にいたゾンビは相当数を減らしたはずだ。

確認のために窓から外を見ると、数人単位でまとまって校門に走っていく人影が見える。脱出はうまくいったようだった。

「直以先輩、そろそろ俺たちも脱出しないと逃げられなくなるっすよ」

「ああ、そうだな。よっし、そろそろ俺たちも脱出するぞ」

俺は落ちていた缶を蹴飛ばした。缶は甲高い音を上げてゾンビを俺たちから遠ざけた。

俺たちは、脱出を開始した。

隆介を1番手に窓から雨樋を使って地上まで降下する。

全員が下り、残りは俺と紅だけになったときに、俺は気付いた。

「直以先輩、私たちも行きましょう」

「……ああ、先に行ってくれ」

俺は窓から離れてゾンビに近寄った。

ゾンビは、手の触れられる距離まで接近しても、俺には無反応だった。ゾンビは目が見えない。それ自体はおかしいことでもない。

俺が気になったのは、ゾンビが、ある方向に向かって歩いていることだ。音にも反応せず、だ。

俺は、戈で窓ガラスを割った。数人のゾンビはその音に反応して向かってきたが、ほとんどのゾンビはそれすら無反応だった。と、そのとき袖を引かれた。

紅だ。

「……なんで隆介たちと一緒に行かなかったんだ？」

「直以先輩を置いてはいけません。ここは危険です。早く退避しましょう」

小声でのたまう紅を無視して、俺はゾンビどもの向かっている方向に進んだ。

その方向は、屋上だった。

それは、異様な光景だった。

まるでカテドラルに祈る信者のようにゾンビたちは屋上に集まっている。

俺と紅は、まるで俺たちに反応を示さないゾンビの間を縫って、先に進んだ。

微かに伝わる振動と駆動音。

そこにはガソリンで動く自家発電があった。

「まさか、これにゾンビどもは反応して集まったのか？」

「いえ、どうやら発電機ではなく、あれのようです」

紅が指差した先には、発電機に繋がれたアマチュア無線機とアンテナがあった。

「無線基地？ ゾンビは電波に反応しているのか？」

「そうかもしれません。理由は不明ですが」

「これは……、聖が喜びそうなネタを仕入れたな」

俺は発電機に手を伸ばした。それを紅が遮る。

「今、発電機を止めたら無線機が動作しなくなります。すると、ゾンビは電波からの関心を捨てて、私たちに注目するかもしれません」

「……それは、ぞっとしないな」

今、俺たちは大量のゾンビの中に紛れ込んでいる状態だ。とても

じゃないが、戦って生き延びれる環境にはない。
俺たちは大人しく退散することにした。

と、そのときだった。

大音量の洋楽が流れてくる。

場所は、校門からだった。

屋上から見下ろすと、数台のジープが入り込んでくるどころだった。
た。

5台、10台、いや、もつとか。かなりの数だ。

その連中は、ショットガンやら日本刀やらを振り回してゾンビ掃討を始めた。

「……朝倉市からの援軍ですか？」

「いや、わからん。あんな連中初めてみるけどな」

指揮を執っているのは、白いスーツを着た男だった。ひよろりとした外見でジープの上からやくざらしい男たちに指示をしている。

その隣には女がいた。

赤茶けた髪を後ろでひとつにして、サングラスをしている。

女はサングラスを外して、ジープから立ち上がった。

そして、屋上にいる俺をまっすぐに見上げてきた。

原田美紀

朝倉小学校の校門前で俺と紅は、50人ほどのやくざ風の男たちに囲まれて白いスーツの男と隣に立つ女に対峙した。

白いスーツの男はまじまじと俺の顔を見て言った。

「あまり賢そうには見えないなあ」

大きなお世話だ。それを俺が口に出さなかったのは、俺の隣にいる紅が殺気立ったからだ。

それに気付いたのか白いスーツの男は慌てて俺から一步離れた。

「いやあ悪かったね。僕は本音をついつい口にしちゃう人なんだ。じゃないとストレスが溜まるだろう？」

大げさに腕を広げて白いスーツの男はそう言った。いちいち身振りの大きいやつだ。

「あんたら、誰です？」

俺が聞くと、隣の女が答えた。

「私たちは隣の長戸市から来たものよ。救援をラジオから聞いたの」

屋上の無線機、か。

「僕は霧島明俊。きりしまあきとし 明るいに俊敏の俊で明俊だよ。それで、これは原田美紀。らだみき 僕の乳母兄弟だ」

そう言つて、霧島と名乗った男は原田と呼んだ女の肩に手をかけた。いかにも馴れ馴れしい所作。

並べてみると、明らかに男は女に見劣りしていた。それでも男のほうで立場は上らしい。女は、文句ひとつ言わずにただ男を受け入れていた。

「それで、わざわざ僕たちをここに呼びつけたのはきみかい？」

「いや。ここの連中なら俺たちが逃がしたよ」

「きみたちが？」

「私たちはここ、朝倉市第3地区から正式に援軍の要請を受けた鈴宮市の部隊です」

紅のやつ、なんか棘があるな。自分たちをわざわざ正式、といっているのは、こいつら長戸市から来た連中を正式ではないと言いつているのだ。

「部隊つて、きみたち2人じゃないか」

「それにはちよつと理由があつてね」

霧島は腰を屈め、俺を睨みつけてきた。

こいつは、道化だ。動作の一切に安っぽさが滲み出ている。

霧島は、俺から視線を外し、紅の着る鈴宮高校の制服を見て言った。

「ふうん、そういえば鈴宮市つて言ったね。ひよつとして牧原聖を知っているかい？」

「……聖の知り合いか？」

それを聞くと、霧島は急に笑い出した。

「あつはつは！ そうか、あの怪物、やっぱり生きてるんだ！」

俺は、下ろしていた戈の先を蹴った。戈はメトロノームのように俺の手を基点に左右に揺れた。

「あんた、聖とどういう関係だ？」

「んふ、いや、失敬失敬。僕はこれでもメンサの会員でね。知っているかな、メンサ。そこで彼女と知り合つたんだ」

「メンサに？ あんた、賢そうには見えないけどな」

ピタリと、霧島の笑いが止まった。再び腰を落として俺の顔を睨みつける。

「きみ。自分の立場がわかつてないようだね」

霧島は、ゆつくりと懐に手を入れた。

瞬間、3人が同時に動いた。

俺は戈を蹴り上げ、刃を霧島の首元に当てた。

その俺には原田の構えたショットガンが向けられ、その原田のこめかみに紅が構えた拳銃が突き付けられている。

周りのやくざ連中も合わせて全員が固まった。

しばらくの間、小学校の校門前は蝉の鳴き声だけが響き渡っていた。

「……おーけーおーけー、僕が悪かった。とにかく刃を退けてくれ」
「懐のものを捨てるのが先だろ」

冷や汗を掻きながら霧島は懐から拳銃を取り出すと、指からすべり落とした。

俺は戈を霧島の首から離れた。少し遅れて原田は俺からショットガンの銃口を逸らす。最後に、紅は俺の顔を見てからゆっくりと拳銃を下ろした。

「さすが、というべきか、やはり、というべきか。牧原聖の知人だけあって野蛮だね」

「やくざ率いている人間に言われたくないね」

「ん〜、了見の狭い人間だなあ。やくざの統率力を馬鹿にしてはいけないよ。金と権力でしか命令できない能無しと違って、今、このような状況でも万全に機能するんだからね」

確かに、やくざ連中のゾンビ狩りの手並みは見事だった。朝倉市や俺たち鈴宮高校の、言ってみれば兵農分離もできていない寄せ集めの集団とは、質が違った。

「霧島さん！ ありました！」

と、そのとき背後から声がした。振り返ると、やくざらしき男が肩に米袋を担いでいた。

「よし、運び出せ」

それを合図に数人の男たちが校舎内に入っていく。

「……なるほどね。食料品の略奪が目的か」

「わざわざここまで出張ってきた正当な報酬だよ」

「悪いけど、このままにも取らないで帰ってくれるかな」

その言葉に、もっとも反応したのは紅だった。

先ほどの反応を見ても長戸市の連中は友好的ではない。ここでわ

わざわざ喧嘩腰になっても仕方がない。ここは、やり過ぎすべきだ。理性的に判断するのならば、それは正解だろう。なにしろ、今、ここには俺と紅の2人だけで、周りの50人は全員敵なのだ。

だが、俺はそれができなかった。

論理的な判断じゃない。

理由なんて明確なものでもない。

それは、直感だ。

俺は視線を霧島の隣に立つ女に向けた。赤茶けた髪をアップにして、スーツを着た女。歳は20台前半、あるいは10台の後半かもしれない。10人が見れば10人が美人だと答えるだろう。

その女と俺は視線を交じり合わせた。

この女の名前は原田美紀。

俺は視線で語りかける。おまえにならわかるだろう、と。

原田は美笑を浮かべて俺に応えた。

「明俊さん。ここは引きましょう」

瞬間、霧島は顔色を変えて原田の頬を殴った。

その突然の行為に、やくざ連中を含めた周りの全員がざわめいた。だが、当人の原田は唇の端を切りながらも美笑を崩さなかった。

「今、ここに200人近い部隊が向かっています」

おそらく、健司と麻理たちの鈴宮市から来た部隊と、もともとここにいた連中のことだろう。

霧島は、俺を睨みつけてきた。

「それが、きみが僕を恐れない理由なのかな？」

「それだけじゃないぞ。朝倉市からも向かってきているはずだ。聖が率いて、な」

ぎりど、俺の耳元まで霧島の歯ぎしりが聞こえる。

「美紀！ そんなやつら蹴散らせるだろう！」

「はい。だけどそのときには私たちも相応の被害があります。ここは、やはり引くべきです」

「……なるほど、そこまで考えての言動だったんだ。だけどもきは勘違いしているよ。食料品を集めている時間は確かにないけど、きみたちを処刑する時間くらいはある」

「試してみるか？」

俺は、戈を肩に担いで紅の肩を抱いた。先ほどのことを思い出したのが、霧島は首を押さえて一歩下がった。

俺は、小声で紅に言った。

「紅、俺が時間を稼ぐから校舎内に逃げ込め。後は麻理たちが来るまで持ちこたえればいい」

「わかりました。ですが囷になるのは私です。直以先輩より私が死ぬほうが全体の被害は少ない」

「なるほど、それじゃあ一緒に逃げるか」

「……なにがなるほどなのはわかりませんが、それがベストですね」

俺は足に力を入れた。肩に担いだ戈を霧島に投げつけてやる、そう思い一歩を踏み出したとき、原田が俺に手を伸ばした。

完全に機先を制されて、俺は固まった。

原田は、美笑を浮かべて俺に伸ばした手を頭上に持ち上げると、よく通る声で叫んだ。

「撤収！」

それを合図にやくざ連中はジープに乗り込んでいき、順次出発する。やくざ連中は実質的な統率者が誰であるかわかっているのだ。

霧島も、あえて余計なことは言わずにジープに乗り込んだ。

俺と原田は、ずっとお互いの目を見続けていた。

「よかつたら、名前を覚えてくれるかな」

すでに8割方のやくざが撤収を終えた頃、ようやく原田は口を開いた。

俺は、名乗った。

「俺が菅田直以。こいつは進藤紅だ」

「私は原田美紀よ」

俺はハンカチ（梨子に毎朝渡されている。できた妹っ子だ）を差し出した。

「唇、切れてるよ」

「ええ。ありがとう」

原田は俺からハンカチを受け取る。そのとき、微かに指が触れた。

性欲にも似た情動。理性ではなく、感情で相手を圧倒したくなる、その激情に俺は必死で耐えた。

「えっと、菅田くん」

「直以でいいよ。最近はそれで呼ばれることのほうが多いから」

「そう。それじゃあ、直以くん。私のことも美紀、で、いいわよ」

「それじゃあ、美紀さん、かな」

原田、もとい美紀さんは、美笑を浮かべた。格好からいつて年上だと思うが、時折幼い所作も見せる。見た目からは歳のわからない人だった。

そして、穏やかな会話も、ここまでだった。

「直以くん、あなたも感じているんでしょう？」

「……ああ、感じているよ」

俺と美紀さんは、お互いを見詰め合った。

どうしてそう思うのかはわからない。
どうして惹かれあうのかはわからない。

だが、俺たちはお互いに確信していた。

俺たちは、絶対に相容れない仇敵なのだ。

「悲しいわね。でも嬉しくもある。こんなに解り合える相手と出会えるなんて」

俺たちは解り合う。お互いを理解し得ない関係だと。

「悲劇なのか、それとも喜劇なのか。こんなに惹かれ合う相手がいるってのは」

俺たちは惹かれ合う。お互いを絶対の敵として。

「直以先輩」

紅が俺の袖を引く。鉄面皮を崩してどこか不安そうだ。

紅には、俺と美紀さんの関係が理解できないのだろう。

いや、おそらく他の誰であろうとも理解はできないだろう。

俺と美紀さんの間には、お互いにしか価値のないひとつの世界が成立していた。

俺たちは、世界で2人きりの、絶対的な他者なのだ。

と、そのとき美紀さんは呼ばれた。どうやら最後のジープが出発するようだ。

「また、近いうちに会いましょう。ごく、近い将来に」

美紀さんは、草原を跳ねる小鹿のようにジープに飛び乗った。

「私たちの望む形で、ね」

それは、敵同士として、ということだ。

鈴宮市と長戸市、美紀さんはこの2つの勢力の軍事的衝突を示唆していた。

美紀さんは、ジープから立ち上がったまま、ハンカチを啜えた。

ジープは緩やかに走り出す。

俺は、紅に肩を叩かれるまでずっと去り行くジープの姿を追いかけ続けた。

全身が高揚に震える。

俺は、俺自身が美紀さんと対峙することを望んでいると、はつきりと気付かされていた。

原田美紀（後書き）

ようやく、ようやく長戸市の名前が出てきました。

本来なら朝倉市編を導入部にしてこつちをメインに話を進めるつもりだったんですが。

お気づきの方も多いと思いますが、章分けに鈴宮朝倉戦争編を入れました。

事後承諾で申し訳ありません。

お友達ファイル16

霧島明俊きりしまあきと

長門市のナンバー2で参謀役。

聖と同じメンサの会員。親は長戸市の名士で高校まではお坊ちゃん
で順風満帆に過ごす。

だが、大学受験に失敗。

初めての挫折に加えて親にも見限られ、乳母兄妹の原口美紀を引き
連れて裏社会デビュー。

頭の切れもあり、頭角を表す。

ゾンビ発生後はいち早くやくざ連中をまとめることに成功し、長戸
市の互助団体を形成する。

趣味は部屋にピタゴラススイッチを作ること。

以前、無遠慮に入ってきた彼女に完成間近のピタゴラススイッチを壊
され大喧嘩。「私とピタゴラススイッチとどっちが大切なの?」と言
われて小さな声で「ピタゴラススイッチ」と返答、ぶん殴られた経験

あり。

明俊は完璧主義者であり、細部に至るまで自分の手が加わっていないと気がすまない。

余計なことにまで口を出して反感を買っているが、それをうまくまとめているのが美紀であることに気付いていない。

せいぜい勝手に苦しみ

漆黒の宵闇にぼっかりと月が浮かんでいる。

その優しい光源の中に、想い人の美笑が現れては消えた。

「……………ハア」

俺は熱いため息を吐いた。似合わないのはわかっている。だが、胸の高揚は抑えられなかった。

「……………なあ直以。なにか、あつたのか？」

その声に俺は振り返った。

そこに立っていたのは雄太だ。雄太のさらに後ろには聖と梨子がいる。

「あれ、雄太。戻ってきてたのか」

「朝倉小学校で合流しただろうが。おまえ、本当にどうしたんだ？」

「そうだなあ。言ってみれば、恋煩い……………」

「どういうこと直以お兄ちゃん！ 紅ちゃんなの！？ ……ぎゃん

！」

「まさか、あの女か！？ 伊草麻里なのか、直以！ ……いただだ

！」

俺が言い終わるより早く雄太を突き飛ばして俺の前に出た馬鹿娘2人の鼻を、俺は思い切り持ち上げた。

「なんなんだおまえらは」

梨子と聖を黙らせることに成功した俺は、それぞれの鼻を押さえている右手と左手を離れた。聖と梨子は涙目で俺を睨んできた。

「つたく。深刻に思い悩むことすらできねえな」

俺は窓を全開にして低反発マットに寝転がった。

ここは、俺たちの部屋である図書室だ。湿った夜風が俺の頭上を吹き抜けた。

「それで、聖。そっちはどうだったんだ？」

俺が強引に話を変えると、聖は鼻をさすりながら俺の隣に座った。

「ああ、こちらは有意義な話し合いができたよ」

須藤先輩たちの間で話し合われた代表者会議は、大きく3つの議題に分かれた。

まず、最初の議題は、現状における情報交換だった。

お互いの生活環境と問題点。それに、ゾンビの特性など。

ゾンビは、今のところ人間だけかなり、犬や猫など他の動物には確認されていない。

多くのゾンビは視覚や痛覚がなく、音に反応する。だが、例外的に視覚のあるゾンビも存在し、そのゾンビには痛覚が存在する。

ゾンビに噛まれると、長くとも1時間以内にゾンビになる。

ゾンビは、頬、ノド、胸部、上腕、大腿、内臓、それに性器を好んで食うが、捕食段階においては部位に関わらず噛み付いてくる、云々。

「私としては目新しい情報は仕入れられなかったのだが、まあ、情報を整理できただけよしとしているよ」

「そういえば、聖。紅には聞いたか？」

「う……む。朝倉小学校の件か。実際に実験してみないことにはなんともいえないが、なかなか興味深い話だった」

「もし本当にゾンビが電波に反応しているんなら、よくできてるよな。電波を使うのなんて人間くらいだから、ゾンビは人間のいるところ、すなわち食べ物のあるところに集まるってわけだ」

そう言っただけで雄太は腰を摩りながら聖の隣に座った。どうやら先ほど梨子と聖に突き飛ばされて思い切り腰を打ちつけたらしい。

「電波か電磁波か、それとも周波数なのか。まだなんとも言えないが、ゾンビの行動にそのなんらかが影響しているのかもしれないな」

「胸糞悪い。ゾンビ発生初期に助けを求めて、外部と連絡を取ろうとして知らずに犠牲になった連中が大量にいるだろうな」

「なんか、すごく残酷だね。みんな必死で助かるうとしてるのに、

それが逆効果になるなんて」

梨子は聖とは反対の俺の隣に座ると、俺に寄りかかってきた。

「……それで、次はなにを話し合っただ？」

「うむ、食料とエネルギー問題だ」

この先、どうやって食料を確保していくのか、どうやって必要最低限の電気を確保するのか。

現状を言うなら、非常食や保存食を食いつないでいる状態で、鈴宮高校を含む全ての場所で生産体制は整っていない。

当然非常食や保存食はいずれなくなる。なくなる前になんとか食糧を繋げるだけの生産体制を作らなければならない。そのためにもどうすればいいのかが話し合われた。

他にも、この夏の酷暑をどうやって過ごすか、も話し合われた。ぶつちやけるのなら、エアコンをどこまで使うか、だ。

今は、ガソリンを元にした発電機で動かしているが、ガソリンも無限にはない。今年の夏はなんとかなるかもしれないが、来年は、それに冬はどうするか。

実をいうと、環境問題は食料問題とエネルギー問題の2つに集約できる。

俺たちは、文明の崩壊した世界でまさに環境問題に直面してらっただけだ。

「以前、直以の言っていたバイオガスの話題も出たよ。実用化されれば大分助かるが、この電力不足の状況ではすぐには無理だろうな」
「そういえば、その、汚物って昔は肥料に使ってたよね」

俺は寝返りを打って梨子を落とす。こういう話は荒瀬先輩に仕込まれているために得意だ。

「肥えつつのは、実は人糞じゃないんだよ。人糞を落ち葉とかと一緒に発酵させたもの。東京と埼玉の間にある武蔵野つつのは、幕府

が増えすぎた江戸の人口を養うために、人糞を発酵させるための落ち葉を作るのに計画的に木を植えたつてのが始まりらしい」

「発酵までには、2〜3年かかるらしいし、現代人の食事には化学調味料が多く使われているため、肥料には使えないらしいな、いいつたあ！」

俺は聖の足を蹴った。くそう、俺が言いたかったのに。

「それじゃあ、肥料に使うよりおならガスに使ったほうがいいのかな？」

梨子は、再び俺の身体によじ登ってくる。

「うむ。うまく精製できれば生活用ガスにも使えるし、設備が整えば火力発電の元になるかもしれない」

聖は寝転がり、煙草に火をつけた。

「でも、電気がないから施設は動かなくて精製できないんだよね」

「残念ながら、そうだ」

「なんだ、手詰まりじゃねえか、っとお」

聖が煙草の火を近づけてくるが俺はかわした。その動作で梨子は俺の上からずり落ちた。

「これについてはひとつ案が出た。私としては他力本願であまり好ましくないんだが」

「なんだよ」

雄太が聞くと、聖は一度大きく煙草の煙を吸った。

「……これは、水に関することでもあるんだが。雄太、水道の仕組みは知っているか？」

「まあ、だいたいは」

「私も知ってるよ。小学校のときに谷川村まで遠足に行ったもん。確か、浄水施設から圧力かけて水を押し出してるんだよね」

「へえ、そうなのか……、って、俺たちが水道を使えるつてことはその浄水施設が動いてるつてことか」

「そういうことだ」

「ぶっちゃけ、ダムから水が垂れ流されてるのかと思ってた」

「……直以の誤解が訂正できてよかったよ。まあ、とにかくここからしばらく上流に行った谷川村には浄水施設がある」

「浄水施設は動いている。動いているからには電気があって人がいる……」

「谷川村にはダムに併設した水力発電があつたはずだ。おそらくそれが動いているのだろっ」

「谷川村は田舎だからゾンビもあんまりいなかったのかなあ？」

梨子は3度俺の身体によじ登ってくる。

「それで、谷川村の人に水力発電で作った電気を分けてくれって頼むのか？」

「なにも電気だけではない。この酷暑だ。ダムの水位が下がれば今まで使えていた水道も止められるかもしれない。水は、食料以上に我々の命綱だ」

「……けっこう俺たち、やばくないか？」

俺と雄太と聖、あと俺の上にいる梨子は同時に唸った。

「まあ、そうならないためにも手は打つつもりだ。明日にでも我々の使節団を谷川村に派遣する」

「誰が行くんだ？」

「各地区からひとりずつ。鈴宮市第一地区からは、臼井海斗が行く手はずになつている」

さりげなく俺たちと同じ1班になつている臼井先輩か。外交に活躍を期待つてところか。

「谷川村かあ。機会があつたら行ってみたいなあ」

「なんだ、梨子。谷川村に思い出でもあるのか？　そういえば遠足で行つたんだっけ？」

「えっと、ね。谷川村には私の友達がいるんだ。もう何年も会っていないんだけどね。ほら、私が飛行機事故で親を亡くしたのは知ってるでしょ？　そのときに生き残った子なんだよ。生存者のうち、ひとりは大入で、残りの3人は私も含めて子供だったんだけど、私だけ親戚に引き取られて、残りの2人は谷川村の児童養護施設に引

き取られたんだ」

「それはまたなかなかの縁だな」

「あつと……、ごめんなさい、自分の話しちゃって。ほら、聖お姉ちゃん、次つぎ！」

梨子は（俺の上で）居住まいを直し、聖に先を促した。

「ああ、梨子くんの話にも興味はあるが、とりあえずは3つ目の議題だ。最後に話し合われたのは、安全保障の問題だ」

俺たちは、残念ながら完璧な安全を確保しているとは言えない状態にあった。図らずも今朝倉小学校がゾンビの大群に襲われたように、だ。

そういうとき、どうするかが話し合われたのが3つ目の議題だった。

なにかしらの有事が起こった際の手順。各地区の提供義務兵力と指揮命令権の確認。交通、通信網の整備……。

「指揮命令権、ね。これはどうなったんだ？」

「うまくいったよ。指揮権は常に我々鈴宮市の第1地区に帰順することになっている」

俺たち、鈴宮市の第1地区は軍事的には一番優れていることになっている。理由は、朝倉市との戦争に勝利したことで、大量の銃器を所持しているからだ。

「その実態は銃もまともに撃ったこともない高校生の集まりなんだけどなあ」

「なに、運動不足の社会人よりはまだ若い高校生のほうが動けるし、銃を撃ったことがないのなら、日本人である以上、ほぼ同条件だ」

「ものは言い様だな」

「それより直以、きみは長戸市の連中と対峙したらしいな」

「……まあ、な」

俺は顔を伏せて霧島明俊に会ったときのことを話した。

「ほう、ここでこの名を聞くとは、な」

「馬鹿聖が。おまえ、いろんなところで敵作っているみたいだぞ」

「その霧島ってのは、どんな人なんだ？」

「なに、取るに足らない小人だよ。頭の回転はそれなりだが、あの男は精神的に弱い」

それは、俺にも理解できた。なにしろ自分に異を唱えただけで女を殴るようなやつだからだ。

俺は、顔を伏せたまま聖に聞いた。

「……原田美紀は知ってるか？」

「原田美紀？ さて、誰だったかな」

「霧島の乳母兄妹とか言っていたな。実質的な指揮は彼女が執っていたみたいだった」

「ああ、そういえばいたな。私の印象としては霧島の指示を言葉どおりに実行するだけのイメージしかないな」

「……」

俺は、梨子が転げ落ちるのも構わずに無言で立ち上がった。そのまま無言でドアに向かう。

「……直以、なにか気に障ることも私は言ったか？」

「別に、そんなんじゃないやねえよ。少し屋上で涼んでくる」

俺は振り返らないままドアを開けて図書室を出た。

川から吹き付けた風が俺の頬を撫でた。

鈴宮高校の裏手には川が流れている。これのおかげで、この辺りは都市部より大分涼しくなっていた。

俺は屋上で柵に寄りかかりながら天上を見上げた。

そこには、他を圧するでかい月が浮かんでいた。

「直以」

呼ばれて視線を下ろすと、そこには雄太がいた。

「ほら」

雄太は俺に缶コーヒーを渡してきた。今となってはなかなかの貴重品だ。

俺は礼を言つて缶コーヒーを一口飲んだ。もはや、懐かしさを感じる人口甘味が口の中に広がった。

雄太は俺と同じよう柵に寄りかかって月を見上げた。俺も月を見上げる。

男2人で、しばらくの間無言で月を見上げた。

「……聞かないのか？」

雄太は俺の質問に逆に聞き返してくる。

「話せることなのか？」

「……わからん。理解してもらえとは思わないけど」

「じゃあ話せよ。聞き役になってやるから」

「……最後まで聞けよ」

俺は、雄太に視線を向けないまま、独り言のように話した。

と。
原田美紀に邂逅したこと、思ったこと、そして今、想っていること。

口にするには頭にあることを整理しなくてはならない。俺は、ひと言ひと言を選びながら吐き出した。

「それは……なかなかの偏執狂フリックだな」

「言つな。自分でもわかつてるんだから」

俺はコーヒーを飲み干すと、缶を握りつぶした。指の先まで血液が行き渡るのを感じる。疼きが、抑えられない。

「まあ、俺としては変な色恋沙汰じゃなくて少しだけ安心したよ」

「なんでだよ？」

「おまえが変な女に引つかかったら聖と梨子が大変そうだ」

雄太は視線を俺に向けて苦笑を浮かべた。

「先月、おまえが朝倉市から帰ってこなくて、かなりきつい目にあつただぜ。今回も同じ目に遭わないってだけで俺はいいや」

「なんだよ。なんかアドバイスみたいなのはいいのか？」

「ないよ。せいぜい勝手に苦しめ」

「……俺はいい親友を持ったな」

「どっちにしても、長戸市とは揉めることになりそうか？」

「ああ、それも近いうちにな」

俺は、思い切り柵に寄りかかって空を見上げた。

そこには、威圧的な月が美笑を浮かべていた。

俺は、苦笑を浮かべて、月を睨み返した。

長戸市の行動は早かった。

翌日、朝倉市の地区から長戸市の連中に拠点が襲われていると援軍要請があつたのだ。

こうして、長戸市との戦争は、宣戦布告もなく、静かに幕を開けた。

せいぜい勝手に苦しめ（後書き）

どうも、前話では失礼をしました。ええ、調子に乗りすぎたようです。

お気に入りがばらばらと減りました・・・。

緊要地形

「くっそお！ またかよ」

外気が40度を超えようかという8月、健司は荒らされた施設を見て怒鳴った。

「……これで3回目、か」

長戸市は、幾度となく朝倉市の地区を襲撃していた。

俺たちはその度に出張ってきていたが、未だに正面からの軍事的衝突はなかった。

俺たちが到着する前に、長戸市の兵は撤退を完了しているからだ。

最初の1回目、肩透かしを喰らった俺たちは素直に鈴宮高校に帰った。

その翌日には長戸市は別の地区を襲撃。今度は俺たちは朝倉市に残り、長門市の再襲撃を警戒した。

だが、7日ほど滞在した期間、長戸市の襲撃はなかった。俺たちはしぶしぶ鈴宮高校に帰還した。それが、昨日だ。

そして3度目の襲撃を受けたのは今日。俺たちが朝倉市から撤退した翌日の行動だった。

「完っ全に情報力で負けてるな」

長戸市の連中は、食料を略奪し、施設を破壊し、抵抗する市民を殺していった。やっていることはまるつきり野盗だが、やられるほうとしてはこれほどの嫌がらせもない。

低俗ではあるが、効果的な戦略だった。

「直以、そろそろいい加減、なんとかしてよね」

麻理はそう言って俺に詰め寄る。

「おや、伊草麻里は嫌いな直以に頼るのか。やれやれ、程度の低い

ことだな。自分でなんとかしようとは思わないのかね？」

「私は直以に従ってここまで来てるの。直以には、わ・た・し・に！ 答える義務があるのよ」

そう麻理に言い返されて聖は言葉を詰まらせた。なかなか珍しい光景だ。あの聖が言い負かされるとは。よく考えもせずに無駄に食って掛かったりするからだ。

「だけど、そろそろなんとかしないとまずいな。直以」

「ああ、わかつてる」

俺は大地に頷いた。

長戸市の脅威にさらされている地区はろくに仕事もできず、ただ脅えていた。自分たちに危害を加える人間の存在は、ある意味ゾンビ以上に深刻な問題だった。

俺たち援軍に来るものも、必要ではあるが手ごたえのない受動的な状態にダレが始めている。

最初の援軍要請のときは、俺たち鈴宮市の2組と4組、合計100人に加えて他地区から300人ほどの総出で駆けつけていた。だが、今は2組と麻理たち3班の60人に、他地区からの150人ほどに減っている。

自分たちが駆けつけてもそのときには長戸市は撤退している。それならばわざわざ来る必要はないんじゃないか？

そういう空気がちらほらと出始めているのだ。

この空気が増し、援軍の数がさらに減ったときに長戸市は洋々と俺たちの撃破に動くだろう。そのときには、須藤先輩の進めてきた鈴宮市と朝倉市の連合体は崩壊し、長戸市に各固撃破されるのを待つだけになるのだ。

そうならないためにも、今、手を打っておく必要があった。

そして、俺はそのために聖を連れてきた。

俺は聖を見た。聖は横にいる梨子を見た。梨子は俺を見ると、俺の前に朝倉市と長戸市の載っている白地図を広げた。

……一応断っておこう。今回の援軍には梨子も参加している。

「別に直以お兄ちゃんについてきたんじゃないもん。聖お姉ちゃんについてきたんだもん」

とは梨子の談。なんでも一週間ぶりに戻ってきた俺が日も置かずに出張るのがおむずかりだったらしい。

まあ、連れて行く連れて行かないでひと悶着はあった。結果は、梨子がここにいることでお察しただきたい。

俺の前に広げられた白地図に、その場にいる全員が集まる。具体的に言うなら、大地と2組の各班長に各地区から兵隊連れてきた代表たち。あとは、俺、紅、聖、麻里、それと梨子だ。

「簡単にまとめるのなら、朝倉市の各地区は長戸市からの兵に度々襲撃を受けている。長戸市の兵は我々を避け、ヒットアンドアウェイで攻めている。我々は、なんとか長戸市の兵を捕捉し、撃破しなければならぬ」

「孫子には『上兵は謀を伐つ』とあり、『兵を伐つ』のは下策であるとしています。なにか他の手段はないものでしょうか？」

俺の隣にいる紅がそう言うと、聖の隣にいる梨子は、なぜか紅を睨んだ。梨子も最近孫子を勉強しているから、自分が言いたかったのかも知れない。

「ふむ、直以。どう思う？」

「おまえの言い方が悪かったんだよ。ここで言う『謀』とは、長戸市のヒットアンドアウェイ戦略だ。俺たちは、長戸市の『兵』を伐つんじゃないくて、長戸市の戦略を伐つんだ」

「なるほど、理解しました」

紅は素直に引き下がる。梨子はというと、頬を膨らませて今度は俺を睨んでいた。

「それでは少し言い方を変えようか。我々は、いかに長戸市の戦略を阻止するか」

「言い方変えたって同じだろ。要はどうやって敵を倒すか、なんだから」

健司がそう言うと、周りから同意の相槌が起こる。まあ、そう考えるのがわかりやすいよな。

「じゃあどうやって？」

麻理がそう言うと、相槌を打っていた連中は揃って黙った。それを引き継ぐように大地が発言する。

「どこかに、罨でも張るか？」

「いや、難しいな。情報力で負けている今、罨を張ってもばれるだろう」

「ばれてもいい罨。ううん、長戸市が見過ごせない行動……」

梨子が呟くように言う。

「梨子くん、長戸市が見過ごせない行動とは？」

「え？ えっと……。その、わかりません」

梨子は下を向いて押し黙る。俺は、一押しした。

「梨子、思いついたことを言ってみるよ。俺たちは、全員が素人だ。専門的な解決法なんて誰も思いつかないんだから」

梨子は、俺の顔を見ると人差し指を下唇に当ててぽつりぽつりと話し始めた。

「えっと、長戸市はヒットアンドアウェイで、私たちが来る前に逃げる。じゃあ、逃げられないようにすればいいわけで……」

俺は聖を見た。聖も驚いた顔をしている。手探りではあるが、梨子の考えていることは、事前に俺と聖が話し合っていたことに近かった。

聖は、赤いマジックペンを取り出し、紅に渡した。

「紅くん、戦略上重要だと思つところにマジックで印をつけたまえ」「わかりました」

紅は白地図に迷つことなく印をつけていく。そこは、朝倉市の各

拠点だった。

「悪くない回答だ。拠点は長戸市が襲ってくる場所。長戸市が目標としていた場所だからな。梨子くん」

「ふえ、はい！」

梨子はひとりで物思いにふけつていたのを急に聖に引き戻された。

「長戸市の状況は今どうなっているのかな？」

「え？ それは、わからないよ」

聖は頷くと、長戸市の上に大きくxを描いた。

実は、長戸市がどれだけの規模なのか、どこを拠点にしているのか、そういった具体的なことはわかっていない。ぶっちゃけるのなら、なんで長戸市は俺たちに喧嘩を売っているのすらわかっていないのだ。それらのことは全部、今、雄太が2班を引き連れて調査中だ。

この戦争がどれだけ俺たちにとって受動的かつてことだ。

「伊草麻理。きみは緊要地形を知っているかな？」

「牧原聖。あんたも私にくんとかさんをつけなさいよ。えっと、緊要地？ 英語訳は？」

「クリティカルトレイン、だったかな」

「ああ。もちろん知ってる。ミリシアで習ったわ。え〜つと、港とか空港とか、他には道路が集まる場所とか、射撃が容易な場所。簡単に言うなら、軍事的に重要な地形ってところかしらね」

「この地図でいうと？」

麻理は聖からマジックを受け取り、地図を見下ろした。そして、固まる。

「伊草、どうしたんだ？」

大地に肩を揺すられ、麻理は我に帰った。

「ああ、ごめんなさい。まさか、こんなのが言われるまで気付かないなんてね」

麻理は、地図の1点に大きな丸を書いた。

そこは、長戸市と朝倉市の間にかかる、長大な橋だった。

「……周防橋？」

「そう。長戸市と朝倉市の間架かるこの橋を押さえれば長戸市の兵は行き来が困難になり行動を阻害される。この橋を使わなければ、近くても10キロ下流の橋を使わなければいけないからね」

「橋を押さえる、か。うん、わかった。早速確保に向かおう。健司、先遣部隊としてすぐにでも出発してくれ」

大地の言葉を合図に会議は終わり、各々は行動を開始する。

「……やっぱり、統率力では俺は大地に敵わないな」

俺の独り言を隣にいた紅は聞きとめる。

「なんでそう思うんです？」

「俺がここの連中をまとめようと思っても従ってくれないだろう。」

大地だから青二才の俺たちに朝倉市の兵は従ってくれてるんだよ」

「そうでしょうか？ 朝倉市が従っているのは、我々鈴宮市であり、木村先輩個人ではないと思いますけど」

「同じことだろ。同じ立場の大地に可能で俺には無理なんだから」

「いえ、私が言いたいのは、直以先輩にも衆をまとめる能力があるという……」

「身びいきにもなっていないよ。俺が人を使うのが下手なのはおまえだつて知ってるはずだろ。聖！」

俺は紅との会話を打ち切って聖に話しかけた。

「俺たちは予定通り行動する。おまえは後からゆっくり来いよ」

「うむ。だが、現在に至っても状況不明は続いている。無理だけはしないでくれよ」

「ああ、わかってる」

「直以お兄ちゃん」

「悪い、梨子。ちょっと待ってくれ。麻理！」

俺は話割り込んできた梨子を退かし、麻理に話しかけた。

「班をすぐにまとめてくれ。俺たちもすぐに出発するぞ」

「ええ、わかったわ。門倉の班と一緒に行動するの？」

「いや。向かう先は周防橋だけど別行動を取る。目的は行軍途中で

説明するよ」

俺は麻理と2、3の打ち合わせをすると紅を見た。

「俺は麻理たちとすぐに出発するけど紅はどうする？」

「直以先輩に同行します」

「わかった。それじゃあすぐに出発できるように準備してくれ。よっし、梨子、待たせたけどなんだ？」

梨子は思いきりふくれっ面を作ると俺を睨んできた。

「なんでもありません！」

「？ そっか」

梨子は肩を怒らせて俺に背中を向けて歩いていった。その背中を、紅が追いかけていった。

「……直以。少しは梨子くんにも気を使ってやってくれ」

「なんだ、聖。雄太みたいなこといいやがって。ものには優先順位があるだろう。今は梨子になんてかまってるられねえよ」

「ここ最近はお出張続きだったし、確かに最近はおざなりにしてきたかもしれない。」

だが、今の俺の胸を占めるのは、美笑を浮かべる女だった。

周防橋は、朝倉市と長戸市の間にかかる、橋長1500メートル、幅50メートルの大橋だ。

先遣隊として到着した健司たちは、後続の部隊が到着するまで朝倉市側の橋の麓に陣取った。

だが、真夏の炎天下に加えて遮るものない陽光の真下だ。健司

たちがダレるのも早かった。

先遣隊の兵数は健司たちの班と各地区から派遣された兵の一部で、合計するなら40人といったところだった。

その部隊は、気付いたときには囲まれていた。

右、左、後ろ。等間隔、等速度で迫る長戸市の兵に、健司たちは慌てて乗ってきた車を並べてバリケードを作った。その車に容赦なくショットガンが撃ち込まれる。

「門倉先輩たち、防戦一方ですね」

「虚を突かれちゃったからなあ。落ち着けばそんなに数がないことはわかるだろうに」

3方から攻め込まれてはいいるものの、長戸市の兵はそれほどの数ではない。

それを観察する俺たちは、健司たちを包囲する長戸市の兵の、さらに外側にいた。

朝倉市と長戸市の間にかかる周防橋は軍事上重要な意味を持つ緊要地形だ。それは、なにも朝倉市に限ったことではない。長戸市にとっても重要なのだ。

案の定長戸市は伏兵を配置していた。俺たちの先遣部隊を一気に殲滅した後から来る本軍に備えるつもりだったのだろう。

「そう簡単に思い通りにさせたら失望されちまうよな」

俺は戈を肩に担いで隆介の運転するバイクのタンデムに跨った。

「よっし、俺たちは長戸市のやつらを叩く。一気に刈り取るぞ！」
周りから喚声があがる。俺たちは、健司たちに奇襲をかけた長戸市の兵に奇襲をかけるのだ。健司たちには囷になってもらったが、まあ勘弁してもらおう。

俺は隆介の肩を叩いた。隆介を先頭に、俺たちは一直線に敵に突っ込んだ。

長戸市の兵はショットガンで健司たちを牽制しながら前進。ゆくりと距離を詰め、間合いに入ったら一気に接近戦で決着をつける、という戦法を取っていた。乱戦になればやくざである自分たちに分があると思っっているのだろう。

だが、その戦法は俺たちの参入により簡単に崩れ去った。

俺たちに突っ込まれた一隊は、一撃で崩壊した。まさに、射撃戦から接近戦に移行しようとした瞬間に、背後から複数の車両に突っ込まれたのだ。

俺は、Uターンするバイクの慣性に任せて戈を振るった。長戸市の兵が持つショットガンが握った腕ごと中空に飛んでいった。

「よっしゃ！ 次行きましよう」

「おう、次……、次？」

俺は周りを見渡した。次は、いなかった。

俺たちが攻撃したのは、健司たちが橋に向かって、真後ろにいた部隊。残りは右と左の2部隊がいるはずだった。だが、いなかった。すでに、撤収していたのだ。

「敵さん、逃げたみたいですね」

長戸市の奇襲部隊は、俺たちが攻撃した部隊を残してさっさと撤収していた。救援も援軍もなしに、だ。

「形勢が不利になれば躊躇せずに退却、か。やるじゃない」

いつの間にか来た麻理が俺の隣に立つ。

すでに、戦闘は完全に終息していた。

「ああ、綺麗な引き際だな」

俺たちは健司たちと合流し、橋の先を見た。長戸市の残兵の姿が、小さく見えた。

そして、さらにその先には、俺の想い人がいた。

まだ前哨戦でしょうか？ そんなにがつつかないの

そう言っているように、美紀さんは遠くから俺に美笑を向けた。

「……さすが大人の女性。焦らしがうまいね」
俺は、美紀さんに答えるように、戈を頭上に持ち上げて、一振りした。

緊要地形（後書き）

不完全燃焼が続きました。

次は、つぎこそはまともなアクションシーンを書こうと思います！

お友達ファイル14〜20（本編ではありません）

お友達ファイル14

はやしだりゆうすけ

林田隆介

鈴宮高校1年で梨子と同じクラス。

眉毛まで金に染める不良。だが、実は朝夕に新聞配達をこなす勤労少年でもある。お友達は少ないです。頭を使うのは苦手。

入学早々、その見た目から上級生のロクデナシどもに目を付けられる。返り討ちにするときにやりすぎて停学処分になる。

停学開きの初日にゾンビ発生。そのときに直以に助けられて信者になる。

ぶつちやけます。誰だよこいつ！ 即興で作った隆介のせいで、梨子とのデートやら晴美の実家やら、それと戈を使うイベントはぼしやりました。伏線未回収、格好悪い……。

ただ、ストーリーによる縛りがなかったため、めちやくちゃ動かしやすいキャラ。こういうのが増えると身動きとれなくなるので気をつけなければ。

お友達ファイル15

はせせくろしゅうこ

支倉涼子

テンプレ剣道少女にして大地ハーレムのひとり。

茶道、華道、剣道から書道、日本舞踊までこなす才女。

小さい頃から習い事漬けで、箸の置き方に至るまで規則に縛られて育つ。

そんな自分とは反対に、奔放に行動し、その上で事態をつまくまためていく天才肌の須藤清良に密かにライバル心を抱いていた。

ゾンビ発生後は、人望もあり、見るからに頼りになる大地を支持す

るようになる。

崩壊した世界、その中では今まで従ってきた規則に捕らわれる必要はなく、自由に振舞っていいと認識する。

あまりに影の薄い大地派の補強のために登場させたキャラ。

バトルマニア（戦闘狂）。

お友達ファイル16

きりしまあきとし

霧島明俊

長門市のナンバー2で参謀役。

聖と同じメンサの会員。親は長戸市の名士で高校まではお坊ちゃん
で順風満帆に過ごす。

だが、大学受験に失敗。初めての挫折に加えて親にも見限られ、乳
母兄妹の原田美紀を引き連れて裏社会デビュー。頭の切れもあり、
頭角を表す。

ゾンビ発生後はいち早くやくざ連中をまとめることに成功し、長戸
市の互助団体を形成する。

趣味は部屋にピタゴラススイッチを作ること。以前、無遠慮に入っ
てきた彼女に完成間近のピタゴラススイッチを壊され大喧嘩。「私とピ
タゴラススイッチとどっちが大切なの？」と言われて小さな声で「ピ
タゴラススイッチ」と返答、ぶん殴られた経験あり。

明俊は完璧主義者であり、細部に至るまで自分の手が加わっていない
と気がすまない。余計なことにまで口を出して余計な反感を買っ
ているが、それをうまくまとめているのが美紀であることに気付い
ていない。

お友達ファイル17

はらたみき

原田美紀

長戸市の実質的統率者。明俊の乳母兄妹。直以の「敵」。年齢不詳。原田家は名家である霧島家の分家筋に当たり、代々補佐してきた家柄。美紀は、その古臭いしきたりの中、明俊に生涯仕えるように教育されて育つ。

美紀が高校生るときに明俊は大学受験に失敗。美紀は高校を中退させられ、明俊と共に裏社会に入る。美紀はこのとき、家の古臭い因習に従って明俊に従ったのではなく、それを断ち切るために従った。以後、美紀は明俊の影から行動を支えるようになる。

明俊は美紀のことを絶対的服従者だと思っているが、美紀は明俊のことをビジネスパートナーだと思っている。

明俊の立てた計画を細部に至るまで実行するのが、美紀の仕事。表向きは明俊に従う。その実、明俊には自分の有用性を示しつつ、周りの連中には実質的には誰が仕切っているのかを示し、ゾンビ発生後もそれは成功している。

美紀はマキャベリストであり、そこが孫子を標榜する直以と敵対する機軸になる。

孫子とマキャベリが対立しているという言い過ぎになりますが、異なる部分が多々あります。美紀はそういった戦略性の相違で、敵として、そして味方として直以と対峙することになります。

お友達ファイル18
うすいかいと
臼井海斗

3年の美青年。主に外交担当。

小学校からの須藤清良の同級生で、小6、中1、中3と高2のときに清良に告白して振られている。以前は同じ同級生であり、清良の傍にいる荒瀬を目の仇にしていた（実は清良が煽っていた）が、今

は和解。荒瀬の数少ない友人になっている。視点を变えれば主役級の活躍をしているが、直以とは絡みが少ないために出番の少ないキャラ。

お友達ファイル19

しまだはるき
島田春樹

鈴宮高校（鈴宮市第1地区）で大人連中をまとめるおいちゃん。年齢不詳。

以前は中小企業の副工場長で心意気の人。ゾンビ発生後は工場に立て籠もり奮戦。少しずつ近場の生存者や職場の家族などを保護している途中で鈴宮高校に籠る直以たちと合流。最近はちょこまかといろいろなところに出没する梨子に夢中。あんな娘が欲しかったなああとひとりため息を吐く日々を送っている。・
・家族に娘がいるかどうかは不明。

お友達ファイル20

まつむらちから
松村力

元機動隊員。赤木の部下だったが、赤木の自殺後、遺言に従って直以の陪臣のようになる。目の前のことには常に全力で当たるタイプ。小学校から柔道を始め、大会で好成績を残して活躍。父親が警察官だったこともあり、その流れで自然と警察官への道を歩むことになった。

今までの人生経験では、選択肢は常に優良なものが提示されており、一から自分の人生を選ぶことも、また、その必要もなかった。直以に従っている理由の半分はそうだった流れによるもの。残りの半分は直以に対する興味によるもの。荒地の戦いで直以の活躍に加え、そのとき、実は弟が直以に助けられている（支倉涼子

に殺されそうになっていた人)。

それから直以に興味を持ち、値踏みするようになる。

一方で直以から自分が信頼されていないことも知っており、それを勝ち取れることを当面の目標としている。

今は、朝倉市の第1地区の警備を担当している。

密かに隆介に対抗意識を燃やされている。

周防橋の戦い 1

炎暑に立ち上る陽炎の向こう側でコンクリートの橋が揺らめいた。俺たち、鈴宮朝倉連合は長戸市の兵と1500メートルの周防橋を挟んで対峙していた。

「……暑いな、っ痛え！」

俺の隣に立つ伊草麻里は、俺が言い終わるか終わらないかのタイミングで、俺に拳を叩き込んできた。

「なにすんだ！」

「みんな暑いんだから暑いってゆーんじゃないわよ！」

「おまえのほうが暑いって言うてるだろうが！」

俺たちはしばらく猫の喧嘩のように威嚇し合うが、余計暑くなることに間を置かず気付き、お互い黙った。

「……あいつら、まだ増えてるな」

「……ええ、もう500人は超えたんじゃない？」

俺たちと対峙する長戸市の兵は、日を追う毎に数を増やしていった。それに伴って俺たちも兵員を増強していく。

「まるで、不毛な軍拡競争だな」

「同感。他にやることなんて山ほどあるのに、なにやってんのかしらね、私たち」

俺たちは同時にため息を吐き、すでにお湯と化しているペットボトルの水を飲んだ。

すでに両軍が橋を挟んで対峙してから3日が過ぎている。その間、軍事的衝突は一度もなかった。

「ねえ、直以。そろそろこっちから動いたらどう？ 私に任せれば

あいつらをここまで引き込んであげるわよ」

「却下。無駄に挑発はしなくていい。逆にこっちが足を掬われることになるぞ」

「じゃあいつまでここにいればいいのよ！」
「後ろの大地たちの準備が終わるまで」

俺たちの目的は、長戸市の朝倉市に対する略奪阻止だ。

俺たちがここにいる間は、長戸市の行動は阻害され、一応の目的を達成しているともいえる。

だが、さすがにいつまでもここに、しかもこの炎天下の中、陣取っているわけにはいかない。

そこで、俺たちはここに監視塔代わりの砦を作って一度引こう、ということになった。

砦で長戸市の行き来を監視、攻めてきたら無線で後方に連絡、迎撃する。無線で連絡するときにゾンビも呼び出して長戸市の連中にぶつけてやるうって計画だ。

幸いにして、砦の元となる建物は廃ビルとして後ろにごろごろしている。大地たちが、近隣のゾンビの掃討と建物の防御強化をしている最中だった。

……もつとも、こうして両軍が大多数の兵を引き連れて対峙してしまえば、後ろの砦も大した意味はなかった。

俺たちが引き上げた途端、砦は破壊されるだろうし、長戸市の連中にしても自分たちが引いたら、俺たちが一気に長門市内に突入するかもしれないと考えていることだろう。

お互い引くに引けない状態、なるほど、これ以上の不毛な状況はなかった。

どうあっても一度は兵をお互いにぶつけ合わせる必要がありそうだった。

俺は額の汗を拭った。一応日差し避けの簡易テントの下ではあるが、大した効果があるとは思えなかった。

目の前には車やら粗大ごみやらを並べて作った簡易バリケードが

ある。

そのバリケードに、どこからか飛んできた蝉が止まった。生き急ぐ蝉の鳴き声が余計に俺たちの神経を逆撫でした。

「直以先輩、俺、そろそろ限界っすよ」

隆介が情けない声を上げる。げっそりやつれた金髪男は、汗すら掻かずに荒い息を吐いていた。

「あ、暑くふああ！」

暑いと言い掛けた隆介は俺と麻理に同時に殴られ、白目を剥いて焼けたアスファルトの上に倒れた。

「きついのは向こうだって同じだろうけどなあ」

俺は鉄のように熱せられたバードウォッチ用の双眼鏡で橋の向こうを見た。

炎天の中、長戸市の兵は喘ぎながらも整列している。

「あ、もう直以先輩！ いっそのことこっちから攻めましょうよ！ これ以上じっとしていたらこっちが参っちゃいますって」

隆介は暑さに焦れたのか勢いよく立ち上がってわめきだす。なかなかタフなやつだ。

「……無理だろ。あいつら見てみるよ」

俺は双眼鏡を覗いたまま、長戸市の兵を指差した。隙無くぎつしり並ぶ姿は、どこかの刑務所かあるいは小学校の校庭か。

大した統率力だ。寄せ集めの俺たちでは正面から攻めていっても簡単に返り討ちに遭いそうだ。

組織としてのやくざがどれだけ優れているかが窺える。

俺としてはこちらから向こうの防備に攻撃を仕掛けるより、向こうからこちらに不利な体勢で攻撃を仕掛けてくれるのがベターだ。

ベストは、向こうが黙って引き上げてくれること……、いや、俺的にはそれはベストではないか。

美紀さんと激しく求め合う機会が減ることになるのだから。

俺は双眼鏡を横にずらした。

そこでは、長戸市の統率者である涼やかなドレスを着た女性がお茶を楽しんでいた。日陰の中、うちわで扇がれている姿はどこかの貴族様のような。長戸市が序列のある身分制度の団体だと如実に表しているようだった。

「ったく、女つてのは欲深いなあ。こつちから動けつてののか？」

美紀さんは、俺に軽くティーカップを掲げて見せる。

「あに見てんのよ」

俺は、双眼鏡を麻理に渡した。

「……うっわ、うらやましい。どこの貴族さまよ。あれが長戸市のボス？」

「ああ。あ、いや、違う。ボスはその隣の男だ」

俺は、美紀さんの隣でわめき散らしている白いスーツの男を見た。その動作と格好は、肉眼でも確認できるほど目立っていた。

実質的なボスは美紀さんでも、形式的なボスはいつ、霧島明俊になるのだろう。

俺は双眼鏡を麻理から返してもらい、再び俺の想い人を見た。

彼女は、苦笑を浮かべ、ティースプーンで自分のボスを指し示していた。

「……進展があつたことを喜ぶべきか、俺と美紀さんとの聖戦が汚されたことに憤るべきか」

俺は、双眼鏡から目を離して言った。

「麻理、隆介。準備しろ。そろそろ来るぞ」

周防橋の戦い2

立ち昇る陽炎にシンクロするように、橋が揺れた。

ジープが横一列になって、こっちに突っ込んできたのだ。

「まあ、セオリーどおりかな。これなら対策はある」

俺は後方にいる大地たちに援軍を要請し、麻理たちに襲撃に備えるように指示を出した。

炎暑の中、多少ダレはあるものの、予定通り部隊は展開していく。ただ暑さに耐えてじっとしているのよりはマシ、ってところか。

迫るジープ。やかましくがなり立てるエンジン音が俺たちを無駄に威圧する。

このままいけばジープは俺たちの前にある申し訳程度のバリケードを易々と突破し、そのまま俺たちを蹂躪することになるだろう。

「直以！」

「大丈夫だ。このまま待機！」

ジープはすでに運転手の顔が確認できる距離まで迫っている。後部座席にはドスやら日本刀で武装したやくざが舌なめずりをしている。

ジープはさらに迫る。運転手は、最後の追い込みとばかりにアクセルを全開にした。

途端、横一列に並んでいたジープが一斉に転倒した。

一台はスピンして横のジープに衝突。一台は片輪を持ち上げてそ

のまま横滑りして橋から落ちていく。正面から回転して仰向けになった亀のように天井を地面につけるジープもあった。

「……これは、予想以上だな」
俺は感嘆した。長戸市のジープは、俺たちの設置した罠を踏んだのだ。

前方に設置されるのは火薬を詰めた地雷、撒きビシ、他にも対朝倉市用に開発した針金の車避けなんてのもあった。これに引っかかったジープは、車軸に針金を絡ませて運が良くて停止、悪ければ方向性を失って他のジープやガードレールにぶつかっていた。

長戸市の先陣部隊は、俺たちのバリケードに到達する前に大混乱に陥っていた。

「よし、後続が来る前に一気に殲滅するぞ」
俺たちはバリケードをどかし（それができるように簡易にしている）、出撃した。

俺も戈を持って前に出ようとす。
だが、それを止める影があった。

聖だ。

大地たちへの援軍要請を聞きつけてここまで来たのだろう。隣には梨子もいた。

「直以、どうやら始まったようだな」

「ああ。聖、梨子。おまえらは下がっている」

「直以お兄ちゃんはどうするの？」

「俺は前に入る」

俺は、聖の横を通り過ぎようとした。が、聖は俺の肩に手を置き、

梨子は俺の肘を押さえて止めた。

「……なんだよ」

「直以、きみまで前に出ることはない。きみはこの指揮官である以上、少し下がった位置で指揮を取るべきだ」

「そんなことできるわけないだろ！」

「おや、なぜだい？」

わざと焦らすような聖の言い方。まったく、時間のないときに。

「俺が率先して動かないと周りがついて来ないからだよ」

バスケット部のおかげからそうだった。先輩でも同級生でも後輩でも、口で言っただけでは誰も俺について来なかった。リーダーシップを發揮するには、規範が必要なのだ。

「直以の言ったことには真理が含まれているな。だが、一面を捉えているに過ぎない。きみは、これから起こる全てのことにひとりで対処する気かい？」

聖は正面から俺の目を見据えてきた。

「なに、規範なら他の人間が示してくれるよ。……私にとっては極めて不愉快なことながら伊草麻理などがね」

俺は舌打ちして視線を聖から逸らした。

戦場を見つめる。すでに粗方の戦闘は終わっていた。

長戸市の兵は多くが罾のシヨックで大した抵抗もできずに捕虜になり、車外に出て抵抗する連中も組織的な行動をとれずに朝倉市の兵によって制圧されていた。

俺の出る幕は、確かになかった。

「……梨子、捕虜と負傷兵を後ろに送る手はずを整えて。できるか？」

「う、うん　すぐに始めるね」

梨子は、なにが嬉しいのか小躍りするように去って行った。なん

だ、あいつ。

俺は、戦闘がひと段落するのを待って聖に聞いた。

「聖、おまえは俺になにをさせたいんだ？」

「直以、きみはやくざの統率力を過大評価しているようだね」

質問に答えずに側面から切り込んでくるのはこいつの悪い癖だ。

「……ああ、朝倉小学校でのゾンビ掃討といい、今といい、すごいと思う」

「私に言わせれば、あいつらの指揮統率などはお山の大将ってところだよ。私に言わせれば、だがね」

「どういう意味だよ」

「暴力で従え、望まぬことを強制するなんてのは山賊レベルだって話さ。そんなものが通じるのはせいぜいが100人、大声を張り上げて届く範囲までさ」

「耳が痛いな。大声上げて無理やり兵を動かすなんてのは、まんま俺のやり方じゃねえか」

「そうだね、直以。だけど、私は、直以がお山の大将レベルで満足してもらっては困るのだよ」

聖は、慈愛すら感じられる表情で白い指を俺の頬に当てた。ひんやりとした感触は、一瞬で全身を覆った。

俺は圧倒されそうになる感情から聖の手を払って逃れた。

「ちよつと前まで落ちこぼれてた高校生になにを望んでいるんだか」「以前なにをやっていたのかなんて、まるつきり関係のないことだよ。スタートラインは同じさ。大人も子供も。男だろうが女だろうがね」

「直以せんぱい、こつちはだいたい終わったつすよ」

そのとき聞こえた隆介の声で、聖の呪縛から俺は逃れた。

「あ、ああ。わかった。悪いがもう少し頑張ってくれ。大地たちが

来たら交代させるから。罨の再設置して、ジープは可能な限り端に寄せて視界を確保してくれ」

「ういゝっす！」

俺は口頭だけで指示を出す。周りのみんなは、それだけでも俺に従ってくれていた。

聖は細い指で俺の肩を撫でた。

「まあ、早く慣れることだね。それと自分を過小評価しないことだ。はつきり言っておくが、今のままでは……」

聖は、わざとらしく一度言葉を切った。

「原田美紀には勝てないぞ」

俺は聖に向き直った。してやったり顔の聖は、笑いをかみ殺している。

「……雄太か？」

「ああ。梨子さんと2人で詰め寄って白状させた」

「なんか前にもこんなことあったな。俺、なんか女性不審になりそうだ」

「おや、嬉しいね。私を女と見てくれるのか？」

「なんだ、女として見て欲しいのか？」

聖は、言葉を詰まらせて顔を赤くした。してやったりだ。聖には最近やり込められてばかりだったからな。

「わ、私は！ 私は、女としても（・）見て欲しいのだよ」

「聖、そこまでだ」

俺は聖の言葉を遮り、双眼鏡で長戸市の連中を見た。なにやら動きがある。

「……第2派か？」

以前と変わらずめき散らしている霧島。以前と違ったのは、美紀さんが霧島の横に立って色々指示を出していることだった。

美紀さんは、俺が見ていることに気付いたのか、手で鉄砲を作っ

てこちらに向けてきた。

武者震いってやつだろうか、軽く身震いがする。

俺の想い人は、ようやく俺に向き合ってくれるのか。

「直以、きみは存分に楽しむといい。霧島明俊は私が引き受けよう」

「ああ、頼むぜ。相棒」

俺がそう言くと、聖は形のいい眉を上げて満面の笑顔を作った。

俺も自然に笑みが浮かぶ。

俺は聖に拳を突き出した。

聖は、勢いよく俺の拳に自分の拳をぶつけた。

周防橋の戦い3

複数の車が橋を渡ってくる。

第1派との違いは、車がジープではなくワンボックスカーであること。さらにその後ろには長戸市の兵が前進してきていること、だ。いや、違いはもうひとつあった。

ワンボックスカーの進行方向がおかしい。隊列を揃えることなく、傾きながら向かってきている。

その理由はすぐにわかった。運転手が乗っていないのだ。おそらくハンドルとアクセルを固定しただけなのだろう。俺たちの設置した罠にかかるよりも早く、ある車は路側帯に乗り上げ、他の車はガードレールに側面をこすり付けて横転していた。

「わざと車を突っ込ませて罠を突破しようってことかな？」
「いや、それにしても効率が悪い」

聖の言うとおり、ワンボックスカーの半数以上が罠に辿り着く前に横転し、残りも第1派と同じように罠に引っ掛かり、簡易バリケードまで辿り着くことはなかった。

罠に引っかった車は長戸市の後続との距離もある。これなら罠を再設置する時間も十分だ。

敵の単純な作戦ミスか？ そう思った次の瞬間には、敵の作戦の目的が読めた。

ワンボックスカーの一台が罠にかかり横転し、そのままスピンして路肩で止まった。一拍の間を置いて、その車は炎上した。

橋が揺れるほどの轟音、その後が続いたのは、ゾンビだった。ワンボックス内に大量のゾンビを詰め込んでいたのだ。

他の車も同様だった。転倒したワンボックスカーから大量のゾン

ビが出てくる。

「直以先輩、あいつらどうしますか！」

「無視しろ！ 大丈夫だ。放っておいても問題ない」

俺はそう言ったが、そうは思わないやつもいた。その中のひとりが、ゾンビに向かって発砲した。

甲高い銃声と共にひとりのゾンビが倒れた。が、そのゾンビはすぐに立ち上がり、簡易バリケードに向かって歩いてきた。他のゾンビも同様だ。ゾンビたちは、一斉に俺たちに向かってきた。焦った他の部隊もゾンビに向かって発砲を始める。

俺は背筋に走った悪寒を吹き飛ばすために大声で叫んだ。

「やめろ、撃つな！ 麻理、すぐに射撃を中止させろ！」

麻理や隆介は必死で周りをまとめるために奔走した。その甲斐もあって射撃中止は1分もかからずに全部隊に行き渡った。

……手遅れではあったが。

一斉射撃に近い形で行われた発砲によってゾンビたちはほぼ全滅し、残りも銃を使わずに掃討された。

俺たちに実害は、まったくなかった。

「くっそ、俺の統率力の低さを露見したな」

「なあに、むこうはむしろ感心しているんじゃないか？ 一度は暴走したものの、短時間にうまくまとめあげるのに成功したんだから」

「そう誤認してくれるのならいいな。だが、問題は……」

「ああ、私たちが丸裸にされたことだ」

古今東西を問わず戦争の初動は情報戦によって行われる。

今回、俺たちはその情報戦によって常に後手に回っている。

そして、今回も、向こうのカードを知り得ないまま、こちらの手の内を暴露されてしまったのだ。

どんな種類の銃が何丁あるのか？

先の前哨戦で捕獲されたショットガンは何丁か？

それがどこにどう配置されているのか？

組織的な運営はしているのか？

銃の命中精度は？

そして、俺たちがどれだけ銃に慣れているのか？

それだけのことを美紀さんは、自分の兵をひとりも損なうことなく入手したわけだ。

逆に俺たちは相手に対するそれだけの情報をまったく知らない状態で戦うことになる。

「なかなかやるじゃないか。これなら私も退屈せずに済む」

聖はさもおかしそうにウェーブのかかった髪を後ろに払った。

「楽しんでいる場合か」

「いやいや、これを楽しまずになにを楽しむというんだい？ それで、直以。どうする？

部隊配置を組み直すかい？」

「……そんな暇はないようだ」

炎上する車の後ろから、長戸市の第3派が迫っているのが見える。

あれがおそらく本命だろう。

「聖、大地たちはまだか？」

「後ろの本陣で待機中だ。ここに兵を集めるかい？」

「いや、いい。そこにいてくれるんなら大丈夫だ」

俺たちがいる簡易バリケードのある場所を先陣とするなら、ここから100メートルほど後ろにある大地のいる場所が俺たちの本陣だ。

そこは、車を何台も並べた堅牢なバリケードを築いている。大型トラックに突っ込まれても早々は崩れないだろう。

「おや、直以。ひよつとしてもう後退を考えているのかい？」

「まさか。あまり早すぎても味気ない。せいぜい飽きられない程度には楽しんでもらおうさ」

俺は通信機で本陣に連絡を入れた。ちなみにこの通信機は携帯でも無線でもなく、有線でコードを本陣まで繋いだもの。

しばらくすると、受話器の向こう側から雑音交じりに少女の声が聞こえる。

「紅、そっちはどうだ？」

「直以先輩ですか。はい、こちらの準備はできています。すぐにでもそちらに駆けつけられますが、どうしますか？」

「いや、紅は大地のサポートを頼む。ちよつと大地に変わってくれ」
「……わかりました」

わずかな間を置いて紅は答え、代わりに大地の声が聞こえてきた。
「直以、そっちはどうなってる？」

「もうすぐ戦闘に入る。そっちで使っている銃や火薬棒をこっちにまわしてくれ」

「わかった。援軍は？」

「まだいい。それより怪我人が出たらすぐに後ろに送るから受け入れ態勢を整えていてくれ」

俺は、他にも2、3件大地と軽く打ち合わせた。

「直以、そろそろ来るぞ」

聖の言葉に俺は無言で頷き、通信機を切った。

俺は前方を見た。

ゆっくり走るジープを盾にゆっくりと接近してくる長戸市の兵。

俺は額の汗を拭った。

ふと見ると、足元で蝉が死んでいた。

周防橋の戦い 4

両軍が顔の確認できる距離で睨み合う。

一瞬、世界中から音が消え去る。

次の瞬間、ヒステリックな獣性が周防橋を覆った。

怒声、喚声を吐き出しながら長戸市の兵は一斉に駆け出す。

両翼からはショットガンによる射撃が簡易バリケードに傷をつけた。

「直以！」

「まだだ。もつと引きつける」

こっちは素人だ。遠くから撃ち合っても負ける。

俺たちは頭上を飛び越える散弾をバリケードの内側に籠ってやり過ぎた。

しばらくすると、ショットガンの銃声が止んだ。両軍の距離が近くなりすぎたために、同士討ちを避けたのだ。

それに合わせて長戸市の兵の喚声が大きくなった。

眼前の距離、すでに敵兵が歯茎を剥き出している表情まで見て取れる。

俺は、叫んだ。

「撃てえ！」

大気をつんざく甲高い音が響いた。が、それほどの轟音でも人間の持つ獣性をねじ伏せることはできなかった。

長戸市の兵は銃で撃たれた仲間を弾き飛ばし、バリケードに取り付いた。素手で鉄条網を引っ張り、もう片手に持つ日本刀を突き立ててくる。

鈴宮・朝倉連合軍は冷静に対処する。極至近距離から拳銃を乱射し、バリケードを直接飛び越えようとしてくる敵には火薬棒で迎撃する。

運良くそれらを避け、バリケードの内側に入り込んだ長戸市の兵は、今度は集団に取り囲まれて撲殺される。

火薬棒で肩を突かれた敵兵は、血肉を撒き散らして焼けたコンクリートに倒れ、ぶらさげるだけになった腕を必死に繋ぎとめているところを後続の仲間踏み殺された。

『負傷者が続出している。すぐに援軍を送ってくれ！』

『おいおい、あんな数俺たちだけじゃあ対処できないよ！』

『武器が足りない！ さっさと送ってくれ！』

通信機が悲鳴に満たされる。パニック寸前のその状態を聖は書類をさばくようにひとつひとつ処理していった。

「第3地区の兵を前に出して3班と4班を交代。本陣からから届いた火薬棒と銃器は中央に集める！ 梨子くん、負傷兵と一緒に使い終わった火薬棒も後ろに搬送するんだ」

『はい』

梨子のちよつと間の抜けた声が通信機から聞こえてくる。こんな状態なのに、少しだけ和んでしまった。

聖は煙草に火をつけて、俺を見た。

「敵の勢いがかなり強い。早々は崩れないだろうがローテーションを速めることになるぞ」「わかつてる」

俺は双眼鏡を覗いた。わめき散らしている白いスーツの男と傍ら

に立つ女。

「このまま力押しで崩してくる気なのか、それともまだ奥の手があるのか……」

長戸市の兵は火力の薄いところを重点的に攻撃してきている。対する俺たちは、効率的とはいえないまでもバリケードを盾にしてなんとか迎撃できていた。

が、あくまでも防御であり受身だ。この戦争が始まって以来、主導権を長戸市に握られ続けていることには変わりはない。

「直以先輩！ そつちにひとり行つたつす！」

隆介の声に振り返ると、バリケードを越えた長戸市の兵がドスを小脇に抱えて俺に向かって突っ込んできていた。

単調な動きだ。これなら、ゾンビのほうがるかに速いし強い。

俺は、戈を振るつた。長柄である戈は短いドスが俺の身体に届くより速く長戸市の兵の腕を斬り落とした。

遅れてきた隆介が腕を押さえて蹲っている長戸市の兵にとどめを刺した。

「すいやせん、直以先輩」

「こつちなら大丈夫だ。すぐに部隊に戻れ」

隆介はひとつ頷くと、俺に背を向けた。

「……聖、今のやつ、まっすぐ俺のところに来たな。俺が狙われたのか？」

「敵の大将を討ち取るというのは常道手段だろう」

「そう、か。ちょっとここを頼む」

俺は、聖の返事を待たずに隆介の後を追った。

「そつち、来てるわよ！ 駄目、まだ引きつけて……、よし、撃つて！」

麻理の命令で一斉射撃が行われた。硝煙の匂いが辺りに充満した。

「直以！ なんでこつちに来てんのよ！」

麻理は小銃の弾倉を変えながら、俺には見向きもせず聞いてきた。
「麻理、こつちはどうだ？」

「最悪！ もちろん逆の意味だね」

銃器の絶対数が不足する中、もっとも装備が充実していて錬度が
高いのは麻理たちの部隊だ。

麻理たちをもっとも敵が攻めやすいところに配置していたのだが、
それが完全に裏目に出た。

第2派のゾンビをけしかけることで俺たちの配置を知った長戸市
は、麻理たちのいるここに兵を集めないのだ。

麻理たちはせいぜいが近場への援護射撃か、群れから逸れて自殺
行為的に突っ込んでくる敵の迎撃くらいしかやることがなかった。

火力の効率的運営が、完全に封殺されているのだ。

「ねえ直以。ここは林田に任せてせめて私だけでも別の場所に移し
てよ」

「駄目だ。隆介を信頼していないわけじゃないが、ここを集中的に
攻められておまえがいなかったら、ここはもたない」

「じゃあどうすんのよ！？ このままじゃあジリ貧の消耗戦になる
わよ？」

「……ここに敵を集める」

俺は、それだけ言うと、軽く膝を曲げて飛び上がった。

あれ？

俺がバリケードの上に立った瞬間、炎暑が消えた。

戦場を覆っていた獣性が一瞬、ほんの一瞬だけ霧散する。

混沌のひとつとき、次いで訪れたのは、俺に放たれる志向性を持つ
た殺意だった。

鳴動。

長戸市の兵は一斉に俺めがけて走りよってきた。はるか前方には

顔に驚きを浮かべる美紀さん。後ろでは聖の悲鳴と麻理の罵声。

俺の中に沈む瘡おこりがわずかに波打った瞬間、俺は隆介に襟首をつかまれてバリケードの内側に引きずり倒された。

「あ、あんなに考えてるんすか！ あんたがやられたら俺たちはお終いだろうが！」

「……大丈夫だよ。それより、来るぞ！」

俺は戈を握り、迫る敵兵に備えた。

「撃ちまくりなさい！ 残弾なんて気にしなくていいから！」

麻理は周りに指示を出すと、自身も小銃を乱射した。それでも長戸市の兵は味方の屍を乗り越えて向かってくる。その様は、音に群がるゾンビと大差なかった。

狂熱に犯されたのは長戸市の兵だけではない。朝倉市の兵も一斉にバリケードを飛び出したのだ。

お互いの牙が折れるほどの衝突。

こうなれば指揮も統率も関係ない。あるのは、本能に従った殺し合いだけだった。

終幕は、わずか1分ほどで訪れた。長戸市の兵が撤退を開始したのだ。

おそらくは自分の統制を外れた戦いを嫌って一度部隊をまとめにかかったのだろう。

「追撃はいい。俺たちも一度引いて体制を立て直すぞ！ あと被害状況を報告！」

俺も大声を張り上げて勝手に戦っている兵たちをまとめにかかった。

周防橋の上は死体の山で満ちている。我ながらひどい戦い方をしたもんだ。

俺は天を見上げた。

青い空に白い雲。そして、燦燦と輝く太陽。

視線を下ろす。

焼けたアスファルトに飛び散る赤。

目が痛くなるほどの彩度に、俺は軽い立ちくらみを覚えた。

シャワー室の誓い！ エクストラストーリー4（前書き）

今回は骨休めに梨子視点です。

シャワー室の誓い！ エクストラストーリー4

日に焼けた肌にシャワーをぶちかける。身体を冷やす心地よさと火傷に沁みる痛痒が同時に駆け巡った。

「痛った〜！ これ、絶対やばいわよ」

隣にいる麻理先輩は真っ黒に焼けた肌を摩っている。適度についた筋肉が強調されていて、すごく綺麗な身体つきだ。

「しかし、この猛暑の中動き回るのは無理があるな。条件は同じなのだから、長戸市の連中も少しは考えて行動してくれればいいのだが」

そう言ったのは聖お姉ちゃん。出るところは出てるのに、全体的に身体は引き締まっている。同じ女としてうらやましい体型だ。

「これ以上の対陣はお互いにとっても益がないはず。このまま引き下がってくれるといいのですが」

後方にいたために比較的肌の白い紅ちゃん。手も足も長いし、すごくスタイルがいい。

私、遠野梨子は、自分の胸と紅ちゃんの胸を見比べた。

絶対的に見たら少しは負けているかもしれない、でも、相対的に見たら紅ちゃんのほうが身長が高いから、比率的には……。

「あの……、梨子さん。どうかしましたか？」

「ッは！ ううん、まるつきりなんでもない！」

「？ そうですか」

ここは後方の監視塔代わりの砦予定地だ。飾らずに言うのなら廃ビルの中。

私たち前線にいた部隊は門倉先輩と他の地区の部隊の人たちと交代で、後方で今は休息中。ついでに、紅ちゃんたち本陣にいた女性も一緒に休憩中だ。

私はリノリウムの床に座った。冷たい床の感触が心地よかった。

「……お風呂入りたいね」

「そうですね。手足の伸ばせる大きなお風呂がいいです」

紅ちゃんは、私の隣に腰を下ろした。

「熱っついお風呂かあ。贅沢ねえ」

「温泉がいいな。露天風呂」

そう言つて麻理先輩と聖お姉ちゃんも床に座った。

シャワーが吐き出す水のカーテンの中、女4人は床に直座りして笑いあつた。

「しっかし、いつまで続くのかしらね、こんな生活」

「それは、周防橋での対陣のことか？ それとも、4月から始まつた非文明的な生活のことかな？」

「両方よ」

「もうすぐ、半年が経つんですね」

「今年はゴールデンウィークも夏休みもなしだったもんねえ。あゝあ、みんな海に遊びに行けたらきつと楽しかっただろうな」

「なに、行けばいいさ。さすがに今年は無理だが生活が落ち着いたら海でも温泉でも好きに行ったらいい」

聖お姉ちゃんはそう言う。行きたいところに行く、そんな当たり前のことでも今はすごく非現実的に思えてしまう。

「それで、私たちはいつまでこんな肌に悪いことしなくちゃいけないのよ」

「雄太が戻ってくるまでだ。それまで我々は受身の状態だな」

麻理先輩は重いため息を吐いて水に濡れた髪を絞った。

雄太お兄ちゃんは今、長戸市に潜伏して情報収集をしている。橋が塞がっているために帰還に苦労しているのではないか、とは聖お姉ちゃんの言葉だが、雄太お兄ちゃんなら滅多なことはないだろう。

「それで、聖お姉ちゃん。なんで長戸市の人は私たちを目の仇にしているの？」

「ふ……む、それも正確なことは雄太待ちなのだが、察するに、長戸市も以前の朝倉市と同じなのだろう」

「？ どういうこと？」

「我々は早い段階から食料を自給自足できるように行動している。

だが、長戸市はそれを外に求めたのだろう。略奪という手段に」

「人がいるところには食料がある。それを奪うというわけね。やっ
てるのが野盗と同じじゃない。さすが、まとめているのがやくざ
ってことかしら」

「ですが、そうなる疑問があります。私たちはすでに長戸市に抵抗の姿勢を見せています。食料調達が目的なら、それが容易に達成できないことは伝わっているはずですよ」

うん。私たちの目的は長戸市の略奪阻止であり、それは成功している。だから、長戸市には無理に私たちに拘る理由は本当なら
ないはずだ。だって、略奪したいなら他の簡単な場所であればいいんだ
から。

「これも、憶測ではあるんだが、おそらくは長戸市の内的な欲求に
よるものなのだろう」

「どういうこと？」

「人は、暴力のみではまとまることはできない、ということだ」

ゾンビ発生から約半年。長戸市を取り仕切るやくざは今までは暴力を主体として取りまとめて来た。

それを如実に表すのが長戸市の『身分制』だ。

炎天の中、日除けもなく直立で立つ兵と日陰で団扇で扇がれている指揮官との差は激しすぎる。

それは暴力によって築かれたものだろうが、そんなことをしていれば当然不満は募る。

その不満の捌け口として向けられたのが、私たちだった。

集団をまとめる上でもっとも簡単な方法は共通の敵を作ることだ。私たちは、長戸市がまとまるために『敵』として認識されたようだった。

「あまり弱すぎても『敵』にはならない。でも、強すぎても困る。私たちは、その点ちょうどいいってわけ？」

「不愉快な評価ではあるな。いずれはそれが間違いだとわからせてやることにしよう」

麻理先輩と聖お姉ちゃんは2人で盛り上がっている。ひよっとして、この2人はけっこう気が合うのかな？

だけど、そうなるとひとつ疑問が出てくる。

私は、その率直な疑問を聖お姉ちゃんにぶつけてみることにした。「でも、聖お姉ちゃん。それだと、長戸市の人は私たちに勝つ気ではないよ。負けるにしても長戸市の人もすごく犠牲になると思う。長戸市の人には、私たちに勝つなにか秘策みたいなものがあるのかな？」
聖お姉ちゃんは言い淀んだ。答えられないんじゃないかと、答え難い感じ。

「なによ。気になるから答えなさいよ」

「ひとつ確実なのがある」

「それは、なんですか？」

「暗殺だ」

そのひと言で、ここにいる4人はその意味を正確に理解した。

「直以お兄ちゃんを、暗殺？」

「うむ。今日の戦闘ではつきりわかった。直以は狙われている」

「もし木村先輩が暗殺されても直以先輩が立て直すでしょう。ですが、逆は無理。私たちの要は、直以先輩かなめということですね」

「そうなの？」

「ええ。くやしいけど、私じゃあ、私たちだけじゃあ今日の戦闘に

耐えられなかったかもしれない。直以が指揮を執っていたから、私たちは勝てたのよ」

そういう麻理先輩は、どこか誇らしげだった。

私も誇らしい。直以お兄ちゃんはやっぱりすごい。他の3人と違って私は、直以お兄ちゃんのどこが、とかははつきり言えないけど、それでもすごいことはわかった。

「それで、だな。伊草麻里。きみにひとつ頼みがある……」

どこか言い辛そうに聖お姉ちゃんは言った。

「直以を守ってくれ」

「ハア？ あんたなに言ってるの!？」

麻理先輩は小馬鹿にしたように言う。

「そんなの当たり前じゃない。あんたなんか頼まれる筋合いないわよ!」

聖お姉ちゃんは顔を上げて睨み、麻理先輩も正面から睨み返した。

え、なに？ 急に喧嘩？

ま、まあ、仲良く喧嘩しているみたいだから放っておくことにしよう。

「梨子さん」

と、紅ちゃんに声をかけられる。

「な、なあに、紅ちゃん」

「すみませんでした」

そう言っつて紅ちゃんは私に頭を下げた。

こっちも意味がわからない。

「えっと、ごめん。紅ちゃん。なにを謝っているのかぜんぜんわからない」

「いえ、私もわからないんですが、最近の梨子さんを見ると、どうも冷たくなったような気がして。なにか気に障ることをしてしまったんじゃないかと思っただんです」

私は、ピンと来た。うん、思い当たることはある。だけど、それは紅ちゃんのせいじゃない。

恥ずかしいことだけど、私は直以お兄ちゃんの傍にいる紅ちゃんに嫉妬しているのだ。

「うっん、私のほうこそごめんね。紅ちゃんはなにも悪くないよ」

「そうですか。あの、よければ私に相談してください。悩み事ならば口にするだけでも楽になるものですから」

「う……ん」

私は壁に寄りかかった。

「直以お兄ちゃんがぜんぜんかまってくれないんだあ」

その理由はわかっている。

私が役に立たないからだ。

私は聖お姉ちゃんみたいに頭がよくないし、麻理先輩みたいに強くもない。紅ちゃんにいたっては頭もいいし強いし、しかも、すごい美人だ。

この3人は、私の劣等感を刺激するには十分すぎる人たちだ。

「失礼ですが梨子さんは直以先輩と似た悪いところがあるようですね。自分を過小評価するところがあります」

「……ありがとうございます。私は自分で自分が足りてないってわかるから」

私は体育座りをして顔を隠した。

今日、直以お兄ちゃんに仕事を渡されたときはすごく嬉しかった。少しでも直以お兄ちゃんに認めてもらえるように私は頑張った。でも、駄目だった。

全体に影響があるほどではなかったけど、本当ならもっとうまく、効率的にことが運べたはずなのだ。

私は、直以お兄ちゃんの足元にも及ばない。

このままでは、見捨てられる。ううん、直以お兄ちゃんは優しい人だから、きつと私を傍に置いてくれる。

でも、役にも立たずにただいるだけなんて、私が耐えられない。

……居場所が、なくなる。

「私は、直以お兄ちゃんの傍に一秒でも長くいたいのに、足手まといにならないことすらできないんだもん」

紅ちゃんは、なにかを言おうとして言葉を飲み込んだ。なにを言おうとしたのかはわからない。だけど、次に言った言葉は、私の理解の範疇を超えていた。

「梨子さん。私はあなたに謝ることがあります」

「またあ？ 紅ちゃんは悪くないって」

「ええ。私は悪くありません。それでも、友人の梨子さんに謝っておきます」

私は、顔を上げた。

紅ちゃんは相変わらずの無表情で私を見ていた。

「私は、直以先輩を愛しています」

ぴたりと、時計の針が止まった。後ろで仲良く喧嘩していた聖お姉ちゃんと麻理先輩も凍る。

しばらくシャワーから水が出る音だけが響いた。

「……なんで今そんなことを言うの？」

「私は梨子さんをかけがえのない友人だと思っています。この気持ちを抱えたまま、欺瞞を抱えたまままでいたくありませんでしたので、私が言い淀んでいると、横から麻理先輩が割って入ってきた。

「進藤、なかなか面白いこというじゃない。でも、キャンペーンラブって知ってる？ 同じ目的を持っている男女はその感情を恋愛感

情と勘違いすることがあるのよ。その点、私は違うわね。なにしろ小学校のときから直以のことが好きだったんだから」

うえ？ 麻理先輩も！？

私は、聖お姉ちゃんを見た。聖お姉ちゃんは肩を竦めた。

え？ え？ なにが始まったの？

「私の感情はキャンペーンラブなどではありません。伊草先輩は内容が薄いから年月に換算しているのではないですか？」

うーわ、紅ちゃん、言うこときつついなあ。麻理先輩もぎりど歯を噛み締めている。

そして、聖お姉ちゃんもこのわけのわからない舞台劇にオンステージする。

「その点私は付き合いの長さでも内容の濃密度でも一番だな。直以と私は、恋愛感情を超越した関係にあるからね」

「単に女として扱われていないだけじゃない」

「それでは牧原先輩は直以先輩を愛情の対象として見ないんですね」
集中砲火を浴びて聖お姉ちゃんはたじろぐが、さすがというべきか、すぐに立て直した。

「別に、そういうわけではない。もしこの中の誰かが直以と付き合いうことになっても直以の深い関係は変わらないということだ」
「へえ、自分は退路を確保して安全なところからしか参戦しないってわけね」

「私としては牧原先輩が積極的に直以先輩にアプローチをかけないことは助かります。ライバルがひとり減りますから」

「い、いや。別にアプローチをかけないとは言っていない」

「白状しなさいよ。直以のことが好きだってね。見てて丸わかりなのに誤魔化そうとするの、イライラすんのよ！」

「そうだ！ 私は直以が好きだ！ 文句あるか！？」

おお、いつも論理立てて話をする聖お姉ちゃんの逆切れ、なかなかレアだ。

……ん？ ちょっと待って？ 私、完璧に乗り遅れてる！？
まずいまずいまずい！
このままではまずい！ そう思った瞬間、私は全裸で立ち上がって叫んでいた。

「私だって直にお兄ちゃんが好き！」

再び、シャワーがぱらぱらと水を吐き出す音が響く。
やってしまった感はある。

他の3人と比べて私が見劣りするのとはつきり自覚している。
だけど、それでも私は引けない。絶対に譲りたくない。
女には、やらなくてはいけない場面があるのだ！

「……つぶ！」

誰ともなく、私たちは笑い出した。心から面白くて、おかしくて、私たちはその場で大笑いしてしまった。

「まったく！ 私たち、揃って見る目がないわね」

「まったくだ。背も低いし顔も10人並み」

「特段お金持ちでもなく、家庭的な性格もしていませんね」

「でも、私たちは直にお兄ちゃんが好きなんだね」

たぶん、探せば理由なんて、マイナスな理由以上にいくらでも思いつけるだろう。

でも、直にお兄ちゃんを好きなのに理由なんていらぬ。きつと、言語化する意味なんてないのだ。

私は、右手を3人の前に差し出した。

「それじゃあ私たちはライバルだね　せーせーどーどーと戦おう
！」

私の手の上に立ち上がった紅ちゃんが自分の手を乗せる。

「私は、この中の誰が直に先輩に愛されようとかまいません。私が

直以先輩を好きなのは変わらない事実ですから」

「なかなかずるいこと言うじゃない。まあ、直以と誰がうまく行っても恨みっこはなし、それだけは約束しましょう」

麻理先輩は紅ちゃんの上に手を乗せた。

3人の視線が聖お姉ちゃんに集まる。

「やれやれ、このご時世に色恋沙汰とはね」

「ごちゃごちゃ言っていないでさっさと手を乗せなさい」

麻理先輩に言われて聖お姉ちゃんも手を乗せる。麻理先輩、けっこう強いなあ。

「ごほん！ それじゃあ私たち、直以お兄ちゃんが好きな4人はここに、直以お兄ちゃんを通じての変わらぬ友情をこのシャワー室とお互いの良心に誓いまっす」

「……牧原、別に私たち友達じゃないわよね」

「ああ。恋のライバルというならやぶさかではないが、友人という疑問符が残るな」

「もう！ これを機会に2人は友達！ 4人は友達になったの！」

私は強引に（こういうことには勢いが重要だ）そう諭すと、紅ちゃんは、ふっと柔らかい微笑を浮かべた。

同姓の私でも見惚れるその微笑に、全員が同じように笑いあってしまった。

台風

連日続く真夏日の中、俺たち鈴宮朝倉連合は橋を挟んで長戸市との対陣を続けている。

正面からの戦闘こそないものの、連日の緊張感は続き、お互いの疲労が目に見えるようになってきている。

このまま手をこまねいていれば戦闘に抛らずに自壊することになりかねない。

そんな馬鹿馬鹿しい状況になりかけたとき、聖は口を開いた。

「前線を後退する」

ガソリン式の発電機が稼動する音、弱冷房と薄暗い明かりが灯る中、一人起立した聖はそう言い放った。

「元々が監視砦を築くまでの時間稼ぎだ。それが一応の形になった以上橋に拘る必要はない。私たちは監視砦を中心に橋の出口で待ち構えることにしよう」

「まあ、遮るもののない橋の上よりは兵の負担はだいぶ楽になるけど。でも、橋の上でしっかり蓋をしておいたほうがいいんじゃないの？ 橋を占領されたら行き来が自由になる」

「なに、かまわんさ。集団で来たなら当然迎撃するし、ひとりふたりと端数で来たところで大した戦力にもならん」

「はい、直にお兄ちゃん」

「ああ、サンキュー」

俺は梨子から冷たい麦茶を受け取り、口を付けた。

会議の中心では麻理と聖がなにやら言い合っている。麻理が聖に反論してケチをつけているというよりは、みんなが感じる疑問を麻理が先回りして質問して聖が答えているって感じたが。

梨子は、会議に参加している全員に麦茶を配り終わると、俺の隣

に腰を下ろした。

「なあ、梨子」

「なあに？」

「聖と麻理ってなんかあったか？」

「え？　なんで？」

「いや、なんとなくなんだが、あの2人、うまく連携が取れているような……」

麻理と聖の仲は良くないと俺は思っているが、全体としての認識も同じだろう。だから今の状況も周りには聖に麻理が喰って掛かっているかと写っているだろうが、俺にはなにかツーカーな受け答えをしているように見えた。

「んふふ」　内緒。いいオンナには秘密があるんですよーだ」

「ここで言ういい女は聖と麻理でおまえは入ってないんじゃないか？」

そう言うつと梨子は口をへの字にして俺の背中をぺちりと叩いた。

「それで、直以はどう思う？」

埒が明かないと見たのか、大地が俺に話題を振ってくる。全員の視線が、俺と、俺の隣にいる梨子に注がれた。

「前線を後退させるのには賛成。こう連日の炎天下じゃあ、いざつとときに戦えないよ。それがわかっているから条件が同じ長戸市の連中も攻めてこないんだらうけど」

「下手に引いたら朝倉市の連中の士気が下がるんじゃないか？」

健司の言葉に少し考える。なるほど、劣勢が理由での後退だと勘違いされる恐れは確かにあるかもしれない。

「それは、各班長にちゃんと理由を説明してもらっしかないなあ」

「暑さに耐えられないから、って？」

「いや、実はもうひとつ理由があるんだ」

俺は、梨子の背中を押した。全員の視線が梨子ひとりに集まった。頼りなげに俺を見上げてくる梨子。俺は、梨子が安心できるように軽く手を握ってやった。

梨子は、俺の手をぎゅつと握り、言った。

「えっと、その、台風です」

「台風、ですか？ 確かに時期的にはそろそろだとは思いますが」
支倉先輩の言葉に多少たじろぎながらも梨子は答えた。

「はい。天気予報がないからいつ来るかはわからないけど、けど、いつ来てもおかしくないと思います。そのとき、今ある簡易バリケードの先陣ではとても耐え切れないと思います」

「少し補足しておこう。台風が来れば、当然風雨の問題から簡易バリケード自体が吹き飛ばされる可能性もある。だが、それ以上に我々には火薬棒が使えなくなるのが大きなマイナスだ。火薬棒は黒色火薬を使っている。黒色火薬は湿気に弱いから雨の中ではとても使えないからね」

聖に視線が集まって、梨子はほつと息を吐いて俺に寄りかかった。
「おそらく次に長戸市が動くのはそのときだろう。我々は、そのときに備えて少しでも有利な状態で迎撃できるように準備しておかなければならない」

次に長戸市が動くとき、それは、美紀さんが動くときだ。

今度はどんなことをやってくるのか。雄太が間に合えばこつちから仕掛けるのもいいが、おそらくは今回も受身になることだろう。

……ちなみに、雄太が今近隣の市を回ってなにやら冒険譚を繰り広げていることを当然俺たちは知らなかった。

「わかりました。迎撃の難しい先陣は放棄するのですね。それでは今本陣として使っている場所はどうしますか？ そこも引き払って監視皆で迎撃しますか？」

「いや……、本陣は残しておこう。監視にも使えるし橋の出口を押さえれば牽制にもなるから」

そう言ったのは大地だ。多少の違和感があるが、ここで異を唱えるのも具合が悪い。俺は黙っていることにした。

俺たちの先陣放棄はスムーズに進んだ。美紀さんは申し訳程度の嫌がらせをしてくれたが、特段大きな戦いに発展することはなかった。

風が強くなってきた。

厚い雲は天を覆い、連日働き詰めだった太陽は久しぶりの有給休暇になり潜めている。

おそらく今日の夜半にでも台風は周防橋を直撃することになりそうだった。

俺は、長戸市を迎撃するための準備の最終チェックをしていた。

「隆介、もう少しライトで先まで照らせないか？」

「車を前進させるっすか？」

「いや、それをするとバランスが崩れるからなあ」

風雨の中での夜間戦闘。視界は不良で銃の命中率も格段に下がるだろう。最悪、泥に塗れた肉弾戦になりかねない。

「なんか台風ってわくわくしないっすか？」

「ガキかよ。別にわくわくしねえよ」

「またまたあ。直以先輩、なんか楽しそうっすよ」

「うるせえぞ。やることは山ほどあるんだからさっさと働け」

「ういっす」

隆介は文句を言うこともなく俺の指示に従って行動する。見た目とは裏腹に、隆介はけっこうな働き者だった。

俺は、自分の左手首を掴み、脈拍を確認した。

なるほど、俺の心臓は普通よりも早く鼓動を繰り返していた。高揚している証拠だ。

だが、この高揚は台風の接近によるものではない。

台風の最中に美紀さんがなにをやってくるか、その期待によるものだ。

「直以お兄ちゃん」

ふと見ると、いつからいたのか梨子が俺の前に立っている。

「どうした、梨子。おまえは聖と一緒に監視砦のほうにいるはずだ
ろ」

「う、うん。でも、まだ少しはいいかなって」

そういえば最近では梨子のおざなりにしてたなあ。傍にいる
くらいならいいだろう。

「なにかあったらすぐに監視砦に戻るんだぞ」

「うん！」

梨子は、嬉しそうに頷くと俺の腕にしな垂れかかってきた。

「ねえねえ、この後、なにが起こると思う？」

「正直わからん。単に芸のない特攻はやってこないと思うから、何
かしらの奇計をやってくると思うが、見当もつかないな」

「お願いだからあんまり危ないことはしないでよ。私は、直以お兄
ちゃんが怪我するとかかって嫌だからね」

俺は、思わず苦笑してしまった。

「それはなかなか難しいなあ。ここにいれば嫌でも危険な目に遭う
よ」

「むづづう！ それでも危険なことほしないでください！」

「ああ、わかったわかった。なるべく気をつけるから」

俺は、梨子のちっこいおっぱいは頭に手を置いた。梨子は、誤魔化
されていると思ったのか、思いつきり頭を振って俺の手を退けた。

と、頬に冷たいものが当たった。

雨が降ってきたのだ。

「梨子、話はお終いだ。聖のところに戻れよ。俺はおまえが雨に濡
れて風邪を引いたなんて嫌だからな」

「そうしたら、直以お兄ちゃん私のこと看病してくれる？」

「つきつきりだな」

梨子は、ほにやらと笑顔を作った。

「それいいねえ。私、風邪ひこつかな」

「馬鹿言っでないでさっさと戻れ」

俺は梨子の背中を押した。だが、梨子はつんのめりながらも耐えて、振り返った。

「が、視線の先は俺ではなく麻理がいた。」

「麻理先輩、直にお兄ちゃんをよろしくお願いしまっす!」

「うん、任された!」

……阿吽の呼吸だった。

「なんで麻理に俺のこと頼んでんの?」

「えっへへえ、秘密　それじゃあ直にお兄ちゃん、私は戻りけど本当に危ないことはしないでよ!」

梨子はそれだけ言うと、軽い足取りで去っていった。

俺はしばらく梨子の背中を見送った後、作業に戻った。

小雨だったのはほんのわずかな間だけ、本降りになるには時間がかからなかった。

風雨の強さからも台風が近づいてきていることはわかる。

俺たちは、横に並べたバスの中で雨を凌いだ。

豪風と雨粒が窓を叩く音がバス内を包む。

「……大丈夫よね。橋ごと落ちたりしないわよね」

「大丈夫だろ。メンテナンスされてないからって、10年やそこらでは落ちないだろ」

不安げな麻理に答えながら、俺は窓の外を見た。

橋の上は、乗っ取られないようにタイヤを外した車を数台並べてライトで照らしている。

ないよりははるかにマシだろうが、それでも視界が悪いことに変わりはなかった。

「もうちよつとやりようがなかったかなあ」

「大丈夫でしょ。この風なら、狙撃はベテランの狙撃手でも難しいわよ。だから、近づいてきても銃はお互い使い物にならないわ。だから、あんまり遠距離を見渡せても意味がない」

今度は逆に麻理が俺を安心させる言葉を言う。

すでに日は暮れかかっている。光源がライトのみになった頃、その連絡は入った。

『直以先輩、お疲れ様です』

通信機から聞こえてくるのは紅の声だ。

「紅、どうかしたか？」

『はい、少々。今、監視砦が敵襲に遭っています』

いつもと変わらない落ち着いた紅の口調。だが、話の内容は深刻だった。

「敵の数は？」

『視界不良のため、確認できません。100人は超えないと思いますが』

俺は窓の外を見た。ライトの先には、未だに敵兵の姿はない。

「俺たちに気付かれないように川を渡ったのか、それとも下流の橋を使って大回りしてきたのか」

『大地先輩からの要請です。直以先輩をすぐにこちらに來させるように』

「俺は監視砦には戻らない。大地に伝えてくれ。防御に徹しろ。敵は補給がきかない。弾が尽きればそれで終わりだ」

監視砦には聖もいるし十分な備えもある。数と装備、さらには地形で劣る長戸市の兵が特攻を仕掛けたところで自殺行為だろう。そんなことをやってくるとは思えない。

もしこの行動に意味があるとするのなら、監視砦に兵を向け、牽制することで俺たち橋に陣取る部隊を孤立させ、一気に殲滅することだろう。

だが、俺たちは攻撃を受けていない。

長戸市の行動には連携が欠けていた。

「なにを考えてやがるんだか？」

俺の頭の中には美笑を浮かべる美紀さんが浮かんだ。あの人に限って言えば、作戦ミスもトラブルも有り得ないだろう。

なにか壮大な計略の一環、だがその全貌は台風の風雨に凌がれて姿形も見えなかった。

台風（後書き）

雄太の話は外伝で！

……すいません、たぶん書きません。

豪雨の襲撃

続く雨、続く風、どこからか飛んできた金物がバスの窓ガラスに当たり、弾かれた。

「いよいよ本格的になってきたわね」

麻理が言っているのはもちろん台風のことだ。

俺たちは、ただ雨降り荒れる中、窓ガラス越しに目を凝らして橋の先を見ていた。

いや、正確に言うのならそのことしかできなかった。

後方で戦闘が始まってから早一時間が経とうとしている。

その間、俺たちへの攻撃はなく、また、後方での戦闘も進展はなかった。

「それ、止めなさいよ。落ち着きのない」

隣に座る麻理に指摘される。俺は、いつの間にか貧乏揺すりをしていた。

「ああ、悪い」

俺は手で足を押さえつけて貧乏揺すりを止める。いかんね、もつとどつしり構えていなければいけないのに、これでは不安が周りに伝播する。

それにしても、俺以上に落ち着かないやつってのはいるもんだ。

「直以先輩、皆から……」

「切れ！」

隆介が言い終わるのを待たずに俺は叫んでいた。

監視皆からの援軍要請はほぼ5分置きにかかってきている。監視皆は視界不良の中、挑発行為を続けられて焦らされているようだった。

「でも、直以先輩。今回は木村先輩からっすよ」

俺は舌打ちすると、隆介から引っ手繰るよう通信機を受け取った。

「大地！ そつちはそつちでなんとかしてくれよ！」

『直以、そつちはまだ攻撃を受けていないんだろ？ それなら今のうちにこつちに来て片付けてくれ』

「攻撃があつてからじゃあ遅いんだよ！ 直接的な被害がないならいつそ無視してる。台風の中、外にいる敵はそのうち自滅するから」
『台風の中、攻撃を受けてみんな不安になっている。早くこつちに来て助けてくれ』

「大地、おい、大地！」

大地は、一方的に言うことを言って通信機を切っていた。俺は叩きつけるように通信機を置いた。

「……麻理。ちよつとの間ここを頼む。俺は監視砦に行ってくるから」

「ちよ、本気？ なんであんたが行かないといけないのよ!？」

「大将の言うことを無視するわけにはいかないだろ」

「それだけじゃないわよね」

麻理は俺の目をしっかりと見てくる。俺は、目を逸らし戈を握った。

「とにかく、今はおしゃべりをしている時間じゃない。頼んだぞ」
俺は、背後でなにやら叫んでいる麻理を無視してバスを飛び出した。

叩きつけるような豪雨。下着まで雨が浸透してくるまで、分はかからなかった。

俺たちのいたバスから監視砦までは、直線距離にすれば500メートルを少し越えるくらいの距離だろう。普段の道のりならば、大した距離ではない。

だが、激しい風雨の中では事情が違った。おまけに、どこからか沸いたゾンビもそこかしこに姿を現している。

もつとも、この台風の中、風の音で耳が塞がっているゾンビは俺の存在には気付いていないようだった。

「直以！」

その声が聞こえたのは偶然だった。

背後からの麻理の声、それがたまたま風に殺されずに俺の耳に届いた。

それに引かれるように、俺は足を止めた。

瞬間、俺の眼前をなにかが過ぎ去った。

それは、コンクリート片だった。過ぎ去った先でコンクリート片は地面に落ちて砕けて割れた。

風で飛ばされてきた？

いや、違う。あれは、俺目掛けて投げつけられたものだった。

「直以」

髪の毛先までずぶ濡れの麻理が俺の傍に駆けつける。薄着が透けて下着が見えているが、眼福を楽しむ余裕は俺にはなかった。

「麻理、気をつける。伏兵がいる」

「そんなのわかってるわよ！ あんた、自分に無頓着すぎるのよ。今あんたを殺られたら、私たちはお終いなんだかね！」

……まさか、わざわざ兵を大回りさせてまで監視砦を攻撃させたのは、俺を狙うための布石だったのか？

そんな馬鹿馬鹿しい想像を証明するように、背後から豪雨を圧するほどの喚声が聞こえた。

長戸市の攻撃が始まったのだ。

「ゾンビが集まっている時点で気付くべきだったな。あいつら、無線で俺たちがバスから離れたことを連絡入れやがった」

「そんなことどうでもいいわよ。今は、この状況をどうやって乗り切るか、でしょ」

背中合わせで俺と麻理は立った。

その俺たち2人を囲むように、5人の男たちが立った。

「ったく、雨の中待たせやがって。おまえが菅田直以か」

リーダー格らしき大男が声を発した。暗がりの中、顔は確認できないが、身長は大地くらいある。だが、横幅は大地の倍以上あった。その肉に詰まっているのは、脂肪ではなく筋肉だった。

俺は、唇を濡らす雨粒を舐め、答えた。

「ああ、そうだ。美紀さんの命令か？」

大男は、下卑た笑い声を上げた。

「あの女、おまえひとりを殺すのに俺たち100人に死んで来いって命令しやがった」

「なるほど、美紀さんは本気ってわけか」

俺の胸に去来したのは、失望？ 冷然？

むしろ逆だ。

喜びと快感。

美紀さんは、俺に勝つためになんでもしている。俺を敵として認められている。

と、するのならば、ここで思い通りに殺されてやることは、むしろ礼を失する。

美紀さんの思惑をくぐら尽く裏切ることが礼儀ってもんだらう。

「麻理、こいつら全員倒せるか？」

「……無理ね。私が突破口を開くからあんたはそこから逃げなさい」
「馬鹿か、おまえは。そんなこと俺がすると思ってるのか？」

「いいから言う通りに、っと。話ぐらいさせなさいよ！」

俺と麻理の会話は中断した。横から日本刀で斬り込まれたのだ。

俺と麻理は弾けるように離れた。

俺は手近にいるひとりに戈を振るった。が、戈は空振りした。か

わされたのだ。

刺客に選ばれるだけのことはある、なにかしらの武道をかじっているようだった。

これは、逃げたほうがいいか？ そう考えたときには遅かった。俺の真後ろにも敵が立ったのだ。

「なにやっつてんのよ！」

麻理は眼前の敵が振るう日本刀を屈んでかわすと、いつ握ったのか、拳銃を密着させて発砲した。

乾いた音が響き、日本刀を持った男は赤を撒き散らしながら後ろに倒れた。

そのまま麻理はこちらに銃を向け一発ほど撃った。弾は風に流されて命中することはなかったが、牽制にはなった。

慌てて飛び退く敵の隙を縫って麻理は俺に近づいた。それを妨害するように別の男が麻理に近づいた。

男は、ドスを振り回して麻理に斬り付けたが、麻理は余裕でかわして男の眉間に銃口を突きつけ、引き金を引いた。

「密着させちゃえばどんな豪風も関係ないわ」

…… まあ、そうなんだろうけどさ。相変わらず凶暴な女。

「あと、3人」

麻理は銃口を大男に向けた。が、大男は怯む様子もない。この豪雨の中では命中させるのが難しいことを知っているのだろう。

それでも近づけば命中率は上がる。大男たちが近寄ってこない隙に、俺たちは少しずつ大男から距離を取った。

「いい？ あと3歩下がったら一気に走るわよ」

「ああ、わかった」

俺は小声で麻理に答え、歩数を数えた。

1歩。

2歩……。

3歩目の足を上げた瞬間、俺は麻理に突き飛ばされた。どこに隠

れていたのか、6人目が後ろから斬り込んで来たのだ。

俺は転倒しながらも戈を振るい、斬り込んで来た男の足を払う。麻理は膝立ちになって、間を置かず走つてくる3人に発砲した。

ひとり目は額を撃ち抜かれ、2人目は胸を爆ぜさせた。が、大男は2人目が倒れる前に背中を掴み、麻理に向かって突き飛ばした。

麻理は突然の奇襲に対応できず、撃ち殺した2人目を抱える形で転倒し、銃を取り落とした。

大男は麻理の持っていた拳銃を拾うと、俺が足を切った男に向かって発砲した。

「おまえ、仲間を……」

「こんな台風の中、怪我人を背負って帰るなんて面倒なこと、できないだろ」

大男は拳銃を、俺に向けて引き金を引いた。が、弾は出なかった。弾切れだ。

男は舌打ちすると、拳銃を放り出した。

「直以」

「そこで大人しくしてる。死姦は趣味じゃねえからな」

そう言つて男は下卑た笑い声を上げた。

「ふっざけんな！」

俺は、わざと大声を上げて戈を振り回した。

「わああああ！」

「そんなの振り回したら危ねえだろうが」

大男は戈を掴み上げると、俺の顔を殴り倒した。そのまま俺の身体に馬乗りになり、両手を首にかける。

「おまえのせいでこんな濡れ鼠になっちまったんだ。苦しんで死ね」男の両腕に、少しずつ力が籠る。俺は、反射的に落ちている石を

拾い、大男を殴りつけた。が、やすやすとその腕を掴まれる。

「つとお、こいつ、首を狙ってきやがった。あぶねえガキだ」

俺の手は捻り上げられ、石は俺の身体の上に落ちた。

「てめえ！ぶっ殺してやる！」

俺はさらに大声を張り上げる。が、すぐに首を絞められ、声はでなくなつた。

「そう騒ぐなつて。どうやってもおまえはここで死ぬんだから」

俺は、再び石を拾い、今度は大男の腕を殴りつけた。男の腕は皮が裂け、血が噴き出す。

だが、そこまでだった。分厚い肉に阻まれて、骨まではまるで届かなかつた。

「いつてえ、な！」

男は俺の顔面を殴りつけた。額を突き抜ける殴られた感触と、後頭部を叩きつけられる地面の感触に、俺は意識をなくしかけた。

「つたく、面倒なことしやがつて。このまま殴り殺すか」

大男は、俺の胸に落ちていいる石を拾つた。鈍器とするなら鋭いが、刃物と見るなら鈍すぎる、そんな石だ。

と、男の動きが止まつた。

「直以！」

見ると、麻理が大男を背中から刺していた。おそらくは拾つたのだろうドスは、しかし、大男の背中中の浅い部分で止まつていた。骨に当たつて止まり、女の膂力では突き抜けられなかつたのだろう。

「があああ！」

大男は大声を張り上げ、麻理を石で殴りつけた。吹き飛ばされるように弾けた麻理は、地面に倒れて動かなくなつた。ゆっくりと、麻理の顔の辺りから赤い水溜りが広がつていく。

大男は、怒鳴り声を上げ続けた。

「ふざけやがつてふざけやがつて！俺が、この俺様がこんなガキどもに！」

「……おい、退けよ。麻理が心配だ」

突然口調の変つた俺に、大男は少しだけ困惑したが、すぐに顔を赤くして石を持った手を振り上げた。

「ガキが！ふざけんな！」

口角に泡を浮かべながら大男はさらに怒声を上げた。だが、その

石が振り下ろされることはなかった。

ぞぶりと、大男の振り上げた手首に、ゾンビの歯が喰いこんだ。なにが起こったのかわからなかったのだらう。大男は呆けた顔を、して背後に振り向いた。

そこには、大男の喚き声に引かれてやってきたゾンビがいた。

俺は、隙を逃さず大男を突き飛ばして馬乗り状態から脱出した。

大男はゾンビに群がられ、悲鳴を上げた。

「俺が大声を上げてもなかなか集まらなかったゾンビがおまえの怒声には寄ってきた。まあ、肺活量だけは大したもんだな」

俺は、戈を拾った。

大男は、なんとか自分にむしゃぶりつくゾンビを突き飛ばし弾き飛ばしして、立ち上がった。

だが、すでに目の焦点もずれ、肌の変色も始まっている。すでに、ゾンビウィルスに感染していた。

「失せろ、やくざ。俺はおまえの名前も存在も、一切記憶には残さない」

大男は、それが唯一残った理性であるかのように、両手を挙げて俺に突進してきた。

俺は戈を短く持ち、横にずれて振り下ろされる大男の両腕をかわし、大腿を斬り付けた。うつぶせに倒れる大男、その背中から生えているドスの柄を、俺は踏みつけた。

ドスは、地面に張り付けるように大男の身体を貫いた。

大男は、しばらくは脈動するように跳ねていたが、やがて活動をやめた。

豪雨の襲撃（後書き）

あらずじを変えてみました。ですが、集客力のあるキャッチコピーにはできなかつたので、また変えると思います。
コロコロ変えることになってしまって、すみません。

男より男らしい

俺はドスの柄から足を離して、麻理のところへ駆け寄った。

「麻理！」

麻理は、顔を押しさえてうずくまっている。

出血がひどい、顔の左半分が血塗れだ。

俺は、着ているシャツを破ると、麻理の顔に当てた。

麻理の顔を押しさえる俺の手を、麻理は上から押さえた。そして、空いたほうの手で俺の首に手をかけると、思い切り引き寄せてきた。おそらくは痛みで朦朧としているだろう視点を強引に俺の顔に向け、麻理は言った。

「私なんかにかまってる場合じゃないでしょう！ さつさと、みんなのところに戻りなさい！」

「麻理、大丈夫か！」

「だ・か・ら！ さつさと行きなさいってえの！」

「わかった」

俺は、麻理の脇と膝の裏に手を入れると、一気に持ち上げた。水を大量に吸い込んだ服の重量もあるのだろう、梨子の倍は重かった。どっちにしても、ここでは治療できない。俺は、隆介たちのいるバスに向かって走った。

「ふっざけんじゃないわよ！ 私を負担にしないでよ！」

「負担？」

麻理は、答えるのも苦痛そうに荒い息を吐いていた。

「……直以は、私のせいで火事のことトラウマにしていたんでしょ。このままじゃ、私は直以に見てもらえない」

「別に、俺はおまえのせいでトラウマになったなんて考えてねえよ。おまえを救えたから、この程度で済んでるんだ。今おまえを失ったら、俺は火事どころじゃ済まないトラウマを抱えることになるよ」

聞いているのかいないのか、麻理は俺の裸の胸に顔を埋め、気を失った。

前線では、すでに乱戦状態になっていた。バス内からの援護射撃はほとんど効果を表せず、数に勝る長戸市の兵に押されまくっている。

「隆介、戦況は？」

「あ、直以先輩。大丈夫だったすか！」

「戦況！」

俺は隆介を怒鳴りつけ、麻理をバスのシートに寝かせた。

「滅茶苦茶攻められてるっす。ぶっちゃけ、そんなにもたねえっすよ」

そう言ってる側から、バスが大きく揺れた。なにかがぶつかったのか、ぶつけられたのか。どちらにしても尋常じゃない揺れ方だった。

「誰か、救急箱！」

気を利かせたひとり、すぐに麻理の怪我を見る。

「どうだ、なんとかなるか？」

「ここじゃ無理だよ。なんとか後ろに運んで医者に見せないと……」

俺は、大きく舌打ちした。

なんにしても目の前の事態を收拾するのが先だな。

「隆介、俺は外に出る。おまえは引き続きここを仕切ってくれ」

「ま、待ってくださいよ。俺も行きます」

「駄目だ。おまえは麻理の代わりをしてくれ」

俺は、話す時間ももつたないと、そのまま外に出ようとした。が、隆介はそんな俺を強引に止めた。

「それじゃあ俺が外に行きます。あんた、見るからに疲労してるっしょ」

言われて、俺は気付いた。

土砂降りの雨の中を人一人抱えてここまで来たのだ。どこか、ハイになっていて気付かなかったが、確かに身体の芯の部分から、疲労が感じられた。

「直以先輩は俺たちの大将なんだから、どっしり構えていればいいですよ。それで、なにをすればいいんですか？」

俺は、少し考えて、隆介に任せることにした。隆介は頼りにならないやつじゃないし、今の俺じゃあ返って足手まといになるかもしれないなかったからだ。

「ひとりで戦っているやつらを助けてくれ。なんとか、集団で戦えるようにもっていくんだ。できるか？」

「要するに暴れまわって仲間集めればいいんですね。お安い御用です！ おい、何人か付き合え！」

隆介は、数人の仲間とバスを降りていく。自分で動けないことに歯がゆさを感じるが、ここは、隆介を信頼することにしよう。他にもやることはあるのだから。

「おい、残っているやつ。援護してくれ」

俺は窓ガラスを開けて、半身を外に出した。すぐに雨粒が顔を叩き始める。そこから見下ろす戦場は、敵も味方も区別がつかない。

辛うじて殺意を持ってこちらに向かってくるやつは敵だろうと判断できる、ひどい乱戦だった。

俺は、口に入る水を吐き出しながら叫んだ。

「まとまって戦え！ 近くに味方を見つuckerんだ！」

俺は生きているぞ。あんたの作戦は失敗だった。

それを美紀さんに伝える意味も込めて、俺は大声で叫び続けた。どこからか飛んできた銃弾が俺の頭上を通り過ぎ、窓ガラスにヒビを入れた。

……この風なら弾は当たらない。

バスに引きこもりたくなる臆病心をねじ伏せ、俺は叫ぶ。

「とにかく知り合いを見つけれ！ 味方で徒党を組め！」

薄暗いここからでは敵味方の判断もつかないが、眼前の距離なら顔ぐらい確認できるだろう。そうすれば、しばらく一緒に行動した仲間かどうかぐらいの識別はできるはずだ。

とにかく、まとまって組織的な行動をとることからだ。

さもないと、指揮なんてとても執れたもんじゃなかった。

と、戦場にひとつの変化が訪れていることに俺は気付いた。発端は、おそらく隆介だろう。なぜか、俺たちの士気が上がっているのだ。

「直以先輩が指揮を執ってくれる！ もう大丈夫だ！」

その言葉を聞き取ったとき、俺はバスから降り落ちそうになった。

「あ……の、馬鹿！ なんて恥ずかしいことを！」

これが戦場心理というものだろうか。

孤独に戦っていた仲間が縋れるなにかを提示された。それは必然的に頼ることになるのだろう。

それが俺というのは大きな問題なのだが。

だが、この後に及んでは選り好みもしてられなかった。

俺は、半身裸のまま、バスから身を乗り出して目立ち、大声を張り上げ続けた。

喚声が歓声に変わり、集団的な反攻が可能になった頃、長戸市の兵は撤退を開始していた。

もう少し引き摺ってくればこちらとしても痛撃をお見舞いできたのだが、その隙をくれないところは相変わらず見事な統率ぶりだった。

歓声が勝ち鬨に変わり、なにやら俺を祭り上げそうな雰囲気になってきた頃、俺は窓を閉めてバス内に入った。

叫びまくったせいかな、全身ずぶ濡れなのに、のどはカラカラだった。

た。

が、まだ終わったわけじゃなかった。

「すぐに怪我人の収容。それと、ここはもう放棄して監視塔に下がるぞ。疲れが溜まっているだろうけど、すぐに取り掛かってくれ」

「もう少しみんなに答えてやればいいのに」

誰かがそんなことを言ったが、俺は無視した。俺にそんな幻想に付き合う義理はないし、そういったことは、大地がやればいいのだ。

俺は、座椅子の上に腰を下ろした。下着まで湿った感触が気持ち悪い。

傍らの麻理を見る。

赤黒く変色した包帯の後ろで、麻理はようやく安らかな寝息を立て始めていた。

台風は一夜で周防橋の上を通り過ぎていった。

雲ひとつない蒼天は太陽を輝かせ、じんわりと夏の暑さを取り戻していく。

橋の先には、長戸市の兵の姿はなかった。撤退はしていなかったが、俺たちと同じように橋の出口に陣取っている。

昨日の被害の再編成に手間取っているのか、それとも次の攻撃の準備をしているのか、どちらにしても長戸市は、今までのようにいつでも攻められるような臨戦態勢を解き、俺たちから距離を置いていた。

「ふひ〜、今日も暑くなりそうだねえ」

梨子は俺の隣で汗を拭った。日に焼けた黒い肌と脇の下から見える白い肌のコントラストが妙に眩しかった。

「梨子、聖に聞いたぞ。昨日は大活躍だったみたいだな」

「そんなこと……、私は、紅ちゃんと一緒に聖お姉ちゃんの言う通りに動いただけだよ」

監視塔を襲撃していた敵は、密かに塔を抜けて後背に回った部隊に一網打尽にされたらしい。

その部隊を率いたのが、梨子と紅だった。

この戦闘で、実に100人近い捕虜を捕らえたとのこと。

長戸市の総数はわからないが、これはかなりの痛手だったことだろう。

「麻理先輩、心配だね」

顔を切られた麻理は後方に送られて治療を受けている。

命に別状はなさそうだが、傷つけられた場所が悪い。落ち込むな、というのは無理な話だろう。

梨子と一緒にどうやって慰めようか考えていたが、麻理はその日の午後には何事もなかったかのように俺の前に姿を現した。

颯爽と現れた麻理は、周りからの視線を気にも留めずに、俺の前に立った。

「こっちはなんとかあったみたいね。よかった、少し心配していたのよ」

「心配っておまえ……、おまえのほうこそ大丈夫なのかよ？」

「ええ。午前中は熱が出たけど、抗生物質も飲んだし、もう大丈夫よ」

とてもそうは見えなかった。麻理の左顔半分は厚手のガーゼに覆われていたからだ。

なんの言葉も発せない梨子と俺に、麻理は片頬を吊り上げた。

「なによ、辛気臭い顔をして」

「あ、いや……」

俺は、なにも答えられない。

麻理は、そつとガーゼに手を添えた。

「これ、痕になるみたいね。まあ、仕方ないわ。自分でドジやったんだしね」

「おまえのせいじゃないだろ！」

俺は思わず声を荒げてしまっていた。

一瞬だけ麻理は目を丸くして、その後、苦笑を俺に見せた。

「私のせいよ。他の誰でもない。自分のせい」

「いや……、俺のせいだろ」

「やめてよ。私は、こんなことであんたの負い目になんてなりたくないんだかね」

俺は、無言でガーゼを見た。

麻理は俺の視線に気付くと、悪戯を思いついた子供のように唇を歪めた。

そして、顔に貼られたガーゼを掴むと、一気に引き剥がした。

そこには、大きな傷跡があった。

こめかみから顎先にかけて、赤黒い一本線が走っている。

梨子は両手を口に当て、言葉を飲み込んだ。

麻理は縫い合わせたばかりの傷口を、そつと撫でた。

「どう、梨子ちゃん？」

「えつと……、本当のことを言っちゃっていいですか？」

「ええ、どんと言っちゃって」

「……、かつこいい！」

「でしょ！？」

麻理は嬉しそうな顔をした。それがどこまでが演技でどこまでが本心かはわからない。だが、麻理はそういう顔を作って俺に見せた。「直以、あんたがこの傷のことを気にすることはないわよ」

「いや、でも……」

「あんたはこの傷が醜いと思う？」

「醜い醜くないとかじゃなくて、女の顔、だろ？」

俺がそう言うと、麻理は心底馬鹿にしたように俺を見た。

「わかってないわねえ。女つてのはこんくらい箔がついたほうが色気が増すつてもんなのよん」

俺は、思わず苦笑を浮かべてしまった。それに釣られて麻理も笑う。

「まいった。男より男らしいな。俺がウジウジしてるのが馬鹿らしくなってくる」

化粧やファッションは人の外面を着飾るものだ。それは、人の内面を覆い隠す効果もあることを俺は初めて知った。

化粧やファッションを取り払った素の部分で、麻理がこんな魅力的な女であることを、俺は、思い知らされた。

なるほど、こいつなら顔の傷くらいで魅力が減退することなんて有り得ない。そう思えてしまえるほど、麻理の笑顔は綺麗だった。

「直以、もしあんたがこの傷に負い目があるなら、これであいこにしてあげる」

「あいこ？」

「あんたが小学校のときの火事での負い目。私を助けてくれたせいであなたがトラウマを抱えているなんて、私は耐えられないわ」

「いや、おまえがそんなことを感じる必要……」

「だ・か・ら！ これであいこ。今までのことは全部水に流して、今からがスタート。わかったわね！」

それ、あいこじゃなくて、俺のひとり勝ちのような気がするが……。

俺が答えないことを同意と取ったのか、麻理は顔にガーゼを当てると、俺に背を向けた。

「あ、麻理！」

麻理は俺の呼びかけに振り返ったが、俺はなにも言えなかった。

なにを言おうとしたのか、なにを言うべきなのかがわからない。

だから、そのとき俺が口にしたのは、ひよっとしたら俺の飾りない本心だったのかもしれない。

「おまえ、いい女だよ」

麻理は、それを聞くと白い歯を覗かせて笑みを作った。

「やっとわかったの？ 覚悟しなさい。これからあんたは私のことを好きになるんだかね！」

俺は、軽い足取りで去っていく麻理の背中を見ながら確かに自覚した。

俺は、麻理に惹かれてる。

ふと見ると、俺の横の梨子は、ジト目で俺を睨んでいた。

男より男らしい(後書き)

。。
ゴールデンウィーク中にここまで書き切るつもりだったのですが・

遅筆陳謝!

また厄介事の予感が満載だなあ

俺と梨子が須藤先輩に呼び出しを喰らったのは8月も下旬に差し掛かった頃だった。

交替の兵と一緒にバスに乗り込み、下から生えた草に割られたアスファルトの上を走ること数時間。

ほぼ1ヶ月ぶりに戻った鈴宮高校は、緑に溢れていた。

「おお〜！ すっげえ！」

俺と梨子は窓から身を乗り出して元は荒地だった場所を見た。

そこには、見事な畑が広がっていた。たった一ヶ月、それだけの期間で生い茂った野菜が芽を出し、花を咲かせている。くっそう、立ち会いたかったなあ。

「梨子ちゃん！」

畑からは働いている人が梨子に気付き、手を振っていた。梨子も俺に身体を支えられながら、両手を振り返した。

「ふむ、生育が早いな。これは、来月にでも収穫できるんじゃないのか？」

当然のように俺たちについてきた聖は煙草の煙を窓の外に吐き出した。

「み〜んなー！ 台風は大丈夫だったあー！」

「おう、けっこう大変だったけど、なんとかなったよ！」

「そっか〜！ よか、た〜〜！」

梨子は手でメガホンを作って大声で叫ぶ。畑からは、笑い声が上がっていた。梨子のやつ、愛されてるなあ。

バスが校門を通り、ロータリーで止まったときに、俺は軽い違和感を覚えた。人が多いのだ。

原因の一端はわかる。負傷兵だ。

周防橋で出た負傷兵は、程度を問わず一度、ここ、鈴宮市の第1

地区に運ばれることになっている。

医者不足のため、医者と負傷者を一箇所に集めていることと、電気を自家発電している鈴宮高校なら比較的多くの電力を使えることが理由だが、どうもそれだけではないように思えた。

俺は、バスから降りると校舎には入らず、体育館に向かった。

そこは、まさに野戦病院という表現が的確な有様だった。

所狭しと並べられたパイプベッドとそこで唸る負傷兵。申し訳程度に巡らされた白いカーテン、その内側からは悲鳴が聞こえてきている。

エアコンは全開になっているようだが、いかんせん広さと人口密度から利きが悪かった。まあ、それでも外よりははるかにマシではあるが。

と、突然俺は殺気を感じた。

反射的に身をひるがえして、突撃してきたちっこいのをかわした。

「ちよわ〜〜！」

「つとお、いきなりなにするんだ、さっちゃん」

俺は、真横から飛び蹴りしてきたさっちゃんの襟首を掴み上げた。

「なーおい〜〜！ いそがしすぎるう〜う〜ー！」

そう言っつてさっちゃんはじたばたと暴れる。さっちゃんの声に、比較的軽傷のやつらが、俺の周りに集まってきた。

「菅田！ 橋のほうは大丈夫なのか？」

「ああ。今は小康状態。俺がここに来れる程度にはな」

俺は現在の戦況を説明した。ここにいるほとんどは周防橋で負傷した連中だ。俺の話しに興味があるのは当然だった。

「さっちゃん、こっちはどうだ？」

「だから、いそがしすぎる！ 医者がぜんっぜん足りないんだってそれに器具も。とりあえず麻酔とレントゲン！ 患者が起きたままショットガンの弾を目視で取り出すとか無理だから！」

「須藤先輩には言ったのか？」

「……私、あのオンナ嫌い」

あゝ、相変わらずいじめられてるのか。

「わかった。後で俺が伝えておくから。さっちゃんも必要なことはちゃんとと言えるようにするんだぞ」

「うー、うつつさい！ わたしはいそがしいんだ。直以も手伝え！」

「後でな。今から須藤先輩に会ってくるから、っと、そうだ。なんか、人が多くないか？」

「直以たちがへたな戦争してくるからっしょ！ もっと怪我人でないようにせんそーしろ！」

「あゝ、胸に痛いし、相当な無茶振りだな。そういうんじゃない、さ。なんか見た覚えのないやつら多い気がする」

「ああ、それなら雄太のせいよ。アイツが昨日戻ってきたときに、いっぱい人を連れてきたの」

「……雄太が、戻ってるのか？」

「おう、呼んだか？」

俺たちはその声に振り返った。

そこには、今まで待ち続けていた親友の姿があった。

「雄太おにいちゃ〜ん！」

「おおっと、梨子。真っ黒に焼けたな」

雄太は抱きついてくる梨子を持ち上げた。

「やれやれ、しぶといな。どこかで野垂れ死んでいるかと思っただぞ」「生憎だったな。俺は梨子のウェディングドレス姿を見るまでは死なないことにしてるんだよ」

「うん、一緒にバージンロード歩こうね〜」

それを聞いて聖は肩を竦めた。

梨子のバージンロード……、なんだ、この胸のもやもやは。

「そっちはそっちで大変だったらしいな」

雄太は梨子をお姫様抱っこに抱え直し、俺に向かった。

「ああ、本気でおまえを心待ちにしていたんだぞ」

これで、ようやく反撃できる。そう意気込む俺に雄太は待ったをかけた。

「反撃は、もう少し後だ」

怪訝な顔を浮かべる俺に雄太は梨子を渡してきた。

梨子の脇と膝の下に手を入れて受け取る。ぺっとりとした汗に湿った肌が心地いい。

「それで、長戸市の様子はどうだったんだ？」

「ああ、なかなかひどい状況だったよ」

雄太は見てきたことを話した。

長戸市の差別体質。劣悪な衛生状態。その不満を発散するように周囲の集落を略奪して回っていること……。

「おかしいな」

「なにがだ、聖。雄太の話は前々から俺たちで想像していた通りだろ」

「長戸市には霧島明俊がいる。低能は低能なりの仕事をするとは思うんだが……」

言われてみれば、なるほど、うまく組み合わない。美紀さんが、生活というもつとも根本的な部分を劣悪なまま放置するとは思えなかった。

あるいは、放置することに意味があるのか……。

と、思考の袋小路に陥り始めたとき、梨子に頬を突付かれた。

「……梨子、そろそろ降りない？」

「いーやー！」

密着した肌の部分がじんわりと熱を溜めてきている。ぶつちやけるのなら、暑い。

俺は梨子から手を離して落とそうとしたが、梨子は俺の首にぶら

下がって落下を防いできた。身体を揺すって振り落とそうとするが、梨子は手と足で俺にしがみついて放れようとしなない。

「そつだ、なかなか面白いことを聞いたぜ」

「はあはあ、なんだよ」

「おまえがご執心の原田美紀のことだよ」

ぴたりと、俺と梨子は止まった。

「……………どうだった？」

「評価は真つ二つ。圧倒的によく言うやつと圧倒的に悪く言うやつ。比率的には7対3くらいだったかな。あの女については好きか嫌いかのどつちかで、どうでもいいって人はひとりもいなかったよ」

「敵と味方をはっきり分けてるんだろうな。あの人らしいといえはあの人らしいが、痛つてえ！」

と、突然梨子が俺の頬に爪を立ててきた。

梨子は俺から離れると、一度俺に短い舌を突き出し、雄太に向かった。

「雄太お兄ちゃんは今まで長戸市にいたの？ 私たち、なかなか戻つてこないから心配していたんだよ」

「まあ、大半は長戸市だったけど、長戸市の周りの集落も回ってきたんだ。長戸市が略奪の対象にしているところだな」

「それで、どうだった？」

「まあ、話すことはいくつもあるんだけど」

「なんだよ、歯切れが悪いな。さつさと言えよ」

「噛まれていないのに、ゾンビになった子供が出た」

一瞬、心臓が止まった。

今、雄太の言った言葉の意味を反芻する。頭ではわかっているけど、その意味するところが言葉にならなかった。

「……………まさか、空気感染？」

搾り出すようにそう言ったのは聖だ。

「いや、違つとも言い切れないんだけどな。だけど、俺たちが警戒していた通り、蚊とか虫を媒介して感染した可能性もあるし、そこは上下水道の区別もつけてない場所だったから、なにかの拍子に感染するものを摂取してしまったのかもしれない」

雄太の言ったことは、多少のなぐさめにもならなかった。

俺たちは、ゾンビには噛まれなければ大丈夫だという安心感の元に生活を築いてきた。だが、もし空気感染でゾンビになるのならば、なにもしていない、普通の生活の中でもゾンビに感染する恐怖と戦うことになるのだ。

「とにかく、俺はそういう場所で一々生活を立て直す手伝いをしてきたんだ。どうしようもないところは集落ごと放棄して、そこにいた人たちをここまで連れてきた。ほとんどが徒歩だったから、それに時間を喰つちやつたんだけどな」

「それで、やたら人が多いのか」

「お優しい雄太くんだ。それが私たちの利益に繋がるのか？」

「まあ、ね」

雄太は聖の嫌味を正面から受け止め、言った。

「9月10日だ」

「？ 雄太お兄ちゃん、なにが？」

「俺が回ってきた集落と、長門市内の一部が一斉に蜂起する。全方位から、長戸市を攻撃するんだ。俺は、その約束を取り付けてきた」

俺は雄太の言葉を吟味した。謀を伐ち、交を伐つ。悪くない戦略ではある。だが、問題もある。

「そいつら、戦力として期待できるのか？」

「まず無理だろうな。数だけならそれなりになるけど、銃の1丁も所持していない集落がほとんどだ。いいところ、牽制程度だろう」

「主力を周防橋に釘付けにしてその連中に長戸市の中心を攻めさせるか、あるいは長戸市の主力を周防橋から撤退させて、我々はその後背を攻めるか、なかなか興味深いところだな」

聖は腕を組んで煙草を噛んだ。俺は聖から煙草を奪い取った。

「でも、まだ2週間以上あるよ。ばれないかなあ」

「なに、ばれてもいいのさ。長戸市が我々の行動を察知するなら、動きが生まれる。そこに、我々は乗じればいいだけのことだからね」
聖は新しい煙草を取り出し、火を点けようとしてやめた。

頭の中ではこれからの戦略が渦を巻いているのだらう。

聖はひとり嬉しそうにくつくつと笑い出した。頼もしいやら不気味やら、俺は先ほど聖から奪った煙草を啜えようとした、が、寸前で梨子に握り潰された。

と、そのとき背後で空気が揺れた。

そこには、今まで見たことのない女性が立っていた。

その女性は、白いスーツを着て白いタイトスカートを履いていた。右脇には正帽を抱え、文句の付けようのない起立をして俺たちに向かっている。紅のような硬さを感じるが、年の功というべきだろうか、その中にも柔らかさが見え隠れしていた。

俺は、雄太を小突いたが、雄太も女性を知らないようだった。

女性は、俺たちの視線に気付くと、一歩前に出て、俺、ではなく梨子に敬礼した。

「梨子さま、お初にお目にかかります。私は、谷川村から派遣されました尾崎2等海尉です。以後、お見知りおきを」

ああ、どこかで見たことあると思ったら、この女性の着ている服と帽子は海上自衛隊の制服か。……って、自衛隊!?

「自衛隊の人がなんの用ですか？ ひょっとして、救援隊が来たのか!？」

「詳しいことは鈴宮市の区長にお尋ねください。ここで私が説明すると、礼を失することになりますので」

そういつて女性自衛官、尾崎さんはにっこりと笑った。くそう、反論を許さない、いい笑顔じゃねえか。

「直以お兄ちゃん……」

梨子は、不安げに俺の小指を触ってきた。俺は安心させるために、梨子の手を握った。

「とにかく、あの爆弾女に話を聞こう」

俺は梨子の手を握ったまま歩き出した。雄太と梨子もついてくる。尾崎さんも、一定の距離を保ってついてきていた。

「ところで梨子、自衛官の人に様付けされるって、おまえなもの？」

「うええ！ そんなの知らないよお」

梨子の慌てように嘘はなさそうだ。

なんか、また厄介事の予感が満載だなあ。

「……直以、ひとつ議題を出そう。自衛隊は、強いかわいいか」

聖は、俺の横に並んでそんなことを言った。尾崎さん自身にも興味のある話題なのだろう、俺が振り返って彼女を見ると、彼女は笑顔で俺に微笑み返してきた。

「まあ、単純に言って強いだろう。俺に自衛隊の訓練をやれって言われても、普通にリタイアする自信があるぞ」

「嫌な自信だなあ」

「うるせえよ。自衛隊は国から金貰って鍛えているだけのことはあるんだって。世界的に見ても自衛隊の評価はかなり高い。国内の評価とは裏腹にな。世界でも有数の防衛費、志願制で士気も高く、識字率は100パーセントでそのほとんどが高卒以上の学力を持っている。外国の研究機関が自衛隊を評価するとき今のところは必ず上がるな」

「ふむ、直以が言うことはもっともではある。だが、ひとつ、絶対的な前提を除いているな」

「聖お姉ちゃん、それはなあに？」

「自衛隊は、軍隊ではないということだ」

「……それに、俺にどう答えると？ 今さら憲法9条がどうとか話すのか？」

「いや、そんなことではない。自衛隊員の多くが自分たちは軍隊ではないという、その理由がわかるか？」

「そりゃ、自分たちが軍人だ、とは言えないからじゃないのか？」

「そうじゃない。理由があるんだ。自衛隊には、軍法会議がないんだ」

「……どういうこと？」

「戦争という非常事態において、平時における法律に基づいて行動しなければいけないということだ」

「えっと、日本の戦車にはウインカーがついているって聞いたことがあるけど、そういうこと？」

「うむ、わかりやすいな。戦場でライトをつけ、ウインカーを点灯させなければ戦後に道路交通法で処罰される。そんなことを考えながら戦わなくてはいけない」

「それ、戦えるの？」

「無理だろうな。非常事態において、最善を尽くせないということはそのだけで致命的だ。自衛隊は、そういった法的制約を受けているのだよ」

「おまえの言うことのほうが前提がおかしいだろう。その法的制約つてのは日本国憲法によるものだろう。今現在、日本って国が機能していないんだからその前提は無意味だ」

聖はそういうと、にやりと笑って俺に顔を近づけてきた。聖の煙草臭い息が俺の顔にかかる。

「直以、その通りだよ。つまり、法的制約の受けない自衛隊は強いということだ。味方になるのか、それとも敵対するのかわからないが、そのことだけは心に留めて置いたほうがいい」

俺は、梨子と手を繋いでいないほうの手で聖を押し退けた。

「わかったよ、とりあえずは、俺たちの親分に話を聞くことにしよう」

俺は、重厚な扉のノブに手をかけた。

また厄介事の予感が満載だなあ（後書き）

今回は、いつにも増して突っ込みどころ満載でお送りいたしました。

とりあえず、この小説における自衛隊が最強の軍事的組織であると思っ
て頂けたのなら幸いです。

ビニールプールとビキニ

時として一番難しいのは現状認識である。そんなことを考えてみる。

……え〜つと、つまり、なにが言いたいのかということと、俺の見た非常識な光景に頭が追いついていないのだ。

とりあえず理解できることから一個一個確認してみよう。

俺はドアノブに手をかけ、回した。重厚な扉はゆっくりと開き、部屋の姿を俺の目に映した。

あ、この部屋というのは鈴宮高校3階にある校長室のこと。いわば、ここは俺たちにとってホワイトハウスの執務室。ここにいる俺たちのリーダー、須藤清良の呼び出しに従って俺と梨子、あとおまけで聖と雄太、さつき会ったばかりの尾崎さんは出頭したのだ。

うん、ここまでは大丈夫、なんの問題もない。

部屋の中にいたのは3年の3人。

ひとりはいづ井海斗。今まで谷川村への使節団に参加していたらしいが戻ってきたのだらう。そういえば尾崎さんは谷川村から来たって言ってたな。

もうひとりは荒瀬宏。我らが頼るべき兄貴分だ。荒瀬先輩はいつものように格子窓から外を見ていた。俺たちがノックもせず校長室に入ってきた際にも一瞥しただけで視線を外に戻した。うん、いつも通りのお人だ。

そして、問題は最後のひとり、俺たちを呼び出した張本人だ。

須藤清良。

鈴宮市第1地区長にして2000人近い鈴宮朝倉連合の実質的リ

「ダー。」

見た目天使、中身大魔王のこの性格破綻者がここに居るのはいい。当然だ。いると思ったから俺たちはここまで来たのだ。

「だけど、さ。あきらかにおかしいだろう。」

「そういう結論に至った俺は、とりあえず叫ぶことにした。」

「あんた……。ふっざけんじゃねえよおおお！」

「とりあえず目に入ったことを確認してみる。」

「ここは校長室、無駄に豪華な赤絨毯が敷かれているのはいつも通りだ。」

「いつもと違うところは中央に置かれているはずのガラステーブルと来客用ソファが端に寄せられ、代わりにあるのが子供用のビニールプールだったこと。」

「うん、突拍子のないことを言っているのはわかっている。だが、事実だ。」

「そして、そのプールに浸かるは我らが指導者、艶かしい姿態をビキニで包み、絨毯の上に水飛沫を垂らしまくっているのだ。」

「あ〜ん、直以くん、久しぶりいー、セイラ、直以くんにあえなくて寂しかったわ〜ん」

「そんなことをのたまって須藤先輩は子供用プールから勢いよく立ち上がった（当然絨毯はびしょ濡れだ）俺の前まで来た。」

「そして、腰を屈めて胸の下で腕を組む。これがなにかのグラビアだつてんなら俺も楽しめるんだけどさあ。その、あんたのしてやりたり顔を見ると白けるんだよ。」

「荒瀬先輩、相変わらずこの人はふざけてますね」

「ん？ ああ、今は進藤がないからな」

「荒瀬先輩は俺に視線も向けずにそう言った。そうか、いつもなら

紅がぴしゃりと締めてくれてたんだな。

「も〜う〜、頑張ってきた直いくんのためにこんな恥ずかしい格好して待つていたんだよ〜」

そんなことを言いながら須藤先輩は、どこからか取り出した水鉄砲で俺の顔に水をかけた。梨子、なにを勘違いしているのかは知らないが俺を睨むのはやめる。

「ていうかさ、あんたもそろそろ気付けよ」

「ん〜、なーにが〜?」

俺の腕に、無駄にでかい胸を押し付けてくる須藤先輩に、俺は親指で俺の後ろを示した。

ぴたりと、須藤先輩は固まった。俺が指し示した先には、須藤先輩を見てやはり同じように固まっていた尾崎2等海尉がいたからだ。瞬間、脇腹に激痛が走った。

「梨子ちゃん、覚えておいて。ここのツボは大抵の人が苦しむ急所だから」

「梨子にいらんことを教えるな!」

須藤先輩は俺の言葉を無視して颯爽と俺から一步離れた。極めて癪なことだが、着ているビキニもあって一流モデル並みに格好がいい。この人はええ格好しいだから尾崎さんを見て余所行きモードに入ったのだろう。

「お見苦しいところをお見せしました」

「え、あ、いえ。見事な暑さ対策です。エアコンに慣れすぎてる私としては見習いたいくらいです」

尾崎さんはわたわたと慌ててそう答えた。案外可愛い人だな。

俺は、執務用の机の上に腰を下ろし、臼井先輩を見た。どの年代からも好かれる癖のない美青年だ。

「臼井先輩、久しぶり。谷川村はどうだった?」

「うん、悪くない手応えかな。このまま話し合いが進めば来月にも谷川村から電気が送られてくるよ」

「それは重畳、せめて水だけでも確保できれば、と思っていたから

ね。それで……」

俺は一度言葉を切って尾崎さんを見た。

「無料で？」

臼井先輩は苦笑を浮かべた。

「いや、話が早くて助かるよ。向こうからの要求は2つ。谷川村と鈴宮市の間には幾つかの市を挟んでいるのは知っているだろう？」

その幾つかと谷川村は敵対している。鈴宮市に電気を通すには、その敵対している市にも供給することになるんだ。まずはこれをなんとかすること」

「やれやれ、揉めているのは鈴宮市と長戸市だけじゃないってことだな。それで、もうひとつは？」

「もうひとつは遠野を谷川村に連れてくること」

「……は？」

思わず間の抜けた声を吐き出してしまった。いや、正直爆弾女のビキニより驚いた。

俺は、梨子の栗色のおかつぱ頭を撫でた。

「遠野ってこいつのことですか？」

「名簿で確認したから間違いないよ。鈴宮高校の学生で遠野梨子はその子しかない」

俺は、思考をまとめるために深く深呼吸した。梨子は話の展開についていけないでおたおたしているし、聖は顎の先に手を当てて黙考している。いち早く質問したのは雄太だった。

「それ、どういうことですか？」

「さて、僕としても理由については聞かなかつただけど。でも、悪い条件じゃないんじゃないかな？ 彼女が谷川村に行くだけで2000人以上が電気の恩恵に授かれるんだから」

「ふざけんなよ！ 梨子を身売りしろってのかよ！」

「悪いが、梨子くんの処遇がわからない以上、はいそうですかと渡すわけにはいかないな」

雄太と聖の反論に臼井先輩は仰け反っていた。

梨子は、そつと俺に寄り添ってきた。微かに震えている。いきなり話の渦中に立たされて不安なのだろう。俺は、すでに汗ばんでいる握りっぱなしの梨子の手をぎゅっと握った。

「少しだけ説明させていただきます。梨子さま、月子さまのことはご存知ですね？」

「月子？ ひよつとして、高橋月子ちゃんのことですか？」

「梨子、それ、誰だ？」

「えつと、前に谷川村には飛行機事故で生き残った友達がいるって話したよね。月子ちゃんはそのひとりなんだけど……」

梨子の顔には、その彼女がなんで？ と疑問が浮かんでいた。

「月子さまは親友の梨子さまのことで常に心を痛めていました。それが今回運良く生存が確認できたので、これを機会に保護しようとお考えになった次第です」

「ふ……む、なるほどな」

「聖、もつたいぶらずにわかったことは言え」

聖は、気取った足取りでビニールプールの前に立った。

「谷川村には特徴があつてね。谷川神道教という新興宗教の本部があるんだ。尾崎さん、ひよつとしたら、きみはその信者ではないのかね？」

「はい。私を含めた自衛隊の一部は、ゾンビ発生後、電気が使え、比較的被害の少なかった谷川村で土地を提供してもらって部隊を維持しています」

自衛隊の中に尾崎さんみたいな信者がいたことで、いち早く谷川村と連絡が取れて部隊を維持できたってことか。

「梨子さんの友人である『月子』なる女性は、おそらく教団内で高い地位にいるんじゃないかね？」

「そうです。月子、月読つぐよみさまは谷川神道教を初め谷川村一帯を指導なさっております」

月読、ね。信者の前では言えないが、そこはかたない安っぽさがいかにもな新興宗教だ。

「で、でも月子ちゃんがそんなのやってるなんて、私まったく知らなかったよ」

「隠していたのか、それともここ数年でそういった地位になったのかはわからないが、今現在そういったことをやっているということなのだろう。ここ数ヶ月で谷川神道教の実権を握る『なにか』があったことと共にね」

「きな臭いな。だが、そんな話はどうでもいい。用は梨子をどうするか、だろ？」

「それについてはもう結論は出ているわ。梨子ちゃん、谷川村までちよつと行ってきてくれる？」

「それ、聞こえませんかよ。本人の意向はまったく無視ですか？」

俺は、須藤先輩を睨んだ。が、須藤先輩は俺の態度を予想していたのだろう、俺の眼光を軽く受け止めていた。

「大丈夫。向こうは一度顔を見せろって言ってるだけなんだから。用が済んだら戻ってくればいいのよ」

「そううまく行きますか？」

谷川村は、いわば敵地だ。もし、戻ってくることを妨害されたら、それつきり。監禁されることになるだろう。

「うーん、気になるなら、直いくんも梨子ちゃんについていったら？」

俺は、梨子の腕を放し、肩を掴んだ。

「当たり前です。梨子を危険な一人旅なんてさせられるわけないでしょ」

「それでは私も行こう。直以と梨子くんの2人だけでは不安だからな」

「俺も行く。まあ、当然だな」

俺と聖、雄太は梨子を囲むように立った。梨子は、涙ぐみながら俺に寄りかかった。

「ん、雄太ちゃんと聖ちゃんは駄目。雄太くんは『9月10日』の顔役になつてもらおうし、聖ちゃんは雄太くんと一緒に色々と微調整

やってもらおうから。というより、4人で行ったら戻って来ないかもしれないから、2人は人質ね」

「よく言った。だが、私たちが素直に言うことを聞くと思っているのかね？」

須藤先輩を見る聖と雄太の目は、もはや敵を見るそれだった。

それに対して、須藤先輩は平然と、最強のカードを切った。

「宏、直いくんと一緒に谷川村まで行ってきて」

「ああ、わかった」

しゅつと、口の中が乾いた。

食後にお茶。そう自然に流れるように須藤先輩は言い、荒瀬先輩は応じた。

この場にいる、尾崎さん以外の全員が瞬時に理解した。

この数ヶ月、家族のように生活してきた梨子に関することですから、聖と雄太を黙らせる力がある。荒瀬先輩が動くということはそういうことだった。

「……ここで荒瀬先輩を使いますか？」

「直いくんたちにとって梨子ちゃんが大切な存在だっていうのは知っているわ。それは、直いくんたちに限らず、他の多くの人にとっても、私にとつてもそう。だけど、谷川村からの水と電気供給は梨子ちゃんを送り出さなければいけないほどの重要案件なの。それなら、私たちも出し惜しみしてられないものね」

俺たちの持ち得る最強のカード。

言ってみれば、俺たちが周防橋に戦力を集中して後方を疎かにできるのは、荒瀬先輩がいるという安心感からだ。

いくら近日中に大きな戦闘はないだろうと目測が立てられるとはいえ、鈴宮高校の鎮守を動かす。

俺たちの切り札を使うというその意味を俺たちは理解しないわけにはいかなかった。

が、その上でも俺たちが梨子を手放すという選択肢はなかった。

引くに引けない状態、それを打破したのは渦中の張本人である梨子だった。

「直にお兄ちゃん、私自身の意向は無視なの？」

「おまえは黙ってる」

「な・お・い！ お兄ちゃん」

梨子は肩に置かれていた俺の手を払うと、身体を半回転して俺に向かった。

「だーいじょうつぶ 私、谷川村に行くよ。月子ちゃんとは友達なんだから、ひどいことはされなと思うし、ね」

梨子はそう言っただけで微笑んだ。無理しているのが丸わかりな微笑だ。俺がなにかを言おうとすると、梨子は慌てて止める。

「直にお兄ちゃんが言ってくれたいことは嬉しいよ。だけど、私は直にお兄ちゃんの足手まといにはなりたくないの。少しでも、役に立ちたいの」

それだけを言うと、梨子はさっと俺から離れた。

「あ、ほら。私さっちゃんのお手伝いしないといけないから」

そのまま後退り、梨子は脱兎の如く校長室から出て行った。

「決まりね、直いくん。本人の意向はさすがに無視できないわよね。出発は明日だから、用意はしておいてね」

「……貸しだからな」

「身体で返しませうか？」

そう言っただけで須藤先輩は、尾崎さんがいるにも関わらず自身の胸を揺すった。この人、本気でうぜえな。

俺は、荒瀬先輩を見た。

「よろしく。悪いけど、全面的に頼らせてもらいますよ」

「ああ。だが、フォローはしておけよ」

俺は、苛立ちを隠しもせずに大きな舌打ちをした。

「ああ、わかってますよ！」

俺は、校長室を出て梨子を追った。

私、しやわせだあゝ

俺は小走りで先ほど来た道を戻った。

そしてたどり着いたのは、体育館だった。

「おゝ、直以。手伝いに来てくれたの？」

ちっこい身体を精一杯に動かして俺を出迎えてくれたのはさっちゃんだ。

「さっちゃん。梨子が来なかったか？」

「梨子ちゃん？ ううん、来てないけど」

来てないのか。あいつ、どこ行ったんだ？

さっちゃんは周りの人になにやら指示を出した後、俺のところに来た。意外にも、いろいろと指図するところはけっこう様になっていた。

「なに？ なんがあったの？」

「いや、大したことじゃないんだけど」

「なにになに？ レンアイごと？ おねーさんが相談に乗ってあげよつか」

「……仕事しろ、研修医」

「むぎや~~~~~！」

さっちゃんは白衣の袖余りで俺を乱打してくる。っと、いかん、今はさっちゃんと遊んでいる場合じゃないんだった。

「悪いさっちゃん。ちよつと急いでるんだ」

「なに？ほんとに手伝ってくれないの!？」

「また後でな」

「あとつていつよ」

「来年か再来年」

「ぎゃーうー！」

俺はさっちゃんのわめき声を背後に聞きながら体育館を出た。

と、体育館の出口で柔らかいものとぶつかった。

「悪い。急いでいたから」

「いえ、私もよく前を見てなかったから、って、直以くん？」

俺がぶつかつたのは、3組の長である内藤晴美だった。相変わらずの大きな胸だ。

「久しぶり、戻っていたんだね」

「ああ。須藤先輩に呼び出し喰らってね」

俺は、内藤の顔を見た。

「？ どうしたの、直以くん。急いでいるんじゃないの？」

「あ、ああ。そう、なんだけど……」

軽い葛藤。

三つ編みにメガネ、それに巨乳という内藤のトレードマークに変わりはない。変わったのは顔付きだ。

頬は痩せこけ、目は窪んでいる。傍目にも、内藤が疲れているのがわかった。

「内藤、大丈夫か？」

「え、なにが？」

「なにがって、おまえ、相当顔色悪いぞ」

「あ、うん……。最近、酷暑が続いているから、夜眠れないんだ」
内藤は俺から目を逸らしてそう言った。

「倒れたら元も子もないから。無理せず少し休めよ。なんだったら俺から須藤先輩に言って3組の仕事を減らしてもいいからさ」

「……休めばなんとかなるの？」

「内藤？」

「ごめん、私、本当に余裕がないみたい。直以くんは私の心配をしてくれてるのに、こんなことじゃ駄目だね」

「愚痴ぐらいならいくらでも聞くよ。吐き出して楽になるならいくらでも手伝うからさ」

「ううん、大丈夫。吐き出したって、今は変わらないしね」

その言葉で、内藤がなにに苦しんでいるのか、俺にはわかった。

内藤は、ゾンビの溢れるこの世界に絶望しているのだろう。

事実として世界は変わり続けている。

朝起きて家族と会話し、学校に遅刻しないように登校する。もう、そんな日常は戻ってこない。

現実の日常は、街にはゾンビが徘徊し、生き残った人間が互いを殺し合う、そんな世界。内藤にとっては悪夢そのものだ。

「直以くん。私は本当に大丈夫だから。敵対していた私を組長に抜擢してくれた須藤先輩の恩にも報いなくちゃいけないしね」

「……内藤。俺のことは頼ってくれていいから。大して役にも立たないのは自覚しているけど」

「うん、ありがと。そのときはお願いね」

内藤は痩せこけた頬を引きつらせて笑顔を作った。

ひよつとしたら、このとき本当に俺を必要としていたのは、梨子ではなく内藤晴美だったのかもしれない。

俺には、内藤が内面からじわじわ死んでいくのが、わかったはずなのだから。

世界は変わってしまった。だが、変わらないものもある。そのことを伝えられたのなら、あるいはあんなことにはならなかったかもしれない。

俺は、内藤が体育館に入っていく背中を、ただ見送ることしかしなかった。

そのことを一生後悔することになるなんて、このときの俺は思いもしなかった。

梨子を発見したのは、すでに日が落ちかけた夕方になってからのことだった。

屋上の給水塔の影で、ぽつりと座っていたのだ。

「この、家出娘が。こんなところに隠れてやがったか」

「へへ、見つかったやつだ」

梨子は、ちろつと短い舌を出すと立ち上がってスカートについた埃を払った。

「ねえ、直以お兄ちゃん。図書室は見た？」

「ああ」

図書室は、今まで俺たちが使っていた、いわば私室のようなものだった。それが、今は俺たちが置いていた私物は端に寄せられて荷物置き場のようになっていた。

鈴宮高校の人口は増え続けている。そんな中で図書室のような広い空間を俺たち4人だけで使うのは贅沢な特権だったから、仕方ないことではある。

「またひとつ、私の居場所がなくなっちゃった」

梨子はそう言って悲しそうに笑った。

「居場所ならまた作ればいい。それだけのことだろ」

「うん……、そうだね」

梨子は暗がりの日陰から黄金色の夕日の中に流れた。栗色の柔らかい猫毛が光を湛えて輝いた。

「直以お兄ちゃん。私は今、幸せだよ」

梨子の顔は逆光で俺からは見えない。

「聖お姉ちゃんと雄太お兄ちゃんが私のことを想ってくれて、直以お兄ちゃんが傍にいてくれる。怖いくらいに幸せ」

俺が一步近づくと、梨子は俺に背を向けて表情を隠した。

「大丈夫、私は大丈夫」

「梨子……」

「絶望なんて、いつも傍にあるもの。世界が私の思い通りになったことなんて、今まで一度だってなかった。今回だって同じ。今までと、同じこと……」

俺は、そつと梨子を後ろから抱きしめた。

梨子は、細くて小さい、女の子だった。

「おい、馬鹿妹。なんで勝手に自己完結しているんだ？」

「そんなこと……、してないもん」

梨子の声は割れている。もはや涙声だった。

「俺も一緒に行くんだしさ。ちよっとした小旅行みたいなもんだ。

今生の別れつてわけでもないし、そんな気負うことなんてないぞ」

「いつく。でも……、ひゃあん」

俺は、梨子の耳たぶ（案外福耳）を食^はんだ。梨子は身悶えるが、

俺は梨子を離さなかった。

「おまえは幾つか勘違いしている。まず第一に、須藤先輩はおまえを特使にして谷川村に派遣しただけで、おまえを差し出したわけじゃない」

梨子は身悶えるのを止めると、そつと俺に寄りかかってきた。

「次に、おまえには拒否権がある。行きたくないなら、はつきりそう言えばいい」

「そんなこと、言えるわけないよお」

「なんでだよ。俺たちは生きるために一緒にいるんだ。須藤先輩たちが俺たちに気に入らないことを命じるんなら、俺たちはそんなやつらを見限ればいい。それだけのことだろ」

梨子は、首を傾げた。俺の頬を梨子の髪がくすぐる。

「それともうひとつ。おまえの最大の勘違いだ。雄太や聖、俺がおまえを手放すはずがないだろ。言っとくけど、これにはおまえの拒否権なんてないからな」

「……ひどおゝい、私の意思は無視なのお？」

「そつだ。おまえの意思は完全無視だ。おまえは、黙って俺たちの傍にいればいいんだよ」

「直にお兄ちゃんは、私の傍にいてくれるの？」

「おまえが嫌だつていつてもな。思春期娘に嫌われる父親ばりに付きまつつてやるよ」

「ほんとうに？ ぜつたい？」

「ああ。俺たちは、遠くの誰かより、おまえのほうが大切なんだからな」

梨子は、ようやく肩の力を抜いた。

「直にお兄ちゃんは、紅ちゃんより私のほうが大切？」

「？ ああ。そうだな」

「麻理先輩よりも？」

「え？ あ、いや、うん。大切だ」

「聖お姉ちゃんよりも？」

「……さて。なんでそこで聖が出てくるんだ？」

梨子は、俺に後ろから抱かれながら、くすくすと笑った。

「ざくんねん。もうちょっとで逆転さよなら満塁ブザービーターだつたのに」

「なんかいろいろ混ぜってるぞ」

梨子は柔らかい頬を俺の顔にこすりつけてきた。

「直におにいちゃん、私、しやわせだあ」

「……」

俺は、梨子の細い肩を掴んで突き飛ばした。

梨子はつんのめって振り返り、だらしない怒り顔を使った。口元はへの字で頬を膨らませているが、目尻が蕩けそうなくらい垂れ下がっている。

「もう！ もうちょっと甘えさせてよ」

「調子に乗るな」

「あつと、そろそろいいかな？」

背後からの突然の声に、俺は慌てて振り返った。梨子も気付いていなかったらしく、びっくりして10センチほど飛び跳ねていた。

「お、おう、聖。いつからいたんだ？」

「最初からいたよ。別に出歯亀を気取るつもりはなかったんだが、2人の世界を壊すのは悪いと思ってね。それより、手伝ってくれないか？」

「？ なにをだよ」

「荷物運びだよ」

聖はそれだけ言うと、さっさと屋上を後にした。俺と梨子も聖の後を追う。

聖は、まず図書室に寄って私物を担いだ。

まあ、今晚ここで過ごすわけにもいかないから、新しい寢床を確保するんだろう。

そう思って俺と梨子も聖に倣い、自分の荷物を持った。

「それで、どこに行くんだ？」

「ロータリーだ。もう雄太が用意しているはずだ」

その言葉の意味は、すぐにわかった。

ロータリーには、大型の車が止まっていたのだ。それもキャンピングカー。

日本ではなかなか見かけない、牽引車に引かせるタイプの、トラベルトレーラーってやつだ。

「すつげ、こんなの映画の中くらいでしか見たことねえぞ」

俺の隣の梨子も口を開けてばかんとしている。そんな俺たちを見て、聖は人の悪い笑みを浮かべた。

「ウエルカムホーム、新しい我が家へ。さあ、入りたまえ」

俺は梨子の荷物を持って聖の後に続いた。車内には、弱冷房が効いていた。

「おう、直以。遅かったな」

「雄太、これ、どうしたんだ？」

「いやあ、昔からこういうのに興味あつてさ。扱っている店を知ってたから、さつきちょっと拝借してきたんだ」

雄太は、優しい目で、言葉もなく車内を見渡している梨子を見ながらそう言った。

「ぶつちやけるならさ。これは須藤先輩に対する牽制だよ。俺たちはいつでもこんなところ出て行ってやるっていう姿勢を見せるためのな。……直以、どうした？」

「いや、これが周防橋にあればもう少し楽できた、と思つてさ」

実際はガソリンで動くこの車をそんな頻繁には使えないんだろうけど、それでもあの炎天下の日々をこの車で過ごしたかった……。」「さつとと、4人揃ったところだし、ちよつと話そうぜ。梨子、こつち来て座りな」

雄太に言われて、梨子はソファに腰下ろした。俺も隣に腰を下ろす。四角いテーブルを挟んで、雄太と聖も座った。

「それで、梨子。どうする?」

「え? え? どうするつて?」

「とりえあず、谷川村に行くか? もし嫌だつていうんなら、このまま車を走らせて、どっかに行くつて手もあるよ」

梨子は、軽く深呼吸すると、テーブルの下でそつと俺の手を握つてきた。

「私は、谷川村に行つてみようと思う。月子ちゃんは、私の友達だし、直にお兄ちゃんもついてきてくれるから。それに、それがみんなのためになるんだつたら、私はみんなのためにも行きたい」

いい子ちゃんの回答だ。だが、ぎゅつと握つた手から、梨子の俺たちへの信頼が伝わつてきた気がした。

「わかつた。当面はそれだけ決まっていればいい。俺たちには、十分だよ」

「当面はつて?」

「谷川村に行つたら、鈴宮市には戻つてきたなくなるかもしれない」

「その可能性は高いな。電気も使えて自衛隊にも守つてもらえる。安全性でも生活水準でも、こことは比較にならないほど谷川村は高いだろうからな」

「そつか……、そんなこと考えもしなかつた」

梨子は、俺の顔を下から見上げてきた。

「直にお兄ちゃん、どうする? いつそのこと、谷川村に移住する?」

俺は、梨子から顔を逸らした。

「さあな。行つてから考えるよ」

梨子は、破顔すると俺の胸に顔を埋めた。

「わかつてるよ。私は、直以お兄ちゃんのこととはちゃんとわかつてます！ 今は私のことが大切って言ってくれたけど、紅ちゃんや麻理先輩が大切じゃないわけじゃないもんね。2人は、私にとつても大切な人たちだもんね」

「知つたかぶつてんじゃねえ！」

「にゃああん」

俺が梨子の小さな頭をヘッドロックすると、梨子は俺の腕の中でじたばたと暴れた。

「ふ……む、梨子くんのほうは大丈夫そうだな」

「ああ。直以。もしおまえらが『9月10日』までに戻つてこれなかつたら、俺と聖は独自に動くことにする。だから、それまでにここに戻つてきてくれ」

「ああ、わかつてる。梨子も連れてなんとか戻つてくるよ」

俺は、梨子を小脇に抱えながら、雄太と拳をぶつけ合った。

翌日、俺と梨子は久しぶりに制服に身を包んで、校門前に集合した。

制服といつても冬服だ。ブレザーは肩に担いでワイシャツは旅行用バックの中、スラックスとTシャツという格好だが。

梨子は、手で俺と自分の顔をパタパタと扇いだ。

「ふう、今日も絶好調で暑くなりそうだねえ」

「ああ、そうだなあ」

日陰もない校門前で俺たちは立ち尽くしていると、数人の男女が校舎から歩いてきた。

見送りの須藤先輩と同行の尾崎さん、それに俺と同じような格好

をしている荒瀬先輩だ。

「直以くん、待たせたわねえ」

「ええ、待たされましたよ。この暑い中ね」

「いやくん、そんなにお・こ・ら・な・い・の」

俺が愚痴を言つと、須藤先輩は冷たい指先で俺の頬を突付いてきた。

そして、そつと俺に顔を近づけた。

「とにかく、9月10日までに戻ってくることに。電気のこと水のことこの際どうでもいいわ。私があなたに伝える最優先事項はそれだけ」

俺が須藤先輩を見ると、この真性悪魔は、もういつもの人を喰った笑みを浮かべていた。

謀らずも雄太と同じことを俺たちのリーダーは言つたわけだ。

「わかつてますよ。ま、無難にまとめてきます」

「うん、お願いね」

俺は、須藤先輩の隣に立っている長身の男を見た。

「荒瀬先輩、よろしく」

「ああ……」

荒瀬先輩はそれだけを言つて梨子の荷物を取り上げた。もともと多弁な男じゃない。この人はこんなもんだらう。

「申し訳ありませんが、そろそろ時間なので。そろそろ出発いたします」

尾崎さんはそう言つて歩き出した。俺たちも尾崎さんに付き従つて歩き出す。

こうして、俺たちは谷川村に向けて出発した。

……て、ちょっと待て。谷川村まで歩いて行くのか？

俺の疑問は、爆音と共に、時間を置かずに解明されることになった。

ニブルⅡ乳首です

俺たちが徒歩で向かった先は、鈴宮高校の隣にある運動公園だった。

そのこのグラウンドに、大型の軍用ヘリがローターを回した状態で待機中だったのだ。

「これは、まいったね」

胸の中に去来するさまざまな思い。その中でも最大のものは、こいつで攻撃されたらどうするか？ だった。

鈴宮高校では、対ゾンビ対策、対人対策を考えた防備をしているが、対空、対兵器対策は、まったくやっていない。

今回、谷川村は交渉という手段によって俺たちに接してきたが、もしこれが朝倉市のように、銃を突きつけて梨子を渡せと言ってきたら、俺たちは拒否できるのか？

そんな内心の冷や汗を察したのか、梨子は不安そうな顔で俺を見上げていた。

俺は、梨子の髪をそつと撫でた。

「……大丈夫だって。とりあえずは、知ることだ。その情を索むつてな」

俺はそう言つて梨子を安心させようとしたが、梨子は足を止めて俺の腕を両手で引きとめた。

「？ どうしたんだよ。大丈夫だって」

「直にお兄ちゃん。愛について語りましょう」

「……は？」

「愛さえあればなんにもいらない。そう思わない？」

「おまえがなにを言いたいのかまったく理解できんが、愛だけだと栄養が偏りそうだな。他のものも満遍なく食べたほうが健康にはいいぞ」

「うっん、私は愛さえあればそれで幸せ。直にお兄ちゃんがいれば

それだけでいい。もうこの際、聖お姉ちゃんも雄太お兄ちゃんもいない！ さあ、直以お兄ちゃん！ 私を連れて愛の逃避行を……痛！

「とりあえず落ち着け。おまえ、なにテンパってるんだよ」

「うーうー」

梨子は唸りながら俺を上目遣いで睨む。その顔は、なんでわかってくれないの？ と問いかけていた。いや、悪いがまるつきり理解できないんだが。

「おい、直以。そいつ、どうかしたのか？」

「あ、いや、大丈夫です。ほら、梨子。行くぞ」

俺は梨子を半ば引きずるようにヘリの前まで移動した。

そこには、姿勢よく尾崎さんに敬礼する自衛官の人がいた。どうやら海上自衛隊ではなさそうだったが。

「なにか、問題は？」

「いえ、この辺りは治安もよく、暴徒もゾンビの襲撃もありませんでした」

尾崎さんはその報告を聞くと、俺たちに向き直った。

「どうぞ、お乗りください。短い空の旅ですが、安全はお約束します」

尾崎さんは笑顔でそう言ってくれたが、俺たちは動かなかった。

梨子が俺の腕を強く引いて乗り込ませなかったのだ。

「梨子、本当にどうしたんだ？」

梨子はもう涙目で微かに震えている。まるで脅えているようである。ああ、そういうことか。こいつ、高所恐怖症だったな。両親を失った飛行機事故が原因ならそれを責めるわけにもいかないが、少しまいったな。俺たちだけ陸路で行きます、とはいえないだろう。

俺は、少し考えて荒瀬先輩を見た。

「荒瀬先輩。ちょっと俺の荷物を頼みます」

「わかった」

渋るでもなく、荒瀬先輩は都合3人分の荷物を片手で持った。：

…相変わらずの馬鹿力だ。

俺は、梨子の前でしゃがんだ。

「ほら、梨子」

「？ 直にお兄ちゃん？」

「おんぶだ」

「ふええ？」

「初めて会った日も屋上から非常階段におんぶで降りただろ？」

梨子は、しばらく無言だったが、やがてそつと俺の肩に手を置いて、だが、すぐに離れた。

そして、我らが妹姫はぼそりとのたまった。

「……お姫様抱っこがいいじゃん！」

言い終わるのを待たず、俺は梨子を抱きかかえた。そのままじたばた暴れる梨子を肩で担ぎ、ヘリの中に放り込む。

「尾崎さん、お待たせ。くだらないことに時間とらせて悪かったね」

「いえ、仲がいいんですね」

ヘリ内にいる他の自衛官も、俺と梨子を見て笑いを噛み殺していた。

どこか、穏やかな空気の流れる中、ヘリはゆっくりと離陸する。

ヘリ内は、快適とまでは言えないまでも、そこそこのスペースがあった。

梨子は俺の胸に抱きついてガタガタと震えている。その様子を尾崎さんは心配そうに見ていた。

「あの、直以さん。梨子さまは大丈夫ですか？」

この人も俺の苗字を直以だと思っただけやがるな。まあ、別に不都合でもないから訂正しないけど。

「大丈夫ですよ。こいつ、昔に飛行機事故に遭って高所恐怖症なんですよ」

「そうでしたか。飛行機事故のことは伺っていたのに、配慮が足りず、すいませんでした」

「だから、大丈夫だって。そうだよな、梨こぐお！」

梨子のやつ、シャツの上から俺の胸を噛みやがった。しかもピンポイントでニブラ

「まあ、そんなに時間はかからないから。ほら、飲みな」

そう言っただけに缶コーヒーを差し出してくれたのは、迷彩服を着た、まだ若い男だった。

「ありがとうございます。でも、缶コーヒーは貴重品じゃないんですか？」

「まあ、流通が壊滅しているからね。ほら、あんたも」

そう言っただけ男は荒瀬先輩にも缶コーヒーを渡した。

「三尉、こちらは月読さまのお客様です。言葉使いに気をつけなさい」

「うるせえなあ。俺たちはあんたの親父さんには従うけど、あんたにも、月読にも従う義理はないよ。谷川教の信者じゃないんだから」
なにやら空気を悪くしている2人を尻目に、俺は缶コーヒーのプルタブを引いた。

「梨子、コーヒー飲めるか？」

「……口移しなら」

俺はコーヒーを口の中に溜めた。コーヒーの香りとミルクの滑らかさが舌内に広がる。

梨子は驚いて俺の胸から離れた。

俺は、梨子の目の前で、コーヒーを飲み込んだ。

「もおう！ どうしてそんな意地悪するの!？」

「馬鹿なこと言ってるからだろうが。ほら、飲め」

俺は牛娘に缶コーヒーを渡した。梨子は、再び俺の胸に抱きつきながら缶コーヒーをちびちびと飲んだ。

「えへへ、間接キス」

俺は梨子の言葉を聞こえなかったことにした。いつの間にか、梨子の震えは止まっていた。

「っち！」

と、突然荒瀬先輩は舌打ちした。その動作で全員の視線が荒瀬先輩に集まった。この人、威容があるからなあ。たぶん本人もそれがわかってるから普段は須藤先輩の影に隠れて目立たないようにして

いるんだろっけど。

「荒瀬先輩、どうかしましたか？」

「……外を見る」

俺は、さすがに軍用というべきなのだろう、小さな窓から外を見た。

そこで、俺は現実を見せつけられた。

見下ろすは鈴宮市と近隣の数市。外観だけならそれほどの変わりはないはずなのに、その都市群はすでに死んでいることがわかる。

灯らない信号。

生い茂る雑草。

割れたガラス。

放置された都市は、わずか半年で、廃墟の態を晒していた。それがパノラマ一面、視野の続く限り続く光景。

ひよっとしたらどこかに安全な場所があつて、いつか救助隊が助けに来てくれるかもしれない。考えないようにしているそんな淡い希望は、完全に砕かれた。

へりのローター音を聞いたのだろう、ビルの屋上から女性が俺たち両手を振っていた。

その女性は、自分の存在を気付かせようと必死に声を張り上げ、柵を乗り越え、そのまま落下して姿を消した。

他のビルの屋上では、ゾンビがまるでペンギンのように身体の向きと顔の角度を揃えて俺たちを見上げていた。

そこかしこで散見されるそんな光景に、へり内の全員が苦渋の表情を浮かべていた。

空の旅は、本当にすぐに終わった。

直線距離にして100キロ以上ある道のりは、1時間もかからなかったのだ。

それでも俺たちに気を使って十分な時間を使ってくれたらしかった。

「ほら、梨子、降りるぞ」

「う、うん。なんかふらふらする……」

梨子は俺に寄り掛かりながらへりを降りた。

「申し訳ありませんが、もし武器をお持ちでしたら提示していただけますか？」

尾崎さんにそう言われて、俺はポケットに手を突っ込み、裏返した。

昨日の段階で須藤先輩に拳銃を渡されたのだが、俺は返したのだ。自衛隊相手に拳銃一丁でなんとかなるとは思えないし、通用するとも思わないからだ。

武器を使う外交が戦争であり、武器を使わない戦争が外交である。それならば、外交において役にも立たない武器を所持するのは無粋というものだろう。

俺たちは、手ぶらで敵地のど真ん中にいるのだ。

「そうだったものはもってきてないんで安心してください」

「そうですね、失礼しました。それでは、これから神殿まで案内いたします」

神殿、ね。

俺たちが降り立ったのは、小型ながらもよく整備されている飛行機発着場みたいところだった。そこからリムジンに乗り換える。

俺と梨子、荒瀬先輩に尾崎さんの4人はリムジンに向かい合わせに乗ると、リムジンは音もなく静かに走り出した。

しばらく林道を走る。すれ違う人も、すれ違う車も、ゾンビもない。谷川村は現実として、山の中にある僻地のようだった。

にもかかわらず、ダムと水力発電所があつて村の財政が豊かだったおかげなのだろう、道路の舗装はしっかりと整っていた。

「こつこつちゃなんだけど、やっぱり田舎ですね」

「ええ、都心なら数市はまるまる入る敷地にたった3万人ほどの人口ですから」

「今はどれくらいなんです？」

「ゾンビ発生するときには、一部で被害も出ましたが、この地域ではそれほど大きな被害はありませんでした。立地のおかげかゾンビの流入も限定的です。今は避難民を受け入れて5万近くになっています」

谷川村は基本的に、下流に続く渓谷と山間を走る国道の2経路しか侵入方法はない。ヘリや飛行機を使った空路や山道を越えるという例外を除けば、その2箇所を監視しておけば、人やゾンビを含めた物流の行き来はチェックできるとのことだった。

「人口の倍近くを受け入れて大丈夫なんですか？」

「幸いにも、谷川村はもともと林業と酪農が盛んでしたので」

その言葉を証明するように林が途切れ、広大な牧場が目の前に現れた。

青い草原の上を雲の陰がゆつくりと横断し、牛と馬が草を食べていた。

どこかのどかな、平和な風景だった。

「おお、梨子。見ろよ。牛だぞ」

「え？ あ、うん……」

「？ どうかしたか？」

「うん、ちよつと酔っちゃったみたい」

まあ、高所恐怖症の上に慣れないヘリ。次いで休む間もなく車で

移動だもんなあ。

「気付かずに申し訳ありません。少し車を止めて休みましょうか？」

「え？ ううん、大丈夫です！ ほら、こうしていれば」

そう言って梨子はへりの中と同じように俺の胸に顔を埋めた。

「……吐くときは先に言えよ、ぐわ！」

梨子は、返答の代わりに本日2度目のニプル齧りを炸裂させたのだった。

阿頼耶と阿摩羅

神殿と呼ばれている建物は、10階建てのビルに相当する、谷川村内においては異質な建物だった。

無駄に大きい鳥居を潜り、無駄に厳重な門を通過してそこに辿り着いた俺たちは、やはり無駄に豪勢な歓迎を受けた。

よろける梨子に肩を貸しながらホールに入る。そこで俺たちは、肌寒いほど冷やされたエアコンの空気と、大音量のファンファーレに出迎えられた。

吹き抜けのホール、赤絨毯、居並ぶ人たちは和装だ。どこか、ちぐはぐな感じが否めない。新興宗教だから、といえばそれまでなのだろうが。

「もうちよつと慎ましくしてくれないもんですかね。こっちが恥ずかしくなりそうだし」

「あなたたちは我々が招待した正式な国賓ですから。さあ、行きましょう」

国賓、ね。俺たちは尾崎さんの後に続いて赤絨毯の上を歩いた。その先で待っていたのは、3人の女性だった。

左に立つのはこの真夏日に重そうな紫紺の着物を着た女性。赤い唇に泣きほくろ。匂い立つような艶のある女性だ。

右に立つのは紫紺の羽織袴をまとった女性。こちらは左に立つ女性とは対照的に動きやすそうな格好も相まって活発な感じだ。

2人と、年齢ならば30代の中頃くらいに見えたが、キャリアウーマンのように現役で綺麗な人たちだった。

そして、中央に立つのは、俺たちとそう歳の変わらない女の人だった。

黒絹の髪を背中に流し、切れ長の瞳を伏せている。格好は緋袴に千早。

どこか憂いのある美少女。

……正直に白状するのなら、俺のタイプだ。

豪奢さでは左右の女性に敵わないが、色合いからか、あるいはその演出しているのかもしれない、一見目立たないはずのその女の人が一番目立っていた。

尾崎さんは俺たちを誘導すると、そつと脇に逸れた。結果、俺たちはその3人の女性と対峙した。

「ようこそいらっしやいました、鈴宮市からのお客人。私たち、谷川村はあなた方を歓迎いたします」

そつ淀みなく言ったのは左の女性だ。俺が視線を向けると、にっこりと微笑み返してくれた。その仕草は、余所行きバージョン全開の須藤先輩を思わせた。

「私は、阿摩羅^{あまら}。右に立っているものは阿頼耶^{あらいや}。そして、我らが主月読さまであらせられます」

紹介された右に立つ女性、阿頼耶さんは軽く俺たちに頭を下げた。なんとというか、隙のない女性だ。なにか武道をやっているのかもわからない。

俺は、俺の右やや後方に立つ荒瀬先輩を見た。俺の視線に気付いているだろうにドン無視、ここは俺にやれっつてか。

俺は軽く咳払いをして、名乗った。ちなみに、俺たちは途中で着替えたのでちゃんと正装を着ている。

「盛大な歓迎、ありがとうございます。おれ……、僕は菅田直以。こちらが荒瀬宏で、遠野梨子です」

梨子は、紹介されると俺から少しだけ離れてお辞儀をした。さつきから下を向いて微動だにしない友人の様子が気になっているようで、困惑気味だった。

「長旅でお疲れでしょう。部屋を用意していますので、まずはお寛ぎください。しばらくしたらお呼びに上がりますので、お昼は会食にしましょう。夏海、引き続きお客人のお世話を」

「はい、了解しました」

夏海と呼ばれた尾崎さんは、敬礼ではなく頭を下げて阿摩羅さんに答えた。

「それでは、後ほど」

阿摩羅さんは、完璧な形式美を保ったまま、俺たちに背を向けた。慇懃ではあるが、一方的に俺たちに用件を伝えただけだ。別にいいんだけど、どうもやられっぱなしな気がした。

このままつても癪なので、俺は梨子の腰を少し強めに押して、前に出した。

梨子は少しよろけながらも振り返って、避難がましく俺を睨んだ後、背中を見せる友人に声をかけた。

「月子ちゃん！」

月読、もとい月子の動きが止まった。梨子は追い討ちをかける。

「月子ちゃん、久しぶり！」

月子は、振り返り、梨子を見ると憂いを帯びた仮面を取り払い、装束を乱しながらも駆け寄って梨子を抱きしめた。

「梨子ちゃん！ よかった、本当によかった……、すごく心配したんだよ」

「うん。私も心配だった。よかったね、よかったね」

梨子と月子は抱き合ったまま、声を上げて泣き出した。

見てみると、阿摩羅さんは困ったように頬に手を当て2人を眺め

ているし、阿頼耶さんは眉間に皺を寄せている。尾崎さんはもらい泣きしてしまつて、目元をこすつていた。

ここまでなら感動の再会で終われたのだが、残念ながらそううまくはいかなかった。

「いよう梨子！ 無事だつたんだな」

その演技掛かった声は、ホールの2階から聞こえた。

俺たちと同じ歳くらいの私服の男だ。やけに色の白い男が俺たちを見下ろしていたのだ。

梨子は顔に驚きの表情を浮かべながら、その男の名を呼んだ。

「……陽一くん？」

「そう、陽一だ。久しぶりだなあ」

男は階段を駆け下り、やけに臭う化粧の香りを残して俺の横を過ぎ去つた。

そして、やたら大げさに両手を広げ、梨子と月子を抱き締めた。

「うーん、梨子、真つ黒だなあ」

「う、うん……」

その馴れ馴れしい所作を見ていた阿頼耶さんは、男の襟首を掴むと、強引に梨子たちから引き剥がして赤絨毯の上に転がした。

「い痛いなあ、なにするんだよ、阿頼耶」

「下がれ！ この場に貴様を呼んだ覚えはない！」

その大喝に場は一瞬で引き締まった。梨子も月子も、俺も身を竦ませてしまった。平然としているのは、荒瀬先輩と空気を読んでいない男だけだった。

「なんだよ、俺だつて梨子と再会したかつたんだよ。なあ、梨子、おまえだつてそうだろ？」

返答に窮している梨子の肩に俺は手を乗せ、さりげなく引き寄せ

る。

「梨子、知り合いか？」

「うん……。日野陽一くん。飛行機事故のとき、私と月子ちゃんと、もうひとり生存した子なんだけど……」

日野陽一という少年は、梨子の肩越しに俺を睨みつけてきた。

「おまえ、なんだよ」

俺は思わず苦笑してしまった。なるほど、場違いだ。仮にも客として扱っているものに向かって、おまえ、とはね。

と、突然、陽一の顔色が変わった。俺の視覚野にいる全員が俺と梨子を見て驚愕の表情を浮かべた。

物事に動じなさそうな阿摩羅さんすらも眉を寄せていた。

「……梨子？」

「……ふえ？」

俺は梨子の顔を見た。そして、俺は周りの人間と同じ表情になった。

梨子の鼻から下が、真っ赤に染まっているのだ。

……鼻血だ。

梨子は焦点の合わない目で俺を見上げ、糸が切れた人形のように崩れ落ちた。

慌てて俺は梨子を抱き止める。

「梨子、おい梨子！」

梨子はすでに意識がないようで、荒い息を吐いて苦しそうに目を閉じている。

そのとき、梨子の身体が浮き上がった。

荒瀬先輩が俺から梨子を奪い、抱き上げたのだ。

「直以、荷物を持って」

「あ、はい」

俺は空いた手で3人分の荷物を持った。余談ながらかなり重い。この人は、これを片手で優々と持っていたのか。

その間に荒瀬先輩は梨子の容態を見ると、周りに言った。

「医務室は？」

「4階です」

即座に答えたのは阿摩羅さんだ。

その声に反応して阿頼耶さんも周りに指示を出す。

「エレベーター、それに担架を！」

「必要ない。階段は？」

「あの防火扉の向こうだ。夏海、案内しなさい」

荒瀬先輩は梨子を抱えたまま、一気に階段を駆け上って行った。

「過労ですな」

初老の常勤医にそう言われて、俺はようやく安堵のため息を吐いた。

「今日一日静養すれば問題ないでしょう。それとあなたたちにも言うておくが、日に焼け過ぎですよ。日焼けは、低温火傷と変りありませんからな。以後気をつけることです」

後で俺たちにも精密検査を受けるように言っと、常勤医は医務室から出て行った。

俺と荒瀬先輩、それに尾崎さんは頭を下げて常勤医の先生を見送った。なんか、さすがのお医者さま、さっちゃんとは大違いだった。医務室に残された俺たち3人は、ベッドで寝ている梨子を見た。

エアコンと氷嚢のおかげか、今は呼吸も楽になり、安らかな寝息を立てていた。

「尾崎さん、すいませんね。なんか失態見せちゃって」

「あ、いえ。体調不良ですから。それに気付かなかった私の責任です」

「あんた、なんでも自分のせいにする癖があるみたいだね。別に誰もあんたのせいだなんて思っていないから、変に畏まらなくていいよ。なんか、こっちまで恐縮しちまう」

言葉を崩した俺に尾崎さんは少しだけ困惑した後、微笑を浮かべて彼女自身も少しだけ口調を崩した。

「ありがとう。そう言ってもらえると助かるわ」

と、毛布から目元だけを出して、梨子が俺を見ているのに気付いた。

俺は枕元のイスに腰かけると、梨子の冷えた額を撫でた。

「ずっと働きっぱなしだったもんな。昼の会食はキャンセルになったからゆっくり休めよ」

「うっ、鼻血なんて恥ずかしいところ見られちゃったよ、もうお嫁にいけない」

「大丈夫だよ。いざとなったら雄太に引き取らせるから」

「こういうときは嘘でも直以お兄ちゃんが嫁にもらってやるって言うってください！」

いや、なんか、さ。今言質をとられるとまずい気がして……。

梨子はゆっくりと半身を起こした。

梨子が今着ているのは病人用の浴衣だ。胸元が寂しいのは、まあ、ご愛嬌というものだろう。

「直以お兄ちゃん、ごめんね。また迷惑かけちゃった」

俺は尾崎さんと顔を見合わせ、笑った。

「？ なあに？」

「別に誰もおまえを迷惑なんて思ってないってえの。俺たちは部屋に荷物を置いてくるから、大人しく寝てろよ」

「傍にいてくれないの!？」

「すぐに戻ってくるから」

梨子はアヒル口を作って恨みがましく俺を睨んでくる。

「うっ、本当にすぐ戻ってきてね」

梨子をベッドに寝かせて毛布をかけてやると、俺と荒瀬先輩は尾崎さんに先導されて医務室を出た。

案内されたのは、八階にある一室だった。

手前は畳敷きの和室で、襖で区切られた続きの部屋から外を見れば、山脈が奥のほうまで見渡せる。

掛け軸にお茶請け、隅にある電話にはルームサービスまである始末。まるで旅館宿だ。

「滞在中はこの部屋を自由に使ってください。私は向かいの部屋に待機しているので、出かけるときやなにか用があったら気兼ねなく声をかけてください」

尾崎さんはそう言って部屋から出て行った。

俺と荒瀬先輩は荷解きをすると、一息吐いた。

「さつきはありがとうございました」

「あ？ なにがだ？」

「梨子が倒れたときですよ。不覚にもパニックになっちまったから助かりました」

「ああ……」

荒瀬先輩は無愛想に軽く頷いた。

「直以、おまえはどう思う？」

主語は省略されているが、意味はわかる。この教団のことだ。

「臼井先輩に事前に聞いていたのと同じですね。月読っていうのは、象徴で飾り。実質的にはあの阿頼耶と阿摩羅、それに自衛隊が主導権を握っているみたいですね」

もつとも、それならなぜ梨子を名指しで呼んだのかが疑問になってくる。月読の単なるわがままだったのか、それ以外になにか理由があるのか。わがままだったのなら、俺たちが目的を果たして帰るのにも苦労はなさそうだが。

「まあ、阿頼耶と阿摩羅（最小の一步前）というには派手な女の人でしたけどね」

荒瀬先輩は苦笑する。

数字の位には単位が存在する。

大数では一、十、百、千、万といった具合にだ。これが、少数に

向かうと分、厘、糸となる。野球で打率を表すやつだ。

この単位のうち、存在する最小のものは涅槃寂静という。その一つ前の位が阿摩羅、その前が阿頼耶だ。

谷川神道教は陽のアマテラスに対する陰のツクヨミを信仰する教団だと聖が言っていた。

役職名に少数の単位を使っているのもそういう理由だろうとのことだ。

もっとも、阿頼耶も阿摩羅も仏教用語ではあるのだが、そういった緩さは新興宗教だから、というより、盆暮れ正月にクリスマスまで祝う日本独自の文化によるものだろうが。

どっちにしても谷川村が味方となるのか敵になるのか、谷川村に弱みがあるのか、またその弱みは致命的なものか、俺たちの得になるのか、その辺の見極めから始めることになりそうだ。

慣れない外交戦、その幕はすでに上がっていた。

阿頼耶と阿摩羅（後書き）

うなりやべべん、格好ええ。

お風呂（男湯）

俺と荒瀬先輩は軽く今後の打ち合わせをした後、梨子のいる医務室に行こうとした。

そのとき、ちょうどいいタイミングでドアがノックされた。

ドアを開けると、顔に覚えのある自衛官の人が立っていた。確か、へり内で尾崎さんと揉めていた人だ。

「立て込んでいるところ悪いね。尾崎さんからきみを連れてくるよ」と言われたんだ」

「尾崎さん？ 確か向かいの部屋にいるって言っていたけど」

「そうなのか？ それなら事情が変わったんだろう」

俺は背後にいる荒瀬先輩を見た。梨子を放っておくわけにもいれないが、せつかく向こうからのアプローチを袖にするのももったいない。

「俺が遠野のところに行くから直以はそっちに行け」

「あ、きつたねえな。荒瀬先輩が行ってくださいよ」

「おまえを名指しだろ。それぐらいの苦労はしておけ」

まあ、荒瀬先輩が梨子の傍にいてくれるのなら、安心ではある。

俺は少し考えて荒瀬先輩の指示に従うことにした。

と、少し困ったことになった。学生服のシャツに梨子の鼻血がべつとりと付いているのだ。

その旨を伝え、変えのシャツに着替えようとする俺を自衛官の人は止めた。

「別に気にしなくていいよ。フォーマルな席じゃないらしいから。早く行こう」

自衛官の人はそう言って、なにかを避けるようにさっさと歩いて行ってしまった。

俺としては普通に血の付いたシャツを着替えたかったんだが。

ひとりだけ先に行かせるわけにもいかない。俺はそのままの格好

で、自衛官の人を追った。

「どうだい、谷川村は？」

エレベーターに乗り込み2人きりになると、自衛官の人は口を開いた。

「いや、これだけガンガンにエアコンを利かせられるってだけでも電気のありがたみが身に染みてますよ」

「今年は炎暑だからね。けっこうきつかっただろ？」

「対策はありましたから死人は出ませんでしたけど。それでも熱中症になる人は少なくなかったですよ」

そう言つと自衛官の人は軽く笑った。

「ええつと、あなたは……」

「そういえば名乗ってなかったか。俺は佐伯3等陸尉」

「陸上自衛隊？」

「ああ。大学卒業して幹部候補生として陸上自衛隊に入ったんだけど、その直後にゾンビ騒動だろ？ 運がよかったんだか悪かったんだか」

「幹部候補生なのに、陸尉なんですか？ 幹部候補生学校を卒業するまでは陸曹長の階級だと思っただけど」

「よく知ってるね。いくつかの理由があるんだけど、まあ、一番の理由は仕官の不足から臨時で任命されたんだよ」

「大卒半月の素人を？ 下仕官を抜擢したほうがいいんじゃないですか？」

「きみ、けっこうはつきり言うね。その理由は、優秀な下仕官は仕官以上に重宝していることと、優秀じゃない下仕官は抜擢できないってことかな」

臨時とはいえ階級すら指揮官の一存で変えるってことは、防衛省が完全に機能していないということだろう。

そんなことを話していると、上昇していたエレベーターはひとつ上の9階で止まった。

エレベーターを降りるとそこはちょっとした広場だった。少しだけ付け加えるのなら、馴染みのある、広場だった。

リラクゼーションコーナーとでもいうのか、マッサージチェアに卓球台。隅のほうには、さすがに電源は抜かれているものの卓上ゲームのコーナーなんかもあった。

「佐伯さん、ここって、なにかの温泉施設？」

「ああ、知らなかったんだ。以前村営でやっていたホテルを教団が買い取ったらしいんだよ。あれなんかはその名残り。使っているやつはさすがに見たことないけど。でも外のテニスコートやゴルフ場は今でも使われているらしいな」

佐伯さんはさっさと『男湯』の暖簾を潜っていった。怪しさ満点だが、俺は躊躇しながらも暖簾を潜った。

「ここからはきみひとり。シャツなんかは洗濯しておくから出たらこの浴衣を着て。あ、タオルはこれを使ってね」

矢継ぎ早に佐伯さんはそう言うと、脱衣場から出て行った。

ひとり俺は脱衣場に取り残される。

少しだけ、動悸が激しくなった。

俺は逸る気持ちを抑えて、ゆつくりと服を脱いだ。

温泉、裸の付き合い、枕営業！

白状するなら、俺の頭の中はそんな言葉で一杯だった。

いや、だってわざわざ畏まって尾崎さんが風呂場で待っているなんて言われたら、想像するだろう。

俺は手拭いを引っ掴むと、ガラス戸を開けた。

瞬間、湯気と硫黄の匂いが俺の顔を覆う。

湯気が脱衣場に流れ、視野が広がった先には……、誰もいなかった。

薄暗い照明と地味な色調のタイル。広さは一般の銭湯と同じくら

いだが、なんの変哲もない浴室。

多少の落胆と、まあ、そうだろうなという納得を胸に抱いて、俺は木桶にお湯を入れて肩からかけた。

温泉は日に焼けた肌を刺激し、痛みを走らせた。今度は水で薄めてゆつくりとかけ、身体を洗う。

それが終わると、俺は湯船に浸かった。温泉はやはり肌に染みだが、肩まで浸かってしばらく耐えていると、やがて慣れてきた。

「あゝ、これはいいや」

風呂といえば水シャワーだったこの頃、温泉は俺の毛穴からゆつくりと浸透し、ゆつくりと身体中の汚れを落としていった。

なんか、ものすごく贅沢だ。

湯煙に曇ったガラスを手で拭き、外を見ると深緑の山々が見渡せた。富士山の絵などは必要としない天然のパノラマだった。

真昼間からの入浴、後で麻理（聖や紅は別に悔しがらなそうだ）に自慢することを心に決めていると、入浴室のガラス戸が開かれた。

入ってきたのは全裸の女性、ではなかった。

初老の男性だ。

身体に年齢相応の弛みは見取れるものの、芯の部分でよく鍛えられているのがわかる。おそらく、自衛隊関係の人だろう。

「失礼するよ」

男性は軽く身体を洗うと湯船に浸かり、俺の隣に座った。

「ふう、いい湯だねえ」

「そうですねえ」

俺と男性は温泉の中で気持ちよく伸びをした。

どこかで、かぼーん……と、小気味のいい音がした。

「菅田、直以くんだね」

しばらく俺たちは温泉を楽しんでいたが、男性は唐突に口を開い

た。

「ええ、あなたは？」

「私は陸上自衛隊の尾崎1佐だ。ここいらの自衛隊のまとめ役だと思ってくれればいい」

「それはそれは。大物が出てきましたね」

「いやいや、きみこそ。鈴宮市と朝倉市2000人を取り仕切るナンバー3という話じゃないか」

「そんなふうに使われていたんだ。本当のところは須藤先輩の使い走りですよ」

俺と尾崎1佐は、同時にため息を吐いた。

くそう、尾崎違いもいいところだ。佐伯さん、わかって階級を隠してやがったな。

俺は手拭いを頭の上に乗せ直した。いつまでもエロに拘っているわけにもいかない。隣にいるのは、超がつく大物だ。

「その尾崎1佐がこんなところでなんの用です？」

好々爺然とした尾崎1佐は、手拭いで顔を拭くと俺に身体の向きを変えた。

「理由は幾つかあるんだが、一番の理由はきみに対する興味かな？」

「興味？俺たちに接点はなかったと思うけど」

「接点はなくても話は聞こえているよ。なかなかの戦術家だって。

朝倉市との手並みは見事だったじゃないか」

「……白井先輩から聞いたんですか？」

「それだけじゃない。我々には独自の情報網があるんだよ」

「過剰評価もいいところだ。あんな綱渡り、もう一回やれって言われてもできませんからね」

「大勝にも驕らないのは大したものだ」

「だから褒めすぎだって」

「おしいなあ。鈴宮市の代表じゃなければスカウトしているんだが」

「仕官が不足しているって？」

「うん、切実な問題なんだよ」

「ここが温泉で裸の付き合いだからなのか、それとも舐められているのか、尾崎1佐は明け透けに自らの弱点を晒す。まあ、舐められているんだろな。」

「きみは、谷川村になにに來たんだね？」

「俺は上を向いて手拭いを目の上に置いた。視界が塞がれ、頬の上に冷たい雫が落ちた。」

「呼ばれたから來た、じゃあいけませんか？」

「それじゃあ切り口を変えようか。いつまでいる気かね？」

「目的を果たしたら帰りますよ。」

「その目的とは？」

「俺は、手拭いを取り、尾崎1佐のほうを向いた。」

「鈴宮市と朝倉市への電気と水の供給です。」

「尾崎1佐は、自分が問い詰めていたことに気付いたのだろな。苦笑を浮かべて手拭いで顔を洗った。」

「それについては、ひとつは可能でひとつは不可能だ。」

「谷川村が近隣の数市と揉めているってことですか？」

「うむ。電気を鈴宮市まで届けるには、当然送電線を使う必要がある。その間にある全市にも電気を供給することになるからな。」

「いけませんか？ 平和的にみんなに分けてくれれば円満解決だと思っけど。」

「できるならそうしたいが、そうはいかない。大人の事情、というやつだな。」

「谷川村では電気を使える特権を維持したい。そんなところですか？」

「電力には限りがある。まずは谷川村内で、ということだよ。」

「この言葉には欺瞞がある。事実、電力には限りがあるのしろなが、それを使う人間がゾンビ発生の混乱により激減しているからだ。」

「水力発電がいくら発電量の低い施設とはいえ谷川村とその近隣を満たすぐらいの電力は生産できるだろな。」

「だが、もし電気を供給するとなると、どこまで電気を供給するの

か、という問題が出てくる。

さすがに日本全国に送電できない以上、電気が行き渡らない地域が出てくるだろう。

電氣を使える地域はどこで線引きするのか？

それを谷川村内に限定したことは、妥当か不当か、判断は難しいところだった。

「でも、それなら水についても同じことが言えるんじゃないですか？」

「いや。水は即物的な死活問題だから。もし、水道を止めたら近隣の数市と言わず、数日以内に県内全域から避難民が死兵として殺到することになる。撃退は可能だろうが、弾薬も人的資源も無限ではないからね」

「窮寇きゆうこうには迫ることなかれ、ですか？」

「ほう、孫子か。軍争編だな」

追い詰めすぎると相手は他に手段がないとして必死になる。水を止めることは、敵をまさにその状態にしてしまうことになる、ということだろう。

俺は、お湯を肩にかけた。日焼けした肌は温泉に馴染んで、痛みは感じなかった。

「水は大丈夫で電氣は駄目だということはわかりました。ただ……」
「ただ？」

「大盤振る舞い過ぎますね。なんでそこまで教えてくれるんですか？ 俺としてはどうしても裏を疑いたくなる」

「こちらにももちろん思惑がある。早い話が、我々はきみたちに出て行ってもらいたいんだよ」

「正直すぎるな」

「わしもそう思う。だが、もっとも迅速で波風を立てない方法が、これなんだよ」

尾崎1佐は目を閉じてゆっくりと肩までお湯に浸かった。

「もうちよつと説明してもらえますか？」

「きみも欲張りだなあ。だが、まあ協力してもらえると見て話すことにしようか。菅田くんは、谷川村の政治体制についてどこまで知っているかな？」

「表向きは月読を頂点として阿頼耶、阿摩羅が補佐。実質的にはこの2人が取り仕切っているって聞いています」

「うむ、だいたい合っているかな。阿頼耶が谷川村内の治安を維持する警察的な役割を担い、阿摩羅が行政を担当する。それにわしら自衛隊が防衛を担当するという体制が出来上がっている。この体制の確立にもそれなりの騒動はあったんだが、現在はこれでうまくいっている」

「……それで？」

「この体制にこれ以上、亀裂を入れる可能性のある外的要因は潰しておきたい、ということだよ」

これ以上、か。言葉尻を捕らえるなら、すでに亀裂を入れるなにかがあることになるが……。

「それが俺たちだと？」

「正確には、『遠野梨子』という存在だ」

「梨子が!？」

俺は、湯船から立ち上がっていた。揺れる水面が尾崎1佐の顔を叩いたが、尾崎1佐はまるで動じていなかった。

「月読がお飾りであることはきみも気付いただろう。だが、今回きみたちを呼び寄せたように、彼女の意味は如実に政治に影響する。彼女の執心した『遠野梨子』を放置することはできないのだ」

「うちの梨子が月読を利用して裏から谷川村を操るって？ 考え過ぎですよ」

「そう考えるものもいる、ということだ。そして、月読が無理な提案をしてきたとき、今の我々では、それを拒否することは難しいんだ」

「それは、あなたが谷川神道教の信者ではないから、ですか？」

このおっさん、月読に敬称を付けなかった。それは信者じゃない

から、なのだろう。

尾崎1佐は、苦笑を浮かべて俺を見上げた。

と、そのとき突然、脱衣場へ繋がるガラス戸が開かれた。

浴室に入ってきたのは、女性だった。残念ながら服を着ていたが、尾崎さんだ。

尾崎さんは股間を隠す俺を無視して、湯船に浸かる尾崎1佐を睨んだ。

「おお、夏海。おまえも風呂か？」

「でも服を着て入るってのは無粋じゃないですか？」

「うむ、そうだ。待っているから、さっさと服を脱いできなさい」

「ふざけないで！」

男の団結なんてものは女のヒステリーで簡単に瓦解する。その真理を証明するように尾崎さんの怒声が浴室内に響いた。

それにしても、陸と海の違いがあるとはいえ上官に大声を上げるのはまずいんじゃないか？ 俺のその疑問は尾崎さんの次の言葉ですぐに解決した。

「父さん、どういっつもり？ 直以さんは月読さまの大事なお客さまなのよ？」

「どういっつもり、といっつも風呂が一緒になっただけだが？ なあ、菅田くん」

この、狸親父。俺にも演技に付き合えってか？

「ええ。黙って風呂を借りたのは謝るけど、なにも男湯に怒鳴り込んでくることもないんじゃないかな」

「そうだ。裸同士で歳の離れた友情を育んでいたところだよ。わたしも息子が欲しかったなあ」

「尾崎さんも一緒にどうです？ たまには親子で一緒に風呂つてもいいでしょう」

「服は脱ぐんだぞ」

「ふざけないでっって言ってるでしょ！？」

男2人は黙る。

ていうか、こいつら、やっぱり親子だったな。仲は悪そうだけど、自分が感情的になっていいることに気付いたのか、尾崎さんは軽く咳払いすると、俺に言った。

「と、とにかく、勝手なことをされては困ります。直以さん、私は外で待っていますので、早めにお上がりください」

尾崎さんはゆっくりとガラス戸を閉めて退場した。

どこかで、かぼーん……と、小気味のいい音がした。

「……愚娘が迷惑をかけたね」

「いえ。仲が悪そうだったけど、喧嘩でもされているんですか？」

「わしが駐在武官として外国の大使館に単身赴任しているときに、あれの母親がこの信者になってな。離婚こそしなかったが、ほとんど顔を合わせることもなく過ごしてきたんだよ」

この親子もいろいろと面倒臭そうだ。まあ、俺みたいな青二才が下手に関わったって問題がこじれるだけだろう。そんな義理もないしな。

「それじゃあ俺は先にごりましますよ。尾崎さんを待たせるのも悪いし、十分長湯になったから」

「うむ。菅田くん。近いうちに晩酌にでも付き合いなさい。くだらない駆け引き抜きに話し合おう」

「未成年に酒を勧めますか？ こっちがウーロン茶でよければいつでも付き合いますよ」

俺は浴室を出た。

着てきた制服は、洗濯に回されたのだろう、片付けられていたので浴衣を着た。

準備のいいことに氷入りの水差しがあったので、一杯飲んでから俺は脱衣場を出た。

外には、起立した尾崎さんが待つていた。

「先ほどは……、申し訳ありませんでした。あ、父の無礼も本当にすいません」

「いや、尾崎さんが浴室に入ってきたのは驚いたけど、親父さんは面白い話ができたとし無礼なことともされてないよ。むしろこっちがやっちまったんじゃないかな」

「あの……、よろしければ、私のことは夏海とお呼びください。尾崎、という名前、好きではないんです」

「……、わかった。それじゃあ夏海さんって呼ばせてもらおうよ」
「ええ、そうしてくれると、嬉しいわ」

尾崎さんは、口調を崩してそう言った。うん、固さが取れると、やっぱり可愛い人だな。

「あの、直以さん。ひとつ聞きたいことがあるんだけど」

「？ 俺で答えられることなら」

「荒瀬さんという方は、どんな人なんですか？」

……あ、あの人、無愛想だけど背は高いし、夏海さんはあの人
が梨子を抱えて走るところも見てるからなあ。夏海さん、ほんのり
頬を赤くしてるし。

俺は、少し考えて答えた。

「鈴宮市の実質的ナンバー2」

「ナンバー2は木村大地さんだと聞いていますが？」

「支持率ではね。えっと、須藤先輩の男、といえばわかるかな？」

俺は、少しだけ悪意を込めてそう言った。

「ああ、なるほど」

夏海さんはそう言ってひとり納得した。

俺はこのとき、夏海さんが妙にすんなり納得した理由がよくわからなかった。

ちなみに、その後向かった医務室で俺は梨子から非難轟々だった。
いや、梨子。俺は俺でお仕事してきたんだって……。

お風呂（男湯） （後書き）

陸自の幹部候補生学校は福岡にあるそうですが、今作の舞台は九州ではありません。

日本のどこかという設定ですが特に決めていませんので、今回のこととか、梅雨入りの時期とかで場所の特定はどうかお目零しく下さい。

やっぱり修学旅行の夜はコイバナでしょう！

夕方になると谷川村では雨が降り、昼に溜まった暑気を一掃してくれた。

聞くところによるとこの季節の夕立は毎日のように降ること。連日の熱帯夜に苦しんでいる俺たちとしては羨ましい話だ。

「梨子、大丈夫か？」

「うん。半日も涼しいところで休んだから。もう大丈夫だよ」

梨子はそう言っただけで腕を曲げて、膨らまない力瘤などを作って見せた。

まあ、万全ではないんだろうが、足元もふらついていないし大丈夫か。

梨子は医務室から部屋に移ると、畳の上に身を投げ出して頬杖を突いた。

「それに、私もお風呂入りたいし。温泉だったんでしょ？」

「ああ。ただし、覚悟はしておけよ。日焼けに染みるからな」

梨子は神妙に頷いた。が、板間から外の雨を見ていた荒瀬先輩は梨子に待ったをかける。

「遠野、部屋のユニットバスにしておけ」

「え〜！ おつきなお風呂、楽しみにしてたのに」

「直以と一緒にいいぞ」

「え！ それはやだ」

即答され、俺はへこむ。そんな俺を見て梨子は慌てた。

「あ、違うの、直以お兄ちゃん。えっと……、違わないんだけど、違うの！」

「いや、別にいいけどよ。夕飯までまだ時間があるから、ユニットバス、使ってこいよ」

「……うん。そうしよっかな」

梨子は立ち上がり、ちょこちょこ歩いていった。

部屋には俺と荒瀬先輩が残される。俺は、窓に近づいた。

「あれ？ もう雨止みそうですね」

「ああ。山の天気だからな」

「なんで梨子の風呂、禁止したんです？」

「おまえが言っていただろう。ここには遠野が滞在することを嫌う連中がいると」

俺が親父のほうの尾崎さんから聞いたことは、すでに荒瀬先輩には報告済みだ。

「その連中にしてみれば、いつ出て行くかわからない俺たちの行動を見張るより、遠野を殺したほうが能動的で確実だ」

暗殺？ いや、考えられないことじゃないか。

俺たちは用が済めば出て行くと尾崎さんには伝えてある。自衛隊関係は尾崎さんが抑えてくれるだろうが、なにも梨子を嫌う連中が一枚岩とは限らないのだ。

さすがに月読が公式に呼び寄せた俺たち3人を露骨に襲ってはこないだろうが、事故に見せかけた襲撃はあるかもしれない。

「俺がおまえ。谷川村にいる間はなるべく傍にいてひとりにさせるなよ」

「……わかりました。気をつけます。でも、これは長居しないでさつさと帰ったほうがよさそうですね」

「ああ。欲を言えば涼しくなるまではここで避暑したいところだがな」

と、そのときなにか間の抜けた悲鳴が聞こえた。

「あゝ、梨子、どうかしたか？」

「なんでありません！ ちょっとお湯に肌が染みただけー、ぴやああああ！」

言ってる側から悲鳴があがる。あの痛みは俺も経験済みだから突っ込むのはやめておいてやろう。

夕飯は、豪勢なものだった。

先付、小鉢、前菜ときて、メインは地元牛の石焼きステーキ。味付けは岩塩だけというシンプルなものだが、それだけに素材の自信を感じられる一品だった。

「お、お肉だあ」

昼食は病人食だった梨子は感動に目を潤ませながらステーキを見ていた。

鈴宮市では肉といえば保存のきくベーコンやソーセージ、それ以外では缶詰というのが最近の食事情だ。新鮮なステーキなんてものは、俺にしても半年ぶりのものだった。

「梨子、おまえ体調悪いんだよな。俺が変わりに喰ってやってもいいぞ」

「直以お兄ちゃんこそ。私、いっぱい食べて早く元気にならないといけないんだから。直以お兄ちゃんのお肉、ちょうだいよ」

俺と梨子は笑顔で睨み合った。こいつ、けっこう食いもんに対してうるさいな。

「直以」

「なんですか？　いくら荒瀬先輩に言われたって肉はやりませんよ」

「なに言っただおまえは。長戸市との一件が落ち着いたら、本格的に酪農をやるぞ」

……なんかこの人、燃えてるな。

「牛なんてどこから仕入れてくるんですか？　どこかに野良でもいいればいいけど」

「どこかにいんだろ。探して来い」

「無茶振りするなあ。鶏くらいなら農家の庭先にでもいそうな気がするけど、牛や豚ってなるとそうそうお目にかかれないしなあ」

「それじゃあまずは養鶏からだね」

と、なぜか荒瀬先輩に迎合して乗り気の梨子。

「直にお兄ちゃん。でも、新鮮な卵とか牛乳はすごく欲しいよ。きつとみんな喜ぶよ」

「そうは言うけどなあ。今はなんとか飢えない体制を作っているところだろ。将来的にはともかく、雄太が連れてきた避難民とか、人口は増加の一途を辿っているときに食料を家畜には回せないだろう。肉1キロを育てるには穀物を10キロ使うとか、聞くだろ？」

「ああ、それは大丈夫だ」

「なにが大丈夫なんです？」

「家畜というのは人間が食べられない草を食べて、人間が食べられる肉や乳にエネルギー変換するもんだ。家畜には、人間の食べられないものを与えればいい」

「……簡単に言いますけど」

俺は少し考えた。

もし、人間が食べるものとは別系統のえさを確保できるのならば、酪農は夢物語ではないということか。

もちろんうまい肉を商品として作るとなると話はまるで違ってくるのだろうが……。

ドイツでは昔からソーセージ作りといった食肉文化が発展してきた。それは、実は貴族社会の贅沢品としてではなく、民衆文化に根付いた保存食として、だった。

春から秋にかけてドイツの農民は休閑地の牧草で豚を育てる。冬になると秋に蓄えておいたどんぐりなどを豚に与えて育て、それが少なくなると屠殺し、ソーセージなどの保存のきく食料にして冬を越していた。

つまり、本来の酪農は農業と両立していたってことだ。

俺の肉に密やかに伸びた梨子の手をぴしゃりと叩き、俺は言った。

「……なんとか牧草地を確保できれば面白そうですけど」

「うん、それじゃあ決まりだね。うつわく、私、なんかものすごい楽しみになってきちゃった。もし牛とか豚を飼えたら、すっごくすごいよね」

「あんまり楽観するなよ。問題は山積みなんだから」

「問題って？」

「まず牧草地の確保だろ。それに牛やら豚やらを見つけてこなければ話にならないし、やっぱり専門家は必要だよな。あ、あと防疫の問題もあるか」

俺が思いつく限りの問題を指折り数えていると、梨子はくふふと変な笑い声を立てた。

「それって、このゾンビがいっぱいいる世界で生きていくことより大変なこと？」

実際問題として俺たちが今生き抜くことに問題が山積みなのに、それに少し加算される程度は大したことじゃない、梨子はそう言っているのだ。

梨子にはへらと笑って、自分のステーキ皿に伸びる俺の手をびしやりと叩いた。

夕食を終えるととくにやることもなくなり、俺と梨子は早々に布団に入った。

荒瀬先輩は襖を隔てた向こう側にいる。俺たちにはなにも言わないが、襲撃を警戒してくれているのだろう。

時計を見るとまだ9時過ぎだ。久しぶりの電気のある生活も、ここ数ヶ月で身に付いた日の入りと共に寝て日の出と共に起きるという生活スタイルを変えることはなかった。

余談ながら、谷川村が用意してくれた梨子の部屋は別階にあったが、暗殺の用心も兼ねて俺たちと同室にさせた。

梨子自身も、ひとりで別室に泊まるより俺たちといたほうがいと、抵抗なくこの部屋で過ごすことにしていた。

「ふかふかのお布団、なんかすつごい久しぶりだね」

「早く寝ろよ。明日また鼻血出しても知らんからな」

「もう！ せつかくの旅行なんだから夜更かししようよ」

「なんだよ。それなら荒瀬先輩と一緒にいればいいだろ、つぐ！」

梨子は芋虫のように転がり、俺の布団に突撃してきた。

「直にお兄ちゃん、私は直にお兄ちゃんとお話したいのだよ」

「……それ、ひよつとして、聖の真似か？ おまえ、さては昼間医務室で寝まくったから元気なんだろう」

「えへへ、なんのことかな」

俺はテンションの高い梨子に辟易としながら寝返りを打って梨子に背中を向けた。

「それで、なんの話をするんだ？」

「やっぱり修学旅行の夜はコイバナでしょう！」

「なんだよ、こいばなって」

「恋のお話。直にお兄ちゃんは誰が好きなの？」

「りこちゃんあいしてるよ」

「なんで棒読みなの!？」

梨子は、俺の背中ににじり寄り、細い指で俺の首に触れてきた。

「直にお兄ちゃんは、やっぱり紅ちゃんが好きなの？」

「なんで紅なんだよ。まあ、あいつはすつげえ美少女だからな。飾り方次第じゃあ須藤先輩にも劣らないんじゃないかねえか？」

「うん。紅ちゃんは美人さんだよな」

「だけど、堅いんだよなあ。あいつ、ちょっと演技覚えればすつごいもてるぞ」

梨子はそつと俺の背中に抱きついてきた。浴衣越しに梨子の薄い肉付きが伝わる。

「麻理先輩は？」

「麻理……、か」

「麻理先輩はすごくおしゃれだよ。性格も気持ちいいし、同性の私が見てもすごくもてそう」

事実、男女の隔てなく話しやすい麻理はもてる。顔に負った傷が返って人気に拍車をかけているのは皮肉な話ではあるが。

「……俺、以前まであいつにすっげえ嫌われていたんだよ。だから、今一步踏み込めないんだよなあ」

「……それは、言い換えれば麻理先輩のことを意識してるってこと？」

「……」

梨子は、不機嫌そうに俺の耳に息を吹きかけた。

「じゃあ、聖お姉ちゃんは？」

「なんで聖が出てくる？」

「直にお兄ちゃん、気付いてる？ 聖お姉ちゃんって、実は美人さんだよ」

「あいつの場合、外皮一枚なんてどうでもいいことだ。それが悪くたってあいつの魅力は一向に減退しないからな」

「聖お姉ちゃんは魅力的？」

梨子は浴衣の合間から手を差し入れ、俺の胸を撫でてくる。

「だけど、あいつの場合は雄太も含めてわいわいやっていたほうが合っているんだよ」

「……聖お姉ちゃん、可哀そう」

「なんでだよ」

梨子は耳元で呟く。

「直にお兄ちゃんの優しさは知ってるよ。すごくよく知ってる。だけど、それだけじゃあ足りないの。聖お姉ちゃんも、私も……」

梨子は、気付いているだろうか。

自身の密着した肌が少し汗ばんできていることに。
自身の異常に早い心音が俺に伝わっていることに。

俺は、俺の身体を弄る梨子の手を浴衣の上から押さえた。

「なあ、梨子」

「……なあに？」

「ひよっとして、誘ってる？」

梨子は、引きつるように言葉を詰まらせた。

しばしの無言、室内ではエアコンの駆動音だけが静かに響いた。

「ねえ、直以お兄ちゃん。私は、直以お兄ちゃんと一緒に風呂に入るのが嫌なわけじゃないよ」

梨子は、俺からそっと離れた。

俺は振り返って梨子を見た。

梨子は半身を起こして、少し震えていた。

「わ、わたしは、……私は！」

少しだけ梨子は語調を荒げる。

「私は、え……」

「え？」

そして、梨子は怒鳴るようにそれを吐き出した。

「えっちが怖いの！」

……襖の向こう側でなにか物音がした。

「お風呂で裸を見せ合ったらそういう展開になっちゃいそうで、怖くて怖くて……」

「……ッぷ」

俺は思わず笑ってしまった。

「笑いごとじゃないんだよお！ すっごく痛いらしいんだよ!？」

梨子はそう言うと、艶を含んだ瞳を俺に向け、浴衣をはだけて肩を露出させた。

「でも、でもね。直にお兄ちゃんが望むなら……」

俺は、手を伸ばして梨子の鎖骨を撫でた。

梨子は、びくんと跳ねて目を瞑った。

「病み上がりが無茶すんな、馬鹿」

俺は梨子の浴衣を持ち上げ、ちゃんと着せてやった。

「……私はやっぱり魅力ない？」

「おまえは俺が性欲に負けて病人犯すようなやつだと思ってるのか？」

梨子はそれを聞くと、ほっと息を吐いた。

「直にお兄ちゃん、私、キスならできるよ。キスは痛くないし、いっぱいしたい！」

「出直して来い、小娘。そうだな、もうちょっと胸が大きくなったら抱いてやるよ」

梨子はいつものお惚けた顔とほになって頬を膨らませた。

「直にお兄ちゃんはこのなひどいことを言います。さっきはお肉もくれなかったし。神様、どうか私を憐れんでください」

「おまえは誰になにを祈ってるんだ？」

俺は立ち上がった。

「どこ行くの？」

「便所」

俺はなるべく平静さを保ちながら、襖を開けた。

荒瀬先輩は、いつになくにやけた犯罪者面を俺に向けた。

「青春してんな。しばらく席を外してやろうか？」

「黙れよ。人事だと思って。こっちは面子保つのに必死なんですよ」
俺は、部屋を出た。

男としての用を足すために。

やっぱり修学旅行の夜はコイバナでしょう！（後書き）

どうも、どぶねずみでございます。

今回は難産でした。いや、コイバナなんてする気なかったし。

実は、今回はアーミツシュの話を入れようと思ったんですが、知識不足のため直前で全改訂、結局没と相成りました。

宗教団体を登場させた理由のひとつがアーミツシュのことを書きたかったからなので、いつかは書こうとは思いますが。こっご期待！

今回で、密かに目標にしていた週2投稿が崩れました。

まことにもって申し訳ありませんでした。

これからはなんとか達成できるようにするので、どうか懲りずにお付き合いくださいます。

女教師 阿頼耶

俺たちが谷川村に来て数日が経過していた。

その間、俺たちは文明生活を満喫し、つつがなく過ごしている。

これは、悪いことだ。俺たちには目的があり、達成のためにひとつ進んでいないのだから。

一応、水力発電や浄水施設の視察などを夏海さん監視のもとでやらせてもらっているが、目的としている谷川村との正式な会談は伸ばし伸ばしにされて実現されなかった。

「そろそろ帰りのことも視野にいれないといけませんね。梨子を連れ帰るとなるとヘリで送ってはくれないうし、そうなると帰りの足を調達しないといけないから」

「……ああ、そうだな」

荒瀬先輩は眠そうな顔で朝食後のお茶を啜った。実際に眠いのだろう。荒瀬先輩は夜間の警戒のために俺たちが寝ているときに起きて番をしてくれているのだ。

「大丈夫ですか？ 連日の徹夜じゃあきついででしょう。今日は俺が梨子の世話をするから部屋で休んでますか？」

「いらねえ気を使ってんじゃねえよ。おまえはおまえの仕事をしろ」「直にお兄ちゃんは今日はどうする予定？」

「ああ。今日は夏海さんに牧場を見せてもらうことになってるんだ」「へへ、いいな。私も一緒にいこうかな」

「おまえは月読さんにお呼ばれしてるんだろ？」

俺と梨子は、谷川村内ではほぼ別行動をしていた。朝飯を一緒に取り、俺は日中は谷川村の視察。梨子は鈴宮市の代表として谷川村が開く会合に出席。

もつとも、会合といつてもいわゆるお遊びみたいなものらしい。

「昨日は舟遊びでその前はお茶会だった」

とのこと。

谷川村のお偉いさんや俺たちと同じように他市から来た人間も参加するらしいが、月子と梨子の2人だけの席もあるらしい。

「そんな暇があるなら俺たちとの会談に時間を取って欲しいけどな」「うーん、月子ちゃんが言うには政治的なことは阿頼耶さんと阿摩羅さんがいないと決められないんだって。だから、2人の時間が空いていないと会談の席は設けられないんだって」

「月読は自分が飾りつてことを自覚しているのか」

「なんでもね、月子ちゃん自体は谷川神道教の信者じゃなかったらしいの。養護施設はそれ系だったらしいんだけど。それが、ゾンビ騒ぎが起こってなんだかわからないうちにとんとん拍子で祭り上げられちゃったんだって。すごく困惑しているって言ってた」

「まったく無関係の人が形式的にはいえ教団トップに選ばれた？」

「名前に月が付いているからじゃないかって本人は言ってたけど」「さすがにそれだけってことはないだろうが。まあ、教団の教義になにか理由があるのかもしれないが、俺たちにはさほど問題じゃないな。それじゃあ俺はそろそろ行くぞ。荒瀬先輩、梨子を頼みます」

「……ああ、わかった」

「直にお兄ちゃん、いつてらっしゃい」

俺は梨子に見送られて部屋を出た。そのままエレベーターで一階のロビーまで下りる。

ここで、夏海さんと待ち合わせしているのだ。

ロビーには、夏海さんの姿はなかった。待ち合わせの時間にはまだ数分はある。俺は待つことにした。

と、そんな俺に声をかけてくる人がいた。30過ぎのやけにへりくだったスーツ姿の男だった。

「今日もいい天気ですね」

「ええ。正直嫌味なくらいね。雨とは言わなくても、もう少し曇ってくれたほうが過ごしやすいんだけどね」

「あの、あなたは……」

「俺は、菅田といいます。鈴宮市から来ました」

「なんだよ、教団の関係者じゃないのかよ」

男は、俺が名乗った瞬間に顔をしかめた。いや、露骨に態度を変えすぎだろ。

「俺は隣の県から来たんだけどさ。きみはいつからここにいるの？」

「俺は……、もうすぐ一週間ってところですね」

「俺はもうひと月になるよ。まったく、ただ待たされるほうの身にもなってくれよな」

「……そんなに待たされてるんですか？」

「たまに月読の会合に呼ばれることもあるけど、それにしたって週に一回あるかないかだぜ。おまえも覚悟しておいたほうがいいぜ」

「なんでそんなにまたされるんです？」

「さあな。単純に順番待ちってところだろうけど。ここに集っている他市の連中は10や20じゃ利かないから……」

「つと」
男は話を途中で打ち切り、俺を突き飛ばすようにしてエレベーターから降りてきた3人組のところへ駆けて行った。

エレベーターを降りてきた3人組のうち左右の男は、角刈りとスキンヘッドのマッチョだった。中心の色の白い男を守るように威圧的に歩いている。

そして、中心の色の白い男に、俺は見覚えがあった。確か、日野陽一と聞いたか。梨子と同じ飛行機事故の生き残りだ。

「日光さま！ おはようございます！」

日光と呼ばれた日野陽一は煩げに男に手を振った。と、その過程で俺と偶然目が合った。

「あれ？ おまえ、確か梨子と一緒に来たやつだよな」

「よく覚えておいで」

「神殿には若いやつは少ないからね。目立つんだよ！」

日野陽一はそう言っ、なにがおかしいのかげらげらと笑い出した。

「えっと、あなたは……」

「俺は日光だ」

「日光？」

「日本神話の3兄弟の話は知ってるだろ？ アマテラスにツクヨミにスサノオ。アマテラスじゃあ長いから日光だ」

俺は、思わず苦笑してしまった。

谷川神道教は月読命を信仰する宗教であり、斜め読みした限りでは、その経典にアマテラスの記述はなかった。それをこの男は名乗っているのだ、おそらくは自称で。

もしそんな役職があるのなら、仮にもツクヨミの姉にあたるアマテラスを冠した人間を阿頼耶さんは投げ飛ばしたりはしないだろう。「それで、なんでまだいるの？ 梨子を送り届けたんだからもう用は済んだだろ？」

「まだですよ。鈴宮市に電気と水の供給を約束してもらわないことには帰れませんよ」

「よしわかった。俺が月読に伝えておいてやるよ」

日光は、おそらくは無自覚にそう言っただけで白い歯を覗かせた。こいつは、軽すぎる。大地のように身体を鍛えている様子はないし、雄太のように特に美男子というわけではない。こいつは、元の悪さを化粧や権威で飾り立てることで覆い隠しているのだ。

こいつは、にわとりのとさかのような虚飾に塗れている。俺にはそう思えた。

「いや、ガキの使いじゃないんだから、口約束ではいそいそですか、とはいかないでしょ」

「おまえなあ、この俺がやってやるって言うてるんだぞ！」

「善意の押し売りかよ。みっともないなあ」

俺は敬語をやめた。なにを根拠にえびっているのかは知らないが、俺がこいつの権威に従う義理はなかった。

日光の顔色が変わる。それに合わせるように左右のマッチョが俺の前に出た。

「おまえ、自分の立場がわかってないようだな。俺に舐めた口を聞いたことを後悔させてやるぞ！」

「……言うことに独創性がないんだよ。頼むからもう少しだけ言葉を捻ってくれ、ッ！」

言葉を遮るように、俺は殴られた。眼前のマッチョでも日光にでもない。俺の隣にいた、先ほどまで話していた男にだ。

「無礼な！ 口を慎みたまえ！」

切れた唇の端を押さえる俺に、男は人差し指を突きつける。

俺は、ひとつ深呼吸して唇を舐めた。

ここで俺が殴り返すのは妥当か否か、すぐにでも仕返しをしたい感情を押さえつけてそんなことを考えていると、周りのざわめきの中から仲裁者が現れた。阿頼耶だ。

「なんの騒ぎだ！」

誰もなにも答えない。阿頼耶は、俺に視線を止めると聞いてきた。

「確か、菅田直いくんだったな。なにがあったんだ？」

「別に、なにもないですよ。ただの遊び……」

「こいつが日光さまを侮辱したんだ！」

俺を殴った男は俺を押し退けて言った。よくよく人の話を遮るやつだ。

「……それで、殴ったと？」

「そうです！」

男は、同意を求めるように後ろにいる日光を見た。だが、日光は露骨に顔を逸らした。

「理由はわかった。今日中に荷物をまとめて谷川村から退去を命じる。谷川村はいかなる理由であれ、暴力を解決方法に使うものとの交流を求めている！」

男は愕然としていた。縋るように日光を見るが、日光は男を無視して歩み去ってしまった。男も日光をよいしょしたつもりで俺を殴ったんだろうに……。

「きみは来なさい」

阿頼耶は俺の手を引くと、エレベーターに向かった。

エレベーター内で2人きりになると、俺は口を開いた。

「えっと、阿頼耶さん」

「阿頼耶でいい。役職名だし教団外の人間は敬称は不要だ」

「阿頼耶。なんとか善処してくれませんか？ 殴った殴られたで外交に影響が出たんじゃ後味が悪い」

「きみが責任を感じることはない。谷川村で浅はかな行動を取ったものが悪い」

阿頼耶さんは、目を細めて微笑を浮かべた。

「少しだけ本音を言っと、退去させる理由ができて助かっている。

自分たちからはなにも提供できないくせにこちらに一方的に援助を申し込む輩が多すぎてね」

「耳が痛いな。俺たち鈴宮市にしたって電気や水を買うほどの余裕はまだないから」

エレベーターが止まったのは4階、医務室のある階だった。

俺は阿頼耶に手を引かれたままエレベーターを降りた。

「あの……、手を離してもらえませんか？ ひとりで歩けますよ」

「子供が遠慮するんじゃない」

「子供、ですか？ 子ども扱いは久しぶりだ」

「人前で殴り合いの喧嘩など小学生並みだ。格式ある神殿内では遠慮したいところだな」

そう言われたらもはやなにも言い返せない。なんかこの人、正しい位置から説教垂れる先生みたいだな。

「おや、珍しい顔合わせですな」

医務室に着くと、開口一番に常勤医はそう言った。

常勤医は俺の口の端に付いている血を綿でふき取ると、アルコールで消毒した。

「これは、殴られたのかな？」

「ええ。ちよつとした喧嘩でね」

「ふむ、若いなあ」

常勤医は白髪の目立つ頭を撫でながらしみじみとそんなことを言った。いや、殴ったほうは30過ぎで殴られた俺はただの被害者なだけだね。

と、医務室の扉が勢いよく開かれる。夏海さんだ。

「直以くん、大丈夫なの？」

「ああ。少し大げさなんだよ。大したことないのにね」

夏海さんは俺に駆け寄る、その途中で阿頼耶に気付き、直立した。

「夏海、失態だな。客人を待たせた上にトラブルに巻き込ませるとは」

「も、申し訳ありません！」

夏海さんは腰を90度折って阿頼耶に頭を下げた。

「夏海さんは悪くないよ。待たされたって言ったって俺が早く来すぎただけだしね。それより、早く行こう」

俺は話を早々に切り上げ、医務室を出ようとした。

ぶっちやけよう。俺は阿頼耶が苦手だ。そのことに気付いてしまったのだ。

が、それを夏海さんは止めた。

「いえ、実は今日の牧場見学は中止にしたいのだけど」

「？ なにかあったの？」

夏海さんは、言い淀んだ。それを女教師然とした阿頼耶が咎める。

「夏海、早く答えなさい」

女学生然とした夏海さんは直立して答えた。

「先ほど、多量のゾンビが接近中との報告がありました！」

電気もあり比較的文明生活を維持している谷川村。

ここでも安全で安心な生活とは無縁らしかった。

優しさと言

去年の一学期、それは平凡で退屈で、平和だった頃の話。

同じクラスだった俺と聖は、教室内ではつるむでもなく話すことも少なかった。

当時の俺は教室では部活に備えて寝て過ごすことが多かったし、起きているときもバスケット部の仲間と過ごすことが多かったからだ。

聖にしても、すでに変人ぶりが定着し始めていた頃で、ふらっと教室を抜け出しては授業をサボって屋上にいることが多かった。

そんな俺たちには、話す時間というものがあつた。

水曜の放課後だ。

理由は、水曜日はバレー部が先に体育館を使うため、交代の時間までバスケット部員は暇だったからだ。

水曜最後の授業が終わると、一足先に聖は教室を出て、俺は一通りの用事を済ませて待ち合わせの場所に向かう。

そこは、図書室だった。

司書のおばさんを入れても片手の数ほどしかない閑散とした図書室で、聖は本を読むでもなく窓際の席でたそがれていた。

俺は、聖に声をかけるでもなく向かいの席に腰を下ろすと本を読み始める。だが、読書は5分とかからずに邪魔されるのが常だった。わざとらしい咳払い、俺が視線をあげると、煙草臭い女はわざとらしくこつたまう。

「やあ、直じゃないか。いたのか？　まるで気付かなかつたよ」

「……そうか。今、読書中だから邪魔すんな」

「ふ……ん、まあ、読書に熱中するのは悪いことではないが。それよりほら、なにか気付かないか？」

聖はそう言っつてウェーブのかかった髪をさらりと流して見せた。俺はその変化に気付いていたが、わざととぼけてみせた。

「なんだよ。なんかあったのか？」

「まったく、きみは本当に見る目がないな。実は、シャンプーを変えてみたんだ。気付かなかったか？」

「いや、気付いていたつて。だつて、いつも付いているゴミが今日はないし、ご丁寧にも、いつもは絡まっている髪が櫛入れされて絡まつてないし。」

「こいつ、煙草臭さが台無しにしているところはあるが、こうやつていつも身嗜みに気を使えるなら、それなりに悪くない外見してるんだよなあ。」

「それで、おまえがシャンプーを変えたことと俺の読書の邪魔をすることに関連性はあるのか？」

「……いや、ないが」

俺は落ち込んで視線を落としている聖を見て苦笑すると、本を閉じた。

「それで、どういう心境の変化なんだ？　今までシャンプーのことなんてまるつきり興味なかつただろ」

聖は顔を輝かせて机から身を乗り出した。

「それがな！　実は母さんが……」

聖は喜々として話し始める。最初の頃は注意していた司書さんも最近では諦めて俺たちを放置するようになっていた。

「それで、直以。今週末に予定はあるかい？」

「あるに決まつてるだろ。練習試合だよ」

「ああ、そうなのか……」

「先に言っけどおまえは来るなよ」

聖は言葉を詰まらせた。

以前、なんのつもりかは知らないが聖は試合中の体育館にふらつと訪れたことがあった。その途端、うちのチームは大崩れしたのだ。

牧原聖がなんているんだ？

ひょっとして、なんかやらかすんじゃないのか？

聖は問題児ではあったが、特段なにか大事をやらかすようなやつではない。それは、理論専攻で自分で行動するのは苦手としているという性格だからでもあるのだが。

だが、周りからはそうは思われていなかった。こいつがいるというだけでバスケット部の仲間は簡単に動揺してしまったのだ。

今回も、こいつが来ればおそらくそうなる。だから俺は釘を刺しておいたのだ。

「きみは本当にバスケットだな。プロになれるわけでもなし。しかもその身長だ。とても向いているとは思えないがね」

「うるせえよ」

俺の話は終わりとばかりに本を開いた。が、聖の話は終わらなかつた。

「それで、どうなんだい？ 練習試合には勝てそうかい？」

俺は、しばらく無言でいたが再び本を閉じて、机に突っ伏した。

「……周りが指示通りに動かないんだよ」

理由はいくつもある。その最たるものは、俺が1年だからだ。

中学3年から高校1年へ。

それは最高学年から最低学年へ戻ったということだ。

中学のときは学年という立場によって仲間や後輩を指示できた。

それが、高校1年ではその権威がなくなったのだ。

たとえ正しかろうとも生意気な後輩の意見など聞いてやるものか。周りはそう思い、当時の俺はそういった齟齬に悩んでいた。

だが、聖は俺の悩みを一刀両断した。

「周りが動かない？ そんなことは当たり前だろう？」

「……言ってくれるじゃねえか」

「直以、井？の戦いは知っているね？」

「あゝっと、楚漢戦争だっけか？」

「そう、韓信の背水の陣だ」

本来、背水の陣は退却が困難で不利になるとされている。だが、

韓信はあえてそれをやり、大勝利した戦いが井？の戦いだ。

「韓信はあえて背水の陣立てをすることで兵を死地に追いやり、勝利を得たのだよ」

「だからなんだ？」

「わからないかい？ 人を動かすということとは古今の名将が知恵を絞って命がけで達成することなのだよ。たかだか一学生が思い通りにいかないからって落ち込んだふりをするなど、まったくおこがましいと思わないかい？」

聖とのこの会話以来、俺は人は思い通りにならないものであり、その上で少しでも思い通りにできるように思慮してきた。

だが、その考えが根底から覆るような指揮を、俺は目前で見せられることになった。

「誘導員の指示に従って避難しなさい。落ち着いて対処すれば問題ない」

ゾンビ接近の一方が入ってから谷川神道教の動きは早かった。

ただちに関係部署に連絡、想定される戦場内での非戦闘員の誘導、自衛隊は即座に迎撃体制を整えて展開する。

マニュアルがあり、それに従っているのだろうが、それにしても素早い。よく訓練されている動きだ。

俺は、その様子を阿頼耶の傍らで見渡していた。

「夏海さん、ひよつとして、ゾンビが押し寄せてくるのってこれが初めてじゃないの？」

「ええ。実は月に一度、とは言わないまでも今までに何度もあることなの」

それで、か。俺は移動中のリムジンの中から大した混乱もなく列をなして歩く非戦闘員の姿を見た。動揺が見られないのはすでに何度も経験しているから、ということなのだろう。

後部座席の対面に座り、なにやら無線機で連絡していた阿頼耶は、急に顔を上げた。

「……夏海、非戦闘員の退避はあとどれくらいかかる？」

「あと一時間ほどで完了予定です」

「遅い。誘導を急がせろ」

阿頼耶はそれだけ言うと、再び無線機に話し始める。

俺は夏海さんに聞いた。

「それで、ゾンビはどっから湧いてきたの？」

「渓谷を登ってきたみたい。山間の国道には要塞化した関があるけど、渓谷にはそれが無いから」

「なんで？ 渓谷にも関を作れば入ってこれないだろ？」

「10人単位なら迎撃できるだけの施設はあるんだけど。なんで関を作らないのか、すぐにわかると思うわ」

俺の疑問は答えられないまま、リムジンは走り続けた。

そして、行き着いたのは大きなアンテナのあるコンクリートの施設だった。なんでも普段は教団の放送局として使われているのと。ゾンビが大量に侵入した場合は指揮統率も兼ねてここから電波を飛ばし、ゾンビをここに集めるとのことだった。

「おや、菅田くんじゃないか。どうしたんだね？」

放送局で俺を出迎えてくれたのは、尾崎さん（親父のほう）だった。

「阿頼耶に無理いつて連れてきてもらったんですよ。後学のためにね。それで、大丈夫なんですか？」

「なに、大した問題じゃない。非戦闘員の避難が完了次第自衛隊は反撃に移る。阿頼耶、『あれ』のほうはどうだね？」

「ああ。大丈夫だ。いつでもいける」

部外者には意味の理解できない話を聞きながら、俺は阿頼耶と尾崎1佐を観察した。

よく訓練された民衆に兵士。作りこまれたシステム。

そして、それを指揮するのは体系的な経験を積んだベテラン。

お山の大将レベルの俺のやり方とは成り立ちから違う完成された統率。

優秀な部隊は優秀な指揮官によって一糸乱れぬ部隊運動を展開していく。

「全部隊、目標地点までの後退を終えました」

「非戦闘員の避難誘導、完了しました」

いみじくもそんな報告が同時に聞こえてくる。

尾崎1佐と阿頼耶が顔を見合わせる。

まさに反撃を命じようとしたそのとき、2人に割って入るような報告が入った。

「……報告します。子供がひとり、戦場予定地に戻ったそうです」
水を刺すとはこのことだろう、阿頼耶は露骨に舌打ちし、尾崎1

佐も表情にこそ出さなかったが拳を握りしめていた。

「親はなにをやっていたんだ」

「子供の後を追おうとしているところを我々が止めました。子供は、上流の川原を目指しているようです」

阿頼耶は苛立たしげに机を指で叩いた。

ゾンビの流入は刻一刻と続いている。反撃の時期を逃せばそれだけ対処が難しくなる。

組織としての決断を下すなら、子供は見捨ててこのまま反撃を開始するべきだろう。

美笑を浮かべる、あの人ならば躊躇うこともなく決断するはずだ。それをできないところに阿頼耶の優しさと甘さがあった。

時間にすれば10秒にも満たない間だろうが、言葉を無くしたように黙っている阿頼耶に尾崎1佐が口を開いた。

「自衛隊から一部隊を割こう。すぐに救助に向かわせる」

「……いや、それは駄目だ。我々の目的はゾンビを撃退することであり、そのためには最善を尽くすべきだ」

「それでは子供は見捨てますかな？」

阿頼耶は眉間に皺を寄せて瞳を閉じた。

苦渋の決断。それを下そうとするのを、俺は遮った。

「俺が行くよ」

その場にいる全員の視線が俺に集まった。

「あんたらがシステムに組み込まれているから動けないんなら、その外にいる俺が行く」

「部外者が口を出すんじゃない！」

「そんなことを言っている余裕、ないでしょ？」

阿頼耶は再び黙った。

「……菅田くん。お願いしよう」

「尾崎1佐!？」

「用兵には機と間というものがある。機とは今すぐ戦つか、間とは十分準備して戦つか、だが、ここで決断できねばその両方を逃すことになるぞ」

俺は阿頼耶を見た。阿頼耶は決断を半秒ほど躊躇ったが、やがて大きく頷いた。

「わかった。ここは菅田くんにまかせよう。夏海、地理に不案内な菅田くんのサポートを」

「はい！」

夏海さんは、俺が見る限りでは初めて阿頼耶に敬礼をした。

「待ってください、俺も行きます！」

そんな声が教団内の人間からぼつりぼつりと上がるが、阿頼耶は一蹴した。

「おまえたちにはおまえたちの仕事がある。ここは彼にまかせろ」
「妥当な判断だ。目的が戦闘ではない以上、あまり大人数でも目立つてかえって効率が悪くなる。」

「自衛隊は30分後、反撃に入る。それまでに子供を見つけ、確保し、戦場を離れる。できるかね？」

「なんとかやってみますよ」

俺と夏海さんは小走りに放送局を出て、リムジンに乗り込んだ。

夏海さんが運転席、俺が助手席だ。

多少がたつきながらもリムジンは出発した。……夏海さん、どうやら運転は得意じゃないらしい。

「直いくん、ありがとう。私たちのためにわざわざ危険な役を買って出してくれて」

「あんた、あんまり頭よくないよね」

「……どういう意味？」

「困ってる人を助けるのに人種も宗教も関係ないってこと。別に俺は谷川村に媚を売るためにこんなことやってるわけじゃないから」

「ひよっとして、照れてるの？」

「そんなんじゃないって！」

俺は視線を窓に移した。

大人の女性である夏海さんは、そんな俺を見てくすりと笑みを零した。

優しさと甘さ（後書き）

出したいけど出せないお友達ファイル

聖ママ

家の事情で高校進学は断念、が、その先に進んだ水商売で大成した
お方。銀座辺りじゃ女帝とか呼ばれているとかいないとか。

40を目前に控えた頃、金も名声も手に入れた彼女は今までの人生
とこれからの人生を思い直し、商売からは一切手を引いてデザイナ
ーズチャイルドの聖をシングルマザーとして生む。

以後は『超』子煩悩として「ひじりちゃん」の教育に全てを捧げる
人生を送ってきたが、聖が反抗期に入った頃から少々齟齬が生まれ、
困惑気味。

でも、高校に入ってからには聖ちゃんにもボーイフレンドができたみ
たいです。

家でも彼、「直以くん」の話をしてくれるようになりました

余談ながら、聖が身嗜みに気を使わないのは、煌びやかな夜の世界
で生きてきた聖ママに対する反感（10代特有）から。

個人的には出したいキャラなんです、ストーリーの展開上に必要
というわけではないので、出そうか出すまいか迷っているおばさま。

放流

川原へと続くのどかな田舎道、散見されるゾンビは次第にその数を増やしていく。

「直以くん、見つけたらすぐに言ってね」

「わかってるよ」

俺は、リムジンの助手席から窓の外を見た。が、子供の姿はない。見えるのは、血色の悪いゾンビどもだった。

渓流を登ってきたゾンビは、どうやら2手に分かれているようだった。

1手は電波に導かれるように川原を抜けて放送局へ。もう1手は、そのまま川の上流へ。

川原に到着したリムジンは土手の上をゾンビに並行するように川を上流に向けて走っていく。

「夏海さん、この川の上流にはなにがあるの？」

「上流？ ダムくらいしか思い浮かばないけど……」

「ゾンビは、ダムを目指している？」

放送局を目指すのはわかる。そうなるように電波で誘導しているからだ。だが、なぜダムを目指すのかはわからない。ダムには、ゾンビを誘うなにかがあるのか？

「直以くん！」

夏海さんに呼ばれて俺の思考は中断した。窓の外を見ると、ゾンビは激減していた。先頭集団を追い抜いたのだ。そして、視線の先にはビニールシートで作られた日避けのテントがあった。

「情報では子供とその家族はここで水遊びをしていたらしいの。子供が戻るとしたらここで、もしないのなら私たちが見逃したか、どこか横道に逸れたのか、あるいは……」

すでにゾンビに喰われたか。

夏海さんは最後の言葉を飲み込み、リムジンを止めた。

ドアを開けると、むせるような暑気と耳を劈く蝉せみの鳴き声が周囲を包んだ。

「俺が行ってくるから夏海さんはここで待ってて。すぐに出発できるように」

「わかったわ。いてもいなくても、すぐに戻ってくるのよ。もう自衛隊が活動を開始する時間だし、ゾンビも迫ってる。それに、『あれ』がもうすぐ来る……」

後半の言葉を聞き逃して俺は無断で頷くと、土手を駆け下り、歩き辛い砂利道を小走りにテントに向かった。

そのテントに、子供はいた。

歳の頃は10歳くらいだろう子供は、汗を掻きながら蹲っていた。

「おい、大丈夫か？」

俺の呼びかけに子供はなんの反応もしなかった。

俺は、警戒しながら子供の肩に手をかけた。

子供が俺に反応しない理由はすぐにわかった。ヘッドホンをしていて気付かなかったのだ。そして、抱えるように持っていたのは、携帯ゲーム機だった。

このガキ、ゲームに夢中で俺に気付かなかったのだ。

俺は汗だくになっていているガキの服を掴み、強引に立ち上がらせた。その段階になって初めてガキは俺の存在に気付いたらしく、ヘッドホンを取って俺を見上げた。

「なんだよ、兄ちゃん。いきなりなにすんだよ！」

「……ここは危険だ。すぐに退避するぞ」

俺は、吐き出したい100万言を押さえ込み、それだけを言った。だが、ガキは状況を理解していないのか、いや、していないのだから、こんなことをほざいた。

「駄目だよ。今いいところなんだ」

ガキは再び座り込んで携帯ゲーム機に視線を落とした。

こんな季節のこんな場所のこんな状況で、だ。

「おまえ、ひよつとしてゲームしにここに戻ってきたのか？」

「うん。パパたち、酷いんだぜ。急にどこかに連れ出そうとしてさあ。でも、ゲーム機をここに忘れてきたからおれひとりだけここに戻ってきたんだ」

話は終わりとばかりに、ガキはヘッドホンを耳に当てようとした。俺は、それを取り上げる。

「いい加減にしろ。今はゲームどころじゃないんだよ」

ガキは、小馬鹿にしたような視線を俺に向けてきた。

「なんだよ、大人がカリカリしてさあ。カルシウムが足りてないんじゃない？」

俺は、ガキから携帯ゲーム機を取り上げた。

「なにすんだよ！ 返せよ！ パパに言いつけるぞ！」

ガキは俺に掴みかかってくるが、俺は携帯ゲーム機を返さなかった。ていうか、このまま叩き壊してやるつか、そんなことを考えていると、サイレンがなった。

なんで関を作らないのか、すぐにわかると思うわ

川原で遊ぶときには注意事項がある。

阿頼耶、『あれ』のほうはどうだね？

ごみを持ち帰る？ そんなことは最低限のマナーだ。

自衛隊は30分後、反撃に入る

それは、サイレンがなったら川から離れることだ。

『あれ』がもうすぐ来る……

そして、サイレンの意味するところ、それはひとつだった。

俺はサイレンの意味を悟り、戦慄した。

「ふっざけんなよ！ ぼくのパパは高学歴のエリートなんだぞ！」

「そんなこと言ってる場合じゃ、っ痛え！」

俺は携帯ゲーム機を取り落とした。ガキが俺の腕に噛み付いたのだ。

ガキは即座に携帯ゲーム機を拾い上げると、テントを出た。が、そこで固まった。

ゾンビと鉢合わせしたのだ。

「っち！」

俺はガキの襟首を掴んで引っ張った。半瞬の差でガキの鼻はゾンビに齧られずに済んだ。

目の前の危機にガキはようやく状況を理解したようで、震えながら携帯ゲーム機を落とした。

だが、こんなのはまだ序の口だ。本当の危機は、まさに今、迫ってきていた。

俺は、ゾンビの伸ばしてくる手を掴んで、引きながら足払いをした。

バランスの悪いゾンビはそれだけで顔から砂利に突っ込んだ。そのまま倒れたゾンビは放置し、落ちている携帯ゲーム機を拾い、ガキの胸元に押し付けた。

「しっかり持ってる！」

ガキの反応はない。俺は、ガキを半ば抱えるようにしてテントを出た。

テントの周辺は、すでにゾンビで溢れていた。

……大丈夫だ。ゾンビはサイレンに気を取られて俺たちに気付いていない。音を立てないように、かつ迅速にここを離れるんだ。

そう心の中で自分に言い聞かせていると、俺の腕の中でガキの絶叫が響き渡った。

パニック状態になったのか、ガキは俺の腕の中で暴れた。近くにいたゾンビはその声に反応して俺たちに向かってきた。

さすがにこれ以上は付き合えない。俺は、空いている手でガキの頬を殴った。

「死にたくなかったら黙ってる。これ以上騒ぐようなら置いてくぞ」
ガキは、嗚咽を漏らしながらも黙った。うん、それでいい。多少手遅れ感はあるけど。

俺は、ガキを両手に抱えると、ゾンビの脇を目掛けて駆けた。

走り辛い砂利道を、ゾンビを跳ね飛ばし、突き飛ばし、土手の上を目指して走り抜ける。

ガキは、さすがに梨子よりは軽いがそれでも20〜30キロはある。多少、息が切れはじめたところで、俺は転んだ。

振り返ると、ゾンビが俺の足首を掴んでいた。顎間接を外しまさに噛み付こうとしているゾンビの口に、俺は掴まれていない足を、革靴の踵から突っ込んだ。

前歯を叩き折る感触の後、万力で締め付けられるような痛みが走った。

「ッ痛えなあ！」

俺は、靴を啜え込んで離さないゾンビのこめかみに、落ちていた石を叩き付けた。一瞬緩んだ隙に足を引き抜き、さらにもう一発殴りつけることでゾンビは動かなくなった。

足を確認してみる。革靴はゾンビの唾液に塗れて変形していたが、なんとか破損はなかった。

ふと見ると、ガキはひとりで土手の上まで走っていた。夏海さんはガキを保護し、俺に手を振っている。

そこで、ついに鳴動が始まった。

サイレン、蝉の声、夏の日差し。

俺は、焼けた石に手を着くのもかまわず、四つん這いになって土の上を指した。

恥も外聞もない。もはや、一刻の猶予もない。

『あれ』が来る。

『水』が来る！

「邪魔だどけ！」

俺は近くにいるゾンビをぞんざいに押し退け、必死になって土手を指した。数人のゾンビは俺を目掛けて向かってきたが、そんなものにかまってはいらなかった。

だが、ゾンビにしてみても俺の焦りなどはまるで関係ないのだろう。前から後から次々に湧き出してくる。

塞がれる道。

俺の足は、止まった。

ちよろりと、革靴が濡れた。いつの間にか増水した川の水が、俺の足元まで迫っていたのだ。

兆候は一瞬、上流からは怒涛の勢いで大水が迫ってきていた。

ダムの放流だ。

圧倒的水量、おそらくはフルゲートの放流だろう。

俺を無視して上流に向かって先行していたゾンビは、大水に一瞬で胸元まで浸かり、そのまま頭上まで吞まれて二度と浮上しなかった。

なぜ渓谷に閘を設けないのか？

上流にダムがあるから、これが明確な答えだろう。

もし堅牢な閘を設けても大雨などでダムの放流を迫られたときに倒壊の危険がある。

また、わざわざそんなものを気付く必要もない。

一見防備の手薄な渓谷、今にして思えばそう見えるようにしているのだろう、そこから谷川村に攻め込んだとしても、ダムの放流による水計で押し流してしまえばいいのだ。

そう、今回のように。

「くそおお！」

俺は水を蹴って駆け出した。泳げないわけではないが、激流と大量のゾンビという障害物の中で助かる自信はない。水に吞まれたら終わりだ。

俺は目の前のゾンビを蹴り飛ばし、道を作った。だが、その後方から新たなゾンビが現れて土手の上への道を塞ぐ。

先に、進めない。

もたついている間に、後ろからのゾンビとの距離もだんだんと縮まっている。

いつの間にか、俺は囲まれていた。

意識してかしないかで、ゾンビは息を揃えて俺への包囲の輪を締めていく。

耳もとで、ゾンビの生温かい吐息を感じた、そのときだった。

耳を劈く蝉の声も、危険を知らせるサイレンの音をも圧倒する爆音と共に、俺の前方のゾンビが弾け飛んだ。

まるで榴弾砲の着弾。

だが、着弾点のその場所にいたのは、煙を上げた砲弾ではなく、荒瀬先輩だった。

白馬に跨る王子さま、もとい、大型バイク（ナナハン）に跨る荒瀬先輩がそこにはいた。

荒瀬先輩は大きな弧を描く軌道でスピンしながら俺の背後のゾンビを跳ね飛ばした。

「早く乗れ」

俺はタンDEMに飛び乗った。タイヤは川の水を巻き上げ、バイクは即座に走り出す。

「格好よすぎるでしょう。梨子はどうしたんです？」

「この、馬鹿が。俺の仕事の中にはおまえを守ることにも入っているんだよ」

眼前のゾンビを轢き跳ね、バイクは土手を駆け上る。荒瀬先輩の蓬髪が、馬の鬣たてがみよろしく風に踊った。

そのままの勢いで土手の上部にたどり着いたとき、先ほどまで俺のいた場所は2メートル以上の水深に埋まっていた。

……間一髪だった。正直、助かった。

荒瀬先輩はバイクを止めて降りると、ストラックスのポケットに手を突っ込んだまま、今までは土手だった川縁に近づいた。

その先にいるのは、運良く水に吞まれなかったゾンビだ。

ゾンビは、威嚇のつもりなのか荒瀬先輩に黄ばんだ歯を剥き出した。が、荒瀬先輩は動じることもなく、ゾンビを蹴り上げた。ゾン

ビは、空中で後回りに3回転ほどして、水飛沫を上げて川の中に消えていった。……相変わらず滅茶苦茶な人だ。

「直以くん、大丈夫だった!？」

俺もバイクを降りると、夏海さんと携帯ゲーム機を両手に抱えたクソガキが俺の前に来た。ガキは夏海さんに背中を押されて1歩前に出た。

「ほら、お兄ちゃんに言うこと、あるでしょう?」

夏海さんに優しく諭されるも、ガキは不貞腐れ気味に俺から視線を逸らした。

俺は、苦笑してしまった。

「いいよ、別に。このガキに説教するのは俺の役目じゃないしね」

「よくわかってんじゃねえか」

そう言ったのは、目下数人のゾンビを(素手で)片付けた荒瀬先輩だった。

「荒瀬先輩、助かりましたよ。ありがとうございます」

荒瀬先輩は、俺の感謝の言葉にはなにも答えず、なぜか指をばきばきと鳴らした。

「おまえに説教する役が俺だってことは理解しているんだろうな?」

「……は? ガッ!？」

荒瀬先輩は、俺が反応する間もなく、俺の頭頂部に拳骨を落とすた。

「ったく、俺の仕事を増やしやがって」

脳天を押さえて蹲る俺は、荒瀬先輩の言葉に反応できなかった。

……あと、荒瀬先輩を見る夏海さんの目が、ハートになっている件に関しては、気付かないことにしておいた。

そわそわ

自衛隊の反撃が始まった。

ダムの放流によつて後続のゾンビは全滅した。後は谷川村に侵入した残りのゾンビを掃討するだけ。

それは、戦闘というより狩りに近いかもしれない。そう思えるだけの戦力差が、自衛隊という集団と指向性を持ちながらも群れてさえいないゾンビとの間にはあった。

俺は戦場を一望できる峠道からその経過を眺めた。余談ながら夏海さんとガキは一足先に神殿（元村営の温泉宿）に帰っている。俺と荒瀬先輩の2人がここに別行動で来ているのだ。

「すっげ……」

まさにワンウェイゲームだった。

自衛隊はリスクとプロバビリティを極力排除し、ゾンビどもを前面から圧倒していく。

静かな戦場だった。それは、自衛隊が銃器を使用していないのだ。使っているのはボウガン。

銃では音が出てゾンビが反応する。確かに射出音の小さいボウガンはゾンビ掃討に適した武器といえるかもしれない。

すでに戦闘教義は確立されているようで、器用に、かつ、効率的にボウガンを使い、自衛隊は戦闘を展開していった。

後に聞くことになるが、自衛隊がボウガンを使うのは、弾薬の節約のためでもあった。

それは、2つのことを示唆している。

ひとつは銃弾の補給が谷川村でもきかないこと。資源と技術の両面から、谷川村でも銃弾の大量生産は難しいのだ。

そして、もうひとつは、いつ誰に銃を向けるのか、ということだ。谷川村では、ゾンビの大群より、押し寄せてくる大量の生きた人間

をターゲットにしているのが明白だった。

「どうだ、直以。もし谷川村と揉めたら、勝てるか？」

俺は、俺の横で戦場を眺めている荒瀬先輩に答えた。

「まず、無理でしょうね。今の俺たちじゃあ手も足も出ませんよ」

錬度、指揮、規模、俺たちはありとあらゆる面で負けている。減点式の採点ならば、横の連携が弱いと言えなくもないが、それに付け入れるほどの能力は俺たちにはなかった。

「もし揉めることになったらどうする？」

「だから、勝ち目はないつて。大人しく降伏するしかないでしょうね」

「降伏が受け入れられなかったら？」

俺は、少し考えて答えた。

電気が使えることに加えてダムの放流なんかをみても、谷川村は地理的に強固なハードだ。ここに自衛隊に籠られたら、手も足もでない。なんとか自衛隊を引きずり出して、各個撃破するしかないが、それ自体が並大抵の難事ではない。

「言っが安しつてやつですよ」

「なにがだ？」

「なんとか谷川村と自衛隊を分断して各個撃破する。まあ、俺ごときにも思いつくくらいだから、警戒は当然しているんでしょうけどね」

誰でも思いつく。それこそ言っが安しだった。

俺は、このときまさか自分が各個撃破のターゲットにされているとは、夢にも思っていなかった。

だが、それに気付くのに、俺はまだ少しの時間を必要としていた。

「……直以くん、ちゃんと聞いているのか？」

「ええ、聞いていますよ」

俺は、酒が入って頬を赤らめた阿頼耶に説教を喰らっていた。

時は夕刻、場所は神殿の大広間（おそらくは元宴会場）。

ゾンビどもの掃討は一日で終了した。端数として残ったゾンビや大量の死体の処理など、まだ片付ける問題は多いが、それでも一応の終了として戦勝パーティーが開かれることになり、そこに俺たちはお呼ばれしたわけだ。

そのはずなのだが、前述の通り俺は酔っ払いに絡まれていた。

俺はどうやら阿頼耶に、良く言えば気に入られ、悪く言えば目をつけられたらしかった。

なんか呼び名も菅田くんから直以くんが変わってるし。

俺は、上座にいる梨子を見た。梨子は俺と目が合うと、慌てて視線を逸らした。隣にいる月読は、頭の上に『？』を浮かべて梨子を見ていた。

「直以くん、ちゃんと話を聞きなさい！」

「だから聞いてるって。夏海さん、助けてよ」

荒瀬先輩にお酌をしていた夏海さんは、俺が呼びかけると一瞬だけこちらを見て、梨子と同じように慌てて視線を逸らした。

他の人間も一緒だった。教団の最高幹部である阿頼耶に口出しできる人間は実質的にいないということなのだろう。もしいるとすれば、阿頼耶と同等以上の地位にいる限られた人間だけだった。

「ほら、阿頼耶。いい加減にしなさい。お客人が困っておいでしよっ？」

見るに見かねたのか、そう言って阿頼耶を静止してくれたのは、限られた人間であるところの阿摩羅だった。相変わらず重そうな着

物をまとっている、妖艶な女性だ。

「沙織、あなたからも直以くんにひとこと言ってやりなさいよ」

「本名で呼ばない！ すいませんね、菅田さん。阿頼耶も普段ならこんな悪酔いをするのではないのですけど」

「いや、かまいませんよ。良く言えば親しみ安いし。初対面での凛々しいイメージはなくなっただけだね」

阿摩羅は赤い唇を歪めて形のいい微笑を作った。うん、色っぽいお姉さんだ。

阿摩羅は、端に立っていた給仕に指示を出して半強制的に阿頼耶を退場させると、今まで阿頼耶が座っていた場所に自分が座った。そのまま俺に寄り添うように身体を密着させ、両手でウーロン茶の瓶を持った。

「菅田さんはお酒はやらないんでしたね？」

「ええ。まだ未成年だからね」

俺がコップを持つと、阿摩羅はそつとウーロン茶を注いでくれた。身体の密着具合がさらに増す。あゝ、いい匂いだ。俺は、酒とは違う一種の酩酊感に酔いそうになった。上座からなにか突き刺さるような視線を感じたが俺は気付かないふりをした。

「今日はありがとうございました。なんでも逃げ遅れた子供を助けるために身を挺して行動してくださったとか。阿頼耶も私も、谷川村の全員があなたに感謝しているのですよ」

阿摩羅はそんなことを言ってくる。俺は、黙ってウーロン茶を一口飲んだ。

「谷川村での生活はどうですか？ なにか不自由はさせていませんか？」

「大丈夫ですよ。厚遇されているのはわかるし」

それは、席順を見てもわかった。

まず上座に月読となぜか梨子。その次に今夜の主役である自衛隊の幹部と教団の幹部。そして、その次には俺たち鈴宮市の代表の席があるのだ。

言ってみれば、谷川村に訪れている多数の外交官の中でもっともいい席を用意してもらっているってことだ。

「なにかご要望がありましたらなんでも仰ってください。可能な限り、善処しますわ」

「それじゃあ早く会談の席を設けてくれませんか？」

阿摩羅は、少しだけ身体を離すと、さらに身体を密着させて俺の耳に吐息を吹きかけた。

「無粋ね。こんなときに仕事の話をするなんて」

厚衣着物越しにも女の柔らかさが伝わる。

「こつちの都合で延期したのは悪かったけど、仕事が片付かないとゆっくり遊べないから」

阿摩羅は、そつと俺から離れて熱い視線を送ってきた。

「今晚、10階を訪ねてください。もちろんおひとりで」

そつ言つて阿摩羅は俺から離れていった。

俺は、口を手のひらで覆つて、顔の下半分を隠した。

「……来た、か」

そつ、ついに来た。待ちに待つたやつが。

なにが来たつて、あれだ。

枕営業だ！

阿摩羅は俺の倍以上生きているだろうが、あれだけの美人なら年齢差なんか関係ない。むしろウエルカムだ。

俺は、にやける口を隠すためにウーロン茶を一気に飲み干した。

「直にお兄ちゃん、なんか変」

「なんだ、どこが変だ？」

「そつじゃなくて、態度が変」

薄暗い部屋、布団の中で梨子は猫のように瞳を爛々と輝かせ、俺を睨んできた。

「態度が変わってなんだよ」

「だって、今日はお風呂入ってる時間も歯を磨いている時間も長かったし、今もそわそわしてる」

「ストーリーみたいに人のことを観察していないでいいから。さっさと寝なさい」

「なによお、ヒトをヤツカイモノみたいにいい」

実際、今の梨子は厄介者だった。俺は、梨子が寝付いた後、大人の時間を過ごすために10階に行かねばならないのだ。

いや、ぶつちやけるのなら梨子に正直に話してさっさと行けばいいのだが、なんとというか、後ろめたさを感じてしまい、それができないでいるのが現状だ。

「なんか今日の直以お兄ちゃん、大変だったみたいだね。本当はパーティーのときに月子ちゃんを紹介する予定だったんだよ」

「ああ、そうだったんだ。それは残念だったな」

「なんか、アラヤさんに絡まれてたし。あの人と仲良くなったの？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどな」

俺は梨子から視線を逸らした。俺は、自分でも自覚できるほどそわそわして落ち着きがなかった。

「？ 直以お兄ちゃん、本当におかしいよ？ 大丈夫？」

「あゝ、いや、疲れてるのかもナ。さっさと寝ることにしよう」

「そっか。それじゃあ今日はおしゃべりはやめて、寝よっか」

「……ああ、そうしよう」

梨子は、俺の小指を掴むと、そのまま瞳を閉じた。そして、1分も経たないうちに寝息を立て始める。

梨子は寝つきがいい。ベッドが天蓋付きの羽根布団だろうがダンボールの敷布団に着たきりの上着の掛け布団だろうが、変わらずに安眠する。なんちゃってサバイバー梨子は、どんな環境でも熟睡できる眠り姫だった。

まあ、今はそれがありがたい。俺は、俺の小指をしっかりと握っている梨子の手を外すと、心の中で梨子に謝ってからゆっくり布団を出た。

音のしないように襖を開け、続きの間へ。そこには、足を伸ばしてロッキングチェアに座る荒瀬先輩がいた。

「……どこに行くのか？」

「ええ、朝までに戻ります。もし梨子が起きたら便所にも行っただけで言っておいてください」

「わかった。俺が行かなくても大丈夫か？」

「大丈夫です！」

ていうか、ついてこられたら困る。俺は荒瀬先輩との話を打ち切り、部屋を出た。

が、鉢合わせるように夏海さんが立っていた。なんかやたら邪魔が入るな。

「あれ、直以くん。どうしたの？」

「あ〜っと、便所です」

「部屋にもトイレはあるはずだけど」

「えっと、大きいほうなんですよ。部屋ですると臭いが籠るから、梨子がうるさいんですよ」

「あ、そうなんだ」

悪役になってもらった梨子に本日2度目の謝罪をしながら、俺は夏海さんと別れた。

背後で扉の閉まる音を聞き、俺は小走りに非常階段まで走った。

エレベーター待ちをしているところを見つかったらまたなにか言われるに違いない。

音を立てないように階段を上って行く。幸い、部屋があるのは8階、目的地の10階までだったの2階分だ。

10階の出入り口のところには、2人の男が立っていた。和装をしているところを見ると、どうやら教団関係者らしい。

男たちは威嚇するように手に持っている棒を俺に向けた。

「ここより先は教団幹部の居住区になっております。立ち入り禁止ですでお戻りください」

「……えーっと、なにも聞いていないのか？」

「？ はい。とくに誰かを通すようにという指示は受けていませんが」

これは、あれか？ 夜這いをかけるからには命がけで来いってことか？

さてどうするかと考えていると、男たちの後ろから、さらに別の男が来た。

この人には見覚えがある。陸上自衛隊の佐伯3等陸尉だ。

「彼は大丈夫だから、黙って通して」

「しかし……」

「阿摩羅の指示だから」

佐伯陸尉にそう言われると、見張りの男たちは渋々ながらも俺を通してくれた。

佐伯陸尉は俺についてくるように言うと、10階を歩き出した。

俺は佐伯陸尉の後を追った。

「俺が来るってわかっていたんですか？」

「まあね」

佐伯陸尉はそっけなくそう答えた。

しかし、この人は自衛隊の人間で教団の人間ではない。それは、阿摩羅に敬称をつけなかったから間違いないと思うが、それにしても阿摩羅の小間使いのようなことをやっている。

今ひとつ、谷川村のパワーバランスがわからないな。

と、佐伯陸尉の足が止まった。

「ここに入りな」

俺は、佐伯陸尉の指差す部屋の扉を見た。

「ここで今からなにをやるか、あなたは知っていますか？」

佐伯陸尉は頬を歪めた。それがどこかいやらしく見えたのは俺の気のせいではないだろう。

「ま、ごゆっくり」

佐伯陸尉は俺の肩を叩いて、その場を去っていった。

俺は、佐伯陸尉の姿が見えなくなるまで見送り、軽く深呼吸して、ノブに手をかけた。

そわそわ（後書き）

前もって言うておくと、このあとお色気展開にはなりません。

今回はそう思ってもらえるようにミスリードしたつもりなんです、書き上げて、ミスリードよりアンフェア感のほうが強い気がしたので白状しておきました。枕営業なんて直以が勝手に思っているだけです。

どうか、悪しからず。

善意の押し付けほど迷惑なことはない

おかしな部屋だった。

床一面が柔らかいクッションで覆われており、壁は鏡張り。寝そべって戯れる下着姿の美男美女は酔っ払っているのか、あるいはおかしなクスリでもやっているのか、濁った瞳で俺を見てケタケタと笑い声を上げた。

「いよう、来たな」

アラブの王侯貴族のように美女を侍らせて俺に声をかけたのは男だった。

日野陽一、日光を自称する飛行機事故の生存者だ。

「ほら、こつちに来いよ」

日光がそう言うと、俺の側にいた美女がネグリジエ越しに透けた乳房を俺に押し付けて、腕を絡めてきた。俺はその腕を乱暴に払った。

待ち望んだピンクシチュエーション、今はその状況から逸脱してないはずなのに俺の心は自分でも驚くほど冷えていた。

「……なんだよ空気読めよ」

日光は自らに寄りかかる美女の大腿を撫でた。

「阿摩羅はどこだ？ 俺、彼女に呼ばれて来たんだよ」

「いないよ。俺が阿摩羅を使っておまえをここに呼んだんだからな」俺は回れ右をして部屋を出ようとした。が、できなかつた。いつの間にか俺の背後にいたビキニパンツ一丁の角刈りマッチョが俺の肩を押さえていたからだ。

「男色が好みならそいつに相手させるぜ」

角刈りマッチョはその言葉に呼応するように俺の首筋を撫でてくる。全身を走る悪寒、俺は角刈りマッチョから離れるために一歩前に出た。結果、俺はその異様な部屋に入った。

床が柔らかいためバランスが取り辛い。俺は転んだが、痛みはな

かった。この部屋自体がひとつのベッドになっっているようだった。

俺は部屋を見渡した。電気はついていない。明かりは、小皿に盛られた香油に火をつけて各所に置かれていただけだ。鏡に反射した火の赤が部屋全体の退廃感を助長しているようだった。

……仕方ない。俺は胡坐をかき、日光に向かった。

「それで、なんだって？ 俺に用があつて呼んだんだろ？」

「いやあ、今日はご活躍だったみたいじゃないか。俺からも労つてやろうと思つて」

「必要ないな。そんな義理もない」

「あのさあ。こっちはこれでも下手に出てやつてるんだぜ。おまえもここで生きていくんなら俺と仲良くしておいたほうがいいんじゃないか？」

「？ なんの話だ？」

「どうせ梨子をダシにしてここに居付こうとしているんだろ？ そうできるように俺が協力してやるよ」

「随分勝手な話だな。そんな気はねえよ。俺も梨子も、な」

それを聞くと、日光はゲラゲラと笑い出した。どうでもいいことながら周りの追従笑いがうざい。

「マジで言ってるのか？ ここを出て行って電気のない下等な生活に戻るって？」

「電気がないのを下等と言い切るのかよ」

「そうだろ？ 電気が使えないなんて中世並みじゃないか」

「深い見識をお持ちで。確かに電気が使えなければ不便で下等な生活をするようになりますからね」

「そうだろう。原始人みたいな生活をしているのがいいわけがない」
「嫌味だよ、馬鹿」

俺のひと言で、部屋の空気が変わった。

学者気取りの教養人はえてして歴史を信奉し、そうでない人は現代を妄信する。昔から言われ続けている格言のひとつだ。

古きを温め新しきを知る。歴史を学ぶ大前提は、それが人の営みであるということだ。たとえ時代や文化が違おうとも、自分たち現代人と同じ人間のやったことを学ぼうというところに温故知新の意義がある。

だが、現代を妄信する連中は、生活水準の低かった昔は下等であり、見るべきところがないと一蹴する。

これは、そのまま歴史という時間軸から文化人類学という地域軸に当てはめることができる。

つまり、自分たちより生活水準の低い発展途上国や後進国の人間は下等であると言っているのだ。

酷い差別意識だ。特に、差別される側からしてみれば。

どんな生活を送っていようと、そこにいる人たちは必死に生きている。

鈴宮市で生活する俺たちは、ゾンビに囲まれて命を脅かされながらも、なんとか食べていけるように、生きていけるように必死になっただけだ。

あるいは、日光はいいやつなのかもしれない。

自分が下手に出て、俺を労おうというのも本当だろう。今現在、俺なんかは政治的価値はなく、わざわざ気を使う必要はないからだ。だから、こいつは100パーセントに近い善意で、自分がいいと思っただけ、正しいと思っただけのことを俺が喜ぶと思っただけ提案しているのだらう。

だが、こいつは俺たちを、おそらくは差別意識と気付きもせず、ひと言『下等である』と談じ切りやがった。

それは、俺を苛立たせるには十分のひとつだった。

「……おまえさあ。梨子の知り合いだからって調子に乗ってないか？ そんなものが俺に通用すると思ってるのかよ？」

「生憎、ここに来てから劣等感を刺激されっ放しでさ。調子になんて乗ってる余裕はないよ。それも、梨子をダシにしてなんてさ」

「それじゃあなんでこの俺に舐めた口をきけるんだよ。他のやつらみたいに這い蹲って俺の関心を買うのが普通だろ？」

俺は、ゆっくりと立ち上がった。苛立ちが頂点に達しつつある。

これ以上の会話は無益であるばかりか有害だ。

「おいおい、これでも俺はおまえを立ててやってるんだぜ。梨子の知り合いだし、わざわざここにも招待している。これ以上俺を怒らせないほうがいいんじゃないか？」

「奇遇だな。俺もおまえを立ててやってるぜ。今すぐ殴りかかりたいのを必死で我慢しているんだから」

荒事には慣れていないのだろう、日光の瞳に怯えが走った。それとは逆に、後ろにいる角刈りマッチョが一步俺に近づいてきた。

「お、俺になにかしてみろ。おまえを殺すだけじゃなくて、おまえの仲間も皆殺しにしてやるからな！ こっちには自衛隊がいるんだ！」

……自衛隊？

こいつは、なにかあれば自衛隊に命令して俺たちを殺すだけの行動をさせることができる、またはできると信じ込んでいる。

こいつの自信は、なんなんだ？

俺は肩の力を抜き、純粹な疑問を口にした。

「おまえ、誰なんだ？ 嫌味とかじゃなくてさ。そんなことができる権限があるとは思えないんだけど」

日光は、俺の質問に少しだけ気をよくしたのか、役に立たない舌をぺらぺらと動かした。

「そうか、俺が誰だか知らなかったんだな。それじゃあ仕方ないな。ただで許す気はないけど、寛大な心で……」

「うるせえよ。さっさと答えろ」

「……俺は日光、アマテラスだ。月読の兄だ！」

「兄？ 月読、いや、高橋月子と、兄妹なのか？」

「ちよつと違うな。月子は、俺の女だよ」

そう言つて日光は勝ち誇つたように鼻で笑つた。

……なんだ、この敗北感は。

「月子は俺の命令には逆らえない。だから、俺がなにか言えば、おまえなんて明日には絞首刑だ！」

「なるほど、ね。虎の衣を借るつてやつか」

温泉で尾崎1佐が言つていた、体制に亀裂を入れる可能性のある外的要因。それがこいつなんだろう。こいつのせいで、梨子は谷川村の一部で危険視されているつてことが。

「て、てめえ！」

「なんだ、怒るつてことは自覚はあるんだ」

俺は一步日光に近づいた。が、半瞬後には真横に飛び退いた。背後から手を伸ばされたのだ。

振り返ると、そこには角刈りマッチョがいた。

角刈りマッチョは白い歯を輝かせて変なポージングを決めると、びくびくと胸の筋肉を動かした。どこにどんな筋肉があるかを説明する、まるで図鑑だ。

ボディビルダーの筋肉は観賞用であり、大した力を出せないつて話はよく聞く。それは、たぶん事実なんだろう。ただし、比較対照が速く走るスプリンターだったり、重いものを持ち上げる重量挙げの選手だった場合だ。

見せかけだろうがなんだろうが、その筋肉を得るためにトレーニングしている角刈りマッチョの力は、トレーニングをしていない俺より確実に強い。

捕まったら、それで終わりだ。

「死なない程度に叩きのめしたらこいつを好きにしていぞ。褒美だ！」

偉そうにそうほざく日光は、すでに美男、そして美女の後ろに隠

れてしまっていた。

角刈りマツチヨは心なしに股間を膨らませて、俺に近づいてきた。俺は、それに合わせて後退した。

角刈りマツチヨの足は一步進む毎にソファに沈む。

その足が、深く沈んだとき、俺は跳ねた。

腰を落としてタツクルしてくる角刈りマツチヨを馬跳びの要領でかわす。瞬間、淫靡な部屋が急激に狭くなった。角刈りマツチヨが壁の一面を覆っていた鏡に突っ込んで叩き割ったのだ。

鏡を割る破壊音、頭から血を流す角刈りマツチヨ、悲鳴を上げる美男美女。

「……阿鼻叫喚、だな」

角刈りマツチヨは頭から滴り落ちる血を拭きながら俺を睨んできた。とりあえず、頭頂部に刺さっている大きめの鏡片は抜いたほうがいいんじゃないか？

「お、おまえ。こんなことしてどうなるかわかってんだろぅな!？」
「俺がなにしたらって？ 突っ込んでくる角刈りをかわしたただけで、勝手に自滅したんだろ？」

まあ、実際はそんな言い訳が通るとも俺自身も思っていない。

意味を為さない咆哮をあげながら再びタツクルしてくる角刈りマツチヨをかわし、すれ違いざまに足をかける、が、さすがにゾンビを相手にするようにはいかない。角刈りマツチヨはたたらを踏んでよろけたが倒れなかった。

振り返りざま、俺は足元にあつた香油入りの皿を拾い、角刈りマツチヨの顔面に叩き付けた。

熱いのか痛いのか、それともただ染みるだけなのかはわからないが、角刈りマツチヨはその場にいる誰よりも甲高い悲鳴を上げて、目を押さえて悶え苦しんだ。

その隙に俺は退廃的な部屋を出た。それと前後して、館内にサイレンが鳴り響いた。間違いなく、俺に対してのものだろう。

「ったく、なんか大事になっちまったな」

さて、どうするかと考えていると、通路の先に女を見つけた。

月読、谷川神道教のトップだ。

自宅ゆえの安心か、サイレンが気になってひとりで部屋を出てしまったのだろう。俺にしてみれば千載一遇のチャンスだった。

俺は、こいつを人質にしてやろうと、月読に駆け寄った。

だが月読は、どこまで事情を知っているのか俺に臆することもなく、近づいた俺の手を握った。

「……こつちへ」

月読は軽い力で俺を引つ張っていった。

軽い混乱、俺は、月読の細くて意外にも少し荒れている手を払うことができずに、為すがまま誘導されていった。

月読と俺は小走りに廊下を駆け抜けた。

その先にあつたものは、階段だ。先ほど上つてきたところとは違う。下り階段はなく、上にいく階段のみがあつた。

おそらく衛兵だろう、その階段を守るように立っていた衛兵は月読を見ると、居住まいを正した。

「いいですね。私はこの先にひとりで行きました」

サイレンと、俺の手をしっかりと握っている月読に困惑している衛兵は、それでもしつかりと頷くと、俺たちを通してくれた。

他の場所とは違い、なにやら華美な装飾が施されている階段を上る。察するに、この階段とこの先は儀礼的ななにかがあるようだった。

「この先は？」

「屋上です」

月読は必要最低限のことのみを述べると、屋上へ続く扉を開いた。

梨子ちゃんは、泣いてくれたの

生温かい夜風が頬を撫でた。

エアコンの利いた室内から水気を多量に含んだ屋上に俺と月読は出た。

そこには、この半年で慣れ親しんだ電気のない夜があった。

見上げれば満天の星とラウンドケーキを半分に分けたような月が浮かんでいる。

月読は俺の手を離すと、あやふやな闇の中を子鹿が跳ねるように進んだ。そのまま小さくなりかける背中を俺は慌てて小走りで追った。

月下、美女を追いかけるシチュエーションは残念ながら色気などはまったくなく、月読は見た目の憂いを払拭するように屋上を駆けた。

「そろそろ説明してくれませんか。どこに行くんだよ」

俺が聞くと、月読は足を止めて俺に振り返った。

「どこにも行きませんよ。ここなら安全です。屋上は、月に一度観月の儀を執り行う場所なんで、私と、阿頼耶と阿摩羅しか入れないことになってるんです」

どこか愉悦を含んだ、鈴を転がすような声だった。

「……なんでそんなところに俺を連れてきたんですか？」

「あら、これでも私はあなたを助けたつもりだったのだけど？ どうせまたなにかヤツカイゴトに巻き込まれたのでしょうか？」

「またって……。ずいぶんと馴れ馴れしいね。初対面じゃないけど、言葉をかわすのは今が初めてだろ？」

俺が言葉を崩してそう言うと、月読はころころと笑った。なんかイメージが崩れるなあ。

「ごめんなさい、そんな気がしなかったから。だって、最近はずっとあなたの話ばかり聞かされていたのよ？」

「梨子に、か？ なにか悪口とか言っていないだろうな？」

「ええ。女の子から誘っているのにキスもしてくれないヘタレだなんてことは聞いてないから」

「……あんだ、存外腹黒いね。黙っていれば梨子の名誉は保たれたのに」

俺と月読、いや、今は月子だな、は顔を見合わせて笑った。

俺は籐を編んで作ったベンチに腰を下ろした。ベンチは俺の体重で少し軋んだ。

月子は、俺の正面に立ち、優雅に俺に頭を下げた。

「親友、遠野梨子を命がけで助けていただき感謝します。どうもありがとうございまして」

「別に、礼を言われることじゃない」

月子は頭を上げると、堅苦しい挨拶は終わりとはばかりに俺の隣に座った。

「でも、本当にありがとう。梨子ちゃんの傍にあなたがいてくれて、すごく安心したわ。今の梨子ちゃんをよく笑うようになった。昔はどこか無理して笑っているようなところがあつたけど、今は本当に自然に笑ってくれるの。それは、きつとあなたのおかげ」

「それじゃあ俺も礼を言うておくよ。ありがとう」

「きつと、こんな機会がなければ、あなたとふたりだけで話すことなんてなかったでしょうね？」

「？ なにか？」

「??？ 今のお礼、ここに連れて来たことにでしょうか？」

「……、ああ、そういえばそのことも礼を言うべきだったか」

「??？? それじゃあ今私はなにに感謝されたの？」

「えーっと、くそ、言葉にすると恥ずかしいな。えっと、だから、梨子を思ってくれて、ありがとうってことだ」

それを聞くと、月子は目を細めて微笑を浮かべた。

「それこそ礼を言われることじゃないわ。私にとって、きつとあなたにとっても、梨子ちゃんは大切な人なんだから」

月子は、俺の大腿を枕にしてだらしなくベンチに寝そべった。

「まったく、イメージ崩れるなあ。初めて見たときは上品なお姫様っ
て感じだったのに、台無しだ」

「本当は育ちが悪いのよ。だって、半年前まで養護施設で何10人
もの子供の面倒を見てたのよ？ 上品になんて気取ってられますか」

月子はため息をひとつ吐くと、寝返りを打ち、黒絹の髪で表情を
隠した。

「それが、なんの間違いか信仰もしていない宗教の教祖様なんてや
らされてるし……」

「お疲れ。大変だったのは理解できるけどな」

事実、月子はプライベートでも気の抜けない生活をしているのだ
ろう。利害関係が絡まないとはいえ見ず知らずの俺に地を見せて愚
痴るほどに。

唯一気の許せるはずの日光は悪いやつではないんだろが、あ
いつは周りに気配りのできるやつではない。

そういう意味でも、気を許せて、かつ、周りを優先して行動する
梨子は月子にとって貴重な存在なのかもしれない。

「……聞いていいかな。なんでそんなに梨子に拘るんだ？ いくら
親友だからとはいえ梨子への厚遇ぶりは普通じゃないだろ？」

月子は仰向けに寝転がり、切れ長の瞳で俺を見上げてきた。

「梨子ちゃんは……、恩人なのよ。彼女に言ったら否定するだろ
うけど」

「恩人？ 飛行機事故の？」

「そう、物理的に命を助けてくれた、とかじゃないんだけど。彼女
は……」

月子は、目を細め微笑を浮かべて、言った。

「梨子ちゃんは、泣いてくれたの」

「泣いた？」

「ええ。あの飛行機事故は誰にとっても悲劇だったわ。私も梨子ちゃんも、陽一も一度に両親を亡くして世界は一変してしまった。あまりに非現実的な現実に、私は、どうすればいいのかわからなかった」

月子はゆつくりと身体を起こした。

「頭では現状を理解できても心では理解できない。ううん、理解を拒否していた。どんどん胸の中をどす黒いなにかが浸食してきて、でも、どうすればいいのかわからなくて、心が壊れそうになったとき、梨子ちゃんが泣いてくれたの」

月子は俺に背中を向け、寄りかかってきた。表情を俺に見せないまま、月子は語り続けた。

「梨子ちゃんは涙を流して大声を上げて、私にしがみついていたの。どうすればいいかわからない私の代わりに、泣いてくれたの。それで私は梨子ちゃんを慰める役を演じることができた。なんとか壊れないでいられたのよ」

俺は、苦笑してしまった。

「たぶん、梨子本人が聞いたら赤面して穴に隠れるだろうな」

「ええ。でも、きつと全部は隠れなくてお尻は見えているのよ」

俺と月子の笑い声が涼風に流され宵闇の中に消えていった。

「でも不思議。このことを誰かに話したのって初めてなのよ。陽一にすら話したことないのに。梨子ちゃん自身の思惑はどうあれ、私が彼女に助けられたのは事実、私が常に彼女の味方であるのは、私だけが知っていればいい。そう思っていたのに」

月子は俺に体重を預けてきた。それに合わせるように俺も月子に体重をかける。

月子は、半円の月を見上げて、言った。

「ねえ、直以さん。やっぱり、駄目？」

目的語の省略された言葉。だが、俺には、月子がなにを聞いているのかがはっきりわかった。

「……梨子はなんて言っているんだ？」

「『直にお兄ちゃんのいるところが私のいるところ。直にお兄ちゃんがここを出て行くのなら、私もそれに従う』。これを聞いたとき、正直、あなたに嫉妬したのよ。梨子ちゃんは、外よりも安全でいい暮らしのできる私のところより、あなたの傍にいたいといったのだから」

梨子は俺の傍にいる。それならどうすれば梨子は谷川村に留まるか。月子は、俺に谷川村にとどまってくれと言っているのだ。

「悪いけど、俺は鈴宮市に戻るよ。梨子も連れていく」

俺の返答を想像していたのか、月子はたいしたシヨックも見せず、俺から離れた。

「そう。なら、ひとつだけ約束して。梨子ちゃんを必ず守るって」

俺はベンチから立ち上がった。俺に続いて月子も立ち上がる。

安易な口約束。守れるかどうかわからないことならば、簡単に誓うべきではない。

それでも俺は、月子に向き合って答えた。

「わかった、約束するよ。梨子のことは心配しなくていい。俺が守るから」

それを聞くと、月子は安心したように目を細めて微笑を浮かべた。

「私も、梨子ちゃんのために鈴宮市に電気を送れるように努力するから」

「いや、それはいい」

「？ なぜ？ あなたはそのために来たんじゃないの？」

「いや、そうなんだけど、さ。お節介承知で言わせてもらうけど、あまりじゃばらないほうがいいよ。月読ってのは飾りなんだからさ」

月子は、少しだけ切れ長の瞳を見開いて、麗らかな笑い声をあげた。

「変な気の使い方するのね。でも大丈夫。私は自分が飾り物だつてわかってるから」

「だけど、それをわかっていないやつもいる」

月子は笑いを収めて苦い顔を作った。

これこそが、谷川村にある亀裂だろう。悪い言い方をするなら、唯一つだけ込める、隙だ。

月読という立場は谷川神道教において権威だ。だが、実際に谷川村を執行する機関に、月読の入り込む余地はない。

実質的な力のない月読が、権威によって干渉できる、そのダブルバインドが谷川村の亀裂なのだ。

そして、不幸にもその権威を利用しようというやつは存在するわけで、その最たる人物が月子の彼氏である日野陽一であるのは皮肉な話だった。

と、勢い良く扉が開かれた。屋上に来たのは阿頼耶と阿摩羅の美熟女コンビだった。

「月子、直以くん！ こんなところにいたのね」

阿頼耶は俺たちに駆け寄って、目を細めて微笑を作った。……この人今、月子って言わなかったか？

阿摩羅は、姿勢を崩さずに楚々と俺たちに歩み寄り、言った。

「菅田さんは期待を裏切るのが得意のようですね。まさかここまで大事にしてくれるとは思いませんでしたよ」

「俺としては身にかかる火の粉を払っただけだけど。それにしてもあんたも酷いよね。期待させておいて行ってみたら別人が待ってるなんてさ」

阿摩羅は、苦笑を浮かべると俺に宣告した。

「ことここに至っては、あなたたちには谷川村からの退去を命じます。依存はありませんね」

「ああ。いい頃合だ。このまま居続けても話は進まなかつたし、これからは日光に命を狙われかねないから」

阿摩羅は、ひとつ頷くと、付いてくるように俺に言った。

そして、たどり着いたのは、なんの変哲もない屋上の一角だった。

「ここになにが？」

「これを、開けてください」

言われて初めて気がついたそこには、少しだけ出っ張った筒丈の箱があった。上部には鉄網が張られている。使われていないようだが、どうやら煙突のようだ。

俺は、言われた通り鉄網を持ち上げて外した。

「これは、緊急避難用の脱出口になります。この煙突を辿って行けば地下のボイラー室まで通じています。そこからは一本道で神殿の外まで出られます」

そついうところがあるから屋上は最高幹部意外は立ち入り禁止なんだろうけど、それにしても、そんな大切なところを俺なんかに教えちゃって大丈夫なのか？

「わかりました。えっと、梨子たちは？」

「すでに神殿から脱出させています。外に出てからしばらく行ったところに小川がありますから、そこから舟に乗ってください」

「……用意のいいことです。それじゃあ行きますよ。短い間ですがお世話になりました」

「あ、直以さん」

名前を呼ばれて、俺は月子に振り返った。

「ちよつとただけだけど、あなたとお話できてよかつたわ。梨子ちゃんをよろしくお願いします」

「ああ。あんた、けっこうタイプだったよ。時間があつたら口説いたんだけどね」

「なるほど、できないことを承知で言うなんて、梨子ちゃんが言うとおりヘタレね」

俺たちは、顔を見合わせて笑った。

と、月子の隣にいる阿頼耶を見た。目を細めて微笑を浮かべている。

ある疑念、俺は突拍子もないその考えを口に出すのはやめた。

月子と阿頼耶。どこが、というわけではないが、この2人は、似てるのだ。

ひょっとしたら血縁があるのかもかもしれない。

それならば、なんの縁もないはずの月子が月読を演じさせられているわけがわかるのだが。

だが、もしそうだとしても、今この場で答えてはくれないだろう。だから、俺はその疑問を胸の内にしまった。

こうして、俺たちの谷川村バカンスは、大した利もなまま崩壊的に終わったのだ。

額は英語で forehead です

俺は煙突に入った。

しばらくは縄梯子で下る。5メートルも下っただろうか、縄梯子が途切れる頃、煙突の内部に備え付けの梯子に移り、そこから延々と真下に向かって降下した。

幸い、と言うべきだろう。梯子には幾分埃が積もっていたものの、煤けている様子はなく、煙突は本来の目的に使用されていないことが伺えた。

月明かりすら届かない暗闇を、俺は手探りで降り続けた。

一体いつになったら下までたどり着くのか？

足を下ろし下の梯子に掛け、同じように手を下ろし、再び足を下ろす。飽くなき単純作業に不安を覚えた頃、俺の足はようやくよく固いコンクリートを踏んだ。

墨を垂らしたような暗がり、手を伸ばせばなにやらひんやりとした鉄が手に触れたが、それがなんなのかまでの判断はつかない。

この先が一本道だと知らなければ、一步も動けなかっただろう。

俺は、手探りで足元も覚束ない道を歩いた。

明るい半月に照らされる洞窟のような出入り口、俺がそこから出られたのは、随分と時間を使った結果だった。

俺は安堵の息をひとつ吐くと、湿った土を踏みしめて先に進んだ。目的の川はすぐに見つかった。水の流れる音が聞こえたからだ。

川面は穏やかで、地上にもうひとつの半円を映し出していた。

「直にお兄ちゃん」

俺が川に近づくと、見計らったように梨子が姿を現す。傍らには荒瀬先輩の姿もあった。

「いったいどうしたの？ 自衛隊の人にいきなり起こされてここま
で連れて来られたんだよ？」

「あゝ、悪い。ちよっしくじった」

梨子は困ったように頬に手を当てた。

「それじゃあこれから村を出るの？」

「ああ。どこかにボートはないか？ 用意してくれてるらしいんだ
けど」

「ボート？ あれのことか？」

荒瀬先輩が指差す先には、確かにボートがあった。公園の貸しボ
ート屋で借りられるようなボートだ。オールは2本付いているが、
ご丁寧に船外エンジンまである。これなら、苦もなくボートを動
かせそうだ。

俺たちはボートのところに小走りで向かった。足元の湿りはもは
や泥濘ぬかるみになっていて靴が泥の中に沈んだ。

「この辺はダムの放流で水に漬かったみたいだな。足場が悪い」
荒瀬先輩は足を泥に取られてわたわたとしている梨子を片手で摘
み上げると、ボートの上に放りこんだ。

次いで俺もボートに乗り込む。だが、荒瀬先輩はボートに乗らな
かった。

「？ どうしたんですか？」

「……先に行ってる」

荒瀬先輩のその声に呼応するように、俺たちを半包囲するように
和装束に身を包んだ一団が現れた。

その中心にいるのは、2人のマッチョだった。ひとりのマッチョ
はスキンヘッド。もうひとり、顔中に包帯を巻いている。おそら
く、輪郭から見て先ほどやりあった角刈りマッチョだろう。

「このまま逃がしはしないわよお！ アタシの彼に酷いことしたオ
カエシもしないといけないしね！」

スキンヘッドマッチョはそう言うと、顔に包帯を巻いた角刈りマ
ッチョと身体を絡めてキスをした。

……あゝ、なんとなく、想像はしていたけどさ。こう、ガチホモつぷりを見せられると、なんとというか、きついものがあるな。

「さきに行け。こいつらを片付けたらすぐに追いかける」

「片付けるって……、10人はいますよ。ゾンビが相手じゃないんだ。いくらあんただって手に余るでしょう」

荒瀬先輩は、苦笑を浮かべて俺の顔を見た。

「おめえが残ったって変わらねえよ。足手まといだ」

次の瞬間、俺は目を見張った。

荒瀬先輩が俺に視線を向けている隙に、マッチョ2人が突っ込んできたのだ。

おかしい。

それは、もはや強いとか凄いやかそうだったレベルじゃない。

腰と足、大の男2人のタツクル。しかも足場は踏ん張りの効かない泥濘だ。

にもかかわらず、荒瀬先輩は、微動だにしなかった。

荒瀬先輩は面倒くさそうにマッチョ2人の襟首を掴んで引き剥がすと、スキンヘッドを元いた陸地に、角刈りを川の中に放り込んだ。……どうみても100キロを超えるマッチョを片手で放り投げるって、どんな腕力してるんだよ。

「……、確かに俺がいても役に立ちそうにないですね」

「わかつたらさっさと行け」

「行かせないって言ってるでしょ！」

スキンヘッドマッチョは金きり声を上げる。

荒瀬先輩は足でボートを押し出すと、ゆっくりと陸地に向かった。

「な、なによ！ この人数相手に勝つつもりなの！？」

「騒ぐなハゲ。喚いたって髪が生えてくるわけじゃねえだろ」

……やっぱり、この人、須藤先輩に一番近い人間だ。

そんなことを考えていると、ボートが大きく揺れた。

川の中に沈んでいた角刈りマツチヨが舟縁に手をかけて乗り込もうとしてきたのだ。

身乗り出した瞬間、俺は角刈りマツチヨの包帯塗れの顔を踵で蹴倒した。

角刈りマツチヨは一度川に沈んだが、舟縁にかけた手は離さなかった。

俺は、今度はその手を思い切り踏みつけた。指の骨を折る感触、にもかかわらず角刈りマツチヨの手は舟縁から離れることはなかった。

こいつ、ひよつとして……。

「直にお兄ちゃん！」

梨子の声と同時に、角刈りマツチヨ、いや、角刈りマツチヨだったものは再びボートに乗り込もうと身乗り出した。

黄ばんだ白目に土気色の肌。間違いない、こいつ、ゾンビに感染してやがる！

「梨子、持つてる！」

俺は船外エンジンを持ち上げ、一度梨子に向けた。梨子が船外エンジンから出ている紐を両手に持つのを確認すると、俺は船外エンジンを振り回した。

紐が伸び、モーターが回り出す。

船外エンジンは稼働を始め、回り出したプロペラを、俺は角刈りゾンビに叩き付けた。

肉を裂き、骨を削る感触が船外エンジン越しに手に伝わる。

角刈りゾンビは、水飛沫を上げて川の中に消えていった。

「荒瀬先輩！」

俺の呼びかけに振り向いた荒瀬先輩は、頷いた。

俺は船外エンジンを川の中に入れた。本来の目的どおり船外エンジンはボートに推進力を与え、ゆっくりと動かした。

陸をどんどん離れ、ボートは進んでいく。やがて荒瀬先輩の姿が

見えなくなった頃、俺は船外エンジンをボートに備え付け、腰を下ろした。

「ふう、あとは流れに沿って下流に向かうだけ？」

俺は梨子に無言で頷いた。

支流から本流へ。

川幅はだんだんと広がっていき、やがて大きな川と合流したとき、世界は一気に明るくなった。

遮蔽物のなくなった川に、上弦の月が柔らかい光を注いでいるのだ。

微かに波打つ川面に銀色の光が反射する。

幻想的な光景だった。

「直にお兄ちゃん……」

船外エンジンを切ると、梨子はそっと俺に寄りかかってきた。

「どうした？ 船酔いしたか？」

「もう、ロマンチックじゃないことは言わないの！」

梨子は、俺を押し倒すように体重をかけてきた。

俺の上に梨子が乗る。

「谷川村でのお休みも、終わりかあ」

「名残り惜しいか？」

「本音で言つとちよっとね。でも……」

「でも？」

「帰りがへりじゃなくてほっとしている」

そう言つて梨子は舌を出した。

ボートは惰性でゆっくりと下流に流されていく。

俺は、月光に濡れる梨子の髪を撫でた。梨子は、その手に、自らの頬を当てた。

「月子ちゃんにはいつぱいお世話になっちゃったね。お別れはちゃんと言いたかったなあ」

「俺がちゃんと言っておいたよ。そのときに、おまえのことをくれもって頼まれたよ」

梨子はそれを聞くと、柔らかい吐息を零した。

「そっか。月子ちゃん、どうしても私にここに留まって欲しいって言ってたから。よかった。喧嘩別れじゃないなら、これでまた遊びに来られるね」

「そうだな。今度は、聖と雄太も一緒にな」

梨子は、微笑を浮かべて頷いた。その顔が急に消える。雲が、月を隠したのだ。

「……なあ、梨子」

「なあに、直にお兄ちゃん」

「キス、したいか？」

俺は月子との会話を思い出し、ゆっくりと上半身を起こした。

梨子と俺の距離は、ほんの10センチほど、だが、お互いがどんな顔をしているのかはまるっきり見えない。

梨子の吐息が、俺の顔にかかった。

「うん、したい。キス」

「それじゃあ目を閉じて」

俺は梨子の細い肩に手をかけた。梨子は、一瞬だけびくんと跳ねたが、すぐに肩の力を抜いた。

手のひらから梨子の高鳴る心音が響いてくる。いや、ひよっとしたらこの心音は俺自身のものかもしれない。ならば、それは俺の手のひらを介して梨子に通じているだろう。

俺は、梨子の顔に自分の顔を近づけた。

梨子の呼吸が、止まる。

俺も、息を止めた。

それは故意か偶然か。

ほんのわずかな動作で唇が接する、その間際、雲が晴れた。眼前には頬を赤く染めて顎を心持ち上げている妹（仮）。

瞬間、気恥ずかしくなってしまう俺は軌道を修正し、梨子の額に口付けした。

しばらくそのまま梨子の小さい頭を抱く。

ゆつくりと離れたとき、梨子は、最初はとろんとした目を向け、やがて、怒りだした。

「ちよつとまつて！ キスってこれだけ！？」

「……ああ。キスだろ？」

「ちがあああう！ キスっていったまうすつーまうすでしょ！ まうすつー……、えつと、額って英語でなんだっけ？ とにかくちっがあう！」

「女の子が自分を安売りするもんじゃありません。そういうのはこぞつてときにとっておきなさい」

「……ちよーへたれ」

「なんか言ったか！？」

「なんにも言つてませ〜っん！」

梨子はボートから身を乗り出し、指を川面に近づけた。

「り、梨子！」

俺は慌てた。考えるよりも先に身体が動いていた。

ボートが揺れる。

さつきとは逆だ。梨子は下、俺は上。

いつの間にか、俺が梨子を組み敷いた形になっていた。

いや、単純に梨子を川面から離れた結果押し倒してしまっただけなんだが。

「直にお兄ちゃん」

状況を理解していない、というより、盛大な勘違いをしているのだろう、梨子は俺を見上げると、再び瞳を閉じた。

「梨子……さん？」

「……いいよ。きつと、今がここぞってときだよ。直にお兄ちゃん、私を、もらって」

「……え〜つと」

俺が対応に困っていると、梨子は俺の首に手を回してきた。

梨子は腕に力を籠め、まるで捕食するように俺に近づいてきた。

顔が間近に迫ると、梨子は蝟（肉食です）のように口を窄める。

俺が離れようとする、腕の力が強まる。

これはまずいな〜という思いと、まあ、いいかという思いがせめぎ合っていると、急激に辺りが明るくなった。

月の光ではない。人工の光に照らされているのだ。

いつの間にか、俺たちは自衛隊に包囲されていた。

だっしゅつ！

直視できないほどの光量は斜め上から発せられていた。

どうやら物見櫓のようなものが立っているらしい。そこからライトで照らされているのだ。

ボウガンか、それとも狙撃銃か。おそらくは狙い定められているだろう銃口を前に、俺は大人しく自衛隊員の乗るボートからの接舷を許した。

3隻のボートに乗船する迷彩服を着た自衛隊員、その中に俺の見知った顔があった。

佐伯3等陸尉だ。

「夜間警備ですか？ お疲れさまです」

「こんな時間に水遊びかい？ 風流だね」

「急な事情ができて、鈴宮市に帰ることになったんですよ。通してもらえますよね」

「ああ、いいぜ。ただし、隣の女の子は置いていきな」

それを聞いた梨子は、ぎゅっと俺の服の端を掴んだ。俺は、わざとらしく重いため息を吐いた。

「あんた、自衛官ですよね？」

「なにを今さら……」

「それに、谷川神道教の信者でもない」

「……」

「なのに、なんで尾崎1等陸佐の命令に従わないで日光に従っているんだよ？」

周りの自衛官の連中に、俺の言葉から動揺を受けた様子はない。

それは、ここにいる自衛官は、全員日光を支持している連中ということだろう。

佐伯陸尉は、すぐに返答しなかった。

「なんでそう思うんだい？」

「いや、わかるだろう。尾崎1佐は俺に早く谷川村から出て行くように言っていた。それに俺たちが出て行くのは、阿頼耶も阿摩羅も、月読も了承済みだ。俺たちが出て行くのを妨害するのは、日光しかない」

「数日谷川村に滞在したくらいでずいぶん知ったかするじゃないか。きみの知らない派閥も谷川村にはあるかもしれない」

「かもな。でも、そうなんだろ？」

「ああ、そうだよ」

佐伯陸尉は、笑いを堪えながらそう言った。

「ああ。隠すまでもない。俺は日光を支持している。それがどうかしたかい？」

「……理由は？ 確かに月読に近い人間だけど、実質的な権限もない日光を、なんで支持するんだ？」

「あいつは、俺たちの理想を具現化する意思があるんだよ」

「理想？」

「世界は壊れて変わってしまった。今はアメリカも中国も、日本という国すらない。そんな中でもっとも力がある組織は？ そう、俺たち自衛隊だ。俺たちには、軍事力で世界を支配する力がある。だが上層部の連中は外に目を向けずに谷川村のことだけしか見ていない。阿頼耶も阿摩羅も、尾崎もだ！ だから俺たちは俺たちと意見を同じにする日光を支持し、月読に親政させて天下を統一するんだよ」

……うん、率直な感想。ばっかじゃねえの！？

世界を支配？ 天下を統一？ 安っぽいと呼ぶも愚劣なヒロイズムに毒された言葉だ。

普仏戦争時、プロイセンの宰相ビスマルクと参謀総長モルトケの間で交わされた有名な逸話がある。

「宰相閣下、フランス全土を焦土と化しましょう。ご命令いただければすぐにでも実行いたします」

「ふむ、卿はフランス全土を焦土にしてどうしようというのかね？」

「それは私の職分ではありません！」

こいつらの思考にはこの笑い話と同様の間抜けさがある。

天下を統一して、世界を支配してどうしようというのか？ 満た

されるのはこいつらのくすんだ虚栄心だけだ。

ナポレオン3世をセダンに追い詰めたプロイセン軍はフランス全土を焦土にすることが可能だったろう。

谷川村にいる自衛隊は、部隊を派遣して鈴宮高校を完全に破壊することも可能だろう。

だが、そこには根本的な命題が常に付きまとう。

やっつてどうする？ と。

俺の呆れ顔にも気付かず、佐伯陸尉は誇らしげな顔を俺に向けた。

「どうだい？ 俺たちと共に谷川村に残る気になったかい？」

「いや、俺は鈴宮市に帰りますよ。梨子を連れてね」

「そうか、でもそれは駄目だ。日光に命じられてるからな。本当はきみを捕らえるようにも言われているんだけど、まったく知らぬ中じゃない。見逃してあげよう」

俺は、そつと梨子の腰を抱いた。

「だから、梨子を連れて帰るって」

佐伯陸尉の顔が、にやけた笑顔から渋面が変わった。

「聞き分けのないガキだな。それじゃあ、2人とも連行だ」

佐伯陸尉は手を上げた。周りにいた自衛官は、それに呼応するよつに銃を構えた。

俺は、梨子を前に突き出し、後ろから羽交い絞めにした。

「……直以お兄ちゃん？」

「……なんのつもりだ？」

梨子も佐伯陸尉も、俺の動作の意味がわからず、きよんととして
いる。

俺は、言つてやった。

「人質だよ。俺になにかすれば梨子も巻き添えになるぞ」

俺の考えを理解したのか、梨子はそつと俺に体重を預けてきた。

「……なんの冗談だ？」

「まあ、冗談なんだけどね。でもあんたらは、梨子を傷物にしてでも連れ帰れつて言われてるのか？」

自衛官の連中は固まった。こいつらの最優先事項は梨子を連れ帰ることなのだろう。

俺の意図がどうあると、俺になにかあれば梨子も巻き添えを喰う。この連中にしてみれば、それは避けたいのだ。

佐伯陸尉は俺から視線を外し、見張り櫓を見上げた。あそこから俺だけを狙撃させるつもりだろう。

物見櫓の全容はここからでは見えない。ライトが逆光になって姿を隠しているからだ。

そのライトが、ぐらりと揺れ、鋭利な線を描きながら川に消えていった。

「な!？」

轟音を上げながら盛大な水飛沫が立ち上る。次いで来る波がボートを大きく揺らした。

「梨子！」

俺の呼びかけに応じ、梨子は俺から離れると船外エンジンのモーターを回した。

ボートはゆっくりと動き出した。

それを阻止せんと、自衛官のひとり俺たちのボートに飛び乗ろうとしてきた。が、揺れる波間に足場を崩し、川に落ちてしまった。川に落ちた仲間を助けようとして別の自衛官は、川面に手を伸ば

した。

その手を、水面から飛び出した土気色の手が掴み、自衛官を水中へと引き込んだ。

水面はしばらくごぼごぼと泡立っていたが、やがてそれも止んだ。

「直にお兄ちゃん……」

「ああ、ゾンビだ」

俺は、角刈りマツチヨとスキンヘッドマツチヨがキスしていたグロテスクな光景を思い出した。

あの直後、角刈りマツチヨはゾンビ化していた。だが、スキンヘッドマツチヨにはその様子はなかった。ならば、角刈りマツチヨはキスしたあとにゾンビに感染したことになる。

角刈りマツチヨは、荒瀬先輩に川の中に放り込まれたときに感染したのだろう。

ゾンビは、川の中にいるのだ。

俺たちは、ゾンビの対応に混乱している自衛隊員の際に乗じて、ボートを下流に走らせた。

波を引き起こした直接の原因である倒壊した物見櫓は俺たちの進路を阻むように川に横たわっていた。

「！」

俺は、梨子の頭を抱えて押し倒した。半瞬前に梨子の頭のあった場所を矢が過ぎ去る。ボウガンを撃たれたのだ。

「馬鹿、なんで撃った！ 遠野梨子に怪我をさせたらどうする気だ！」

そんな声が聞こえてくる。それを聞いた梨子は、俺に小悪魔チック笑みを見せると、立ち上がってボートの後部に立った。

「梨子！ なにやってるんだ！」

「大丈夫、こうすれば向こうから撃ってこれないから！」

俺は梨子を後ろに隠そうと立ち上がった、そのときだった。

水面が盛り上がった。そこから、ゾンビがひとり俺たちのボートに飛び乗ってきた。

「つち！」

俺はそのゾンビを諸手押しで突き落とそうとした。だが、できなかった。ゾンビは、俺の手を後ろに下がってかわしたのだ。

「こいつ、目が見えてる。中度感染！」

最悪だ。足場が狭く揺れるボートの上で中度感染と武器もなく遣り合うことになるとは。

髪と服から水を滴らせながら中度感染はゆっくりと俺に向かってきた。

俺は、玉砕覚悟で腰をかがめた。

力勝負したってゾンビには万に一つも勝てない。だが、勢いと体重で思いつきりタツクルすればこいつをボートから突き落とせるかもしれない。足場が悪くてかわす場所がないのはこいつも同じなのだ。

俺が覚悟を決めた、次の瞬間だった。

倒壊した物見櫓の鉄骨を伝い、黒い大きな影が飛び出した。その影は跳躍すると、俺たちの乗るボートに飛び乗り、中度感染を吹き飛ばした。

「……さつさと逃げるぞ」

さも平然とそうのたまった大きな影は、荒瀬先輩だった。

「物見櫓を倒壊させたのも荒瀬先輩ですか？ 案外派手好きですね」

「だが、逃げるきっかけになっただろ？」

まあそうだけどさ。

荒瀬先輩はオールを水面から持ち上げると、それを野球のバットのように振るい、ボートに乗り込んでこよんとするゾンビをクリーンヒットしていった。

梨子を押し退け、ボートの後部から後方を見ると、自衛隊員の乗ったボートも水中からゾンビの襲撃を受けていて、俺たちにかまえる余裕はないようだった。

俺は船外エンジンを操作し、倒壊した物見櫓を大回りして避け、下流へと向かった。

自衛隊のボートが追ってくる様子はなかった。

「ふう、今度こそ無事にだっしゅつ成功だね」

「まだ油断するなよ。それで、これからどうします？ このまま水路で鈴宮高校まで戻れるかな？」

「地理的には可能だろうが、船外エンジンではガソリンがもたないだろうな。とりあえず今日は行けるところまで行って、明日ガソリンを見つげるなり、代わりの足を見つげるなりするぞ」

「了解でつす」

梨子は勢いよく右手を上げると、ちよこんと俺の横に座った。

「直にお兄ちゃん、谷川村はどうだった？」

「ああ。いいバカンスになったよ。猛暑をエアコンの中で過ごせたいし、うまいもんも喰えたしな」

「うふふ。そうだね。いいお休みだったね」

梨子の柔らかい髪を上流から吹き付けた涼風が浚ひなった。

「これからが大変だよ。長戸市のこともあるし、他にもいっぱいやることはあるもんね」

「ああ、そうだな」

「ねえ、直にお兄ちゃん」

俺は梨子の顔を見た。口には微笑を浮かべているが、目はいつも以上に俺を凝視していた。

梨子は、俺に悟られないように、そつと告白した。

「私は、頑張るよ。聖お姉ちゃんや紅ちゃんに負けないように。直にお兄ちゃんに追いつけるように」

俺は、わざとちゃかして梨子の髪を撫でた。

「当然だろ。帰ったらいっぱい働くからな。おまえもちゃんとしてくるんだぞ」

「もおう！ 子供扱いしないでよう」

牛娘は、口調とは裏腹に、俺の為すがままになって髪を撫でられ

続けた。

と、船外エンジンが嫌な音を立てて急に止まった。

「どうしたんだ？」

「わかりません……っと、なんだこりゃ」

俺は船外エンジンを水面から上げた。すると、プロペラに黒いものがびっしりと巻き付いていた。

最初、俺はそれがなんだかわからなかった。だが、すぐにわかった。水面に、同じものが浮いていたのだ。

その同じものは、時を同じくして一斉に立ち上がった。

浮かんでいたそれは、ゾンビの頭頂部だった。プロペラに巻き付いていたものは、人の髪の毛だった。

俺たちは、いつの間にか包囲されていた。いや、包囲というよりも、俺たちはゾンビの群れの中に埋まっていた。

「ど、どこにこんなにしたの!？」

おそらくダム流放で押し流されたゾンビがここに溜まっていたんだろう。水深もずいぶん浅くなり、ゾンビたちは腰まで川に浸かりながらも歩いて俺たちに向かってきていた。

「直以、手伝え！」

「はい！」

いつになく余裕のない荒瀬先輩の声に答え、俺は近づくとゾンビを片っ端から船外エンジンで殴り倒した。

荒瀬先輩は両手にオールを持ち、ゾンビの脳漿を片っ端からぶちまけているが、数が多すぎた。一向に減る様子は見られなかった。

このままじゃあジリ貧だ。全てのゾンビを倒し終わるまで、俺の体力が持たない。船外エンジンは振り回す鈍器として重すぎた。

「荒瀬先輩、これ、どうします？」

「おまえが考えろ」

「わかってますよ！」

俺は迫るゾンビの頭を殴った。が、そのゾンビは前頭部を陥没させながらも動きを止めなかった。

やばい！

そう思ったとき、その澄んだ声は川原中に響いた。

「直以先輩！」

その声の方向から、細長い棒が縦に回転しながら飛んできた。

棒はボートの舳先にぶつかり、垂直に跳ね上がった。

それを空中でキャッチして一閃！ 軌道上にいたゾンビのノド笛をまとめて掻き切った。

思わず頬が緩む。

重さ、握り、俺自身にじっくりくるその棒は『戈』、使い慣れた、俺の武器だ。

俺は戈を俺に投げた少女に向かって大きく手を振った。少女は俺に応え、優雅に一礼した。

「え、なんで？ 紅ちゃん！？」

久しぶりに見る進藤紅は相変わらずの鉄面皮で、頬に残る日焼けも化粧に見えるほど秀麗で、月光によく映えていた。

紅がなにやら背後に合図を送ると、人口の光が川原を照らした。

それは、どうやらトラックのフロントライトらしかった。

トラックは一度甲高いクラクションを鳴らすと、俺たちの乗るボートに向かって走ってきた。

轆き跳ねられるゾンビ、波間に揺れるボート。

トラックは、俺たちのわずか1メートル手前で停止した。

「ういっす、直以先輩。元気そうっすね」

「そう見えるんなら、おまえの目は節穴だ！」

俺は、運転席に座る金髪の後輩を怒鳴りつけた。

「とりあえずお叱りは跡でつてことで。ドア開けてる暇ないから適当に上に乗っかってください」

「わかった。梨子、ひとりで大丈夫か？」

「うん、大丈夫！」

「そうか。それじゃあ俺の後に続けよ」

俺はフロントガラスを飛び越え、トラックの上部を転がって荷台に滑り降りた。

すでに荷台には2人のゾンビがいたが、俺はひとりを柄で川に落とし、もうひとりの首を切断した。

ほんのわずかの間を置いて、荒瀬先輩と、荒瀬先輩に抱えられた梨子が荷台に到着する。

「逃げるっすよ！　なんかに捕まってください！」

運転席の隆介はそう言っていると、盛大な水飛沫をタイヤから飛ばしながらトラックをバックさせた。

陸地に着くと、Uターン、一気に川原を脱出した。

途中、わずかな重みも感じさせずに紅が荷台に乗り込んできた。

こいつも、走行中の車に飛び移るって、相当まともじゃないな。

しばらく進んで安全を確認すると、隆介はトラックを止め、運転席から出てきた。

「みなさん、お怪我はありませんね。安心しました」

「紅ちゃん！」

感極まったのか、梨子はいきなり紅に抱きつこうとした。だが、

紅はひらりと梨子をかわした。結果、梨子は顔から転んだ。

「なんで避けるのお！？」

「いえ、つい……」

「隆介、紅。助かったよ。だけど、なんでおまえらがここにいるんだ？」

「牧原先輩の指示です」

「俺たち、直以先輩たちが谷川村に行つてからずっとここいらで張つていたんすよ」

「直以……」

「つとお、なんですか、荒瀬先輩」

「後はまかせた。俺は、寝る」

荒瀬先輩は、それだけ言つと荷台で寝転がり、すぐに寝息を立て始めた。

この人、谷川村ではずっと不眠不休だったからなあ。今日も働いてもらったし、な。

「お疲れ様でした。紅、ここいらでどこか安全な場所はないか？ 今日はまだ遅いし、そこで休もう」

「それでしたらこの先に私たちがキャンプをしていた建物があります。そこを使いましょう」

そう言つと、紅は隆介を見た。隆介は軽くため息を吐くと、運転席に戻つた。

この2人、しばらく一緒にいたんだろが、なんか上下関係ができてるな。

トラックは再び走り出した。

俺が荷台の上に座っていると、横に紅が座り、俺にしなだれかかってきた。

「直以先輩。谷川村はいかがでしたか？」

紅は、吐息のかかる距離でそんなことを聞いてくる。

「ああ。明日にでも整理して話すよ」

俺は、紅から視線を外し、反対側を向いた。

そこには、なぜか頬を膨らませてぶーたれた顔をしている我が妹がいた。

……ちよつとした後日談。

俺たちが疲労困憊で鈴宮高校に辿り着いたのは、9月5日のことだった。

その俺たちを校門で出迎えてくれたのは、なんと尾崎夏海さんだった。

「あれ、夏海さん。なんで……」

「直以くんたちこそ。谷川村を急に出て行ったりして。心配したのよ」

「え〜っと、夏海さんは俺たちがなんで出て行ったのかは知らないの？」

「？ 急用ができて夜のうちに出発したとしか聞いていないけど、なにかあったの？」

「いや、なんにもない。なかったんだ。そういうことになったらしいけど……、それよりなんで夏海さんがここに？」

夏海さんは唇に微笑を浮かべながら、隙のない敬礼を、俺に向けた。

「谷川村より親善大使として鈴宮市に派遣されました尾崎夏海2等海尉です。以後よろしくお願いします！」

こうして、夏海さんは鈴宮市での共同生活に参加することになった。

なんにしても俺のせいで谷川村と鈴宮市が敵対関係にならなくてよかった。

さらに余談ながら、夏海さんは鈴宮市に贈呈品を持ってきた。

それは、『鶏』だった。

「荒瀬さんが言っていたから」

頬を染めてそんなことを言う夏海さんのおかげで、鈴宮市では養鶏を始めることになった。

急造した鶏小屋では、ホクホク顔した荒瀬先輩が今日も丁寧に鶏の世話をしているのだった。

だっしゅっ！（後書き）

これにて谷川村バカンス編は終わりです。

約75000文字、それでこのレベルとは……。

今回は少々構成無視が過ぎました。いや、まことに申し訳ありませんでした。

さて、今回は少しだけクッションを置いて外伝的なものになります。今回の章でうまく表現できなかった荒瀬無双と、紅を活躍させたいと思っております。

・・・ただ、紅を活躍させると普通にメインヒロインの梨子を喰っちゃうんだよなあ。

女つてもんは全般が感情的って話をしてるんすよ

「う暑つちい」

俺はYシャツの前を完全にはだけ、手うちわで顔に風を送った。今日、というのは俺たちが谷川村より脱出した翌日のことだが、俺たちはトラックの荷台の上でゆらゆらと揺られながら鈴宮市への帰路についていた。

相変わらず空気の読めない太陽は、周りから嫌われているのも気付かずにひとりで調子に乗っている。

時刻は昼過ぎ。太陽は真上を過ぎ去り、ようやく西へと傾き始めている、が、言い換えれば今は一日のうちでもっとも暑い時間帯だった。

「あついよあついよー」

梨子は、ブラウスの胸元を引つ張り、中に生暖かい風を送り込んでいた。日焼けした黒い肌と日焼けしていない服の内側のコントラストが艶めかしく見えないこともなかった。

日除けに張られたビニールシートは一応の効果を発揮しているのだろうが、強力な紫外線を防ぐかわりに荷台を蒸し焼きのようにしていた。

そんな中で、ひとり紅だけが汗も掻かずひひとり超然としていた。なんか、気のせいで通じるレベルながらいつもより俺と距離を取っている気がする。

「なあ、紅」

「はい、なんでしょうか？」

「暑くないの？」

紅は珍しいいきよんとした表情を俺に向け、答えた。

「いえ、暑いですよ。夏ですものね」

……とてもそうは見えなかった。

紅の格好はショートパンツにタンクトップだったが、タンクトップの上には夏用ジャケットを羽織り、その袖を捲り上げることすらしていなかった。てかこいつ、手足細いし長いなあ。対してもうひとりの小娘。

汗でサマードレスはぐつしよりと湿ってるし、捲り上げたスカートから伸びた足はだらしなく投げ出されている。……別に、寸胴ってわけでもないんだけどさ。

「……なに？」

じろじろと見る俺を不機嫌そうを見返してくる梨子。

「いや、梨子。おまえ……、太ったよな」

「ツは！」

「そういえばおまえは谷川村で食っちゃ寝だったもんなあ」

「違うもん、これは、違うんだもん！」

自覚があつたのか、梨子は声を張り上げて否定する。

と、突然トラックが揺れた。俺は運転席の窓ガラスを叩いた。

「おい、隆介！ もう少し丁寧に運転しろよ」

俺の声に反応し、運転中の林田隆介は窓を上げた。エアコンで冷やされた空気が外に漏れ出してきた。ちなみに、助手席にいてエアコンの恩恵を享受しているのは荒瀬先輩だ。

「なんかエンジンの調子がおかしいんすよ。やっぱり川ん中に突っ込んだのがやばかったみたいすね」

「なんだ、それじゃあ鈴宮高校まで持たないか？」

「わかかんねえつす。でも、車は乗り換えたほうがいいかもしれねえ」

俺は天を仰いだ。日は高く空は青い。今日一日走り続ければ夜半までには鈴宮高校に辿り着けるのだろうが、この暑さでは乗ってる俺たちの体力が持ちそうもなかった。

「それじゃあ休憩も兼ねて一度街に入ろう。そのときに車も調達すればいいだろう」

「ちゃんと4人乗りのやつね！」

と、これは梨子。

「直以先輩。ここからならば八岐市が近いです。視察も兼ねて行ってみるのはどうでしょう？」

八岐市は、鈴宮市や長戸市のある県のいわゆる県庁所在地だ。県内では一番人口も多かった場所だし、俺たちのようなコミュニティもあるかもしれない。人間がいるってことはなにかしらのトラブルの元になるかもしれないが。

「まあ、9月10日にはまだ時間もあるし、寄ってみるか。荒瀬先輩、なんか文句ありますか？」

「……好きにしろ」

荒瀬先輩は俺に見向きもせず、それだけをぼそりと言った。

それで俺たちの方針は決まり、トラックは八岐市へと向かった。

高層ビルの並ぶメインストリートは閑散とされていた。

ゾンビも人の姿もなく、道の端には乗り捨てられた車、その車には街路樹から伸びた蔦が這っている。

愚かな人間から自然を取り戻したとばかりに勝ち鬨を上げる蝉、その鳴き声だけがビルとビルの間を反響していた。

「な〜んかガランとしてますね」

「ああ。とりあえず色々回ってみよう」

俺たちは車で八岐市の各所を回った。

県庁、総合病院、駅、八岐市の観光名所である八岐タワー。他にも色々回ったが、そのどこにも人の姿はなかった。ゾンビの姿もだ。

「こんだけ大規模な街なら、俺たちみたいに人が集まっている場所があると思っただがなあ」

「だ〜れもないね」

「どこかに隠れてるのかも知れねえっすよ。この炎天下、わざわざ外に出て仕事するなんて馬鹿のやることだ」

「これからどうしますか？」

「とりあえず、どこかにキャンプしよう。それから車の調達」

俺たちは、市内の緑地公園内に車を止めてキャンプ設営を始めた。緑地公園はそこその広さがあり、見晴らしもよかった。これならゾンビが襲ってこようとも人が襲ってこようとも急なエンカウントは避けられるだろう。

「隆介、車の調達に行くぞ。紅と梨子はキャンプの設営を頼む」

俺は隆介を連れて緑地公園を出た。そこから向かったのは、50メートルも離れていない一般の民家だった。

とりあえず呼び鈴を鳴らす。だが反応はない。まあ、当然ではある。電気が通っていないのだから。

次はドアを叩く、反応はない。強めに叩いても同じだった。

「周囲の警戒を頼む」

「ういゝつす」

俺は駐車場に止っているワンボックスカーの横を通り抜け、庭に出た。

縁側に土足で上がりこむと、ガラス戸を叩き割って民家に侵入する。

「どうだ？ ガラス割った音でゾンビが寄ってきてないか？」

「大丈夫。この辺にゾンビはいないんじゃないっすか？ 静かなもんですよ」

隆介は俺に続いて土足で室内に入った。

「油断するなよ。ドアを開けたらいきなりつてのがゾンビのパターンだからな」

「わかってますよ」

俺と隆介はしばらく慎重に家内を探索した。だが、ゾンビの姿はなかった。

俺は少しだけ肩の力を抜いて隆介に話しかけた。

「隆介、少しは紅と進展があったのか？」

「あん？ なんの話っすか？」

「ずっと紅と一緒にだっただろ？」

「あのさあ。なんでも恋愛に絡めるお花畑思考はやめてくださいよ」
「でもおまえ、紅が好きだろ？」

隆介は黙った。顔色が目に見えて赤くなる。

「別にいいんじゃないか？ 紅はかなりお堅いけど、美人だしな」

「……俺は、進藤より直以先輩のほうがいいです」

それを聞いた途端、俺は隆介から1メートルほど飛び退いた。

「なんすかその反応」

「……寄るな」

隆介は、しばらく考え込んで、ようやく自分の言った意味がわかったらしく、声を荒げた。

「ば、ちっげえよ！ そういう意味じゃねえよ！」

「別におまえがホモでも、俺は差別はしない。差別はしないが、少しだけ付き合い方は変わるな」

「そうじゃなくて！ 俺はホモじゃねえよ！ 進藤が好きだよ！」

隆介は怒鳴りながら告白した。隆介は金髪頭を掻き回して俺から視線を外した。

「……俺が言いたいのは愛情より友情優先ってことっすよ。なによ、進藤が相手じゃあ俺の手には負えねえや」

「ああ、それはなんとなくわかる」

俺は鍵掛けから車の鍵を見つけると、隆介に放った。

「俺がうまく行くように手伝ってやるうか？」

「くだらないおせっかいを焼いてんじゃねえよ。ていうか、進藤の前では言わないでくださいよ。あいつ、直以先輩のことが好きみたいっすから」

紅が悲しむところはみたくない、と。こいつ、いいやつだなあ。

だが、世の不条理としていいやつほどもてないんだよなあ。

「ガキが、青春してやがんなあ」

「たかがひとつ歳が違ってくるだけで年上ぶんでくださいよ」

「ばっか、ひとつ年上ってのは学生にとっては絶対的なアドバンテ

「ジなんだよ」

「直以先輩が荒瀬先輩に逆らわないように、すか？」

「あの人の場合はまた別だけどな」

俺は台所に行くと、片っ端から棚を開けた。

「塩、砂糖、片栗粉、醤油は……大丈夫かな？」

「この暑さっすからねえ。お、袋麺がありましたよ」

俺たちは食料やら衣料雑貨やらをワンボックスカーに積み込んだ。そのまま車を走らせて緑地公園に着いたときにはほんのりと西の空が赤くなり始めていた。

緑地公園ではなにやら薄汚れた梨子が俺たちを出迎えてくれた。

「あ、直以お兄ちゃん、お帰りなさ〜い。いいものあった？」

「まあ、ぼちぼちってところかな。それより、梨子。なんでおまえ、汚れてるの？」

「えへへ〜、じゃん！」

梨子は頬と手先を泥に塗れながら、効果音付きで手に持っているものを俺の前に突き出した。

それは、梨子のちっこい手では覆い隠せないほどの大きなジャガイモだった。

「へえ、どうしたんだ？」

「えっと、自生していたみたいなの。荒瀬先輩が掘ってみろっていったところを掘ったら出てきたんだよ」

自然の野菜、か。すげえな。

「じゃあ今晚はジャガイモ料理だな」

「うん　今ね、荒瀬先輩とイモ洗いして、皮と芽を剥いていたところ」

その荒瀬先輩はというと、頭にタオルを巻いて俺たちの調達してきたものを物色していた。

「塩、胡椒に片栗粉もあるな。ジャガイモのガレットにしておくか」

「なんか手伝いましょうか？」

「おまえらは竈を作っておけ」

「そういえば紅は？」

「呼びましたか？」

紅は、タイミングを計っていたかのように俺の前に立った。

「ああ、紅。どこ行ってたんだ？」

「周辺の警戒を少々」

「？ そうなのか？」

「そちらのほうはいかがでしたか？」

「ああ、つつがなくなるところかな。ゾンビも人の姿も、略奪の後もない」

「そうですね。まるで、ゴーストタウンですね」

言い得て妙だった。

なるほど、確かに八岐市はゴーストタウン然としている。そう考えると蒸し暑い夏空も薄ら寒いものを感じるから不思議だ。

「それでは直以先輩。これからどうしますか？ 食事を取ったら出発しますか？」

「いや、もうすぐ日も暮れるし、今晚はここにキャンプしよう。それで、明日の午前中にもうちょっと探索して、それから帰路に着こうと思う」

「了解しました」

紅は、それだけを言うとそっけなく俺の前から消えた。

そして、時間は流れて日は暮れる。

昼の余熱は太陽が沈んでもしばらくは残っていたが、それでも直射日光がないぶんだけ夜のほうが過ごしやすい。

俺たちは、荒瀬先輩の手料理を食べてようやく一息ついた。

「ジャガイモのガレット、おいしかったね」

荒瀬先輩の作った料理は、すごくうまかった。千切りにしたジャ

ガイモを塩胡椒で味を調え、片栗粉で固めたものをフライパンで焼いただけのはずなのだが、まあ、すごくうまかった。

「料理つて、変な特殊スキル持つてるよな」

「俺だつて料理くらいできますよ」

「どうせチャーハンとかそのレベルだろ？」

「あ、直以先輩、チャーハンを舐めてるっすね。あれ、具材とか火加減でぜんっぜん味が違うんですから」

「おまえの場合は卵落とすかどうかでレベルだろ？」

焚き火を挟んで言い合う俺と隆介を見て、梨子はくすくすと笑った。

ちなみに、荒瀬先輩と紅は寝ている。俺たちは交代で番をするこ
とになっており、紅、俺と梨子、隆介の順に仮眠を取ることになっ
ているのだ。

「それでそれで隆介くん。紅ちゃんとは仲良くなれたの？」

「いつの間にか下の名前で呼んでるし。てかそれさつき直以先輩と
やったから」

「そうなの？」

「ああ。隆介は女より男のほうがいいんだつてよ」

「……びーえる？」

「なんだビーエルつて？ それに、基本的に女つて信用できないだ
ろ？ 直以先輩もそう思いますよね」

「俺に振るなよ」

「うつわ、すっごい偏見。なんでそんなふうに思うの？」

「なんか女つて、先週はあいつの味方してたのに、今週は仲のいい
こいつの味方する、みたいなこと平気でするだろ？ 物事を善し悪
しじゃなくて感情で決めるから信用できないんだよ」

「そんなことないよお。それに、そんなこと言ったら男の子だつて
一緒じゃない？」

「男はいいんだよ。そんなふざけたやろうはぶん殴っちまえばいい
んだから」

「隆介は感情的な女は嫌い、と。だけどそれならやっぱり紅つてこ
とになるよな」

「うん、紅ちゃんはガツチガチに理性の人だもんね」

にやけ顔で隆介の顔を見る俺と梨子。

「俺は、進藤が理性的感情的って話をしてるんじゃないかって、女って
もんは全般が感情的って話をしてるんすよ」

隆介はそう言って俺たちから視線を逸らした。

しかし、隆介の言葉を借りるのなら、やはりあの紅ですら女であ
るがゆえに感情的であるということになる。

いや、人である以上紅にも感情はあるだろう。

そのことを確認させられたのは、実に数時間後のことだった。

微かな違和感から俺は仮眠を中断して目を開けた。

そこには、紅がいた。

仮眠を取って仰向けに寝ていた俺の腰の上に、紅が跨って覆いか
ぶさっていたのだ。

この、人殺し！

ぺちやり、ぺちや。

……水？ いや、水じゃない。なにか粘着性のある液体が跳ねる音にゆっくりと意識が覚醒する。
ゆっくりと目を開ける。寝ぼけ眼を擦り、ぼやけた視点を合わせる。

「目が覚めましたか？」

至近、ごく至近で女の声がする。聞き覚えのある声だ。

ぴちやり。

再び液体の跳ねる音がする。今度は感触付きだ。

薄暗い夜の中、俺は感触のあった口元を拭い、眼前にいる女の顔を見た。

「……、！」

意識がはつきりと覚醒する。寝ている俺に跨って上から見下ろしている女は、進藤紅だった。

俺は慌てて身体を起こそうとした。だが、できなかった。紅が俺の肩を押さえつけているのだ。

「お静かに。皆が起きてしまいます」

辺りを見渡してみると、ほんの1メートルほど離れたところでは梨子が寝息を立てている。梨子の奥には荒瀬先輩の姿があった。

俺は、状況を整理するために一度大きく息を吸って、紅に聞いた。

「あの……、紅子ちゃん、なにをやっているんだい？」

紅は、瞳を細めて顔を近づけてきた。

「なにをやっているとお思いですか？」

ぺちやり。

紅は、わずかの躊躇いも見せず、俺の唇を舐めた。

いつもの鉄面皮とは違う、頬を赤く染め蕩けるような顔をしている紅は、薫るような色香があった。

「ひよっとして、さ。俺……、レイプされてる？」

「正解です」

紅は唇から舌を覗かせ、迫ってきた。顔を背けようとするが、紅は俺の頭を両手で押さえつけてそれを阻止した。

紅は、俺の唇を貪った。

いつもの冷静さなど欠片も見当たらない、かといって情熱的でもない。例えるなら、ひたすら飢えを満たすようなキス。

舌で唇を割り、歯茎を舐め上げ、唾液を啜る。

「……直以先輩も口を開けてください」

俺は歯を喰い縛り、紅の要請を拒否した。紅はかまわずに唇を押し付けてくる。

俺は、動けなかった。あるいは暴れれば今の状況から逃れられたかもしれないが、そこまでする気にはならなかった。いや、なれなかった。

肉体的にはなく、精神的に縛り付けられているような、そんな感じ。

くちゅ。

どれくらいそうしていただろうか、紅はゆっくりと唇を離し、顔を俺から遠ざけた。

俺と紅の唇を繋ぐ銀色の糸が細く伸ばされ、切れた。

「……気が済んだか？」

「直以先輩は淡白です。キスだけで満足できるとお思いですか？」

「ま、まあ待て。まずは落ち着こうや」

俺は紅の顔に手を伸ばしたが、紅はその手を払いのけて再び顔を近づけてきた。

なるほど、俺は紅の言う通り淡白らしかった。少なくとも自分の理解できない状況で、しかも周りに人がいる状況で情欲に身を任せられるタイプじゃなさそうだ。俺の頭は、周囲を観察できるほど冷えていた。

「紅、隆介はどうしたんだ？」

紅は俺の鼻に自分の鼻をくっつけ、熱い吐息を俺にかけた。

「焚き火の前でぐっすりとお休みです。日中はずっと運転していましたが疲れていたのでしょうかね」

俺は、紅の小さな頭を抱えてキスを避けた。そのまま耳元に話しかける。

「どうしたんだ？ いきなり発情期にでも入ったみたいだな」

「こういつた行為はお嫌いではないでしょうか？」

俺はそれには答えず、紅のわずかなほつれもない整った髪を撫でた。

紅は、俺の首筋に残る寝汗を舌で舐め取った。

「……いきなりと言うわけではないんです。ずっと、こうしたいと思っていました」

少し落ち着いたのか、紅は語り出した。

「これは、いけないことです。いけないことなのに、我慢できないんです」

俺は苦笑してしまった。

紅の言いたいことはわかる。

紅がいけないことと言っているのは、俺をレイプしようとしたことではない。自分が、感情に流されて行動していることだ。

「本当だったら私はここに来る必要はありませんでした。いえ、来るべきではありませんでした。比較的落ち着いているとはいえ、周防橋では小競り合いが続いていますし、須藤先輩の補佐も疎かにで

きることではないです。でも、須藤先輩から直以先輩たちの迎えを指示されたとき、私は喜んでその命令を受けました。私は、感情に流されたんです」

「それがいけないことか？」

「いけないこと、です」

「そう、か」

紅はゆっくりと顔を上げた。さきほどまでの情欲に身を任せた顔ではなく、どこか泣きそうな顔をしていた。

葛藤。

理性によって制御されるべき感情。理性では抑えきれない想い。

どちらが良いも、どちらが悪いもない。

それらを含めて、紅の為人ひととならだろう。

だから俺は紅を、紅の感情を受け入れることにした。

俺は紅の顔に手を伸ばした。今度は払われることはなく、俺の手は紅の頬を撫でた。

少しだけ身体を起こし、顔を近づける。紅は、涙で赤くなった瞳をそっと伏せた。

俺は、紅とキスをした。

唇をついばむような軽いキス。

初めて俺から紅を求めたキス。

俺は紅の腰を抱き、大腿を撫でた。

紅の甘い吐息が繋がっている唇から漏れ、消えた。

「うっっん……」

そのうめき声は、俺と紅のすぐ横から聞こえた。

梨子が寝返りを打ったのだ。

俺は紅から顔を背け、わずか1メートルほどの距離にいる梨子を見た。

梨子は眉間に皺を寄せながら固く瞳を閉じている。起きている様子はない。

だが、その奥にいる荒瀬先輩は違った。目を見開いて顔を俺たちに向けていたのだ。

「……荒瀬先輩？」

荒瀬先輩からの返事はない。それで、俺は荒瀬先輩が俺たちを見ていないことに気付いた。

そして、俺も荒瀬先輩がなにに集中しているかに気付いた。

紅より先にそれに気付けたのは、単純な位置関係だろう。地面に頭を接している分、俺にはその音が聞こえたのだ。

「紅、ここまでだ」

俺の変化に気付いたのか、紅もすぐに表情を引き締めた。

「失礼します」

「ッつぶ！」

紅はひと言断ると、俺にのしかかってくる。そのまま胸を俺の顔に押し付け、地面に耳を当てた。

「……複数の足音。5、10、もっといますね、ひゃう！」

俺は、紅の尻に手を伸ばし、思い切り掴んだ。驚いて跳ねた紅を横に退かし、俺は半身を起こした。

「足音を忍ばせているところを見るとゾンビじゃないな」

「この辺りで生活している人たちでしょうか？」

「いや、この辺りで略奪の形跡はなかった。この辺りに人はいない

はずだ」

「それでは……」

「こいつらが何者かは直接聞けばいい。隆介は……、起こしている暇はないな。荒瀬先輩、梨子を頼みます」

「直以先輩。私にも指示を」

そう言った紅の顔は鉄面皮に戻っていた。紅の内面を覗いた後では、いつもどおりというのは間違っているのかもしれない。だが、今の紅は頼りになる理性的な紅だった。

「せっかくむこうからアプローチをかけてきたんだ。逃げるってのも芸がないだろう。こっちから逆撃をかけてむこうのリーダーを人質に取る。タイミングを見計らって飛び出すぞ」

「了解しました」

「荒瀬先輩。念のため車は動かせるようにしておいてください」

「ああ、わかった」

「あ、直以先輩」

行動を起こそうとする直前、紅は俺を呼び止めた。

「どうした？」

紅は、一瞬、ほんの一瞬だけ鉄面皮を取り去り、俺を見詰めた。

「続きはまた後ほど……」

「あゝ、ああ、そうだな。また今度、いつか、な」

俺と紅はそつと移動した。敵の側面に回り、観察する。

年齢性別までバラバラの集団、銃器の所持は確認できず、手に持っている武器はバットやドライバー、他には長柄に包丁を結びつけて作った槍なんかもあった。

紅は、どこにもっていたのか、ジャックナイフをカバーから取り出した。あれ、いつか戈を見つけた店で隆介が振り回していたやつだな。

「殺すなよ」

「……善処します」

俺たちは、タイミングを待った。そのタイミングは、時を置かず

して訪れた。

敵が一斉に喚声を上げて隆介のいる焚き火目掛けて走り出したのだ。

だが、その喚声は一瞬の間を置いて悲鳴に変わった。

走り出した半数以上が転んだのだ。

料理の最中、紅が前もって仕掛けておいた罠だ。

足が嵌るような窪み、引っかかるように草をアーチ状に編んだものの、即席で簡易な罠だったが、効果は抜群だった。

倒れなかった連中はそのまま焚き火へと走って行く。その連中の前には、荒瀬先輩が立っていた。

……転んでいたほうが怪我は少なかっただろうに。ご愁傷様だ。

俺と紅は、駆けた。

倒れているやつ横の横を走り抜け、起き上がるうとしているやつ顔面に膝を叩き込む。

敵のリーダーはすぐに判別がついた。全体のやや後方にいるひげ面の男だ。

ひげ面の男は事態の変転に混乱しながらも近づいてくる俺の姿を見つけると、手に持っているドライバーを握り直した。俺も戈を握り、わずかに腰を落とした。

「失礼します」

その声は、俺の真後ろから聞こえた。

ふっと、紅の口から鋭い息が吐き出された。

紅は後ろから俺の肩に手を添えると、一気に飛び上がった。

爪先が高く天にそびえ、そのまま綺麗な弧を描いてひげ面の男に降りかかった。

ひげ面の男の肩に紅の両足が乗る。

勢いと体重、その両者がひげ面の男に押し掛かり、ひげ面の男は抵抗する間もなく背中を地面に強打した。その首筋にはすでに紅のジャックナイフが当てられていた。

紅は、俺の顔を見上げた。俺はひとつ頷くと、公園中に響く大声で叫んだ。

「動くな、武器を捨てる！」

最初は展開の速さに困惑していた敵も、自分たちのリーダーが人質に取られていることを確認すると、ひとり、またひとりと武器を捨てた。

だが、その中でひとりだけ武器を捨てないやつがいた。

女だ。わずかに赤茶けた髪をポニーテールに結っている。

俺たちと同じ位の歳だろうその女は、なぜか俺を、わずかに吊り上った意思の強そうな瞳で睨みつけていた。

その眼差しに、俺はどこかで覚えがあった。

「武器を捨てなさい」

一向に武器を捨てない女を見て、紅はひげ面の男にジャックナイフの切っ先を突き立てて言った。

だが、やはり女は武器を捨てなかった。

「……環奈、武器を捨てる」

「かなな？」

ひげ面の男の呼ぶ、その名に俺は聞き覚えがあった。正直に言うのなら……、再会などしたくなかった名前だ。

俺は、女に呼びかけた。

「おまえ……、ひよっとして間宮環奈か？」

俺の呼びかけに、俺の古い友人は昔と変わらない憎悪を籠めて、吐き捨てた。

「……菅田直以、この、人殺し！」

この、人殺し！（後書き）

どうも、どぶねずみでございます。とりあえず、遅筆陳謝！

だって、だってさ。

エロが書けねえんだよお、書いても書いてもエロくならないんだよ。
。

・・・失敬、少々取り乱しました。

どぶねずみの場合、エロは書いていると冷める傾向にあるので今までは忌避していたのですが、ここまで難しいとは思いませんでした。

エロを期待していた方（・・・いるのか？）、本当にすいませんでした。

八岐市の怪物

「……菅田直以、この、人殺し！」

かつての旧友との再会は、実に心温まる言葉から始まった。

5年ぶりの再会、間宮環奈は以前より格段に成長した肢体と以前と変わらぬ憎悪を俺に向けた。

「久しぶり、だな、環奈。すぐには気付かなかったよ」

「私はすぐに気付いたわ。この5年間、一瞬だって忘れてたりしなかった」

「いやあ、嬉しいよ。そこまで思われていたとはね」

茶化して言う俺を環奈は眼光鋭く睨みつけ、女の細腕ではいかにも重そうな大振りの鉈を肩に担いだ。

「武器を捨てなさい！」

紅の警告にも環奈は耳を貸さない。

紅は俺を見た。

ひげ面の男ののど笛を切り裂く許可を。

紅は無言で俺に訴えてきたが、俺は軽く手を振ってそれを却下した。

環奈は足音を忍ばせ、一步俺に近づいた。

「5年間、ずっと考えていたの。どうやって珠樹たちの仇を討とうかって！」

わかりやすい。実にわかりやすい行動と言動だ。

俺に敵対を宣言する環奈はゆっくりとした足取りで俺に近づいてくる。目の見えないゾンビ相手に気づかれないように忍び寄り、肩に担いだ鉈で急所を一撃、といった戦法だろう。

だが、あいにく俺は目が見えるしゾンビでもない。恨まれている理由もはっきりわかっているが、ここで殺されてやるってわけにもいかない。

だから、俺は抵抗することにした。

環奈はこれ以上の会話は無駄とばかりに口をつぐみ、少しだけ腰を落として俺に近づいた。

俺はそれに合わせて戈の先を足元に落とした。

環奈は、一度大きく息を吸い込むと、鋭く吐き出して大きく足を踏み出した。

その足元に、俺は戈を挿し出した。

「っあ！」

短い悲鳴、環奈は戈に足を取られて躓いた。

体勢を立て直したときには、すでに俺は眼前の距離、射程内だ。

「こ、のお！」

環奈は横殴りに思いつきり鉦を振るった。その大降りの斬撃を、俺は一步下がってかわす。

そして、鉦の重さに流された環奈を、俺は蹴倒した。

即座に立ち上がるうとする環奈の首元に俺は戈を突きつけ、落ちている鉦を彼方に蹴り飛ばした。

環奈の動きは止まり、地面に腰を付けたまま環奈は俺を睨みつけた。

見上げる者、見下ろす者。

だがそのその内実は、見下ろしている俺のほうが不利な状況にあった。

「……どうしたのよ。殺さないよ！ 珠樹たちを殺したみたいに私も殺さないよ！」

「……」

答えない俺に精神的優位を確信した環奈は立ち上って、余裕をもって服の埃を払った。

さて、この厄介な女をどう扱ってやるうか、そんなことを考えていると、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「直にお兄ちゃん？」

声のしたほうを向くと、梨子と隆介が立っていた。

俺の視線は梨子のほうに向く。

環奈から視線は外れた、その瞬間、環奈は動いた。

隠し持っていたナイフを両手で握り、下から突き出してくる。

俺は焦った、いや、焦る暇もなかった。

環奈の突きこみに対してではない。

飛来する銀光に気づいたからだ。

俺は、反射的に動いた。

突き出されるナイフを小脇に抱え、思い切り環奈を抱き締める。

髪一重の差、環奈の頭部があつた場所を、紅が投げたジャックナ

이프が過ぎ去る。

それを見ていた全員が一瞬呼吸を忘れ、大きなため息を吐いた。

正確には投擲者である紅と、被投擲者であることに気づいてすら

いない環奈以外は、だ。

「この！ 離しなさいよ！」

俺の腕の中で暴れる環奈。目的を果たした俺は抱き締め続ける理

由はなく、環奈を開放した。

俺から距離を取ると、息苦しかったのか、環奈は顔を赤くして俺

を睨みつけた。

俺は苦笑を浮かべた。本当に、こいつは別れた時から変わってい

ない間宮環奈だった。

俺は、身体ごと環奈から視線を外した。

「隆介、ずいぶんぐつすり寝てたみたいだな」

「うう、面目ないっす」

「とりあえず、落ちている武器を拾ってくれ。こいつらを拘束まで

する必要はないから」

その俺の指示に対抗するように、俺の昔馴染みは声を張り上げる。
「みんな、武器を取って！ 戦おうよ、相手はたった5人よ！」
それに対する反応は、顕著だった。

俺の指示に従って武器を拾い集める梨子と隆介。

環奈の指示には従わず、ただ突っ立っているだけの周りの連中。
実際、ここで武器を持ち直されていたら、俺たちは勝てなかったかもしれない。だが、そんなことにはならず、周りの連中の戦意は喪失していることがはっきり見て取れた。自分たちのリーダーは人質に取られて、仲間の半数が荒瀬先輩にのされたわけだしな。

環奈の齒軋りの音が、ここまで聞こえてくるようだった。

「環奈、もういい」

そう言ったのは、紅に首を踏まれているひげ面の男だった。俺は、ひげ面の男に向かった。

「ようやく話し合いができるかな？」

「……その前に、この娘をなんとかしてくれ」

俺は紅に合図を送った。紅はゆっくりと踵をひげ面の男ののどから離し、そこが定位置であるかのように俺の横に直立した。

ひげ面の男は紅に裂かれた首の皮を撫で、滴る血を払った。

「まったく、ひどいことをする」

「寝込みを襲っておいで、よく言うよ」

ひげ面の男はにやりと笑うと、身体を起こして立ち上がった。

「俺は、前野誠一。ここ、八岐市で生活している避難民のひとりだ」

「……俺は、菅田直以。俺たちは涼宮市の人間だ。それで、なんで俺たちを襲ったんだ？」

ひげ面の男、前野はバツが悪そうに俺から視線を逸らした。

「ああ……、それは、ここにおまえたがいたからだ」

「どつという意味だ？」

「それは……」

うじゆる。

その音に反応したのは、八岐市の連中だった。

「出やがった！」

音のした方向に全員が一斉に身構える。

うじゆるうじゆる。

暗がりの中、音の正体は判別できない。だが、その音が危険なものであることは、理屈じゃなく本能でわかった。

「梨子、武器をみんなに返せ！ 隆介、車のライトで闇を照らせ！」
俺の指示に2人はすばやく反応した。

車のハイビームは闇を切り裂き、その異形を露にする。

蛸^{たこ}。

もし俺の認知できる生物で「それ」を表すなら、蛸がもっとも近いだろう。

だが、「それ」は蛸ではなかった。

強いて言うなら、臓器。

脈打つ血管が浮き立つ、臓器が短い触手を地面に這わせて、こちらに向かってきているのだ。

大きさはバレーボールほど、それが無数に地面を這い回っている。さらには、親玉だろうか、3メートルを超えるでかいのが一匹い

る。

「えっと、前野さん？ こいつらはなんだ？」

「そうか、涼宮市にはこいつらはいないのか。それは、重畳というべきか、こんなのが傍にいる八岐市の人間が不幸なのか」

「悪いけど、感慨は後にしてよ」

「学術名を伝えることはできない。わかっているのは……」

前野は、一度言葉を区切った。

「あいつらが、敵だということだ！」

「……十分だよ、それで

言い切るのを待っていたように、「それ」は一斉に飛び上がった。八岐市の連中は、それぞれが手に持った獲物で「それ」を迎え撃った。

金属バットで殴りつけ、包丁で突き刺す。

ドライバーで地面に叩きつけられた「それ」は、ただでさえ歪な身体に大きな凹みを作り、動かなくなった。

「ぎゃー！」

悲鳴が上がった。見ると、八岐市の男のひとりが「それ」にまわりつかれていた。

「それ」は触手を巻きつけて男にへばりついた。

男は、しばらく「それ」を振り払おうと暴れまわっていたが、やがてよるめいて地面に倒れた。その身体に、大量の「それ」がまとわりつく。

今度は、悲鳴すら上がらなかった。

「それ」は、目に見えて膨張していき、通常の倍の大きさになると転がって男から離れた。

ころころと、ころころと転がる「それ」が群がっていた場所には、干からびた男の死体があった。

吸い付いて血肉を嚼る。まるで、ヒルだ。

俺は、足元に転がってきた血吸い後の「それ」を、戈で引き裂いた。

「それ」は、今体内に取り込んだばかりの男の血を撒き散らしながら萎んでいった。

「紅、銃器は？」

「拳銃が一丁。まさか、戦うのですか？」

「……いや、逃げるぞ。梨子をつれて先に車に戻ってくれ」

「わかりました。車内から援護します」

紅はそれだけ言うと、背を向けて走り出した。その背中に「それ」が飛び掛る。

俺は、「それ」を戈で叩き落とした。ずしりと、手先に重みを感じた。

周りを観察する。

八岐市の連中はよく戦っているが、「それ」の数が多すぎた。ひとり、またひとりと「それ」の餌食になっている。全滅まで時間の問題だった。

「直以先輩、引いてください！」

紅の声が聞こえる。俺は、一步下がった。

そのとき、果敢に鉦を振るう間宮環奈の姿と、笑顔を浮かべる環奈と瓜二つの少女の顔が浮かんだ。

「直以お兄ちゃん！」

今度は梨子の声。俺は、振り返らずに怒鳴った。

「先に行つてろ！」

俺は駆け出した。

車にはではなく、「それ」の群れの中にだ。

環奈に跳びかかるうとしていた「それ」を打ちのめし、さらに大振りで戈を振って、同時に3匹の「それ」を切り裂く。

「なんのつもりよ！ 助けてくれなんて言っていないでしょ!？」

俺は環奈を無視して、周りの連中に言った。

「仲間同士で固まれ！ お互いの側面や後ろをカバーするんだ！」

前野を初めとする八岐市の連中には、俺が何者でなんでそんなことを命令されなければならぬのか、まったくわからないだろう。

だが、そうすることが生存率を上げる唯一の方法であると悟ると、無言で俺の言うことに、環奈を含めた全員が従った。

「このままゆっくり下がるぞ。距離を置いたら一気に逃げるんだ」

俺たちは飛び掛ってくる「それ」を撃退しながら、ゆっくりと後ろに下がった。

と、そのときあることに気づいた。

うじゆる。

後ろにいた大きい「それ」が動き出したのだ。

大きい「それ」は、ぶつとい触手を伸ばすと、血を吸って肥大化している「それ」を軽々と摘み上げた。

そして、体の一部に窪みを作ると、その中に放り込んだ。

ばちゅり。

まるで水風船が破裂するような音が響き、窪みからは血が滴った。

それを見ていた環奈は、口を押さえて吐き気を堪えた。

「……子供に血を吸わせて、それを親が子供ごと喰っているのか？」
大きい「それ」は転がっている「それ」を窪みに放り込むと、次々と喰い殺していった。窪みの中には歪な疣いぼが生えており、それを歯のようにすり合わせて咀嚼しているようだった。

やがて大きな「それ」は、血を吸って肥大化した「それ」と、まだ血を吸ってもいない「それ」を喰い尽くすと、ゆっくりとこちらに向かってきた。

俺たちは逃げるべきだった。

だが、できなかつた。

この異形の化け物に、完全に飲まれてしまっていたのだ。

そっと、環奈のか細い手が俺の腕に触れた。

カタカタと、震えているのがわかる。

俺は、我に返った。

俺のやることはひとつだ。

一言叫ぶだけでいい。

「逃げる！」と。

俺は、それを実行するために、大きく息を吸った。

が、それは音声を伴って吐き出されなかつた。

別方向から、別の力が加わったためだ。

「直以、借りるぞ」

そう言ったのは、荒瀬先輩だった。手には、今俺から奪った戈が

握られていた。

荒瀬先輩は、まるで近所の公園を歩くような自然で、気楽な足取りで怪物に向かっていった。

その表情には、わずかながら愉悦すら浮かんでいた。

八岐市の怪物（後書き）

1ヶ月ぶりの更新です。おまたせいたしました！

いや、一度止まると書けなくなるものですね。今までが勢いだけだったってことを思い知りました。

これからはもちっと考えて書くことと思います。

更新遅れてすみませんでした。

忘れるなんて許さない！

うじゅるうじゅる。

臓腑のような身体を脈動し触手を擦り合わせる異様な音は、それを聞くものに生理的な嫌悪感を想起させた。

が、荒瀬先輩はそれが聞こえないのか、わずかの躊躇いもみせず臓器の化け物に歩み寄っていく。

化け物は、威嚇のつもりなのか、触手を荒瀬先輩の足元で波打つように打ちつけた。

だが、荒瀬先輩はそれにも一瞥すらしない。

俺の戈を肩に担ぎ、さながら早朝の野良仕事を片付けにいくような気軽さ。

その戈が、一閃した。

途端、化け物は、豚が鳴くような奇声を発して暴れだした。

身体中から紫色の血管を浮き立たせ、触手を地面に叩きつけて痛みと怒りを表現する。触手を叩きつけられた大地は抉れ、震動を俺の足元まで響かせた。

「なんだ、スカベンジャーがあんなに苦しんでいるのは初めて見たぞ」

そう喘ぐように言ったのは、俺の隣にいるひげ面の男、確か前野と名乗った男だった。

「スカベンジャー（腐肉喰い）、それがあの化け物の名前か？」

「……ああ。私たちはそう呼んでいる」

「まあ、その名前の由来は後で聞くことにしよう」

俺は、地面でびちびちと跳ね回っている、荒瀬先輩に切断された

触手を踏みつけた。触手は俺の足の下でしばらく蠢いていたが、やがて動かなくなった。

俺は、大声で叫んだ。

「左右に回り込め！ スカベンジャーを包囲しろ！」

が、すぐに荒瀬先輩は制止の声を上げる。

「来るな！ 逃げる準備をしろ！」

叫びながらも荒瀬先輩は暗がりでは目視すら難しい速度で振るわれる触手をかわし、戈を逆袈裟に斬り上げた。

スカベンジャーの身体に一文字の傷が走り、そこから血液が噴き出した。

再び上がる奇声。

周りの連中は戦況の優勢を見て取ったのか、俺が指示した通りにスカベンジャーを囲んだ。

俺は一瞬だけ躊躇ったが、すぐに行動に移した。

「前野さん、引かせろ、すぐに！」

「いや、しかし、勝てそうだが……」

「いいから！ みんな、ひけえ！」

俺の叫びも今度は届かず、八岐市の連中は一斉にスカベンジャーに群がった。

バットで殴り、包丁で突き刺し、鉈で斬りかかる。

が、そのどれもスカベンジャーには大きなダメージとはならなかった。

スカベンジャーは、わずかに身動きした。

それが、反撃の合図となった。

下から伸びる触手が一斉に伸び、自分に群がる外敵に向かって攻撃を始めたのだ。

バットを持った男は触手で顔を殴打され、まるで抉り取られたように目と鼻と口を消失した。

包丁を持った男は身体に触手を巻きつけられ、ウエストを本来の3分の1以下に細められ、口から血泡を吹いて絶命した。

鉋を持った男は触手で足を絡め取られると、スカベンジャーの身体にある窪みに上半身を放り込まれた。男の足はしばらくバタバタと暴れていたが、ここまで響く骨をすり潰す音が聞こえるところほど大きく痙攣して、動かなくなった。

「っち！」

荒瀬先輩の舌打ちが響いた。

荒瀬先輩自身もスカベンジャーの触手攻撃は続いていた。無数に迫る触手を弾き、かわし、斬り付けて防いでいる。

「っむああア！」

裂帛の気合、荒瀬先輩はわずかな隙を突いて飛び上がると、上段から戈をスカベンジャーの身体に打ち込んだ。そのまま両手に力を入れ、柄伝いに、おそらくは半トンは下らないスカベンジャーを持ち上げて、放り投げた。

盛大な轟音と柄の折れる甲高い音、そして、スカベンジャーの上げる奇声が公園内を包み込んだ。

「荒瀬先輩！」

俺は荒瀬先輩に駆け寄った。さすがの荒瀬先輩も息を乱して、わずかに俺のほうを向いた。

「悪いな。おまえのお気に入りを壊しちまった」

「戈のことですか？ それは別にいいですけど、倒したんですか？」

「……いや、無理だな。手持ちの武器では致命傷を与えられなかったし、探ってみたが急所がどこかわからなかった」

荒瀬先輩の言を証明するように、暗がりの中からうじゅる、うじゅるという触手が蠢く音が聞こえてきた。

その音源に向かって、荒瀬先輩は折れた戈の柄を槍投げのようにぶん投げた。再びスカベンジャーの奇声が辺りに響いた。

「このままじゃあ埒があかねえ。ここは引くぞ」

「はい。前野さん、俺たちはここを引き上げる。あんたたちもすぐに逃げたほうがいい」

「……、ああ、そうする」

別にそこまで言えた義理でもないな……、そんなことを考えていると、そつと声をかけられた。

「もし無事に生き延びたら、南地区の公民館に来てくれ。私たちの避難場所だ」

俺が無言で頷くのを確認すると、前野は大声を上げて生存者をまとめ、公園を後にした。

俺と荒瀬先輩は結局逃げずにその場に留まり続けた梨子たちの待つ車に向う。

と、途中で、忘れられるはずもない女が立ちはだかった。

間宮環奈だ。

俺は敢えてなにも語らずに環奈の横を通り過ぎようとした。その後、環奈の口が開いた。

「あなたのせいでまた人が死んだわね」

「……」

俺は、反論すらできない事実と自然と足を止めた。

「覚えておきなさい、ううん、忘れるなんて許さない！　あなたが

珠樹たちを、今日私の仲間をそそのかして殺したことを！」
環奈はそれだけを吐き捨てるように言うと、去っていった。

俺は、肩の後ろに乗る重たい無機質ななにかを払うために軽く後頭部を撫でた。

ふと見ると、俺と一緒に足を止めていた荒瀬先輩が俺の顔を見ていた。

俺は荒瀬先輩に聞いた。

「……なにも言わないんですか？」

荒瀬先輩はいつものように苦笑を浮かべ、言った。

「おまえも面倒臭いもん背負い込んでいるみたいだな。話したくなったら勝手に話せ」

ありがたい心遣いだ。荒瀬先輩はそのまま車に歩いていった。

俺も続いて車に向かう。

「直にお兄ちゃん！」

後部座席に乗車直後、梨子がシートベルトを差し出してくる。俺はドアを閉めると同時にシートベルトをした。

「よし、隆介。出せ！」

「わっかかりました！」

車は急発進する。間抜けにも、というには酷かもしれないが、車内で身動きが取れやすいように自身はシートベルトをしていなかった梨子はその勢いに前に投げ出されそうになった。

「おっと」

梨子は、右にいる俺に右手を、左にいる紅に左手を捕まれて転倒を免れた。

俺は強引に梨子を抱き寄せ、そのままシートベルト代わりに抱きしめてやる。梨子は最初はじたばたともがいていたが、やがて大人しくなった。

「紅、サンキューな」

「……」

「紅？」

「……いえ」

紅は俺から視線を逸らし、車外を見た。

俺もようやく一息吐き、梨子の頭を離して視線を車外に向けた。

外は宵闇。

月明かりに車内を暗く灯した。その様子を、俺は窓ガラスの反射越しに確認した。

ふと気付く。

紅は、反射越しに俺と梨子を見ていた。

俺は視線を車内に戻し、窓ガラスに映っている紅を見た。

紅は、わずかな身動きをして、俺から視線をはずした。

忘れるなんて許さない！（後書き）

久しぶりの投稿、にもかかわらず、短文陳謝！

次回とは話の展開が違っているのでわざとここで途切らせていただきました。

ええ、言い訳です、すいません。

今回は、次回こそは早々にアップいたします！

・・・いえ、そろそろ本気で（誰かに）怒られそうなので。

コシヨコシヨ

朝露に濡れた草の香りが辺りに漂った。

夜明けだ。

東からゆっくりと昇る太陽を俺たちは感慨深く眺めていた。

公園での襲撃と初めて見る怪物との遭遇、そして逃走。

その後、安全圏まで車で移動した後、色々あった。

……嘘だ。実際はなにもなかった。

ただ、日の出までの数時間、再度の襲撃の警戒も含めて俺たち（梨子と荒瀬先輩以外）は狭い車内でまんじりともせずにごろごろしていたのだ。

それが、無駄に長く感じられたってだけの話だ。

「……ようやく朝っすか」

「……そのようですね」

「すーっ、スー」

俺の肩に寄りかかり、ひとり寝息を立てる小娘。こいつはどこでも眠れるなあ。

俺はドアを開けて車外に出た。太陽に熱せられた空気が霧のように湧き上がってくる。ちなみに梨子は枕である俺が退いたので、コテンとシートの上に転がった。

俺に続いて紅と隆介も外に出た。

座りっぱなしで固くなった身体をほぐす。

紅も同じように俺の隣でストレッチを始めた。

「どうかしましたか？」

俺の視線に気付いた紅は両手を組んで思い切り上に伸ばしながら聞いてきた。タンクトップの横から覗く白い脇の下が艶かしく輝い

た。

「ああ、いや、とくになんでもないんだけど。おまえって身体柔らかいな」

「一応空手をやっていきますので。ストレッチは入念にしているんですよ」

紅は少しだけ微笑を浮かべ、踊るようにステップを踏んだ。

たん、たたん。

小気味いい足音の後、紅は大きく飛び上がった。

そのまま空中で宙返り一回転半ひねり。

わずかなぶれもなく着地する紅に、俺と隆介は同時に感嘆のため息を吐いた。こいつ、さっきの襲撃のときも3次元的なアクションをしていたなあ。

「そういえば直以先輩はバスケやってたっすよね」

「あゝあ！ 今日暑くなりそうだなあ」

「え？ なんて無視するんですか!？」

「うるせえなあ。バスケなんてとくにやめてるよ」

俺は隆介に背中を向けるように上半身を回した。背骨がなり、歪んでいた骨が矯正された気がした。

「中学校では活躍されていたと聞きましたが？」

と、これは紅。俺は今度は紅から逃れるために屈伸をして視線を地面に落とした。

「へえ、進藤。直以先輩の中学時代ってどうだったんだ？」

「確か、県のベスト4だったとか」

「すっげえじゃないっすか。え？ でも高校ではやめちまったんすよね。なんでですか？」

「しつこいんだよ!」

俺は、少々声を荒げた。

いかななあ。俺は、少々反省しながら頭を掻くとなにを怒られた

かわからないでいる隆介に言った。

「……俺は小5からミニバスやってたこともあって中学じゃテクニクでなんとかなっただけだけど、高校じゃあ通用しなかったんだよ」

チビは使えない。

以前、顧問の渋沢に言われたことが胸に蘇^{よみがえ}る。

不思議なことに、たまらなく悔しくて我慢ができなかったその言葉は、昔ほど俺の心を掻き乱しはしなかった。

「……今日これからの方針はどうしますか？」

紅は露骨に話を変えた。年下に気を使わせるようじゃあ俺も駄目だなあ。

「とりあえず荒瀬先輩を待つて行動しよう。南地区の公民館に避難民が集まっているみたいだから、情報交換ができるだろう」

「わかりました。ところで、荒瀬先輩はどうしたのですか？」

「さあ、なあ。2、3時間前に車を降りたつきりだ」

「ひとりで行動されているのですか？」

「あの人のことだから滅多なことはないと思うけどな」

俺は車内を覗いた。

梨子は、絶賛爆睡中だった。

こう見えても、実は梨子は働き者だ。貧弱な身体を一生懸命に動かし、放っておけばぶっ倒れるまで動き続けるような奴なのだ。

だが、今寝ているのは疲労によるものというより、俺や雄太（悲しいかな、聖は口だけ星人なので行動面では頼れない）の前では信頼して気が抜けているってことなのだろう。

俺は、窓から手を伸ばして梨子の細い肩を揺すった。

梨子は眉間に皺を寄せて小さな唸り声を上げたが、起きなかった。俺はさらに強く揺すろうとしたが、それを紅が止めた。

「直以先輩。まだしばらくは起こさないでもいいのではないですか？」

「だけど、ひとりだけ寝かせておくってのもなあ」

「俺たちのことを気にしてるんなら大丈夫っすよ。てえか、今起きても別にやることねえし」

まあ、それもそうか。夜が明けたといってもまだ早朝5時にもなっていない時刻だ。俺は、梨子をそのまま寝かせておくことにした。

その後、しばらく俺たちは特になにをするでもなく時間を潰した。梨子が起き、荒瀬先輩が帰ってきたのは、7時を少し回った頃だった。

荒瀬先輩がひとりでなにをしていたのかは、すぐにわかった。緑地公園に乗り捨てたはずのトラックに乗って戻ってきたのだ。

トラックの荷台には置き忘れてきたはずのテントやら調理器具などと共に、山積みの食料品があった。

「これ、どうしたんですか？」

「ついだったんで近隣の住宅から拝借してきた。あつて困るもんでもねえだろう」

梨子と隆介は喜んで積荷を物色し、さっそく見つけた飴玉なんかを口に放りこんでいた。

「直以お兄ちゃん、あ〜ん」

梨子は俺の口に半分溶けかけた飴を押し込んできた。俺は梨子の手を払って荒瀬先輩に聞いた。

「ゾンビは大丈夫でしたか？」

「ああ。一回も遭遇しなかったな」

「……あの化け物は？」

「それも遭わなかった。巢にでも帰ったみたいだな」

巢、ねえ。

「とりあえず、これから南地区の公民館に行きます。紅、トラックの運転を頼む」

「了解しました」

俺たちは朝食を取らずに出発することにした。

隆介の運転するワゴンに俺と梨子、荒瀬先輩。トラックには紅ひとりという配置だ。

公民館に向かう途中、10分ほど車を走らせると避難民の姿は散見しだした。

それを見て、梨子は息を呑んだ。

「これは、ひどいね」

「俺や直以先輩は以前の朝倉市を見ているからそれほどショックは受けないけど」

隆介の言うとおり、公民館の様子は、規模では小さいものの、以前の朝倉市に酷似していた。

気力のない人々に片付けられないごみの山。

大人のみならず、子供たちまでが暗い顔をして地面に座り込んでいた。

腐乱死体が放置されていないのがせめてもの救いだっただ。

腐乱死体。

そう、八岐市に入って気付いたことだが、ここには死体が見当たらないのだ。ゾンビを含めてだ。

県庁所在地である八岐市には、それ相応の人が在住していたはずだ。あるいは谷川村のように早々に大きなコミュニティを築くことに成功し、ゾンビの被害が少なかったのかとも思ったが、この様子を見ると、そうではないようだった。

「ねえねえ直以お兄ちゃん。こここのひとつ何人くらいいるかなあ」「見た感じだと100人はいないと思うけど」

俺がそういうと、梨子にはにんまりした顔を俺に向けた。

「えっとね、コシヨコシヨコシヨ」

俺の耳元で呟く梨子。なにになに、炊き出しがしたい、と。

「人ってさ、おなか为空くと元気がなくなるんだよ。元気が出る一番てつとり早い方法はご飯を食べることです」

そのために集めてきた訳でもないんだろうが、幸いにして紅の運転するトラックには大量の食料品がある。それを使ってやるうってことなんだろうが。

「食料が足りなくて暴動が起こっても問題だからな。ここいらの人に話を聞いてからだな」

「トラックにあるぶんじゃあ足りないんすか？」

「それがわからないからやれないって言ってるんだよ」

「足りなければ集めてくればいいだろ。この辺は略奪の形跡もないからそれほど苦労はないはずだ」

そう言ったのは荒瀬先輩だ。意外にも炊き出しには乗り気なのか？

「へっへん！ 荒瀬先輩がおーけーならやってもいいよね」

「……だからまだわかんないって。ちゃんと八岐市の人に許可を取ってからだぞ」

「はーっ！ それとね、直以お兄ちゃん、これが本題なんだけど

……」

再び耳元に口を寄せてコシヨコシヨ。

「……それは駄目だ」

「え〜ッ！ なあんでえ!？」

「絶対に紅に怒られる」

「わかってるよう。だから直以お兄ちゃんにお願いしているんですよ」

「おまえなあ。紅のやつは相手が誰であれ言うことは言うやつだぞ」

まあ、だから須藤先輩の側で仕事ができるってことでもあるんだが。

俺がそう言うと梨子は俺から離れ、わずかに瞳を細めた。

「ねえ、直以お兄ちゃん」

なぜか雰囲気の変わった梨子に、俺はどもりながら答えた。

「な、なんだよ」

「私がないも知らないと思っっているの？」

車内が静寂に包まれる。梨子が醸し出す空気のせいだ。

「……なんの、ことだ？」

「この間のこと、とか？」

「この間！？ まさか、昨晚のことか？」

「昨晚の紅とのこと、いや、だが梨子は寝ていたはずだ。……しかし、あんな近距離のことだし、気付いていてもおかしくはない。」

「うん、そのこともあるよね」

「な、なんだ？ 他になにかあるのか！？」

梨子は俺をじつとりと眺めると、突然表情を崩して笑い出した。

「あー面白い！ えっとね、月子ちゃんに教わったの。オトコにはいつも後ろ暗いところがあるからカマをかけると大抵ボ口を出すって」

「あん、の腹黒女！ 梨子に余計な知恵つけやがって！」

「それで、昨晚なにがあったの？」

「……」

「昨晚紅ちゃんとなにがあったの？」

「……、……」

「こいつは、どこまで知ってやがるんだ？ いや、おそらくはなにも知らないんだろうが、これは精神的に悪すぎる。」

「ずいっと顔を近づけてくる梨子。その迫力に抗えるわけもなく、俺は早々に折れた。」

「わかったわかった！ 紅には俺のほうから言っておくから！」

「あ、逃げたっすね」

「隆介でめえこのやろう！ 横から口出すんじゃないやねえよ！」

「はいはい。到着しましたよっつと」

その掛け声と同時に、車は公民館の駐車場で停車した。

俺は梨子から逃げ出すように車外に出た。

途端、暑気と湿気をふんだんに含んだ空気が、俺の身体にまとわりついてきた。

こんなときに茶目っ気だされても

「やあ、菅田くん。よく来てくれた！」

公民館の入り口で俺たちを出迎えてくれたのは、昨晚俺たちを襲撃したやつらのリーダーであるひげ面の男、前野誠一だった。

「お互い昨夜は大変だったねえ。あの後は大丈夫だったかい？」

ちらと、紅が俺を横目で見た。俺は肩をすくめてみせた。

昨晚、寝込みを襲って失敗し、にも関わらずそんなことはなかったかというようなフレンドリーな態度。これは、もはや見習うべき厚顔さだろう。

俺たちは、公民館の2階にある一室に案内された。そこでは、もちろんエアコンなんて贅沢品は稼動していなかったが、携帯ソーラーパネルに繋がれた小型扇風機が申し訳程度の風を撒き散らしていた。

すでに室内には数人の男女が列席していた。おそらくは八岐市の代表者だろう。俺たちはその連中に相對するように席に着いた。

それから間を置かず、涼宮市と八岐市の会談はすぐに始められた。会談、といってもお互いの近況や現状、問題点などを話し合っ情報交換しただけだ。

涼宮市及び朝倉市の生存者数と規模、生活水準や今後の計画などを紅が淀みなく説明すると、八岐市の会議出席者から重いため息が漏れた。

俺はあくびをかみ殺し、頬杖をついた。紅のお陰で楽はできているが、ぶっちょやけ退屈だ。

と、俺の太ももに触れるものがあつた。それは、紅の細い指だった。

俺は小声で右隣にいる紅に話しかけた。

「……紅、この手はなんだ？」

紅は俺に視線を向けず、つまりは誰にも気づかれなないように話した。

「直以先輩は我々の代表です。代表がそのようなだらしなない格好をされては困ります」

「言っていることとやっていることが違う、と俺なんかは思うんだけど？」

「そうでしょうか？」

紅は俺に見向きもしない。だが、紅の指は、ゆっくりと俺の太ももを這い上がってきていた。

紅の奥にいる荒瀬先輩を見る。荒瀬先輩は足を組み、微動だにしない姿勢のまま八岐市の連中を見ていた。

今度は左にいる梨子を見る。梨子のやつは書紀もどきの仕事をしていた、一生懸命八岐市の連中の話をノートにメモっていた。

梨子の隣にいるのは隆介だ。この馬鹿は、すでに目も虚ろにこっくりこっくり船を漕いでいやがった。

そんなことをしている間にも紅の指は上がってくる。それが、俺の股の間に延びかけたとき、俺は勢いよく立ち上がった。……断つておろぐ、席から立ち上がったのであり身体の一部が元気になったのではない。

話は中断され、全員の視線が俺に集まる。

気まずい空気にさらされ、俺はそれを払拭するためにわざと声を荒げた。

「そんなまだるっこしい話はもういいよ。昨日の化け物、スカベンジャーといったつげ。あれの話をお聞かせしてください」

「いや、それは順を追って……」

「わかった。そうしよう。やつのお話するのが八岐市の現状を話す上でもっともわかりやすいだろう」

そういったのは、前野さんだった。俺はイスに座り、前野さんの話を聞いた。

ゾンビ発生当時、ここ、八岐市もご多分に漏れず大混乱に陥った。だが、幸いにもその混乱を早々に収集し、1000人ほどのセーフティエリアを八岐市役所を中心に気付くことができた。これには2つの理由があり、ひとつは八岐市は県庁所在地らしく緊急災害用の備えが十分に用意されていたことと、後付けの理由としては電波塔である八岐タワーにゾンビが集まって感染経路が拡散的ではなかったかららしい。

八岐市の避難民はバリケードを作り、武器を携えて市役所に立て籠もった。幸いにして十分すぎるほど食料の備蓄はあり、あとは警察なり自衛隊なりが助けてくれるまで頑張ればいい。

だが、助けはいつまでたっても来なかった。外のゾンビはその数を増やし、『助けが来るまで』と結束していた避難民の間でも不満が募り始める。

そんなときに、「それ」は現れたという。

正確には「それ」がどこから現れたのかはわからない。だが、気付いたときにはゾンビの輪の中にいたという。

「それ」はふらりと訪れてはバリケード外のゾンビを潰し、喰らっていった。

「ゾンビを食べるから、スカベンジャー（腐肉喰い）、か」

「それでは、八岐市でゾンビを見かけないのは、スカベンジャーが食べ尽くした、ということなのでしょうか？」

前野さんは苦々しい顔を作り、頷いた。

最初、八岐市役所に立て籠もっていた避難民は拍手喝采を持ってスカベンジャーを迎えた。姿形はともかく、今まで最大の脅威だっ

たゾンビの大群を駆逐してくれたからだ。

だが、物事はそう簡単には進まなかった。敵の敵は、やはり敵だったのだ。

実にひと月近くをかけて近隣のゾンビを食べ尽くすと、スカベンジャーは、今度は躊躇うことなく人間を襲い出した。

ゾンビたちから必死に守り抜いていたバリケードはスカベンジャーの馬力の前にはあまりにも非力で、易々と突破された。

そして、避難民の抵抗を嘲笑うかのごとく、毎日10人単位で捕食していったという。

「スカベンジャーだと思っていたのが実はプレデター（捕食者）でもあったわけだ。あんまり笑えないな」

「でも、スカベンジャーの代名詞みたいに言われているハイエナなんかも、普通に狩りとかするらしいし、ライオンなんかは逆に死んでる動物の肉を食べたりすることもあるらしいよ。だから、本当のところはどちらか一方だけってことのほうが少ないみたい」

そこのためったのは、うちの妹君だ。

「梨子先生。なんでそんなことを知ってるの？」

「昔、野生動物のドキュメンタリーを見たことがありますから。さばいばるにひつよーなのは正確な知識なのですよ、直にお兄ちゃん」

梨子はそう言って、低い鼻を伸ばして無い胸を張った。

俺はわざとらしく咳払いをして、話を元に戻した。

「それで、あんたたちは市役所から逃げ出してここに立て籠もっているのか？」

「……ああ。と、いつでもここにいるのは一部で、他の緊急避難場所にも分散して集まっていると思うが」

「思う？」

「スカベンジャーは食料である人間を求めて徘徊しているんだ。つい先日まで300人ほどが非難していた市営の運動公園は、どうやら襲われたらしくもぬけの殻になっていた」

俺は天井を見上げた。

スカベンジャーに襲われたら今の涼宮高校で防げるか。防げないとしたらなにを強化するべきなのか。

新しい情報が旧来の情報と混ざり合い、頭の中がぐるぐると回り出す。

「直にお兄ちゃん？」

梨子のか細い声で、俺は空想の中から現実に戻った。それを見て、おそらくは本題だろうことを前野さんは言った。

「頼む、スカベンジャーを倒すのを手伝ってくれ！」

……まあ、予想をしていたことではある。だから俺は落ち着いて疑問を返した。

「倒さなくちゃいけないのか？ 昨日みたいに、逃げ回ればいいんじゃない？」

「やつらがいたら食料集めもままならない。逃げ続けていれば捕食はされないかもしれないが、ギリ貧で餓死することになるだろう」

「今食料の備蓄状況は？」

「ここにはあと一週間ほど。市役所に戻ればこの人数ならば数年分の備蓄があるはずだ」

ぼそりと、紅は俺にだけ聞こえるように言った。

「民家などで略奪の形跡がない、計画的な食料集めを行っていないのは、スカベンジャーとの遭遇を警戒してやれなかった、ということなのでしょうか？」

「それだけが理由じゃないだろうけどな」

俺は紅を見た。

紅は、顔を八岐市の代表連中に向けながら、瞳だけを動かして俺を見た。

その目が雄弁に語っていた。

断れ、と。

実際、紅にしてみれば自分の任務は俺たちを無事に涼宮市に帰還

させることであり、今回のことは厄介ごと以外の何ものでもない。
俺としても、長期的に見れば、協力すれば友好勢力の獲得に繋がるとも言えなくは無いが、いかんせんリスクが大きい。

だが、俺はこのまま断るのか、いや、断れるのか？

今はこの場にいないが、旧友である間宮環奈がこの地域にいるというのも俺の私的な動機付けとしては十分だった。

「もちろん断るんですよね？」

俺が応じるよりも早く、紅が拒絶するよりも早く、そう発言したのは隆介だった。

「隆介くん!？」

「隆介、起きてたのか？」

「ええ、今さつき起きたばっかつすけど」

そう言って隆介は大きなあくびをした。

俺と隆介に挟まれている梨子は、右にいる俺と左にいる隆介の顔を見比べ、ぶんぶんと首を左右に振った。

梨子にしてみれば、隆介がなぜいきなり発言したのかわからないのだろう。

というのは、隆介は今まで俺の指示することに、それがどんなに危険な任務であろうとも否も応もなく従ってきたからだ。

「おまえは、断るべきだと思うのか？」

「……ええ。だって、俺たちに益がないじゃないっすか」

隆介は俺の顔を見ることなくそう言った。

俺には、隆介の発言の真意がわかった。

結局のところ、この金髪頭は俺の決定したことには、それがどんなことだろうと従う気ているのだろう。

にも関わらず、この場であえて俺の意に背くような発言をしてい

るのは、恋する男子ゆえなのだろう。

隆介には、俺が応じる気であることがわかっており、それと同様に紅がそれに反対することがわかっている。

結果、俺と紅の間には意見の対立が起こり、俗な言い方をすれば不仲になるかもしれない。そんなことを考えているのだろう。

だから、紅の発言を先回りして自分が言い、俺の矢面に立つ、または立った気になっているのだろう。

心地良い在り方だ。

一年前の俺には、残念ながらこいつほど周りに気を使えなかった。

俺は視線をずらし、ひたすら無言を貫いている荒瀬先輩を見た。

一年後俺は、頼りつきりになっているこの人にわずかにでも並べる程度には成長できるのだろうか？

俺は、即答しそうになる感情を追い払い、荒瀬先輩に聞いた。

「荒瀬先輩はどう思いますか？」

「おまえ次第だ」

「俺次第？」

「勝ち目があるなら手伝ってやる。だが、俺が相手にできるのはせいぜいが一匹だ。言っておくが、バットや包丁程度で倒せるほどやわな化け物じゃねえぞ」

「……前野さん、スカベンジャーは何匹いるんですか？」

「確認できるだけで、大きいのは7匹。小さいのは無数に、それぞれ100や200ではきかないくらいいるよ」

「7匹、か。いや、一匹だとしても、あの化け物を倒すだけの武器がないのか」

「その無い武器をどうするのか？ それを補うだけの作戦が直以

兄ちゃんにあるのか、だねうぎゃう!」

「意識をありがとうよ!」

俺は梨子のちっこい頭を掴むと、前後左右に揺すった。梨子は必死に俺の手から逃れると、恨みがましい目を俺に向けながら手櫛で髪を整えた。

さて、どうしようかと考えていると、隣の紅が大きな、ほんとうに大きなため息を吐いた。

「紅、どうかしたか?」

「武器なら、あります」

紅は、いつもの鉄面皮を俺に向けた。

そして、もったいぶるように自分の発言に一言付け加えた。

「いくらでも」

こんなときに茶目っ気だされても（後書き）

んちゃ どぶねずみっす。

拙作はお楽しみいただけいていますでしょうか？

次回更新は11月中旬頃と思われます。大きく更新を開けてしまい
申し訳ありません。

。実はどぶねずみ、異世界トリップすることになりました（半分マジ）
機会があればそのことをルポにしたいと思ひます。

どうか気長にお付き合ひくださいませ。

聖のラブキス大作戦

前編

エクストラストーリー5（前書き）

時間軸が少しずれます。

梨子視点です。

9月になったにも関わらず暑さはまるで衰えず、むしろ夏はこれからだと言わんばかりに太陽は輝いている。

私、遠野梨子はバスから降りた途端に噴き出してきた汗を拭いながら、につくき太陽を睨みつけた。

「梨子さん。私は本陣に行きますが、あなたはどうしますか？」

そう言ったのは、一緒にバスから降りたにも関わらず汗ひとつ掻かない進藤紅ちゃんだ。

「私は橋のほうに行ってみる。たぶん直以お兄ちゃんはそっちにいるから」

私がそう言うと、紅ちゃんはその整った顔をわずかに歪めた。

「失礼ですが、そういうところ、梨子さんは直以先輩にそっくりです。悪いところを真似すべきではないと思いますが」

「あはは、自分でも自覚ある」

なぜ私と紅ちゃんが直以お兄ちゃんと別々に周防橋に来たかという、直以お兄ちゃんが私たちを置いて、さっさと隆介くんだけを連れて行ってしまったからだ。

ただ行ったのではない。

須藤清良先輩にするはずの谷川村での報告を私に丸投げした上で、

「梨子、頼むわ。俺はほら、早く周防橋に行って部隊を掌握しないといけないから」

直以お兄ちゃんは私の目を見ずに早口でそう言うと、逃げるように涼宮高校から出て行ってしまった。

私と紅ちゃんは涼宮高校で直以お兄ちゃんに押し付けられた諸雑事（おみやげを忘れたことをさっちゃんにおもいつきりなじられたのも含む）をこなして、一日遅れで周防橋に到着したというわけだ。そして今、私はこの大将である木村大地先輩への報告を紅ちゃんに丸投げして、ひとり直以お兄ちゃんのところに向かっているのだ。

「お、梨子。戻ってきたか」

「うん、これからよろしくね」

「これはいよいよ攻勢が近いな！」

「そうだよ！ 直以お兄ちゃんも来てるんだから」

すれ違つみんなに笑顔で答えながら私は軽い足取りで歩いていく。みんなが私なんかには声をかけてくれるのは直以お兄ちゃんの側にいるからだろう。直以お兄ちゃん様さまだ。

そんなことを考えていると、私の想い人であるところの直以お兄ちゃんを見つけた。

だが、直以お兄ちゃんは私に気付きもせず、さっさと歩いていってしまう。

私は、直以お兄ちゃんに声をかけるのを躊躇った。

直以お兄ちゃんの歩き方が、やけに荒々しかったからだ。

あれは……怒っている？

と、そのときだった。

「梨子〜！」

私を呼ぶ声に振り返ると、そこには私の、もうひとりのお兄ちゃんが駆け寄ってきていた。

「あ、雄太お兄ちゃん！」

私は雄太お兄ちゃんに思いつきり抱きついた。雄太お兄ちゃんは私を抱き上げ、1回転半ほど回って降ろしてくれた。

「雄太お兄ちゃん、元気だった？」

「ああ、こっちはぼちぼちだったな。おまえも元気そうで安心したよ」

雄太お兄ちゃんは、悪戯っ子のような笑みを浮かべて私の頬を突付いた。

「こんなに丸まると太って」

「むう！ そういうことは女の子には言わないの！」

「痛、いて、わかった、悪かったって」

私の駄々っ子パンチ（別名、ぐるぐるぱんち）で背中を叩かれた雄太お兄ちゃんは笑いながら早々に降参した。

しかし、久しぶりに会うとはいえ一発でそんなことを言われるとは、私、そんなに太ったかな？ 確かに谷川村ではおいしいものをいっぱい食べていたけど……。

「でも、酷い事とかはされなかったみたいだな。本当に安心したよ」

「うん、ありがとう。直以お兄ちゃんが側にいてくれたからね」

雄太お兄ちゃんは再び悪戯っ子な顔を作ると、そっと私の耳元で呟いた。

「それで、直以との仲は進んだ？」

言われた意味に頬が赤くなるが、ここで誤魔化すのは負けな気がした私は、思い切って言ってやった。

「……おでこにちゅくしてもらった」

それを聞いた雄太お兄ちゃんは、人目もはばからずに大爆笑を始めた。

「もーお〜！ そんなに笑うことないでしょ！」

「はは、いや、悪かった悪かった」

雄太お兄ちゃんは笑いすぎて出た涙を拭いながら謝ってきた。

私は頬を膨らませて言った。

「でも、若いダンジョと一緒にいたのにそれしか進展しないなんてどっかおかしいよね！ 直以お兄ちゃん、ヘタレすぎだよね！？」

「いや、たいした進歩だよ。直以がへたれなのは同意だけだね」

「え、おでこにちゅーがシンポなお!？」

「そうだぞ。そんな簡単に事が進むなら、とっくに直以のやつは聖とくつついてるよ」

私は口角を下げた。言われてみればその通りなんだろうけど、なんか納得できない。

「……ねえ雄太お兄ちゃん。その、直以お兄ちゃんと聖お姉ちゃんは、その、どれくらいススデルの？」

「……あ、ノーコメントじゃあ、駄目？」

雄太お兄ちゃんは、しばらく逡巡した後、さらさらの髪を掻き上げた。

「まあ、いいか。別に付き合っているわけでもないし大したことをしているわけじゃないしな」

「じゃあなんにもないの？ 私のほうが一歩リード？」

「なんの競争かは知らないけど、多分梨子は負けてる。あいつら、キスはしているから」

「……クワシク」

私は一歩雄太お兄ちゃんに詰め寄った。

雄太お兄ちゃんは、苦笑を浮かべて話し始めてくれた。

聖のラブキス大作戦 前編 エクストラストーリー5（後書き）

とりあえず陳謝を。

しばらく空けていたせいか、どうしても本編を書く筆が乗らず（贅
沢な悩みだなあ）、外伝に逃げてしまいました。

次回は雄太視点で昔の話。

本編は、予定通り（？）11月中旬になりそうです。

聖のラブキス大作戦

中編

エクストラストーリー5（前書き）

雄太視点です。

梨子は知らないと思うけどさ、涼宮高校で一番きつい季節は11月なんだよ。

今は畑になってるから今年はマシだろうけど、ほら、あの辺りってただの荒地だっただろ？ あそこの砂や埃ほこりが秋の乾いた風に乗せられてさ。

風の強い日なんかは比喻じゃなくて登校するだけで身体中砂塗れになるんだよ。

これは、そんな砂埃の舞う去年の11月の話。

「雄太、ゆうたあ！」

放課後、終礼のチャイムを聞きながら感慨に耽ひたっている俺。

いや、秋だしね。ひとり物思いにふけるってのもありだと思っただけ、あいつにはそんな俺の気持ちはまるつきり通じないわけだ。

あいつ？ ああ、もちろん聖のこと。

「雄太、直以はどこ行っただんだ！？ 昼からまったく見かけないがまさかもう帰っただんじやないだろうな？」

俺はイスに座ったまま腰に手を当てて俺を見下ろす聖を見上げた。「いや、いるだろ。鞆たもとが残っているから。どっかでさぼってるんだろ」

「そのどっかがどこだと聞いているんだ！ まったく、今日の約束を忘れたわけじゃないだろうな！」

聖は苛々を隠そうとはせず、親指の爪を嚙かもうとして、昨日入念に手入れたことを思い出したのだろう、舌打ちをしてやめた。

そう、今日の聖は整っていた。ウェーブのかかった髪は綺麗に櫛入れされているし、顔には微かなナチュラルメイクも施されている。制服も砂ひとつ付いていない卸したてのような念の入用。

普通の女子はそれぐらい普通に毎日やってるんだけど、さ。こいつにしては珍しいこと、ていうか、俺にしてみればこんな気合の入った聖は初めて見ることだった。

それというのも、今日のイベントのためだ。

俺はイスから立ち上がり、ささやかにドレスアップした聖を見た。「屋上にはいなかったのかよ」

「そんなところは真っ先に探している。携帯の電源も切っているし、ひよっとして、今日のことを本当に忘れてるんじゃないか？」

聖の顔には不安が浮かんでいる。この顔は、実は聖は直以には絶対見せない顔だ。

俺は苦笑を浮かべて、聖が女だと実感できる細い肩を軽く叩いた。「仕方ないな。それじゃあ探すか。俺は1階から探すからおまえは上からな。見つかったら携帯に連絡入れろよ」

「う、うむ。わかった」

俺たちは行動を開始した。聖は階段を上り、俺は下りる。

さて、直以のやつは聖を不安がらせてどこでなにをやっているんだろうか。

そんなことを考えて1階に降り立つと、意外にも直以はすぐに見つかった。

「なおくん、今日は早く帰りなさいよ！」

「ああ、わかったわかった。おまえも早く部活行けよ、……とお、雄太じゃねえか。どうした？」

何事もなかったかのように保健室から出てきた直以は、俺の姿を見つけてそんなことを言った。

「おまえを探していたんだよ。ひよっとして、体調悪いのか？」

直以は、わずかに口を籠らせながら答えた。

「……そんなんじゃないよ。今日はたまたま昼から保健室のベッドを占領できたからな。今までぐっすり寝ちまったよ」

直以は話を早々に切り上げたいのか、俺の横を過ぎ去ってしまう。俺は慌てて隣に並んだ。

窓から斜陽が差し込み、校内にはオレンジ色のフィルターがかけられている。

「もう4時か。星は何時に見れるんだっけ？」

俺は聖にメールを送りつつ、直以に答えた。

「7時頃って話だな。まだ時間はあるよ」

「なんだ、それならもう少し眠れたな」

「勘弁してくれ、用意を俺だけにやらせる気かよ」

「聖がいるだろ？」

「あいつが役に立つと思うか？」

俺がそう言うと、直以はにやりと人の悪い笑みを浮かべた。

「わかってるじゃねえか」

「まあ、な」

実を言うと、俺と直以がつるむようになったのは先月で、聖との関係は直以を通して遅れてってことになる。

だけど、この2人のことはそれなりにわかってるつもりだった。だって、こいつら揃って口悪いし普通に地をさらけてくるしさ。

なんかこつちが体裁保って付き合うのも馬鹿らしくなってくるからこつちも地が出てくるし……、だから肩がこらないってのもあるけどな。

とりあえずここで言いたいのは、聖が昔からひとりじゃなにもできないやつだったってこと。

俺たちは教室ではなく、部活棟に向かった。そこにある天文部に機材を置いていたからだ。

扉を開けると、目に痛いほどの赤が飛び込んでくる。その夕日を背にして優雅に本などを読んでいる影があった。我らが牧原聖お嬢様だ。

聖は、さも今気付いたと言わんばかりにゆっくりと本から顔を上げて、ふあざりと髪を後ろに払った。

「やあ、直以に雄太。2人揃ってご到着か。だけど、流星群にはまだ時間があるよ。ずいぶんと暇なことだな」

俺は、直以の後ろで笑いを堪えた。

額に浮かんでいる汗はおそらく俺からのメールを受け取ってここまで走ってきたのだろう。

ここには、直以がいないと慌てふためいていた聖の面影はない。こっぴどく見えて、聖のやつはスタイリストなのだ。

そんなことを知らない直以は、聖の軽口を面倒臭そうに聞きながら、ジャブを返した。

「おまえだってそうだろうが。先に来てるんなら用意ぐらいしておけ」

「ふん！ 用意は君たちの仕事だろう。私は機材を揃えてきたのだから」

「偉そうに言う割りには天文部の流用だけだな。それより飯は炊けてるのか？」

それには俺が答えた。

「ああ、昼休みのうちに炊飯器セットしておいたから。具財も切り分けてあるから後は鍋に入れて煮込むだけだよ」

「ああ、悪いな。なんか全部丸投げしたみたいだ」

「それはいいさ。今回は俺が発案だからね」

今回のイベント、それは10年に一度とかいう流星群の鑑賞会と、せっかくだからついでに鍋でも囲おうつてのが趣旨だ。

発案は俺だ。そういうことになっている。

実は、図書室で聖がこの流星群のことを直以に（数えただけで3回）話しているのに気付いたので、俺が企画したってこと。

簡単に言うなら、直以を誘いたい聖が原案を立て、聖と直以のために俺が企画を立ち上げ、糞鈍感な直以を無理やり引き入れたのだ。

「ほら、聖。これ、読んだぞ」

直以は本を聖に差し出した。俺は、それを聖が受け取るより早く奪った。

「なになに、『ヒトラーと国防軍』？ あ、作者はリデルハートか。直以、おまえこんなの読んでるのか？」

「読まされているんだよ。このニコチン中毒者にな」

直以は、懐から取り出した煙草に火をつけて口に啜えた。ニコチン中毒はおまえじゃないか？

「俺は組織論とかリーダーシップとかには興味あるんだけど、軍事はそれほど興味ないんだけどな」

「軍事を学ぶことは……」

「あゝはいはい、わかってるよ。わかってるから騙されて薦められた本を読んでもらう」

直以は面倒臭そうに聖の話の話を遮ってテーブルを片付け始めた。俺もそれに合わせて本をしまい、カセットコンロをセットした。聖はというとイスから立ち上がりもせず直以のを見ていた。

「そういえば帰りのホームルームで進路希望調査のプリントが来ていたな。直以はもらってないだろう」

「ああ。午後の授業は思いっきりさぼっちゃまったからなあ。ていうか1年から進路希望かよ」

「無駄に焦らせるのは教師の常套手段だからね」

直以はコンロの上に鍋を乗せ、その鍋に俺はペットボトルから水を入れた。

「出汁は？」

「昆布。あとは野菜やら肉やら煮込めば十分だろ」

鍋に蓋をして火をかける。後は煮立つまで待つて具材を放り込むだけだ。

「雄太は進路希望どうするんだ？」

直以はイスに座ってそんなことを言ってくる。携帯灰皿に煙草の吸殻を放り込み、新しい煙草を取り出す。

「おい、少しは遠慮しろよ。見つかったら一発で停学だぞ」

直以は少し考えて、口に啜えた煙草に火を点けずに指に持った。それを聖が取り上げて口に啜える。

「直以こそどうするんだい？ 無難なところで進学かな？」

直以は忌々しげに聖の啜えた煙草を睨みつけた後、深くイスに座り直した。

「……正直未定。ちょっと前まではバスケットで行けるところまで行きたいと思っっていたんだけどさ」

それを聞いた聖は人の悪い笑みを浮かべた。

「やれやれ、プロにでもなるつもりだったのかい？ それとも体育大？ どっちも向いているとは思えないがね」

「うるせえよ。だけど、せめて大学まではバスケットやる予定だったからなあ」

「大学の体育会系出身なら就職も有利だもんな」

「そこまで考えていたわけじゃないけど。どっちにしても、もはや泡沫の夢ってな」

直以は机に突っ伏して表情を隠した。

「おまえって、けっこう女々しいよな。バスケットやりたいなら部活に戻ればいいだろ」

聞いているのかいないのか、直以はぴくりとも動かなかった。

「聖はどうする予定？」

「未定。というか私は決めるつもりはないよ」

「なんだよそれ。メンサは外国の大学とか研究機関とかに行くんじゃないのか？」

聖は、コンロで煙草に火を点けると、突っ伏したままの直以を見

た。

「別に、外国からの誘いは今に始まったことじゃないしね。高卒の免許を重視していい私としては行きたいなら今すぐにも行くよ。同様にわざわざ大卒の権威付けを必要としない私は進学するのも魅力的とは言い難いな」

それを聞いた直以は、だるそうに顔を持ち上げて聖を見上げた。

「おまえ、なにしに学校来てんの？」

聖はわざとらしく煙草の煙を吐き出し、視線を逸らした。

「それじゃあ起業でもするのか？ 若き女社長ってか」

「ああ、それはない。金融資本主義を至上とする現代は金を稼ぐということの評価が異常に高い時代だからね。わざわざそれに乗っかるのはぞつとしないな」

「金稼ぎのうまいやつがもてはやされる時代、ね」

「もつとも、金融資本主義が人を幸せにしないということはずでに明らかになっているから、じきにこの風潮も終わると思うがね」

「じきに、といっても2〜30年後は、だろ？」

「俺たちが40歳ぐらいになってる頃か。どうなっていることやらだな」

もちろん俺たちは、このわずか半年後に金融資本主義どころか文明そのものが崩壊するなんてことは想像もしていなかった。今考えるのなら、ずいぶんと呑気で、それが通用する時代だったんだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6524q/>

ゾンビもの！

2011年11月7日12時00分発行